

廃と群像のグリムガル  
～不惑の幻想～

西吉三

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### ■あらすじ

目を覚ますとそこは灰と幻想（ファンタジー）の世界グリムガル。

同時期にグルムガルで目覚めた仲間は今10代から20代前半。何故か主人公グンゾウだけはアラフォー（自称30代半ば）。

「急激な生活環境の変化」「身体能力の衰え」「若者とのジェネレーションギャップ」という三重苦に苦しめながらも、妙にファンタジーの知識が豊富なハイドという少年や仲間達と一緒に、グリムガルの世界で力強く根付こうとする……。

### ■関連情報

●多忙のあまり精神が少し壊れて「廃と群像のグリムガル　く不惑の幻想く　〔R18〕」という連載も開始しました。本編で描いていないR18部分を連載します。

●「灰と幻想のグリムガル　くオリオンの耀きく」という連載もあります。

#### ■設定

原作1巻直後に入ってきた新人達（クザクやチョコ等）同期の活躍を描いています。

#### ■解説

ファンタジーの夢と現実をさわやかに描いてくれた小説「灰と幻想のグリムガル」とアニメ「灰と幻想のグリムガル」に敬意を表して勢いで書きました。

ファンタジーは未成年のためだけにある訳では無いという信念の基、原作の設定や世界観は壊さぬよう、なるべく忠実に、しかし独自設定も一部採用しています。アラフォーがファンタジーの世界に巻き込まれたらどうなるかをできる限り丁寧に現実的に描いていくつもりです。

原作を読んでいることを前提に物語の展開を飛ばすのではなく、登場人物の成長の軌跡をゆっくり描く予定です。既に原作を読まれた方には既知の内容もあるかもしれませんが、付加的な要素も加えていますので、主人公と一緒に歩みを楽しんでください。

#### ■その他

・練習目的の投稿なので、誤字・表現の改善アドバイスあればお知らせください。（ス

トリー内容の変更はご希望に添えない場合が多いと思います。

- ・1章又は5000字程度書きたまったら投稿します。
- ・修正は適宜（頻繁に？）入れると思います。
- ・アニメ第2期やらないかなー。

# 目次

Level. 1 不惑の新人義勇兵

プロローグ 選ばれざる者 1

1. 目覚め 4

2. 赤い月と見えてきた真実 15

3. 割れているのは俺の心か、彼のア

ゴカ 27

4. 花一匁はいつだって残酷な遊び

44

5. ダムローへの道 55

6. ドーリーで朝食を 70

7. ハイドイン ルミアリス神殿

88

8. 西町クライシス 99

9. 職業選択の事由 A H A H A h !

10. 始まりの波乱 115

11. それは幕あい、そして交わる点 130

12. ダムロー旧市街攻防戦(前編) 160

13. ダムロー旧市街攻防戦(後編) 172

14. キツカワがいた夜 245

15. ゴブリンバブル到来!! 257

16. 修師カレン 278

17.	マナトくんの地図	300
18.	繰り返す日々に意味が無いなんて、怠け者の言い訳	323
19.	ワンダーランドへ盗みに行こう	336
20.	タリスマンより恋愛事件が欲しい	349
21.	今夜チョコは空を飛ばされる夢を見るか？	369
22.	オルタナのクズ	385
23.	ヨシノの秘策とリョータの秘密	396
24.	前哨戦	411

25.	今までの全てを	430
26.	ルミアリスの光と共に	457
27.	それを乗り越えた先の明日へ	484
	エピローグ・黄昏の向こう	525
	Level 1. 2 1シルバーの英雄	530
	プロローグ・真夜中の再会	530
	1. 始まりはいつもシェリーの酒場から	535
	2. それは穏やかで退屈な殺戮の日々	552
	3. ご注文はオークですか？	566
	4. 運命の別れ道	583

5. 本当は理解して欲しいけど、伝わらないから…… | 600

6. 先が見えない暗闇の中で、僕等は

再会を誓った | 613

7. 序奏 | 635

8. 女戦士達の輪舞曲 | 648

9. 名将イアン・ラツティ | 664

10. 英雄の資格 | 680

11. デッドヘッド監視砦編① | 双頭

の蛇 | 699

12. デッドヘッド監視砦編② | 戦場

の風（上） | 725

13. デッドヘッド監視砦編③ | 戦場

の風（下） | 745

14. デッドヘッド監視砦編④ | カズ

ヒコの最期 | 770

15. 白と黒 | 798

16. 深夜の森で | 821

17. ハナシノコシ | 835

18. セシリア救出作戦① | 灰色エル

フと最凶の暗黒騎士 | 848

19. セシリア救出作戦② | ヴェール

の策略 | 863

20. セシリア救出作戦③ | 囚われの

美女 | 882

21. 誰かのための戦争と、ひとりだ

けのための戦争 | 928

22. それぞれの戦場 | 954

23. 時よ止まれ、いま君は輝いてい

る | 974

24. あなたが食べられる全て

1006

25. 知りすぎた神官、知らなすぎる

神官 | 1047

26. 光の奇跡 |

27. 英雄の誕生 | 1111

1141 エピローグ・待つ者のいない凱旋

(仮) Level. 3 失うだけの戦い

1148 プロローグ・魔法では癒やせない傷



## Level. 1 不惑の新人義勇兵

## プロローグ 選ばれざる者

グンゾウはぼんやりと眺めていた。

古ぼけた洋燈らんぶに嵌はめられた煤けた硝子板の向こうで、橙色の灯りが幽かすかに揺れている。

その洋燈の近くにある柱の上の方には燭台しよくだいがかけられ、白い蠟燭ろうそくが同じく橙色の灯りを揺らめかせていた。

洋燈の置かれたカウンターテーブルの奥には木で造られた棚があり、食器や本、望遠鏡のようなものに混じって剣や弓、短槍が立てかけてある。そこにもいくつかの蠟燭が置かれていた。

灯りの中心にはひとりの人物がいて、カウンターテーブルに肘を突きながら退屈そう  
な、そして愉快そうな表情でこちらを見つめている。その周辺だけが明るく輝き、暗い  
部屋をぼんやりと照らしていた。

部屋の暗がりと明るみの中間点、黄昏の地にふたりの男が立つて話し合いをしてい  
る。このふたりがまさにグンゾウ達の運命の明暗を分かとうとしていた。

「どうする?」

「どうする? つて、……と……の二者択一だろ? どっちでもよくね?」

ふたりの視線がグンゾウとその隣の男を交互に行き来する。

「戦力バランスを考えれば……」

「そもそも戦力……」

狭い室内だ。小声で話し合っている、内容にはある程度察しがつく。

——要らない人間の押し付け合い。ああ、あるある。わかるわかる。残った身としては最高に嫌な気分だ。思い出せもしないが、きつと過去にもこんな経験をしたんだろ。なんとなくわかる。それを考えると過去の記憶を失ったことはむしろ喜ぶべきことなのかもしれない。それにしても……。

「キシキシキシキシシシ。僕にはわかる。この世界では僕が最強だ。キシキシキシシ」

隣の男は薄気味悪い笑い方をしながらつぶやいた。グンゾウと同じ状況に置かれても、自分を最強と豪語する隣の男の精神は強い。

——正直、羨ましい。

隣の男を見ながら、呆れ顔のグンゾウは思った。それに引き替え、グリムガル初日からグンゾウは既に情けない気持ちでいっぱいだ。

男の名前は「ハイド」。男というより、少年と呼ぶ方がふさわしい。少年の名前は格

好良かった。本人の見た目がどうかと言えば、名前から連想されるそれとは異なっている。

分厚いレンズの近視用眼鏡をかけた小太りの少年。眼鏡は皮脂で汚れている。背も高くない、いや低い方だ。天使の輪が輝く直毛の黒髪は、おかつぱ頭に近い形でバツチリ切り揃えられている。ただし、後頭部の髪の毛が寝癖でだいぶはねていた。なんだから猫背だ。あと少し男臭い。

——ちやんと、お風呂入っているのだろうか？

グンゾウは薬品系の匂いは割と大丈夫だが、生物系の匂いが苦手だった。ハイドの輝く黒髪も脂ぎっているだけに見えてきて、少し離れた。

話し合いはまだまだ続いているようだ。

何かに救いを求めるような気持ちで天井を見上げた。

硝子の嵌まった四角い天窓がある。天窓の外には美しい深緑の夜空と白い星々、そして見た記憶のない赤い月が煌々と輝いていた。

色々な感情が込み上げてきて、ため息が出た。

事の始まりは少し前に遡る。

# 1. 目覚め

“——アウエイク目覚めよ。”

誰かの声が聞こえたような気がして、グンゾウは目を開けた。

——暗い。まだ夜中かな。もう少し眠れる。明日は仕事に行きたくないな。

最初に思ったことは仕事のことだった。

——仕事……俺の仕事ってなんだろう。

頭の中に霞がかかったようで、浮かんだ言葉と具体的な内容を一致させることができない。それどころか、思い浮かぶ言葉もどんどん少なくなっていくような感覚がある。自分の大切なモノが指をすり抜けて、暗い穴に吸い込まれていくような、不快で、そして悲しい感覚だった。

——これは夢か、寝ぼけているのか、それとも酒を飲み過ぎたか。

グンゾウは急に不安になり、上体を起こした。静かだ。硬くてごつごつした石でできた床に寝ていたようだ。何でこんなところに寝ているのかわからない。起こした背中が痛い。暗闇の中、明かりを求めて床に手を這わせた。目的のモノが見つからず、ポケットの中にも手を入れる。無意識で何かを探そうとしていた。四角くて、薄くて、光

るやつ。

——あれ？ 何を探しているんだっけか。

何を探しているのか、だんだんわからなくなってきた。それでも体が覚えている動作に従って動き続ける。わからなくても、なんとなく正しい行動をしている気がする。

見つからない。

そのうち探すモノを完全に忘れてしまったので、今度は周囲の環境を確認することにした。暑くも寒くもない。相変わらず静かだけれど何かの気配を感じて暗闇の中へ目を凝らした。気配の正体はわからないが、ここはどうやら完全な暗闇ではないようだ。少し離れた場所に並んだ灯りが見える。よく見ると反対側にも灯りがあるようだ。灯りは蠟燭ろうそくのそれであるかのようにときおり揺らめいている。

「あれは蠟燭なんだな……」

グンゾウが独り言を口にする、意外にも暗闇から反応があった。

「誰かいるんですか!？」

怯えたような若い女性の声だ。その声を皮切りに周囲から次々と声が上がった。

「……ここにもいるよ」

「ここにもいます」

「ここはどこなんだ?」

「わからない。どうなってるんだ、これは」

「ぎっけんな、これ、おかしくね？」

「……っす」

「ちよーさいてー、コシいたーい」

グンゾウの周囲には複数の人間がいた。

誰かがいる。何者かもわからないけれど、近くに誰かがいるということは嬉しい。

お互いの存在を確認する声広がると、暗闇が前よりも明るくなったように感じられた。

暗闇の中でぎこちない挨拶と名前程度の簡単な自己紹介が始まる。グンゾウを含め全部で14人。男が9人、女が5人。顔は見えないから、あくまで声での識別だ。

「俺の名前は……グンゾウ、そうグンゾウだと思う」

グンゾウが思い出せたのは、それが限界だった。

全員共通して同じ状況のようだ。つまり、全員が記憶喪失に近い状態だった。自分の名前すらニツクネーム程度にしかわからない人が大半で、「何故ここにいるのか」「自分が何者なのか」「ここはどこなのか」「どうやってここまで来たのか」といった重要な情報は当然のように、誰の口からも出てこなかった。

次の行動について話し合った結果、シムラという剽ひょう軽な口調の男の提案に従って、蠟燭の灯りが続く道を壁沿いに進んでいくことになった。反対側にも行けそうだったが、分かれた際の通信手段もないので、まずは全員で片方に進み、行けるところまで確かめてからという結論になった。特に反対案は出なかった。その頃には、暗闇にも目が慣れて、傍にいる人間の輪郭程度は認識できるようになっていた。

蠟燭の列は続いている。グンゾウ達も一列になって、壁に手を擦りながら進んだ。地面は滑なめらかではなかったが、歩きにくくはなかった。

移動中、全員の口数は少なかった。

——長い。肉体的にも疲れるけど、精神的な不安が大きいな。

それなりに歩いたような気がする。

暗い通路。単調な動作。不安。悪い要素が時間や距離の感覚を鈍らせて、あまり正確にはわからない。恐らく全員同じような状況だろうと想像できた。

グンゾウは気が付くと列の後ろの方にいたようで、前後には体格的に小さめな女性がいた。

——少し遅れたかな？ みんな、結構スタミナあるな……。

「……フヒキシシ、フヒフヒ……」

背後から不思議な音がしてグンゾウは後ろを振り返った。

後ろにはボブカットの女の子がいて、目が合った。暗くてそこまでよく見えないが、大きな目が印象に残る女の子だった。たぶん、10代半ばかそこらだろう。

グンゾウが止まったことで、不思議そうに首をかしげた。

「ごめん、なんでもない」

すぐに前に向き直り、歩き始めた。

——幻聴だろう。ストレス高いし。

「……フヒキシシ、フヒフヒ……」

——幻聴。幻聴。ストレス。ストレス。

「フヒヒン、キシシ、フンフン……」

はつきり聞こえた。音ではなく声だ。後ろの人達の足を止めるのが嫌なので、聴覚に集中をして後ろを探った。どうも後ろの方で誰か息切れをしながら笑っているようだ。気持ちの良い笑い方ではなかった。正直なところ気持ちの悪い笑い方だった。

「なんか明るいぞ、出口か？」

先頭の方から声が聞こえてきた。隊列の移動速度が速まる。確かに前方の方が明るい。蠟燭の灯りよりもずっと明るい。洋燈らんぶのようだ。自然と足が軽くなり、駆け足にな



る。

明るさに近づくとつれ、だんだん様子が見えてくる。洋燈のある場所には格子扉が嵌はまっているようで、先頭集団がそこで行き詰まっていた。

「鉄格子だ、ふぎけんな、開かねーぞー！」

先頭を歩いてきた男が鉄の格子を手で叩いたり、足で蹴ったりしていた。扉の辺りは明るいので姿がよく見える。若い。20歳前後といったところか。身長は180センチくらいで、太つても痩せてもいない。少し長い茶色の髪をバックに流していた。顔は特徴のない、どこにでもいそうな目鼻立ちだが、今は殺気立っていて怖い。この状況なので仕方が無いかもしれない。服装は黒いラインが特徴的な少し光る素材の白の上下揃い。柔らかくて動きやすそうだ。首から太い金色のネックレスを下げている。良く意味はわからないが、グンゾウの中では仮に「典型的な(Typical)ヤンキー」、略して「TY」と呼ぶことにした。

——あの服なんて言うんだっけか？ ジョージ？ ドーギ？ ショーブシタギ？

グンゾウは扉とは関係ないことを考えていた。服という概念は理解できても、個々の具体的な名称や種類が思い出せない。

「引いたらどうなんだろう？」

後ろからひとりの男がTYに声をかけた。彼も扉のそばにいたので姿が見える。こ

ちらも若い。年の頃はTYと同じくらいだろう。身長はTYより少し低い。さらさらな髪の毛の下に優しそうな顔を備えた爽やかな好青年だ。グンゾウの中では「さわやか君」と呼ぶことにした。

——とは言え、サークルとかで周りの女に手を出しまくるタイプでもあるけど……。サークル？ なんだっけ、それ？

「ああん？」

とTYがさわやか君を一瞬睨んだ。一瞬流れる微妙な空気。しかし、すぐ思い直したのか格子扉の取っ手を手前に引いた。格子扉は軋む音を立てながら開いた。

「おおっ………」

と格子扉を囲んでいた数人からおとなしめの歓声があがった。

「うえーい」「うえーい」

TYとさわやか君がハイタッチをしてから、笑顔で見つめ合った。共同作業の成功体験を通じて、小さな軋轢あつれきが小さな友情に変わったようだ。青春の1ページといったところか。

——最近の若いのはよくわかんないな。

グンゾウは軽いため息をついた。とりあえずグンゾウの中でTYの呼び名を「マイルドヤンキー」に改めた。相変わらず意味はわからないけれど。

全員次々と格子扉の向こうへ出て行つた。グンゾウも順番に続いていった。

扉の先は少しの間狭い通路が続き、その先は石造りの上り階段のぼりになつていた。通路は  
黴臭かびかつた。

——今度は階段か。

と思つたがそれ以外にも少し勝手が違う部分があつた。階段に灯りは無い。でも、上から光が射し込んでくる。全員一列になつて光を指して階段を上つていった。

先頭が光の近くに着いた頃、列の動きが止まつた。階段の先にも格子扉があるようだ。ガンガンと引つ張つたり、蹴つたりする音がする。

「誰か?! いねーのか?!」

マイルドヤンキーの声。

「誰かあ、居ませんかあ?」

さわやか君の声。

「誰か、開けてー、もう助けてよー」

声と名前が一致していない女性の声。

声を上げた全員が誰か助けを呼ぶような発言だつた。階段が狭いので上まで行つて確認することはできない。しかし、格子扉の先は「誰かが居そうな雰囲気」ということ

かもしれないとグンゾウは思った。

しばらくして、助けを呼ぶ声が止んだ。直後、扉の近くにいた数人が下がる。本当に誰かがきたようだ。

格子扉の開く音がした。

「出る」

聞いたことのない声だ。扉を開けてくれた人の声らしい。

前の人に続いて階段を上がり、格子扉の外に出るとそこは石造りの部屋だった。窓は無かったが、洋燈がいくつも灯っているおかげで明るかった。まず最初に違和感があった。正確に表現すれば、これは普段いる部屋とは作りが違ふと感じた。部屋の構造としては、先ほど上がってきた階段とそれ以外には別の上り階段があるだけだった。

——出るためにはまた階段を上るのか……。

グンゾウが上り階段を見つめていると、目の前を変な格好をした男がガシャガシャと音を立てて通り過ぎて行った。男は鉄の兜をかぶり、鉄の鎧を着て、手には槍を持つている。よく見ると、腰には剣も差しているようだ。カイゼル髭を生やしたい大人である。グンゾウの中で「騎士<sup>ナイト</sup>コスプレおじさん」と呼ぶことにした。

——この騎士コスプレおじさんが扉を開けてくれたのか？

騎士コスプレおじさんは、グンゾウ達をうさん臭そうに見ながら、壁に据え付けられ

ている黒っぽい器具を引っ張った。

壁に壁や床がわずかに振動し始めた。女性達の一部が小さく「きゃ！」と声を上げる。

——地震？

続いて、金属や石のような硬く重たい物質が引きずられていくような音が部屋に響いた。グンゾウが部屋を見回すと壁の一箇所が動き始めていた。その壁は縦長の長方形に切れ、ゆつくりと沈み込んでいった。壁に四角い穴が開き始めた。

穴が大きくなるにつれて、それが外に繋がっていることを確信させた。石造りの黴臭い部屋に、新鮮な空気が吹き込んできた。空気は暖かな湿気を含み、土と草木の強い匂いをグンゾウ達に運んできた。

——風だ。……そして、夏の匂いだ。

突然、グンゾウの脳裏に映像が浮かんだ。

グンゾウの前には大きな岩が2つ見える。見上げる。軽く10〜20メートルはある大岩だ。大岩には蕨のような植物がまばらに生えている。周りは木々に覆われていて薄暗い。虫の音が騒がしく響いている。そして、夏の匂いがする。

2つの大岩はお互いに倒れかかり、支え合って立っている。『入』という字のようだ。大岩と大岩の間には三角形の隙間がある。岩の大きさからすれば隙間は小さい。でも容易に人が通れる広さだ。その先には光が満ちていて明るい。その光の中に人影

を見た……気がした。

「お前も出る」

男の声がしてグンゾウは石壁の部屋に引き戻された。

騎士コスプレおじさんが先程開いた四角い穴から外に出るように促していた。穴は完全に開き、出口の様相を呈している。気が付くと既に部屋の中にはグンゾウ以外は誰もいなかった。皆、外へ出てしまったようだ。グンゾウは慌てて出口へと向かった。

——さっきのイメージは何だったんだろう？

夢から覚めた時のように、思い出そうとしても内容がはつきりしなかった。

石壁に開いた出口の手前で一度立ち止まり、後ろを振り返る。

上がってきた階段と石壁の部屋、そして懐かしいような、哀しいような気持ちが漂っていた。

「まだ、こっちの夢が途中だ」

また前を向くと、グンゾウは外の世界に足を踏み出した。

## 2. 赤い月と見えてきた真実

グンゾウ達が石壁の部屋から出た場所は小高い丘の上だった。

振り返ると高い石造りの塔がそびえ立っていた。グンゾウ達はさつきまでこの塔の地下にいたのだ。足下の丘には地下構造が眠っているのかもしれない。

塔の出口付近には騎士<sup>ナイト</sup>コスプレおじさんが2人<sup>ふたり</sup>立っていた。1人は松明<sup>たいまつ</sup>を持っていて。2人とも明らかに無愛想、または得体のしれない人間を見下すような感じの目でグンゾウ達を見ていた。完全に武装もしているし、気軽に話しかけづらい雰囲気だ。

——コスプレおじさんは2人いたんだ……。なんだか感じ悪いな。ところで、今何時なんだろう？

今が何時なのかはわからない。しかし、夜なのは間違いない。空は美しい深緑色をしていた。星々は白く、明るく、空を覆い尽くすように瞬<sup>またた</sup>いていた。一番特徴的なのは深紅の満月で、空の頂点を少し過ぎた辺りで輝いていた。

——月の色、何か違う気がする……。俺の知っている月は赤くなかった。

「わあー！ 星がきれー！」

丘の上では夜空を見上げながらひとりの女の子と思われる影<sup>シルエット</sup>がクルクルと舞っている。

た。舞に合わせて服のスカート部がひらひらと揺れた。闇の中、時折生地ときわりに施されたラメが松明の光に照らされ、キラキラと光った。グンゾウの中で仮に彼女を「舞子」と呼ぶことにした。

——「星がきれー！」とかいう状況？ 精神的に強いなあ。俺、なんだか、もう環境の変化に心が付いていかないわ。

「あれ、街つすかねー？」

ひとりの男が近づいてきて、丘の前方に広がる街の灯りを指差しながらグンゾウに話しかけてきた。この声は聞き覚えがある。塔の地下で「蠟燭ろうそくの灯りに沿ってとりあえず歩かへん？」と提案をしたシムラという男だ。

街は山間やまあいの両側の斜面に沿って発展していた。街の外周は城壁で囲われている。月明かりに照らされた城壁は丘から見ると黒曜石でできた長城のようで、厳かな雰囲気があった。城塞都市という雰囲気だ。

「街だろうね。でも古代の都市ポリス国家みたいな感じだね」

「ですよねーってことは、人が住んでるってことですよねー、なら飢えて死ぬことはないなあのな？」

——たくましい男の子だな。

グンゾウは思った。松明と満月のおかげもあり、夜だけれど暗闇という感じではな



かった。人物の詳細な容貌はわからないが、ある程度は見える。声から大体分かつていたがシムラも若い男の子だった。10代半ばで、イガグリ頭をした元気そうな少年だ。半袖半ズボン。けして貧弱なタイプではないが、背はグンゾウより低く165センチくらいで、まだ体もそんなに出来上がっていない感じである。言葉に少し訛りがある。

背後であの声がする。

「キシキシシ、ふ、キシシ、ふ、シシシシシシ」

——「ふ」つてなんだよ。

塔の階段で不気味な笑い声をあげていた男がグンゾウの斜め後ろにいた。辺りは少し暗がりになっている。街の灯を見ながら独り佇んでいた。よく見るとその男も少年だった。分厚いレンズの近視用眼鏡（きんししょうめがね）をかけた小太りの少年だ。背も高くはない、男の子にしては低い方だ。150センチ台だろう。影（シルエット）からはおかつぱ頭に見えた。襟の付いたシャツをしつかりズボンにしまっている。正確には少しズボンから出ている。

グンゾウはその少年が気になってしまったので、思わず話しかけてしまった。

「君の名は？」

少年は一瞬びくつとする。

「……ハイド」

シンプルな返事。

「そっか、ハイド君と言うんだね。私はグンゾウ。」

「知ってる……キシシ」

少しムツつとした。きつと一瞬表情が曇っただろうとグンゾウは思った。

——暗くて良かった。表情が読まれにくい。大人の対応。大人の対応。

「そっか。君は何か覚えているかい？」

「……覚えてる」

「えっ!」「えっ!」

異口同音。ほぼ同じタイミングでグンゾウとシムラは声を出してしまった。

「この世界で僕は最強……。キシシ」

「あえ?」「あえ?」

二度目の異口同音。グンゾウもシムラも思わず呆けてしまった。

——アア ナンカ ヤバイヤツニ コエカケチャツタ……。

「なんや、ボケかいな」

シムラが右手でハイドに思わず突っ込んだ。

「ボケ……ではない。キシシ。でも、まだ確信がないから言わない。キシシ」

「なんでやねん、言えや」

シムラは笑顔で突っ込んでいる。

「はあ……」

グンゾウはため息をついた。

——しかし、このままここにいても罫むちが明かないな。

「おーい、みんなあ、こつちへ集まってー」

誰かの呼びかける声がある。さわやか君だ。かたわら傍にはマイルドヤンキーがいる。全員おずおずと塔の傍に集まった。塔の壁にさつきまでコスプレおじさんが持っていた松明がかかっているので、少し明るい。

「あれー？ さつきの兵士みたいなのはどこへ行ったのー？」

先程の舞子が声を出した。

「無言で壁の中に消えていったよ。おまけに塔の出入り口も閉じちゃったし」

さわやか君が答える。

「挨拶もないの？ 感じ悪いー」

——うーん。そういうこと……かなあ？

グンゾウが小さな疑問に悩んでいると、さわやか君があらためて「カズヒコ」と名乗った。カズヒコが全員を集めたのは今後について話合うためだった。

「このままではいけないと思うから、行動をしたいと思う。最初の行動としては、目の前

に見えている街らしき場所に行くことだと思っている。道中が安全か、街の住人が友好的かもわからないので……」

カズヒコが今後の行動について話を続けている。

しかし、グンゾウは違うことが気になっていた。明確な違和感だ。

——若い。みんな若い。

そう、松明の近くに集まって初めて分かったが全員グンゾウよりも若かった。しかもかなり若い。ほとんどが10代半ばから後半だ。20代に見えるのもカズヒコ、マイルドヤンキー、ひよろつと背が高い男、そして背が高くきりつとした目つきのロングヘア美女、細目の男の5人くらいだった。それでも20歳前後だろう。グンゾウは明らかに30代後半だ。グンゾウ自身も微かに自分が30代であるという記憶がある。しかも格好が変だ。皆は割と動きやすそうな格好なのに、グンゾウだけ毛ウールでできた、上下揃いのきっちりした格好をしている。おまけに首にタイを巻いている。

——なんか……ちよつと浮いてる……?」

グンゾウはちよつと不安になった。明らかに間違った場にいると感じてしまう。

「二応、先頭はリョータと僕で進もうと思うんだけど、何かわからない点とか質問ある人いる?」

リョータとはマイルドヤンキーのことだ。

そこへ突拍子もなく、甲高い女の声が響き渡った。

「はい、はい、ははい！ 質問！ 質問！ 街までの暗い道中、案内人居なくて大丈夫なのかなー!? かわいい案内人が絶好のタイミングで現れちゃったりしちゃうんじゃないですかねえ、参上しちゃうんですよねえ、どこだーっ!？」

——誰だ?!

全員が周囲をキョロキョロと見渡した。うろたえている。女性の誰かが声を発したのか思い確認した。女性は5人。舞子、塔の中で後ろにいたボブカットの大きな目の子、背が高くきりつとした目つきのロングヘア美女、ショートカットの子、ミディアムヘアの色白で細い子だ。全員周りを見て、声の主を探している。つまり違う。

「誰だー 出てこいー!」

リョータが叫んだ。

「もー、毎回同じリアクションでつままないなー、慌てなーい、騒がなーい、なおかつ気を抜かなーい、毛も抜かなあーい、ぼっもっしょう抜毛症じゃなああーい」

——話し方がうざい……。

声は塔の裏手から聞こえてきた。

「ちやらららららーん、ちやらららららーんららーん」

塔の裏側に視線が集中する。

場にそぐわない歌を歌いながら1人の女性が出てきた。ツインテールの髪型をした女だ。手には行燈ランタンを3つも持っている。

「どーもー。元気ですかー。元気があればなんでもできるかどうかはわかりません！

ようこそグリムガルヘー。案内人をつとめさせていただく、ひよむーですよー。初めましてー。よろしくね？ きゃぴーっ」

——うざい。うざいすぎる……。生理的に受け付けない。

全員がひよむーと名乗る女の勢いに押されて、呆気あっけにとられている。

「あかん。出落ちを持ってかれた」

隣にいたシムラが悔しそうに呟いた。

ひよむーはとことこと歩いて、グンゾウ達の傍まできた。

「あれ？ 今回の人達はずまんないですね。のーりあくしよんつてやつですかー？

きよへつ。じゃあ、話を進めてお仕事しちやいまーす。きゅんきゅん」

そう言いながら、ひよむーはにっこり笑った。

——今回の人達……？。

「ひよむーは、みなさんのような人達をオルタナに案内する案内人でーす。とりあえず、ついてきてくださいーい。あ、オルタナつてのはアラバキア王国の「辺境」にある要塞都

市ですよ。みなさんの目の前にあつるやつです」

——正直、ひよむーの言うことの半分も分からない。オルタナ？ アラバキア王国？  
辺境？

シムラも隣で目を細めて頭をひねっている。イガグリ頭が斜めに傾いた。理解していない仲間がいて、グンゾウは少しほっとした。

「ぐずぐずしていると、置いてきますよー。あ、暗いから行燈を持ってきました。ひよむー、えらいーい、かしこーい、かーわーいーい。てへぺろっ！ あ、そこのおじさんとイガグリ頭は行燈を持って足下照らしてね！」

ひよむーは、グンゾウとシムラに行燈を渡すと、ツインテールを揺らしながら歩き出した。全員付いていく意外に選択肢もないため、一列になってぞろぞろとひよむーの後を付いていく。グンゾウとシムラも先頭の方を歩いていった。

——おじさん……。わかってるけど、おじさんって……。

「グンゾウさん、俺、列の後ろの方を照らしながら歩きます」

「ああ、頼むよ。シムラ君。私は真ん中の辺りにいるよ」

「承知！ あの、呼び名はシムラでいいです！」

そう言うときシムラは列の後ろの下がついていった。

——俺も真面目に働こう……。

行燈の灯りを分散するため、グンゾウは列の真ん中くらいを歩くことにした。足下に注意しながら歩いてくると歩く。

行燈に照らされて初めて分かったが、塔から丘の下へと向かう道があった。道は踏み固められた黒い土だ。道の両脇は草むらとなっている。丘を覆う草むらには大きな石が整然と並んでいた。

——あれは何だろう？ 遺跡？

グンゾウが思っていることより正解らしい答えが聞こえてきた。

「あれ、お墓じゃない？」

「へっへっへ、じゃあ、お化けがでてくるかもなー」

「やめてよ、怖い！」

グンゾウの近くにはショートカットの女の子とヘラヘラしている男の子が話しながら歩いていて、随分お気楽な感じだ。

ショートカットの女の子は身長160センチくらいで、中肉中背、フードの付いた服にパンツスタイルだ。失礼な表現だとあまり特徴の無い10代半ばの女の子と言った印象だった。

ヘラヘラしている男の子は身長170センチちょっとでグンゾウと同じくらい。瘦



せ型。前髪が気になるらしく常に手櫛で直していた。同じく10代半ばに見えた。ちよつと落ち着きが無い。シヨートカットの女の子と同じような格好をしている。

2人の少し後ろには背が高くきりつとした目つきのロングヘア美女が無言で歩いていた。

——念のため、名前くらい聞いておこうかな？

「私はグンゾウ。はじめまして。君たちの名前は？」

「私はノッコです」

シヨートカットの女の子が答える。

「俺はミッツ！ よろしくうです！」

ヘラヘラしている男の子がヘラヘラ答えた。

「ノッコさんに、ミッツ君と……よろしく、えつと君は？」

グンゾウは振り返りロングヘア美女に声をかけた。彼女はグンゾウの方を見ることがなく、表情ひとつ変えず答えた。

「ヴェール」

「ヴェールさんね、よろしく」

彼女からの返事はなかった。彼女は遠くを見ている……ような目をしていた。

彼女の身長は170センチ程度あると思われた。グンゾウ達の女性の中では身長が

一番高い。痩せていて、体のラインが出るぴったりとした黒い服を着ていた。さらに顔も小さいため、一般人とは人種が違うと思える程スタイルが良かった。

何よりも印象的なのは眼差しが強さだ。切れ長の大きな目に長い睫毛。眉毛も濃く鋭い。素直で艶やかな長い黒髪は暗い夜道の風景に溶け込んで、彼女の白い肌を一層際立たせた。容姿端麗とは彼女のためにあるような言葉だ。表情が大人っぽいからか年齢は20歳過ぎに見えた。

行燈の灯りに照らされて陰影がはつきりした彼女の顔はとても美しい造作だったが、それが好意に繋がらないくらい人を寄せ付けない冷たい印象をグンゾウは持った。

しばらくの間、夜道をずらずらと列になって歩いた。

「そろそろ、オルタナの街ですよー！ はぐれちゃ駄目ですよん。はぐれても探さないですよー。うっふふふ……」

列の前方からひよむーの音が響く。

足下を見て慎重に歩いていたグンゾウも前を向いた。

目の前には丘の上から見ていた小さな街の灯りが、視界に大きく広がっていた。

### 3. 割れているのは俺の心か、彼のアゴか

ぞろぞろと歩く。街の中を列になつて歩いて行く。添乗員に案内される観光客のようだ。実際、それと大差なかった。キヨロキヨロと周りの景色を眺めながら歩いていく。元々記憶も失われてしまつていたので判断はできないが、初めて見るような景色だった。

ひよむーがオルタナと呼んだこの街は、丘から見た景色の通り山の斜面に造られた街なので、坂道や階段が多かった。丘のそばの道は踏み固められた土だったが、街の奥に進むにつれ石畳の箇所も増えていった。石畳の道は曲がりくねっている。細い道も多く、歩くのが楽な街ではなかった。

「ここは外国なのかな？ よく知っている景色と全然違う気がする」

ノツコが独りごちると、ミッツがヘラヘラしながら反応した。

「……外国っていうかあ、国って何だっけ？ その辺りがよくわかんねー。その辺りも何も俺、全然記憶が無いわあ、へっへっへ」

「何故笑つてられるの？ 私も自分で言つてて全然わからないけど……。ここが故郷なのかな？ でも違う気がするし。」

——この2人も俺と大体同じ状況だな。

オルタナの建物は石造か木造に漆喰が使われている造りの家が多かった。建物の特徴は地域毎に似通っていて、建物の材質とデザインはそれぞれの地域で似たものが密集して建っていた。

——地震に弱そう……。ここは地震なんて少ないのかな？

グンゾウは何故か地震のことが気になった。もしかしたら地震の多い地域に住んでいたのかもしれない。

太い道には側溝があり、水が流れている音がする。下水道だと思われた。夜だからか特に汚物等は流れていなかった。

——下水があるってことは、上水もあるかな？ 暗くてよく見えないけど大きな樋といは見当たらないからどっかに配水水槽か井戸があるだろう。街として最低限の衛生機能はありそうだ。清潔な水を得るのが難しかったら正直しんどい。明るくなったら街を見て回らないと。

グンゾウは生きるため真剣にこの街や世界を観察をしていた。

深紅の月丘の上にいた時よりも少し傾いたように見えた。

明け方にはまだ遠い時間と思われたが、歩いている人がいないということではなかった。時折、酔っ払いと思われる人達とすれ違う。真夜中でも出歩けるくらい比較的安全

なようだ。すれ違う人達の服装は少し変わっていた。変わっていたというよりもグンゾウ達の服装より簡素で、少しみすぼらしい。すれ違った人達はグンゾウ達の一群を不審そうな目で見返していた。

——まあ、そうかな……。こんな夜中にぞろぞろ連れだつて歩いている連中は怪しいわな。

どれくらい歩いただろう。結構歩いたとグンゾウが思っていたころ、先頭集団がある建物の前で止まった。建物の前に全員が集まってくる。後ろを歩いていたシムラも追いついてきた。

その建物は石造二階建てで看板が出ていた。グンゾウやシムラが行燈ランタンで看板を照らした。看板は風雨にさらされボロボロだ。所々擦れた文字で「オレタノ刀かす車義男兵口レソトムーノ」書いてあった。

「折れたの刀……強者ヨシオ、兵くれ、外、濃霧？　なんや援軍要請の暗号か?!」  
「そんなわけないよね?」

シムラがボケたことを言ったら、グンゾウの知らない男の子が突っ込んだ。後ろの方において知り合いになったらしい。

「タイチ、なんやねん、その突っ込み。もつと鋭く突っ込んでもらえないと面白くないだ

ろー！」

「ははは、ごめんごめん。突っ込みとか慣れてなくて。ボケかもわからなかったし」  
「確かにいまいちやったわ。あかん、記憶と一緒に笑いのセンスもなくなってるわ」  
「記憶のせいになっているなあ、はははは」

タイチと呼ばれた男の子は穏やかに笑った。素直な栗毛の下に幼い優しそうな顔があった。少年という言葉が相応しい、完成されていない体つきをしている。背はグンゾウと同じくらいか。ハイドと似たような格好をしている。ハイドより清潔感のある感じか。

「じゃじゃーん！ よーやく到着しましたですなー。こんな夜中に疲れましたですねー。ここ、ここ、がつ！かの有名なオルタナ辺境軍義勇兵団レットムーンの事務所ですよー！」

と、ひよむーが看板を両手で示しながら紹介をした。

「まじで有名なんかよ！ 適当抜かすと承知しねーぞ」

先頭集団にいた、リョータことマイルドヤンキーがひよむーを睨みつけながら本領を發揮した。

「きやーん、こわーい、ま、ま、中に入って、入って、入ったらわかるさ！ 1、2、3、ダー！ ですよん！」

「うるせえ。いい加減キレつぞ。」

——そこは同感。でもキレすぎ。

ひよむーに促されるまま、カルシウム不足のリョータを先頭に全員が建物に入つていった。

建物の中は宿屋の入り口のような空間になっていた。部屋にはいくつかのテーブルと椅子が置いてあり、ラウンジのような造りになっている。奥にカウンターが設しらえてあり、カウンターの向こうに男らしき人物が一人、腕組みをして立っていた。

その人物がこの建物の主であるように思われた。

グンゾウは部屋の中をぐるっと見渡したが、その人物とひよむー、グンゾウ達以外に人は見当たらなかった。

「そいじゃ、ひよむーはこの辺でコレさせていただきますよん！」

ひよむーは人差し指だけ立てた両手を縦に重ねたポーズを取つてから、カウンターの中の人物に礼をして、その場を立ち去ろうとした。

「毎度のことですけど、皆さんに説明等々、どうかお願いしますね、ブリちゃん」

ブリちゃんと呼ばれた男らしき人物は「はいよ」と軽い返事をしながら、手をふり振り振った。何故か、手と一緒にお尻を左右へくねらせた。手の動きはしなやかだが、手

自体は筋肉質でごつい。そして、声の太さからも推測するに間違いなく男だと思われるた。

「失礼しまーす！ 皆さん頑張つて生き延びてくださいねー！」

いつの間にかひよむーはシムラとグンゾウから行燈を回収して、扉の向こうに消えていつてしまった。

——あ、行燈無いと夜の移動は困るなあ。

ひよむーが出て行つた後、扉が閉まると妙な緊張感が漂<sup>ただよ</sup>つた。ブリちゃんは沈黙を保つたまま、口元に微笑を張り付かせグンゾウ達を見ている。口元とは裏腹に、その目は笑っていない。グンゾウ達を観察しているといつても差し支えないだろう。

洋燈<sup>ランブ</sup>と蠟燭がカウンターの付近に沢山備えてあり、ブリちゃんは暗い部屋の中で際立っていた。正確に表現すれば異彩を放っていた。

最初にグンゾウ達がブリちゃんの性別を特定できなかつたのには訳があつた。ブリちゃんの容姿が極めて怪しいからだ。

ブリちゃんはどうしたらそうなるのか髪の毛の色を緑色にしていた。そして化粧が濃い。目は長くて量の多いバサバサ睫毛<sup>まつげ</sup>に囲まれていた。瞳は水色で綺麗だったが正直恐ろしいとか、おぞましいという表現にしか繋がらない。頬紅<sup>チーク</sup>もかなりしつかりつけていて、唇には真っ黒な口紅が塗られてた。ブリちゃんはそんなに大男ではないが、筋



肉は細マッチョの領域をとくに超えてゴリゴリのマッチョである。

そしてブリちゃんの特徴は、カウンターに両肘をつき、組み合わせた両手の上に乗っかっている顎だ。その顎が割れている。それはもうくつきり、しつかり、薄い紙なら挟めるのではないかと思う程だった。

——これはキツツイ2丁目系だな……。ん？ 2丁目ってなんだ？

グンゾウが自分の内面の世界に入り始めたところで、ブリちゃんが割れている顎の上にある口を開いた。

「ふんふん、大体わかったわ。こちらへいらっしやい、子猫ちゃんたち。歓迎するわ。アタシはブリトニー。当オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーン事務所の所長兼ホストよ。所長って呼んでもいいけど。ブリちゃんでもオツケー。ただしその場合は、親愛の情をたっぷりこめて呼ぶのよ？ いい？」

正直、全員気圧されていた。特に誰も返事をしない。グンゾウはマイルドヤンキーリョータがどんな顔をしているか確認した。蛇に睨まれた蛙のような萎縮した顔でブリちゃんを見ていた。リョータはあまりこの手のタイプの男性(?)が得意ではないらしい。

「今回の子猫ちゃん達は、元気がないわね？ 大丈夫かしら？ 戦力になるかしらね」

ブリちゃんはがっかりした様子で、少しため息をついた。

「戦力ってなんなんですか？」

カズヒコが勇気を振り絞った様子で、ブリちゃんに質問をした。

「あら、かわいい子猫ちゃん。」

ブリちゃんがカズヒコにウインクと投げキッスをする。直接の被害を食らった訳では無いが、グンゾウの下半身で何かが縮み上がった。グンゾウの位置からは見えないので、カズヒコがどんな顔をしているのか気になった。

「これはあかんやつや……」

グンゾウの隣でシムラが小さく囁いた。その隣とそのまた隣でタイチとノツコがガクガクと頷いていた。

ブリちゃんがカウンターの中で歩き始めた。

「いいわ。ちよつと察しが悪いけど、かわいい子猫ちゃんの質問だから答えちゃう。あなた達は選ぶことができる」

ブリちゃんは人差し指を立てて、左右に動かしながら説明を続けた。

「アタシのオフアーを受け容れるか、断るか。」

——オフアー？ ブリちゃんの存在は、フアー……!! だけどね。

グンゾウは顔色ひとつ変えず、心の中で叫んだ。

「オフアーの内容は、アタシ達オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンに加わること。と

いっても、最初は見習い義勇兵として、一人前の義勇兵を目指してもらうことになるけどね。」

少し間が開いたので、誰かが質問をした。

「義勇兵って何なんですか？」

初めて聞くような声だった。ミディアムヘアの色白で細い子だ。身長は160センチくらいだ。痩せていて、顔や頭がとても小さく、手足が長いのでスタイルがよく見える。ただし、ヴェール程の規格外ではない。少し垂れ目。そして、伏し目がち。きつとぱっちり開けば大きいのもかもしれないが、常に4分の1程度閉じたような、悪く言えば眠そうな、良く言うところと慈愛に満ちた雰囲気の色目をしてる。10代後半に見えた。一見、地味な印象なので好みは分かれるかもしれないが、肌の色が透き通るように白く、かわいらしい女の子だった。白いシャツにチェックのスカート、それに紺色のカーディガンを着ていた。

見た目とは違い、落ち着いた意外と低い声でブリちゃんへ質問が投げかけられた。ブリちゃんは口をへの字に曲げて、呆れたというようなポーズを手で取りながら答えた。「どんだけー。もう、そんなの簡単よ。まず、この辺境にはアタシ達人間と敵対している種族や、モンスターって呼ばれる怪物どもがたくさん、たあつくさんいるの。次に辺境には辺境軍の正規兵がいて、彼らは敵対している種族やモンスターを駆逐して辺境の制

圧を目指している。でもそれは簡単なことではないわ。辺境軍本隊はこのオルタナの街を防衛しなければならぬし、前線基地も兵站へいたんを切らさないように維持しなければならぬ。アラバキア本国に比べれば、辺境の生産能力は限られているしね。生産基盤の増強もしなければいけないかつたり、つまり時間がかかるのよ。そこでアタシ達の出番が回ってくるくるわけ」

ブリちゃんはそこで一呼吸おいて、キラキラした瞳でグンゾウ達を見回した。主にカズヒコを。

「アタシ達義勇兵は、神出鬼没、縦横無尽に敵地に潜入し、視察して、攪乱し、敵対勢力の弱体化を図る。本隊に協力することはあつても、組織だった作戦行動をとることはめったにないわ」

「それってゲリラ組織……」

グンゾウは思っていたことを口から漏らしてしまった。ブリちゃんは少しだけ苦い顔をしたが、すぐに余裕のある微笑を張り付かせた顔に戻り、話を続けた。

「あらやだ、遊撃隊と言ってもらえる？ まあ、似たようなものよ。大抵、単独か、まあ3〜6人くらいの小隊を組んでる義勇兵が多いかしらね。とにかく各自が己の才覚、独自の判断で情報を収集し、敵を叩く。これがアタシ達義勇兵団レッドムーンの仕事よ」

——組織立って動かないのは非効率だと思っただけだな……。

「あのお……」

塔の地下で後ろにいたボブカットの女の子がおずおずと手を挙げた。ボブカットの女の子は身長150センチ台だ。こぼれそうな大きな目。少し隈くまができています。その本当に大きな目の下に、拗すねたような唇があつた。紺色のシャツに水色の短いスカートを履いている。

「義勇兵にならなかつたらどうなるんですか？」

拗ねたような唇から、ぶつきら棒な口調で質問が発せられた。

この質問には慣れているのだろう、ブリちゃんは眉ひとつ動かさずに即答した。

「どうにもならないわよ。言つたでしょう。あんた達は選ぶことができるってね。義勇兵団に加わりたくなければ、今すぐここから出て行つて、二度と戻つてこなくていいわ。

……1、2、3、……14と」

ブリちゃんはカウンターテーブルの下を覗き込んでごそごそしている。

「でも、お金もなく生きていけるかしら？ 見習い義勇兵になる子には、銀貨10枚、1人につき10シルバーずつあげるから、当分は暮らせるわ」

——お金!？」

「やだあ！ 私、お財布無くしちゃつたあー!!」

突然、舞子が体中をはたきながら叫んだ。

「やべえ、俺も財布ねえぞー！」

リョータも自分のお尻を探っている。

「あちやー、まいった。こりやあ、もう見習いになるつきやないって感じの流れ的なあ？」

細目の男が側頭部を叩きながら軽い口調で言った。

周りを見ると全員が財布を探す動作をしている。グンゾウも自分の来ている服のポケットというポケットを探った。ポケットの中には何も入っていないかった。

——10シルバーっていくらなんだろう？　しかし、この服は結構ポケットが多いな。

グンゾウが関係ないことを考え始めた頃、ブリちゃんはカウンターのの上に、革で出来た小さな袋と赤っぽい色をした硬貨のようなもの並べ始めた。全部で14セットある。グンゾウ達の人数分だ。

ブリちゃんは三日月が浮き彫りにされている硬貨のようなものをグンゾウ達に見せるように1枚つまみあげた。硬貨のようなものには革紐が通されている。

「これは見習い義勇兵の身分証明書、通称・見習い章。これは見習い義勇兵としての身分を証明するものだから、もらったら無くさないようにね。このオルタナでは身分が明らかでない人間は職業に就くのも簡単じゃないし、色々大変よ！」

——なるほど、俺らは現在身分すら明らかじゃない存在なんだな。当たり前か。

「見習いつてことは、一人前もあるん?……ですか?」

シムラがぎこちない敬語でブリちゃんに聞いた。

「そうよ。銀貨20枚、20シルバーを義勇兵団事務所に納めれば、正式な団章を買うことが出来るわ。晴れて一人前の義勇兵になったら、それなりの特典があるわ」

「特典?! どんな、どんなあ?!」

舞子が明るい声で聞く。

「例えば、義勇兵宿舎が無料で使えるわ。見習いの間も1部屋1日たったの10カパーだけだね。」

ブリちゃんが舞子にウインクした。

——おぞましい。見なければ良かった。シルバーとかカパーとか単位がわからん。単位が。後でまとめて聞こう。

「そっか……、泊まるところ……」

ノツコが独り言のように呟いた。

「他にも質問あるかしら? 子猫ちゃん達。まあ、そんなに丁寧に教える気ないけど」  
「ブリちゃんは飽きてきたようだ。唇と同じような黒い色をした爪を眺めている。」

「具体的にまず何をすればいいんですか?」

カズヒコが聞いた。ブリちゃんが見線をカズヒコに向ける。

「あら、かわいい子猫ちゃん。各自が己の才覚、独自の判断で情報を収集し、敵を叩く。これが義勇兵の流儀よ」

「何もかも自分で調べろってことですか？」

「そゆこと」

——なんだ、そりや。適當すぎるな。

ブリちゃんはキラキラした目でカズヒコを見つめている。

「まあ、そもそも、それくらい自分で調べて行動できないと、このグルムガルでは生きていけないわ。さて、もういいんじゃない？ 見習い義勇兵になって団章とお金を受け取るか、ならないでここを去るか。時は金ときなりよかね」

これ以上は丁寧な回答ができそうにない。グンゾウ達に無言のプレッシャーがかかる。全員なんとなく顔を見合わず。訳が分からないことだらけで慎重になっているようにみえる。

グンゾウは勇気を出して口を開いた。

「最後に聞きたい。デ、デメリットは？」

ブリちゃんは完全に飽きた風で黒い爪を眺めながら答えた。

「ないわ。たまあに、辺境軍から支援の依頼が来る時もあるけど、受ける受けないは選択



の余地があるわ」

この一言がきつかけとなり、場が動き始める。

「よし！ やつてやろうじゃねーか！」

リョータがカウンタートーブルの上にならんだ革袋と見習い章に手を伸ばす。

「受け取る時は、名簿に名前を書いてね」

そう説明をしながら、革袋を掴もうとして伸ばしたリョータの手をブリちゃんがそつと撫でたので、リョータの体がブルブルつと震えた。ブリちゃんは心から楽しそうに笑った。

次に動いたのは意外にもハイドだった。

「キシシ、オープンングイベント長すぎ……フシシ、キシシ」

——オープンングイベント？

ハイドは良くわからないことを言いながら、見習い章セットを受け取った。

勢いがついて、皆次々と受け取っていく。細目の男は革袋を2つ取ろうとして、ブリちゃんに手を叩かれていた。

——デメリットがないというのは大きい。元手があるに越したことはない。

舞子に続いてグンゾウが受け取った。グンゾウの後にシムラやミツツ、ノッコ、タイチも受け取った。

受け取っていないのは、ボブカットとミディアムヘアの女の子2人だけとなった。

「あら？ もうお終しまい？ 他の仕事も楽じゃないわよ。身分証がなければ就ける職業にも限りがあるし。お金もないんじゃないや、選択する余裕もないしね。女の子なら体を売るか……、アタシのペットになるってのもあるけどね」

——確かに……、身分の保証がないのは厳しいよなあ……。義勇兵にもならず右も左もわからない状態で飛び出すよりは……、

「まだ、ブリちゃんのパットの方がいいかなあ？」

グンゾウは思っていることが口から出てしまった。しかも結構大きな声で。

義勇兵団事務所の中に静寂が流れる。全員が目を皿のようにしてグンゾウを見つめている。

「キシキシシ、グンゾウ面白すぎ、キシシ」

ハイドに言われて、グンゾウは気付く。

「え？ あれ？ 俺、声に出て……、あれ？ ちがつ」

グンゾウの顔に一気に血が上る。恥ずかしい。全員の視線がグンゾウに向けられていることに気が付いた。

「グンゾウさん、そっちっすか？」

シムラがグンゾウから一步後ずさる。

「あ、いや、全然違うことを考えていて……」

何を言ってもどうしようもない。全員がグンゾウから少し離れた気がする。グンゾウも全身から汗が噴き出るのが止められない。

ブリちゃんは愉快そうな顔でグンゾウを見つめてから、目を瞬またたかせた。

「あらグンちゃん、アタシのペットに興味があつたの？ ごめんなさいねえ。アタシ若い子がタイプなのよ。見習い義勇兵頑張って！ それに、アタシのペットは見習い義勇兵より楽しいわよ」

なんとブリちゃんに謝られる。

「オッサン、ふられてんぜ！ はっはっは！」

リョータの容赦ない笑い声が義勇兵団事務所内に響き渡った。

——しまった……、最悪だ。

グリムガル初日、グンゾウはとんでもない形で失恋をしたことになってしまった。

## 4. 花一匁はいつだって残酷な遊び

結論から言えば、グンゾウ達は6人の小隊パーティを2つ作ることになった。

6人×2は12人なので14人には2人足りない。その2人ふたりはグンゾウ達と行動することを選ばなかった。

1人ひとりはヴェールだ。元々グンゾウ達とは住む世界が違うと感じさせる美しさと、近付く者全てを拒むような冷たい雰囲気を持っていたが、立ち去る時の台詞セリふもミステリアスに尽きる。「貴方あなたたちとはプレイスタイルが違うから」だ。「小隊パーティを作ろう！」とカズヒコが声をかけた直後に、颯爽さつそうと義勇兵団事務所を後あとにしてしまった。

もう1人はキツカワという細目の男だった。ヴェールが立ち去った後、彼女を追っかけてバタバタ出て行ってしまった。あまりの出来事に残されたメンバーは茫然としてしまった。

最初は1小隊を6人にするつもりもなかった。全員で動くのは効率が悪いので、純粹に2つの小隊に分かれて情報収集をしようという目的があっただけだった。結果論としては、これがこの世界では最も効率の良い分かれ方だと後のちに知ることとなる。

30分程前。グンゾウの大きな眩くらきの影響か、ボブカットとミディウムヘアの女の子2人もブリちゃんから見習い章と10シルバーを受け取った。

「おめでとう。これで今日からあんた達も見習い義勇兵よ」

ブリちゃんはわざとらしい笑みを浮かべて手を叩いた。

「少しでも早く一人前になつてね。正式な義勇兵になつたら、少しは相談に乗つてあげるわ」

「今じゃねーのかよ」

リョータがぼやいた。

——確かにリョータの言うことは的を射ている。生きてく力を早く身に付けるのに荒療治が有効かもしれないけど、最初くらいはもう少し丁寧なサポートがあつた方が順調に戦力化するんじゃないかな？

「さて、みんな、ちよつと話を聞いて」

カズヒコが全員に声をかける。

「どうも義勇兵団つてのは正直親切ではなさそうだ」

カズヒコがブリちゃんがちらつと見る。ブリちゃんは諸手を挙げて、お手上げのポーズを取る。目はウインクだ。

「そこで、街に情報収集に行つたらいいと思うんだけど、全員で動くのは効率が悪い。ま

だ夜だし、明るくなるまでここで待つて、朝が来たらリョータと俺の2小隊に分かれて情報を集めて、また義勇兵団事務所ごゆうへいだんじむしょに集合つてのはどうかな？」

「さんせーっ！　ちゃんと自己紹介もしよーよー」

舞子が賛意を表明したのに続いて、全員の中に同意の和が広がる。

ただ、1人を除いて。

「私は自由にさせてもらうわ」

よく響く美しい声。

——ずるいな。声もこんなに美しいなんて。

それはヴェールだった。有無を言わせない意志が強そうな話し方だ。

ヴェールは大股でつかつかと歩いてブリちゃんがいるカウンターの傍そばにある洋燈ランブを手にとると、義勇兵団事務所の入り口に向かった。

「ヴェール、後でちゃんと洋燈返しにきてねえ」

ブリちゃんが手をひらひらと振った。ヴェールは無言でブリちゃんに一瞥いちべつをくれる。

ヴェールが扉に手をかけて少し開けたところでカズヒコが声をかける。

「どうしてなんだい？　みんなで動いた方が安全じゃないか」

カズヒコが少し苛立ったような声で話しかけた。ヴェールはグンゾウ達をその美しい深緑の瞳で横目に見ながら一言。口元は少し笑っているように見えた。

「貴方<sup>あなた</sup>たちはプレイスタイルが違うから」

そう言うと、扉をきつとくぐり抜け夜の闇に消えていった。閉じかける扉の隙間に吸い込まれていく長い黒髪まで素敵だった。

茫然自失。

——記憶も無い。お金もあるんだか、ないんだか。この訳が分からない世界でよくあそこまで颯爽とした決断ができるもんだ。

残ったメンバーも同じような状態だった。たつた一人を除いて。

「かあつこいいいい。俺ちゃんもヴェールちゃんと一緒にプレイスタイルが良かったなあー。今なら間に合うかなあ？　ここはいつちよ、美女のために一皮向けちゃおっかなー。いつてきまーす。グッバーイ！」

先頭の集団にいた細目の男がバタバタと間が抜けた感じで扉に向かっていく。

「お、おい、キツカワ、そんなんでいいのか？」

カズヒコは細目の男の名前を知っているようだ。カズヒコが扉の方に手を伸ばす。

「俺ちゃんのパッションさんが止まらないんだよー。また会つたらよろしくー」

キツカワと呼ばれた男は義勇兵団事務所を飛び出して行ってしまった。外に出た直後、「あちゃー、暗ーい。見える俺ちゃんの目ええええ!!」という叫び声が小さくなつていった。

——騒がしいやつだな。

行き場の無くなったカズヒコの手が空しく宙を漂う。

しばらくの沈黙の時間が過ぎる。

「さっ、じゃあ、6人ずつで2つの小隊に分かれよう」

カズヒコはいつもの笑顔に戻り話を続けた。

——こいつもメンタル強い。

「キシキシ、なるほど、キシシ、ふ、ふ、ふ」

——何が？ え？ 何が「なるほど」なの、ハイド?!

グンゾウはハイドの首を絞めてでも答えを聞き出したが、大人げない、あんまり触りたいタイプの人間でもないので止めた。

「最後になります、ヨシノです。よろしくお願ひします」

ヨシノとは舞子のことである。ようやく明るい場所で自己紹介が行われ、全員の名前と見た目が一致する。

いざという時、荒事になるかもしれないので、小隊のメンバー選定は体力的なバランスを取ろうということになった。カズヒコとリョータで順番に強そうに見えるメンバーから小隊に加えていくという方法だ。いわゆる花一匁はないちもんめルールだ。



ただし、女性が1対3のように小隊で分かれるのは辛いだろうという配慮から女性は女性で2対2で分かれてもらい、バランスを見ながら男性陣に女性陣を組み合わせるようになった。そのため女性陣はブリちゃんに別室を借りて、チーム決めをしている。

ジャンケンで先攻後攻を決める。後攻になった場合は次の先攻が、先攻になった場合は次の後攻がセットなので、仲間を選ぶ機会は比較的公平になるようになっていた。

かなり気合いの入ったジャンケンが始まり、あいこが3回続いた後に勝敗が決した。カズヒコの勝ち。

——これ、さっきのブリちゃんのパット発言と、俺だけちよつと年上なのは影響しないか？ ちよつとだけだよね。

しばらく後で、グンゾウの予想は的中することになる。

「クザクで」  
「……っす」

カズヒコはメンバーの中で最も背の高い男を選んだ。名前はクザク。身長は190センチ以上あるかもしれない。とても恵まれた体型をしている。顔もそれなりの男前だ。しかし、強そうかというとまた別の議論だ。背も高いし、肩幅もあるのだが、すごく痩せていてバランスが悪い。猫背もすごい。あと、体全体からやる気の無いオーラが発されている。自己紹介の時もぼそぼそと話していて、なんだか影が薄い感じであつ

た。恐らく喧嘩をしたら10センチ位小さいリョータが圧勝すると思われた。というか、クザクと比べてリョータは小さく見えなかった。リョータは身長も高ければ、胸板の厚さや腕の太さも立派だった。戦闘能力だけみれば間違いなく14人の中で最強だ。「くっそ、取られた」

リョータは悔しがった……ように見えなかった。心なしか顔に笑みが浮かんでいるように見えた。

——そうか、クザクが取られれば自動的に女性陣で体格が良いチームがリョータチームに来る可能性が上がる。そうすると……。

女性陣で一番体格が良いのはヴェールが抜けた4人の中では間違いなくヨシノだった。ヨシノは身長が170センチ近い。ヘラヘラしているミツツと並ぶと僅差きんさで低い位だった。女性にしては肩幅も広く、鍛えられていて引き締まった体型をしている。長くて緩いウェーブがかかった茶色い髪に、顔はハッキリした濃い顔をしていた。グンゾウがあまり好きなタイプではないが、一般的には美人の部類に入る。ひらひらする黄色の服を着ていた。元気で明るい性格には好感が持てる。

——リョータはヨシノをチームに入れたいんだな。

この予想もすぐ的中することになる。

そこからの順番と指名は次の通りだ。

後攻リョータはタイチを指名、次の先行リョータがミッツを指名、後攻カズヒコが小考後にシムラを指名。残りはハイドとグンゾウ。

——ハイドと同レベルか……。ハイドと……。

自分以外が選ばれる度にグンゾウの気持ちは暗くなっていた。

ここで再びジャンケンを実施する。先行はリョータになった。リョータが突然悩み始める。

「あれ？ これで俺が選んだら女性陣はカズヒコが選ぶんけ？」

「そうなるね。大体同じくらいの体格バランスになってるから、公平に、順番で」

カズヒコは爽やかな笑顔で、えげつないことを言った。

「なんだって！ ちょっと待て、聞いてねえぞ。やり直した、やり直し！」

「え？ なんて？」

「なんでもクソも、そっちはデカイクザクを持ってっただから、女性陣は強い方をくれや」

リョータが遂にぶつちやけ始める。

「リョータもでかいだろ。まあ、リョータの気持ちはわかったよ。とりあえず一旦決めよう。その後で調整しよう」

カズヒコはリョータより随分策士且つ大人だ。

「どうする?」

小声でカズヒコがリョータに問う。リョータも釣られて小声になる。

「どうする?」 って、ブリちゃんのパット志望のオツサンとキモオタの二者択一だろ?

どっちでもよくね?」

ふたりの視線がグンゾウとハイドを交互に行き来する。

「戦力バランスを考えれば……」

「そもそも戦力……」

丸聞こえの小声の会議が始まった。

最終的には調整が入り、リョータがどうしてもヨシノが欲しいという願いをカズヒコが聞き入れて、その代償としてグンゾウとハイドを両方チームに受け容れ、タイチを放出、さらに若干体格差のあるミッツとシムラを交換した。それでもリョータは満足げに見えた。ハイテンションで女性陣にチーム編成について説明していた。

各チームを整理すると次のようになる。

■リョータチーム : リョータ、シムラ、グンゾウ、ハイド + ヨシノ、アキ

■カズヒコチーム : カズヒコ、クザク、タイチ、ミッツ + ノツコ、チヨコ

アキはミディアムヘアの女の子で、チヨコはボブカットの女の子だ。

「グンゾウさん、さつきは勘違いしてすみませんでした。一緒で良かったつす！」

シムラがニヤニヤしながら話しかけてきた。

「シムラくん……いや、シムラ、顔が反省してないけど？」

「へっへっへ」

——なんだかんだ言つて、素直でかわいいシムラと一緒にだったのは良かったかな？

グンゾウは少し安心しながら、小隊のメンバーを見回していた。

アキが不安そうな面持ちで3メートル先の地面をぼーっと見つめていた。その様子を気にしてか、元気ハツラツのヨシノがアキの肩を後ろから抱きしめながら元気付けていた。

「ダイジョーブだよアキちゃん！ 元気出して、何とかなるって。スマイル！」

グンゾウは少し照れた様子のアキの横顔を眺めて、アキは笑った方がずつとかわいいなど思っていた。

「……自業自得だけど、……最強の僕が入らなかったチームはかわいそうだ」

グンゾウの傍でハイドが呟く。気が付くとハイドはグンゾウの傍にいる。

——またハイドはアホみたいなこと言ってる。

グンゾウは呆れた目でハイドを見ていた。目尻は下がり、口はへの字になっている。

しかし、グンゾウは違和感を感じた。

——あれ？ ハイドがいつもの気持ち悪い感じで笑ってない。

「よし！ 空が白み始めたら動き始めよう。それまで各チーム休憩で」  
カズヒコがみんなに声をかけた。

## 5. ダムローへの道

暑い。季節は初夏といったところだが、この時間は日がどんどん高くなり、気温が上昇している。

グンゾウが着ている神官服は基本的に長袖なので涼しくはない。そもそも義勇兵の活動をする上では怪我や虫、日焼けを避けるため長袖以外は選択しづらい。

今は林の中に潜んでいるので日差しは直接当たらないがそれでもじんわりと汗が出てくる。虫の鳴き声が五月蠅い。ちょうど良い。グンゾウ達は極力音を立てないようにゆつくりと動きながら目標を視界に収めた。

あいつらはとても醜悪な姿をしていた。

背は子どもくらいだ。上半身は痩せているがお腹はぽっこりと出ている。緑色系の肌と尖った耳を持っている。見つめ合うとつぶらな瞳をしているが、瞳の奥に敵意と知性が存在していることに慄然とする。

やつらの名前はゴ布林。

ゴ布林はこのグリムガルで最弱のモンスターだ。大きさも総じて人間の子ども程しかない。しかし、その戦闘能力は侮れない。まず身軽で素早い。野生動物の速度から

繰り出される攻撃は、対応に手間取るとあつという間に窮地に追い込まれる。また、しなやかな体全体を使った攻撃はリーチが長く、貧弱な体格からは想像がでない程力強い。そして最も厄介なのがその生命力だ。刃物で切りつけられたり、刺された位では簡単に死なないどころか、そうそう怯まない。動きを止めるためには急所を的確に狙って、動作能力又は命を奪う必要がある。

斜面になつている林を抜けた目の前には小川が流れている。小川は浅く、徒歩かちで簡単に渡ることができる。手前には河原が広がっている。その河原にはゴブリン5匹が群れをなしていた。早い昼飯なのかゴブリンは火を焚いてキャンブチエインマイルをしている。ゴブリンの大きさはまちまちだが、1匹だけ錆びてボロボロの鎖帷子チエインマイルを装備し、手槍と盾を持つている。あれがボスかもしれない。全員武器を地面に置き、寝転がり、油断している。

小川の間にも林がある。グンゾウの顔に光が当たる。向こうの林から盗賊シーフのチヨコが手鏡に光を反射させて、グンゾウ達に準備完了の合図を知らせてきたのだ。

——予定通り。

「準備は大丈夫か？ ハイド」

グンゾウは後ろを振り返りながら小声で話しかける。



「キシシ……」

ハイドが緊張した……ような、してないような面持ちで頷く。

グンゾウは林が切れている目立つ位置に立ち上がり手を上げる。神官服は白いため緑の中で目立つ。ゆっくり3秒を数えてから大きく手を振り下ろすと、ハイドが立ち上がり精霊魔法の詠唱を始める。

同様に小川の向こう側ではノッコが精霊魔法の詠唱を始めているだろう。

「マリク・キシシ……、エム・キシシ……パルク！」

——なんか呪文が変わってる気がするけど大丈夫なんだろうか？

ハイドの詠唱はいつもグンゾウ達を不安にさせるが、心配に反して普通に発動している。

ハイドの目の前、空中に描かれた魔方陣から光弾が発せられた。光弾は弧を描きながらゴブリン達を外れ、焚火に命中する。魔法の光弾だ。焚火の薪が跳ね散らばり、煙と灰が舞い上がった。

同じく向こう岸からノッコが放ったと思われる光弾もゴブリン達を外れ、焚火付近の地面に命中して、砂埃を巻き上げる。

——よし。上手くいった。

光弾はゴブリン達を外れたのではない。実は外してゴブリンを混乱させることが目

的だ。そもそも魔法の光弾は当たったとしてもパンチ程度の威力しかなく、ゴ布林相手に致命傷を与えることができないからだ。

グンゾウ達の読み通りゴ布林達は慌てふためき、自分達の武器を手に取ると散らばって立ち上がってこちらの林の中に逃げ込もうとした。

——ここからが本番。

「ビン」という弦が弾かれる音がグンゾウの頭上からする。白い光が煌めいて、鎖帷子を身に着けたゴブリンの頭に矢が刺さる。ゴ布林は手に持った槍を取り落とし、そのまま崩れるように倒れた。

「あたぁーりいー!!」

シムラが歓喜の声を上げた。

——上手い！ 残り4ゴブ。

正確には手斧を持ったゴ布林が2、剣を持ったゴ布林が2。手斧を持ったゴブリンの1匹だけ少し体が大きい。

「やるじゃねえか、シムラ、後でおごってやんぜ」

「やったねー、シムちゃん」

ガシャガシャと音を立てて、小川の上流側と下流側からそれぞれ林に隠れていたリョータとヨシノが飛び出てきた。

ゴブリン達の混乱は極まり、小川を渡って逃げようとする。小川を渡る途中で、向こう岸の林から3人が姿を現す。カズヒコ、クザク、ミッツだ。

ゴブリン達の足が止まる。小川の真ん中で兩岸から囲まれた形だ。

——数の上でも有利。相手は足が滑りやすい川の中。地の利もこつちが有利だ。

余裕の状況と判断したのか、リョータは手に持った両手剣ツウフェイスンダーを肩に担いでから、ゴブリンに向かって左手で中指を立てて見栄を切った。

「おら、こい、このクソ共が！」

——あー、ヤンキーって自分が強い状況の時程いきがるよなあ……。やだやだ。

再び弦の弾かれる音がして、ゴブリンの左目に矢が刺さり、手斧持ちの大きい方が小川の中に倒れる。川の水が「ぼしゃ」と音を立てた。

「あつはつはー。またまた、やってしまいましたー」

シムラが剽軽ひょうきんな言い方で叫んだ。

「あつ。こらあ！ やりすぎだシムラ！ 俺らにも残せ！ てめえ、おごつてやんねえぞ！！」

リョータが怒鳴ると、グンゾウ達の頭上、木の上からシムラが答える。

「あんだって？ はーい、とういまでーん」

——戦闘中なんですけど……。命がけなんだから、真剣にやって欲しいなあ……。で

も言えない。言ったら皆のテンション下がっちゃうし、今は流れを大切にしたい。

「みんな、まだ戦闘中だから集中しよう！ シムラ君！ 混戦になるから弓はそろそろ  
終わりで！」

カズヒコが声を出す。前衛5人に集中力が戻る。

——ナイス、カズヒコ。イケメンは伊達じやない。

ゴ布林達もこのまま殺られてたまるかとばかりに、3匹共叫び声を上げながら突撃をしてきた。斧を持っている1匹だけが向こう側へ、剣を持っている2匹がこちら側へ来た。

——実力的には丁度いいかな？

「へっへっへ、シヨータタイムだぜえ！」

向かってきたゴブリンの1匹に対して、リヨータが両手剣を横薙ぎに大振りする。剣ゴブリンAは両手剣をくぐって躲すとそのまま林、つまりグンゾウとハイド、シムラがいる方に逃げ込もうと走った。

「リヨータはいつつも大振りなんだよ。ゴブチンはちっちゃいんだから、コンパクトに戦わないと」

ヨシノが剣ゴブリンBと対峙しながら、リヨータに指摘した。ヨシノには余裕がある。

ヨシノの持っている武器は槍だ。穂も含めた長さはヨシノの身長よりも長い。180センチ程度ある。中段右前半身構えだ。

神官も杖や鎧による護身法を習う関係でグンゾウには分かる。構えが通常と逆だ。ヨシノは左利きなので右前半身構えを基本の構えとしている。武器の長さ、構えにおいて対剣術戦で圧倒的に有利な状況だった。

「俺は威力重視なの！ 大物ルーキーなんだから、大振り多少あっても、大目に見ろYO！」

リョータは自分の失敗を即興のラップにして歌った。

——リョータは頼もしい時も多いんだけどなあ。……まあ、姫にご登壇とうだんいただく機会を作ったから良しとするか。

林へ逃げようとしている剣ゴブリンAはグンゾウとハイドに気が付くと、いやらしい笑みを浮かべた。

——ゴブリンのこういう所が嫌いだ。やばい状況なんだから、とつと逃げればいいのか、ついでに弱そうな相手を蹂躪じゅうろうしようとする欲をかく。

「てやー！」

意外に低く落ち着いた声、でもかわいらしい女性の声が響く。

林の中から鎖帷子の上に神官衣を纏まとったアキが飛び出て、両手持ちしたロングソード

で剣ゴ布林Aに切りかかる。右上から左下へ振り下ろす。

完全に油断をしていた剣ゴ布林Aは驚いて、すかさず飛び退く。しかし、アキの剣を躲しきれず肩口からお腹の方までスパッと切られる。浅い傷だ。アキは興奮のせいか肩で息をしている。

急に現れたアキに困惑しているのか、それともアキの気迫に押されているのか、剣ゴ布林Aは後退<sup>あとずさ</sup>る。足が止まった。そこへリョータが追い付く。八双の構えで走りながら、踏み込みと同時に剣を振り下ろす。戦士が最初に教わるスキルの憤怒<sup>レイジブロー</sup>の一撃だ。

「ぐぎゃっ！」

蛙が踏みつぶされたような声を出して、剣ゴ布林Aの体は斜めに切断された。

「よっしやー！」

リョータは両手剣にこびりついたゴ布林の残骸を振り払うとヨシノの支援に向かった。上半身の無いゴ布林の下半身がゆっくりと崩れ落ちて、赤黒く光る内臓が大量の血液と一緒にドロツと地面に飛び出る。

アキはしやがみこんで、下を向いている。もしかしたら、嘔吐<sup>おうと</sup>しているのかもしれない。

——あれはそうそう慣れないよなあ。さて戦況はどうかかな？

ヨシノは剣ゴ布林Bと直角の戦いを進めていた。無傷だ。直角というより、むしろ

練習をしているように見えた。剣ゴブリンBの初動を見切って武器を槍で叩いたり、多段突きで牽制して剣ゴブリンBを小川の中まで後退させたりしていた。また、逃げられないように脚を中心に攻撃を加えており、剣ゴブリンBは既に走って逃げることはできそうにない。

——ヨシノも結構ドS<sup>エス</sup>だよな。怖い怖い。リヨータの支援は必要ないかも。まあ、リヨータは行きたいだけか。

むしろ1対3のはずのカズヒコチームの方が怪しい雲行きだった。いつの間にか神官のタイチが川岸に来ている。誰かが傷ついて光魔法が必要になったのかもしれない。バスタードソード持ちのカズヒコは上手く手斧ゴブリンと渡り合っている。

しかし、ミッツは完全に腰が引けていて、前に出ようとするのだが、手斧ゴブリンに睨まれては後ろに下がっている。さらにクザクに至ってはあまり参戦していない雰囲気だ。ロングソードは構えているが、全然攻撃に出る気配がない。大きい聖戦士の置物といった体だ。

——どうしよう？ 全部うちで狩っちゃうかな？

グンゾウが考えていると、ガサガサという音がして木の上からシムラのイガグリ頭が目の前に降りてきた。

「あ、シムラ。お疲れ。皆中<sup>かいちゆう</sup>だったね」

「あはは、まぐれですよ」

シムラはまぐれと言ったが、間違ひなく謙遜けんそんだった。小隊パーティーの役割を決める際に体格の小ささを気にしてかシムラは自ら後衛かりゆうどの狩人を志願した。また弓はできそうな気がするという理由もあつたそうだ。実際、狩人ギルドから戻ってきたシムラの弓の命中率は異常に高かつた。時間さえかけて集中すれば、直径が40センチくらいの止まつたのであればほとんど命中させてしまうのだ。それはゴブリンの頭のサイズと近いため、当小隊の中で必殺の狙撃者としての地位を確保しつつある。

「ちよつと剣鉈けんなたの練習をしてきます」

シムラは剣鉈を抜くとカズヒコ小隊の方へ向かつていった。

——シムラはわかつてるなあ。

「アキ姫みを看てくるけど、ハイドはどうする?」

グンゾウがハイドに話かけた。

「キシシ、グンゾウの後ろに……、キシシシ」

「はいよ」

グンゾウは慎重に歩を進めながら、アキの方へ林の斜面を降りていった。

「よっしや——————快っ勝——!」



リョータが雄叫びを上げた。

「よし！ 野郎ども！ お宝の回収だ！」

リョータの指示でシムラ、ミッツ、タイチ、チヨコ、ノツコがゴブリンの死体からゴブリン袋や装備を回収している。得られたお宝は後でカズヒコチームと山分けになる。

「せつかくゴブチンと槍の練習をしたのに、リョータが狩つちやうからな！」

「何言つてんだ、ヨシノ、いじめは良くないぞ」

「いじめじゃないよ。練習だよ。あたしはゴブチンを育ててたの。焼肉と一緒に。あたしが焼いて、育てた肉はあたしが食べたいでしょー？」

結局ヨシノが相手をしていた剣ゴブリンBはリョータが仕留めてしまった。ヨシノは獲物を横取りされて少し悔しかったようだ。

——……焼肉つて。わかるけど。

グンゾウはしゃがんでいるアキに話しかけた。

「大丈夫だった？ 怪我はない？」

「はい。大丈夫です。ちよつと気持ち悪くなつてしまつて」

「まあ、そうだよね」

アキの元々色白の顔は血の気が引いてますます白くなつていた。

「これじゃ、ダメですよ。しっかりしないと。」

アキは下を向いて、少し落ち込んでいるようだ。

「落ち込んでる？ 大丈夫だよ。まあ、良くも悪くもその内慣れるだろうし」

「はい……」

アキの返事はいつも語尾が小さい。

「ほんと、大丈夫だから。作戦通りばっちりだったじゃん？」

「はい……」

——んー。難しい。

今回の戦闘で得た戦利品は9シルバーと綺麗な石が3個、何かの牙が2本、そしてゴブリンの装備品だった。儲けの良い戦いだった。戦術が上手くはまり、戦闘自体が楽だったこともある。

ゴブリンの装備品は重い割には屑鉄くすてつ扱いで、買取価格が数カパーにしかないことがあるので、あまり持ち帰りたくなかった。しかし、貧乏な見習い義勇兵暮らしなので全員で分担して持ち帰ることに決めた。

街で集めた情報よりもゴブリンが持っている貴重品が多いように思われた。一部ではゴブリン狩りを一生し続けても正規の団章を得ることはできないとも言われている。

「あの、お金は要らないのでこの盾使ってもいいですか？」

アキが皆の前で遠慮がちに申し出た。アキは聖騎士だ。聖騎士は仲間を守ることを戦いの中心に据えているので、普通は盾を常用するのだが、お金が少くまだ盾を持っていなかった。

ボス格らしきゴブリンが持っていた盾は小さな円形の盾だった。裏は木製だったが、表面は金属で覆われていた。

「あ、クザクさんが使うなら、それでも」

「……いや、要らない」

クザクはぼーっとしてたようで、少し間が空いてから答えた。クザクも聖騎士だ。同じく盾は持っていない。

「アキちゃん、お金や換金率が高いものはちゃんとみんなで分けよう。装備品とかは必要な人がいれば使って、残りは屑鉄屋に売って分けよう。それでいいだろ？ リョータ」

カズヒコがアキにフオローを入れた。

「おう。うちは全然いーぜ」

リョータが答える。

「ありがとうございます！」

アキが汚れた盾を抱えて嬉しそうにお辞儀をした。片手剣と盾を持って戦う守護剣

闘術という系統を身に着けるつもりなのかもしれない。

——笑ってた方がかわいいよなあ。

グンゾウの顔もつられて嬉しそうな顔になった。

「キシシ、グンゾウ、スケベ」

「え？　なんで？」

グンゾウはハイドに突っ込まれて訳わからず狼狽うろたえてしまった。

——こいつはいつも俺の後ろにいるのに、顔が見えるのだろうか？

「しかし、今のはすごく上手くいったね。5匹は初めてだったけど、これならそろそろ行けるんじゃないかな？」

カズヒコはリョータに視線をやった。

「おう。ダムローな。俺はいつだって良かったんだぜ。俺の、俺様の實力ならゴブリンなんて楽勝だぜ」

リョータが愉快そうに呵呵かかと笑った。

「そうはいかないよー。命かかってるんだから、真剣に練習しないとー」

ヨシノが調子に乗っているリョータに水を差した。

「今のだってグンちゃんが立てた作戦が上手くいったからでしょー」

——お、褒められた。嬉しい。

リョータは少し渋い顔をしたが、すぐに笑顔に戻り。

「まあ、確かにオッサンの作戦はなかなかだ。しかーし、しかし、しかし、それは主に俺を中心とした俺達の実力があつてこそだぜ？」

「オッサンじゃない、せめて名前で呼べ」

グンゾウがため息をつきながら言う。ヨシノは笑顔だが、少し呆れた顔をしていた。

「ああ、悪かったな、グンゾウおじさん」

リョータは再び呵呵と笑った。

——次の作戦はリョータに死地を割り当ててやろうかな？

「まあまあ、じゃあ、ダムローは明日目指すとして、今日はもうひと稼ぎしよう」

カズヒコが上手いこと話をまとめて、全員で「おー！」と掛け声をあげた。

グンゾウは空を見上げた。雲はほとんどなく、空は抜けるように蒼い。太陽が頂点に近い場所にあつて、燦々さんさんと光を注いでいた。

——明日は遂にダムローか。良くここまで来れたな。

あの夜、グンゾウ達がこのグリムガルに目覚めてから20日余りが経っていた。その道程を思い出してグンゾウは少し目を閉じた。

## 6. ドーリーで朝食を

カライン、コーン、カライン、コーンと遠くで鐘が響く音がする。

——何だろう？ 結婚式？

グンゾウは何かに足をトントンと突かれる感覚がした。

「オツサン、起きろ、行くぞ」

「んあ？」

目を覚ますとリョータがグンゾウの足を足で軽く蹴っていた。

いつの間にか壁に寄りかかって座ったまま寝てしまったようだ。

——もうちよつとましな起こし方無いのか。

「年寄りには早起きじゃねーのかよ」

リョータが朝から小うるさいことを言った。

「ああ、だから若いつて証拠だな。おはようリョータ」

グンゾウは立ち上がると、両手を上に伸ばして固まって肩と背中中の筋を伸ばした。

——口ぐらいゆす濯ぎたいな。

「キシシ、年寄りも寝坊はする、キシシキシシ」

ハイドは基本無視でもいいと思ったが一応「おはよう」と挨拶した。グンゾウは寝起きの朦朧とした頭で周りを見渡す。

義勇兵団事務所だ。寝て、起きれば悪い夢から覚めていると思っていたが、どうもここは現実のようだ。

「おら、起きろ、イガグリ！」

次にリョータは床に転がっているシムラの腹を軽く蹴つ飛ばした。シムラは「うっ！」と呻いたまま、睡眠に戻っていった。もう一回蹴られる。今度は少し強め。

——死んだ？ 俺の方がましな起こされ方だったのね。

「カズヒコが、もう朝だから街に繰り出すつとよ」

リョータは後ろ指で義勇兵団事務所の出口を指差した。既に多くが事務所の外に出て、街の風景を見ているようだ。

カウンターではブリちゃんが突つ伏して寝ていた。割れた顎にどんな風に髭が生えるのか見てみたかったが、朝からおぞましいモノを見ることがもないと思ったので美しいものを向けることにした。

「ほーら、アキちゃん起きてー、起きろー、朝だぞー」

ヨシノがアキの肩を揺すって、起こそうとしていた。アキもグンゾウと同様に壁を背にしながらかに座って丸くなって寝ていた。

「ほーら、よしよしよしよし、外の景色がきれいだよー」

アキの顎の下に手を入れて、耳の裏にかけてくすぐって起こしている。また耳の穴にふうーつと息を吹きかけている。

——俺もヨシノに起こして欲しかった……。

「あああ。起きるから、やだやだあ」

アキは手をブンブン振り回すとすくつと立ち上がり、フラフラと歩いて出口の方に向かっていった。扉の柱に「ゴン」とぶつかると、そのまま座り込んで寝てしまった。

出口からカズヒコがひよこつと顔を出して、アキの存在に驚いた後、グンゾウ達に話しかけた。

「じゃあ、外に集合しようか。井戸もあるし、顔も洗えるよ」

湧水している自噴井戸があり、顔を洗い、うがいをする目覚めだ。

立ち上がって周りを見渡すと、グンゾウの目にも街の風景が飛び込んでくる。昨夜の移動で分かっていたが異国の田舎街という感じだ。空は青く、木々は豊富で、道が土でできているので道端には花が生えている。小さな蝶が2匹ひらひらと楽しそうに飛び回り、鳥は天高く舞っていた。一部しか見ていないが、水彩画のように美しい街並だった。旅行に来たようで自然と笑顔になった。



井戸水を少し飲んだら、とびきり美味しかった。

「おはようございませす……」

孵化する時期を間違えた蚊が秋に成虫になり、寒くて元氣なく羽ばたいているような声でアキが挨拶をしてくれた。

「あ、おはよう」

アキが柱にぶつけて赤くなつたおでこをさすりながら、井戸で隣に並んだ座つた。目はまだ閉じたままだ。

思わず隣でアキを観察してしまふ。本当に肌の白い子だ。井戸水で顔をパシヤパシヤと洗つた後に、口に水を含んで、そのまま……寝る。

——朝のアキは面白すぎる。この子は朝が苦手なのか？

「おーっ！ すげっ！ 井戸水湧いてるやん！」

「そうだろ？ へっへっへ」

シムラが何故かミツツに連れられて井戸に騒がしくやってきた。頭だか顔だかわからない所までバシヤバシヤと洗う。その後、ゴクゴクと喉を鳴らして水を飲み始めた。

「水、うまつ！」

「だろお？ へへへ」

——朝からテンション高つ！。

シムラはグンゾウにも話しかけてきた。

「グンゾウさん、おはようございます！　なんか、みんな集まってるみたいなんで行きましょう！」

「おはよう。シムラ。今行くから、待っててね」

ちらつとアキを見たら流星に騒がしくて起きたようで、目がパッチリと開いていた。それでもいつも伏し目がちだけれど。

義勇兵団事務所の前には、グンゾウ含む4名以外は全員集合しており、思い思いに話したり、ストレッチ等をしていた。

「じゃあ、昨日の説明通り、2班ふたに分かれて、情報収集をしよう。昼過ぎには1回集合で」カズヒコが言った。するとチヨコが手を挙げて、拗ねたような口で聞く。

「……何を、情報収集すればいいんですか？」

「そ、そうだよね」

カズヒコも頭をひねってしまった。

——ここは大人の出番かな？

グンゾウは手を挙げてから発言した。

「まずはオルタナの地理を知る必要があると思う。主な店や市場、病院とか銀行とか役所の場所を知ろう。次にお金のこと。この1シルバーだとか、1カパーだとかついていく

らの価値があるのかわからなくない？ 10シルバーで何日暮らせるのか？ あとは誰か義勇兵宿舎つてのを下見に行く必要があるかな？ 今日からの宿困るでしょ？

トイレとかお風呂とか風土病とか衛生状態も知りたいけど……」

グンゾウが発言をすると皆に「おおー」と感心される。

「さすがオッサン！ 俺のチームの参謀だ。俺のチームのな！」

リョータに力強く肩をバンバンと叩かれる。

——いつからこいつの参謀なのか？ 昨夜、戦力外つて言つてなかったか？

「グンゾウさんの意見はすごくいいと思う。他には何かあるかな？」

グンゾウの隣で、ハイドが手を挙げる。

「キシシ、職業システムについて、キシ知る必要がある。キシシ。義勇兵は……な何らかの職業に……就いているはずだから。フキシシ、こここのオルタナで何の職業に就けるのかキシシ、フシ、調べないと……修正パッチ前で有利な職業もあるはずだしキシシ」

全員唾然あぜんとしていた。そもそもハイドは何を言っているか聞きづらいことがあるが、今のは何を意味しているか分からなかった。

全員の頭に疑問符が浮かんだままの状態でハイドは話を続けた。

「キシ、あああ、あとは戦闘システムについても調べないとキシシシ。小隊パーティーが何故3と6人……なのか、ああと、魔法の種類……とか。死んだら生き返れるのか……とかキシシ

シシ。修正前の神スキルとかないかキシシ」

——何を言ってるんだ？ 全然分らないぞ。魔法？ 死んだら生き返れる？ 修正パッチ？

カズヒコも困ってしまったようだ。返事に戸惑っている。

「あー、じゃ、じゃあ、僕の班はお店とお金関係、あと衛生状況も調べるよ。リョータ班で宿舎の下見と職業と何だっけ戦闘システムつてのを調べてきてくれない？」

——あ、ずるい。結構策士だよなあ、カズヒコ。

「だああらあー、わっかんねーんだよ、その戦闘システムだとかよー、馬鹿にしてんのかお前？」

リョータとハイドの顔の近さはあと2センチ位しか離れていない。お笑いならもうそろそろキスしてもいい距離だ。

良くわからない調査を押し付けられたヤンキーリョータが切れてハイドに脅しをかけているのだ。

ハイドの顔は汗だくになり、鼻の穴をびくびくさせている。「フヒフヒ」言いいながら屈せず反論する。

「フキシ、キシシ……、で、でも、これは僕が正しい……。キシ、ルールを把握した者が

世界を制する……わからない奴が馬鹿」

「うつせえ！」

リョータがハイドに頭突きを食らわす。

「やめなよ、リョータ」

ヨシノがリョータの腕を掴んで止める。

「暴力はダメだよ」

「何だよ、こいつが……」

リョータがハイドを指差し、子どものように言い訳をしようとしたが、ヨシノが「めっ！」っときれいな顔で睨にらんだのでリョータは「ちっ！」っと舌打ちをしてから黙ってしまった。

——子どもの喧嘩に口を出すか。

グンゾウは助け船を出すことにした。

「わかった。こうしよう。ハイドとシムラと俺で職業とかその辺りを調べるから、リョータはヨシノとアキを連れて、2人を護衛しながら宿舎の下見に行くというのはどうだい？ 宿舎の場所すら知らないしね、俺達」

リョータは少し不満があったようだったが、女の子に囲まれて移動するのはまんざら悪い気分でもないらしく、次第に少し鼻を伸ばしながら了承した。

「さてつと……」

グンゾウはどうしようか考えた。

——しかし、義勇兵団つて基本的な事すら何も教えないってどういうことなの？

昨夜、カズヒコやリョータとブリちゃんからもう少し情報を引き出せないか色々働きかけたが、ブリちゃんは完全に知らぬ存ぜぬで、はぐらかされた。挙げ句の果てにカズヒコは危うくキスされそうになっていた。

——とりあえず、人が多く集まっている場所に行かないと駄目かな？

リョータは女の子2人と行動になるので、あからさまに楽しそうな雰囲気でどっかに消えていった。

辺りを見回すと遠くに高い塔の頂が見えた。この世界の太陽が東から昇るという前提であれば、北方向になる。

「とりあえず、あの塔に向かってみよう。行き道でハイドの話をちゃんと聴くから、省略なしで、詳細に説明してくれ。」

「キシ……」

ハイドの話を要約するところだ。

ハイドに強く残った記憶の中では、自分は「MMORPGというネットゲーム」(意味

不明な単語)を一日中やっていた。その「ネットゲーム」とは仮想の人生を生きる遊びで、その仮想の人生の仮想の世界はこのグリムガルという現実に似ているという。その「ネットゲーム」の中では、人は職業クラスに就く必要があり、職業にはスキルというものが存在する。時間の経過によって神様が職業やスキルの強さを変えるので、一番有利な職業やスキルを検証して、身に着け、強い敵を狩るのが英雄と呼ばれる人らしい。ハイドは徹底した検証で常に英雄の地位にいたと記憶しているということだ。なお、その世界で人は死ぬことはなく、戦闘不能になった場合は本拠地に戻され、少し不利益がある位のペナルティ罰で復活できるとのこと。

「……なるほど。にわかには信じがたいが、でもハイドの言っていることと、この世界に類似性があるならば、有利に生きていけるかもしれないな」

グンゾウはハイドを見つめた。

「キシ……必ず最強になれる。キシキシシ」

ハイドは自信に満ち溢れた顔でグンゾウを見つめ返した。

「じゃあ、とりあえず、その職業ってやつを探さんといけへんてことですね」

シムラが目標を明確にした。

「そうだ、イガグリ、キシシ」

「われがイガグリゆうな！」

ものすごい速さでシムラがハイドの頭をひっぱいた。ひっぱたかれたハイドの眼鏡が外れて、つるが耳にかかったままプラプラしている。シムラは満足そうににんまりした。

「今のは良いツツコミやったで」

ハイドは目を白黒させながら、両手を空中に漂ただよわせ眼鏡を探した。

「めがね。めがね。」

「ひゃー、きれいな建物やなー」

シムラが目の前の建築物を見上げながら興奮している。

目の前には石造りの高い建物が立っている。周りは石畳が整備された円形の広場になっっている。どうもここがこの街の中心のようだ。

石造りの建物は、その石材のひとつひとつに彫刻がしてあり、美しい文様を魅せている。また窓枠や洋燈ランプ、周囲に張り巡らされた鉄柵すらも美しい金属装飾が施されている。特にグンゾウは鉄柵に付いている忍び返ししのびがしの意匠が気に入った。妖精のような生き物が槍を持っている意匠になっっている。しかも全ての妖精の姿形が違ちがうのだ。意匠の共通点としては、各所に六芒の文様が刻まれている点だ。周囲の木々もよく剪定せんていされ、建物と周囲の風景が合わさってひとつの芸術品のようになっっている。



——お城か、教会か？ 王様とかが住んでいるのかな？

広場には鎧兜を身に着けて、槍と盾で武装した衛兵らしき男達が配置されている。また、中心の建物の門も衛兵が嚴重に警備をしている。

グンゾウ達が広場の真ん中でぼんやりと建物を見上げていると、衛兵がガシャガシャと近付いてきた。

「おい、お前ら何をして……らっしやるのでしようか？ えーつと自由都市ヴェーレからの使節の方ですか？」

近付いてきた兵士はシムラやハイドを注意しようと来たが、グンゾウの服装があまりに正装なのを見て何か勘違いをしたようだ。衛兵はグンゾウのことを怪訝けげんそうに見つめている。

「ああ、すいません。使節でもなんでもありません。この街の住人でもない、ただの旅行者です。美しい建物だと思って、眺めていたのです。」

それを聞いて衛兵は安心したのか急に胸を張り、居丈高な態度に戻った。

「美しくて当たり前前である。ここは天望楼。辺境伯閣下の居所きよしょである。用の無きものは早々に立ち去るが良い。」

「ああ、はいはい。」

厄介事に巻き込まれるのは避けたいため、グンゾウは広場を離れようとした。

「キシシ、この街に神殿はあるか？」

ハイドが衛兵に対して、急に話しかけた。

「そんなことも知らんのか。光明神ルミアリスの神殿はオルタナの北区にある。天望楼程ではないが、立派な建物なのですぐわかるだろう。……西町貧民街スラムの地下に暗黒神スカルヘルの神殿もあると聞いているが、私は知らない」

「キシシ、十分……」

ハイドはお礼も言わず立ち去った。グンゾウとシムラは念のため「ありがとうございます」と言っておいた。

——思わぬ情報が手に入ったな。

グンゾウ達は天望楼と呼ばれた建物を挟んで反対側、つまり北側へ向かった。光明神ルミアリスの神殿に向かう目的もあったが、天望楼前の広場にいた頃から北側は人々の動きが活発で気になっていたからだ。

「グンゾウさん、すごいっすね、これ、テンションあがるわー」

シムラが目をキラキラさせて通りを見ている。

天望楼を北側に行った大通りでは両側に屋台や露店が建ち並び、武器、防具から日用品、雑貨、衣類、食料品、檻に入った動物まで様々なものが売っていた。本当に多くの

ものが売っていて、見るだけで楽しい気持ちになる。売り子の声も大きく、朝とは思えない活気で賑わっている。

——ここが市場かな？

売り物には値札らしきものが付いていて、4Cとか3Sとか書いてある。4Cと書かれていたのは美味しそうな肉の串焼きだ。3Sと書かれていたのはそれなりに立派な両刃の短剣だった。

——このCつてのがカパーで、Sつてのがシルバーじゃないのかな？ 1シルバーが何かパーなのかが気になるところだな。

「キシシ、グンゾウ、腹減った……キシシ」

ハイドに言われて気が付いたが、グンゾウもかなりお腹が空いていた。昨夜から全員何も食べていなかったたので、この市場の匂いは刺激的だ。肉の焼ける野生の匂いや、パンの焼けた香ばしい匂いが鼻の粘膜を刺激して、伝わった電気信号が脳みそにピンピンと響いている。一方、胃袋はすっかり空っぽで、何か食べ物を入れて欲しいという信号を発している。

「確かに……お腹空いたな。何か入れてから神殿に行こうか？」

「賛成！ 賛成っす！」「キシシ、同意」

シムラとハイドもすぐに同意した。

「じゃあ、何食<sup>く</sup>おつか?」

グンゾウは笑顔で質問した。

相談の結果、肉串とクツペ（バゲットの一種）で作ったサンドイッチ、<sup>ひとり</sup>1人につきしめて8カパーの朝食にしようと決まった。

——肉とパンの焼ける匂いはこの空腹には暴力的だよなあ。

しかし、購入しようとした段階で問題が発生した。

「そんな大きいお金じゃ、お釣りがまだないよ。」

4カパーの肉串を1シルバーで払おうとしたグンゾウ達に串肉ドーリーという屋台の店主が言った言葉だ。店主の説明では1シルバーは100カパーなので、96カパー×3人分もお釣りが必要になってしまふとのこと。とりあえずグンゾウが全てを立て替えようとしたが88カパーもお釣りはないとのことだった。ついでに「義勇兵はそんなんばつかりだな」と意味不明なことを呟いていた。

店主は親切にも1カパーの現物を見せてくれて、両替所の「ヨロズ預かり商会」について教えてくれた。1カパーは見習い章に似ているが、それより一回り小さい銅貨だった。また、ヨロズ預かり商会は天望楼の広場に出るから南に通る3本入ったところにあるとのことだった。

「キシ……、プレイヤーに不親切だな……修正。パッチが必要だ」

ハイドが少し苛立った風に知らない言葉を呟いた。

「まじかあ……」

シムラは相当ショックを受けているようだった。グンゾウ達は最高潮に高まった食欲をしばらく抑えなければいけなくなってしまった。

「グンゾウさん、無理っす。俺には無理っす……」

市場を天望楼まで引き返す道のり、シムラはぶつぶつと同じことを繰り返していった。

そこに救いの女神様……と神様の6人組が現れた。

グンゾウの上着の裾が引つ張られる。

——ん？

振り返るとカズヒコパーティ小隊のチヨコがそこにいた。大きい目だ。

「ども」

チヨコがちよつとぶつきらぼうにぺこつと頭を下げる。ボブカットが頭の動きに合わせて揺れた。

「(いち)ち(ら)こそ」

グンゾウも頭を下げる。頭を上げるとチヨコの背後からカズヒコが手を振りながら

追いかけてきた。

「グンゾウさん。シムラ君とハイド君も」

グンゾウ達を広場で見かけたチヨコがグンゾウ達を追いかけて捕まえてくれたようだ。

カズヒコ達は先に市場で情報収集をしていたらしく、ちようどヨロズ預かり商会に行つてから市場に戻つているところだった。しかも、カパーへの両替が必須と感じた気の利くカズヒコはグンゾウ達の分まで小隊<sup>パーティ</sup>1人1シルバ<sup>バ</sup>らずつ余分にカパーへ両替してくれていた。

「おおおおお！　これで串肉が食えるやん!!」

シムラは本当に涙を流して喜んでいた。

「ありがとう、カズヒコ君。助かったよ」

グンゾウがお礼を言うと、カズヒコは「いえいえ」と謙遜した後、キヨロキヨロと周りを見ながら「リョータは？」と尋ねてきた。

「リョータは男を置いてきぼりにして、女の子2人と楽しくデート中」

グンゾウは感情を込めずにさらりと答えた。

カズヒコの目が少しだけキラリと光った……気がした。

——やはり、カズヒコには女たらし要素を感じるぜえ。

市場で歩き食べをしながら、そこまでの情報交換をした。カズヒコ達は次に義勇兵の溜まり場になっているという「シエリーの酒場」に行ってみるとのこと。

シエリーの酒場の後も、カズヒコ達は市場を中心に情報を集めるとのことだったので、グンゾウ、シムラ、ハイドの3人分3シルバーだけ300カパーに両替してもらい。残りはカズヒコ達がリョータ達に会った時に渡してもらったことにした。

「じゃあ、我々はルミアリス神殿に行くので」

グンゾウ達3人は手を振り、カズヒコ達と別れて市場を北の方に抜けて行った。

## 7. ハイド イン ルミアリス神殿

それはオルタナ北区にある丘の中腹に鎮座していた。光明神ルミアリスを祀る神殿、「ルミアリス教団オルタナ辺境本部」、通称「ルミアリス神殿」だ。

「ほえー、なんや大層な建物が沢山やなー」

シムラが感嘆の声を上げている。素直で良い性格だとグンゾウは思った。今、グンゾウ達はルミアリス神殿の目前まできている。

広場で衛兵が言っていた通り、北区に入ってから通行人に道を尋ねたら、あつという間にルミアリス神殿の場所を教えてくださいました。ついでにオルタナで神官になる人は、大体ここで修行をしているということも教えてくださいました。

ルミアリス神殿は丘の中腹に点在する白く荘厳な複数の建物がそれぞれ一体となつて構成されている建築群である。主立った建築物としては、ルミアリスが降臨するとされる本殿「光明殿」、邪な心を全て明るい光で照らすような白い大理石で作られた「白石門」とその周辺にある森、礼拝を目的とした「礼拝堂」、神官達が寝泊まりしている「宿泊棟」、神の祝福を受けた神具が奉納されている「奉納殿」、ルミアリス教の研究及び教育を目的とした研究機関（通称「学院」）、貧困や暴力、病気により行き場を無く



した人が一時的に頼る「避難所」があった。その他にも部外者が立ち入ることのできない、儀式の時だけに用いる「神舞殿しんぶでん」なるものもあるらしい。

「グンゾウさん、なんか屋台出てますよ。饅頭まんじゅうとか売ってるんですかね？」

シムラが門前通りをキョロキョロしながら歩いている。門前通りはさほど人通りはなかつたが、ポツリポツリと屋台が出ていた。

「目的を果たすのを先にしよう。さっきの人の話じゃ、ここで神官になる修行ができそうだし」

「キシシ、とにかく早く建物に向かう、キシ……」

そう言うのとハイドは、足早あしはやに白石門へ向かった。目的地が明らかになつてからは、ハイドの歩みに迷いが無かつた。

目の前に、白石門が見えてくる。白石門は良く磨かれた大理石で出来た大きな門だ。門の上部にはルミアリスのシンボルであろう六芒の紋様が刻まれ、中心には寶石のようなものが埋め込まれている。

門の直前でグンゾウとシムラは立ち止まり、見入みいってしまった。

門の周りは木々が森のように茂っていて、門の奥は暗い。暗い斜面に石の段があるようだ。森に光を遮られた奥の暗闇と、光り輝く前面の白い大理石のコントラストが、白石門の神々しさを強調する造りとなつている。とても邪悪な心を持ったまま通る気に

はならない。頭を垂れて門を通りたくなく霧囲気が漂っていた。

暗闇のさらに奥は森が切れていて明るい。斜面に等間隔で並んだ石の段が続き、まるで天国へ続く階段を想起させる。

——「レッドツエッペリン」だな。

グンゾウは意味不明な単語が思い浮かんだが、それが何か分からず忘れることにした。

立ち止まっているグンゾウとシムラを尻目に、ハイドはプリプリとお尻を振りながら、せかせかと速足で白石門をくぐって行った。ついでに門をくぐる際に大きめの湿った感じの尻おならを放っていた。

——不信心な奴だなあ。罰ばちが当たるぞ。

「ハイド、くせーぞー」

シムラがゲラゲラと笑いながら追いかけた。

グンゾウもハイドに声をかける。

「ハイド、そんなに急いで、おっきいのもも漏れそうなのかー？」

2人はグンゾウから見えない位置まで行ってしまった。遅れてグンゾウは白石門をくぐり、森の道に入る。体感温度がグッと下がり、汗がひく。湿った土の匂いがした。今まで五月蠅うるさかった虫の音が静かになる。

突然、グンゾウの耳に誰かの声が聞こえる。

「……………」

グンゾウは振り返る。振り返った先には今くぐった白石門があるだけだ。

「……………」

また、誰かの声が聞こえた。聞き覚えのあるような懐かしい声。

——誰？

周りを見回したが、特に誰も見あたらなかった。

「誰かいますかー？」

グンゾウは薄気味悪くなって、誰も居ない空間に話しかけた。

——幻聴……………かな？ おかしな事だらけだから。仕方ない。

「グンゾウさん！ ハイドのやつ、ほんまに漏らしそうみたいっす！」

シムラが血相を変えてバタバタと戻ってきた。

——おお、それはまずい。ハイドの漏らした下着なんて洗いたくないぞ。

「今行く！」

グンゾウは冷静になって考えれば行ってもどうしようもないと思っただが、シムラと一緒に石の段を駆け上り、ハイドの後ろを追っかけた。

いつの間にか、夏の虫が大きな声で鳴っていた。

カライン、コーンと時間を知らせる鐘が3回なった。

グンゾウ達は学院の外にある共有の便所トイレの前にいる。ハイドの排便は大惨事にならずに済んだ。

——心の底から良かった。

しかし、便所を眺めているグンゾウの中で不安が高まりつつあった。

——これは……。何が問題なのか分からないけど……ものすごい不安。

グンゾウが不安になっていたのは便所の清潔さであった。

見ると下水道の上に縦横30センチくらいの穴の開いた床板が置いてあったただけだ。板があるだけいいのかもしれない。もちろん上流の人が排泄したら、排泄物が自分の下を通過していくのを目撃することになる。排泄の狙いが外れて、穴の縁にオマケが残っているケースも多分にある。

また、お尻を拭く道具も多種多様だ。ボロ紙、ボロ布、大きめの葉っぱ、藁わら、木のヘラ、割れた陶器などがトイレに備えてあった。

ルミアリス神殿内の便所が特別不潔だというわけではない。

グンゾウは義勇兵団事務所で小さい方の便所しか行っていない。ブリちゃんに「そこでしなさい」と言われた場所は、事務所の裏手の下水道に直接出すだけだった。大きい

方は一応木の板で囲われた個室スペースが有った。中を見ていないが同じレベルなのかもしれない。その時は、ブリちゃんがどっちに入るかだけが気になっていて、個室の中の設備については見ることにすらしなかった。

——なんだろう。俺はこれで排泄ができる気がしないぞ！ これ……どうしたらいいんだろう？

「ハイドさあ……どれで拭いたの？ 藁とか？」

グンゾウは、排泄が無事完了し、すつきりした顔のハイドに遠慮がちな声で聞いてみた。

「キシシ、手で拭いて、洗った」

絶句。

「うおっ！ きたねー！ ぜつつつつてえ、俺に触るんじゃねーぞ！」

シムラが叫びながら、ハイドから5メートル位ジャンプで下がった。

「キシシキシシシ、今度みんなにおにぎりを作る、ふっふふ」

グンゾウは目を閉じてから、天に祈りを捧げた。

——ルミアリス様がいらっしやるなら、許してください。今からこの汚物ハイドを殺します。

深呼吸をひとつ。排泄物の匂いがした。

——あの便所のヘラは洗って再利用なのかなあ……。あれを使うのは絶対やめよう。荘厳で白く美しいルミアリス神殿におけるほとんどの記憶が便所についてなのは残念極まりないが、ルミアリス神殿で聞き込みを行うことで、多くの情報を得ることができた。

学院という場所が義勇兵団を受け容れる窓口の機能をしているようで、受付にいた女性のの神官らしき人は丁寧に説明をしてくれた。まず、ハイドの予想通り、ルミアリス神殿では神官と聖騎士という2つの職業クラスに就くことができるとのことだ。どちらの職業とができる。なお、規定修練を受けるためには食費、宿泊費、神官服や装備費込みで8シルバーを寄進する必要があるとのこと。市場で見た物価から考えて、装備品を含めると結構リーズナブルかもしれない。

——7日間しか訓練しないのか……。大丈夫かよ。  
とグンゾウは思った。

その後もハイドの質問が的を射っていたので、職業の特徴についても聞くことができた。

神官は光魔法と主に杖や鎚による護身法を中心に覚え、小隊パーティの傷を治したり、戦闘の

支援を行うとのこと。光魔法は戦闘で負った負傷を瞬時に治すことができる、正に神の奇跡と呼べるものらしい。実際に見せてもらったわけではないが、もし本当だとすると小隊になくてはならない職業だとグンゾウ達は感じた。神官は光魔法を多く使いこなすことができる反面、身に着けるものや行動に制約がかかるようだ。例えば刃が付いた武器を扱うことはできない等だ。

次に聖騎士は光魔法と杖や鎚による護身法、また重装備で片手剣と盾を持って戦う守護剣闘術を覚え、小隊の盾となつて戦う戦士であるとのこと。聖騎士の方が神官よりも職業として優れているように思えたが、光徳の関係で使える光魔法に制限があったり、自己の回復はすることができない等の制約があるとのこと。あくまで専門は小隊の守護役で、光魔法は専門の神官に任せ、支援に徹する必要があるようだ。こちらもとても重要な職業であるようにグンゾウ達には思えた。

ハイドはふんふんと鼻を鳴らしながら真剣に説明を聞きいていた。腑に落ちることがあるのか、時折「なるほど、キシシ」等と強く領うなずいたりしていた。「キシ……、なななんて小隊は3〜6人がお多いんだ？」

ハイドが質問をすると、受付の女性神官は嬉しそうに説明を始めた。「大事なのは3ではなく、6です！ 1つの小隊は6人であることが望ましいのです。それはまさにルミアリス様の奇跡、御加護ごかご、愛なんです」

女性神官の目がキラキラしている。

——かご、あい……、なんか聞いたことあるような、全然昔の話のようないけ？ 何だっ

グンゾウが関係ないことを考えている間も、女性神官の話は盛り上がっていく。

「ルミアリス様の象徴である六芒をシンボルご覧になったことあるでしょうか？ 当然ありますよね。ルミアリス様の六芒を見たことないなんて、この世界に存在する知的生物ではないませんものね。ナメクジくらいですよ。いやナメクジにも失礼ですね。そう、あの野蛮な暗黒神の信者くらいですよ。あんな西町貧民街地下のジメジメした場所に神殿があるような、薄汚い……あれ？ 何の話でしたっけ？」

「そうそう、ジメジメしている場所にはナメクジ出ますよねって話ズレとるやないかいー！」

興奮して話す女性神官にシムラが突っ込みを入れる。

——いまいちなノリ突っ込みだったな。

シムラも自覚しているのか「やつぱり記憶喪失のせいやで」とかぶつぶつ言っている。「キシ……、で、ろ6人小隊と……ろ六芒の関係は？」

——おお、ハイドがまとも。

「ああ、すいません。ルミアリス様への敬愛が行き過ぎました。神官がある程度の光徳



プロテクション  
を積むと光の護法という光魔法が使えるようになります。これを一度にかけられる範囲がルミアリス様の六芒と同じ6人までなのです」

「キシシ……なるほど。……しし神官は6人に1人はひ必要と……。ふっふふ」

「ハイド。でも、神官は制約が多くてあまり戦闘に向かないから、そんなに多くは入れられない感じだよな?」

「キシ、グンゾウ、その通り。問題は……誰が神官をやるか……キシキシシ」

——神官……か。そんな簡単に誰でもできるのかな? まあ、聖騎士の方も体力的に難しそうだけど。聖騎士はリョータ……とか?

「えーっと、少し前に鐘が3回鳴ったっけ? 鐘は朝6時から2時間おきだから、今は1時位かな。もう少し調査の時間が取れるね。次、どこ行く?」

グンゾウが話しかけると、シムラはイガグリ頭をひねった。

「見当もつきません。他にどんな職業があるんですかねー?」

「キシ……シムラは馬鹿、キシキシシ。既に1つは場所まで情報を得ている」

「なんやと! このアホウ! ウンコ野郎!」

「こらこら、喧嘩するんじゃない。ハイドも、もう少し口を慎みなさい」

近くの木に生えている青い実をちぎって、ハイドに投げつけようとするシムラの腕を

掴んで止めながら、グンゾウは話した。

「で、何の職業について情報を得たんだ？ ハイド」

「キシ……職業は確かじゃないが、場所は分かった。暗黒神……の神殿が西町貧民街の

……地下にある」

「あつー」「あつー！」

グンゾウとシムラが異口同音。どつかで同じようなシーンがあつたなどグンゾウは思った。

——確かに受付の女性神官がそんなこと言っていた。光明神に神官と聖騎士があるなら、暗黒神にも神官と暗黒騎士とかがあつてもいいよな。ハイドは良くそんなこと聞き逃さなかつたな。

「感心したよ」

グンゾウが声をかけると、ハイドは鼻息を荒くして答えた。

「ふっふっふ……これくらい当り……当たり前前、ふっ」

「よし、じゃあ、西町とやらに行ってみる？」

「ふひっ！」「賛成！」

向かう方向が決まり、グンゾウ達は確かな足取りでオルタナ西町を目指した。

## 8. 西町クライシス

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

——自分の呼吸が五月蠅い、一体こんなに走ったのは何年ぶりなんだろう。吐きそう。

「ぶひっ、ぶひっ、キシシ、ぶひっ……」

ハイドが豚のような呼吸になっている。

一番、元気なのはシムラだった。とはいえ、シムラも膝に手をおいて、体を折り曲げ、頭を下げて、肩で呼吸をしている。

「あかんかったですね……。こんなん初めて、やったわ」

シムラが地面に座りこんだ。

当然、グンゾウやハイドは既に地面に寝っ転がって、伸びている。

「はあはあ、まー、はあはあ、ちよつと……はあ、はあ、舐めてたね」

——そう、俺達は舐めていた。別に怪物だけが人を襲うわけじゃないってことを忘れていた。

まだ数えてはいないが勉強料としてグンゾウは十数カパーを失った。

どうしてこうなったのかを説明するためには少し時間を遡る必要がある。

グンゾウ達は暗黒神スカルヘルの神殿を探すべくオルタナの西町を目指した。

一旦、天望楼付近まで戻り、位置を確認してから西町の方向に向かう。西区の入り口は飲み屋っぽい飲食店があつたり、美味しそうな肉屋やパン屋があつたりしてちよつと味のある雰囲気の街だった。

「なんや、下町って雰囲気ですねー」

シムラがイガグリ頭の上で手を組みながら、呑のん気に鼻歌を歌っている。

「早いけど、ちよつとお腹空かない？ あ的美味そうな匂いがしてる屋台で、食事でもしながら情報収集しない？」

「キシ、同意ー」「賛成っすー！」

グンゾウが早めの昼飯を提案すると、2人ともすぐに同意した。

——なんだか、食って、出して、食って。それしかしてない？

グンゾウ達は屋台のカウンターに座る。グンゾウ、ハイド、シムラの順で腰掛けた。

すると、屋台の店主が水の入ったカップを出しながらニコニコとした笑顔で話しかけてくる。色黒のがたいが良いお兄さんだ。

「らっしやい！ お客さん初めて？」

「そう……ですな」

一瞬で見抜かれてしまったため、グンゾウが緊張して答える。

「そっか、じゃあ説明しとくか。うちはこの辺りでも美味くて安いで有名なガナー口料理専門店『肉18番』だよ。元々西区にある肉屋なんだけど、それ以外にもこうして屋台で最高の肉を最高に美味しい食べ方で提供してるんだ。昼飯はテールスープ定食か、内臓煮込み定食のどっちか。定食って言ってもパンが付くだけだね。これは従兄弟がやってる『グーチョキパン屋』から毎朝焼き立てを仕入れてる。1個までお代わりできるよ。内臓煮込みは少しだけ辛いけど、そっちの子ども達でも食べられる位の辛さだ。両方とも8カパーだよ」

「なるほど……」

——それは美味そうだな。

「俺は内臓煮込みだな。ふたりはどっちにする？」

「キシ……テールで」「なんや、悩むなあ……でも、ここは内臓煮込みにします」

料理が出てくるまでの間、少しお金について考える。

今のところグンゾウ達は16カパー使った。このまま外食生活で過ごすと仮定すると、食費だけで1日で25カパー程度かかる。すると4日で約1シルバー。例えば職業に就くための費用が8シルバーで共通しているとすれば、余りは2シルバー。実際は宿

舎代だったり、生活道具も買わないといけなことを考えると、そんなに余裕なんてないことが分かる。

——あいつ、しばらく生きていけるとか言ってたけど、ギリギリじゃないか。

飲んでいた水が急にまずく感じられた。グンゾウのブリちゃんに対する怒りがふつふつと沸き出てくる。

そうこうしていると料理が出された。

「お待たせ！」

テールスープは白濁したスープに人間の拳位こぶしのゴロツとした肉の塊が2つも入っていた。美味そうな出汁だしの匂いがする。明らかに美味そうだ。

——ガナー口ってどんな動物なんだろ。

内臓煮込みは赤茶色をしたスープに何だかよく分からない肉がたっぷり入っていた。こちらは出汁だしの匂いにスパイスの風味が加わり、これも美味うまそうだった。

「いったきまーす、うまつ！ 熱っ！ うまつ！ 熱っ！」

シムラが木のスプーンで煮込みを掻き込みながら、出されたパンにがつついていた。少し騒がしい。グンゾウも内臓煮込みを一口食べる。

——確かに美味うまい。肉汁・肉汁・肉汁って感じた。

「ハイド、肉をちよつとずつ交換せえへん」

「嫌だ、キシシ」

「ケチ臭いこってゆうなや」

シムラとハイドが料理の味見で押し問答をしている。

グンゾウは、ハイドがシムラに集中している隙に、テールスープの肉を少しだけもらって口に入れた。

——これも美味うまい！

さらに、もう少しだけでもらった。

シンプルな塩味ながら骨髓の濃厚なエキスが肉に再浸透していて、肉を噛めば噛むほど肉の線維がほぐれ、美味しいエキスが出てきた。また肉の間の脂肪もぷりぷりと弾力があり、噛むと舌の上にとろっと甘い脂が広がった。

料理は両方とも肉の味がすごく良かった。

蜂の巣みたいな模様の肉は弾力があり独特の風味がある。腸と思われる肉は脂がたっぷりと付いていて、その脂の甘さが抜群だった。それ以外にもよく分からない部位の肉が多数入っていたが、全体的によく煮込まれ、軽く咀嚼そしゃくするだけでほろっと溶けていく。一口食べると肉の甘さと味付けのピリ辛さが絶妙なバランスで口の中に広がり、幸せな状態になる。そこへ付け合わせのパンを食べる。

——パンもうまっ！

付け合わせのパンはふわふわの白パンではなく、表面はカリカリ、中は塩気のない重くて堅めのパンだ。ただし、香ばしい小麦の匂いがしっかりして、口の中の脂と混ざることによって最も美味い状態になる。後味が爽やかなので少しハーブが入っているかもしれない。

パンが口の中の脂を持ち去ってくれるので、次のスープが新鮮な気持ちで美味しく食べられる。

——また来たいな、ここ。女の子も喜ぶかも。

グンゾウの頭に女の子の顔が浮かんだ。

「キシ……、肉が……減ってる気がする」

「んなわけあるかい。早くよこせや」

何となくハイドの視線がグンゾウに向いている気がしたが、グンゾウは気付かないふりをして、目の前の食事に集中した。

——ここは黙つとこう……。稼げるようになったらおごってあげるつもりだし……。ハイドはちよつと小太りだし……。ダイエットだよ、ダイエット……。ダイエット……。

「あ、パンお代わりお願いします」

グンゾウ自身はダイエットする気がなかった。



シムラとハイドは料理の攻防をしながら食事をしている。既に料理の交換よりは、攻防で遊ぶことに夢中になっている。

「興奮しすぎて、こぼすなよー」

グンゾウは軽くたしなめておいた。

お昼の時間なのか屋台も客が増え、簡易のベンチや机に座って10人程度の客が入れ替わり食事をしている。いつの間にか店主と同一年くらいの女性も来て、料理を出すのを手伝っている。連携の良さを見ると店主の奥さんかもしれない。

店主は料理を出すのに一段落着いたのか、樽でできた椅子に座って煙管をふかしている。

グンゾウはお腹も満ちたので、店の店主から情報収集をすることにした。

「あの、西町にスカルヘル神殿があるって聞いたんですが、場所をご存じですか？」

グンゾウが聞くと、屋台の店主がぎよっとした表情になる。

「もしかしなくても、お客さん義勇兵？」

「ええ、そうです。わかりますか？」

「まあ、変な格好してるんで、そうだと思ったんだけど」

——変な格好……かなあ？

「あ、お恥ずかしい」

店主はグンゾウに顔を寄せると、小声で言った。煙草とスパイスの匂いがする。

「あんまり、西町付近では暗黒神殿と盗賊ギルドの話は大声でしない方がいいよ」

グンゾウはドキツとした。店主は小声で続ける。

「おおっぴらには言えないけど、西町はそういう町さ。けして悪い意味でなく、西町の混沌ぐんちんを秩序しじゆ立てているのは、その両組織の力が大きいってことだ」

「盗賊シユフって泥棒？」

「そう言われてしまえば元も子もないけど、まあ、そうした技術を持った集団かな。表面きは街の人から盗む集団ってわけじゃないよ。外には財宝を持った怪物がたくさんいるし。義勇兵の中にもかなりの人数いるぜ。オルタナ辺境伯の依頼を受けて、仕事を請け負うこともあるし。敵勢力の偵察とかね」

——なるほど、そういうものなのか。

「あの、もしかして、その盗賊ギルドシユフってのに加われば、盗賊シユフになれるんですかね？」

「あれ？ そんなことも知らないの？」

「はい。すいません。右も左もわかってないもので。盗賊ギルドシユフの場所を教えてくださいませんか？ ついでに神殿の場所も……」

「仕方ないなあ」

「ありがとうございます」

店主は親切に繊維の荒いゴワゴワの紙へ木炭で地図を書いてくれた。

「ほんとうにありがとうございます。これ少ないけど受け取ってください」

グンゾウは5カパー程、屋台の店主に手渡した。

「お、悪いね。じゃあ、もう少し情報を書き足しておくか……」

店主は地図の裏に何か書き足した。

「ご馳走さま」「キシシ、満足」「ご馳走様です！」

シムラとハイドも食事を終えたので、グンゾウが促して出発することにした。

「毎度ありー」「ありがとうございましたー」

店主と女性がお見送りをしてくれた。

グンゾウは歩き始めながらシムラとハイドに盗賊ギルドについて説明をした。

「キシシ、盗賊ギルドは大いにあり得る、キシシシ」

——だから、あることの説明をしてんだけどな……。

「地図を見るとそつちの方が近そうだから、盗賊ギルドを先に行かない？」

「おけ、キシシ」「了解っす」

2人の同意を取り付けたので、グンゾウは地図をくるくる回転させて見ながら行く方

向を探した。

——あつち……かな？

その頃、肉18番の店主は少しだけ顔をくもらせながら独り言をつぶやく。

「あの旦那、ちゃんと俺の書いたこと読んだかなあ？」

お店の手伝いをしていた奥さんが聞く。

「どうしたの？」

「あ、いや、さっきのお客さん義勇兵らしいんだけど、何も知らない風で。盗賊ギルドまでの地図を書いてあげて、通つちや駄目な道の情報を紙の後ろに書いてあげただけだよ……読んだかなって」

奥さんは少し考えてから答える。

「まあ、大人だったし、危ない場所くらいわかるんじゃないの？」

「だよなあ」

店主は表情をゆるめる。ちようどお客さんが3名来たところだった。

「らっしやい！ まだランチの定食やつてるよ」

「なんや、ガラ悪いなあ」

シムラがキョロキョロと周囲を見回している。確かに良い雰囲気のところとはとても言えない。他の地区に比べて落ちているゴミの量が多い。食べかすの骨や割れた陶器、人の糞尿のようなものでそこら辺に散らばっている。また、道端にボロ布にくるまっ

たホームレスを見かける数が増えていった。

「懐かしい雰囲気やわあ」

「え、そつち？」

グンゾウはすこしずつこけてしまった。

「えへへ」

シムラは鼻をこすりながら、ふざけて笑った。

盗賊ギルドに近付くにつれ、さらに街の雰囲気は悪くなっていった。独りで歩くのは少し遠慮したいような感じだった。建物も元の建物を木板や煉瓦レンガと漆喰しゅくで建て増し、建て増しを続けてくっついたような良く分からない形をしたものが多い。道の上を塞ぐように2階同士が繋がっている建物もあった。

進めば進むほど道はますます狭くなり、見通しも悪くなっていった。昼間だというのに不思議と人通りも極端に少ない。

グンゾウは嫌な予感がしてきていた。

「しかし、盗賊ギルドの建物らしきものは見当たりまへんなー」

シムラは背伸びをして道の先を見渡した。

「キシ、グンゾウ、地図……確認しろ」

——メイレイ スンナ。

グンゾウは心の中で悪態を吐いたが、相手がハイドなので口に出すのは止めた。

「ああ……、地図だどこの道を真っ直ぐが一番近い感じで書いてあるんだよね。道が丸で囲ってあるし」

「グンゾウさん、何か裏に書いてありますけど？」

シムラが地図の裏側の書き込みに気付いてグンゾウに教える。

「ほんと？」

——そういえば、追加情報がなんとなくかって屋台の店主が言ってたな。

グンゾウは地図の裏面を見た。そこには「○で囲ってある道は通つてはいけない。何故なら……。通つてしまった場合は……。」と書いてあった。

「うおっ」

グンゾウは思わず叫んでしまう。

「どうしました？」「キシシ」

シムラとハイドの両方がともが地図の裏面を覗き込む。2人の顔から血の気が引いていく。

周囲に人の気配を感じる。3人は小声で相談をする。

「行くぞー！」

グンゾウが声を出すと同時に3人は元来た道を引き返すように全速力で一斉に走り

出す。

グンゾウ達が一斉に走り出したのと同時に前後の通路、また前方の左右の建物とその2階窓などから、ボロボロの服を幾重にも纏った汚い身なりの男達が一斉に飛び出してきた。ぱつと見で6人はいる。

「このイカレ×○△野郎ども、身ぐるみ剥がせ!」「わしやー!」「待てこらあー!」「金よこせー」「死ねー!」

——これはやばい! 捕まったら死ぬ!

後ろの道を塞いでいる男は一人。ボロボロ布を纏って、顔は何年お風呂に入っていないのか分らないくらい汚れて、皺だらけだ。頭は白髪しわの長い髪わすの毛が僅かに頭皮を覆っている程度だ。見た目は完全に鬼だ。グンゾウ達がついていたのはその男が年寄りで、体格も貧弱であつたということだ。武器も持っていない。

「さつき言った通り!」

グンゾウは叫ぶ。

「はいー!」「ぶひキシ!」

狭い道のシムラはギリギリ左端を、ハイドはギリギリ右端を走る。グンゾウはハイドの後ろから付いていく。年寄り鬼はどつちの子どもを捕まえようか逡巡する。

シムラは脚が早い。あつという間に年寄り鬼の脇をすり抜けていく。しかしハイド

は脚が若干遅い。年寄り鬼がハイドに狙いを定めて捕まえようと手を伸ばす。

「させるかよ」

グンゾウは年寄り鬼に体当たりする。目に染みそうな程、強烈に臭い体臭が鼻を突く。

「ぐじやああらあああ」

年寄り鬼はバランスを崩して、地面に背中から倒れ込む。体格の違いからしばらくは起き上がれなそうさ。

後ろから追ってくるボロ布集団は何だか良くわからない悪口雑言を叫びながら、グンゾウ達に向かってくる。

「走れ！ 走れ！ 走れ！」

グンゾウのかけ声でシムラとハイドはどんどん走って行く。

——くそー、やりたくないけど。

グンゾウはカパーの袋に手を突っ込んで、握ったカパーをボロ布集団に投げつける。グンゾウはなるべく左右に散らばるようにカパーを投げた。

「ほらっ！ 銀貨をやるぞ！」

チャリチャリーンと派手な音を立てて、地面にカパーが転がる。

「俺の銀貨だ！」「取るな殺すぞ、俺んだ！」「そこだ、そこにもあるぞ」「畜生！ これ



は銅貨だ、銀貨はどこだ!」「死ねー!」

ボロ布集団は今度は銀貨と思ひ込んだ銅貨の奪い合いで仲間割れをしている。

——ひとり「死ねー!」しか言わないやつがいるな……。

グンゾウは全速力でシムラとハイドの後を追いつながら、変に冷静なことを考えていた。

グンゾウはカパー袋の中を数え直したら、15カパー減っていた。

——2食分か……。死ぬよりいいけど。

呼吸を整えたグンゾウ達3人はとても西町の奥まで入って調査を続ける気にはならず、集合の時間も近いと思われたので、とぼとぼと義勇兵団事務所までの道を歩いていた。

「キシシ……とりあえず、グンゾウが悪い。シシシシ」

グンゾウは呆れた目でハイドを見た。目尻は下がり、口はへの字になっている。

「ハイド、次、あの年寄り鬼に捕まりそうになっても絶対助けないぞ」

グンゾウは嫌みを言う。ハイドはしばらくの間、黙っていた。

「あーあ、あの死ぬほど臭いオッサン達に身ぐるみ剥がれて、大変な目に遭うんだろうな」

「……グンゾウごめん」

「よし」

——素直に謝ったから、今回は許そう。

「しかし、盗賊と暗黒神系の職業は就く気が失せました。もうなるべくあそこには近寄りたくないっす」

シムラが苦々しい表情をして言った。

「同感だよ」

——正直、もう懲り懲りだ。肉18番にはまた行きたいけど。店主には助けられたし。できれば口頭で補足しておいて欲しかったけどさ……。

「おっ！ グンちゃん、シムちゃん、ドイハっちー！」

義勇兵団事務所の前ではヨシノがグンゾウ達3人を明るい笑顔で、手を振って出迎えてくれた。

——西町の後だと、女神様に見えるな。

実際、ヨシノは絵画に描かれた凜々しい女神のような雰囲気があった。

そして、12人が集まるのを待って、集めてきた情報交換が始まった。

## 9. 職業選択の事由 A H A H A h !

「ふうん、そんなことあったんだー。大変だったねー。よちよち」

これはグンゾウ達が西町で遭遇した災難の話を聞いたヨシノの反応だ。

——別に幼児ではない。プレイのようで、なんだか赤面してしまう。

「俺だったら、全員ぶつ飛ばしてるな。お前達弱すぎなんじゃねーの」

そして、これはリョータの反応。

——いつか同じ状況に追い込んでやろうか。

「……西町には絶対行きたくないですね」

最後はアキの反応。

——一番しつくりくる反応。

小隊内パーティーで西町の危険性を共有していると、カズヒコ達も全員戻ってきて情報交換が始まった。

「よし、じゃあ、僕たちから報告をしよう」

カズヒコ達はグンゾウ達が感心するほど、よく調査をしてきていた。

街の造りは大体歩いて把握した通り、西町が貧民街スラムであるという点を除けば各区

天望楼付近に商業施設や付随ふずいてき的な工業施設が多く、その周辺に住宅地が存在するという造りになっている。商業施設といつても商店や屋台、工業施設と言つても工房こうぼうと言つた方が正しい表現かもしれない。住宅地の中にも生活に密接した商店や工房が点在てんざいしていたり、住宅地の縁辺部には軍の訓練所等の大型施設があつたりもするとのこと。街の出入り口として南門は天竜山脈に遮さへぎられ、限られているので、義勇兵の主な主戦場は北門外方向になるようだ。

行政は辺境伯が行政長官であり、天望楼を中心として行政機関が点在をしているとのこと。しかし、お金もなく、記憶も喪失した人達を助けてくれるような福祉制度は存在しておらず、結婚や死亡ということがなければ特にお世話になることもないようで、とりいそぎグンゾウ達に関係することはなさそうだということだった。

医療も充実とはほど遠いことがわかった。怪我はほとんどが神官による神の奇跡によつて完治してしまうので、外科のニーズは極めて少なく、医療といえば病気が中心であるとのこと。しかし、町医者では民間療法が少々行われている程度で、辺境伯抱えの典医でもなければ高度な医療は望めなそうだ。驚くべきことに医者はどちらかと言えば賤業せんぎょうに近いイメージらしい。

ルミアリス神殿の調査でも怪我が神の奇跡によつてほぼ完治するので、神官は尊敬されていた。そして神殿にも病氣治療の研究をしている一派がいるので、そこに属さない

医者はどちらかと言えば変わり者という方が正しいかもしれない。オルタナの外の世界には神官とは別系統の呪医シャーマンと呼ばれる職業クラスも存在するらしい。

金融に関しては「ヨロズ預かり商会」がほぼ独占的に両替、預金、引出等の業務を実施しているということがわかった。業務は朝の7時から夜の7時ということだった。

生活費に関して、宿屋は1人部屋だと安くても1晩50カパー（！）程かかることがわかった。ただし、前払いで長期に借りる前提なら、交渉によって下げることができかもしれないとのこと。稼ぎが悪い新人の内は1部屋1泊10カパーの義勇兵宿舎を活用するのが良さそうだ。

食費に関しては自炊すれば1日10カパー以内くらいに抑えることはできるが、外食をすると1日20カパー程度かかる。

情報収集は北区の市場から少し入った花園通りの入り口にあるシェリーの酒場が義勇兵の溜まり場となっていて、昼間から情報収集が可能だということ。ただし、まともな義勇兵であれば昼間は外で戦っており、夕方から夜にかけて集まるので、情報収集の効率性を考えれば夕飯の時間帯以降を狙うのが良いと分かった。カズヒコ達の情報収集もシェリーの酒場にいた義勇兵に多少奢おごることで得たものがほとんどであるということ。義勇兵同士の横の繋つながりクラスが義勇兵生活を続けていく上では重要そうだった。

カズヒコ達はそれ以外にも職業クラスについて情報を得ていた。オルタナで就くことがで

きる職業は全てで7つ、戦士、聖騎士、暗黒騎士、狩人、盗賊、神官、魔法使いのと。それぞれの職業にギルドと呼ばれる職能団体があり、そこに8シルバー納め、見習いとして初心者訓練を受けるとその後、技術指導や身分の保証が得られるとのこと。ただし、新たな技術指導を受けるには追加で指導料を納める必要があるとのことだった。長年ギルドに所属して、技術を磨けば指導者にすらなることができるらしい。これらはグンゾウ達がルミアリス神殿で得た情報と一致した。

また、ギルドにはそれぞれの掟があり、それを守らないとギルド員としての資格を失ったり、刺客を差し向けられることすらあるらしい。掟の一例として、暗黒騎士ギルドの「一度入ったら二度と出られない」や、盗賊ギルドの「特になし」なんてものがある。

小隊を編成する際に、重装備で盾役となる戦士又は聖騎士と、治療者となる神官は必須であるとのこと。重要であるが故に、当該職業の死亡率は高く、特に神官は装備が薄く、敵も真つ先に狙うため死亡率が高いという不吉な情報も得ていた。

「神官とか魔法使いにはなりたくねーな」  
リョータが呟いた。

——どう考えても向いてないしね。

グンゾウは大人なので、心の内に留めておいた。

カズヒコ達の報告に重ならないことを報告すると、リョータ小隊が集めてきた情報は少なかった。グンゾウは少し恥ずかしい思いだった。

義勇兵宿舎は南区の西町近くにあること。造りは極めて質素である。率直に言えばボロいということ。3棟あつてガラガラなので、広く使えること。共同だが沐浴部屋もくよくやトイレは完備されているとのこと。各棟には管理人がいて、みんな引退した元義勇兵とのことだった。

「トイレは……掃除……できれば改築したい感じですよ」

アキがしょんぼりした顔で言った。伏し目がちなので、そう見えるだけで彼女として普通の表情なのかもしれない。

——やっぱりかー。

「でも、お風呂は狭いけど良さそうだったよー」

ヨシノがニコニコと報告をした。

——ポジティブな人が居ると救われるな。

調理器具や裁縫道具等の日常生活用品は管理人から借りることができるため、新たに買わなくても大丈夫とのことだった。

グンゾウはルミアリス神殿と西町の様子、屋台「肉18番」のことを報告した。

「……ということでは西町は危ない地域もあり、できれば行かない方がいいと思われる」  
 「へへへへ、肉喰いてえ、でも西町こええ」

ミッツがヘラヘラしながら怖がっていた。

——いまいち感情がわからない男だな。

「でも、ベテラン義勇兵の話によると、盗賊はそれなりに有用な職業のようだよ」

カズヒコが真面目な顔をして言った。西町を思い浮かべただけでグンゾウ、シムラ、ハイドの顔は暗くなった。

「大体、状況は掴めたようだね。どうだろう今日は早々に宿舎に向かつて、各小隊パーティでどのギルドに所属するか打ち合わせするって方向で。生活費も限られているし、早速明日にはギルドに入ろう！」

カズヒコが解散を提案したので、全員賛成をして、宿舎に向かうこととなった。

「よし！ 俺様に付いてこい！」

リョータが親指を立てて自分の顔に向け、ニカツと歯を出して笑った。

——職業か……。俺には何が向いてるのかな？ 戦士がらって柄がらじゃないしな、盗賊はちよつと……なりたくないしな。

宿舎への道。いつの間にか、宿舎へはヨシノの先導で行く形になっていた。リョータは行き道を忘れてしまったらしく、ヨシノに教えてもらいながら隣を歩いている。



——何をしてたんだ、あいつ？

グンゾウはリョータを呆れた顔で見ながら、少し離れた後ろを付いていった。隣にはシムラがぶつぶつ言いながら歩いている。

「シムラ、どうかした？」

シムラははつとした顔をして、グンゾウの方を向いた。

「あ、すいません。いやあ、職業を何にしようか悩んでまして。体小さいんで、戦士とかは無理やなあ。でも神官とか、魔法使いとか、勉強が必要そうで、それもちよつと……」

そう言うときシムラはまた悩み始めてしまった。

「シムラはこれから背も伸びるだろうし、身が軽いから、何でもできると思うよ」

グンゾウが慰めると、シムラは明るい顔になった。

「へへ、そうですね？ まあ、他の人とのバランスを見ますわ」

——悩むよなあ……。みんなは若いから伸び代のびしろがあるけど、俺は明らかに衰えていく一方な気がするし……。こういう時は悩まなそうな奴にも話を聞いてみるか。

「ハイド、お前はどうか考えてるんだい？」

グンゾウの後ろを歩いてきたハイドは急に話しかけられて、少しびくつとなったが、すぐにいつもの不敵な笑みに戻った。

「キシシシ、僕は魔法使いまほうつかい。魔法使いいったく一択だ。キシシ」

明確なお答え。相変わらず判断に淀みよどが無い。

「そうなんだ。すげえな、相変わらず。悩んだりしないのか？」

「キシシ、そうだ。大体、魔法使い最強！魔法使いマンセー！と相場は決まっ  
ている。フシシ」

「お、おう。良く分かんないけど、自信の程は伝わってきた」

——本気マジでよく分からない奴だが、とりあえず、すごい確信だ。

少し前には、アキ、チョコ、ノツコが並んで歩いていたが、3人とも職業について楽しように話をしている。ガールズトークというやつだ。

ノツコが明るく話し、チョコが拗すねているような口で鋭く突っ込む、アキは聞き役と  
いうような感じに見えた。

グンゾウはアキに職業の選択希望について聞きたかったが、3人のガールズトークを  
邪魔すると、後々評レビテーション判に悪そうなので、我慢をした。

「へっへっへ、チョコはどうなの？ 何の職業を選ぶの？」

ミッツがグンゾウを後ろから走り抜いて行って、急にチョコだけに話しかけた。

案の定、チョコは少しひいた感じでミッツを見て、拗すねたような口で何かを言っ  
た。他の2人もミッツから半歩遠ざかった感じだった。

——あれはあかんやつや。若き故の過ちだな……。

ミッツを追いかけてか、タイチが後ろからやってきてグンゾウ達の前を歩き始めた。「タイチ君はギルドどうするか希望あるの?」

グンゾウはタイチに聞いた。

「うーん、まだこれってのは無いですけど……。みんなの役に立てる職業が良いですかね」

とタイチは振り返って、人の良さそうな回答をした

「なるほど、偉いなあ」

——うーん、役に立つ……。しんかん 神官とか?

「タイチ、優等生回答やな」

シムラがタイチに絡んでいった。

「なんだよ、シムラはどうなんだよ」

「それ聞いたらあかんねん。全然頭回らへんねん」

シムラが口を半開きにして、目は空を見つめ、呆ぼろけた顔をして、タイチを笑わせていた。

「あはは、いつもだろー」

——あー、俺も全然決められないわ。とりあえず、風呂入りたいな。

グンゾウ待望のお風呂が付いた義勇兵宿舎は目の前に迫っていた。

「管理人のおじさん、どうもありがとー」

ヨシノが義勇兵宿舎3号棟の管理人にお礼を言っている。

義勇兵宿舎についてのグンゾウ達はさっそく宿泊の手続きをした。1号棟は既に先輩義勇兵が1組いるということなので、どうせなら広々使おうということでカズヒコバイティ小隊は2号棟を、リョータ小隊は3号棟を根城とすることに決めた。各棟には沐浴部屋やトイレ、キッチンに中庭等の共用部が付いている、詰め込めば全部で50人程が泊まれる設備がある。現在は1棟を6人で占有しているので、本当に広々としている。ベッドは干し草の上に毛布を敷いたものだが、管理人が真新しい毛布を持ってきてくれた。ヨシノが新しい毛布を頼んでくれたらしい。

——ナイス！ ヨシノ！

特に荷物も持っていないグンゾウ達は、施設の確認とトイレを各人済ますと、早々に中庭のテーブルに集合し、小隊の編成について話し合いを始めた。

ヨシノとアキが陶器製のカップに井戸水を汲んで各人に配ってくれた。

リョータが話し合いを仕切り始める。大袈裟に両腕を大きく開いて、全員の注目を集める。

「よし、じゃあ、それぞれ希望を聞いていこう。俺様は暗黒騎……」  
「はい！ あたしは戦士！」

リョータの発言を遮って、ヨシノが手を挙げて宣言をした。

「えっ?! ……お、俺様も戦士だぜえ！」

——いま、暗黒騎士ドレッドナイトって言おうとしなかったか、リョータ。

ヨシノは希望の理由を話し始めた。

「あたし、たぶん体動かすのとか好きだし、結構丈夫だし。華麗に舞う女戦士ってすごい憧れるんだー」

グンゾウは念のため、ヨシノに確認した。

「カズヒコ達の話じゃ、戦士は敵の前に体を晒さらして、結構危険な職業だつて言うけど、大丈夫かい？」

「そうだけ、俺が戦士をするから、ヨシノは後衛でもいいんだぜー！」

リョータも同じように聞いた。

「んー。少しは不安だけど……、でもリョータが戦士をしてくれるなら、盾役タンクは任せていいんでしょ？ 飛び回って攻撃するよー！」

「お、おう、任せろつてんだ。敵なんざ俺一人で止めてやんぜ」

リョータは少し顔を赤らめながら胸を叩いた。

——リョータは聖騎士<sup>せいきし</sup>って手も有ったけど……、ルミアリス神殿は似合わないか。結構いいんじゃないかな。この2人の前衛は。

「よし！ 前衛は決まった。あとの4人はどうするんだ？」

リョータが周りを見回す。

やはり、あの男が手を挙げる。

「キシ……ぼ、僕は魔法使<sup>まほうつか</sup>いだ。これで、さ、最強。キシキシキシ」

ハイドは少し緊張をしながら、しかし迷いのない口調で魔法使になりたいと希望した。

「んー。他に魔法使になりたい奴いるか？ いないなら、オタクでいいや」

リョータはヨシノと自分が決まったのでほとんど興味を失っているらしく、対応が適当になってきている。

「オタクじゃなくて、ドイハっちでしょ。リーダーならちゃんとして」

ヨシノが凜々<sup>りり</sup>しい顔でリョータを睨<sup>に</sup>んだ。

——まあ、ドイハっちも違うけどね。

「はいはい、ハイド、ハイドと。ハイドは魔法使いと。次は誰だ？」

——あれ？ このままだと一番死ぬっていう治療者<sup>ちりょうしゃ</sup>がいなくね？

グンゾウが治療者<sup>ちりょうしゃ</sup>について考えていると、シムラが迷いを振り切るようにシャキッと

手を挙げた。

「あん？ イガグリどうした？」

全員の視線がシムラに集まる。

「俺は狩人かりうどやるつす。俺、狩人はできる気がする」

シムラが希望を告げた。リョータは呆けた顔をして少し時が止まる。

「狩人ってなんだつけ？ わりい、印象薄くて覚えてないわ」

全員ずつこけそうになる。

「キシシ。ゆ弓使い。遠距離アタツカード。キシシキシシ」

ハイドが珍しくリョータをフオローする。

「おお、そうかそうか。よしよし。イガグリは弓使いと。……ん？ いまのどしんかんこ神官い

ねーじゃん。小隊で一番大事なんだろ？」

今度は希望を出した4人の視線がグンゾウと隣に座っているアキを交互に行き交う。

アキは伏し目がちの目をまますます伏して、地面を眺めていた。

——一番危険な神官しんかんをアキにさせるのはちよつと心苦しいな……。ここは俺がやるしかないか。

「じゃあ、お……」

グンゾウは手を少しだけあげて口を開こうとしたところ、ハイドが急に割り込む。

「神官はグンゾウで。キシキシキシシ」

「ぬお？」

グンゾウは変な声を出してしまった。

——なに、ハイドおまえ、勝手に……。

リョータも変にハイドへ理解を示して納得した。

「そうだよな。オツサン一番長く生きてるんだから、危ない職業やで。オツケーイ！ これでほぼ小隊完成だ！ ぱあつと飲みにも行こうぜ！」

——え？ どういうこと？

「ちよ、待つ！」

グンゾウが一応自分から、希望を言おうとした。

「あん？ 何、オツサン神官嫌なの？」

リョータがグンゾウを五月蠅そうに見る。

「いや、そうじゃないけど」

「なら、オツケーイっしょ」

リョータが仕事が終わった感満載で片付けようとする、良識のあるヨシノが口を挟んだ。

「ちよつと、ちよつと、勝手に決めちゃ駄目でしょう。グンちゃんが神官なのはいいと思う



けど、アキちゃんの希望も聞いてないしー」

——あ、俺の神官はいいんだ。

「この流れ面白すぎるやん。ずるいわあ」

シムラは別の方向で何かに感動を覚えている。

グンゾウは完全に味方がおらず、会話の流れに乗れないことに絶望していると、アキが「はい……」と言って、おずおずと手を挙げた。

——もしかして、アキが神官を希望するとか?! 治療者は2枚いても良いよね。神官衣ってちよつとかわいいし、いいかも。

全員の視線がアキに集中する。

見た目とは違い、意外と低く落ち着いた声、でもかわいらしい女性の声のアキの口から絞り出される。

「私……。聖騎士せいきしになります」

「えっ?!」「ええっ?!」「おっ?!」「へっ?!」「キシ?!」

これでグンゾウを除く全員の希望が通って、小隊の編成は決まった。

## 10. 始まりの波乱

それは地獄だった。聖なる地で地獄の苦しみを味わった。少なくともグンゾウにはそうとしか思えなかった。二度と思い出したくない7日間だった。

北区をとぼとぼと歩きながら、グンゾウは天望楼広場に向かつていた。解放感には満たされているが、体力の低下から足取りは重い。ルミアリス神殿で支給されたショートスタッフを支えに歩いていった。

「規定修練、二度と受けたくない。……受けることは無いけど。いや、修師運マスターが悪かっただけと思いたい」

愚痴が口をついて出た。

——次回以降、修師って変えられるのかな？

今後も新しいスキルを身に着けようとする度たびに、あの修師に師事しじしなければいけないと思うと、グンゾウの足はますます重くなった。

途中北区の市場を通る。通りに並ぶ屋台から、たまらないご馳走の匂いがする。グンゾウはお腹が鳴るのと、涎よだれが出てくるのを止めることができなかった。

この7日間、グンゾウはろくに食事をしていなかった。否。食べさせてもらえなかつ

た。

「食事付きだったはずなのに……」

また、愚痴が出た。何故、食事をさせてもらえなかったか、思い出したくもない。

まだ多少のお金は持っていた。市場で片っ端から買えば、小さくなつたグンゾウの胃をパンパンに満たすくらいの食事は買える。しかし、グンゾウは決めていた。学院を出て、最初に口にするのはあの店の料理だと。宿舎のベッドでひもじさに耐えながら、朝が来るのを待っている時に思い出した料理。

グンゾウはお腹が減りすぎて動きが悪くなつた足を引きずつて、天望楼の広場を西区の方へ向かった。

——喰うぞ、喰うぞ、絶対にお腹いっぱい喰つてやる！

——美味うまかった。

グンゾウは肉18番で満たしたお腹を抱えながら、宿舎に到着した。一晩しか泊まつていないが、愛いとしの我が家だ。

「おー！ グンちゃん、ひさぶりー！ ……なんか瘦やせた？」

ヨシノがいつものように手を振つて迎えてくれた。

「ただいま。瘦すいじやくせた……というより衰弱すいじやくした」

宿舎につくと既に何人かが中庭に集合をしていた。なんだか楽しそうに話している。7日間の訓練の過酷さを話し合っていることが予想された。

全員、最後に会った時と格好が違う。ギルドから支給されたであろう使い古しの服を着ている。

輪の中にはタイチがいた。タイチはグンゾウを見かけると駆け寄って、話しかけてきた。

「グンゾウさん、大変でしたね。大丈夫でしたか？」

タイチだけが断片的にはあるが、グンゾウの修練の過酷さを知っている。

「なんとかかね……。大変だった」

グンゾウが見渡すと戦士せんし、神官しんかん、盗賊しゅうふのメンバーが戻ってきているようだ。グンゾウ達の小隊パーティーで戻ってきていないのはアキ、シムラ、ハイドだ。

グンゾウも荷物を地面において、話の輪に加わる。

「だからよー、俺がズバツと止めとどを刺してやったわけよ。すげーだろ？」

リョータが自分の膝を手でバンバンと叩きながら盛り上がって、チヨコやミツツに自慢話らしきものをしている。

「リョータどうしたの？」

グンゾウはヨシノに聞いた。ヨシノは軽くため息を吐いてから、呆れた顔で説明を始

めた。

「あたし達が基礎訓練に入っつてすぐに、オルタナにオークンが攻めてきたじゃない？  
グンちゃん覚えてる？」

「ああ、覚えてるよ。あれは大変だったね」

確かにグンゾウ達がそれぞれギルドの門を叩いて2、3日経った頃にオルタナの街は  
オークの一団に襲われた。

グンゾウはルミアリス神殿のベテラン聖騎士せいきしや神官に守られていたため、全く危ない  
思いをすることはなかったが、見習い神官のグンゾウも負傷した一般市民の手当などに  
駆り出され、忙しく働いた覚えがあった。

「それでねー、戦士ギルドでは強いつよ範士達マスターと一緒にオークン退治に行ったのー」

「うんうん。それは突然だったね。ヨシノは大丈夫だったの？」

「うん、あたしは後方で見ただけだったからね。そこでねー」

ヨシノはそこで一旦言葉を区切ると、リヨータの方に視線を向けて、再び軽いため息  
を吐いた。直後、グンゾウの方を向いて、耳元で話しかける。ヨシノの顔が近付き、グ  
ンゾウの鼻孔にふわっと良い匂いが漂った。

「リヨータがオークんに、勝っちゃったのよ」

「ほーう、すごいな」

「うん、それはね。でも、見習い戦士の中ではリョータだけがオークンを倒したもんだから、それから毎日食堂とかー、休憩所とかー、時にはトイレの外からリョータのオークン退治自慢を聞かされてー、もう疲れちゃったの」

「はは、子どもみたいだな」

グンゾウは顔をほころばした。

「ほんとー。リョータって基本子どもなんだよねー」

ヨシノも相好そっこうを崩くずした。普段は陰影がしっかりした顔なので一見怖く見えるが、笑うと幼い可愛い顔になった。

「おいおい。そこで俺様を差し置いて勝手に盛り上がってじゃねーよ」

リョータが嫉妬心丸出しでグンゾウを指差し、突っかかってくる。

——いつからこいつは「俺様」になったんだ。

グンゾウは大人の余裕を見せて、リョータを持ち上げてみた。

「いやいや、ヨシノが勇ましいリョータのオーク退治について説明してくれていただけだよ。最高に格好良かったって」

ヨシノが小さく「げっ！」と言った。

「え？　そ、そうかあ。やつぱり、ヨシノも格好いいいって。そう、そう、そうだよなあ。やつぱ俺って格好いいかあ」

リョータはお目当てのヨシノに褒められたと知って満足したのか、攻撃的な態度を改めた。

そうこうしていると、いつの間にかアキとシムラが中庭の入り口に立っていた。その後ろからはクザクのひよろ長い影がやる気なさそうにトボトボと向かってきている。

ヨシノが手を振って迎えている。

「おー！ アキちゃん、シムちゃん、おかえりー！ あとクザクくんも、おかえりー！」

——あとは魔法使いギルドの2人だけか。

「シムラ、アキ、お帰り。大変だったね」

グンゾウも2人に声をかけた。

「ただいまです。疲れたっすー」「ただいまです」

シムラはイガグリ頭が少しだけ伸びて濃い黒になっていた。アキは髪の毛が邪魔になつたらしく、ワンサイドでまとめて軽く編んでいた。

——ルミアリス神殿で少しみかけることはあったが、久々にすっかり見ると……。

聖騎士と神官は同じルミアリス神殿で修行をしているため、宿舎や本殿ですれ違うこともあったが、お互いかなり厳しい修練をしていたので、話す時間すらほとんどなかった。同じ見習い神官のグンゾウとタイチも1日2回程度しか話す機会がなかった。

規定修練における修師の厳しすぎる指導で、心身共に痛めつけられたグンゾウは、

久々のアキの姿に癒やされていた。

カズビコが場をまとめる。

「さて、魔法使いギルドの2人は待つとして、今日はシェリーの酒場でささやかにお祝いしよう。明日からはそれぞれの小隊で早速狩りだ。森の中にいる単独のゴブリンなら、そうは負けないみたいだよ」

久々のカズビコは爽やかさに精悍さが少し加わり、男っぷりが上がっていた。

みんな同意をして、魔法使いの2人を待つからシェリーの酒場に繰り出した。

全員で決めて、朝6時の時鐘で起き、狩りに出かけることにしていた。

グンゾウは鐘の音で目が覚めると周りを見回した。

——あ、義勇兵宿舎か……。

ルミアリス神殿の宿舎でないことを把握しただけで、少し幸せな気持ちになった。

グンゾウ達が寝泊まりしている部屋は4人部屋。2段ベッドが2つあって、それ以外は何もない。グンゾウは部屋の入り口から向かって左側の下段に寝ている。上はシムラ。向かって右側のベッドの下段にはリョータ、上段はハイドだ。最初は「俺様が上だ！」と言っていたリョータだったが、上半身を起こすと天井に頭をぶつけてしまうことに気付き一晩で考えを改めた。



今、隣のベッドではリョータがだらしなく口を開けて寝ている。シムラのいびきも上の段から聞こえる。ハイドの姿は見えない。

——もう少し、寝かしておくか。

グンゾウは昨夜かなり飲んだ気がしたが、特に二日酔いもなく中庭に顔を洗いに رفت。た。

中庭には既に眩しい程の日差しが振り注いでいた。今日は暑い一日になりそうだとグンゾウは思った。

中庭の井戸で頭から顔をザブザブと洗った。ついでに管理人から齒木しぼくに使える木を何本かもらっていたので、それを使い口を濯いだ。

身を清めた後、グンゾウは中庭に跪ひざまずいてルミアリス神に朝の祈りを捧げた。修師のお陰で規定修練は地獄のようだったが、規定修練自体が悪い内容とは思わなかった。ルミアリスの教えは深淵で、愛と希望に溢れていた。7日間の規定修練で生まれ変わった心地がしていた。そして、今は心からルミアリス神に帰依している。

礼拝を終え、グンゾウは中庭のベンチに座って、井戸水を汲んだ陶器のカップを眺めながらぼうつとしていた。

——朝ご飯とか、全然考えてなかったな。

ふと、周囲に目を向けると裏庭に向かう道に杖が落ちている。魔法使い用の杖つぼ

い。

——あんな所に杖を置きつ放しにして、ハイドかな？ それともノツコが昨日忘れていったかな？

グンゾウは杖を拾おうと、腰を上げると視点が高くなり、視野が広がる。

落ちてるのが杖だけかと思いきや、杖の向こうにハイドが手を中庭側に伸ばして倒れている。

「うおっ！ ハイド！ 大丈夫か?!」

グンゾウは一気に目が覚めてハイドに駆け寄る。急いで癒し手キュアを唱えようとしたが、抱きかかえたらぐっすり寝ているだけだった。

「なんだよ。驚かせるなよ」

少しだけ悪態を吐いてしまってから、グンゾウは反省はんせいした。

——もしかしたら具合が悪くて倒れたかもしれないし。神に仕える身なのに軽率だった。

よく観察をする。特に怪我をしている様子もない。夏なので風邪を引く心配もなかったため、とりあえず軒下まで運んで日陰で寝かしておいた。

——つくづく変わっている奴だな。夢遊病なのかな？

しばらくすると、ヨシノとアキが起きて、中庭までやってきた。

「おはよー、グンちゃん。お腹空いたー、朝ご飯食べにいこーよー」

ヨシノは朝から元氣さんであった。そのまま井戸の方に向かった。ヨシノの後ろを半分寝ているアキがふらふらと付いていった。たぶん、多少無理に起こされたのだから。

「おはよう。ヨシノ、アキ」

「お……よう……い……」

蚊の鳴くような声でアキが返事をした。

——そろそろ上の2人も起こすか。おっと、下の1人も起こさないとな。

なんとか全員起き、朝ご飯は南区の職人街にある屋台村で簡単に済ませた。宿舎に戻り、身支度を調え、全員で宿舎の入り口へ集合する時に事件は起きた。

先に入り口へ到着していたリョータとグンゾウ、そしてシムラで立ち話をしていた。リョータは戦士ギルドでもらった中古の鎖帷子チェインメイルに刃渡り150〜60センチはあろうかという両手剣ツヴァイヘンダーを装備している。

「オッサンは何であんなに酒が強いのか？」

「へ？ そうだった？ それ以前に俺の名前はオッサンじゃねーけど」

グンゾウが答えるとシムラも話に加わってきた。シムラは大きな木製の弓を抱え、

あさぬの  
麻布で出来た服の上に硬い革で出来た胸当てや肘・膝当て、弓懸ゆがけを装備していた。腰には劍鉈けんなたと呼ばれる刃物をぶら下げていた。劍鉈は枝や蔓つるの伐採や、狩猟で獲た動物の解体に使える大きな肉厚の片刃ナイフだ。敵との近接武器にも使えそうだが、リョータの両手剣と渡り合うのは難しいと思われた。

「そうつすよ。グンゾウさん、ドえらい飲んでましたよ。最後はリョータもカズヒコモ潰れちゃいましたし」

「え？ ほんと？ 全然覚えてないや」

リョータは「マジかよ」と呟いた。

そこに聞いたことがないようなハイドの悲痛な叫び声が聞こえる。ほとんど裏声になっっている。

「な、ななな、なんでっ?!」

「な、何言っているの？ ドイハっち。ちよつと誰か助けてー」

ヨシノが助けを求める。

弾け飛ぶようにリョータが走り出す。シムラとグンゾウも後を追う。

声のする中庭に着くと、ハイドが自分のより背の高いヨシノの腕を掴んで、必死で何かを訴えている。

リョータが乱暴にヨシノからハイドを引きはがす。ハイドは後ろにゴロつと転がる。

「てめえ、ぶつ殺すぞ！」

リョータがハイドに蹴りを入れようとする。

「待てっ、待てっ！」

リョータとハイドの間にグンゾウが割り込む。ヨシノはリョータの腕を引くが微妙に間に合わず、グンゾウが脇腹を蹴られる。

「おふっ！」

——折れた?!

息が止まる。グンゾウは脇腹を抱えてうずくまる。シムラがグンゾウに駆け寄る。

「グンゾウさん！ 大丈夫ですか?！」

シムラが心配そうにグンゾウの顔を覗き込む。呼吸が少しずつ戻り始める。

「……出発前だけで治療してもいいかな？ ちよつと、わりと、痛くて」

修練以外で初めて使う癒し手キュアがまさか自分に対してとはグンゾウも想像していなかった。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒し手キュア」

グンゾウの手に聖なる光が宿り、脇腹の傷を癒していく。グンゾウが自分の治療をしていると、騒ぎに気付いたアキが装備を調べて中庭に降りてきた。状況を見て、びつくりした顔をしている。フード付きの鎖帷子の上に神官衣を纏まとっている。鎖帷子も神官

衣も少し大きいのか、スカートのようになっていて結構かわいい。肩から長ロング剣のベルトをかけて、手持ちしていた。

ヨシノになだめられているが、リヨータはまだ息が荒い。

和やわらいでいく痛みの中で、グンゾウは事ことの顛末てんまつを確かめる。

「なんで、こんなことになったの？ んーっと、ヨシノから」

「いやー、わかんないんだけど。装備を調べてー、中庭に出てー、ドイハつちに挨拶したら、突然ドイハつちが『な、なんで、そんな格好してるんだー?!』って興奮し始めたの」

——そんな格好？

ヨシノは戦士ギルド支給の中古の鎖帷子に金属で補強された革手袋グローブ、長靴ブーツと特に違和感のある格好はしていなかった。リヨータと同じだ。違う点と言えば、武器が槍だという点か。

「それで、ハイドはなんでそんなことを言ったの？」

ハイドはくしゃくしゃの頭をこすりながら、辿々たどたどしく理由を話し始めた。

「キシ……、お、女戦士は……もつと、こう……」

「んだ、てめえ、早く言えやー！」

狂犬リヨータがきょんきょん吠えるため、ハイドが怯おびえて口が止まってしまう。

「リョータ、まあまあ、ちよつと待てつてハイドが話せないだろ」  
「そんな奴、どうでもいいんだよ！」

——俺を蹴ったこともきつとどうでもいいんだらうな。

アキとシムラは雰囲気飲まれてしまつて、沈黙して固まつている。

ヨシノも今回は自分が関係しているので、リョータを暴れないように抑えるのが精一杯で、いつものように仲裁はしてくれない。

「お、女戦士は！ もつと、ろ、露出してないとダメなんだつ！ キシ！」

ハイドが大きな声で叫んだ。

「ああん？」「はあ？」「えっ?!」「なんやて？」「??」

その場に居た全員から疑問符が飛び出た。

「ぼ、僕の知っている世界では、キシ、女戦士は、露出が高いつて、キシ、き決まつているから……」

続けてハイドは妄想みたいなことを真剣に語つた。ハイドの記憶では、女戦士はほぼ全裸に胸と局部だけを鉄板で覆つた位の装備で戦うのが一般的なので、ヨシノの装備を見た時に期待を打ち砕かれて取り乱してしまったということだった。

全員ほかんとして説明を聞いていた。

「そんなんじや、人前で戦えないよー。あたしはみんなを護まもつて前線で戦わないといけ

ないんだよ?」

ヨシノは呆れた顔をして、当たり前前のことを親切に説明してくれた。

「てめえはアホかよ」

流石のリョータも呆れて何も言えなくなつたようだった。グンゾウ達には過去の記憶がほとんど無いため、記憶が濃く残っているハイドの発言には少し説得力があり、強くは責められない。

「しかし、まあ、女戦士は半裸じゃなきゃいけないっていう世界の決まりがあるなら、俺は賛成しねえでもねえけどな」

そう言つてリョータはヨシノをちらつと見たが、ヨシノに逆に睨み返された。

「お、俺も、俺も」

何故かシムラが顔を赤らめながら乗つかった。

「そこ、乗つかるんかい!」

グンゾウはシムラのイガグリ頭を軽く叩いた。シムラはキラキラした目で振り返ると、笑顔で親指を立てた。グンゾウも笑顔を返した。

「あの、そろそろ行きませんか? カズヒコ小隊が待ってます」

アキが落ち着いた静かな声で軌道修正をしてくれた。

「そうだね。行こう」



グンゾウが仕切ると、リョータが口を挟む。

「オツサン仕切るなよ。よし！ 行くぞ！」

——面倒くさい奴だな。オツサンじゃねーし。蹴ったの謝ってねーし。

敵と戦う前に神聖魔法を使うとは思わなかったグンゾウだったが、とりあえず小隊の波乱を切り抜け狩りに出られそうなことに安堵した。

グンゾウ達は、カズヒコ小隊と北門まで一緒に行つて、そこで別れることにした。カズヒコ小隊は東の森へ、リョータ達は西の森へ行くことにした。

「じゃあな、リョータ、死ぬなよ！」

カズヒコがリョータに声をかけて、手を挙げる。

「へっ、お互いな」

リョータは強めのハイタッチをしてからカズヒコに笑い返す。

少し感傷的な場面を見た後は、お互い森の中に入っていった。

西の森の先にはダムローという廃都市があり、ゴブリンの根城となっている。そのため、西の森の方がゴ布林という怪物に遭遇する機会が多いと、昨日シエリーの酒場で先輩たちから話を聞いた。

このオルタナは山に囲まれた盆地にあるので、基本的には山道を歩いていくことにな

る。

グンゾウやシムラ、ハイドは軽装なのでさして辛くはないが、リョータ、ヨシノ、そしてアキは重装備のまま夏の山登りをしなければならず辛そうだ。移動するだけで体力を奪われる。

特に線の細いアキには厳しいようで、ちよくちよく休憩を申し出た。

太陽が真上に来るまでで、既に4回目の休憩を取っていた。

今は比較的広い山道の木陰で荷物をおいて休憩をしている。

「おいおい、こんなんじゃないや敵を探す前に日が暮れちまうぜ」

リョータは遠慮の無い台詞セリフを言った。

「リョータは優しくないな」

ヨシノに真つすぐ指摘されて、リョータは返す言葉に詰まっていた。

——本当にヨシノ以外には優しくないな。まあ、現実的にはちよつと進行が遅いけど。

強気な態度をしているがリョータも楽たがそうには見えなかった。ヨシノも休憩の度にストレッチをして、体の凝こりをほぐしていた。

——これで戦うつてすごいことだな。

軽装のグンゾウも額から流れ出る汗を拭くのに忙しかった。リョータに怒られてか

らグンゾウの後ろをびったりと離れないハイドも「フヒフヒ」と暑苦しい。

「アキ、荷物は俺が持とう」

「いや、あの自分で持ちます。持てるようにならないといけないから」

グンゾウが手を差し伸べるとアキはすまなそうに断った。

「わかった。もちろんそうだけど、今日は初日だし、敵と遭遇したらアキには前線で戦ってもらわないといけないから、俺が持つよ。装備の重さに慣れたら、自分で持つようにしましょう。今日はそうして欲しい」

グンゾウは有無を言わず、アキの荷物を持ち上げた。

「すみません……」

アキが消え入りそうな声で謝った。

——こういう時は「ありがとう」って真っ直ぐ甘えてもらった方が男は嬉しいのに。ヨシノの方がその辺りは上手そうだな。

グンゾウがそんなことを思っていると、森からシムラの声が聞こえてきた。ひとり元気なシムラは敵襲に備えるため、周囲を哨戒しやうかいしていた。

「みいーつかっちゃったあーっすー!!」

それを聞いて、グンゾウ達の間には緊張が走る。

「シムラアア、何匹ー!」

グンゾウが叫ぶ。ガサガサという音がして、シムラが斜面の上からグンゾウ達の前に飛び出してきて、地面に転がって受け身を取る。急いで立ち上がるとグンゾウ達の方まで走り寄り、グンゾウの後ろに回り込んで隠れる。それから指を2本突き出す。

「リヤンつす！」

——2匹。最初から複数いけるか。そして何故、俺を盾にする？ シムラ。

「しゃーつこの野郎！ 来いってんだ！」

狂犬はのっしのっしと歩いてきて、グンゾウ、アキ、シムラ、ハイドを背にするように立ってから両手剣を中段に構えた。

リヨータの左隣には槍を構えたヨシノが駆けつける。ヨシノは手槍と言っていたが、その槍は長い。穂も含めた長さはヨシノの身長よりも長く、180センチ程度ある。

「みんな、危ないからなるべく下がっててね！」

リヨータとヨシノの武器は長いため、混雑を避ける必要があった。

「荷物は置いて、下の道に下がろう！」

グンゾウが後衛を下げようとしたところ、黒い影が2匹森から飛び出てきた。2匹とも恐ろしい早さでリヨータとヨシノに襲いかかる。

「ギャツギャツツツツ」 「ギャー！」

噂には聞いていたが、初めて見たこの生き物は衝撃的だった。

やつらの名前はゴ布林。ゴ布林はこのグリムガルで最弱のモンスターと言われている。とても醜悪な姿だ。背は総じて人間の子ども程度だが、顔や体は皺だらけで老人のようだと言われている。

——老人に失礼だな。老人の方がきれいだ。

手斧を持つているゴ布林Aが、リョータの両手剣を手斧で叩いて交わすと、そのままリョータに肉薄し、「ギャー！」と叫びながらリョータを叩き切ろうと手斧を振り上げる。

「くっそ、なめんなー」

リョータは両手剣を振って、ゴ布林Aを剣の平で叩こうとする。

ゴ布林Aはリョータの腕に足をかけるとジャンプをして、後方宙返りし、間合いを取った。

「ギャギツギギャツ、ギイツヒツヒツヒ」

ゴ布林Aはいやらしい笑い声を上げた。言葉の意味は分からないが、人間の言葉で言えば「蠅が停まるくれえ遅えな、うえっへっへっへ」と言った感じだ。リョータは完全に舐められている。

剣を持つているゴ布林Bはヨシノに飛んで襲いかかったが、逆にヨシノの鋭い突きを喰らいそうになった。辛うじて身をよじって躲し、地面に胴体から着地すると、飛び

跳ねるように後ろに下がった。槍の射程が長いので懐ふところに入り込むタイミングを計っているようだ。ヨシノとの睨み合いが続く。

「ゴブちゃんには悪いけど、死んでもらうよ」

ヨシノの目は爛々と燃えている。

——本気になつたらリョータよりヨシノの方が怖いんだな。

戦闘せんとうが膠着こうちやくする。その間にグンゾウはゴ布林達を良く観察した。

ゴ布林の上半身は痩せているがお腹はぽっこりと出ている。緑色系の肌と尖った耳を持っている。黒目がちのつぶらな瞳をしているが、瞳の奥に非常に凶悪な意志を感じる。背は小さいが手足は人間のバランスより長く、そのためリーチが長い。また柔軟な体を目一杯使つて技を繰り出してくるので、とにかく動きが素早い。

睨み合いに焦じれたリョータがゴ布林Aに両手剣で斬りかかる。

「うおおおりやあああー！」

——振りが大きすぎる！

リョータの攻撃は素人のグンゾウから見ても大振りに見える。

「ギギッ！」

ゴ布林Aはリョータの両手剣をバックステップで躲すと、平然とリョータの腕と頭を踏み台にして、上空からリョータを抜く。

「なっ！ 俺を踏み台にしたあ!？」

リョータが間拔けな名台詞めいぜりふを吐く。ほぼ全裸のゴ布林Aが何かをぶらぶらとさせつつ空中から後列先頭にいたグンゾウに襲いかかる。思いつき振りかぶった手斧を小細工無しに振り下ろしてくる。

「くっ」

グンゾウはショートスタッフで手斧を防ごうとする。グンゾウも杖を使った護身法はちゃんと教わっていた。「ガチン」と金属同士がぶつかる音がして、ショートスタッフの飾りと手斧が噛み合う。変形ではあるが、罫迫りバインド合いの状態になる。

ゴ布林Aの体重は軽いが、全身のしなやかなバネを使い、全体重を乗せた攻撃は相  
当な威力があり、グンゾウの手に痺れが走った。

「い、今、今、は、早く」

グンゾウがシムラとアキに言うと後ろにいたシムラが慌てて剣鉈を抜き始めた。それを見て、隣のアキが長剣を抜き始める。

——おおお、遅い……。

「ギャッ！ ギャッ！」

シムラとアキが動き始めたのでゴ布林Aは罫迫りバインド合い状態の手斧を引いて、グンゾウから離れたようだった。しかし、ショートスタッフの飾りが噛み合ってしまった

けないため、グンゾウの顔に足をかけて力任せに引っ張って抜こうとしている。

グンゾウの顔がゴブリンAの足で変形していく。

「ウデデデデ、顔が取れるう、臭いイイデデ」

シムラが剣鉈でグンゾウの顔の上に乗っているゴブリンAに斬りかかる。

「往生せえやー！」

ゴブリンAは手斧を諦める。手斧から手を離し、グンゾウの顔を蹴って、後方宙返りをしながら剣鉈を躲す。顔を蹴られたグンゾウはバランスを崩して尻餅をつく。剣鉈を空ぶったシムラは倒れたグンゾウの足に躓いて、前のめりに転んだ。

「てやーっ！」

ゴブリンAが着地した場所にアキが両手持ちした長剣で横なぎに斬りかかる。

タイミング的には良かったが、アキの剣は腰が引けていて踏み込めていない。

ゴブリンAは軽々とバックステップで躲して間合いを取る。それから武器を失って空いている両手で拍手をして、グンゾウ、シムラ、アキの3人を馬鹿にするように笑った。

「ギイツヒヤツヒヤツヒヤツ」

言葉の意味は分からないが、人間の言葉で言えば「お前達の攻撃なんて当たらねえよ、うえっへっへっへ」と言った感じか。



「マリク・キシシ……、エム・キシシ……パルク！」

尻餅をついているグンゾウの頭上に青白く光る魔方陣が現れ、その魔方陣から光弾が発せられた。ハイドの魔法の光弾だ。

馬鹿笑いで油断していたゴ布林Aの顔面に光弾が直撃し、「ギャツ」という声を上げてゴ布林Aが後ろに倒れる。魔法の光弾は大人のパンチ程度の威力がある。

「おおっ」「おおっ」「わあっ」

グンゾウとシムラとアキが同時に声を上げる。

「ギギ……」

ゴ布林Aは眩暈めまいのする頭を左右に振って、立ち上がろうと上体を起こした。その瞬間。

「お前の相手は俺なんだよ」

ゴ布林Aの後ろで目を怒らせたリョータが、最上段に振り上げた両手剣を地面に叩きつけるように振り下ろした。

ゴ布林Aの開きが完成した時、ヨシノの槍はゴ布林Bの喉笛のどぶえを貫いた。

混乱はしたが、リョータ小隊初の戦闘は、大きな負傷者を出すことなく勝利を収めた。

「顔が臭い」

グンゾウはしかめつ面をしていた。川が近くになかったので水筒の水を節約しながら顔を布で拭いた。少しはましになったが、なんかゴブリンの足の臭いが顔に染みついていく気がする。

「オツサン男前になつたぜ」

リョータが「他人の不幸は最高に楽しい」という顔でグンゾウの肩をぼんぼんと叩いた。

——踏み台のくせに……。よし、顔の臭いが取れるまで、踏み台と呼ぼう。

「おーっし！ 戦利品を回収しようぜ！」

ゴブリン2匹の死に祈りを捧げ終えたグンゾウは、ショートスタッフに嵌まった手斧を知恵の輪のように解いていた。

「なんかグンゾウさんの杖、ええ奴ですね」

シムラがショートスタッフの高級さに気付く。

「ああ、そうかもね。修師マスターが自分の使ってたものをくれたんだよ」

「へー、ええ人ですねー」

グンゾウは修師を思い出して、震えながら暗い声で否定した。

「シムラ。俺の修師に良い人の要素は全くない。DS中のDSだ。この杖をくれた時だって……」

「トラウマスイッチ入れちゃいましたか？」

シムラはトラウマスイッチの入ったグンゾウからこそと離れていった。

「おい。なんかこつちのゴブリンは何にも持ってない気がするぞ！ どうなってんだ」

リョータが開きになったゴブリンAの死体を落ちていた木の棒で腑分けしながら悪態をついた。

「こつちは牙でできた首飾りだけー」

ヨシノもつまんなそうに報告した。

「キシ、キシシ」

ハイドがグンゾウの袖を引っ張る。

「ん？」

グンゾウがハイドを見ると、ハイドは茂みを指差した。視線をやると茂みの前にアキがかがんで丸くなっている。遠くからみると神官衣が白いので、卵みたいだった。グンゾウはアキの傍に寄って、話しかける。後ろから見るアキのうなじは白い。

「茂みに何かあった？」

グンゾウが声をかけるとアキが振り返る。アキの顔は透き通るくらい白い。そして、瞳は涙に潤んでいた。その潤んだ瞳をグンゾウに向けて、何か言いたそうに口を震わせている。

——かわいい。

グンゾウは心臓が一瞬掴まれたと勘違いするくらいドキリとした。アキはスローモーションでグンゾウに抱き付く。ふわっと女性特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。心臓の鼓動が跳ね上がる。

「あ、アキ、え、どう」

次の瞬間、アキはグンゾウの胸に吐瀉物としゃぶつをぶちまけた。

「え？」

「すいません！」

アキが本当に申し訳なさそうに頭を下げている。

「いやいや、大丈夫だよ、仕方ないよね」

「本当にすいません。私、血が苦手で……」

「いいんだよ、全然。若い女の子のなら歓迎だよ……つてのもなんか違うけど」

「……すいません」

恐縮して謝り通しのアキをヨシノが慰める。

「アキちゃん、大丈夫だよ。グンちゃんはそんな小さいことを気にする人じゃないから」

——流石にヨシノは持ち上げ方が上手いなあ。

グンゾウは神官衣の汚れた部分を内側にたたんで鞆の中にした。

「オツサン、今日は男前2連続だな。はっはっは！」

踏み台は本日2度目の「他人の不幸は最高に楽しい」という顔で大笑いをしていた。

「誰かさんに朝から脇腹を蹴られて、今日は3連続だよ」

グンゾウも嫌みで返した。思い出したのか、踏み台は言い返せず、言葉に詰まる。

「うう、まあ、ともかくだなあ。お宝が無え。ゴ布林袋とかいう奴が無えぞ。ヨシノが見つけた首飾りだけじゃ俺様の活躍と割に合わ無え」

踏み台が気まづくなつて話題を変える。

——そんなに活躍したか？ 踏み台。

「戦利品を持つてないゴブちゃんもいるつて先輩言つてたね」

ヨシノが牙の首飾りを指でいじりながら、残念そうに答えた。

「とりあえず、武器は屑鉄になるだろうから重いけど持つて帰ろう。首飾り、いくらで売れるんだらうね？」

グンゾウがヨシノに聞くと、みんなが適当に予想を始める。首飾りの値段を予想しあっていると、シムラがおずおずと手を挙げた。

「ん？ どうしたイガグリ」

踏み台がシムラに気付く。

「あのお、ゴブリン袋って奴なら、向こうで死んでるゴブリンは持つとったかもつす」  
「はあ?」「え?」

皆から疑問の声が上がる。

シムラが案内した場所には、頭を矢で貫かれたゴブリンの死体が転がっていた。

理由は簡単で、シムラは2匹のゴブリンに見つかったのではなく、3匹のゴブリンを見つけていたのだ。

バレずに倒せると思ったシムラは木の間に身を隠し、狙撃そげきで1匹を仕留めるも、居場所がバレて追いかけられたということ。

「勝手なことしてんじゃねーよ!」

「シムちゃん! 危ないでしょ!」

シムラは怖い兄さんと姉さんに怒られる。

「グンゾウきーん」

シムラはグンゾウに助けを求めてくる。

「駄目。少し怒られなさい。敵を見つけたら報告。その後、作戦を立てて、体制を調べてから攻撃。これがルールだっただろ? シムラが命を落としたらどうするの?」

シムラは一撃でゴブリンを沈める活躍をしたが、怖い兄さんと姉さんに散々たしなめられた。

シムラが倒したゴブリンは、革でできた結構立派な袋を持っていた。「よし、行くぜ！ ほらっ！」

踏み台は袋の中身を地面に全て出す。「カチン」と音がして4シルバーと綺麗な石が2個出てきた。

「おおー、やたあー！ うれしー！」

ヨシノが両手を上げて、跳ねて喜ぶ。

「これ、当たりとちやいますか？」

シムラが興奮して鼻の穴を膨らませた。他の仲間も嬉しそうにしている。そんな皆の様子を眺めてグンゾウは深呼吸をした。

——色々な波乱があつた。反省すべき点多々ある。でも、皆が無事で本当に良かった。

そんなことを思っていた。

グンゾウ達の義勇兵活動初日は順調な滑り出しだった。

## 11. それは幕あい、そして交わる点

夕方の市場は大賑わいだ。

夕飯の食材を売っていたり、仕事帰りの人間でごった返していた。商売品を宣伝する商人の大きな声と、値引きを求める客の声などが相乗効果で勢いを増し、市場中怒鳴り声だらけになっている。それに加えて、鍛冶職人の鎚を打つ音や商品の家畜の鳴き声などが混ざり合って混沌こんとんの様相ようそうを呈ていしている。

その買取り屋は市場の北門寄りにあった。いくつか並んだ露天商のひとつで、白髪で眼鏡をかけた「教授」とか「博士」と呼ばれていそうな雰囲気を持つ中年の男性がお店をやっていた。

「んー。これは1個25カパーつてところかな?」

買い取り屋のおじさんはゴブリンから獲えた戦利品の石を見つめながらそう答えた。

「えー、おじさーん、もうちよつとサービスしてえ」

ヨシノが語尾に甘えるような艶あでをもたせて、買い取り屋のおじさんに秋波しゅうはを送った。

「んんー。んんんー、じゃあ、1個30カパーでどうかなあ? ちよつとそれ以上は難し  
いかな、ほっほっほ」



「ちえー、あたしの魅力も5カパーかあ」

ヨシノは残念そうにため息を吐いた。

——見返り無しで1個5カパー増しは結構すごいと思うけどな。

最初の戦闘後は、昼過ぎに2匹狩った後、初日で疲れたため、慎重を期して帰ることになった。

帰路に2匹のゴブリンと遭遇し、結果としては午前3匹、午後4匹の計7匹のゴブリンを倒すこととなった。

転倒や衝突による多少の怪我<sup>けが</sup>はあったが、大きな怪我はなく、初めてにしては順調な滑り出しだと皆が思っていた。

人<sup>リョウ</sup>でなしは「誰も大怪我しなかったから神官は仕事してねーな、かっかっか」とのたまわっていたが、ヨシノに「グンちゃんが仕事しないのが小隊<sup>パーティ</sup>にとつて一番いいことですよ!」と怒られていた。グンゾウはいい気味だと思った。

——でも、ヨシノ。俺もちゃんと仕事してたよね。思い出して。

午後<sup>ノチ</sup>に倒した4匹もほぼ全裸に近いゴブリンだったが、銀貨2枚と最初に見つけた牙の首飾りに似たものが1個とポロポロの装備品が手に入った。2つ目の首飾りは大きな牙が5つも付いていて少し立派だった。

初日の戦果は銀貨6枚、綺麗な石(1個30カパー)2個、牙の首飾り2個(大と小)、

その他屑鉄の装備品だった。

首飾りは買取り屋さんに「首飾りとしては価値は無い」と言われ一瞬全員がっかりしたが、材料の牙は黒狼こくろうの牙ということで、1個1シルバーにもなった。狩人が信仰する白神のエルリヒと敵対している黒神ライギルの眷属けんぞくが黒狼である。黒狼は呪術的な力宿っていると信じられていて、魔除けの材料などになるそうだ。

——あのゴブリンは牙を5つも身に着けてて殺されちゃったから、あんまり御加護はなさそうだな。

とグンゾウは思った。

それ以外に持ち帰った装備品が重かった割には7匹分全部で20カパーにしかならず、皆とても残念な気持ちになった。

宿舎代を差し引くと、ひとり2シルバー10カパーの稼ぎだ。グンゾウ達にはこれが良いのか悪いのかわからなかったが、とりあえず2〜3日分の生活費にはなりそうだと思った。

——今日もみんなでシェリーの酒場にでも行こうかな？ あ、でもその前に汚れた神官衣を洗わないと。

グンゾウはお酒が飲めると思い、少し嬉しくなって鼻歌を歌った。

「あの森はあ……効率が悪い」

「ここはシェリーの酒場。さつきまで寝落ちしかけていたろくでなしが突然切り出した。蒸留酒スプリットが回り、完全に目が座っている。

貧乏人のグンゾウ達にとつて醸造酒エールはアルコール度数の割に値段がはるため、蒸留酒を飲んでいゝ。色々種類はあるが、いまグンゾウ達のテーブルで飲まれているのは芋を材料とした蒸留酒だ。蒸留の回数が多いのか、強烈にアルコール度数が高い。ボトル一本で24カパーというお手頃価格だ。2〜3人で飲むなら一本でしつかり酔える。井戸水とどつかの魔法使いが氷結魔法カノンマジックで作り出した氷で割つて飲むと美味い。ただし、グンゾウはそのまま生キでぐいぐい飲んでいた。

「わかるよ。わかる。お前の言っていることはもつともだ」

グンゾウは優しく受け止めてあげる。

「だろお？ オッサン話がわかるな。……おらあね、もつと、ばつたばつたとゴブリンを切りたいわけ……。つーか、あんなの楽勝なわけよ、はわああああ」  
酔リヨっ払いタが大きなあくびをする。グンゾウは適当に相づちを打つ。

「そうかそうか」

「だけどよ、森の中にはあんまりいねえから……。歩き回らなきやいけないし、木が邪魔で狭せめえだろ？ 俺様の力が出せないわけですよ」

——おっと、敬語になった。

「……だから……」

「だから」の続きを告げずに酔っ払いリョータはテーブルに突っ伏して寝てしまった。

それを一緒に見ていたカズヒコとグンゾウは笑う。テーブルにはリョータ、カズヒコ、そしてグンゾウの3人だけが残っていた。

他のメンバーは夕飯を食べると、義勇兵初日に疲れたのか、宿舎に戻っていった。

「お酒ご馳走になってすいません。」

カズヒコが笑いながら頭を下げる。

「いやいや、安い酒だし。もっと稼げるようになったら美味しい酒飲もうよ」

「是非！ いやあ、正直リョータパーティ小隊が羨ましいです」

「そう？ リョータコンがリーダーでも？」

「ははは、まあ、リョータコンがリーダーでも、ですね」

グンゾウとカズヒコが一緒に笑う。

その後、カズヒコは少し真剣な顔になる。

「リョータが戦士つてのは頼もしいですよ。しかも後ろにグンゾウさんとか冷静に指揮ができる人がいるじゃないですか。うちは僕が全部やっているとところがあって、指揮しながらだと戦いに集中できないし、戦いに集中しちゃうと動きがバラバラになっちゃ

うってのがあります」

「なるほどねー」

宿舎で合流した時、カズヒコ達の小隊はあまり芳しい<sup>かんば</sup>戦果ではなかったと聞いていた。最初は穴鼠に翻弄され、その後遭遇したゴブリナー匹には散々怪我<sup>けが</sup>をさせられ、全滅の憂<sup>うれ</sup>き目に遭うところだったとのこと。タイチは治療に奔走<sup>ほんそう</sup>したらしい。

「あとは、職業<sup>クラス</sup>と性格の問題かなー？ リョータのところは勇敢な2人が前衛にいてのはいいです。うちは僕も含めて、みんな臆病なので」

「慣れるまで仕方ないよね。でも、その間に命を落としたら洒落にならないしなー」

「……です、よね」

カズヒコの顔はますます暗くなる。

——うーん、俺やハイドを選ばなかったのはカズヒコだとしても、このままカズヒコ達に何か有ったら可哀想だしな。

「じゃあ、各人戦闘に慣れて、スキルとかいくつか覚えるまで一緒に行動するか」

「本当ですか？」

カズヒコの顔が明るくなる。

「まあ、リョータ次第だけど。ちょっと持ち上げれば、全然大丈夫でしょ。ヨシノやアキは安全重視派なので、人数多い方が喜ぶと思うよ」

「ありがたいです」

カズヒコは立ち上がると、グンゾウの手を握って頭を下げた。

「ちよ、ちよつと止めてくれよ。まだ小隊の決定はわからないし。俺もカズヒコには感謝してるんだ。最初色々まとめてくれて、助かったよ」

「ありがとうございませす」

カズヒコは爽やかに微笑を浮かべた。

「そして、さつきリョータが言っていたことも、解決策を調査済みなんです」

「え？」

グンゾウは間抜けな声を上げた。

「ダムローの旧市街を中心に狩りをしていた義勇兵の小隊、通称ゴ布林スレイヤーと呼ばれる人達が最近には獲物をサイリン鉱山のコボルトに変えたようで、ダムロー旧市街で狩りをしている義勇兵はいないみたいなんです」

「ほうほう」

「だから、ダムロー旧市街にはゴ布林が沢山いるそうなので、そこで狩りをすればリョータも、沢山のゴ布林を、木に邪魔されることなく狩れると思うんですよね」

——カズヒコは調査力高いな……。

「よく調べたね。誰から聞いたの？」

「え？ あー、夕方くらいにオルタナに戻ってきてから、市場にいた女の子の義勇兵に声をかけたら教えてくれました、あはは」

カズヒコは爽やかに笑ってみせた。

——んー。女たらし臭が半端ないぜ。

「俺はダムローに行く前に、2、3回は森で狩りをして、各人の役割を確認したいな。慣れとかなないと怖いしさ」

「そうしましょうー！」

——10人くらいだったなら目も届くし、なんとかなるかな？

グンゾウが対ゴ布林戦をどう指揮したら良いか想像を巡らせていると、カズヒコがグンゾウの肩を叩いて、少し声を押さえて話しかけてきた。

「来ましたよ。あれがゴ布林スレイヤーです。実は義勇兵宿舎の1号棟に住んでいますけどね」

グンゾウはカズヒコが指差したゴ布林スレイヤーと呼ばれる義勇兵の小隊を見た。彼等はグンゾウ達より少し前に義勇兵になったらしい。記憶喪失組だ。ゴ布林スレイヤーという名称は名誉のある呼び名というよりは、いつまでもゴ布林ばかりを相手に行っているその小隊へ、ベテラン義勇兵から皮肉を込めて付けられた名称だ。

全員が若い。10代半ばから後半といったところだ。男の子が2人に、女の子が2

人。

鎖帷子チエインメイの上に革レザー鎧アーマーを身に着け、長剣ロングソードを担いだ、小柄な天然パーマの少年を先頭に、1階隅の薄暗い卓に陣取った。

残りは、大きな弓を持ったお下げの女の子と、魔法使いの杖を持った女の子、そして酔っ払い位の大きな体格で優しそうな顔をした男の子だ。彼はバスタードソードを壁に立てかけた。

——4人小隊……なのかな？

「あの魔法使いの女の子は胸が大きすぎますね」

カズヒコが呟く。グンゾウも魔法使いの女の子に目を遣る。

「確かに、あれは暴力だな」

グンゾウも呟く。

魔法使いの女の子は遠目でも分かるくらい立派な胸の持ち主だった。グンゾウはどちらかと言えば体も胸もスリムな女性が好きだったが、気になるものは気になってしまふのが悲しい男の性だった。

隣でカズヒコの喉が「ゴクリ」と音を立てた。グンゾウは蒸留酒をチビりと飲んだ。喉が焼けるように熱い。

——よく考えたら、みんなあっちの方はどうしてるんだろう？ 若いわけだし？ そ



ういう店とかもありそんな気もするけど。今度、情報通のカズヒコに聞こう。是非とも聞こう。でも聞くだけ。聞くだけだけどね。神官だし。聖職者だし。

酒場のドアがまた開き、今度は男女の2人組が入ってくる。そのまま、ゴ布林スレイヤーの席に合流した。遅れてきた仲間のようだ。男は盗賊のような動きやすい格好をしていて、女は神官衣にショートスタッフという出で立ちだった。

「あの女の子はヴェール級ですね」

カズヒコが再び呟く。

「確かに、あれはメジャーリーグ級だな」

グンゾウも再び呟く。「メジャーリーグ」の意味はわからない。

カズヒコの言った意味は分かる。遅れて来た女性はヴェールを彷彿とさせる美女だった。美少女とも言える年齢かもしれない。その移り変わりの美しさがまた魅力的だった。そして、顔の小ささ、手足の長さ等のバランスが異常に高いレベルでまとまっていた。

——異次元、別格、ふさわしい言葉に悩む。すっごい美人だけど、異次元感はヴェールの方が上かな？ あの子は生きていて、血の通った感じがする。ヴェールは……。

カズヒコもグンゾウもゴ布林スレイヤーの美女神官に見とれて呆けていた。その時は記憶にも残らなかつた盗賊風の男が、その小隊のリーダーであることを後々知るこ

ととなる。

そして、時間ときは元の流れに……。

「グンゾウさん、みんな行っちゃいますよ?」

アキの少し低いけど、かわいらしい声でグンゾウは急に我に返った。上目遣いでグンゾウの顔を見つめている。横に流したアイライン前髪バンゲから少し垂れた目が覗いていた。

——今、俺は何を……。

周りを見渡すとそこは先程ゴブリンを倒した林の中の河原だった。いつも後ろにいるはずのハイドがいない。

「どうかしましたか?」

アキが心配そうに聞いてきた。

「あ、ごめん、なんかグリムガルに来てからのこと、思い出しちゃって」

グンゾウは慌てて答える。

「そうですか、大変……でしたもんね」

アキはいつものように伏し目がちの表情になった。

「私、足が遅いから行きますね」

アキは後ろを向くと、鎖帷子をチャリチャリと音をさせながら、駆け足気味に仲間の後を追つていった。ワンサイドで軽く編んだ髪の毛が左右に揺れる。

林を抜ける涼しい風がグンゾウを包み込むように吹いた。グンゾウは目を閉じて、無意識にルミアリス神へ祈りを捧げた。

——良し。行こう。

グンゾウは仲間の背中を追った。

## 12. ダムロー旧市街攻防戦（前編）

オルタナの街に時鐘じしょうが鳴る。今朝の空のように澄んだ音だ。

時鐘より前に起きていたグンゾウは中庭に立ち、空を見上げる。雲ひとつ無い蒼穹そうきゆうは高く、そして広い。鳥達が群れを成してパステルブルーの空を渡っていった。まだ早朝のため爽やかな気温だが、今日も暑くなりそうだと感じた。

眩しい朝日に目を細めながら、ルミアリス神へ祈りを捧げる。昨日までの無事に感謝を、今日からの無事に願いを込めた。

祈りの後は、ショートスタツフを使って護身法の型を復習する。

いざという時、自分の身を守ることができなければいけないと思つて始めた。日課になりつつある。

型の練習が終わると、かいた汗を井戸水を浴びて流した。

——夏は井戸水で良いけど、冬はお風呂だな。

グンゾウは思った。

次は裏庭で倒れているハイドを起こしに行った。これもグンゾウの日課になっている。

何故かハイドは毎朝裏庭か、中庭と裏庭の間の道で寝ていた。ハイドには夢遊病の気があるのではと、グンゾウは疑っている。

裏庭の奥は小さい雑木林ぞうきばやしになっていた。コナラやクヌギ、カシ等が自生している。今日の日ハイドは随分と雑木林の奥の方で寝ていた。雑木林の木が倒れて獣道になっており、その一番奥で倒木に寄つかかかって寝ていた。

——どうして、あんなところで？ 夜寝苦しくて、涼しいところを求めているのかな？ これも夏は良いけど、冬は凍死しちゃうから、なんとかしないとな。

「ほら、ハイド起きろ」

グンゾウはハイドの肩を揺すって起こそうとした。しかし、なかなか起きない。また起こしに来るのが面倒臭いので、寝ているハイドを背中におぶい、落ちている魔法メイジ使いの杖スタッフを拾って、中庭まで運んだ。

——重い。修行だと思おう。同じおんぶでも、これが女の子ならもう少しテンション上がるだけだな……。

中庭に戻るとヨシノが起きて槍の素振りをしていた。

「おはよー、グンちゃん」

「おはよう、ヨシノ」

初狩りしじり以来、ヨシノは早く起きて槍術そうじゆつの鍛練たんれんをしている。一度、棒術対決をしたが、グ

ンゾウはこてんぱんにやられた。

また、最近はそのアキも早く起きて、守護剣闘術の鍛練に勤しんでいる。

——うちの女子は真面目だ。

グンゾウは景色の良くなった中庭の椅子に座ると、水出しのカウヒー茶をすすった。

「よし。各自装備の確認をしよう。忘れ物は無いようにね」

皆がガチャガチャと音を立てて、装備の確認をしている。

義勇兵宿舎2号棟の中庭で、カズヒコが出発前に事前説明を始めた。

「最近ダムローに行った義勇兵はいないみたいだけど、ダムロー旧市街は初心者向けと  
 いてもゴブリンの密集度は森の比ではないらしい。5人以上の隊を組んでいるゴブ  
 リンもごろごろいるらしい。チョコとシムラに斥候をお願いして、なるべく先に見つけ  
 てから、挟み撃ちや先制攻撃を仕掛けよう」

「斥候なんてせっっこうーいのー」

隣でシムラが渾身の駄洒落を放つ。ミッツやタイチは必死に笑いを堪えている。

——くそつまらない。つまらなすぎて笑える。でも、笑ったら負けだ。笑ってはいけ  
 ない。

「せっっこうーいのー」

シムラがしつこく駄目押す。既に顔芸かおげいを加えて、力業ちからわざで笑わそうとしている。

「5点だな。……100点満点で」

リョータが仏頂面ぶつちやうめんで言い放った。

「まさか、そないな！」

シムラはがつくりと頭と肩を落とした。

「えーっと、続けていい？」

カズヒコが苦笑いしながら確認した。皆、首肯しゆけんする。

——リョータりょうた小隊ちは緊張感が無い。身内相手みうちあてでも恥はずかしい。

「近接戦闘が始まったら、リョータも僕も目の前の敵にかかりきりだから、隊の指揮はグンゾウさんに任せる。特に撤退の指示は絶対を守ることに。グンゾウさんが笛を長く吹いたら全員撤退。グンゾウさん何かありますか？」

カズヒコはグンゾウに話を振る。グンゾウはショートスタツフの石突きで地面に絵を描きながら説明を始めた。

「みんな地面の図を見てね。再確認だけど、ダムローは市街地だから平地で戦うことが多いと思う。だから陣形は大事だ。攻める時も引く時も、敵との最前列はヨシノ、クザク、カズヒコ、ミッツ、リョータの5人が等間隔に“W”の文字で並ぶこと」

グンゾウは左右の線だけ長く、真ん中はほぼ平らな“W”を地面に書いた。

「ヨシノとリョータは攻撃の要だ。なるべく踏み込んでゴブリンを包囲。カズヒコ達は連携して正面を絶対突破させない気構えでよろしく」

ヨシノは「ほーい」と言いながら左手を挙げた。リョータは「つたりめーだ、オツサン」と憎たらしく笑う。カズヒコ、クザク、ミッツも頷く。

グンゾウは続ける。

「中列は4人、アキ、シムラ、タイチ、俺。中列は前列の支援と情報の伝達だよ。アキは前列が怪我した場合治療の間、交替して。無理はせず防御に徹すればいいから」

アキが神妙な面持ちで頷きながら、盾を抱きしめた。

——盾になりたい……。

「後列はハイド、ノツコ、チヨコで。チヨコはハイドとノツコの護衛。あと後方の警戒を」

チヨコが大きい目をクリクリさせながら、グンゾウに頷く。

「魔法の使いどころはハイドに任せる。嫌だろうけどノツコはハイドと協力して」

「キシシ、任せる、僕は最強、キシシキシシシ」

ハイドはいつの間にかグンゾウの斜め後ろにいた。ノツコは「あはは、了解」と苦笑しながら、ハイドをちらつと見た。

——わかるよ、ノツコ。でも魔法を使うタイミングとか上手いんだ、ハイドは。みんな



なは気付いてないかもしれないが、ハイドは魔法の光弾を自由に曲げられるし、命中精度もシムラの弓矢より高い。

最後にグンゾウが確認をする。

「あつてはならないことだけど、囲まれた場合も役割は同じで。前列5人が五角形になつて広がり、隙間に中列の4人、真ん中に3人だ」

グンゾウは同じく地面に円陣の図を描いた。

——全然完璧じゃないけど、今はこれが限界だな。後はみんなの成長に期待するしかない。

「以上、説明終わり。じゃあ、最後にリョータ先生からありがたい一言をどうぞ」

「うえあつ?」

突然話を振られたリョータはどぎまぎして、何も言えない。

「リョーター、早くー」

ヨシノも悪のりして、楽しそうに囁す。リョータは咳払いをしてから一言。

「よし! お前ら、絶対ふざけるなよ! ダムローまで静かに行くぞ! ダムローまで黙ろー……みたいな」

その場にいた全員が凍りつく。

初夏のオルタナに一陣の涼風が吹き込んだ。

——3点だな。……1000点満点で。

ダムローはオルタナの北西から徒歩で小一時間程度の距離にある……とグンゾウ達は聞かされていた。

しかし、道のりは山あり谷ありゴ布林ありで、重装備のグンゾウ達が小一時間で着くことはなかった。

「誰だよ、小一時間で着くって言ったやつ。見つけたら、ぶっ飛ばす」

リョータが30分前にゴブリンの死体を踏みつけながら言った台詞だ。

——ついでに寒い駄洒落を言った奴もぶっ飛ばしてくれたいのに。

かつてはアラバキア王国第二の都市で、天竜山脈の北側で最大の街だったそうだ。その名残のような建物が残っている土地だ。

グンゾウ達が目指したのは南東部の旧市街で、ゴ布林による再建が進んだ新市街と異なり、あまりきれいな建物は残っておらず、ゴブリンの社会でも弱者の地位にあるゴ布林たちが主に住んでいる。

そのため、新米義勇兵たちが実戦経験を積むのには、うってつけの場所だとされている。

森が開け、山腹の上から見下ろしたダムローは白く美しい都市遺跡に見えた。

「わー、きれー！ はっやくいっこー！」

ヨシノはダムローが気に入ったようで、歌を歌いながら歩いて行つた。

——あれが、ダムローか。確かにきれいな街だな。それにでかい。奥が見えない。

グンゾウはダムローの周囲も含めて、全体を俯瞰して見渡した。現在グンゾウ達が立っている場所と同じくらいの標高で、ダムローの西、森の中に石造りの塔らしき建物が建っている。

「あれはなんだろう？」

情報通のカズヒコに聞いてみた。

「監視塔？ かんしとう 狼煙台？ のろしだい ですかね？」

カズヒコも情報がないようで、珍しく曖昧な回答だった。

グンゾウは現在の位置とダムローと塔の位置関係、そして疑問に思ったことを手帳にメモをした。

「グンゾウさん、几帳面ですね」

シムラがひよっこり手帳を覗いてきた。

「ああ、癖なのかもね。すぐ忘れちゃうから、見た事実と日時、その時思ったことを分けてメモしておくんだよ」

「すごいですねー。でけへんなー」

シムラはイガグリ頭をぼりぼり書きながら、歩いて去って行った。

——シムラ、大人になったら人の手帳は覗き込まない方がいいぞ……。

遂にグンゾウ達はダムロー旧市街に到着した。正確に言うると、旧市街の正門「ブラスラマゲート」「繁栄門」が見える位置まで来た。過去は壮麗な姿を誇っていたのかもしれないが、今となつては壊れたボロボロの石組みを見せているだけだった。

ようやく森の一本道を抜け、旧市街手前の平地に出ることができた。門まで100メートル強というところだ。

「よしっ！ やつと到着した。攻め込むぜ！」

リョータが声を上げたと同時に、1本の矢がミッツの足下にグサツと地面に刺さる。

「へあ？ あへへへ、ははっ？」

——ミッツの感情はどうなっているんだ？

ミッツが驚いていると、繁栄門の方角からさらに何本か矢が飛んでくる。

繁栄門の脇には壊れかけの物見櫓ものみやぐらが建っており、あそこから狙われていると考えるのが妥当に思われた。

矢は遠くから放たれているためか、どれも威力はない。直接肌に当たってもすり傷程度にしかならないと思われたが、明らかにグンゾウ達を狙って放たれている。目に当た

ればもちろん危ない。

「みんな、弓で狙われている。陣形を固めて」

カズヒコが号令をかける。「うつす」「へへっ」とクザクやミッツが前に出て、武器を構える。残りは後ろに下がる。

「いきなりのご挨拶だな」

リョータは右翼に展開して、両手剣ツヴァイヘンダーを構えると楽しそうにニヤツと笑った。

繁栄門の方角からゴブリンと思われる一隊が走りながらこちらに向かってくる。

——多いな。6匹、もつとか？

「後衛も抜刀して」

グンゾウは声をかけながら、ショートスタッフを構える。

「1、2、3、……いっぱい」

シムラは既に弓を構えながら向かってくるゴブリン達の数を数えていた。

「ん。9匹だね。もしかして、やばい？」

チヨコが誰に対してというわけでなくダガーを構えながら発言した。チヨコは目が良い。目が大きいと視力も良いのかと疑いたくなる。

——9匹は多いな。それに動きが整然としている。

ゴブリン達が横4×2＋後列1の隊列を組んでこちらに向かってくる。どんどん近付いて

くる。ゴブリンには違いないが、今まで目にしたゴブリンと少し異なっていた。

錆びていない槍や剣を持ち、多くが帽子のような兜かぶとを被っていた。そして何匹かは鎖帷子チェーンメイルを身に着けて、半分近くのゴブリンは盾を持つている。

また、動きに乱れが無く、隊列を組んでキビキビと行動している。

今まで出会ってきたゴブリン達は基本的にやさぐれていていた。格好もみすぼらしく、ほとんど半裸又は全裸であった。徒党を組んでいても戦術的に連携した動きをすることはなく、個々がバラバラに攻撃をしかけてくる感じだった。

今、目の前にいるゴブリン達は違う。30メートルくらい離れた場所でゴブリン達が一斉に止まり、武器を構える。まるで決闘シーンのようだ。

ゴブリンが初めて整った動きをしていることに、今までにない緊張感がグンゾウ達に走る。

「イガグリ、早く撃てよ！」

リョータが苛立つように、しかし声を押さええて言う。

「もう……少し」

シムラが最高に弓を引き絞った状態で集中をしていた。

「あたし、初めて緊張してるかも……」

左翼にいるヨシノが呟く。

グンゾウは隣にいるアキを見た。アキは右手に長剣ロングソードを持ち、左手で盾を構えている。その手が震えている。グンゾウは手を伸ばすと、アキの鎖帷子のフードを頭に被せてあげる。

アキがグンゾウの方を見る。不安そうな目だ。

グンゾウは声を出さず、口の形だけで「大丈夫」と言い。前面のゴブリンに向き直る。

「ちっ！ 来いよ、このクソ野郎ども！」

痺れを切らしたりリョータが大声で叫ぶ。すると、ゴブリン達の1匹が「ギャギャッ」と声を発し、戦端せんたんが開かれる。

「ギヤアギヤア」「ギツギツ」「ギャッギツ」「ギヤアギー」と一斉に声を上げて、ゴブリン達が突撃をしてくる。前列は盾持ちが多い。

一閃。

シムラの放った矢が前列の槍持ちゴブリンAの右目に突き刺さる。ゴブリンAは崩れ落ちた。

すかさずもう一射、今度は隣の槍持ちゴブリンBの肩付近に当たり「ギャッ」と声がある。こちらは鎖帷子を着ている。動きが一瞬止まったが、すぐに矢を抜くと隊列の後を追ってきた。

シムラの活躍で1匹を倒し、1匹は足止めをしたが、他のゴブリン達は怯むことなく

突撃してきた。もうシムラの弓が使える距離では無い。

金属のぶつかり合う音がして5対7の戦いが始まる。

リョータとヨシノはそれぞれ2匹のゴブリンを相手に戦っている。クザク、カズヒコ、ミッツは1匹ずつ相手をしている。

左翼のヨシノは槍を長く持ち、横薙ぎよこなの動きを多用して、2匹のゴブリンC、Dと距離を取って戦っている。ゴブリンC、Dは共に剣盾持ちゴブリンのため武器の相性は良い。しかし、複数相手では攻め手にかけるようで、攻めに回るのは難しそうだ。

右翼のリョータは「オラツオラツオラツ！ 無駄ア無駄ア無駄ア！」と声を出しながら、両手剣を振り回している。ゴブリンEは剣盾持ち、ゴブリンFは槍に鎖帷子を装備している。両方とも動きが遅いためゴブリンだ。リョータが苦手な高速ゴブリンではないが、複数相手なので、やはり攻めあぐねている。

クザクはゴブリンGと1対1の形を作っている。ゴブリンGは少し大柄で、鎖帷子を着た槍持ちゴブリンだ。長剣との武器の相性は悪そうだが、クザクが体格で威圧感を与えて、ゴブリンGを攻めにくそうにしている。クザクにしては気合いの入った戦いをしている。

ミッツは危なっかしい。ミッツは相変わらず腰が引けているので、カズヒコがゴブリンHと手負いのゴブリンBの2匹を牽制している感じだ。



一匹のゴ布林だけ、動かず30メートル先にいる。明らかに雰囲気が違う。紅色に塗られた金属の甲冑かっちゆうを纏まとい、槍と盾を持って直立不動の姿勢でいた。

——あのゴ布林がリーダーなんだな。こいつらは野良ではなく、正式な軍隊だ。

「シムラ、隠れて狙える?」

グンゾウはシムラに聞くと、視線をゴ布林・リーダーに向けた。

「がってん」

シムラは射線に仲間が入らず、射撃できる隠れ場所を探しはじめる。

「ハイド、ヨシノかりョータの支援ができないか?」

グンゾウはハイドに尋ねた。

「フ、キシシ、まだ、まだその時じゃない、キシシ」

「ノツコでも駄目?」

「キシ、駄目!」

ハイドは強い決意を持って答えた。ハイドは魔法の節約に関して厳しい。使うべき時には連続して使うこともあるが、使わないと言う時には絶対に使ってくれないところがある。

——ゴ布林・リーダーが動き出す前に数を減らしたい。あれはリョータかヨシノがタイムマンじゃないと厳しいだろう。援軍も怖い。

グンゾウはアキに目を向ける。

「アキ、ヨシノとクザクの間に入って、一時的に1匹をヨシノから剥がしてきて。ヨシノがすぐにもう1匹を倒すはずだから、そしたら戻ってきて。俺も付いていくから」

「は、はい」

アキは一瞬驚いたが、すぐに動き出す。

「グンゾウさん、森を通って、あっちの茂みまで移動します」

シムラが西にある茂みを指差しながらそう言うのと、ゴ布林達に動きを察知されないように森の中に入って行った。

「わかった。えーっと、タイチ、誰か怪我したら回復を。抜けた穴はチヨコが埋めて。1匹引きつけるだけでいい。無理はしないで。ハイドは周りをよく見てなんかあったら報告をくれ」

グンゾウは後衛に指示を出してから、アキの後を追って移動する。

後衛の動きも慌ただしくなる。

「てやつー！」

アキが長剣を右斜め上から袈裟懸けに剣ゴ布林Cへ斬りかかる。剣ゴ布林Cはとつさに躲すが、ヨシノだけに注目していたため左腕を皮一枚切られる。

「ギャツギャツギャツ！」

言葉の意味は分からないが、人間の言葉で言えば「なんだ、てめえ、ぶつとばすぞ！」と言った感じか。

今度は剣ゴ布林Cがアキに斬りかかろうとする。アキは左手の盾で剣を防ぐと、右手の長剣を突き出す。剣ゴ布林Cも盾でアキの突きを防ぐ。

「ありがとー、アキちゃん！」

ヨシノは嬉しそうに槍を振るい、剣ゴ布林Dを圧倒し始める。

「ええい！」

ヨシノは左手で槍を捻<sup>ねじ</sup>るように突き出す。剣ゴ布林Dが躲すと、すぐに槍を引き戻す。槍を引き戻した反動を利用して反時計回りに体を回転させると、回転の勢いを殺さず、そのまま勢いを槍に乗せて右上から左下へ振り下ろす。まるで舞を舞っているかのような美しい動きだ。

剣ゴ布林Dは盾で槍を防ごうとする。しかし、早さと重さを備えたヨシノの槍はそれを許さない。剣ゴ布林Dは「ギャン！」と声を上げて、盾ごと吹き飛ばされ、横に倒れる。

「バイバイ、ゴブちん」

すかさずヨシノは首元に槍を突き立てると、捻<sup>ひね</sup>つてから抜く。剣ゴ布林Dは痙攣<sup>けいれん</sup>を

している、恐らくもうすぐ死ぬだろう。

その時、劍ゴブリンCとアキは鏢バ迫り合ドいをしていた。劍ゴブリンCの背は低い、膂りよりよく力はアキより上のため、押されている。

「ギイツヒツヒツヒ」

劍ゴブリンCがいやらしい笑みを浮かべて、鏢バ迫り合ドいのままアキを押し倒そうと力を込める。アキは顔をゆがめて、盾を持つている左手も使つて必死で押し返そうとしている。

「させるかよー！」

グンゾウは駆けつけると劍ゴブリンCの踏ん張っている足の脛すねをショートスタツフで薙ぎ払う。脛は相当痛いだろう。さらにグンゾウは劍ゴブリンCの後ろ頭に蹴りを入れる。劍ゴブリンCは前につんのめり、倒れる。

——アキを押し倒すなんて、一生早い！

アキはほっとして、脱力する。長劍と盾が下がる。

「止め！」

グンゾウはアキに叫ぶ。

「は、はいっ！」

アキは急いで長劍を持ち直す。

——まずいつ。

劍ゴブリンCはすぐに起き上がると、下がりながらアキを切りつける。盾は捨てたようだ。

「きゃっ!」

アキは右腕と脇腹を劍ゴブリンCの劍で切られた。正確には鎖帷子を着ているため、切り傷にはなっていないだろうが、痛かったはずだ。神官衣は横一文字に裂けている。

グンゾウは劍ゴブリンCとアキの間に立つて、ショートスタツフを正眼せいがんに構えると状況を確認する。

「アキ、怪我は?」

「大丈夫……です」

アキの消えそうな声が背中越しに聞こえてきた。

「油断しちゃ駄目だ。切られたのが首なら死んでるぞ」

「はい……。ごめんなさい」

「無事で良かった。……中列に戻って、ハイド達の護衛を頼む。今はシムラがないんだ」

「はいっ!」

金属こそが擦れる鎖帷子の音がして、アキが背中から離れる気配がする。

——俺も早く戻らないと。今の俺の仕事は……。

「べーろべろべろべろべろばー!!」

グンゾウは突然、剣ゴブリンCに向かって意味のない言葉を叫んだ。

「ギ、ギヤツ?」

剣ゴブリンCは困惑こんわくしてグンゾウの方を向いている。

「ギヤツ! ギユツ! ギョツ!」

グンゾウはおかしな顔までして、ゴブリン風の言葉を話した。

「ギヤ? ギヤ?」

剣ゴブリンCは益々困惑している。

「シッ!」

次の瞬間、ヨシノの全体重を乗せた渾身こんしんの突きが剣ゴブリンCの頭部を貫通する。

被っていた兜が吹っ飛び、持っていた剣が落ちる。

——動きを止めるだけでいいんだよ。今の俺の仕事はね。

ゴブリンCは絶命していた。少しも動かない。

「ヨシノを待つてるって、よく分かったね」

グンゾウがヨシノに声をかける。ヨシノはゴブリンCの頭部から槍を抜くのに手間取っている。

「グンちゃんはある限り無駄なこと言わないし、やらないからね。すぐわかったよー……  
抜けない」

ヨシノは槍を上下に激しく振って、かつてゴ布林Cだったものを振り払おうとしている。

「ありがとう。じゃあ、左翼から突き崩して」

「ほーい。……抜けないよー。グンちゃん手伝ってー」

——服が汚れるから嫌だな。

グンゾウはゴ布林Cの頭を足で押さえながら、戦況を見渡す。状況はだいぶ好転していた。

クザクは槍ゴ布林Gと1対1の小競り合いと睨み合いを続けている。それはヨシノの槍が抜ければすぐに片付くだろう。

カズヒコはバスタードソードで剣ゴ布林Hを下から切り上げて、剣を弾き飛ばす。  
後一押しあとのとおと言ったところだ。

ミッツは手負いの槍ゴ布林Bの攻撃を躲すのに専念している。1匹を引きつけているのでまだ良い。

「うおおおおおりやああああいー！」

珍しくリョータの大振りが槍ゴ布林Fに当たる。槍ごと吹き飛ばされて後ろ倒しになる。

「チャーンス！」

止めが大好きなリョータはすぐに上段の構えから、剣を振り下ろして、鎖帷子を着たゴ布林Fを叩き潰す。

鎖帷子を着ているので生死は不明だが、行動不能と思われた。

「抜けたー！ ありがとう、グンちゃん！」

ようやく槍が抜けたヨシノは槍を一回転させて血を吹き飛ばす。空気が舞って血に含まれる鉄の臭いと、ヨシノが付けてる香水の匂いがふわつと漂う。「予備の武器も欲しいなー」と言いながら、槍ゴ布林Gに向かっていった。

——良い匂いしたな……。

グンゾウは中列に戻る。

中列に戻るといつも拗ねたような口のチヨコが駆け寄ってきて、繁栄門の方向を指差す。

「グンゾウさん、あれ。やばくないですか？」

チヨコが指差した方向を見ると、ゴ布林の一隊が門から出てきたところだった。

「やばいね。何匹見える？」



「8匹……ですな」

「チヨコは新手の装備だけ確認して。特に“弩”を持つている奴がいたらみんなに伝えて。弩持ちはやばい」

「りよ」

チヨコはこぼれそうに大きな瞳を細めてゴブリンの増援を良く観察し始めた。

——あれらが到着するまでに今のゴ布林達が全部片付けばいけるか？

グンゾウが思案をしながら、目の前の戦闘を眺めていると、クザクと対峙たいじしていた槍ゴ布林Gがヨシノの槍に脇腹から貫かれた。

「ギヤア、ギヤア、ギヤツギヤツ」

槍ゴ布林Gの断末魔だんまつまの叫びが響く。武器を手離して、自分の体に刺さった槍を抜こうともがく。槍は長いのでヨシノの体までは手を伸ばすことはできない。

足が止まったゴ布林Gの首をクザクが斬りつけると、大量の血液が噴き出した。流石のゴ布林Gも動かなくなる。

手の空いたクザクは、顔に飛び散った血飛沫ちしぶきを前腕でぬぐうと、腰にぶら下げた水袋から水を飲む。無表情でゴ布林Gが動かない様子を見つめた後、ため息を吐くと長剣を肩に担ぎながらカズヒコが相手をしている素手ゴ布林Hの方向にテクテク歩いていく。

——兵隊ゴ布林より確実にやさぐれてるな。あいつ。

「抜けないー、クザクン手伝ってよー」

——ヨシノはまたやつてる。

「グーンゾーさーん！ や、やばいっすー」

遠くからシムラの声が聞こえる。狙撃ポイントに向かったはずのシムラが走って帰ってくる。シムラが向かうはずだった茂みから4匹程のゴ布林が姿を現す。このゴ布林達も鎖帷子と剣盾で装備を固めており、恐らくダムロー旧市街の兵隊ゴ布林と思われた。

——あれも全部こっちに来るな。残数3+8+4+ゴ布林・リーダーの16匹だ。

やばい。

「グーンゾウさん、弩持ち4！」

チヨコが叫ぶ。

——終了だな。

グーンゾウは迷わず胸に架かかった骨笛を掴つかんで口に咥くわえると吹いた。「ピーーーーーー」という甲高かんだかい音が響き渡る。近くにいたアキ達には相当うるさいだろう。だが吹いているグーンゾウ自身の耳が一番きつい。

「全員聞いてくれ！ ダムローから8匹新あらた手、西の森から4匹伏兵ふくへいが来てるから、撤退てつたいし

よう！ 新手は弩持ちが4匹もいるから、射線を作らせないように」  
「キシ、グンゾウ！」

ハイドがグンゾウの袖を掴み、繁栄門の方向を指差す。

ゴ布林・リーダーの近くで4匹の弩ゴ布林が狙いを付けて膝立ちになる。狙いはヨシノとリョータだ。残りのゴ布林達はその後ろで整列している。

「ヨシノ！ リョータ！ 矢が来るぞ！」

ゴ布林・リーダーが「ギャツギャツ！」と号令をかけると、弩ゴ布林が一斉に矢を放つ。弩から放たれた矢は一直線に、ヨシノとリョータに飛んでいく。

「やだっ！」

ヨシノはとっさに槍を持ち上げると、刺さったままのゴ布林Gが持ち上がり、その死体に矢が2本刺さる。

「うおっ！ くっそ、痛<sup>いて</sup>え！」

リョータ側に放たれた矢は1本が鎖帷子を貫通してリョータの太い右上腕に刺さった。もう1本は剣ゴ布林Eの背中に刺さり「ギャツ」と声上がる。

——あの位置だと武器を振るうのに影響するな。早く抜いて治療しないと。

「タイチ、リョータの矢を抜いて、治療してやってくれ。前には出なくてもいい」  
タイチは神妙な顔をして頷く。

「全員撤退の指示は絶対だ、森の一本道まで下がろう」

カズヒコが叫んで、全員が下がり始める。

「なんで抜けないのよー!」

ヨシノがゴブリンGごと槍を引きずりながら走って後退する。

「クザク、カズヒコ、殿を頼む」「ちょこ、ヨシノの槍にくつついてるゴブリンをダガーで裂いて外してあげて」「リョータ! 早く来い! タイチに治療してもらえ!」「アキ、ハイドとノツコの護衛をお願い」「ミッツ、真つ先に逃げるな! クザクとカズヒコをバックアップするんだ」「全員足を止めるな!」

グンゾウは矢継ぎ早に指示を出した後、周囲を確認する。弩ゴ布林達は第2射目の準備をしている。リョータが傷と剣ゴ布林Eを気にしていて撤退が遅れている。クザク、カズヒコは敵最前線に位置取りをした。グンゾウは常にその後ろ中列前方に身を置いた。

「キシシシシ、ノノツコ、よ、4発、弩ゴ布林に向けて」

グンゾウの後ろにいるハイドがさらに後方をノツコに伝える。ノツコは一瞬「私?」と驚いた顔をしてから止まり、早口で精霊魔法を詠唱する。

「マリク・エム・パルク……、マリク・エム・パルク……」

ノツコから発せされる魔法の光弾が次々と弩ゴ布林に向けて飛んでいく。

魔法の光弾の有効射程距離からは微妙に離れているため、威力は殆どないと思われるが、弩ゴブリン達は第2射目の準備を止めて避けたり、あさつての方向に矢を放つてしまったりと攪乱することに成功した。

「くつそお、痛え」

リョータが早足で歩きながらタイチに治療をしてもらっている。矢を抜く時に痛かったようだ。動脈を傷つけたのか、血が吹き出るように湧いて出てきている。タイチも慌てている。グンゾウは駆け寄って肩の近くを圧迫して、血を止めた。

「痛えよ、痛え、オツサン、痛え」

「血を流しすぎると後に響く。すぐ直るから我慢するんだ。タイチ、癒し手を」

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒し手」

タイチが祈りの言葉を捧げて、リョータの傷に手を当てる。みるみる血が止まっていくな。傷が治ってくるのと同時にリョータの目に凶暴さが戻ってくる。

「くそお、クソゴブリン共、ぶつ殺してやる」

「ああ、頼む。恐らくあの隊長クラスのゴブリンはリョータかヨシノじゃないと対応できない。今は生き残ってくれ。囲まれるとまずいから森まで下がろう」

グンゾウはリョータの背中に手を置いた。

「やってやる。やってやんよ！ 覚えとけ！」

リョータは両手剣を肩に担いで、振り返ると中指を立てた左手を離れた所にいるゴ布林・リーダーに突き出した。それを見てゴ布林・リーダーが口元をゆがめたのを誰も見ることはできなかつた。

「どンドン逃げよう！ 森の中だ！ 森の中まで下がるうー！」

カズヒコが声をかけて、全員走って後退を始めた。

「ギャツ、ギャギヤアギヤアギヤ」

ゴ布林・リーダーは右手で持った槍を高く持ち上げた。周囲のゴ布林達は全員その穂に注目する。槍穂は十字の形をしていて、その中心には2センチ程の深紅しんくの宝石と装飾用の金属が嵌はまっていた。その深紅の宝石が放つ怪しい輝きに全てのゴブリンの注目が集まる。「ギャツギャツ」と声を出だして、槍を振り下ろす。ゴ布林達は一斉に前を向くと、グンゾウ達を追いかけ始めた。

ゴ布林達にとって圧倒的に有利な追撃戦、グンゾウ達にとって圧倒的に不利な撤退戦が始まった……。

## 13. ダムロー旧市街攻防戦（後編）

森の山道。空気は涼しいが汗は止まらない。見上げても空はあまり見えない。木々の枝々がどんどんと後ろに通り過ぎていく。木漏れ日が、時折眩しくグンゾウの目を照らした。

「きゃっ！」

前を走っていたアキが転ぶ。疲労から脚が上がらなくなってきたのか、低い段差でも転んでしまうようだ。正直言えば、軽装のグンゾウでも限界に近い。苦しくて顎が上がり、さつきから上ばかり見ていた。そろそろ吐きそうだ。唾液が止まらない。

「はあはあ、足を止めては駄目だ。剣と盾を貸して、はあはあ」

グンゾウは右手でアキを起こしてあげながら、左手で剣と盾を要求した。

「んはあ、ごごめんなさい、はあはあ」

アキは長剣を鞘ごとと盾を2枚グンゾウに渡した。1枚は昨日拾った金属で補強された木製の丸ラウンドシールド盾だが、もう1枚、造りは似ているが逆三角形の歩兵用のヒーターシールド盾を渡された。

「はあ、あれ？ はあ、なんで盾が2枚あるの？ はあはあ」

グンゾウは不思議に思つて聞いた。

「はあはあ、あの……、今日のゴブリンの方がつ、んはあ……、大きめの良い盾を……はあはあ、持つていたので、はあはあ」

アキの喘ぎ声あえが微妙びみょうに艶めかしい。

「なるほど、はあはあ、大きい方が……弩には有効だもんね……はあはあ」

よく見るとアキは倒されたゴブリンの兜かぶとも持つてきているようで、背中に背負つていた。アキの体格に合う大きさに見える。見た目は金属製の大きいお椀に、耳を守る革製の垂たれが付いている感じだった。あまり格好は良くないが、命の安全には代えられない。

——この子アキはゴブリンシリーズで装備を完成させるつもりなのか?!

グンゾウはアキの行動に少し面白みを感じつつも、笑つている余裕などなかったの  
で、今は生き残ることに集中した。

「はあはあ、先を急ごう、そのうち追いつかれる。はあはあ、それまでにせめてこちらが  
少しでも有利な場所へ、はあはあ、そして時間を稼がないと」

ダムロー旧市街への挑戦初日、市街地に入ることもなく強烈な洗礼を浴びたグンゾウ  
達は、未だ危機いまの中にいた。何メートル離れたかは分からないが、確実にゴブリン達の  
隊が後を追つてきていた。時折、森の中からゴブリン達の鯨波けいばの声が聞こえた。

グンゾウが周りを見渡す。余裕のありそうなのは軽装で身が軽い狩人かろうとのシムラと



盗賊シロフのチヨコくらいだった。いつも後ろで「ぶひぶひ」五月蠅うるさいハイドの姿が見えなかった。

——まずい、ハイドが居ない!?

グンゾウが焦っている、しんがりつと殿を勤めているリョータとヨシノがハイドを腕組みで引きずってきた。ハイドはぐったりして、ほとんど2人の腕に寄りかかっている。

「てめえ、さっさとてめえで歩きやがれ!」「ドイハっち、そんなんじゃ、殺されちゃうよー」

「ぶひ、ぶひ、キシシシ、これで……、体力、キシシ、ぶひ、はあ……、温存、キシ、僕は、さいきよ、ぶうえええええええ……」

ハイドが引きずられながら嘔吐おうとした。吐瀉物としゃぶつはほとんどハイド自身が被害を被こうむっているし、リョータもヨシノもそんなことを気にしている余裕がなかった。

——とりあえず、あそこまで……。あそこまで辿たどり着つくしかない……。グンゾウには思い当たる場所があった。

そもそもオルタナからダムローへ向かう山道には複数の経路ルートがある。グンゾウ達が進んだ道はそれでも最短距離だ。遠い過去には存在をしていなかった。

オルタナが今の姿ではなかった頃、天竜山脈からダムローに向かう旅人が山道を遠回

りすることで迷ったり、崖から落ちたり、夜を森で過ごし獣モンスターや怪物に襲われたりと不幸な事故が止やまなかった。そこで、さる高名なルミアリス教の神官が教団の支援を受けながら私費を投じて、厚い土の地層を掘り進み、迂回路を通らなくてもダムローへ行ける道を切り開いた。今ではこの切通しきりどわを「光明切通こうみやうきりどわ」、別名「ルミアリス切通きりどわ」と呼んでいる。

この光明切通の特徴は、珍しく上方に土を残したトンネル形になっている。トンネルは高さ3メートル、長さ30メートル程、幅は狭く、人が2人並んで通るのも厳しい。切通しの上部にはオルタナ側からだけ石段で登れるようになっていいる。上部もそれなりに広さがあり、木が多く茂っている。上部から下を見下ろすと7〜8メートル程ある。

切通しから見た場合、ダムロー側の地形は一直線の細い道で下り坂、オルタナ側は50メートル四方の少し広い土地がある。これは切通しを開削かいさくする際に、掘削くつさくのための資材や掘り出した土を一時的に溜めておくための作業場所だと言われている。

つまり、オルタナ側からトンネル出口を固めてしまえば、複数の敵から攻撃をされることを防ぐことができ、逆にオルタナ側からは複数人で飛び出した単独の敵を叩くことができるのだ。

ただし、問題点もあった。オルタナ側の広場からオルタナに戻る道はやはり人が1人通れるくらいに狭い上り坂であるため、戦術家の言うところの囲地いぢとなる。トンネルが

突破された場合、逃走経路に人が殺到してしまつたため、逃げるには不向きである。

「はあはあ……、つまりここは守りやすいが、逃げにくい場所だつて……はあはあ、ことだ。とにかく早く決めないといけない。ここでゴ布林達を迎え撃つか……はあはあ」  
「さらに逃げるか……だろ？ オッサン」

リョータが言葉を継いだ。

「俺はやるぜ！ あのクソ野郎共をぶつ殺してやる」

リョータは力任せに両手剣ツヴァイヘンダーを地面に突き刺した。

「ちよつと休まない……、このままだと逃げ遅れて捕まる仲間も出てきそうだし。徐々に倒されるよりは、ここで効果的に迎え撃つ方が合理的じゃないかな？ 逃走中に野良のゴ布林にでも遭遇したら目が当てられない」

カズヒコが周りを見渡して言った。

全員目に見えて疲れ果てていた。後衛では体力の劣るハイドや年配のグンゾウ、装備の重い前衛がこれ以上走り続けるのは厳しい。全員、一旦足を止めたいという気持ちがあるのは間違いなかった。

「よし、じゃあ、迎え撃つ準備をしよう。休むのは準備が終わつてからだ」

カズヒコが手を叩くと全員動き始めた。

「はあはあ、じゃあ、前列は丸太とか、岩とか……、はあはあ、切通しの出口を防げるも

のを用意して……、はあはあ、中列、後列は切通しの上に岩とか、はあ、投げてダメー  
ジを与えるものを運ぼう。はあ、シムラは上に付いて、監視と狙いを定めて、はあはあ、  
一匹でも多く仕留めて、ぜー、はー」

グンゾウは仰向けあおむに横たわりながら指示した。

「オツサン、息切れすぎじゃねーの？」

リョータが嫌みを言う。

「はあはあ、お前も、俺の歳としになったら、はあはあ、分かるよ」

「わかりたくねーな」

「はあはあ、今日、生き残れなかったら、味わえもしないな……、はあはあ」

「けっ！ 縁起でもねえ」

リョータはそう言うのと丸太や岩を探しに行った。

——みんなに味わって欲しいよ。歳取るってことを……。

呼吸が調ってきたので、グンゾウが防衛の準備を手伝おうと上体を起こすと、隣でハ  
イドがうつぶせで横たわっていた。

「ハイド。起きろ。準備しないと全員の命に関わるぞ」

「キシ、グンゾウ、僕はちよつと寝る、キシシ」

グンゾウはハイドの対応に少しカチンとした。

「あ？ 何言ってるんだよ。みんな一生懸命準備してるんだぞ。起きたら殺されてる可能性もあるんだし」

「キシシ、だから、僕も準備する。信じるグンゾウ……、やばくなったら起こせ」  
ハイドはそう言うのと目を瞑つむって、入眠にゆうみんしてしまった。

——なんなんだ、こいつは。大体、今日1回も魔法使ってないし。……あ、俺もだ。  
グンゾウはハイドに苛いら立っても仕方がないと気持ちむちを切り替え、立ち上がると、老体に鞭むちを打って、ゴブリン達を迎え撃つ準備に加わった。

トンネルを塞ぐものは大して無かった。そこら中の木の枝を伐採ぼっさいし、トンネル内に積めるだけ積んだ。とにかくトンネル内の足場を悪くして、相手に不利な条件を積み重ねるしかなかった。

手頃な岩は迎撃用にトンネル上部に運んだ。盾を持つているし、兜もかぶっているの  
で、ほとんど被害を与えることは期待できない。嫌がらせに近いだろう。上部からの攻撃はシムラが頼りだ。

グンゾウ達の持ち物はトンネルの出口付近に積んだ、12人分を積むとそれなりの障壁しょうへきになった。

時間が無い中では、それなりに準備ができた。皆、必死だった。

トンネル上部にはシムラとチョコ、そして初期はリョータを配置して、残りは広場に待機することとなった。

入り口はヨシノ、クザク、カズヒコ、ミッツの4人で固めた。リョータが後から合流するという手筈だ。アキは残念そうな顔をしていたが、今は前衛に<sup>ヒーターシールド</sup>型盾を持たせる必要があつたので、借りることになった。カズヒコと話し合つて、クザクに持たせようと考えたが「使い方わからないから、要らねえ」と断られ、結局ミッツが持つことになった。

「あの……。私はどうしたらいいと思いますか？」

ノツコはハイドが寝ているため、魔法の使い所をグンゾウに尋ねてきた。

「え？ あ、あのハイドが寝てるからか。そだな、<sup>フレンドリーファイア</sup>魔法の光弾つて曲げられる？」

グンゾウが聞くと、ノツコは手と首を同時に左右に振つて出来ないことを動作で伝えてきた。

「まだ、自信がないです」

「そか、あと何発打てる？」

「わからないですけど……たぶん、4発くらい……だと」

——んー。ハイドと随分違うな。魔法の<sup>テクニク</sup>技術も、<sup>マネジメント</sup>管理も、<sup>リミット</sup>上限も。

「そか、じゃあ、切通しの上で待機して、トンネルからこちら側に出てきたゴブリンに対して頭上から撃ち下ろして。タイミングは前衛の誰かが怪我して、防衛線が乱れた直後がいい。しばらくは瞑想めいそうして、休んで。魔法使いはピンチの見極めが大事だから」

「は、はい。わかりました。」

ノツコは石段を登って、切通しの上へ向かっていった。

グンゾウはタイチと治療の可能性について話し合う必要があると思っていた。

「タイチ、癒キュし手アはあと何回いける？」

「たぶん、連続では、あと6か、7です」

「オツケー、俺は10回だと思う。お互い、少しでも瞑想しておこう」

「そうですね」

タイチは笑顔を浮かべて返事をする、素直に岩の上に座って目を閉じた。

グンゾウは自分の能力を把握するためにほぼ毎日限界まで癒キュし手アを使いきっている。最近の検証から自分が残り12回は癒キュし手アを使えると確信していた。しかし、2回は意識的に数えるのを止めようとしていた。いざと言う時、主力のリョータかヨシノ、または2人に使いたいと考えていたからだ。

——確実な線と考えて、癒キュし手アはタイチと合わせて16回。これを有効に使わないと勝てない。

グンゾウは心に刻んだ。

もうひとつ、グンゾウはシムラと打ち合わせしておく必要があったので、切通しの上に向かった。

切通しの上に付くと、そこには大量の石や木の枝等が積まれていた。リョータが少し離れ場所ですを投げる型フォームの練習をしていた。チヨコは森を少し進んだ先の方で監視をしていた。ノツコは傍にはいなかった。静かな場所で瞑想しているのかもしれない。そして、シムラはトンネルの入り口直上から下の道に向けて弓を放つイメージトレーニングをしていた。

——丁度良い。

「シムラ……、ちよつといいかな」

「あ、グンゾウさん、何か？」

グンゾウはシムラの傍に寄ると耳元みみもとで囁いた。

「シムラにしか頼めないことがある」

「なんでつしやる？」

「前衛が突破されて、タイチと俺の癒キユし手テが尽きたら、シムラはチヨコとノツコを連れて逃げる」

「なっ！」



シムラはグンゾウの顔を振り返り、驚いた顔をした。

「シッ！」

グンゾウは口元に人差し指を当てて、シムラを睨にらんでから続けた。

「黙って聞いてくれ。こんなことお前にしか頼めない。少なくともお前とチョコは逃げ切れる」

「そんな……」

シムラが何かを言いたそうなのを、グンゾウは押し切って話を続けた。

「考えてくれ。俺等が殺やられたら、死体を回収しないと不ノーマイフッキング死王の呪いで不アンデッドモンスター死怪物に

なっちまう。オルタナに戻り、ブリトニーに回収を依頼してくれ。ブリトニーが頼りに

ならない場合は、ルミアリス神殿の……カレン師に頼むんだ。お前にしかできない」

グンゾウは自分の修マスター師であるカレンの険のある表情を思い出した。死んでからもし

ごかれている姿を想像し、少しかだけ背筋が冷たくなった。

「グンゾウさん……」

シムラは悲しそうな顔をした。

「じゃ、配置に付いて。頼んだぞ」

——シムラ、残酷なお願いをしてすまない。

グンゾウは笑顔を作ると、シムラのイガグリ頭を軽く撫でた。そのまま立ち上がり、

下の広場に歩き始めた。シムラはうつむいていた。

グンゾウが石段を下がり始めると、シムラは立ち上がって叫んだ。

「グンゾウさん！ 俺！ 全部仕留めます！ 一匹残らず！ この弓と矢で！ 絶対に外さないから！」

グンゾウは目頭が熱くなるのを感じた。

「大丈夫、シムラ。いつでも頼りにしてる」

グンゾウはシムラのことを振り返らず、右手を振るとそのまま石段を下がっていった。

「馬つ鹿、イガグリ、俺様が全部仕留めるに決まっているだろ。お前になんて……」

リョータが感動的な情景を台無しになるような台詞を吐き始めたので、グンゾウは早足で石段を下がっていった。

直後にゴ布林達はやってきた。

「来たよっ!!」

切通しの上部からチヨコが顔を出して叫んだ。

——意外に時間がかかったな。

グンゾウはそう感じた。

——もしかしたら逃げ切れたのかも？

そんな考えが頭をよぎったが、今更何も変えることはできない。グンゾウは余計な考えを振り払い目の前のことに集中することにした。

入り口が突破された時に邪魔になるのでハイドを広場の端つこの方に引きずっていった。

「よし！ 僕らの義勇兵人生で最大の戦いだ！ みんな気合いを入れて、勝ち残ろう！」  
カズヒコが声を上げた。皆、それぞれに士気を高める。

「うんっ！」  
グンゾウの傍でアキが力を入れて頷き、気合いを入れたようだった。

——できればアキも逃がしてあげたいが、聖騎士せいきしという職業クラスの使命として難しいだろう……。

こんな風に物事を考えるなんて義勇兵に染まってきたなとグンゾウは思った。  
切通しの上部から喚声かんせいが聞こえる。主にリヨータの声だった。

「喰らえ！ この野郎！ ひゃっほーい、ざまあみろー！」

ザラザラと岩や木の枝が落ちる音も続いた。

——あれでは、シムラが狙撃に集中できないだろうな。リヨータを上げたのは失敗だったかな？

切通しの上部からチョコが顔を出して、下の前衛達に声をかける。

「たぶん、5匹くらいトンネルに入った！ シムラが3匹仕留めたよ！」

——3匹。上出来だ。

グンゾウはシムラの活躍に喜んだ。しかし、若干の違和感を感じた。

「良し！ トンネルを飛び出してきた奴を倒して、とにかくここを突破されないように防ごう、僕が先陣を切る！」

カズヒコが前衛に声をかける。

「リョータ、早く戻って来て！ 早く！」

ヨシノがリョータを呼ぶ。いつになくヨシノの口調がきつい。表情も固い。相当集中が高まっていると見て取れた。

「待てよお」

リョータが少し情けない声を出しながら、ガシャガシャと音を立てて、石段を降りていく。

その間も全員がトンネルの出口に積まれた荷物で作られた障壁に集中をしている。「ギャツギャツ！」という声がしてゴブリン1匹が障壁を蹴飛ばして飛び出してくる。トンネルの正面はカズヒコだ。

次の刹那、カズヒコが右足を大きく踏み込み、両手持ちのバスタードソードで下段左

下から右上へ切り上げ、飛び出したゴブリンAを半分にはり裂く。

そのカズヒコめがけて、次のゴブリンBが剣を上段に振りかざしながらトンネルの暗闇から飛び出してくる。「はっ！」っとカズヒコは返す刀で右上段から左下に振り下ろす憤怒の一撃でゴブリンBを一刀両断する。一瞬にして2匹のゴブリンが肉塊と化して、カズヒコの両側に散らばっていく。

カズヒコは顔を上げると同時に乱れた前髪をかき上げた。飛び散る汗が輝いて見える。

——やだっ、イケメン！

思わずグンゾウがときめいてしまうくらいの活躍でカズヒコはゴブリンを圧倒した。

残りの3匹のゴブリンは戦意を削がれ、トンネル出口付近でおろしている。これはヨシノが放っておかない。

「やあああっ！」

ヨシノが踏み込んだ槍の突きを繰り出すと、ゴブリンCが槍の餌食えしきとなった。クザクやミッツもここぞとばかりにゴブリンCに止めを刺す。他の2匹はトンネルを引き返して逃げていった。

「2匹逃げたぞー！」

下からカズヒコが叫ぶと、情報がチョココを経由してシムラに伝わる。

切通しの上部からチョコが顔を出して「1匹はシムラが倒して、1匹は逃げた」と伝えてきた。シムラは狙撃で4匹も倒したことになる。

「いやあああつたあああー!」「やつほー!」「やった!」「勝った、勝った! へへへっ」「うすっ」「ざまあ、見ろつてんだ。俺様の活躍の場がねえぜ」

皆が口々にゴブリンの撃退を喜んだ。

「良かった……」

グンゾウも安堵の胸をなで下ろした。しかし、なんだか先程から感じている違和感がぬぐえない。グンゾウにもそれが何か分からなかった。

「あれ? ゴブリンの装備……」

アキがカズヒコに屠ほふられたゴブリンの死体を見て眩くらいた。

それを聞いて、グンゾウもゴブリンの死体を見る。森でよく遭遇する半裸タイプの野良ゴブリンだ。

グンゾウの中で、先程までぼんやり感じていた違和感が急速きゆうそくに輪郭りんかくを露あらわにした。

「まずいつ! こいつらは罠おとりだ! 入り口を固め直せ! チョコっ! 上の状況は?!」

グンゾウはいつになく大声で叫ぶ。全員がグンゾウの方向を見て固まっている。叫び声と同時に切通しの上から「うわっ」と言うシムラの声が聞こえる。

グンゾウは石段を走って上る。上がりきる前から目の前を弩の矢が通過した。

「伏せて！ 木の陰にかくれるんだ」

グンゾウが切通しの上部にいた3人に声をかける。

シムラはグンゾウがいる側の木の陰に転がり込んだ。

「くそっ！ 撃てへんかった！」

シムラが悔しそうに握り拳で隠れている木を叩いた。

チヨコとノツコはトンネルの上部を挟んで反対側の木の後ろに身を潜めている。

「チヨコ、敵の数は見えるか？」

グンゾウが聞くと、チヨコは木を背にしながら手鏡を取り出して、覗き込む。手鏡を持つ手が震えている。そのチヨコの背後でノツコが真つ青な顔をして座り込んでいた。

「15、6匹。弩持ちは4。追ってきた奴ら……だと思う」

——迂闊うかつだった。あいつ達は遅れてきたんじゃない。行軍の途中で、囷いづをさせるための野良ゴ布林達を徴発ちようはつしていたんだ。まさか、ゴ布林がこんな戦術を仕掛けてくるなんて……。

囷ゴ布林達は命いのちを賭として見事にその役目を果たし、グンゾウ達の防衛準備を消耗させた。

その戦術を考え、グンゾウに一泡吹かせたゴ布林、くれない紅の甲冑かっちゆうを纏まとったゴ布林、リーダーが悠々と切通しのトンネルをくぐろうとしていた。

「何も変わらない！ さっつきと同じように飛び出してきたゴブリンをみんなで仕留めていこう。トンネル出口さえ抜かれなければ大丈夫だ」

カズヒコは周囲を励ますように声をかけて、トンネルの暗闇の向かってバスタードソードを中段で構える。トンネルの中からゴブリン達の影が迫ってくる。

全員がトンネルの出口を集中していると、次の瞬間、ものすごい勢いで紅色の影が飛んできてカズヒコの肩に槍を突き刺す。

紅色の影はそのままカズヒコの肩に槍を刺したまま、傷口を扶るように、棒高跳びの要領でカズヒコを飛び越えると背後に着地する。

「あああああああー！」

今まで聞いたことが無いようなカズヒコの絶叫が森の中に木霊する。

紅色の影はカズヒコから抜いた槍を後ろ手に構えると、そのまま背後からカズヒコの後背部を突き刺す。口から「がふっ」と音を立てるとカズヒコは前のめりに倒れた。槍が研ぎ澄まされているのか、操る技術が高いのか、まるで鎖帷子など無いかのように穂先が肉を捉えている。

全員呆気にと取られて動くことができない。

続けざまに紅色の影、つまりゴブリン・リーダーは槍を上段に構えると、跳躍をして



カズヒコの後ろ5メートル程にいたタイチに襲いかかる。

タイチはショートスタッフで防ごうと動くが、ゴ布林・リーダーの動きは速く、無残にもショートスタッフごと右肩から左下に斬り下ろされる。ゴ布林・リーダーは流麗な動きで一回転すると、回し蹴りでタイチの胸を蹴飛ばす。タイチは蹴られるままに後ろへ飛ばされ、仰向けに倒れて「ごふっ」と咳をした。

そのタイチにさらに止めの一撃を加えようと槍を振り上げたゴ布林・リーダーに対して、今度は別の影が襲いかかる。

「シッー」

ヨシノだ。ヨシノの突きが空気を斬り裂き、唸りを上げてゴ布林・リーダーに襲いかかる。ゴ布林・リーダーもとつさに危険を察知し、跳躍して避ける。タイチから離れ、ヨシノと距離を取る。ヨシノは追撃の構えを見せて、ゴ布林・リーダーを広場の奥へ、奥へと移動させる。この危険な敵をできる限り仲間と離すためだ。

ここまでおよそ5秒。グンゾウを含めほとんどの仲間が何も認識することのできない時間の流れの中で、ヨシノだけが本能的にゴ布林・リーダーに対応することができた。

遅れてリョータがゴ布林・リーダーに突っ込む。

「ぬおおおりやあああ！ 俺様参上っ！」

リョータお得意の大振りのお手剣は、体を捻るだけで躲される。リョータは逆に脇腹に蹴りを入れてられて地面に転がる。しかし、ゴブリン・リーダーは止めを刺そうと動かない。実際は動けなかった。ゴブリン・リーダーが注意を払っているのは目の前にかつている狂犬ではなく、隙あらば鋭い突きで命を奪わんと狙っている女豹の方だった。

——立て直さなければ！ 先に回復するのは出血量の多そうなカズヒコか？ 回復要員のタイチか？ 迷うんじゃない。今は俺が司令塔だ。そして唯一の治療者だ。動け、俺の足！ 回れ、俺の頭脳！

グンゾウはタイチに向けて走り出すと、指示を出す。

「クザク、ミッツ！ なんとか残りのゴブリン達を防げ！ アキ、2人の支援を頼む！ ノッコ、もう魔法の光弾を惜しむな！ 今が最大のピンチだ！」

——ヨシノとリョータへの指示は必要ない。あの化け物は2人に任せるしかない。グンゾウが動き始めると、全員が動き始める。

泣きながらカズヒコに向かおうとするミッツの腕をクザクが引つ張っている。

トンネル出口からは鎖帷子に槍を装備したゴブリンDが飛び出てきた。その後ろには剣と盾を装備したゴブリンEが顔を出している。

槍ゴブリンDの頭上に魔法の光弾が落ちてくる。

突然の上からの攻撃に不意を突かれ、槍ゴブリンDは前屈みまえかみによるめく。

よろめいた槍ゴブリンDの背中に矢が突き刺さる。シムラだ。槍ゴブリンDの体に2本目、3本目、4本目と矢が突き刺さる。その度に、びくつと痙攣けいれんをして、槍ゴブリンDは倒れた。剣ゴブリンEはそれを見て、驚いて顔を引つ込める。

滑り込んでタイチの体に辿り着いたグンゾウは考えるより先に神聖魔法を唱えた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒キユし手テ」

タイチの体を縦断じゆうだんしている傷口をどんどんと塞いでいく。タイチには意識があつた。混乱パンニックで口や体を動かせなかつたようだ。肩から胸部の傷は深かつたが、斬られたショートスタツフのお陰で腹部の傷は浅かつた。

——1回分では直りきらないかもしれない。早く切り上げて、カズヒコを回復させないと、あの出血量では5分も保たもない。傷は塞ふさげても出血でショックを起こして死んでしまう。

長い、長い10秒だった。致命的になりかねない10秒を費つやして、タイチの傷口を大方塞おおいだ。

「タイチ、動いてくれ。一緒にカズヒコを治療しよう。彼は死に瀕ひんしている」  
グンゾウはタイチの手を引つ張ると、少し乱暴に立たせた。

「は、はい……」

タイチは震えながら立ち上がった。まだ混乱状態からは立ち直っていない。

グンゾウはタイチを置いてカズヒコの元に走って駆け寄る。振り返るとタイチは震える足でよろけながら付いてきているようだ。

カズヒコの様子を見る。カズヒコは意識が無かった。地面に広がった血溜まりからみて出血量は1リットル近い。

——出血が多い。特に背中では腎臓がやれているかもしれない。こっちが先だな。

「タイチ！ 肩の傷を頼む！ 光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒し手」

グンゾウは背中への傷へ念入りに手を当てた。体の内部まで怪我をしている可能性が高い。本人の意識が無いため、治ったかどうか確認が取れない。

タイチが加わって、カズヒコの肩を治療し始める。

「グンゾウさん……僕、怖いです……」

タイチはカズヒコの顔を見ながら、グンゾウに話しかけてきた。タイチの手が震えて、目には涙を浮かべている。

「俺も怖い。でも今、君の後ろと俺の後ろでもっと怖い思いをして戦っている仲間がいる。だから最後の1秒まで仲間の傷を癒やすんだ」

タイチの後ろでは、クザクとミッツ、そしてアキがトンネルから出てきた剣ゴブリンEと槍ゴブリンFを押し返そうと奮戦していた。あのクザクが先頭に立ってゴブリン

達と切り結んでいる。

そして、グンゾウの後ろではゴ布林・リーダーに対してヨシノとリョータが死闘しとつを繰り広げていた。

ヨシノは上段の構えになっていた。

ヨシノ本人も初めての構えと認識している。「あいつの頭を押さえないと、頭を押さえないと」、そう考えている内に、今の構えになっていた。ヨシノの思考の一番大きな部分を占めている思いは「悔しい」だった。同じ槍の使い手として、甲冑を纏っている相手の方が装備は重いはずなのに、敏捷性、精密性において明らかに負けていた。

ヨシノはゴ布林・リーダーの横薙ぎを槍で受ける。その威力を回転力に変えて反撃をしようと、自ら回転し、舞のような槍術を披露する。普通のゴ布林や人間相手であれば見事に決まる技の流れが、避けられ、防ふせがれ、再反撃のきっかけにされている。

こちらの攻撃の機会は見出みいだせず、相手の攻撃は致命傷を防ぐのが精一杯だった。ゴ布林・リーダーの槍は十字の戈カがついており、避けたつもりでも体の出っ張りが引つ掛けられたりする。気が付けば、細かい怪我が増えていた。右手は血だらけで槍の握りが滑る。そもそも左利きのヨシノは右手を滑らして突きを繰り出すまよが、それにしても摩擦まが無さすぎる。耳も切られて痛い。

気が付けば、ヨシノの目から涙が溢れていた。

仲間全員がゴ布林・リーダーの圧倒的な機動力に翻弄ほんろうされている中、電光石火でんこうせつかの反撃で仲間の全滅を防いだヨシノ。そのヨシノがゴ布林・リーダーとの力量差に打ちひしがれて、泣いていた。

「リョータ！ 悔しい！ あたし、こいつに勝てない！」

ヨシノやリョータが勝てないということは小隊パティの全滅を意味した。遠くない未来に訪れる敗北の影像イメーシが頭から消せない。

「ヨシノ！ すまない！」

リョータも泣いていた。弱い自分を表にすることのないリョータが泣き枯れた声で叫んだ。周りの人間なら誰でも分かるくらいリョータはヨシノが好きだった。そのヨシノが泣いている。その事に対して自分は何もできない。その無力感が堪たまらなく辛かった。好きな女の笑顔も守れない自分の未熟さが悔しかった。

両手剣を振り回しても、それらは全て虚空こくうを切る。次の瞬間には、敵に蹴り飛ばされる。何度も地面を舐めた。しかし、ゴ布林・リーダーは止めどころか、リョータの方向を向くことすらしなかった。『眼中とどにない』。遠慮のない敵からの評価に、自分が許せなかった。

「リョータ！ 振りを小さくして、敵を引き付けろ！ ヨシノを治療する。30秒稼げ

!

グンゾウが叫ぶ。

「うつせえ！ ジジイに言われなくてもやってやるよ！ 俺様は……」

リョータから続きの言葉が出ない。つい一分前まで誇っていた自尊心は、言葉にできないくらいボロボロだった。

「俺は……。俺は……。弱え」

リョータの涙が止まらない。両手剣の先を地面につき、左手で顔を押しさえてしまった。

——リョータ……。

グリムガルに来てから、グンゾウはリョータに共感したことなど無かった。ヤンキーで、傲慢で、自信過剰で、礼儀を知らない、むしろ厭う存在だった。しかし、リョータが自らの弱さを認め、愛する人のために心を痛めている姿を見て、胸が熱くなった。グンゾウの瞳から一粒だけ涙が零れる。

そこに最愛のヨシノが声をかける。

「リョータ、泣かないで。一緒に強くなろう。あたし達、今日はダムロー初日なんだよ」  
まるで子どもにでも言い聞かすような、いつにない優しい声だった。明日があるかもわからない状況で、ヨシノは未来を見ていた。

数秒の沈黙。

リヨータは顔を上げると、ゴ布林・リーダーを睨み付けた。

「そうだ……。俺は……。弱い。でも、弱いつてわかったから、強え！ 弱いつてわかったから、強え！ 弱いつてわかったから、強え！ 弱いつてわかったから、強え！ 大事なことだから3回言つた！」

リヨータはゴ布林・リーダーに両手剣を正眼に構えると、ジリジリと摺るように足を動かした。初めて見せる慎重な動きに、ゴ布林・リーダーがリヨータを気に留める。リヨータは両手剣を小さく、そして素早く振りかぶると、右足で踏み込みながら、ゴ布林・リーダーへ打ちかかる。

「キンツ」と金属同士がぶつかりあう音がして、リヨータの両手剣が槍に弾かれる。初めて、ゴ布林・リーダーがリヨータの剣を受けた。リヨータはすぐにサイドステップで距離を取って、次の機会を狙う。

——そうだ。それでいいんだ。お前は強い！

グンゾウはカズビコを地面にそつと寝かす。怪我の治療は済んでいるが、あの出血量では起きても戦うことはできないだろうと思われた。タイチにクザク達を任せると、ゴ布林・リーダーの広い攻撃範囲を避けるように遠回りでヨシノに近付く。

「ヨシノ、怪我を治そう」

グンゾウはヨシノの切れた耳から治療を始めた。グンゾウが治療をしている間も、ヨ



シノはゴブリン・リーダーから目を離さない。隙があればグンゾウを振り払ってでも襲い掛かる構えだった。

次は細かい怪我が多い右手、右脚、それから左手を治療した。グンゾウが左手に癒し手を当てながら、問診をした。

「ヨシノ、痛いところはない？」

「ないよ。グンちゃん」

「気分は？」

「すごく……」そこでヨシノは一旦言葉を区切ると、口元に笑顔を張り付かせて「良いよ」と、いつものように元気な声で答えた。

もう、ヨシノの目に涙はなかった。グンゾウはヨシノの左手に皮製の水筒を渡した。何も言わずにヨシノは水を飲み、空っぽになった水筒をグンゾウに返した。

「ヨシノ、いつも明るい気持ちにしてくれてありがとう。ヨシノは俺が何度でも治す。だから、思いっきり戦っておいで」

グンゾウはヨシノの背中を優しく叩いた。

「うん！」

ヨシノは空を見上げると、足の動きを確認するように、リズムを付けて、ステップを踏み始める。まるでこれからダンスをする準備かのように。

「今度は、悔しくても、怖くても、最後まで泣かない」

言い終わると、ヨシノは前を向いた。槍を一回転させると、弾けるように飛び出す。跳躍から槍を思い切り振りかぶり、リョータに集中しているゴ布林・リーダーへ上から叩きつけた。ゴ布林・リーダーは槍を横真一文字に構え、ヨシノの槍を防ぐ。タイミングを合わせてリョータも両手剣で細かく突きを繰り返す。ゴ布林・リーダーはそれを嫌がり、槍を頭の上で回転させると、穂先でリョータの肩口を斬り裂き、石突きでヨシノの腹部を突いた。リョータもヨシノも距離を取り、再度攻撃への起点を探し始めた。

「ギエツギエツギエツ」

広場に飛び込んでから終始しゅうし無表情だったゴ布林・リーダーの口元に笑みが浮かんだ。ようやくリョータとヨシノが相手になるレベルに達したことに満足しているかのようにだった。

トンネル出口の戦いも、けして楽な戦いではなかった。気が付けば出口付近には7匹のゴブリンの死体が転がっていた。囀のゴ布林達3匹を除いても、この数分で鎖帷子で武装したゴ布林を4匹も倒したことになる。真ん中で大雑把おおざっぱに長剣を振るっているクザクの神官衣は、既にゴブリンの返り血で真っ赤になっていた。アキとミツツも盾

を使い、飛び出そうと機会を狙うゴ布林達を牽制しつつ、飛び出してしまったゴ布林を攻撃して、クザクを助けている。全員、呼吸が乱れ、疲れているのがわかる。

トンネルの上部を見上げると、ノツコは既に魔法力が尽きているようで、座り込んで目を閉じている。チョコは下の戦いを眺めて、たまに石を見つけては投げていた。シムラは弓に矢を番えて、ゴ布林・リーダーを見据えていた。シムラの背中の矢筒には既に1本も矢が残っていない。正に一矢報いるために、注意深くゴ布林・リーダーの観察をしていた。

「タイチー・あと何回だー!」

グンゾウはタイチに確認する。タイチはグンゾウの方を向くと指を2本立てた。

——タイチはあと2回……。俺も残りは4回+予備の2回。全部で8回。

絶望的だった。ゴ布林・リーダーは倒す目処がついていない。それどころか、リョータとヨシノが倒されるリスクだつて低くない。トンネルの中にはまだ重装備のゴ布林が10匹以上待ち構えている。このまま疲労が蓄積し、体力が落ちていけば突発的な事故も起きてくる。まさにジリ貧だ。

——くそっ! このままではやばい!

グンゾウは打開策の無さに、焦燥感だけを募らせていた。

その時、グンゾウの頭の中に声が蘇った。「信じるグンゾウ……、やばくなったら起こ

せ」。その言葉を思い出したグンゾウは広場の隅で寝ているハイドの元に向かった。

グンゾウはハイドの襟首えりくびを掴むとハイドの頭を持ち上げ、耳元で大声を出した。

「いい加減、起きろ！」

ハイドは驚いて、目を覚ます。

「キシシシシ。グンゾウ、おはよう」

「『おはよう』じゃない！」

グンゾウはこの緊急事態にとぼけた表情のハイドに、怒りを露あらわわにした。

「キシ、やばいのか？」

「やばい！ カズヒコは倒れた。生きているが戦闘は無理だ。リョータとヨシノは今、全力を出して戦ってるが、ゴ布林・リーダーに勝てる見込みがない。トンネルの敵をアキとクザクとミッツが防いでいるが、まだ奥に10匹以上いて、体力の限界が近い。ノッコの魔法は尽きた。シムラの矢も残りは1本しかない。タイチと俺の癒キユし手テも6回しか残っていない。みんな命がけで頑張っている。何もせずに寝ているのはお前だけだ！」

グンゾウは感情に任せるまま、ハイドに現状を早口でまくし立てた。目には涙を浮かべていた。襟首をつかまれ、ハイドは苦しそうにしている。

「ごめん、グンゾウ。わかった。今、みんなを助ける……」

そう言うとハイドは立ち上がる。寝癖ではねた髪の毛は変わらないが、いつになく凜々しい顔をしている。

「え？ お前普通に話せ……」

グンゾウが呆気にとられているのを尻目に、ハイドはすたすたとトンネル出口へ歩いて行く。グンゾウも遅れないように後ろを付いていく。

ハイドはクザク達の10メートル程後ろに立つと、魔法使いの杖をタイチに支えさせ、地面に立たせていた。

それから後ろを向いて、グンゾウに話しかける。

「グンゾウ、キシシ、僕が魔法を詠唱し終えるのと同時に、出口にいる3人を僕の前からどけてくれ、邪魔、死ぬぞ、シツシツシ」

「あ、ああ、分かった」

「よし、キシシ」

ハイドは偉そうに返事をする、タイチに立たせている杖に向き合う。しかし、再びグンゾウの方を向く。

「キシ、あと、もうひとつ。お願いがある。キシシ」

「なんだ？」

「キシ、帰り道……いつもみたいにおんぶしてくれる？」

「はあ？ 何言ってるんだ。今がどういう状況だから……」

グンゾウが最後まで話す前に、ハイドは続ける。

「おんぶしてくれないと、できない、キシシシ」

グンゾウは呆れながら、返事をする。

「わかった、やってやる。おんぶで帰ってやるよ。無事帰れるなら、大喜びだ！」

「よし。行くぞ、アキ達に説明をしてこい、キシシ」

——今はハイドを信じるしかない。

グンゾウはアキ達の近くに行くと、大声で説明をした。

「アキ！ クザク！ ミッツ！ 戦いながら話を聞いてくれ！ 今からハイドが魔法を使ってゴブリン達を一掃するらしい。撤退の笛を吹いたら、トンネルの入り口から横にはけてくれ。もう一度言う、撤退の笛を吹いたら、トンネルの入り口から横にはけてくれ。巻き込まれたら死ぬらしい」

「わかりました！」「うっす」「まじかよ！ へへっ！」とそれぞれに返事が返ってきた。

グンゾウは3人の確認が取れると、急いでハイドの元に戻った。

「説明してきたぞ」

グンゾウが話しかけたが、ハイドは既に目を閉じて意識を魔法に集中をしており、何かぶつぶつと唱えながら、グンゾウを無視した。

「キシシ、じや、行くぞ」

ハイドが目を開くと同時に、空中に指先でエレメンタル文字を描きながら、呪文の詠唱を始める。

「マリクー」

ハイドの前方の空間、杖の向こう側に、普段の3、4倍はあろうかという大きい魔方陣が広がって描き出される。魔方陣の放つ目映い光にグンゾウは目を細める。

「エムー」

ハイドが次の詠唱を行うと、魔方陣の中心に周囲の空間から光の粒が急速に集まり、やはり普段の3、4倍はあろうかという巨大な光弾が出現する。光弾から吹き出す風で、周囲の枝葉が揺れる。また、光弾が放つていると思われる低周波の振動が地面に伝わり、地震のように揺れている。

グンゾウは急いで胸に架かっている骨笛を吹いた。「ピーーーーーー」という甲高い音がして、それに呼応するようにアキ、クザク、ミツツの3人がトンネル前から散開する。既にハイドの魔法による異変は、その場にいた全員が認識するものとなっており、グンゾウ達もゴブリン達も動きを止めて、光弾を見つめていた。

「パルクー」

ハイドは最後の詠唱と共に、両手を前に突き出して光弾を撃ち出す。

——魔法の光弾なのか?!  
マジックミサイル

何の魔法なのか分からない光弾は、稲妻が空気を引き裂くような音を立て、凄まじい速度でゴブリン達に向かっていた。光弾は先程までクザクと切り結んでいた先頭のゴブリンを光の中に飲み込むとそのままトンネルの中に消えていった。

耳鳴りがする。

グンゾウは「キーン」と鳴る耳を押さえながら、光と風の収まった周囲を見渡す。

ハイドの魔法が通り過ぎた後、つまりトンネルの出口とその先には、最初からあった7匹のゴブリンの死体以外は何も残っていなかった。

その周りにはアキ、クザク、ミッツが伏せていて、ひよっこりを頭を上げて、キョロキョロと一変した周囲の状況を確認していた。

「勝った?」

グンゾウの足下でハイドの杖を支えていたタイチが呟いた。

「勝った?」

グンゾウも同じく呟いた。

「勝ったんですか?」「勝った?」「へへへ?」「へへ?」

アキ達3人もだんだんと現状を理解し、ゴブリン達が一掃されたのを認識し始めた。



「うおおおおおおお！ やったー!!」「やりましたね！ グンゾウさん」

グンゾウはタイチとハイタッチをする。10匹以上いた武装ゴブリン達をハイドが一撃で葬<sup>ほむ</sup>り去った。

「キシシ、グンゾウ、痛い」

グンゾウは興奮のあまり、うつ伏せに倒れているハイドを踏みつけているのを気が付かなかった。

「お、おう！ すまん！」

グンゾウはハイドを仰向けにして抱きかかえると質問をした。

「ハイド、何なんだあれは？ マジックミサイル魔法の光弾なのか？」

ハイドは疲れたのか、目を瞑<sup>つむ</sup>りながら、ゆっくり答え始めた。

「キシ、魔法使いギルドで魔法を教わった頃から、ずっと考えていた。キシシ。 エレメンタル精霊魔法とは？ エレメンタル文字とは？ キシシ。精霊の力を使役する魔法は分かる。精

霊の属性に応じた特性の魔法が発動するから……。キシシ。じゃあ、 マジックミサイル魔法の光弾とは何なのか？ 特性もなく、純粋なエネルギーの塊だ。キシシ。ずっと検証を続ける内に、曲げることができたり、魔法力を多く消費することで、大きさや、キシ速度を変えられたりすることに気付いた……」

「じゃあ、さっきのは大きくして、速くしただけということ？」

「キシシ、端的に言えばそうだ。これも検証中だが、2倍の大きさにするためには、大体2倍の魔法力を必要とする。シツシツシ。2倍の速さにするには、2倍の魔法力。キシシ、そのため、2倍の大きさの2倍の速さを実現するには4倍の魔法力が必要になる。キシシ」

ハイドはここで大きくあくびをする。

「ハワワシシシ、さらに不思議なことに、魔法の光弾マジックミサイルについては大きさを2倍にすれば、威力もほぼ2倍になるが、キシ速さを2倍にすると、何故か威力はおおよそ4倍になる、シシシシ」

「じゃあ、さっきのは……」

グンゾウが聞くと、ハイドは答えた。

「キシシ、さっきのは……少し別の作用もあるが、大きさ3〜4倍の、速さ6〜8倍というところだと……思う、キシシシ」

「何だよ、『思う』って。あんなにすごいことやっておいて。てゆうか、お前は一体、普通の魔法の光弾マジックミサイルなら何発撃てるんだ？」

「24発、キシシシシ」

「え？ お前、そんな……」

グンゾウは次の質問をしようとしたが、あまりに驚くことが多すぎて言葉が出てこな

かった。

「キシ、あとは検証中なので、秘密、キシキシシ。もう、寝る。おんぶ……約束……」  
 ハイドは今にも眠りそうな声で約束の件を伝えると眠りに落ちていった。

——いつも生意気なくせに、子どもみたいな顔して寝やがって。本当に……助かった。

「ハイド、ありがとう」

グンゾウは眠ったハイドを静かに地面に下ろしてから、立ち上がった。

——さあ、幕引きだ。

自分は天に選ばれた存在だと思っていた。自分には武の才能があった。周りのどんな奴らよりも強かった。自分には師の才能があった。軍を率いれば負け無しだった。「なのに、どうして?」

——そんな顔していやがる。

グンゾウは思った。

流石のゴ布林・リーダーも動揺の色が隠せなかった。ハイドの魔法の光弾が発動して以降、攻めにも守りにも精彩を欠いていた。

自分が飛び込み、主力の戦士や神官を屠つてしまえば、残りの雑魚は部下が一掃でき

ると考えていたに違いない。蓋を開ければ、自分は足止めを喰らい、部下はよく分らない魔法で一掃されてしまった。

グンゾウにも焦る気持ちが生ずる手に取るように理解できた。

「みんな、油断しちや駄目だよ。このゴブちゃんはめっちゃ強いから」

ヨシノがゴ布林・リーダーの周囲を囲むように集まる仲間を警告をした。

「そうだ！ てめえらは弱えんだから、離れて、囲んでろ」

リョータが偉そうに言った。

——泣いてたくせに。もう少し痛い思いしないと、性根は治らん。

「行くぜ！ ヨシノ！」

リョータはヨシノに声をかけると、ゴ布林・リーダーに突進して、両手剣を素早く何度も打ち下ろす。ゴ布林・リーダーに槍で弾かれることを計算に入れて、小振りで隙が少ない攻撃だ。

リョータの急襲に押され、ゴ布林・リーダーは少しづつ下がっていく。しかも、ゴ布林・リーダーは気を抜くことができない。その真横から中段右前半身構えに構えを戻したヨシノが静かな殺気で隙を狙っている。

不意にゴ布林・リーダーがリョータの打ち下ろしを槍で避けず、積極的に鎧の肩当てに当てる。

「おっ?!」

リョータの両手剣はゴ布林・リーダーの紅鎧に弾かれて、バランスを崩す。あれは鎧などの防御性能を活かして攻撃を弾き返す鋼返しスチールガードという技だ。

槍での防御を不要にすることで生まれた余裕でゴ布林・リーダーはリョータの首を獲りにいく。左から右への素早い横薙ぎだ。

リョータは横薙ぎを躲そうと後ろに反るが間に合わず、右頬に穂先が当り、大きく裂けた。

この瞬間をヨシノが逃すはずもなく、鋭い突きをする……と見せかけて、ゴ布林・リーダーに足フットスウィープ払いをかけた。以前、グンゾウはヨシノから、戦士ギルドの槍使いが最初に教わるスキルは足払いだと聞かされて、「なんで、決定的な技じゃないの?」と笑ったことを思い出した。

「槍は突きだけじゃないのよー」

突きを予想していたゴ布林・リーダーは色んな意味で足を掬すくわれて、初めて転倒する。

そこへ、血まみれの裂けた右頬から歯を見せて笑うリョータが、最上段まで振りかざした両手剣を振り下ろす。

避けきれない。ゴ布林・リーダーは槍でリョータの両手剣を弾こうとするが、転倒

した体勢から重力も含めた最大出力のリョータの両手剣を穂で弾くことはできず、柄の部分に当てるのが精一杯だった。

槍が折れる。その衝撃で両手剣の方向がずれた。ゴ布林・リーダーは見苦しく体を捻り、窮地を脱する。すぐに立ち上がると、宙返りをしながらリョータから離れていった。

「ひゃらーん、かつかへ」

右頬に穴が空いてるため「ちゃらーん、勝ったぜ」というつもりが間抜けな発音になったリョータだった。しかし、あれだけの怪我を顔面に負ったのに怯まず攻撃をしたことは驚嘆に値する。

グンゾウ達全員から距離を取って、穂が無くなり柄だけになった槍を見つめたゴ布林・リーダーは苛立った表情をして、「チツ」と舌打ちをした。

さらにゴ布林・リーダーを災難が襲う。ずっと、あいつが狙っていた。「ピンツ」という音がして、シムラが最後の矢を放った。

——勝った。

と思ったのはグンゾウだけではないはずだ。しかし、「パシツ」と音がして、ゴ布林・リーダーは何事も無かったかのように折れた柄で矢を叩き落とす。

「なんやてっ?!」

シムラが悲鳴に近い声を上げる。次の瞬間、ゴ布林・リーダーは槍投げの要領で折れた柄を切通しの上にいるシムラめがけて投擲する。

「ひゃあ」

今度はシムラが本当の悲鳴を上げて、飛来物を避ける。

——なんて奴だ……武神みたいな奴だな。

ゴ布林・リーダーは深々とため息を吐くと、リョータに向かって「ギャギャギャアギャッギャア、ギャア」と言うのと左手の中指を立てて、前に突き出す。

「はんはと、ひゃんのかこの」

とリョータが突つかかかっていこうとした瞬間、ゴ布林・リーダーは跳躍をして、背後の森の中に消えて行った。

ゴ布林・リーダーもリョータも何を言っているか良く分からなかったが、恐らくゴ布林・リーダーは「次遭ったら覚えとけよ、この自己中傲慢クソ馬鹿リョータ」と言つて、リョータは「なんだと、やんのかこの」と言ったことにしようとグンゾウは心に決めた。

しばらく静寂の時間が流れる。

「……んー、……っおわったー……!!」

ヨシノが両手を上げて叫び、そのまま後ろに倒れた。それをきっかけに全員が歓声を

上げる。

「やったでー!!」

シムラが大声を上げる。

「ほっひゃー! て、いふは、ほおはいへえ、なおへ、うんほー」

リョータが良く分からないことを言っている。グンゾウは何を言っているか、何となくわかったが、わからないフリをしてタイチに任せようと思った。

——どうせなら、アキの治療をしよつと。

グンゾウはアキの方に歩いて行くと、アキは疲れ果てた顔で地面にアヒル座りをしていた。

——アヒル座りは神ポーズだな……。

グンゾウはアキを見ただけで魔法力が少し回復した……気がした。

「アキ、怪我はしてない?」

「あ、盾があつたし、ほとんどクザク……とミッツが盾役になつていたので。軽傷です」

「そっか、良かった」

レギンスの太股に少し血が滲んでいたので、癒し手をした。そつと触れるだけだが、アキの体温が伝わってくるようで、グンゾウはドキドキしてしまった。

傍にいたクザクにも念のため、同じ事を聞いてみた。



「大丈夫つす。打撲が主なんで。他の怪我を優先してもらって。でも……、ちよつと、今日  
日の戦いはきつかったー」

珍しくクザクが笑顔で3語以上の文章を話している。

「立派だったよ、クザク」

「つす」

座つててもでかいクザクはびよこつと頭を下げた。

「俺も、俺もつすか？ グンゾウさん。うへへへ」

ミッツも承認を求めてきたので、グンゾウは「う、うん、そうだね」とだけ言つてお  
いた。

——ものすごい長い時間だった気がするけど、まだ昼前だ。危ない場面もあつたけ  
ど、全員の協力でなんとか切り抜けることができた。本当に良かった。明日がある。な  
んて素晴らしいんだ。

「よし。オルタナへ帰ろ」

グンゾウは独り<sup>ひと</sup>呟<sup>つぶや</sup>いた。

その後は楽しい戦利品回収タイムだった。ハイドの魔法で吹き飛んだゴブリン達の  
死骸はトンネルの先に散らばつていた。数匹の死体は木っ端みじんになっており、装備

品も粉々になっていた。それ以外のゴ布林達からは出来る限り、装備品を持ち帰ることにした。正規兵の給与なのかシルバーや宝石入りのゴ布林袋を身に付けていて、正直美味しかった。銀貨だけで50枚を超えていた。皆、疲れが吹き飛んで、ほくほく顔だった。ゴ布林装備マニアになりつつあるアキは、使えそうな装備を探し、一番大きくて新品の歩兵用の凧型盾を見つけた。また、金属製の肩当、手甲、脛当も手に入れて、兜と合わせてグンゾウ達の中で一番装備が充実してきた。アキの身長はゴ布林より若干高いが、線が細いため、ゴ布林装備の大きさがかなり合うようだ。グンゾウは、アキがどんどんゴ布林に見えてきた。装備が充実するのは良いが、かわいらしさが台無しになっているのが玉に瑕だと思った。

盾は豊富に余っていたが、クザクは頑なに「重いから要らねえ」と言っていた。

——聖騎士なのに、盾役をやる気ないのかな？

一番高価な戦利品と思われたのはゴ布林・リーダーが使っていた十字槍の穂だった。穂の中心には2センチ程の深紅の宝石が埋まっており、その周りには金属で装飾がなされていた。一瞬ヨシノが自分の槍に取り付けたような素振りを見せたが、「買取り金額次第かな」と諦めた。確かに今は装飾品というよりは、正式な義勇兵になることと生活の安定が大事だった。

その見る者を魅了する怪しい光を湛えた深紅の宝石が、その後グンゾウ達の運命を左

右することになると、その時は誰も思いもしなかった。

戦利品回収をしている間にカズビコの意識が戻ったが、重度の貧血で歩いて帰れる状態ではなかった。木を伐採し、担架を作り、リョータとクザクが協力して、担いで帰ることにした。

「最初のゴブリンを倒すところまでは良い感じだったんだけどね。リョータに大分差をつけられちゃったな」

とカズビコは弱々しく自嘲気味じちようぎみに笑った。

そして、グンゾウは約束通りハイドをおんぶして帰った。ハイドは、背は低い、小太りで体重は少し重い。おまけに服が嘔吐物で汚れていたのも、脱がして下着の状態でおんぶした。パンツを直に触っているので、ハイドの臀部でんぶの温もりぬくが手に伝わってきて、少し気持ち悪かった。

——アキに触れた手の感覚が消え失せた気がする。

グンゾウは何回かハイドを森に置いて帰ろうと思ったが、今日の功労者の1人でもあったので我慢した。

オルタナの街が見えてきた頃、グンゾウの背中でハイドがもぞもぞと動いた。

「ハイド、起きたなら、自分で歩いてくれよ。正直、……重い。」

グンゾウが話しかけると、ハイドは「……嫌だ、キシシ」と答えた。

「お前なあ……」

「キシシ、大人なら約束は守れ」

ハイドはグンゾウの背中にしがみついた。グンゾウは諦めてハイドをオルタナまで運ぶことにした。

「ところで、お前、毎朝おんぶされてたの知ってたの？」

グンゾウが聞いても、ハイドは返事をしなかった。

——なんだか、良くわからん奴だ。でも、今日は俺たちを救ってくれたから甘やかしてやるか。

ダムローを初めて見たのも、ゴブリン達を撤退させたのも午前中の出来事だったが、オルタナに着いた時には16時の鐘の音がグンゾウ達を出迎えていた。

ここからグンゾウ達のダムロー攻略という長い挑戦が始まった。

## 14. キツカワがいた夜

「ありやねえぜ」

乾杯の直後なのに、リヨータが文句を言い始めた。エールの入った陶製のジョッキをグイッとあおる。

「ダムロー旧市街のゴブリンがあんなに強いなんて、俺も聞いていないなあ」

グンゾウは答える。グンゾウはウワという木の実からできた蒸留酒を生で飲んで来た。蒸留酒の中でも比較的価格の高いものを選んだ。贅沢な気持ちになる。

グンゾウ達（正確には、宿舎で寝ているカズヒコを除く11人）は、シエリーの酒場で生還を祝っていた。カズヒコを真っ直ぐ宿舎に連れて行くために、戦利品の売却すらもしていないが、明らかに銀貨が沢山手に入ったので、今日は盛大に飲むことに決まった。

「あたしもー。毎回あんなに強いのは無理ー」

ヨシノにしては珍しく弱気なことを言っている。そして、珍しくお酒を飲んでる。ペルシクの実という果実をウワの蒸留酒に漬け込んだお酒を炭酸水で割ったものだ。甘いので女の子でも飲みやすい。チョコヤノツコも同じものを飲んでる。グンゾウ

は数名を除き、お酒飲んではいけない年齢な気がしたが、グリムガルでは特にそういった制限はないため、皆自由にお酒を飲んでいる。ただし、本当に小さい子どもはお酒の味や酔いを嫌がり飲まないようだ。

「あの、でも、当初聞いてた話より装備とか、お金とか結構持ってますよね……」

装備が充実したアキは、低くて落ちて着いた声でメリツトについて触れる。アキは渋く、リーチエという穀類こくゑいからできた醸造酒をちびちびと飲んでいた。ボトルで1シルバー以上のものを冷やして飲むときりつと澄すんだ甘みと共に独特な旨味うまみが口に広がり、かなり美味しい。しかも香りが良い。グラスだと1杯10〜20カパーもする。ゲンゾウもお金がある日は飲む。安いものを飲むと水っぽい味がして美味しくない上に、悪酔いするので高いものがお勧めだ。

——あれも後で飲みたいな。

「あんなにいたら、矢が足りひん」

シムラは陶製のグラスに入ったカクテルを飲んでいた。シムラが酒を飲もうとしたところ、リョータに「背が伸びねえぞ」とからかわれたため、混成酒リキユールをガナー口の乳で割ったものを飲んでいる。これは女の子に人気のお酒で飲みやすい。

「まあまあ、生き残れたし、なんだか僕らもレベルアップした感じで、良くないですか？

へへへっ」

ミッツはエールを片手にへらへらしながらお酒を飲んでる。そのまま向いにいるチヨコにちよつかいを出そうとして、嫌そうな顔をされている。

——そういう関係性か……。

グンゾウは人間関係を観察していた。

「ま、ミッツの言うことも一理ある。ダムロー攻略はカズヒコが戻ってから考えるところで、今日は飲もうぜ」

珍しくリョータが正論を言ったので、グンゾウも同意してもう一度全員で乾杯をした。全員、今日は何回でも乾杯したい気分だった。

「よう、よう、よう、君たち、すごい盛り上がってるじゃーん？ どうしたの？ パーリナイ？」

突然、軽い口調で細目の男がエールのジョッキを片手に現れ、グンゾウ達に話しかけてきた。

——どこかで見たことがあるな。誰だっけ？

「あん？ てめえ、あんだこら」

相変わらず、狂犬が順位を明確するため、最初に噛みつく。細目の男は「まあまあ、だいいじよぶ、だいいじよぶ、どうどうどう」とか言いながらエールをぐいっと飲んで、ついでに机の上のおつまみを勝手に食べた。

グンゾウは細目の男が誰かを思い出そうと頭の中を検索していると、最初にヨシノが声を上げた。

「あー！ 最初、塔で一緒にいた……キツネコーラ？」

シムラが突っ込む。

「ちやうやろ……あれや、キツメナワ」

2人とも惜しいところまで思い出していたが、微妙に違っていた。

「キツカワくんじゃないですか？」

タイチが正解を出す。

——あ、それだ。

「あれえ？ みんな俺ちゃんのこと知ってるの？ ぐーきー、ぐーきー」

キツカワは自分の事を指差して、驚いたような顔をした。ついでに隣のテーブルから椅子を奪って、ヨシノとリョータの間に座る。

座り順としては、アキ、ヨシノ、キツカワ、リョータ、グンゾウ、ハイド、シムラだ。

アキはお酒をチビチビ飲みながら、ヨシノと逆隣のチョコやノツコとガールズトークをしている。

テーブルの端っこではデカイクザクが白けた顔で独りひとエールを飲んでた。ほとんどしゃべらないのでほぼ風景と同化している。グンゾウはたった今まで居ることすら



気付かなかった。

「知ってるも何も、俺等と同期じゃねーか、馬鹿か」

ヨシノとの間に入られ少し不快な顔をしたリョータが話す。

「えええー？ ほんとう？ 俺ちゃんの同期はレンジヤハルっちだけど……」

キツカワは訳がわからないという風に頭を捻っている。しかし、元々お気楽な感じの人間なので大して悩んでいないように見えた。むしろグンゾウ達の方が頭を捻りたい状況だった。

「うへへへ、何言ってるんだよ、キツカワちゃん、俺達のこと忘れちゃったのかな？ へ

へ」

キツカワは遠くにいるミッツにまでいじられ始めた。

「いやー。ごめんね、俺ちゃん顔が広いからさー」

キツカワはへらへらしながらエールをあおった。

「なんやキツカワ、ええ格好してるな？」

シムラがキツカワの格好に目を付ける。シムラの言うとおり、キツカワの服装はグンゾウ達の着ている服よりも生地しんの芯がしっかりしている。デザインもそれなりでオルタナの服装ファッションとしてはお洒落な部類に入る。古着ではなく新品の服のように見えた。

「えへへ、俺ちゃんが着る服は全部よく見えるって？ いやー、うれしいーな、せーん

きゅー！」

キツカワはウインクしながら、左手でピースの形を作って目の部分に当てた。あまりに軽薄な会話に、グンゾウ達の間少し寒い雰囲気ふんいきが漂ただよった。

グンゾウは一番気になっていることを聞いた。

「ところでヴェールはどうしたんだ？ ヴェールを追っかけて行っただんなじやなかったっけ？」

「えーつと、ヴェールって誰だっけー？ ど忘れしちゃってー。ごめんね♪」

キツカワは「てへぺろっ」と言っって自分の頭を叩いた。

「なんだそりゃ」

リョータが呆れたように言った。

「バカだ……キシシ」

独りだけジュースをチビチビと飲んでいたハイドが口を開いた。

グンゾウはリョータ、シムラ、ハイドの耳を引つ張ささつて囁ささいた。

「もしかしたらさ、戦闘で頭を打ったりして記憶がないのかもしれないぞ？ だって、あんな美人をそう簡単に忘れるか？ ついでにヴェールに置いていかれたりして……」

「それもそうだな。オッサンもたまには鋭いこと言うな」

リョータは憎たらしく笑った。

「オツサンじゃねーし、お前の3倍はいつも鋭いし」

シムラは大袈裟おおげさに首を縦に振りながら、納得した。

「確かに、あんなべつぴんさん忘れるなんておかしいですよね」

「キシシ、バカにつける薬は無い、キシシキシシシ」

「だとしたら、かわいそうだから、話を合わせてやろうぜ」

4人で頷うなずきあう。そんな様子をキツカワは「あれれー？」などと言いながら覗き込んでくる。

ヨシノはお酒に弱いらしく、顔を真っ赤にしてぼーっとグンゾウ達を眺めていた。

「いやー、キツカワも大変だったと思うけど、俺達もダムローで大変だったんだよ」

グンゾウが今夜の飲み会の趣旨しゅしを話し始めた。

キツカワの細い目の奥がキラツと光る。普段からニコニコしているので細く見えるが、実はそんなに細くない。切れ長の凜々りりしい目をしている。

「それはー……新市街のリングオブかもねー？」

キツカワは親指と人差し指をL字にした手を顎あごに当てながら、いかにも分かっている風に頷うなずいた。

「ハルっちがダムローのリングオブを狩りまくってたからねー。ごいすー。ごいすーね。

新市街のリンゴブが流れこんできたの？ それはいやー？ 意味変わっちゃう？  
やばいのな？ リンゴブの単体は弱いけど、繁殖力はんしよくりよくが半端ないし、数が多いから  
ねー。ネズミ算ざんならず、ゴブ算的に増えてくいのな？ 流石に新市街はリンゴブの根城  
だから、突っ込んでいく義勇兵もないのな？ おねーちゃん、もういっぱい、ちん  
かちんかのルービー！」

給仕の娘が「はい」という返事をする。キツカワは空っぽになったジョッキの外側  
に付いていた泡を指で掬すくって舐めた。

「けっ！ 強えつえーのもいんだよ」

おつまみの肉を噛みちぎりながら、リョータは吐き捨てるように言った。

「旧市街の入り口周辺から殺気さつきだ立ってて、やばかったー」

ヨシノはジョッキの中を見つめながらつぶやいた。

「うん、うん、そうなんだー」

キツカワはジョッキを持って、ヨシノの手を触ろうとして、リョータに叩かれた。

「キシシ、僕の手にかかれば一撃、雑魚ばっか、キシシキシシシ」

ハイドが偉そうに笑っている。そのハイドに今夜はシムラが噛みつく。ハイドの首  
に腕をからませ、裸絞ヌーバーホルドめを決めた。

「偉そうに。お前にはよういわんわ。魔法一発で寝てまうくせに。大体、何なんだよあ

の魔法は！」

「そうそう、あれ、何なの？」

ハイドの魔法には興味があるのか、突然外野からノツコが割り込んできた。

「ギジジジ、あ、あでは、ギユ、ギユードン力学と……とく……てん……よ」

シムラとノツコが同時に「はあ？」と言った瞬間にシムラが絞めすぎたためハイドは落ちてしまった。

「ここから、ハイドが死んじやうだろ、いい加減にしなさい」

グンゾウはシムラをハイドから離れた。ハイドは椅子にもたれる。ハイドの首に手を当てて、脈と呼吸を確認してから、念のため癒し手キュアを首から頭にかけて施ほどこしておいた。

——少し性格も良くなりますように……。

「キツカワ、ハルつちつてゴ布林スレイヤーのこと？」

グンゾウがキツカワに聞くと、キツカワはお金を払って給仕のお姉さんからちゃんかちんかのルービーを受け取っていた。

「そーそー、知ってるのー？ 俺ちゃん、同期でダチのマブだからさあー。紹介しよっかー？ まだ来てないけど」

「んー、まだいいかな。その内、お願いするかもしれないけど」

「そっかー、じゃあ、俺ちゃんもよく酒場こじに来てるから声かけてよー、バイバーイ」

グンゾウが断ると、キツカワはジョッキをあおつてから他の席に移動して行つてしまった。ふらふらと離れていったキツカワは「よう、よう、やつてるー？」と離れたテーブルにいる義勇兵に声をかけている。

——相変わらず忙せわしない奴だな。

「あの有名なゴブスレか、余計なことしやがつて！ 俺等おれらがゴ布林狩れねーじゃねーか」

リョータは酔いが悪い方向に入つてきたのか、苛々イライラしている。

——俺等か。

リョータはお得意の俺様俺様を封印したようだ。

「明日、カズヒコも入れて相談つづやかなあ」

グンゾウは独り言のように呟つぶやいた。

事件は次の日に起きた。

次の日、カズヒコは起きて、食事をしたりすることもできるようになった。しかし、まだまだ体調が悪そうだったので、狩りはお休みにした。前日獲得した銀貨は全てで63枚あった。昨夜の散財さんざい9シルバーを差し引いても54シルバー残ったので財政的ざいせいには余裕よゆうがあった。

カズヒコの大事を取って、宿舎でお祝いをしようということになったので、アキ、チョコ、ノツコの3人は料理の準備で材料の買い出しへ行つた。

残りのメンバーは買取り屋でゴブリン達からの戦利品を売り払うことにした。買取り屋には交渉役のヨシノとグンゾウ、ヨシノの付属品としてのリョータ、そして荷物持ちにシムラとミッツが来ていた。

宿舎は鍵もかからず、出入りもほぼ自由なため、クザクとタイチには装備のお留守番で残ってもらつた。ハイドも魔法の検証がしたいとお留守番を申し出た。

宝石類や装備品はそこそこの値がついたものがあり、買取り価格は全部で58シルバーであつた。現金も合わせて1人当り10シルバー程の稼ぎとなる。命がけだったとは言え、半日の稼ぎとしては破格だった。

「う……うまい」

買取り屋から値段を告げられた時、同行していたシムラが呟いた。

唯一、値の付かなかったのは、ゴブリン・リーダーが残していった槍の穂だった。グンゾウ達は他のゴブリンと区別するためにゴブリン・リーダーの事を「紅鎧ベによろい」と呼ぶことにしていた。

グンゾウ達が、値段が付かない理由について買取り屋の親父に尋ねると、興奮したように早口で説明をしてくれた。

「信じられない。お前さん達は知らないで手に入れたのか？ その槍の穂先に付いている赤い宝石は『妖魔柘榴石』ゴプリンカーバンクルと呼ばれる宝石で、新市街に住む王侯貴族階級ドクラスしか持つていない貴重なもんなんだ。欲しいが、正直、そんな装飾まで施された武器には値が付けれない。辺境伯へんきょうはくあたりに献上するのがいいんじゃないのか？」

価値の分からないグンゾウ達は冷静に「ほおーお」位の反応しかできなかった。

——辺境伯か……、どうすれば会えるんだか？

グンゾウは値が付かなかった妖魔柘榴石ゴプリンカーバンクルを眺めた。深紅の宝石は相変わらず怪しく魅力的な光を湛たたえていた。

——最終的にどうにもならなかったらヨシノの玩具おもちゃだな。

天望楼に住まうオルタナの領主。辺境王とも呼ばれる辺境伯ガラン・ヴェドイーへの武器ぶぐの献上けんじょうなど、考えつきもなかったグンゾウ達は翌日に行動を起こす。



## 15. ゴブリンバブル到来!!

本気で言ったのではなかったかもしれない。しかし、買取り屋のおじさんが言う通り、ゴ布林カーバンクル妖魔石榴石入りの武具をへんきょうはく辺境伯ガーラン・ヴェドイーに献上する手立てがないか、グンゾウ達は真剣に検討することにした。

てんぼうろう天望楼の衛兵に聞いたところ、献上品を受け付ける正式な窓口が存在するとのこと。例えば貴重な財宝や珍品、精巧に作られた武具や工芸品、初物の農作物や珍獣等、価値のあるものは、手続きをすれば献上ができるとのことだった。

戦利品売却係だったグンゾウを含めた5人は、早速、献上の手続きをしに行つた。

天望楼の入り口受付には、事務係であろうと思われる眼鏡をかけた初老のおじいさんが半分居眠りをしながら座っていた。

「あのー、辺境伯に珍品を献上しに来たんですけど、ここでいいですか?」

グンゾウが話しかけるとおじいさんはパチツと目を覚まし、ずれていた眼鏡を直した。

「ああ、ああ、献上かい? あんたら義勇兵かい? 義勇兵にしては殊勝な心がけじゃの……。あー、献上品はものによって申請の書類が違うから、品物を教えてくれ。貴重品

や宝石ならこの書類、武器や馬具ならこの書類、書物ならこの書類、工芸品や美術品ならこの書類、動物や怪物モンスターならこの書類、農作物や食品なら……農夫じゃないからそれはないか。」

おじいさんは立て続けに話をする。

「あー、献上する価値があるかどうかは最初にわしが見るからの……価値が低いものは、お断りの場合もあるぞ」

「はあ」

グンゾウは気のない返事をしてから、後ろを振り返った。

「穂これはどれになるのかな？ 宝石と言えば宝石だし、武器と言えば武器だし、美術品と言えば美術品だよな」

「んー、あたしなら宝石がメインだから、宝石かなー？ でも槍の穂としても超一流の切れ味だったよー」

「何でもいいんじゃないの？ オッサンの勘で」

「オッサンじゃねーし」

グンゾウは受付のおじいさんに聞くことにした。

「すいません。あの、ダムローのゴブリンから手に入れた妖魔石榴石ゴブリンカーバンクルが付いた槍の穂なんですけど、これはどの種類になるんですか？」

グンゾウは持っていた包みを開き、槍の穂を出した。十字の中心に嵌はまった深紅しんくの寶石は、相変わらず見る者を魅みり了りょうするような怪しい光を放っていた。

おじいさんはグンゾウの話の聞いて、驚いた様子を見せる。

「ほっ！　なんと！　妖魔ゴブリンカーバシクル石榴石とな？」

グンゾウの掌の上に乗っている槍の穂を見て、2度目の驚いた様子を見せる。興奮したように槍の穂を手にとると、グンゾウ達の方を一切向かず、寶石に見入って話す。

「これは素晴すばらしい。本物じゃ。どこでこんな貴重なものを手に入れたんじゃ。辺境伯様好みいっぴんの逸品いっぴんだわい」

「簡潔に言うと、ダムローで新市街のゴブリンを倒しました」

「ほー！　それにしてもこれは王侯貴族ロイドクラス級しか持つておらんだろう。見たところ、お主等ぬしら、小汚こぎたない見習い義勇兵にしか見えんのだがのお。有名な義勇兵なのかの？」

おじいさんは興奮に任せて失礼なことをさらつと言った。

——失礼なじじいだな。綺麗とは言わないが、小汚くはないぞ。

「てめ、じじい！　小汚いってどういうことだ！」

意外としつかり話を聞いていたリョータが噛みつく。殴りかかりそうになるのをヨシノが押しとどめた。

——飼ヨシノい主シノがいないと、危なくてしょうがないな……。でも、今回は許す。

「ほっほっほ、冗談じゃよ。冗談でもないか。これは貴重品扱いかの。この書類に記載してくれ。辺境伯は今夜外出からお戻りじゃ。この珍品なら、運が良ければ直にまみえる機会をいただけるかもしれん。一生ものの名譽じゃぞ」

シムラがよくわからないという顔で「そんなに？」と眩つぶやく。

「預かっておくから、明朝2つ目の鐘でここに来なさい。あ、忘れとつた。そなたら正装せいそうを持つとるかね？」

おじいさんは聞いてきたが、全員首を横に振る。リョータは怒ったままそつぽを向いている。

「じゃろうなあ……。じゃあ、神官衣を持つとる人間だけじゃの。神官衣は正装と見なされるからの。ルミアリス様に仕える神官か聖騎士だけ、明日の早朝こちらに来なさい」

「はあ……」

少し心配だったが、グンゾウ達は受付のおじいさんに妖魔石榴石ゴブリンカーバンクルを預け、天望楼を後にした。

翌日、失礼な受付のおじいさんの指示に従い、翌朝2つ目の鐘が鳴る時間を目指して、グンゾウとタイチとアキの3人は天望楼に向かった。クザクは眠いし、だるいとのこと  
で欠席した。

夏の太陽が真上からグンゾウ達を容赦なく照らしつける。太陽の熱は肌を焦がすように熱いが、風が吹いているので体感気温はそこまで暑くない。

グンゾウ達はいつものように宿舍の中庭に集まっていた。

中庭には番いつがの大きな黒い蝶ちようが、ひらひらと一緒に舞って地面に咲いた花々を周遊しゆうゆうしている。オルタナ南区の静かなお昼だった。

グンゾウの手には上質な深紅しんくの布で出来た包みが収まっていた。ゆっくりと包みを開いて、全員に見せる。

「20ゴールドお?!」

その場にいた全員が一斉に異口同音で大声をあげる。ハイドだけは「キシッ!」と言った。

静かな宿舍の中庭が一気に騒さわがしくなる。

「はい。20ゴールドです。まあまあ、落ちついて。座ろう」

既に衝撃を味わっていたグンゾウは冷静に全員をなだめる。隣にいるタイチとアキも同様だ。

シムラは興奮のあまりワナワナと震え、イガグリ頭を両手で掻きむしっている。

——禿げるぞ。

「1ゴールドって確か100シルバーやから、20ゴールドって、えーつと200シルバーくらいでつか？」

シムラが混乱して全然違う計算をしていると、イガグリ頭をバンバンと平手でひっぱたきながら、リョータが興奮して叫ぶ。リョータの分厚い手に頭を叩かれて、シムラは目を白黒させている。

「馬つ鹿！ アツホ！ イガグリ！ 1ゴールド100シルバーなんだから、20ゴールドは500シルバーくらいの価値はあるだろっ！」

——リョータも混乱してやがる。

「さっきから全然計算合っていないんだけど……この2人って……馬鹿なの？」

大きな目をくりくりさせながら、チョコが突っ込みを入れる。可愛い顔をしてなかなか辛辣だ。それに対してグンゾウ、ヨシノ、アキ、ハイドの4人は否定しようもなく、生ぬるい笑顔を浮かべて頷くしかなかった。

——相変わらず恥ずかしい。

「お前、役立たずの目だけお化けの癖して、今、俺のこと馬鹿にしなかったか？」

——目だけお化け……。

リョータがチョコに喰ってかかろうとしたところ、ヨシノが押しとどめる。

「馬鹿にしてないよ。恥ずかしがり屋の愛情表現よ。リョータ、グンちゃんの話を知こ

う」

「お、おおう。それならいいわ」

ヨシノがリョータの胸を手で押さえなので、満足して引き下がる。チヨコは「ふんっ」という感じでそっぽを向いた。チヨコに対してはアキがフオローをしている。

「はいはい。みんな興奮していると思うので、正確にしておくよと、20ゴールドは2000シルバーです。そのまま分配すれば、1人当たり約166シルバーということですよ」

グンゾウは淡々と説明した。

話を聞かされたメンバーの間で「おおおっ!」「わあ!!」といったどよめきが起こる。

「一気にバブル来ましたね!」

昨日まで青白い顔をしていたカズヒコも顔を紅潮させている。

興奮冷めやらないシムラがグンゾウの神官衣を掴んで、唾を飛ばしながら聞いてくる。

「グンゾウさん! ということは、肉18番の飯が8カパーヤから……えーつと2000回食えるってことですか?!」

「いや、約2000回だよ、シムラ。君は単位換算が苦手なようだね。今度、勉強を見てあげよう」

「それはあかん! 勉強とかあかん!」

シムラは頭を抱えて、地面に寝っ転がってしまった。

——テンションが高すぎる。

全員、興奮が冷めない。急に見たこともない大金が舞い込んできたので、当たり前と言え当たり前かもしれないなかった。

「よし。現状を整理しよう」

カズヒコが声をかけて整理を始める。いつもの流れだ。

「お金の使い道は、各人の判断だけど、この先、どのような道を選ぶかで少し変わってくると思うから、少し情報を共有しよう」

一旦、区切る。

「ダムロー旧市街は、恐らくゴ布林スレイヤーがゴ布林を狩りすぎたせいで、強力な新市街のゴ布林が流れ込んで新人の穴場ではなくなっている」

「ゴ布林スレイヤーが悪い」

リョータが腕組みをしながら不満げに文句を言った。

「そういう訳では無いよ。彼等は彼等で生きていくために、真面目に仕事をしただけさ。敵は義勇兵じゃない」

グンゾウがリョータの思い込みを正す。リョータは「へいへい」と悪態をつく。カズ



ヒコが軽く笑ってから話を進める。

「リョータとヨシノが追い払った紅鎧ベによろいが所持していた武器からには妖魔石榴石ゴブリンカーバンクルという寶石が付いていた。これは王侯貴族級ドクラスのゴブリンが所有している高価な宝石らしい。明らかに新市街のゴブリンぽい持ち物だ。紅鎧ベによろいが王族なのか、褒美ほうびを貰った優秀な戦士なのかはわからないけどね」

それからカズヒコは指を3本前に突き出す。

「僕らには今後の行動目標として選択肢がある。1つ目は、森の中で野良のゴブリン等を狩り続ける。2つ目は、なんとかしてダムロー旧市街で狩りをする道を探す。3つ目は、狩り場を変える。有名なのはサイリン鉞山とかね。みんなの意見はどうか？」

カズヒコが全体を見渡すと、ぼちぼちと意見が出てくる。

「俺おらあ、森の中は木が邪魔で戦いにくいから嫌だ」

リョータがだるそうに伸びをして、鼻をこする。

「大振りすぎなだけじゃねーの?」

クザクが珍しく口を開いたかと思えばリョータの心臓を抉えぐる一言を放った。

「おいつ、クザク、やんのか? なんだ、カズヒコ小隊パーティーは俺に喧嘩売ろつてのか? 畜生ちくしよう、

感じ悪いぞ! カズヒコの教育がなつてねえ!」

チヨコに引き続きクザクからも砲火ほうかを受けて、リョータが五月蠅うるさく喚わめいている。火付

け役のクザクは相手にしてないといった風で、無視していた。

「まあまあ、みんなリョータ（を馬鹿にするの）が好きってことだよ。愛情表現だつて」  
 今度はグンゾウがリョータをなだめた。リョータはいまいち納得いかないような顔を  
 をしている。

「キツシシシシシシシ」

ハイドはリョータが馬鹿にされるのは愉快らしく、笑っている。

その騒ぎの横で、おずおずとアキが右手を挙げる。

「私も森の中は効率が悪いから嫌……かな。歩きまわって疲れた後に戦うのも、危ない  
 気がするし」

この意見には何人か頷く。グンゾウも森の中を歩き回るのは正直、遠慮したかった。  
 「へへっ、ダムロー旧市街で普通に狩りができれば、いいなあ、へへへ」

ミッツがへらへらしながら発言する。木のベンチに座っていたヨシノが立ち上がる。

「あたしは……。ダムロー旧市街で狩りをしたいというのもあるけど、あの紅鎧を倒し  
 たい！」

「確かに！ あの野郎、許さねえ！」

リョータが右手の握り拳を左手に打ち付けて「バシッ」と音を鳴らす。

「僕もそう考えていた。正直、やられっぱなしは癪に障る。」

そう言いながらカズヒコは爽やかな笑顔を見せた。

「紅鎧べによろいを倒せば、また妖魔ゴブリンカーバンクル石榴石が手に入るかもしれないし？」

シムラは嬉しそうにニコニコしながら、両手の親指と人差し指で丸を作り、お金のハンドサインを顔の前に掲げた。その顔は満面の変顔へんがらだ。皆の間に笑いが広がる。

「ははははは、そうだね。シムラの言う通りだ。なんとなく、みんなダムロー攻略を指す感じで良いかな？」

カズヒコは再び全体を見回す。反対していそうな人はいなかった。

「よしー。みんなが再挑戦をしたいと思いますと思っているなら、それを目指して頑張ろう。初めはダムロー旧市街がこんな状態だなんて情報が不足していたから苦戦したけど、きつと準備をしつかりすればもつと戦えると思う。装備とそれにスキルだ。お金も大分だいぶん手に入つたし、装備とスキルを充実させよう！そして、できればけど……ダムロー旧市街を取り戻そう！」

カズヒコの掛け声に、各人思い思いに頷いて、同意を示した。

「おっしや！ やってやんぜ！」

「あたし、もつとゴブリンが狩りたーい！」

「へへへ、やるぜ、へへ」

「んー、でも、まずは可愛い服が欲しいな」

「あ、私も欲しいー!」

「いいねー! 買いにいいこー!」

「そんなんにお金使っちゃ、あかんでしょ?」

「いや、シムラ、いいんじゃないか? きつと俺等おれらも嬉しいぞ」

カズヒコの意気に触れることで、不思議と皆の顔に元気が溢あふれてきた。皆、近い未来の成功を想像して、楽しい気持ちになっていると思われた。

——カズヒコは良いリーダーだな。

そう、グンゾウは思った。

その後、今回獲得した資金の分配に関しても話し合いを行った。

まず、ゴ布林から得た現金と戦利品については各人に9シルバーずつ配布し、当面の生活費とした。

次に妖魔石ゴ布林カーバンクル石榴石を辺境伯に献上したことで得られた褒賞金20ゴールド $\parallel$ 2000

シルバーは、120シルバーを12人に均等配布し、各人の裁量さいりょうで装備及びスキルをできる限り充実させることになった。

残りの560シルバーの中からは、全員分の正式な団章購入費として20シルバー $\times$ 12人分の240シルバーを抛出きよしゆつすることに決まる。

そして、さらに残りの320シルバーは各小隊で折半し、前衛が防具を買う際の補助

や、不測の事態への備えとするためヨロズ預かり商会で保管<sup>ブール</sup>することになった。

カズヒコ小隊は160シルバーをカズヒコ名義で、リョータ小隊はリョータが自分名義で預かろうとしたが、なんとなく小隊全員が不安に思ったようで、多数決の結果、グンゾウ名義で管理をすることになった。リョータは「なんでだよっ！俺がリーダーだぞお！」と文句を言っていた。

——普段の行いです。

グンゾウはリョータの声が聞こえないふりをして、素<sup>そ</sup>知らぬ顔で160シルバー<sup>ふどころ</sup>を懐<sup>ふどころ</sup>にしまった。

稼ぎの分配が決まったところで、皆、何を買うか、どんなスキルを磨くか等を楽しげに話し合っている。

「実際問題、スキルを磨いたとしても正面突破は難しそうだな。各人のスキルアップを前提としても敵の数が多すぎるとなよなあ」

雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気を壊<sup>こわ</sup>すことまで気が回らず、グンゾウはどうしても気になっていることを思わ<sup>しん</sup>ず<sup>い</sup><sup>や</sup><sup>ち</sup><sup>ま</sup>った。

「そうですね」

カズヒコはグンゾウの眩<sup>くら</sup>きを聞き逃<sup>に</sup>さ<sup>な</sup>かつた。

「俺等がスキルアップすれば、なんとかなんじやねーの?」

リョータはベンチに鼻くそをほじりながら寝そべった。

「グンちゃん、あたし頑張るよ!」

ヨシノは両腕でガッツポーズをする。

「ありがたい。でも、俺はできる限りみんなのリスクを下げたい。スキルを習得してからでいいけど、ゴ布林<sup>あ</sup>達の数<sup>い</sup>を減らす方法や、土気<sup>し</sup>を下げる方法がないかなあ?」

グンゾウは誰に對してと言うわけではなく、聞いた。

「キシシ、普通は監視と削りだな……キツシツシツシ」

ハイドが何かの本を読みながら答える。読んでいるのは魔法使いギルドでもらった教本のようだ。

「監視……」

グンゾウは呟く。

「どうやって監視するんですか? まさか私が忍び込むとか……?」

チヨコが大きな目をぱちくりさせながらグンゾウに聞いてきた。

グンゾウは大きく首を左右に振る。

「チヨコひとりにそんな危ない真似<sup>まね</sup>はさせられないよ。そういえば、山腹<sup>さんぐく</sup>からダムローの西側を見た時、ダムローを見下ろせる位置の森に監視塔みたいなのが建ってなかつ

たっけ？ あそこから監視できないかな？

「ちよつと遠くないっすか？」

今日はクザクが良く話す。

——クザクは人見知りさんだったのか？

「大きめの望遠鏡ぼうえんきょうがあれば、監視できそうですね」

カズヒコが案を出す。

「望遠鏡か……、買えばいいけど、高そうだな。できればどこかで借りたいな。誰か持っていないかなあ？」

グンゾウは眉根まゆねを寄せ、目を瞑りつむ、顔を空に向ける。太陽の明るさが瞼まぶたを通して感じられる。

——首の筋すじが伸びて、気持ちいい。

「あの……私、どっかで見たんですけど？ 望遠鏡」

アキが低く落ち着いた、でも可愛らしい声を出す。グンゾウはすぐに目を開き、アキの方を見る。

「あれ？ あたしも見たかもー？」

今度はヨシノが声を出す。グンゾウはぐるんと首を回して、ヨシノを見る。

「あれだ！ 棚だよ。棚。どっかの棚にあった」

ノツコが頭をぼこぼこ叩いて思い出そうとする。

チヨコが左の掌を右拳で「ぼんっ」と叩く。

「あ、私、分かったかも。ブリトニーの後ろの柵だ」

——すげえな、この女子4人の記憶力。

「そうか、ブリトニーが持っているなら話は早い。僕らは正式な義勇兵の団章を買えるようになったんだし、早速行こう」

カズヒコの音頭で、全員が義勇兵団事務所に向かう。ハイドは特に興味がないらしく、自らお留守番を買って出た。

義勇兵団事務所の中にゾロゾロと入ると、筋肉ムキムキのブリちゃんが正面のカウンターに座って、紙で出来た本を退屈そうな顔をしながらめくっていた。グンゾウ達に気付くと「あらあゝ、久しぶりー、どんだけー」っと両手を細かく振って出迎えてくれた。ブリちゃんは黒々とした長くて多い睫毛まつげをバサバサと鳴らしながら、カズヒコに熱い視線を送っている。

「カズヒコだったら、あたしに会いたくて来ちゃったのー?」

ブリちゃんはや片目を瞑り、投げキッスをした。

「今日は用件があつてきたよ、ブリトニー」

投げキッスあひるに怯ひるまないところがカズヒコのすごいところだとグンゾウは思った。グ



ンゾウはブリちゃんに見つかからないよう、でかいクザクの陰に隠れている。

——久々に見ると改めて……きつついなあ。

グンゾウが怖い物見たさでブリちゃんを眺めていると、ブリちゃんはその視線に気付いた。

「あらやだ、グンちゃん、そんなに見詰めないで。隠れてても感じちゃうわ。痩せて、精悍せいこんになって、いい男になってきたじゃない。今なら、ペットにしてあげもいいわよお」  
ブリちゃんは両手で自分の頬を押さえ、くねくねと科しなを作つくった。

「なっー」

グンゾウは言葉に詰まる。ブリちゃんのペットにされている自分を想像する。背中から服の中に氷を突っ込まれたかのように、グンゾウの体を強烈な寒気が走った。グンゾウは身体が石化したようになる。

止めとどめとして、ブリちゃんがウインクをする。グンゾウの身体からだから何かが抜けて、体重が21グラム軽くなった。

「あつた、あつた、これこれー」

男性陣がブリちゃんに近付くのを躊躇ちゆうちゆうして、距離を取っているのに対して、ヨシノはずかずかとブリちゃんの傍そばに歩いて行つた。

「これ、貸してよ、ブリちゃんー」

ヨシノがブリちゃんに笑顔えがおを向け、柵の上にある望遠鏡を指差した。

「あらやだ。それが用件？ 正式な義勇兵になれば、貸してあげないこともないけど、見習いさん達には貸せないわあ」

ブリちゃんはいやらしく説明した。

「へっ、カズヒコ、俺にやらせてくれ」

リョータは鼻を鳴らすと右手をカズヒコに差し出す。カズヒコは「どうぞ」と言つて、リョータに革の袋を渡す。

リョータははずかずかと足音を立ててブリちゃんのいるカウンターまで近付くと、「バン」と音を立てて、その袋を叩き付ける。銀貨同士のぶつかりあう音が義勇兵団事務所の中に響く。

「おらー！ これ俺等は正式な義勇兵だ、とつとと団章と望遠鏡をよこしな」

リョータは歯をむき出しにして、不敵ふてきな笑みを浮かべながら、ブリちゃんを睨み付ける。リョータの不遜ふそんな態度に、皆の間に緊張が走る。

ブリちゃんはつまらなそうに革袋を手に取ると、中を覗く。

「ふーん……」

顔を上げたブリちゃんは、リョータの迫力を上回る不気味ぶきみな笑みを浮かべながら返事をする。

「意外と早かったじゃない？ ……あなたのような馬鹿な子はすぐ死ぬと思ってたわ。おめでとう、ここからが本番よ」

翌日から各人かくじんスキル習得のためギルドに戻り、2週間を目途に宿舎に再集合ということになった。2つか3つのスキルは習得できる期間だ。

「ちよつと、みんな良いかな？」

夜、グンゾウはリョータ小隊に呼びかけて、装備購入と習得スキルについて、打ち合わせを行った。

各ギルドで習得できるスキルにはしなんりょう指南料の価格帯がある。初歩の技は10シルバ程度、次のレベルは3〜40シルバ程度、その次は1〜1.5ギルド程度、その次は3ギルド以上となるのが、大体の相場だ。

またスキルの系統によっても習得にかかる期間や費用が変わってくる。例えばアキが覚えようと考えている守護しゅご剣闘術けんとうじゆつの盾受は盾打ぶつの基本形なので、盾受ぶつを習得しておけば、後々盾打ぶつを習得する際には訓練期間も短く、費用も割引がきくようだ。

前衛のリョータとヨシノは防具とスキル習得費を半々位で考えているようだった。前衛は装備の購入に費用がかかるため早速保管金からリョータ、ヨシノ、アキに20シルバずつ渡した。

戦士のスキルに関して、グンゾウは考えがあり、リョータとヨシノに雄叫びだけは両人とも習得するようにお願いをした。

アキは、装備の購入についてゴブリンから得た装備の微調整と胸当ての購入を考えているとのこと。スキルは盾受と癒し手、余裕があれば光刃の習得を考えているようだった。

残りは装備にお金がかからない後衛だ。

シムラは弓術、狩猟術、剣鈍術のスキル全てをバランス良く習得するつもりとのことだが、特に具体的なイメージはないらしく、イガグリ頭を捻っていた。

ハイドについては、ある意味皆に信頼をされているので誰も触れなかった。「統御法」だとか、「物理法則」だとかブツブツと訳がわからないことを独り呟っていた。

グンゾウは遠距離からでも仲間回復ができる光魔法の癒光を軸として、光魔法と護身法の内、可能なものをいくつか習得することを決めていると報告した。

——実はあんまり考えてなかったりして。でも、もうゴブリンに顔を踏まれたくないから、護身法は何か覚えよう。

概ねの情報交換をして、意識の統一を図るとリョータ小隊も就寝した。

グンゾウは、命のやり取りに身を置くことなく、しばらくオルタナで平和に暮らせることに幸せを感じながら眠りに入っていた。

この時点においても、グンゾウはすっかり忘れていた。

スキルを習得するということは、再び彼女とまみえなければいけないということ。  
彼女の名はカレン……マスタ修師カレン。

## 16. 修師カレン

それは平穩へいおんな日々だった。

夏の太陽さらに曝さらされ、害虫を避けながら野山を歩き回る必要もない。怪物モンスターとも無縁だ。命を危険に曝さらすこともない。もちろん命を奪う必要もない。金銭的にも余裕がある。衣食住に困ることはない。壁と兵に守られたオルタナの中で過ごす2週間。最高だ。グンゾウの少ない記憶の中で最も平穩な日々だ。

否、日々だったはずだった。

「いぎだぐないいいい」

「何を言ってるんですか、グンゾウさん！ 子どもじゃないんですから、行きますよ」

同じ神官で、今日は一緒にルミアリス神殿へ修練に行くはずのタイチが、中庭のベンチにしがみつくとグンゾウを引っ張っていた。

「タイチ君、いや、タイチ様、一生のお願いだから、俺を放っておいてくれ」

「駄目です。そんな聞き分けのないことを言わないでください」

「聞き分けとか、そういう問題ではないんだ。俺の命そんげんの尊嚴そんげんに関わる重大事項なんだ」

グンゾウがそれに気付くまでは、いつも通りの朝だった。1つ目の時鐘じしょうの前に目を覚

ます。口を濯ぎ、顔を洗う。ルミアリス神への朝の祈りを捧げ、杖の訓練をする。裏の雑木林で寝ているハイドを迎えに行き、中庭でカウヒー茶を飲みながらヨシノとアキの起床を待つ。景色の良くなった中庭で、今日を生きている幸せを噛みしめる。

そして、ヨシノの槍捌きを眺めている時に気付いてしまった。

新しいスキルを習得に行くということは彼女…… 修師カレンに再度会わなければいけないかもしれない” ということに。

グンゾウはこっそりと他の職業の仲間を送り出し、最後にタイチだけ巻けばいいと思っていた。実際そうしたが、タイチを巻けなかった。

「いつもみたいに危機を切り抜けてくださいよ。みんなに示しがつかないでしょ」

タイチはしぶとくグンゾウを引つ張る。それほど肉体派ではないが、若いだけあって持久力がある。そろそろグンゾウの体力が尽きそうだ。

「わかった。わかった。行く。行くから、引つ張らないで」

「はい。わかりました」

素直なタイチはグンゾウを放す。

——なんてね。大人はずるいんだよ。

放されたグンゾウは身を翻すと、走って出口の方向に向かった。走りながらタイチを振り返り、グンゾウは声をかける。

「タイチー。ごめんねー。ルミアリス神殿は独りで行って。どうしても神殿には行きたくないんだ。少しオルタナ生活を満喫するわー」

グンゾウが前を向くと、そこにはあるはずのない壁があった。壁のように見えた。グンゾウは壁に顔面からぶつかると、「おふっ！」と声が出た。思ったより固くない。ぶつかった壁にそのまま抱きしめられる。

——壁に抱きしめられた？

「それは駄目っしょ。グンゾウさん」

壁がグンゾウを抱きしめながらほそほそと暗い声で喋る。

「グンゾウさん。何してるんですか？」

別の声も聞こえてくる。聞き覚えがある。聞き覚えがあるどころかグンゾウが好きな声だ。意外と低くて落ち着いている、でも可愛らしいあの声だ。

「ア、アキい？　なんでここに居るの？」

グンゾウを抱き留めていたのはクザク、そして傍にはいつもは伏し目がちな目を丸く開いたアキがいた。

「ヨシノちゃんから『グンちゃんの様子がおかしいから、ルミアリス神殿まで連れて行ってあげて』って朝に言われたんです」

——なるほど……野生の勘が鋭いヨシノに気付かれていたか。無念。



「逃走は諦めました」

グンゾウは観念して、クザクの広い胸にもたれかかった。

——あ、なんか抱きしめられるって気持ちいい。

義勇兵宿舎からルミアリス神殿へは、天望楼前の広場を通過して北区に向かう。行き道、グンゾウはほぼ魂が抜けた状態で歩いている。左右をアキとタイチに挟まれ、後ろはクザクが塞いでいる。左右の腕は腕組みまでされている。まるで護送されている囚人のようだ。唯一、アキに腕組みされていることが辛うじて生きる力を与えている。

——アキとふたりつきりならこんな楽しいことはないだろうけど……。

「グンゾウさんの修師はそんなに酷い人なんですか？」

アキが聞く。

「うん……」

グンゾウは力なく答える。

「確か、規定修練の時は、ほぼ食事抜きでしたっけ？」

タイチが聞く。

「うん……」

グンゾウは力なく答える。

「でも、逃げちや駄目だわな」

クザクが言う。

「うん……」

グンゾウは力なく答え……その後、思い直してクザクに言い返す。

「いや、違え！ 辛いだけなら俺も頑張る。でも命の危険があったら、それは避けるだろ？ 死ぬって分かってて戦いを挑むのは愚かってもんだろ？ そんな命知らずの愚かな男が立てる戦術で戦えるか？」

「それは……まあ、そうっすけど」

グンゾウ達は北区の市場を通り抜けていく。北区の市場は朝から賑やかだ。市場の喧噪がグンゾウ達を包んでいる。グンゾウの目の前で市場の商人と客が楽しげに会話し、屋台からは美味しそうな匂いが漂っている。露天商の軒先にぶら下げられた檻の中で、食肉用の鳥が悲しげに鳴いていた。グンゾウにはそう聞こえた。グンゾウはその鳥と目が合い、悲しげに見えるその目に共感を覚えた。実際は無感情な鳥の目だ。

——ああ、鳥ちゃん。君と同じ運命だよ。俺はこれから地獄行きの檻に閉じ込められるんだ。娑婆の霧を味わえるのもこれが最後かな。グリムガルに来て、あんまり良いことなかったな。最期は女性に抱きしめられたかったな。

グンゾウの目にうつすらと涙が浮かんだ。

「あのリョータやハイドと上手くやれているグンゾウさんが苦勞するつてのは確かに修師の人に問題があるのかもかもしれませんね。じゃあ、私から神殿側に不必要に過酷な修練は止めるように申し入れますから、元気出してください」

アキがいつになく優しい。グンゾウは感動してしまった。

「うう、ありがとう。アキ」

「僕もできる限りグンゾウさんを守ります」

タイチもグンゾウに優しい顔でほほえんでいる。

「ありがとう。タイチ」

グンゾウは何だか勇気が湧いてくる気がしてきた。

「まあ、たぶん、何も変わらないと思うけどね」

前向きになってきたグンゾウの心をクザクがぶち壊す。

「なんなの？ クザク、俺に恨みでもあんの？」

「いや、ないっす」

グンゾウが恨みがましい目で後ろを見上げると、クザクはいつものように白けた顔のまま目を逸らした。

——嗚呼、帰りたい。宿舎に帰りたい。そうだ、帰ろう。帰ったっていいじゃないか、人間だもの。グンゾウ心の俳句。……あれ？ なんか違う。

グンゾウが心の中で眩つやいる間に、ルミアリス神殿は目の前に迫せまっていた。

ルミアリス神殿の学院で、グンゾウは波々しぶ修練の申し込みをした。アキは本当に受付の女性に対して、過去にグンゾウが不必要に過酷かこくな扱いを受けたと説明をしてくれていたようだった。

——いつもより優しい。

聖騎士と神官は修練する場所が異なるため、アキと根暗クザノツボとは学院の入り口で別れた。グンゾウはタイチと2人きりになった。

——今なら逃げられるんじゃないかなろうか？

「グンゾウさん。今回は違う修師かもしれないですよ。」

タイチはグンゾウの心の中を見透かしたように腕を捕つかんだ。

「そ、そうだよね。修師も暇じゃないんだし、毎回、毎回同じってわけはないよね」

グンゾウは学院の入り口でタイチと話しながら、手続きを待っていた。案内の神官が現れる。グンゾウの名が先に呼ばれた。この後、修練の部屋に案内されるのだ。

「じゃあ、午前の修練が終わったら、食堂で会いましょう。グンゾウさん」

「ああ、わかった」

グンゾウは緊張しながら案内の神官の後に付いていく。学院は入り口や受付がある

本棟の他に、研究棟、図書館、修練場等の複数の建物から構成されている。各棟は渡り廊下で結ばれていて、その渡り廊下は長い。修練場はいくつかの建物で出来ている。修練場へ行く渡り廊下は長い。修練場はいくつかの建物で出来ている。

グンゾウはその中のひとつに通された。建物の南北に入り口があり、修練を受ける神官は北側の入り口から入る。

「ここに待ちなさい。担当の修師が来ます」

案内の神官にそう言われたので、グンゾウはお礼をして建物に入って扉を閉めた。

建物の中は少し暗い。しかし、明かり取りの窓が南向きの天井付近に設けられているため、光が射し込んでくる。光が空気中の埃で散乱し、光の通路が見える。神々しい雰囲気醸し出されている。

窓の下には白いカーテンがあり、その白いカーテンの向こうには南側の扉がある。担当の修師はその南側の扉から入ってくる。

——どうかあのカーテンから現れるのがカレン師ではありませんように。

グンゾウは祈るのではなく、思わずルミアリス神に願いますがってしまった。

そうしていると、建物に誰かが近付いてくる足音が聞こえる。グンゾウの心音が一気に高まる。周囲が静かなため、自分の心音が五月蠅いくらいに聞こえる。足音もだんだんと近付いてくる。

——緊張する。なんか過去に似たような経験をしたような気もするけど、もつと楽しい状態じょうきようだつた気がする。

南側の扉が開く音がして、白いカーテンにさつと光が射すさ。カーテンに一瞬人影が映つた。そんなに大柄な人物ではない。

——今の人影……まさか……。

グンゾウの緊張がピークに達する。心臓の鼓動は既に限界近くまで速くなつていて、ダムローでゴ布林達から逃げている最中よりも速いのではないかと錯覚さつかくさせる。呼吸も乱れ、脂汗あぶらあせも噴き出している。

カーテンが「シヤツ」という音を立てて開けられる。

そこに居たのは……。

そこに居たのは、神官衣を纏まとい、手にシヨートスタッフを持った一人の女性だつた。年齢としは20代前半と思われた。

彼女の身長は小さい。150センチくらいか。グンゾウ達の仲間で言えばチョコヨリも少し小さい感じだ。目立つのは金髪きんぱつのシヨートカット。光明こうみやう神ルミアリスに心から帰依きえするためか、白いほどに金髪だ。肌も透けるように白い。そして痩やせている。この特徴はまるでアキのようだ。実際、彼女はアキを一回り小さくして金髪シヨートカット

トにした感じだ。その金髪の下に小さい顔が付いている。眉毛は黒いのできつと髪の毛は脱色ブリーチをしているのだろう。さらにその眉毛の下、筋の通った小振りの鼻の上に眼鏡がかかっている。眼鏡のレンズの奥には鋭くグンゾウを睨み付ける大きな目があった。薄い二重ふたえで長い睫毛まつげをしていて、常に睨んでいる前提でなければ可愛い目をしている。色白眼鏡美人だ。グンゾウの苦手な容姿では無い。むしろ大好物な方だった。

「カ、カレン……」

グンゾウの声にカレンの左眉毛がピクピクと吊り上がる。

「ほほう。グンゾウ、再会そうそ早々、師を呼び捨てとは、偉くなつたものだな」

「あ、ああ、久しぶりにカレン先生とお目にかかり、感動しまして、敬称を忘れました」

——終わった……。俺の2週間オルタナ満喫生活は地獄へと変わり果てた。

「先生ではない。どうやったら私がお前のような中年より先に生まれていると思うのだ？ 私のことは修師と呼べと言ったはずだ。まだ……、体が覚えているのか？」

「体が覚えているくない」の部分でカレンの口元が初めて少しだけ緩む。グンゾウはその様子に身が縮み上がる。

「い、いえ。修師カレン。覚えております」

「そうか。体で覚えたいのかと思つた」

「滅相もございません」

「ところで、今日は何の修練で来たのか？」

「あの、修師マスターのご尊顔そんがんを拝見はいけんしにきただけで、本日はこれで失礼をさせていただきます」  
 「そうか。私の手元の紙には『癒光ヒールと護身法の習得を2週間かけて』と記載があるな。間違いか？」

——ば、ばれてる……。そういう仕組なの？ 結構組織システムティック的なのね

「……。んー、手違いかもしれないですね。修師マスターにはお手数をおかけしました。受付で訂正して帰ります。それでは、これにて」

グンゾウが立ち去ろうと後ろを向くと、グンゾウの背後から「ひゅっ」と風を切る音がする。

「がっー！」

グンゾウは首の付け根、右の肩に激痛げきつうを感じた。

——さ、鎖骨さしこつが折れた?! 右腕が上がらない。

グンゾウが前に倒れ込みながら後ろを振り向くと、快楽に歪んだ顔をしたカレンがグンゾウを見下ろしていた。名が示す通り美人なところがさらなる恐怖を感じさせる。カレンはショートスタッフの飾り部分を掌てのひらにペチペチと打ち付けていた。

「グンゾウ、今のが『強打スマッシュ』という護身法の技だ。体の関節を柔らかくして、最も効率キレ的な軌道きどうで、遠心力を使った打撃を与える。非力ひりきなものでも大きな衝撃力が出せるぞ」



「痛い……、いや、いや、別に覚えたくないです」

「そうか、じゃあ……」

カレンが何か祝詞のりこを唱えようとグンゾウの前に神聖文字が浮かび上がり、温かな光が包む。グンゾウの右肩から痛みがどんとどんとひいていく。

「今のが癒光だ。離れていても、光を浴びた者の全身の怪我を癒やすことができる。覚えなかったんだらう？」

「いや、それは……」

カレンはグンゾウに近付くと、左手で襟首えりくびを掴み引き寄せる。か細い腕からは想像できない程力強い。お互いの顔が近付く。とつさにグンゾウは顔を背けた。カレンの小さく尖った顎先あごさきがグンゾウの頬に触れる。

——近い。

強烈に甘ったるい、官能的な香水の匂いがある。ヨシノやアキと違い大人系の匂いだ。グンゾウは色んな意味で心拍数が上がる。

カレンはグンゾウの耳元に口を近付けると怖いくらい優しく囁く。

「2週間、たっぷりと楽しめそうだな」

そう囁きながら、ショートスタッフの石突きでグンゾウの下腹部をグリグリと捻り押しした。

——こ、殺される。

夕べの食堂。まだ太陽は落ちていないが、広い建物のため奥の方は薄暗い。机の上に洋燈ランブが置かれている。食事は豆や野菜を中心とした質素しっそなものだが、バフェスタイルのため量は自由だった。グンゾウはタイチと向かい合って夕食を食べていた。グンゾウやタイチ以外にも数人の神官が食事を摂っていた。恐らくルミアリス神殿に勤めている人達だろう。

アキの申し入れが功こうを奏そうしたのか、それともグンゾウが痩やせたのでカレンのお許ゆるしが出たのか、夕食を摂とることができた。ただし、昼飯ランチは抜きだった。

「大丈夫ですか？ 怪我はしてないみたいですけど」

タイチが心配そうにグンゾウの顔を覗き込んでくる。

「ありがとう。怪我は部屋を出る前に治してくれるんだよ。……散々虐待プレイを楽しんだ後でね」

「プレイ？」

「あ、こつちの話」

——シエリーの酒場で聞いた噂うわさじゃ、盗賊ギルドでは40シルバー払うと、30歳前後のセクシーで美人な盗賊シーフの先生にご褒美ほうびを貰もらいながら技スキルを身に着けられるって話だ。

パラダイス  
天国じゃないか。大違いだ。俺も盗賊シーフになれば良かったかな？

タイチは自分の修師にカレンのことを聞いたようで、情報を共有してくれた。

「しかし、そのカレン師という方は、オルタナのルミアリス神殿では有名な方そうですね。オルタナ出身で幼くしてルミアリス神殿の門を叩き、学院で優秀な成績を収め、最も若く修師になつたらしいです」

「そうなんだ……」

——うちも美人は美人だが……。虐待ぎやくたいをしている時のカレンは最高えつに悦に入つた表情をしているよな。あれはDSだ。

「ルミアリス神信仰の歴史を研究していて、古文書から過去に失われてしまった祝詞を復元させ、新たな光魔法を復活させたこともあるみたいですよ」

「そうなんだ……」

——出会つた時から鋭い目はしていたけど、ここまでの暴力はなかつた気がする。やっぱりあれ以降以降だよな。

「ただ、出る杭くは打たれるということで、色々権力争いとかにも巻き込まれて……グンゾウさん、聞いてますか？」

「そうなんだ……」

——とにかく、時間を戻してこうなつた背景を詳細に思い出そう。

グンゾウは全くの上の空だった。過去の規定修練の頃を思い出すことに注意力の殆どが奪われていた。タイチはグンゾウに話かけるのを諦めると食事に戻っていった。

「あ、ごめん、今なんか話しかけた？」

グンゾウは今更タイチに聞き返した。

「じゃあ、グンゾウさん。おやすみなさい。また明日」

グンゾウはタイチと宿舎の自室前で別れた。

「タイチ、今日は色々と心配してくれてありがとう。また明日」

グンゾウは部屋に入ると、手に持っていた行燈ランタンから部屋にある洋燈ランプに移す。薄暗い部屋の中が澄だいたい色の柔らかい光で満たされ、明るくなる。グンゾウはベッドに仰向けになった。明るくなった天井を見ながら、規定修練の頃を思い出す。

——あの時、どんなやり取りだったかな。

カレンは出会った初日から暴力的なわけではなかった。もちろん厳しい修行を課してはいたが、それはどの修師も同様で、度を超えているという水準すいじゆんではなかった。

その日は、規定修練の2日目で、初めてショートスタッフを使った護身法を習う日だった。今日の修練はそろそろ終わろうという時間、防御の練習をしている際だ。グン

ゾウはすごく疲れていた。カレンの華麗な杖捌きに翻弄され、杖を落とし、生身で打撃を受けて怪我をってしまった。

痛みでしやがみ込むグンゾウに、怪我の治療のためにカレンが近くに寄ってきた。

先に言い訳をすれば、グンゾウはグリムガルにきて数日間は、当然に禁欲的な生活を強いられていた。さらに慣れない修練初日と2日目の疲労が絶頂に達していた。そこへ初めて味わう癒し手の心地よさと、カレンから漂う官能的な匂いにグンゾウの下半身が反応してしまった。

さらに運悪く、グリムガルに來たばかりのグンゾウは着替えが無いため、神殿から与えられた粗衣を着ていた。その粗衣の隙間から屹立したグンゾウの何かが顔を出してしまった。しかも、グンゾウの治療をしているカレンの目の前にだ。

グンゾウも驚いたが、カレンは驚きのあまり目を見開いて数秒停止した後、「きやあつ！」つと言つて、ショートスタッフでグンゾウの下半身と顔を叩いて離れた。

「あ、これは……その……」

カレンは顔を紅潮させ、下を向いたまま肩を振るわせていた。グンゾウが言い訳の文章を組み立てようと考えを巡らせていると、カレンが先に口を開いた。

「そういうことか……。お前は体が弛んでいるだけではなく、無駄な精力も余っているようだな。食事を抜いて、少し身を清めるがよい。食堂に、貴様には水以外の食事を出

さぬように伝えておく」

そう言うとかレンは修練場の扉を強く閉めて、後にした。

——やばい。今思い出しても恥ずかしい。

グンゾウは独りベッドで赤面せきめんしてしまった。

次の日もグンゾウの不運は続いた。早朝から水で身を清め、ルミアリスへの祈りを終えてから修練場に入るのだが、その際に回廊を歩いているアキを見かけてしまった。アキもグンゾウ同様に粗衣に身を包んでおり、丈の短い上衣チユニツクを着ていた。その短い丈から出ている白くて細い脚が、朝日を浴びて眩まぶしかった。

その眩しい脚の映像が眩まぶたに焼き付いて消えないまま、修練場に入った。グンゾウは少年ではないが、まだまだ現役の男性だ。朝であったことや諸事情しよじじょうが諸事情により、何が何して、またしても下半身の元気が収まらない状態でカレンの到着を迎えてしまった。

昨日のこともあり気まずい。朝一から護身法の訓練であった。体の一部が不自由なグンゾウは滑なめらかに体を動かすことが出来ないでいた。

「ふざけているのか？ 貴様」

カレンの怒気どきが籠こもった渾身こんしんの一撃を上手く受けきれず、グンゾウは頭部に怪我をし

てしまった。グンゾウはうつ伏せに倒れ込んでしまう。

「ふざけているから、そういうことになるのだ！」

カレンは怒りながら、グンゾウの治療をしようと近付いてくる。そして、カレンがグンゾウを仰向けに起こすと、またしてもグンゾウの何かが顔を出してしまった。カレンは一瞬笑ったような歪んだ顔をした後、グンゾウを突き飛ばして、「いい加減にしろ」と叱った。グンゾウは頭を打った衝撃で朦朧もうろうとしていたので、どう返事をしたか覚えていない。何か言い訳をした記憶があるだけだった。

「貴様は仕方のないド変態へんたいだな。グンゾウ」

カレンからそう言い放たれた。

——あの時、なんて言ったのか思い出せない。

グンゾウは脳震盪のうしんとうを起こしていたのか、その辺りの記憶がさっぱりなかった。

その日からカレンのグンゾウへの当たりは厳しくなっていた。特に護身法の修練時は容赦ようしゃない攻め方をされた。カレンは傷付いたグンゾウをこまめに治療するのを止め、ぼろぼろになった最後に光の奇跡ザクラメントで治すようになった。グンゾウには、カレンがグンゾウの苦しむ姿を楽しんでいるように見えた。

——よく考えたら、俺はカレンが恐ろしくて一回もちゃんと言い訳をしていない。それに「暴力は止めてくれ」とも言っていない。カレンに変態だと思われるなら、もしかしたら、俺のことを超M男君だと思っっているんじゃないか？ だとしたら暴力が止むわけがない。カレンにしてみれば、修練と一緒に利害の一致する趣味を楽しんでいくらいにしか思っていないことになる。よし！ 明日は必ずしつかり説明しよう。俺はMじゃないって！

グンゾウはどうしようもない決心をしながら、安らかな眠りについていった。

翌日。グンゾウはカレンの前に立っていた。オルタナでの普段着の上に、神官衣を着ている。ダムローからの撤退戦でゴブリンと対峙した時よりも緊張していた。

修練の前にカレンへ切り出す。

「<sup>マスター</sup>修師カレン、きちんと説明しておきたいことがあります」

カレンは一瞬間の皺を深くしたが、普通に戻り話を聴く体勢になった。

「……なんだ。聴こう」

グンゾウは真剣な顔をし、胸を張って、不退転の決意で話した。

「私はマゾではありません。なので、痛みを受けることに喜びを感じていません。過去



に修練で怪我をした際にお見苦しいモノをお目にかけてのは、反省しております。その……<sup>マスター</sup>修師が美人なのでつい体が反応したもので、けして殴られたことに興奮したものではありません。誤解しないでいただきたい」

——言い切った……。あとは野となれ、山となれ。

カレンは聞き終わると、下を向く。表情は見えない。そのまま180度ぐるりと後ろを向いてしまった。少しだけ背中が震えている。

——怒らせちゃったかな？

「……………くくくくくく」

——あれ？

「くくくくくくくく。はっはっはっはっは。あーっはっはっはっはっは」

カレンはお腹を抱えて笑っている。

——あれ、あれ？ 思ってたのと違う反応だ。

「くふふふふ。こんな馬鹿な男は初めて見た」

「はあ……………すいません」

カレンはお腹を抱えながら、グンゾウに近付いてくる。肩に手を置く。グンゾウは思わずびくつと震えてしまう。

「そうかそうか。よく分かった。私も勘違いをしていた。私に欲情したわけで、痛みに

興奮したわけではないってことだな」

——お。理解してもらえた！

「そ、そうなんです」

次の瞬間、カレンのショートスタッフがグンゾウの鳩尾みぞおちを鋭く貫く。

「ぐふおあー！」

グンゾウはお腹を抱えて、体を折り曲げる。胃液が食道まで上がってくる。体を折り曲げた状態で、カレンを見上げる。

「何故え……」

カレンは快楽の極みという目をしながらグンゾウを見下ろす。そして、グンゾウの耳元に口を近づけていく。強烈に甘い匂いがする。

「理解はしたが、世の中には流れつものがある。私も色々溜まっている。少し付き合え」

そう言うときカレンはグンゾウの耳に優しく息を吹きかけた。グンゾウはぞくぞくと震える。

「お前には先天的な才能を感じるしな。今、普通ノーマルなのは理解した。少しずつ育ててやる」カレンはグンゾウから離れると正対せいたいして直立する。

「さて、今日が本当の初日だ。何を習いたいか言え。オルタナ史上最若年の修師が稽古

をつけてやる」

——なんだか……、解決したような、していないような。

そこから、グンゾウとカレンの新しい関係が始まった。

その日の修練終了後、結局ぼろぼろにされたグンゾウは床に仰向けに倒れながら尋ねた。

——確かに、今までより少しましだったかもしれない。

「あの……、マスター修師……、私は規定修練2日目に頭をぶつけた際、なんて言っていましたか？」

カレンは溜息ためいきを吐いて椅子へ座ると、退屈そうに、倒れているグンゾウの腹をショー

トスタツフの石突きでつんと突きながら答えた。

「お前は切なそうな顔でマスター『修師カレン、もつとお、もつとくださいあい』って言ってたぞ。あの欲しがりようでは聡明そうめいな私でも勘違いするよ」

——なんてこつた……。

グンゾウは軽い絶望感の中、早く光サクラメントの奇跡して欲しいと思っていた。

## 17. マナトくんの地図

グンゾウ達は、ダムローの西にある監視塔を目指して、森を進んでいた。

全滅の危機を乗り越えた経験と、ギルドにおける2週間の修練は確実にグンゾウ達の力量を底上げしていたようだ。それは監視塔を警邏していたと思われる可哀想な8匹のゴブリン達で実証された。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつー!」

この声はリョータではない。ヨシノの声だ。戦士特有の技である雄叫びだ。独特な発声方法で、とんでもない大声を出し、敵を威嚇する。心の準備をしていない生物は一瞬目の前の敵を忘れて耳を押さえてしまう。

動きが止まった敵を戦士達が逃す訳が無い。

リョータが一本突きから憤怒の一撃と技をつないで、2匹のゴブリンを瞬殺する。1匹目は一撃で頭と体が離れ、2匹目は肩口から半分になった。グンゾウは、できればリョータに巻撃という罅迫り合いから切り返す技を覚えて欲しいと思っていた。しかし、一本突きの方が格好良いからという理由で選んだらしい。リョータらしいと言え、リョータらしい選択だった。

カズヒコ、ミッツもそれぞれ一匹ずつを迷い無く斬り伏せる。ミッツも踏み込みが深くなり、少しは戦士らしい自覚が身につけてきたように見えた。

クザクの目の前にいたゴブリンは素早いタイプのゴブリンで、クザクの長剣を辛うじて躲すと、クザクを踏み台にして、後衛を狙いに行く。

——クザクは、踏み台2号だな。

クザクは資金を主に装備へ費やしたようで、兜、胴当、背当等が新調されていた。一端の聖騎士に見える。

——クザクの体格じゃ、アキみたいだ。ゴブリン装備は入らないしな。

不運なのはクザクを突破したゴブリンだ。技を試したい盛りの後衛達の良的になった。

「ジール・メア・グラブ・フェル・カノン」

ノッコの凍てつく血という氷結魔法が着地したゴブリンの足に命中する。ゴブリンの足元が凍り、地面とくっついてしまう。ゴブリンは転倒する。

「キシシ、ジェス、キシシキシ・イーン・サルク、キシシ・フラム・ダルト、フシシキシシ」

ハイドは黄色い宝石が付いた杖を使ってエレメンタル文字を空中に描いている。2週間を空けて現れたハイドは杖を3本も持っていた。今回の修練で身に付けた魔法の

系統にそれぞれ合った杖らしい。ハイドはいちいち使う魔法毎に杖を持ち替えている。

いやらしく笑うハイドの詠唱が終わると電磁魔法ファルツマジックの雷電ライトニングが発動する。相変わらず「キシシ」の部分が発動不安にさせるが、ちゃんと発動するから謎だ。

中空からゴブリン目がけて閃光せんこうが走る。少し遅れて、打楽器だがっきが一斉に鳴り響くような轟音ごうおんが追いかける。

ハイドのお気に入りは雷電ライトニングのようだった。宿舎裏の雑木林で木が何本も縦に裂けて倒れているのをグンゾウは目撃している。「山火事を起こさないと良いんだが」とグンゾウは思っていた。

ハイドの雷電ライトニングに撃たれたゴブリンはびくつと飛び跳ねた後、動かなくなつた。

——いい威力だ。残り3。さて……。

グンゾウが視界を広くすると、アキが目に入る。

アキの目の前にいるゴブリンはふらふらだった。正確にはアキにふらふらにされてしまっていた。アキの技スキルだ。

最終的にアキが習得してきたのは癒し手キュアと盾受ブロックと盾打バッシュだった。特に盾打バッシュの練習に熱心なようで、隙あらば「えいっ!」「やっ!」等と声を出しながらゴブリンの顔面を逆三角形の歩兵用ヒーダーシールドの扇型盾でバンバンと叩いていた。盾打は相手の動きを予測して、カウナー気味に最適なタイミングで全体重をかけた盾を突き出す技だ。敵の武器を打ち

払ったりもするが、今はゴブリン本体を叩いてる。

真剣にゴブリンの動きを観察して、動き出しを見て全身でぶつかっていくアキの姿がかわいらしくもあつた。

——あの技、ちよつと面白いな。

前衛が手当されていない残つた2匹のゴブリンの内、奥にいた1匹は矢が心臓付近の胸に2本刺さつて倒れた。シムラが樹上から狙撃したのでらう。シムラは速目という技を覚え、さらに命中率が上がつていた。速目は特殊な眼球運動と暗示により、遠目が利く効果と、動体視力を向上する効果があるらしい。

手前のゴブリンには、雄叫びを終えたヨシノが脱兎の如く駆け寄つていたので、寿命は残り少ないだろう。ヨシノは「可愛かつたから」という理由で片刃の曲刀を2本買って腰にぶら下げている。まるで妖精の下羽だけ生えたようだ。槍が抜けなくなつた時の武器らしいが、何故2本必要なかは誰にも説明がなかつた。

——終つたな。

全てのゴブリンへ手当てが完了し、グンゾウは安心してた。

「グ、グンゾウさん。あれっ!」

そこにタイチの声が届く。「おやつ?」と思い、目を遣ると1匹のゴブリンが前衛を抜けて後衛の方に向かってきていた。

——9匹もいたのか。森の中は視界が悪いから厄介だ。やれやれ。

ハイドとノツコはすぐに精霊魔法の準備に入ろうとした。グンゾウは左手を挙げて、魔法使い2人を制する。

「キシキシ、いいのか？ グンゾウ」

「ああ、俺にも仕事させてくれよ」

そう言うと、グンゾウは祝詞を唱え始めた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……咎光！」

咎光は光明神ルミアリスの光で敵を懲らしめる光魔法だ。短射程でダメージも小さいが、喰らうと短時間敵の体を痺れさせ、動きを鈍らせることができる。

この魔法は護身法と癒光を早めに習得できたグンゾウに、カレンが「役に立つから、これも覚えていくがよい」と期間ぎりぎりまでかけて習得させた技だ。カレンの本音は咎光をグンゾウにかけ、痺れて苦しむ姿を楽しみたかったのではないかとグンゾウは疑っている。

グンゾウの手元から放たれたまばゆい光が近付いてきたゴブリンの体を捉えた。

「ギャギャギャギャ……」

——この魔法は、ダメージが小さい割に結構苦しいんだよね。何回も喰らったからわかるよ。



「咎光ブレイムをまともに喰らったゴブリンは痺れに体の自由を奪われ、蹠蹠よろめいている。  
咎光ブレイムからの、強スマっ！」

「やっ！」

グンゾウが咎光ブレイムから覚えたての強打スマツシュに繋ぐ連続技を披露ひろうしようとしたところ、ゴブリンの後ろに現れたチヨコが背面打突バックスタダブで止めを刺した。良いところに刺さったのか、チヨコがダガーを抜くと、ゴブリンが前のめりに倒れる。

「あ」

グンゾウが啞然あぜんとしていると、チヨコが気まずそうに頭を掻かいた。

「あ、ちよつと覚えた技スキルを練習したくて」

「全然、いいよ。でも、声はかけてね。危うくチヨコごと叩たたいちやうところだったよ」  
「気をつけまーす」

チヨコはぺこつと頭を下げると、ダガーに付いた血を一振りで払い、鞆さやに収めた。  
チヨコは新しい技スキル以外に、服装が可愛くなっていた。

その頃には、アキもヨシノもそれぞれの相手を地に伏せていた。

グンゾウ達は、ほぼ瞬間しゆんかん的にゴブリン9匹を殲滅せんめつすることができた。

——楽勝らくしょうだな、これ。自制じせいしないと油断ゆだんしそう。

「おー、よく見える。でも、建物の影はやつぱり見えないな。いっぱいいるなー、ゴブリン達」

グンゾウは監視塔の屋上にいた。木製の三脚を立てたブリちゃんの望遠鏡ぼうえんきょうを覗のぞきながら、独り言ひとりごとを言っていた。

「あたしも見たいよー。グンちゃん替わってよー」

ヨシノがグンゾウの傍で望遠鏡を覗きたくて、ぴよんぴよんと跳はねている。跳ねる度に鎖帷子チェイヌスエイルがチャリチャリと音を立てた。

——子どもみたい。子どもは鎖帷子着ないけど。

塔にはグンゾウ、ヨシノ、ハイドだけ残り、他の仲間は塔に近づくゴブリンを狩るため哨戒活動しやうかいに出かけた。戦力の均衡バランスを取った結果だ。使える回数が少ないとは言え、アキが癒キユし手を習得した結果、タイチとアキが居れば激しい戦闘でなければ回復量が足りてしまう。

「ちよつと待つてね。先に今日、確認する点だけ全部見させてね」

グンゾウはダムローの大まかな地図を手帳に書き込むと、気になる事実と感じた感覚つぎやを呟つぶやきながら記載した。

「ぼろぼろが旧市街で、ある程度復興ふっくうされてるのが新市街と。新旧は川で別れてるのか。地図買えば良かったかな。思ったより値段が高かったんだよな。大きな橋は3カ所。

だけど、まともに残ってるのは2カ所か。あれだけの兵がいるんだから、兵站を蓄えておく場所や、駐屯地があるはずだよな。どこかな。広くて全然検討つかないな。ゴブリンの小隊は4から8匹にリーダーが1人が基本みたいだな。なんか理由があるのかな」

「早くー、早くー」

ヨシノのぴよんぴよんが速くなり、落ち着きがない。そもそもゴ布林狩りではなくグンゾウの護衛についているのも退屈なのかもしれない。

——まあ、今日はここからどんな感じで見えるかがわかっただけでいいか。何回も通わないいけないしな。やっぱりせめて旧市街の地図が欲しい。しかも直近で詳細なやつが最高だな。

「ほい。いいよ。ヨシノ」

「わーいー」

グンゾウは望遠鏡を覗く位置をヨシノに譲った。ヨシノはグンゾウと入れ替わると食い入るように覗きこんだ。鼻歌を歌いながら、ダムローを観察している。

「ほんとだ。ゴブちゃんいっぱいいるー。これ、お金払わなくてもずっと見れるのがいいよねー」

「それ、どういうこと?」

ヨシノはグンゾウと顔を見合わせてから、不思議そうな顔をした。

「ん？ あれ？ あたし、なんか変なこと言ったよね？ 望遠鏡ってお金払って見る感覚があったー」

「ははは。なんでだろうね」

「キシキシシ、つ、次は僕が観る」

ハイドも望遠鏡を覗きたいらしく、ヨシノの後ろに列を作つて並んでいる。

——みんな子どもだな。

ガサガサと音がして、チョコが塔の下の茂みから顔を出す。

「いたよ。4匹。ダムローの一団じゃない。野良だと思う。ヨシノどうする？」

「行つてもいい？ グンちゃん」

ヨシノが瞳をきらきらさせながら、グンゾウの顔を見る。

——4匹なら往復3分だな。こんな顔されたら断れないよ。

「はいはい。いつてらっしやい。すぐ戻ってきてね」

ヨシノはグンゾウの返事を聞くや否や、望遠鏡をハイドに譲ると、槍を持つて出掛けてしまった。望遠鏡を譲られたハイドはダムローを観察し始めている。

「チョコー。終わったらみんなを戻して。今日の監視は終わりにする」

グンゾウが話しかけると、チョコはぺこつと頭を下げると、茂みの中に消えていった。

「キシキシ、戦士は野蠻<sup>やばん</sup>。キシキシ」

「まあね。そういう面もないと困るからね」

ハイドは集中してダムローの様子を眺めている。グンゾウは塔の壁にもたれて座った。手帳の内容をまとめながら、オルタナに帰ったら何を準備すれば良いか考えていた。

「シシシ、グンゾウ、これ見てみる」

ハイドが望遠鏡を覗きながら、声だけでグンゾウを呼ぶ。

「ハイドー、俺はお前の親じゃないんだから、声だけで呼びつけるなよ」

グンゾウが振り返っても、ハイドは望遠鏡から目を離さない。

「見た方がいいぞ。フシシ」

——そう言われると気になる。

グンゾウが重い腰を上げてハイドに近付くと、ハイドは望遠鏡を手で押さえながら「覗け」と身振り<sup>みぶり</sup>をする。誘<sup>いざな</sup>われるままに望遠鏡を覗くとそこには見覚えのある紅<sup>あか</sup>い鎧<sup>よろい</sup>を身に纏<sup>まと</sup>ったゴブリンの姿が見える。

「あいつは……!」

グンゾウが顔を上げて、ハイドを見るとハイドは「シシシ」と笑った。

グンゾウは紅<sup>べに</sup>鎧<sup>よろい</sup>のいる大体の位置を確かめると、手帳に大体の位置と建物の特徴を記

載した。グンゾウは紅鎧べにまつがいの観察を続けた。相変わらず武器は槍だ。槍の穂先に妖魔石榴石ゴブリンカーバシクルは入っていない。たぶん一番良い武器を失って、グンゾウ達への恨みは大きいだろう。

「しかし……、新しい武器を手に入れてんな……」

グンゾウは頭を抱えたくなる事実を見つけてしまった。紅鎧べにまつがいの隣に従者じゆうしやのように控えている一匹のゴブリンがいた。ホブゴブリンと呼ばれるゴブリンの亜種あしゆと思われた。グンゾウは知識として知っていたが、現実には初めて見た。

「それにしても……でかい。ハイドも見た？」

「シシシ。見た。でかいな」

ハイドは楽しそうにコクンコクンと頭を縦に振った。

ホブゴブリンはゴブリンに比べ知能が低いため、ゴブリンに捕まると奴隷どれいのように扱われる場合があると聞いている。知能が低い分、肉体的にはゴブリンより恵まれていて、体格は人間と同程度らしい。しかし、紅鎧べにまつがいの後ろに控えているホブゴブリンは人間と同程度というには大きい。どう見積もっても2m近くあった。首には金属製の首輪くわが嵌められ、そこから太い鎖が伸びていた。鎖は特に誰に掴まれていたわけではないので、飾りと思われた。手には大型の棍棒が握られていた。

——ま、ざっくり言えばクザクと同じか……。

そう考えるとグンゾウは少し前向きになれた。

「おう！ 帰ってきたぜ、オッサン」

リョータが帰ってきた。塔の下から急に声をかけられて、グンゾウとハイドはびくつとした。

「なんだよ。随分、辛気臭しんきくせえ顔してんじゃない。朝から俺……の活躍を見て、心が晴れ晴れとしてねえの？」

——こいつ、いま「俺様」って言おうとしたな。

「リョータ、あたしのゴブちゃんをまた取ったでしょー。女の子の楽しみを奪うってどうなの？」

後ろからヨシノやその他の仲間も帰ってきた。ヨシノはお楽しみを奪われたようで頬ほおを膨ふくらましていた。

「ヨシノの手を少しでも汚させたくなかったただけだつて」

リョータはタジタジしながら答える。

グンゾウは立ち上げると、塔の下にいる仲間に向けて声をかけた。

「あー、ちよつとみんなに見て欲しいものがあるんだけど。ハイドがいいもの見つけたよ」

今日は、帰り道でも3匹のゴブリンの群れに遭遇し、計16体を倒した。1人2シルバー程の稼ぎで、良くも悪くも無いといった感じだった。16時の鐘の前にオルタナに戻り、危険な場面が全くなかったことを考えれば、良い日だったのかもしれない。

「じゃあ、今日はここで解散しようっか」

北区の市場でカズヒコが声をかけて、解散となった。リョータはニヤニヤしながらカズヒコを連れだつて天空横町の方へ向かつていった。ハイドは「杖を探す」と言つて市場に消えていった。「まだ買うのかよ」とグンゾウは思った。

女子達は今日はマライカというお店で女子会のようなのだ。マライカは女性客が大半で、女性義勇兵の間では有名なお店らしい。

シムラ、ミッツ、タイチ、クザクはそれぞれ生活用品の買い物や洗濯がたまっている等で自由に散つていった。確かにシムラは洗濯を全くしていない。宿舍の部屋に洗濯物が山積みになっていたので、今朝リョータに「汚ねえ」と怒鳴られていた。

リョータはがさつな性格だが、洗濯や料理、装備の修理等を器用にこなす上に、結構綺麗好きだ。この2週間の間で、買ってきた木材で宿舍のトイレを改修して、座式の便所に替えていた。流石のグンゾウもこの件に関してリョータに感謝した。

グンゾウは1人になって考えを整理しなかったため、花園通りにあるシェリーの酒場に行った。少し早めの時間であるため混んではいなかったが、既に多くの義勇兵で盛り



上がっていた。

グンゾウはカウンターの一番端はしに座ると、ビールとペビーの串焼きを何種類か注文した。正式な義勇兵になったのでビールは一杯3カパーだ。グンゾウはビールが届くまでの間、考え事に集中していた。

——目的、目的を明確にしないと。ダムローを監視するにしても、俺等の最終目的はダムロー旧市街から新市街のゴブリンを撤退させることだ。そうすると、旧市街に來ている新市街の司令官を倒す？ 司令官って誰だよ。じゃあ、全滅させる？ あの数じゃ現実的じゃないな。上手くやっても半年はかかってしまう。あいつ等はゴブ算的に増えていくし。新市街で生み出されたゴブリンを旧市街に送り込めないように、旧市街のゴブリンが生活し辛づらくなるようにしないと。つまり方向性は士気を下げるだな。

グンゾウの前にビールと塩茹しほでしたペビーの小腸が出された。小腸の齒はごたえを味わいつつビールを口に含んだ。

——美しい。

美味しいビールとおつまみによってグンゾウのやる気が高まった。

——やっぱり士気を上げたり、下げたりするのは食料だよな。あれだけのゴブリンを生産能力のない旧市街で活動させるためには、新市街から兵站へいたんの補給があるわけで、それを絶たつつか、焼き払えばいいんじゃないかな。そうすると物資の補給路と保管場所を知

る必要があるわけか……。

「やっぱり、詳細な地図が必要だな。こりや、必須だわ」

グンゾウは思わず独りなのに大声で咳つぶやいてしまった。すると、そんなグンゾウに近く影があった。

「よー、よー、元氣ー、また会ったじゃん。何か独りで大声出ちやつてたみたいだけど、悩みごとー？ ずーちー？ ずーちーって黄色くて美味しいやつー？」

グンゾウが顔を上げると、話しかけてきたのは陶製のジョッキを手に持ったキツカワだった。

「お。キツカワか。俺、独り言を言ってた？」

「言ってた、言ってたー。聞いてた、聞いてたー。どうしたのー？ えーつと……」

「名前はグンゾウね」

「ああ、ゴメン、ゴメンね。知り合いが多すぎて、名前覚えられなくてさー。ほら、グンゾウって名前固すぎない？ そんなことない？ 覚えるのに関係ないの？ で、グンゾウたちはどうしたのかなー？」

——相変わらず落ち着きが無い。

「あー、前に話したけど、ダムロー旧市街のゴブリンを追い払うことを考えているんだけど、いくつか足りないものがあって、現在のダムローの詳細な地図が欲しいなって思っ

てたんだよ。旧市街のだけでもいいんだよね」

グンゾウがそう言うのと、キツカワはいつもよりも目を細めて考えこむ。そして、急に目を見開くと、左掌ひだりてのひらみぎてがしに右拳を打ち付けると、また饒舌じょうぜつに話し始めた。

「ひらめー、ひらめー、ひらめついたよー。だったらさー、ハルっち達に聞けばいいんじゃない？ ハルっち達は最近までダムローに通い詰めちゃった訳だから、内部のじよーじにも、くわしーんじゃない？」

——確かに、ゴ布林スレイヤーならダムロー旧市街の事情にも詳しいかもな。

「閃ひらめいたね。あと情事じじょうじじゃなくて、事情じじょうね。ゴ布林の男女で繰り広げられるドロドロとした肉体関係とかあんまり見たくないしね」

「まーまー、あんまり細かいことは気にしないー、気になるけど気にしないー。じゃあ、ハルっち達を紹介するよー。さつきランタを見かけたから、ここに来てると思うしねー」

「助かるよ、キツカワ」

グンゾウはキツカワに礼を言うと、ペビーの小腸を全て口の中に詰め込み、ビールをぐいっと呷あおった。立ち上がり、キツカワの後に付いていく。

ゴ布林スレイヤーはいつも定位置である一階隅じんどっこの薄暗い卓に陣取じんどっていた。そこには以前グンゾウがカズヒコと一緒に見かけた、天然パーマの男の子、体の大きな

優しそうな顔をした男の子、お下げ髪のニコニコした女の子、そして爆乳ばくにゅう、いや、既に魔乳まにゅうの領域に入った胸の大きな女の子の4人が座っていた。

「よー、よーう。元氣してるー?」

とゴ布林スレイヤー達にハイタッチを誘いながら、気楽にキツカワが声をかけると、天然パーマの男の子が慣れた仕草で「いえーい」とハイタッチで応じる。お下げ髪の女の子は「あー、キツカワやんなー」と何だか変なイントネーションでゆつくりしゃべっていた。

キツカワはキョロキョロしながら、ゴ布林スレイヤー達に尋ねる。

「あれー? ハルっちはー? 今日は紹介したい人がいるのにー。すーるー、すーるー的なの? スルーみたい? いまいちわかりにくい? るーすー的なの?」

「ああん? あのバアカは財布を忘れたとかで、宿舎に取りに行ったよ。何だったら、その紹介するのは俺様が、あ、この最強暗黒騎士の俺様が受けてもいいぜ。おい、キツカワ、当然紹介するのは目もくらむようなバツキンバツキンのボインボインのおねーちゃんだろうな? その後ろに連れてる辛気臭しんききくせえ、おっさんだったら許さねーぞ」

——出た、俺様2号。咎光トクヒクしたるか。

「いやー、なんて言うか、ランタ。そのおっさんのな? この愛すべき後輩の新入り義勇兵グンゾウっちが紹介したい人なんだよねー」

キツカワがヘラヘラしながら、グンゾウのことを手で示して紹介した。

——キツカワも新入りじゃないか。

「どうも……」

グンゾウはランタと呼ばれた少年が作り出した悪い雰囲気にも飲まれ、ペこりと頭を下げただけの辛気臭い挨拶しかできなかつた。「どうも」「どーも」「はじめまして……」と、ランタ以外の3人が恐る恐る挨拶を返した。

「ほら、バカランタの所為で、なんとなく微妙な空気になつてもうたやん。グンゾウさんに失礼やろー」

お下げ髪の女の子が唇ランタに素晴らしい指摘をした。

「バツカ、バツカ、俺様は正直にものを言った、正直者、モストオネストボーイだ。将来、んだよ。むしろ、俺様は正直にものを言った、正直者、モストオネストボーイだ。将来、大統領になれる逸材だつてことなんだよ。わかるか？ 褒められこそすれ、頭に花が咲いてるユメにどうこう言われたくないぜ。大体、おっさんすぎて新人義勇兵に見えねーんだよ」

「ユメ、頭にお花咲いてるかなあ？ きれいやんなあ」

ユメと呼ばれた少女は頭に花が咲いていると言われて何故かニコニコと喜んでいるように見えた。

「あの、ユメ。今のは褒め言葉ではない……気がする」

魔乳さんが説明をすると、ユメはきよんとした顔をした。

「え？ そうなん？ ユメ、褒められたと思ってたわー」

「バツカ、シホル！ 余計なこと教えんじやねーよ。その無駄にデカイ乳揉むぞー」

ランタがとんでもない暴言を吐くと、シホルという名の魔乳さんはむっとした顔をした。

「……汚物。早くこの世から掃除されちゃえばいいのに」

「てめえ、このつ、表現が遠慮なさすぎだろ？ 腹黒乳デカ娘、あんまりひでえこと言う

と泣くぞー！」

——なんだ、この小隊パーティー。気絶しそうなくらい、会話にまとまりがないぞ。リョータ小隊ちがまともに見えてきた。

ゴブリンスレイヤーの騒がしさにグンゾウの意識が遠のき始めた頃、体の大きな男の子が口を開いた。

「あ、あの、みんな。なんでグンゾウさんをハルヒロくんに紹介する必要があるのか、聞こうよ」

そうやく場が静まり、話せる状況になった。「俺が……」と言って、キツカワを制するとグンゾウは話し始めた。ダムロー旧市街の状況、新市街のゴブリンを追い払う戦略を

練るために、直近の詳細な地図が必要なこと、直近でダムロー旧市街を探索していたゴブリンズスレイヤーに情報を教えて欲しいことを説明した。

「ダムロー旧市街の状況については知ってるがな。そうか、そうか、それはご苦労なことつて。地図はある。俺様が作成したスーパードスペシャルなやつがな。で、その地図とやらを俺等がおっさんに渡すと、どんなメリットがあるんだ？ 謝礼でももらえんのか？」

「あれは、マナトくんが書いた地図でしょ」

屑ランタが口を開くと、シホルが白い顔を真っ赤にして否定した。

「そーやんなあ」

ユメがシホルに同意して頷く。

「謝礼はしたいが、先輩義勇兵を喜ばせられるような資力しりよくはないと思う。なので、正直なところただ頭を下げるくらいだ」

グンゾウは頭を下げた。それを見て、ランタは大袈裟おおげさに溜息ためいきを吐く。

「だーめだ、駄目だ、駄目だ。話になんねえ。そんなんで他人ひとからなんかもらええると思つたら甘いぜ。大甘だ。ベットベットのギットギトだぜ」

——駄目だ。正論かもしれないけど、屑ランタがいる場にはもう一分も居たくないわ。

「そうか。残念だけど、仕方ない。時間を取らせてすまなかつた」

グンゾウは再び頭を下げると、踵きびしを返す。キツカワの肩を軽く叩いてから、その場を立ち去った。

グンゾウの後ろで「見せてあげるくらいええやん、ケチランタ」「うっせえ、地図はバカパルピロが持つてるから、元々ここにはねーんだよ」という声が聞こえてきた。

——ハルヒロってのはあの盗賊風シウフの男の子か……。彼を見かけたら聞いてみるか。

グンゾウはシェリーの酒場にいると、気分が悪さが収おさまらなさそうだったので、串焼きだけお持ち帰りにして、店の外に出た。

お店に入ってから少し時間は経たっていたが、まだ宵よいの口くちだった。オルタナの空は枯れ葉色をしている。花園通りを行ゆき交かう人の数も多い。日が落ちて少し涼しくなった店の前、グンゾウがストレスを発散するために深呼吸をしていると後ろから声をかけられる。

「あ、あの……」

グンゾウが後ろを振り返ると、ぬうつと大きい人影が目の前にあつた。ゴブリンスレイヤーの一番大きな男の子がグンゾウの後ろに立っていた。グンゾウは少し驚く。

「おわつと、えつと、あの、ゴブリンスレイヤーの？」

「さつきはランタクくんが失礼な感じで……すいません」

男の子はこれまた大きな頭を下げた。



「い、いや、頭を上げて。君が謝ることじゃないし、俺が無理なお願いをしたので」

男の子は頭を上げて照れたように笑うと、「あの、これ……」と言つて手に握つた紙をグンゾウに差し出した。グンゾウは紙を受け取る。受け取つた紙を広げていくと、大きな一枚の地図になつた。

「これは……、ダムロー旧市街の地図？　すごい書き込みだ」

「そ、そうです。それはマナトくんが、あつ、マナトくんて言うのは僕らの小隊パーティの神官でリーダーで、あ、だつただけけど、そのマナトくんが書いた地図を僕が写うつしたものです」

——神官はあの美人じゃないのか？　良くわからない部分もあるけど、マナトくんの地図の写しつてことだな。

「最近はやイリン鉱山しか行かないし、ハルヒロくんが原紙を持つてるから、それは差し上げます。マナトくんも色んな人の役に立つた方が嬉しいと思う……から」

グンゾウは一気にこの心根こころねの優しい男の子の事が好きになつた。

「本当に？　すごく嬉しい。ありがとう。えーつと名前は？」

「あ、そうだった。僕はモグゾーです」

グンゾウはモグゾーの大きくて厚い手を取ると、頭を下げた。モグゾーの手は温かくて、そしてずっしりと重かつた。

「本当にありがとう。モグゾー君。このお礼はいつか必ず」

「えへへ」

グンゾウのお礼に対して、モグゾーは最高に優しそうな笑顔で応えてくれた。

——良かった。良い人も居るんだな。

こうして、グンゾウはマナトくんの地図を手に入れた。ダムロー旧市街の攻略に向けて大きく一歩前進することとなる。

# 18. 繰り返す日々 に意味が無いなんて、 怠け者の言い訳

雫しずくが落ちる。

ひとつ。

そして、また、ひとつ。

雫しずくが落ちる度たび、黒い染しみが石畳いすゞの上に広がった。

目の前には、既に大きな染み。

「……それは穢けがれ無なき乙女おとめが神いづくの慈あはれしみを願ねがい……」

美しい聖詠せいぎの詩句うたが、詠よまれている。

その韻律いんりつが狭い室内うちの石壁いしに反射はんしゃし、輪唱りんしょうのように響ひびいた。

甘すぎる官能かんのうてき的な香かりが鼻孔びこうを刺さ激げきする。

「……慈悲じひの光ひかりを我等われらに顕あわし給たまえ……」

掌てのひらの感覚かかくが麻痺しびし、腕うでの震ふるえが止とまらない。

「くっ……くっ……くっ……」

限界げんがい。グンゾウは呻うめき声こゑを出だした。

刹那<sup>せつな</sup>、空気を斬り裂くような鋭い音が室内に響く。同時に臀部<sup>でんぶ</sup>へ痛みが走る。

「グンゾウ、騒がしいぞ。大切な祈りの途中である」

「ふぐつ、ううう……」

グンゾウはさらに呻いた。

「騒がしい奴め。今、話せるようにしてやる」

カレンは気怠<sup>けだる</sup>そうに手を伸ばし、グンゾウに嵌<sup>は</sup>めていた、玉口枷<sup>たまぐちかせ</sup>を外す。玉口枷は穴が空いた木の玉と革ベルトでできていた。

「くはっ！ 修師<sup>マスター</sup>、もう限界です」

前腕の筋肉が熱を帯びて、焼けるような痛みを発していた。一番負担のかかる膝頭も痛い。

再び、カレンの振り上げた六条鞭<sup>ろくじょうむち</sup>がグンゾウを襲う。

「『限界』なんて言葉が出る内は、道半<sup>みちなか</sup>ばだ。愚か者め。そして言葉<sup>ことば</sup>が不足しているぞ、グンゾウ。まだまだ師に対する感謝と畏敬<sup>いけい</sup>の念が足りないようだ」

カレンは四つん這<sup>よ</sup>いになったグンゾウの上に座って説教をしていた。

「ありがとうございます。でも、もう……」

グンゾウは崩れ落ちる。カレンは平衡<sup>へいこう</sup>を保ち、そのままグンゾウの上に座り続ける。

「祈りを続けるぞ。……神よ、我が肉は裂け、力尽き果つる時……」

再び、カレンの美しい声が聖詠を紡ぎ始める。

——なんで……こんな始まりなんだ。

グンゾウは薄れていく意識の中で思った。

結果には理由がある。

「はわわわわ、あー、面倒くせえ」

宿舎を出発する時、リョータが大欠伸おおあくびをしながら文句を言った。

「地道な努力以外に、目的を達成できる方法があるわけないだろ」

グンゾウが窘たしなめると、リョータは悪びれる様子もなく「へいへい」と言つて、歩き始めた。

ダムロー旧市街の地図を手に入れたグンゾウ達は、それから毎日交替で監視作業を続けた。

ゴブリンスレイヤーの戦士モグゾーからもらった地図のお陰で、駐屯地ちゆうとんちや食料庫になりそうな建物の位置、大量に物資が運べる舗装ほそうが無事な道路や橋が把握できた。そのため、監視作業も効率的に実施できるようになった。

毎日、毎日、来る日も、来る日も、ダムロー旧市街に向けた望遠鏡を覗く。

監視は意外に体力と気力を消耗する。前者と後者どちらの消耗が激しいかと言われれば、グンゾウは迷わず後者と答えた。とにかく退屈なため、集中力が続かない。

監視だけしていれば良いというわけでもない。全員、来たるべき紅鎧との決戦に備えて、覚えた技の慣熟をしなければならぬ。また、ダムロー旧市街の戦力削減もしなければならぬ。

監視は12人を4チームに分けて、交替で監視をすることにした。1チームが監視中は3チームが削りの作業を実施する。

監視を継続し始めてから3週間くらい経った頃。その頃になると、森の中のゴブリン達を狙うというよりは、積極的にダムロー旧市街のゴブリン達に挑発行動をして、本体と分断しては叩くという戦術的な動きをするようになっていた。ダムロー初日以来、紅鎧が出てくることはなかった。

グルムガルに来て、生きていくこと以外、無目的だったグンゾウ達だった。しかし、ダムロー旧市街の奪還と紅鎧討伐は、若干の生きていく動機をもたらししていた。

しかし、同じ事の繰り返しは若干の緩みももたらさず。

その日もダムロー旧市街から5匹のゴブリン達を森に誘い込もうとしていた。

森の中には前衛にヨシノ、カズヒコ、クザク、中衛にアキ、グンゾウ、タイチ、後衛はハイド、ノツコがいた。囷はミッツだ。

森に誘い込む直前、弩を装備した一匹のゴブリンが放った矢がミッツの脚に刺さった。

「へへ、こんなのかすり傷なんだよ」

矢を抜き、そのゴブリンを切り伏せに行こうと動く。そのミッツの脚から力が抜けて、急に倒れる。

「あれ？　へへへ、おかしいな。力が入らないや」

「ミッツ、どうした？　下がれるか？」

グンゾウが声をかけても、脚に力が入らないようで、ミッツは動けないでいた。

——まずいな。シムラがないから、狙撃も期待できない。

その時はリョータ、シムラ、チョコが監視役をしていた。

「カズヒコ、ヨシノ前へ。全部引き受けて。アキはふたりのサポートを。クザクはミッツを拾って後ろまで引いてくれ。ハイドっ！」

グンゾウと目が合い、ハイドは頷く。背負った3本の杖をああでもない、こうでもないを選んで後、エレメンタル精霊魔法の詠唱に入った。

——あれ、純粹に初動じょどうが遅くなつてないか？　後で話し合わないと駄目だな。どうせ聞く耳持たないだろうけど。

「キシシ、デルム・エル・ヘン、キシシシシ・イグ・アルヴ、キシ」

炎熱魔法アルヴマジックの初歩、ファイアボール火炎弾がゴブリン達目がけて複数飛んでいった。ゴブリン2匹に火が付いて狼狽うろたえている。

カズヒコが淡々と狼狽うろたえるゴブリン達の首に刃を当て、止めを刺していく。まるで事務作業のようだ。

ヨシノが残ったゴブリン達に片かたつ端はしから襲いかかる。槍を振るう度にゴブリンの数が減っていった。「やつほーい！」となんだか楽しそうだった。

ミッツがクザクに運ばれてくる。それをタイチが治療した。ミッツはぐったりして、横たわったまま苦しうに呼吸をしていた。

「傷は治した。ミッツ」

「へへへ。おかしいな。力が出ない。へへ。気分が……すごく悪い」

へらへらはしているが、ミッツの顔面は蒼白そうはくだった。

「毒なのかも……、それなら。光よ、ルミアリスの加護のもとに……浄化ピュリファイの光」

タイチは浄化ピュリファイの光を習得していたため、ミッツの解毒を試みた。

タイチの手に灯ともった温あたたかな光がミッツを包む。

しばらくして解毒は効果をもたらしたようで、響しかめていたミッツの顔つきが緩やかになった。

——あつちは解決かな。



ミッツの無事を確認したグンゾウは、全滅されつつあるゴ布林達に集中した。

「つーことはだ。ゴ布林の中には毒を使ってくる奴がいるってことだ」

リョータが偉そうに塔の上から見下ろして言う。

「じゃあ、その毒を消せる浄化の光ビュリフアイつて魔法を使える奴、手え挙げてくれや」

タイチが遠慮がちに手を挙げる。

「んだと？ こらっ！ オッサン、アキ、ノッポ。お前ら何サボってんだよ。お前等が覚えてなかったら、タイチが監視の時、どーすんだよ？ ていうか、タイチがいなかったらミッツ死んでたんじゃねーのか？」

鬼の首を獲ったように、リョータ狂犬が吠える。人の弱みを握れて、心の底から嬉しそうだ。

「浄化の光ビュリフアイは聖騎士は覚えられねーし……」

クザクがぼそつと呟く。

「んあ？ そうかよ。じゃあ、オッサンの怠慢だな」

——覚えても、リョータには絶対使わない。

「まあまあ、この所、休みも無く監視を続けて疲れていたし、集まった情報の整理も必要だと思っから、2、3日お休みにしよう。その間、グンゾウさんビュリフアイにでも浄化の光を習得してもらって。グンゾウさん行けますよね？」

カズヒコは爽やかな笑顔で皆を見渡した。最後はグンゾウで顔が止まる。

「あ、ああ、一応、大丈夫かな」

——なんとなく……嵌められた？

グンゾウは他の仲間が休暇を取っている間、ルミアリス神殿で修練を積むことになった。

精神的にボロボロの体を引きずって、浄化の光を習得したグンゾウがルミアリス神殿から戻ると、宿舎の中庭で皆がダムロー旧市街の地図を囲んでいた。

グンゾウの帰りに合わせて、カズヒコが中心となつて集めた情報を整理していたようだ。

話し合いの中心人物は、カズヒコ、タイチ、アキ、ハイドで、その周りをヨシノ、ミツツ、クザクが囲んでいる。シムラは中庭に的を作つて投げナイフの練習をしていて、リョータは上半身裸で両手剣の素振りすぶをしていた。買い出しなのかチョコとノツコは居ない。

集まった情報から見えてきたダムロー旧市街の様子はこうだった。

主な食料庫は2箇所。それぞれに、新市街から護衛の付いた家畜やホブゴブリンが馬車で食料を運んでいる。ホブゴブリンも家畜の一種なのかもしれない。護衛のゴブリ

ン達は概ね20匹はいた。

新市街と旧市街を結ぶ橋の内、荷車が通れる橋は2箇所。舗装が無事で、順調に通れる道も少なく、補給路も限られていた。輜重隊の列は、橋1箇所、馬車10両にも及んだ。

新市街から食料等の兵站が届けられるのが2週間に1回。この日は食料やゴブリン達の好きな貴重品の支給がある。兵士の補充や交替もこの時に行われているようだ。また、人間の価値基準からすると特に見たくもない雌ゴブリンの慰問もあるようで、全てのゴブリン達が必要2箇所ある食料庫のどちらかに集まる。

食料の支給は3〜4日に1回のようで、ゴブリン達は小隊単位で食料庫を訪れては、何か食べ物を受け取っているようだった。

「ふんっ！ 義勇兵より、ふんっ！ 待遇が、ふんっ！ いいんじゃない？ ふんっ！ 食料とか！ 慰問とか！」

リョータが両手剣を素振りしながら、声を出した。

「まあ、正規兵っぽいしね。ていうか、ゴブリンの雌でもいいのかよ、お前」  
グンゾウが驚いた。

「それは良かねーけど。人生、試してみねーとわかんねーだろ、色々」

——それは試すなよ。

「リョータは雌メスなら、ゴブちんでもいいんだねー」

ヨシノがリョータを見ながら、ニヤニヤと嬉しそうに笑った。

「や、ちげつ！ それは誤解だつての、ヨシノ」

リョータが両手剣を放り投げて、両手を広げてヨシノに釈明しゃくめいをしている。

放り投げた両手剣が近くにいたシムラに当たりそうになった。シムラは「おわちよー

！」と言いながら、慌あわねずみてて穴あな鼠ねずみと言う狩人のスキルを使って避よけていた。

「話を元に戻そう」

カズヒコが仕切り直す。

「兵站の補給は2週間に1回。となると、2週間で食料庫はほぼ空っぽになっているってことだ。ゴ布林達に最大の打撃を与えるのは、補給直後に食料庫を焼き払うことじゃないかな？」

それに対して、アキが手を挙げてから、低い声で話し始める。

「私は……、橋を壊して、補給物資を焼いてしまう方が、被害が大きいと思う。新市街の様子がわからないから、食料庫を焼いても、補給路が無事なら次の日には補給が届いちやう可能性もあるし」

——難易度は高いけど、アキの案の方が中長期的に効果が高いな。

「キシシ、あああの橋、1個なら僕が壊せる、キシシキシシ。ただし、1個こ壊したら、

もう魔法は使えない、シシシ」

——ハイドの魔法の光弾でも、2基は無理かあ。

「橋を壊すのは、ダムロー旧市街の最も奥まで行かないといけないから、危険性が高くない？」

タイチがアキに聞いた。

「そうだけど……」

アキはいつもより、もっと伏し目がちになる。グンゾウはアキを助けるために口を開く。

「少し具体的に想像を膨らまして、出た案の議論をしよう。兵站の支給日なら旧市街中のゴブリン達は補給地点に集まっているはずだから、侵入のリスクは低くなるよね。カズヒコの案に従って、こっそり侵入して遠くから食料に火を付ければ、焼き払える可能性は高いと思う。利点は、実行難易度が低いことだな。欠点は、食料を燃やされて怒り狂ったゴブリンから執拗に追い回される可能性があること……と、継続性に問題ありか。2週間に1回継続しないと効果が無いし、警備も強化されちゃうかもね。もちろん新市街から次の日には補給がされる可能性もある」

グンゾウは考えを整理しながら話す。カズヒコを見ると、指で顎を触りながら考え込んでいた。

「次にアキの案。既に食料が無い状態で補給路の橋を壊せば、長期間士気を、士気どころか戦力を下げることができると思う。新市街にかかる橋を作り直す建築技術がゴブリンにあると思えない」

タイチが手を挙げる。

「もし、ゴ布林達が石を積んだり、板を渡して橋を補修したらどうしますか？」

グンゾウは答える。

「そういうこともあり得るよね。でも、個々のゴ布林は渡れても、馬車は無理じゃないかな？ 危ないから輸送能力が下がるよね。物流量が半分になって、旧市街のゴ布林達の数が半分になれば、目的達成かな。今の俺等なら、ゴ布林達の数が半分になれば、なんとかかなりそうじゃない？」

「まあ、今なら1人で突っ込んでも負ける気しねーけどな」

ヨシノへの釈明途中だったリョータが偉そうに議論へ参加してきた。後ろでヨシノが呆れた顔をしている。

——1人で勝てるなら、やっぱり浄化の光は要らないな。

「そうですね。アキとグンゾウさんの言う通りだ。橋を壊して、輜重隊を殲滅するのがゴ布林達に一番打撃を与えますね」

カズビコが顔を上げて、グンゾウの顔を見つめる。グンゾウは頷く。

「よし、じゃあ、その路線で戦略を練ろう。大きな課題は3つだな。1つ目、どうやって橋を2基壊すか。2つ目、輜重隊の護衛40匹をどうやって倒すか」

「グンちゃん、護衛は20匹くらいじゃないの?」

ヨシノが首をかしげている。

「ヨシノ、それはね。2箇所の橋を渡る馬車のどつちが補給所に到着しても手痛い反撃が来るから、2箇所を同時に攻撃しないと駄目なんだよ」

「ほおー。グンちゃん賢いねー」

ヨシノは納得した表情で、何度も頷いている。

「ありがとう。それで、3つ目、紅鎧とお付きのホブゴブリンが出てきた時、どうするか……だね」

グンゾウはヨシノとリョータを見た。2人は何も言わなかったが、その目には強い意志が宿っていた。

## 19. ワンダーランドへ盗みに行こう

タナトス  
死は、突然漆黒の翼で現れ、無慈悲に生物の魂を冥界へ連れ去っていく。グリムガルに斯様な神話が存在するかは別に、現実として、か弱き人間の義勇兵には、一瞬の油断が命取りとなる。

——危なかった。動きの素早い敵との戦いは不測の事故が起きやすいから怖い。リヨータやヨシノが殺られなくて良かった。そろそろ奥に進もうか？」

「よし。俺等に被害がなくて良かった。そろそろ奥に進もうか？」

グンゾウが声をかけると、リヨータが反対してくる。

「おいっ！ オツサン！ お前には血も涙もないのか?! こいつらの死体をこのままにするつもりなのか？」

リヨータは目につすらと涙を浮かべ、倒れた彼等の埋葬を主張した。

「あ、いや、じゃあ、端っこに寄せとく？ 俺等も先を急がないといけないし」

グンゾウが妥協案を出すと、次はヨシノから反対意見が出てきた。

「先を急ぐ？ あたし、グンちゃんがそんな冷たい人だと思わなかったよ。彼等は最高の友達だったんじゃないの？」



ヨシノは潤んだ、そして綺麗な目でグンゾウを睨み付ける。両手には強く槍を握り締めていた。グンゾウは、変なことを言おうものなら突き刺されそうだと感じた。

「さ、最高の友達?! ま、まあ、そ、そうだったかも知れないけど、ほら、何て言うか、その、シムラ、ちよつと助けて」

グンゾウは助けを求めてシムラの方向を見る。シムラは通路の端に座り込んでいた。目頭を押さえながら、肩を震わせ、下を向いている。

——泣いてる?!

「あああ、アキい?」

グンゾウはアキの方に視線を送る。アキは彼等の死体の前で祈りを捧げていた。祈りの後、慈愛じあいに満ちた伏し目がちの目をしながら、彼等の頭を優しく、そつと撫でてあげている。やはり、目の端に光るものがあつた。

——駄目だ。ハイドだ。こういう時は冷靜無比れいせいむひ、殘虐非道ざんぎやくひどう(?)なハイドしかない。

「ハ、ハイドお?」

グンゾウが後ろにいるはずのハイドを振り返る。そして、ぎよつとした。

あのハイドが顔をぐしやぐしやに崩して、声もあげずに泣いていた。涙と一緒に鼻水が大量に垂たれ、正直汚い。

「ひえつぐ、ギジジ。ひえつぐ、ギジジ」

ハイドは一生懸命泣きじやくりを我慢していたようだ。

リョータパーティー小隊全体に葬儀のような湿っぽい空気が漂っていた。グンゾウは大きな溜め息をついてから、暗い天井を見上げた。

——俺が間違ってるのかなあ？

「こつちは終わったよ。リョータパーティー小隊はどう？ タリスマンを回収したら、そろそろ行かない？ 第2層に降りる井戸はもうすぐのはずだよ」

カズヒコが向こうの通路から顔を出して、前進を促した。カズヒコの後ろからはチョコがちよこつと顔を出していた。零れこぼれそうな大きな目で、不思議そうにこちらの風景を眺めている。チョコの服装はひらひらが増して、お洒落しゃれになつていた。

——なんか、チョコはどんどん可愛くなつてきているな。あの格好は盗賊シヤッフ的に動きやすいのかな？

「お前もかカズヒコ。この冷血女たらしめ！」

リョータが両手を上げて、興奮している。

カズヒコは狐につままれたような顔をしてから、一言「え？」と言った。

グンゾウはカズヒコの傍そばに行くとき、背景を説明する。

「なんだか、リョータ小隊は極度の犬好きが多いらしくて、コボルドを埋葬しないとみんな

な前に進めないらしい」

「それは……時間がかかりそうですね」

カズヒコは言いたかったであろう言葉を飲み込んで、色んな想いを含んだ微妙な表情をグンゾウに向けた。

それに理解を示すため、グンゾウはカズヒコの目をしっかりと見て、黙ったまま深く深く頷いた。

「ちよつと、グンちゃん、ちゃんとパトラツシユにお祈りをしてよ。神官のお仕事でしよー」

ヨシノが腰に両手を当てて、怒ったように呼んでいる。

「はいっ！ ありがとうございます。ただいま、お伺いうかがしますー」

——何だかカレン師の仕込みが無意識に出てしまった。パトラツシユって誰なんだ？ 俺、もう疲れたよ。

グンゾウはヨシノに指示され、死んだコボルド達への祈りに奔走ほんそうした。

グンゾウ達はサイリン鉱山と呼ばれる坑道を進んでいた。

サイリン鉱山はダムローよりさらに北西へたつぶり2時間歩いた所にある、十層にも及ぶ広大な鉱山で、かつてはアラバキア王国の管理化にあったが、人間族が大敗した

ノライフキング  
不死の王勢力との戦争後、ボツシユと呼ばれるコボルドの一派が占領している。

このコボルドという怪物は犬頭モンスターの人型生物だ。毛むくじやらで、尻尾がある。人間ほど高度な知性を有してはいないが、冶金技術やきんを持ち、鉱山内の資源を利用して、金属製品を生産している。

また、犬らしく厳格な階級社会を築いている。愛らしい見た目かと言えば、人間とは敵対関係にあるため、出会えば凶暴な牙を剥いた表情を向けられることが殆どだ。鉱山内で寝ている姿を見かければ大型犬のそれと似通っているため、可愛らしく見えなくもない。

「ゴブリンよりは全然可愛い」

これがチヨコの評価だった。グンゾウもそれを聞いて深く同意した。

鉱山内は曜華ヒカリバナと呼ばれる、暗闇で発光する植物の群生地になっていて、さらにコボルドたちがこれを至る所に植えて繁茂はんもさせているので、照明器具がなくてもそこそこ明るかった。

何故、ダムロー旧市街の奪還を目指していたグンゾウ達がサイリン鉱山にいるか。理由がある。

ダムロー旧市街攻略の方針が決まった後、課題をひとつずつ解決していこうということになった。

ひとつめの課題である橋の破壊に関して、毎晩、全員で意見を出し合った。

排除した案として、ハイドの魔法の光弾に頼るのは不確実性の影響が高いから止めようということになった。1基しか壊せない上に、発動後、疲労困憊のハイドを担いで移動するのは、退却時に足枷となるとの判断だ。

次に出了た案は、爆発という炎熱魔法を使う案だった。しかし、これも断念した。ハイドもノツコもまだ習得していない。さらに中上級の魔法であるため、炎熱魔法初心者2人には使いこなせるかどうか不明だった。魔法使いギルドに相談をして、爆発を使える魔法使いに依頼するという案も挙げられたが、新人義勇兵の護衛を信じ、新市街のゴブリン達が闊歩するダムロー旧市街の最深部まで付いてきてくれる魔法使いが見つからなかった。

結果として、火薬を使った爆発物を手に入れようということになった。

主にシエリーの酒場と北区の市場で集めた情報によると、オルタナの遠く北方にある黒金連山には、ドワーフと呼ばれる人間族に比較的友好的な種族がいるという。グンゾウ達はこのドワーフに目を付けた。

ドワーフ達は掘削の技術に優れ、黒金連山にトンネルを掘り、蟻の巣のような要塞を築いているらしい。また、ドワーフ達は高い冶金技術を持ち、指先も器用であるため精密機器の製造が発達しているとのことだ。ベテラン義勇兵の中にはドワーフが作った

機械仕掛けの時計を持つている者もいて、時鐘でしか時間を知ることができない若手義勇兵から羨望の眼差しを向けられることがある。さらに鉾山の採掘作業の効率化のために火薬を使った爆発物の開発も進められている。そのため、ドワーフに頼むと大量の火薬を比較的入手しやすいとのことだ。

グンゾウ達はオルタナ北区の市場で、定期的にドワーフの商人と交流があるという商店を見つけ、接触を持たせてもらった。

グンゾウ達が紹介してもらったのはルドウルフと言うドワーフの商人だった。髭もじゃで、厳めしい顔をして、見た目で取っつき難そうな雰囲気を感じ出していた。

しかし、橋を壊しゴブリンを殲滅するという計画を説明したところ、急に破顔して「お前等は勇敢だ！ かなり馬鹿だが、我々はそういう奴等が好きだ」と、事細かに相談に乗ってくれた。

破壊を考えているダムロー旧市街の橋について、大きさや材質、形状等を説明すると、必要な火薬の量や設置する場所まで詳しく説明してくれた。最小の火薬で最も効率的に橋を壊すためには、橋の中央部で最も重量が架かっている橋脚に爆発物を仕掛ければ良いということになった。

ただし、その後にルドウルフから出された条件はかなり厳しかった。

必要な量の爆発力が高い火薬は手に入れることはできるが、ドワーフの王国でも火薬

の技術は発展途上で、生産力に余裕があるものではないとのこと。また、採掘用の火薬を分けると、採掘の進捗に影響が出るため、結果として生産の下流にある鉄の鑄塊ちゅうがい、そこから作られる武器や防具、生活雑貨に至る生産品に影響が出てしまい、商売に響いてしまうということ。そのため、対価として火薬から得られる鉄鉱石と同量の鉄の鑄塊ちゅうがい、つまり鉄アイアン、インゴットを持つてきて欲しいとのことだった。

普通に生活していたら鉄アイアン、インゴットを手にするなどない。

これも地道な情報収集の結果、サイリン鉱山のコボルド達は製造した鉄アイアン、インゴットを倉庫に貯めており、忍び込めば盗むことができるかもしれないとのことだった。

「鉄の塊400キロお？ そら、無理だろ？」

リョータが遠慮なく発言する。

——ですよねー。

「まあ、無理かもしれないけど、サイリン鉱山は行って見たかった場所だし。第5層まで行けば溶鉱炉ようこうろがあるみたいだから、試しに行ってみない？ 400キロ集めきれなければ、売ってお金にしよう」

カズヒコがさわやかな笑顔を見せる。

「コボちゃんつてー、顔が犬みたいなんでしょー？ あたし、犬だーい好きなんだー。見てみたいーい。行こー」

ヨシノが手を祈るような形で胸の前で組み、目を嬉しそうに輝かせた。リョータは初耳だったようだ。

「う、まじかよっ！ 俺も犬は……見たい……かな」

——ま、あなた方はそれらを倒すんですけんどね。

流星に400キログラムを1度に運ぶのは無理と判断し、100キログラムの運搬を4回繰り返す計画とした。グリムガルに来てから、グンゾウ達の中で「面倒くさい」という言葉のハードルは恐ろしく上がっていた。

暗い坑内の至る所で、ヒカリバナ 曜華が熱量の無い光を灯していた。エメラルドグリーン 金緑色だ。

時折明滅するその幻想的な光は、目にした義勇兵の殺伐とした心を僅かに慰める。

サイリン鉱山第2層では、第1層との連絡井戸から、しばらく狭く入り組んだ通路を過ぎると、岩盤がんばんの崩落跡ほうらくあとに辿り着く。天井は開け、地面は大きく裂けた広い空間が姿を現わす。

サイリン鉱山では各層間の上下の移動に関して、義勇兵が「井戸」と呼んでいる縦坑を使う。「井戸」は本当に井戸の形をしたものもあれば、ただの穴の場合もあった。

グンゾウは手を伸ばし、近くの岩壁に生えていた曜華ヒカリバナに触れた。曜華が静かに震える。輝く光の胞子ほうしがグンゾウの掌に落ちると、雪が溶けていくように光を失い消えて



いった。グンゾウは何故か、ヴェールの深緑色の瞳を思い出していた。

——これは植物っぽいけど、実際は茸きのこに近いんだな。

岩壁に沿って辛うじて残った狭い通路を12人が縦に並んで通っていく。

心癒やされる幻想的な風景に反して、ここは地獄の2丁目でもある。

地獄の番人はコボルドだ。2層から先は労働者コボルドと呼ばれる、一般労働者階級のコボルドの住処すまかになっている。

通路の脇には横穴があり、グンゾウが背伸びして覗くと中で数匹の労働者コボルドが丸くなって寝ていた。

「うわー、かーわいー。もふもふしてるー」

ヨシノが労働者コボルドを見て、目を輝かがやかせていた。

「どれどれ、見せてみるよ。本当だ。こいつらでかいな。良く食べるぞー」

リョータも横穴を覗き込んで、楽しい玩具を見つけた時の少年のように興奮している。

——えーつと、人肉も食べるかもしれないよ？

「俺も、俺も、俺も」

シムラは背が足りずあまり見えないため、ぴよんぴよんと飛び跳ねている。

ハイドはもつと背が足りず、跳躍ちようやくりょく力もないため、ただシムラに足を踏まれていた。

「か、かわいい……かなあ?」

ノツコが呟くと、チヨコは零れこぼれそうに大きな目を半閉じにして、「ブリちゃんよりは全然可愛い」という名言。パート2を放った。

「私は……どちらかと言えばかわいい派」

アキが首を縦に何度も振って、頷うなずいている。

——確かにアキ姫は可愛い。

「興奮して、寝ているコボルドを起こさないようにね。これだけ騒さわがしいとは言え、僕らの声で起きるかもしれないし」

カズヒコが声を落として注意した。

2層に降りてから、採掘の音なのか、引つ切りなしに金属のぶつかり合う音が坑道内に響いている。それにしてもリョータ小隊はコボルドに興奮しすぎていた。クザクとミッツは初めての戦場に緊張し、会話に参加すらしてこない。

「確かここには、義勇兵団事務所の掲示板に手配書の出てる悪名ノートリアス高いモンスター居なかつたっけ?」

グンゾウが聞くと、タイチが袋から手帳を取り出して答えた。

「それは、デッドスポットですね。手配書によると『極めて凶悪なコボルド離れたコボルド。数々の義勇兵をその手にかけている。呼び名は、被毛ひもっが黒白の斑まなこと

体格はエルダーコボルドよりもさらに大柄。少数の手下を連れて、サイリン鉦山中を回っている。』だそうです。賞金は30ゴールドですって!」

「ほおお、すごいね。ありがとうタイチ」

最近、タイチはカズヒコ小隊パーティーにおいてカズヒコの副長サブリーダーとして、情報収集や戦術指揮を担っている。グンゾウは前線で戦うカズヒコの負荷が減るので、良い傾向だと思った。

「おーつきいわんこかー。楽しみー。あたし大きい犬が好きなんだよねー」

サイリン鉦山に来てから、ヨシノは興奮しっぱなしだ。

「デッドスポットは手練れも含めて、何人もの義勇兵が犠牲になっていているらしい。悩まないようにルール決めしよう。出会ったら、すぐに逃げる。これでいいよね。ま、物語ものがたりの主人公みたいにそうそう強敵に出会うことなんてないだろうけどさ」

カズヒコが爽やかに笑う。各自「はーい」などと良い返事をした。

返事をした直後、通路の先から如何いかにも仕事帰りですといった感じのツルハシを持った労働者ワーカーコボルドが4匹姿を現わした。

「あ、コボルドだ……」

隊列の後方にいたチョコが緊張感のない感じで敵の襲来を告げた。

「あーあ、本当にここはワンワンワンダーランドだな」

グンゾウは思わず独り言が口から漏れてしまった。

「グンちゃん、それ、いいねー！ ほらー、パトラッシュュー、怖がらなくてもいいんだよー、仲良くなるうーよー」

ヨシノは槍を振り回しながら、満面の笑顔でコボルド達に向かつていった。

——あの笑顔、コボルド達も怖いだろうな……。

「ほーら、よし、怖がるな。来い、来い、来い、来い。お座り！ お座りだつっーの！」

リョータが一生懸命、コボルドを手懐けようとしている。

「弓じゃあかんねん、弓じゃ……」

グンゾウの後ろでシムラが意味不明なことを呟つぶやいている。

真剣に戦うカズヒコ小隊と真剣にペットにしようとしているリョータ小隊を眺め、グンゾウは深い溜息を吐ついた。

——こりゃあ、今回の使命ミッションはカズヒコ小隊だの頼みだな……。

## 20. タリスマンより恋愛事件が欲しい

湿った、そして冷たい空気が漂う空間。それは岩壁に囲まれた暗い部屋。

湿った、そして冷たい空気が漂う空間。それは岩壁に囲まれた暗い部屋。  
ヒカリバナ エメラルドグリーン  
曜華が放つ金緑色の光が静かに震える。

岩壁に反射する薄青い光は、人を冷静な気持ちにさせる。

人を叱る時、感情的になつてはいけない。

理性的に、そして、相手のことを思つて言わなければいけない。

グンゾウはリョータ小隊の仲間を、自分の前に座らせた。

「まあ、そろそろ気付いてるだろうけど。コボルドは犬ではありません」

シムラだけ「え？」と声を上げて、すぐさまリョータとヨシノに頭を叩かれた。

「これから第3層に下がるとエルダーコボルドという、装備も良く、知能が高く、戦術的に戦つてくるコボルドが現れ始めます。また、デッドスポットという凶悪な怪物の目撃例もこの辺りから多くなります。このまま君達が戦いに集中しないと、不測の事故が起きて、カズヒコ小隊のみんなに迷惑をかけたか、そして君達自身が命を落とす可能性があります。わかりますか？」

ヨシノが静かに頷く。珍しくリョータも下を向いて「薄々は……」と言つた。

「犬が大好きで、久々に狩り場も変わって、興奮する気持ちもわかります。しかし、君達  
が怪我をしたりするのは、私はとても悲しいです。ここだけの話、コボルドは犬の覆面  
を被っただけの毛深いムキムキのおっさんです」

再びシムラだけ「え？」と声を上げて、すぐさまリョータとヨシノに頭を叩かれた。

「そういうつもりで。大切なみんなの命がかかっているのです、真剣に戦って欲しいと  
思っています。わかってもらえましたか？」

「はい」

「はい。ごめんね、グンちゃん」

「はい。すいません」

「はい……、毛深いおっさんだったんか……」

「キシ」

グンゾウは全員から了解の返事をもらう。

「はい。わかってもらえて、私も嬉しいです。……もう、いいよー、カズヒコ」

グンゾウの掛け声で、隣の第3層に降りるための井戸がある部屋に待機していたカズ  
ヒコと小隊の仲間も顔を出す。

「じゃあ、行きましようか」

カズヒコが声をかける。

「そうだね。目的地まで後2層残ってるからね」

——ふう、疲れた。人を叱るなんて柄じゃないのに。

第3層に降りる井戸には2本の縄梯子なわぼしが付いているので、2名が同時に降りることができた。

地獄の3丁目。

第3層に降りるなり、コボルド達からかなりの歓迎を受けた。

先頭で降りたのは身の軽いシムラだが、「あかん！ いっぱいおる！」と声が出した後すぐに剣戟の音が始めた。ヨシノとリョータが追って降りている。

すぐに戦士のカズヒコとミッツ、そしてクザクが降りる。

乱戦で役に立たないグンゾウは自分が降りる番を待っていた。第2層にある井戸の入り口で気を揉むことしかできない。

戦士達が降りた後すぐにグンゾウはタイチと降りた。アキとチヨコは魔法使いふたり2人の後に、殿しんがりとして降りてくる。

「おるうああああ!!」

リョータの声が第3層に響いた。グンゾウが降りた場所は天井の低い、狭い通路の真ん中で両側から敵に挟まれていた。

リョータはコボルトの中でも一際体格のよい個体と戦っていた。体長が170センチ位で、肉厚で包丁のような片刃刀を装備し、鎖帷子と部分的な板金鎧を身に付けていた。

普段のゴブリン戦であれば、一撃必殺の両手剣が、エルダーコボルトAの剣に受け止められ罅迫り合い状態になっている。攻めあぐねている様子だ。

——あれが、エルダーだな。この状況、巻撃が使えれば違ったのになあ……。

「やあー、はいっ！ー、といやっ！ー」

もう一匹、エルダーと思われるコボルトをヨシノが相手にしている。

井戸の下の空間が狭いため、ヨシノは槍を諦めて、片刃の曲刀を抜いている。デュアルウイールド。両手構えだ。

体格的には劣っているかもしれないが、とにかく手数が多く、動きに無駄がない。息も吐かせぬ攻撃でエルダーコボルトを圧倒している。斬撃の合間に、エルダーコボルトBの膝に踵蹴りを入れるなど、技の組み合わせも多彩だ。

——ヨシノは戦闘に関する天才だな。

グンゾウが周囲を見渡すと、エルダーコボルトがさつきの2匹で、その他に労働者コボルトが5匹いた。カズヒコ、ミッツ、クザクが労働者コボルトと相対しているが、数的に不利なせいでじりじりと押されている。



——シムラがない?! シムラは？

「シムちゃん、下がりなさい！」

ヨシノの声がする。

——いた。

シムラは別の労働者コボルドの1匹と対峙していた。剣鉈けんなたで労働者コボルドのシャベルと斬り合っている。弓術が極めて優れているだけにシムラの剣鉈術は見劣りがある。武器の相性もあるのか、見ていて危なっかしい。

「どさっ」という音がして、ゲンゾウの背後に井戸からハイドが落ちてくる。続いて、ノツコ、チヨコ、アキが降りてくる。

「ギジジジジ……」

「早速で悪いんだけど、アキはシムラと替わってあの労働者コボルドを。ハイドとノツコはカズヒコ達の支援を。チヨコは2人ふたりの護衛で」

「はい！」

アキは素直に返事をする、労働者コボルドAに向かっていく。

「ジール・メア・グラブ・テラ・カノン」

ノツコが氷結球アイスグローブを唱える。空中に巨大な氷球が出来上がり、カズヒコの目の前にいた労働者コボルトBの顔面に当たった。カズヒコがすぐに追撃する。

——あれは痛そう。

「オームキシシ・レル・エクトキシシ・ヴェル・ダーシユキシツ！」

ハイドの杖から黒い藻のような塊が飛んでいき、ミッツの目の前にいた労働者コボルドCに当たった。影魔法の初級技、影鳴りだ。労働者コボルドCは痺れたように震えている。

ミッツはここぞとばかりに労働者コボルドCの胸部に深々と長剣を突き立てた。リヨータも使う一本突きだ。

——よし、これで少し余裕が出るはず。

「いててて……。すいません、グンゾウさん治せますか？」

シムラがグンゾウの所に頭を押さえながら戻ってきた。額は腫れて赤くなり、少し切れた部分から血が滲んでいる。シャベルの傷跡に見えた。

「おお。すぐに治そう。光よ、ルミアリスの加護のもとに。癒し手」

グンゾウが当てた掌の下で、シムラの傷がどんどん癒えていく。

「あー、ちもきいいっすー。やっぱり、この剣鉈で前に出るのは少し無理がありますね」  
シムラは剣鉈に目を遣ってから、腰の鞆にしまう。

「そうだね。ちよつと辛いよね。シムラは弓術があるから、前へ出なくてもいいんじゃないかな？」

「はい。でも師匠は、剣鉈も極めれば前線で戦えるって言うんですよね」  
「そつか。でも、無理はしないで。治ったよ」

グンゾウは治療が終わったので、シムラの肩を優しく叩いた。

「はい。もうちよつとゴブリンで練習してからにします。狭いところは嫌いやねん。弓撃ちたい」

——さて、戦況を確認しないと。

グンゾウが再び周囲を見渡す。

カズヒコ達はそれぞれ1対1になり、戦況は好転していた。ハイドとノツコも魔法は温存に入っている。

リョータはエルダーコボルドAと真つ向から切り結んでいた。エルダーコボルドの実力を体感しているといった感じに見えた。兜の隙間から見える口元が笑っている。

ヨシノはあと少しの所まで、エルダーコボルドBを追い詰めていた。エルダーコボルドBはヨシノの斬撃が躲<sup>かわ</sup>せなくなつて、狼狽<sup>うろた</sup>えている。ヨシノはエルダーコボルドBの両脚、膝の上辺りを同時に斬りつけた。エルダーコボルドBが傷に気を取られた隙に、敵の左側から後ろに回ると背中に片刃<sup>シ</sup>の曲刀<sup>ミ</sup>を一刀勢いよく突き立てる。そしてもう一刀。捻<sup>ひね</sup>つてからゆっくり抜くと、エルダーコボルドBもゆっくり倒れた。

ヨシノは兜のバイザーを上げて敵の死亡を確認すると、労働者コボルドの群れに飛び

込んで行った。

——あつちは終わったな。俺が行くべきは、あそこかな？

グンゾウはショートスタッフを構えると、アキと相対している労働者コボルドAに向かつていった。

労働者コボルドAはシャベルでアキを攻撃していた。アキは歩兵用のヒーターシールドでシャベルを連続して盾受プロックしている。時折、アキも反撃に出るが労働者コボルドAは素早いバックステップで躲してしまふ。

——俺はずるいからね。

グンゾウは素早く労働者コボルドAの後ろに回ると、労働者コボルドAの肩口スマッシュに強打を打ち込む。

「ギャヒーン！ キャン！ キャン！」

労働者コボルドAは犬のような鳴き声で悲鳴を上げた。そして、驚いて後ろを振り返ると、シャベルを上段に振りかぶって、素早い振りでグンゾウに殴りかかる。

「グンゾウお兄さんの狙い通りだけど、いいのかい？」

グンゾウは口元がにやつく。労働者コボルドAのシャベルをショートスタッフで受けると、その衝撃力を活かしてショートスタッフを回転させ、そっくりそのまま労働者コボルドAの脳天に打撃を加える。

——突ヒット返バックし。これカレンに散々やられたんだよねー。

労働者コボルドAは頭がぐらつき、酷く酔っ払ったかのように千鳥足になる。そこへアキが剣を右上段に振りかぶってから、斜め左下へ振り下ろす。懲パニッシュ罰ユメントの一撃だ。労働者コボルドAは斬撃を背中に受け、前のめりに倒れる。

次の刹那、「ごめんね」とアキが小さな声で囁ささやきながら、倒れた労働者コボルドAの後ろ首に長剣を突き立てた。

——成長したな……。

そこには以前ゴブリンに止めを刺さず、神官衣を切られたアキの姿はなかった。

「お疲れ」

グンゾウがアキの肩当てを右手の甲で軽く叩くと、アキがグンゾウを見上げて目が合う。

乱れた息。少し赤い鼻。アキの目は少しだけ涙で濡れていた。

「ちよつと、可哀想で、辛かったです……」

アキは目元を拭ぬぐった。グンゾウは愛おしくて、すぐにでもアキを抱きしめて慰めたい気持ちになったが、犯罪になりそうなので諦めた。

「辛かったね。……ハイド達の所に戻ってて。タリスマンは俺が回収するから」

「はい……」

タリスマンとはコボルドが信仰の理由から必ず1つは身に付けているお守りで、人間界においても貴金属としての価値があるため、小さくて軽いのに換金率が高い。持ち帰るには最適の戦利品だ。

——タリスマンより恋愛事件ロマンスが欲しい。

「あるよっ!」

ヨシノが声をあげる。

「えっ? 恋愛事件ロマンス?」

「何言ってるのグンちゃん、そのギャグうける!」

ヨシノがお腹を押さえてけらけらと笑った。皆が笑っている。グンゾウは恥ずかしくて汗がじわりと出てきた。リョータだけが嫉妬したのか「100点満点で10点」と言って苦い顔をしている。

——シムラトリョータのギャグよりマシだけどね。

「エルダーコボルドのタリスマンですよ。グンゾウさん」

カズヒコが説明してくれる。

「このタリスマンは最低でも5シルバーするらしくて、サイリン鉱山が狩り場になって  
いる理由は実入りが安定するからのようです」

「へー、そうなんだ」

「俺は……ゴブリンの方が狩りやすいな」

リョータが腕組みをしながら言った。やはり犬顔の生物を狩るのは気が進まないのかもしれない。

「あー、あたしもゴブちんの方が罪悪感はないな」

ヨシノの発言にアキが首を何度も縦に振った。ハイドもこつそり頷うなずいている。

「俺も坑道内は弓が使いにくくてあかん。広い場所で戦いたいねん。俺の才能が。天に与えられし、俺の才能がー！」

野生児シムラが両手を上げて主張している。暗くて狭い場所の所せ為いか、シムラにしては珍しくストレスが溜ひまっているようだ。

——それともシャベルで頭叩かれて、少しおかしくなったかな？

「リョータ小隊パーティは随分ダムロー派だね。まあ、第4層はコボルドの農場になつていらしいので、相当開ひらけた場所のようだよ」

情報通のカズヒコがシムラの喜ぶ情報を提供した。

「やったるでー！」

シムラが大声で叫ぶ。

「……敵地なの忘れてない？ 声がでかすぎなんだけど……」

少しひいた様な顔でクザクが突っ込む。サイリン鉾山に来て初めて声を聞いた。

そのクザクの指摘の通り「ワウツ！ ワウツ！」という犬の鳴き声がして、第4層への井戸があるという通路の方向から4匹のコボルドが顔を出した。エルダーコボルド1匹の労働者コボルド3匹といったところか。

「バツカ、イガグリ！」

リョータに叱られたシムラは「とういまでーん、毛深いおっさん死ぬや！」と言いなから弓を引き絞って、一矢放つ。先頭のコボルドの心臓付近に刺ささり、「キャフン」という声を上げて倒れた。

——毛深いおっさんを信じてんのかいっ！ 反対側からも来るかも知れないから、油断禁物だな。

「ここは通路だから後ろも警戒を怠らないように。後ろの警戒はアキとクザクとチョコ。前は戦士4人で一気に片付けよう」

コボルドへの慣れもあり、グンゾウ指揮の下、12人が安定して稼働し始める。こうなると数の暴力で、安全な狩りとなった。

その後も何回か戦闘になったが、危険な目に遭うこともなく順調に奥へ奥へとやってきた。



——まあ、人数多いしね。

回収したタリスマンもそこその量となり、金庫番タイチの袋の中でチャリチャリと音を立てている。

——今夜は熱々のリーチエで一杯かな。

途中、第4層に降りれる井戸が何個か見かけたが、カズヒコは無視をした。グンゾウは気になって聞いてみる。

「あれじゃないの？」

「ええ、第4層は広くて見通しがいいため、敵に見つかりやすいらしいんです。だから、なるべく目標にしている第5層に降りる井戸の近くに降りた方がいいみたいです」

「そうなんだ。まるで来たことあるかのように詳しいね」

「知人に地図を貰って、しっかり説明を受けたので……」

「知人？」

「ええ、知人です」

「どんな知人？」

「知人です」

「恥ずかしいって書く方の恥人？」

「知ってるって書く方の知人です」

カズヒコは爽やかな笑顔をして、親指を立てた。

——絶対女だよ、これ。もう、羨ましくて、けしからん。

カズヒコが複数いる知人の1人ひとりからもらった地図のお陰で、迷うことなく第3層を進んでいく。進んでいるのは4人程が並んで通れるくらいの広めの通路だ。

「その奥の部屋に、あまり使われていない井戸があるようです」

カズヒコが指差した方向は通路の行き止まりだった。その岩壁にはボロボロの壊れかけた木戸が付いていて、木戸の上には「用具置き場」と書いた看板があった。この辺りはコボルドも来ないのか曜華ヒカリナが少なく、薄暗い。坑道の奥であるため、妙に湿った冷たい空気が淀んだように漂っている。

木戸の奥はよく見えない。壊れた隙間から向こう側が少し見えるが、薄暗い通路よりもさらに暗い空間が広がっている。

「なんていうか……、この扉を開けるのは勇気がいるね」

グンゾウが声を出すと、皆が扉から離れていく。

「え？ どういうこと？」

グンゾウが質問をすると、リョータが答える。

「ほら、なんつーか、寿命も近いオッサンだし？」

「意味がわからない。コボルドが飛び出てくるかもしれないから戦士が開けるんじゃない」

いの？」

「いや、なんつーか、神官だし？」

「もつと意味がわからない。神官だから装備薄いし」

「わかんねーかなー。察し悪いぜ」

グンゾウは馬鹿リョウタに馬鹿にされる。そこへヨシノが補足をする。

「ほら、なんか……出そうじゃない？ グンちゃんなら聖職者だし、オバケさんに年齢も近いし」

「ヨシノ、俺はそんなに歳じゃないよ。それに神官はタイチもいるし。お化けなんてこの世には……いるのか」

グリムガルにはいる。このグリムガルの辺境で死んだ者は、長くても5日、短ければ3日の間に火葬しないと、不死ノイフライケンクの王の呪いで動く死体と化してしまう。動く死体となつた者を忌いまわしい呪いから解放するためには解呪デイスベルという光魔法を使うしかない。

「俺、解呪デイスベル使えないけど……」

グンゾウは照れ隠しに、横顔をぼりぼりと搔かいた。

「てめえはまたか、つくづく使えねえオッサンだな」

——あー、腹立つ。咎光フレイムつてたまに誤爆するんだよなー。

「こらっ！ リョータ。グンちゃんは使えるオジサンでしょ？」

ヨシノが助けたのか、貶けなしたのか分からないことを言った。ハイドが「キシシ」と笑っている。

「使えるオジサン……」

「あつ、間違つた。優秀なお兄さん……でしょー」

ヨシノは言い直しながらちよこちよこ移動して、クザクの影に隠れた。クザクの身体は身を隠すものとしてとても有用だ。

「あの……一応、僕デイスベルが解呪使えます。この前、グンゾウさんが浄化ビュリッファイの光を習得中に僕も修煉へ行つたので」

タイチがおずおずと手を挙げた。

「おおっ！ 流石、タイチだな。どうだ？ リョータリョウ小隊ちにくるか？ いつも必要な時に必要な魔法を覚えてない神官はクビにするからさっ！」

リョータは、タイチと肩を組んでムカつく笑顔でグンゾウを見詰めた。グンゾウは瞼まぶたがピクピクと痙攣けいれんするのを感じた。

——こいつ。まちで移籍したるか。

「ま、じゃあ、襲われても解呪デイスベルできることがわかったから全員でジャンケンだな」

グンゾウが提案すると、カズヒコが「時間ももつたないし、そうしましょう」と言った。

「……なんでやねん。……なんでやねん」

シムラが暗い顔でブツブツと呟いている。

結局、ジャンケンで負けたのはシムラだった。

「これ、美味いぞ。美味いってやつだ、シムラ！ シムラ君のちよつと良いところ見てみたい、無理はっ！ 承知っ！……」

リョータが他人の不幸は最大の幸せという顔でシムラを囁し立てる。

「美味しないっちゅーねん」

「シムラ。骨スケルトンが出てくるかもしれないけど、骨は拾ってやるぜ、へへへ」

ミッツが上手いことを言った。しかし、シムラは少しも笑わない。

——よっぽどお化けとか嫌いなんだな。相手が骨じゃ、弓効かないしな。

シムラは木戸の前に立ってから、目を瞑つぶって深呼吸をした。

他の仲間もみんな息を殺して、その様子を眺めていた。

「こんなん、開けようと思うから怖いんじゃない！ 蹴り破ったる！」

そう言う。「はいやー！」と叫んで、木戸を思いつき蹴った。

見るからにボロボロの木戸はシムラの蹴りを受けて、蝶番ちょうつがいが外れ、向こう側に倒れ

た。

部屋の中は暗い。コボルドが出てくる気配はない。

シムラは皆の方へ満面の笑みを浮かべて振り返ると「こんなに出ましたけど」と言った。

——確かに出了。

「シムラあ！ 後ろっ！ 後ろっ！」

リョータが叫ぶ。

シムラが一瞬「えっ？」という顔をしてから、振り返るとそこにシムラより頭2つ大きい骸骨スケルトンが音もなく立っていた。骸骨は兜に鎖帷子と甲冑の一部を身に付けた出で立ちだ。

骸骨がゆっくりと刃渡り140センチ位はあるバスタードソードを振りかぶった。考える間もなくシムラが穴鼠という技を使って、前転でその場から離れる。シムラが居た場所に大きな骸骨のバスタードソードが振り下ろされた。

「あああ、あつぶな！ だから最初から、戦士が開けんかい！」

シムラが正論を言った。

「あへへへ、なんか、もつと出てきたぞ！」

ミッツが叫ぶと最初の戦士風骸骨の後ろから、鎖帷子の上に神官衣を纏まとった骸骨が出てきた。さらに後ろから魔法使いの杖に法衣ローブという装備の骸骨が続いた。装備の隙間

から出ている部分は黄ばんだ白い骨が見え、所々に過去に肉か皮だったものの黒ずんだ残骸がこびり付いていた。昔、目があったであろう部分には光る暗闇といった、ただただ暗い空間が広がっていた。

——これが……動く屍しかばね。

戦士風骸骨はゆつくりと動いてバスタードソードを八相に構えた。そして、聖騎士風骸骨は長剣を抜くと盾を上げて防御を固めた。2体とも魔法使い風骸骨を庇かばうように立っている。

——生前のままの陣形なんだ……。

グンゾウは死してなお、後衛を守ろうとする前衛の姿に胸を打たれた。他の仲間も驚きで、声にならないようだ。

——しかし、こちら仲間を失うわけにはいかない。昇天してもらおう。

「みんな、後ろっ！」

チヨコが悲痛な声をあげる。チヨコが指差した方向から、労働者コボルドを3匹連れたエルダーコボルドがこちらに向かってきていた。

——おおおお、やばい。エルダーコボルドはリョータかヨシノでないときツイ。前の骸骨は戦士も聖騎士も強さがわからない。第3層で死んでるから、そんなに強くないかもしれないけど、戦士は体格が良い。しかも魔法使いがいる。魔法は強力な攻撃魔法を

使われると一撃で死んでしまう。支援魔法も前衛の攻撃と組み合わせられると死亡事故が起きる可能性が高い。しかし、魔法使いは奥にいるから早く前衛を倒さないと。

「グンゾウさん！」

カズヒコがグンゾウを見る。グンゾウは領うなずくと指示を出した。

「後ろのコボルドはヨシノ、アキ、クザク、チヨコ、シムラ。前の骸骨はデカイのはリョー々。聖騎士風はミッツ。カズヒコは両方。骸骨の前衛は速攻で壊せ。タイチは壊れた骸骨が復活する前に解呪デイスベル。ハイドは前、ノツコは後の支援、本気出せ。骸骨は能力が不明だ。事故る可能性が高い。一番危ないのは魔法使い骸骨だ」

グンゾウの指示で弾けるように皆が動き始める。サイリン鉾山で初めての危機が訪れていた。



## 21. 今夜チヨコは空を飛ばされる夢を見るか？

「ていつ！ 足払い!!」  
フットスワイプ

ヨシノの足払いが決まって2匹の労働者コボルドが転ぶ。

しかし、すぐ起き上がるとヨシノには目もくれずチヨコを追いかける。チヨコの前にクザクが立ちほだかり、労働者コボルドの剣を長剣で受ける。盾の無いクザクは攻撃を全て防ぎきれず、漏れたコボルドの攻撃がチヨコを襲う。チヨコは小さい身体を活かして、ちよこちよここと逃げ回る。

そのチヨコを追っかけて、コボルド、ヨシノ、クザク、チヨコ、コボルド、ヨシノ、クザクとぐるぐると回っている感じだ。陣形が落ち着かない。アキだけがノツコを守るためにヒーターシールド型盾を構え、どっしりとしていた。

——ごちゃごちゃしてて嫌だ。その内、バターになるんじゃないか？

新手として現れたエルダーコボルトは賢い親方タイプで「ガウガウ」と吠えては部下のコボルドに一番弱そうなチヨコを狙うように指示を出す。

犬の縦社会だけに親方の指示は絶対のようで、部下のコボルドは多少の怪我は省みず、命令に従う。

「ジール・メア・クラブ・フェル・カノン」

ノツコの凍てつく血が労働者コボルドAの足下に固着して、動きが止まる。ヨシノの目が光って、槍を繰り出そうとすると、次の瞬間親方が吠え、労働者コボルドBとCが労働者コボルドAを守る。コボルドは全員、鉄で出来た円形の盾を持っていて、

——厄介だやっかいな。

「ピンツ」と弦が弾かれる音がして、シムラの矢が放たれる。エルダーコボルドに向かつていく。しかし、エルダーコボルドも親方らしい余裕の態度で盾を使って軽く弾く。

「くっそー、あいつには当たらん」

シムラが頭を掻いて苛いらついている。

——禿げるぞ……。

狩人の狙撃は、一定以上の手練れ相手になると、如何いかに相手の認識外から狙うかが決め手となる。親方は甲冑を装備しているため、狙う場所も顔くらいしかない。

後ろ組は攻め手がヨシノしかいないため、複数のコボルトに連携して防御を固められると攻めづらい。長期戦になりそうだった。

——今はシムラの弓も使えないし、一番固いのはアキか……。

「アキを中心にクザクとシムラで脇を固めて、ノツコとチョコを守るんだ。ヨシノが自

由になれば勝てるから」

——前はどうなってるんだらう？

対骸骨組スケルトンはもつと苦戦していた。

リョータがタイチに肩の治療を受けていた。戦士骸骨とはカズヒコが相對している。戦士骸骨は攻撃が速く、押されている。カズヒコは打ち込まれる斬撃を受けるので精一杯だ。

「もういい！ カズヒコ替われ！」

キレたリョータがタイチの手を払い、戦士骸骨に走って向かっていく。

「おおおうらあああああ！」

助走付きの大振りツヴァイヘンダー両手剣が戦士骸骨を襲う。

戦士骸骨がバスタードソードで受けるが、吹っ飛ばされて岩壁に当たり、膝を突く。

——よしっ！

「まずい！ 来るよ！」

タイチが叫ぶ。

黒い藻のような塊が飛んできて、リョータに当たる。魔法使い骸骨の放った影鳴りシャドレビートだ。



「だから、グンゾウさん。そんなの無理ですって」

タイチがグンゾウの前に立ちちはだかるが、グンゾウは全然気にしない。

「ハイド！ 聖騎士と戦士の動きを15秒止めろ！ タイチが魔法使いまで突っ込むぞ

！ 前衛もいいなっ！」

「キシシ！」「おうっ！」「はいっ！」「へっ！」という頼もしい返事が返ってくる。

「マリク・キシシ……、エム・キシシ……パルク！」

ハイドの魔法の光弾は6発ほど飛び出て、複雑な軌跡を描きながら1発ずつ戦士骸骨

と聖騎士骸骨に向かった。聖騎士骸骨は盾で防ぎ、戦士骸骨はステップで躲す。

少しだけ出来た隙に戦士3人が2体の骸骨の間に入るように位置取りをする。

——まず2発。

「ルミアリス様！」

タイチは恐怖に目を瞑りながらできた隙間に歩き始める。

その動きに呼応して、戦士骸骨と聖騎士骸骨がタイチを狙って猛烈に攻め始める。

ミッツが聖騎士骸骨に押されて、受け太刀が散らかり始める。隙を突いて剣がタイチ

に届きそうだ。

「キシシッ！」

通路の上方を旋回していた魔法の光弾が1発聖騎士骸骨の頭部に当たって、頸椎が外

れ、頭蓋骨が取れる。聖騎士骸骨の体勢が崩れる。そこへミッツが肩から体当たりをする。聖騎士骸骨は後ろに倒れた。

——3 発目。

「ミッツ、やるじゃないか」

「へへへへっ」

ミッツは鼻をこすりながら、聖騎士骸骨とタイチの直線上に立ってタイチを守る。

そこに魔法使い骸骨の魔法の光弾マジックミサイルが飛んできて頭に当たった。被っていた兜が取れて、床でくるくると回った。

「あへっ? いてててて」

——最後が締まらなかったな。まあ、いいか。戦士は?

戦士骸骨は手が付けられないくらい暴れていた。剣筋も滅茶苦茶だ。無尽蔵むじんぞうにある体力を使つて、もの凄い速さであらゆる方向から斬撃を繰り出してくる。死んでいるので疲れて息を切らすこともない。リョータを中心に襲いかかっている。

リョータが猛攻ラッシュに押されて、下がる。カズヒコも危なくて手が出せない。

怪我也いと厭わぬ不死生物アンデットと生身の人間では迫る斬撃への恐怖が違う。

「くそっ、なんだよっ! 死ねよっ!」

——もう、死んでるよ。

後退りしたリョータと、魔法使い骸骨の影鳴りを避けようとしたタイチが交錯する。  
「あつー！」

リョータがそれに気を取られる。刹那、戦士骸骨が憤怒の一撃を繰り出す。  
「つつつー！」

リョータが遅い後悔をする。

「陽炎！」<sup>ヘイズ</sup>「光よ、ルミアリスの加護のもとに、<sup>ブレイム</sup>咎光」<sup>ヘイズ</sup>「キシシ！」  
陽炎は下段から斜めに切り上げる戦士の技だ。<sup>スキル</sup>

哀れな戦士骸骨はカズヒコの陽炎で<sup>ヘイズ</sup>バスタードソードを跳ね飛ばされた上に、<sup>ブレイム</sup>グンゾウの咎光で動きを止められ、ハイドの魔法の光弾を2発胸に受けて、後ろに吹っ飛んだ。

——5発。あと1発。

憎たらしいリョータを守るために3人の男が一気に技を使った。<sup>スキル</sup>

一番驚いたのはリョータだった。

「な、なんだよ、お前達、お、俺は余裕だったつーの。本気出し過ぎじゃねーのか？」  
カズヒコが爽やかな笑顔で笑っている。

「キツシツシ」

ハイドは残り1発の魔法の光弾を、からかうようにリョータの周りを旋回させてから、ミッツの前に立ち上がりかけた聖騎士骸骨に命中させ、吹っ飛ばした。

「ちよつと、目が潤んでるけどな」

グンゾウは嫌らしくニヤニヤと笑った。

「ば、馬鹿じゃねーの。そんなわけねーだろ。くそおやじ」

リョータの目は感動で赤くなっているだろう。グンゾウからは兜でほとんど見えな  
いのが残念だった。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、デイスベル解呪」

丁度その時、魔法の光弾や影鳴りをかいくぐったタイチが魔法使い骸骨を光の世界  
へ誘った。魔法使い骸骨は眩い光に包まれた後、杖と法衣ローブと灰だけを残して消えてい  
た。

——おやすみなさい。これで光の輪廻りんねへ。……さて、次だ。

「あと任せた。ハイドは一緒に来て」

グンゾウが後ろ組の方に向かう。

その時、丁度ヨシノが最後の労働者コボルトの首から槍を抜いた所だった。ヨシノは  
顔も体も血だらけだった。少し無理をさせたかもしれない。

「仲間を呼ばれる。エルダーを逃がすな！」

グンゾウが声を出す。実際、親方は部下フオアマンが居なくなり、逃げだそうとしていた。

「オームキシシ・レル・エクトキシシ・ヴェル・ダーシユキシッ！」



「ジール・メア・グラブ・フェル・カノン」

ハイドの杖から黒い藻のような塊が飛んでいく。影鳴りシャドレビートは割と速度が遅いため、エルダーコボルトは身体を捻って躲す。しかし、ノツコの凍フリージングブラッドてつく血に足を固着されて、動けなくなった。

「ワオーン！　ワ、ワオーン！　ワガツ」

遠吠えしているエルダーコボルトの口の中に矢が突き刺さる。

「おっさんが犬の振りすんなや！　ぼけえ！　いてこまずぞー！」

——シムラの柄がらが悪い。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒光ヒール」

グンゾウは、ヨシノが打撲や切り傷等、全身に傷を負っていたので癒光ヒールで回復することにした。癒光ヒールは対象を光に包んで全身を回復させる。

「あー、気持ちいいー。これ温かくて、全身治るからいいよねー」  
ヨシノが両腕を伸ばして伸びをする。

「場所指定だから動いたら駄目だよー」

「ほーい」

——いくつか危険な場面があったみたいだけど、なんとか大事故がなくて良かった。

みんな成長してるんだな。あのミッツですら。

「へっへっへ、だから、俺の体当たりがき……」

ミッツがチョコに聖騎士骸骨を倒した自慢をしていた。チョコは興味なさそうに欠伸あくびをしている。大きな目がトロンとして眠そうだ。

——ミッツ……、チョコは諦めればいいのに。

カズヒコの（知人女性の）案内が優れていたお陰で、第4層はほとんど歩かず、第5層への井戸に辿り着いた。

不満げだったのは唯一、第4層で思いつきり弓を使おうと思ってたシムラだけだった。

第5層への井戸は特徴を一言で言えば穴だ。岩壁にぼっかり開いた穴だ。でも、ただの穴じゃない。熱風が噴き出す穴だ。

第5層は熔鉱炉ようこうろがあるため、気温が熱い。つまり気圧が高い。

そのため、第5層から第4層に向けて物凄い勢いで熱された空気が噴いている。他の層では、空気が冷やされるせいかな、比較的緩ゆるやかな風だったが、ここは直接なので凄すごかった。

「熱いし、なんか凄いな」

グンゾウが手の甲で汗を拭きながら、カズヒコに話しかけた。  
 「そうですね。でも見てください。ありますよ」

カズヒコが熱風に目を細めながら井戸の先を指差す。グンゾウも覗き込む。

——確かに、あるある。

井戸の真下に、まさに山のように鉄アイアンインゴットが積まれていた。確実に人が乗って作業できるくらい高く、そして大きく積まれている。井戸から5メートル位下に頭頂部がある。

この井戸は普段は移動に使われていないため、鎖くさりや繩梯子なわぼしじ等は一切無い。

「周辺にコボルドはいませんね。今が機会チャンスです」

「誰か1人ひとりが繩ロープで降りて行って、鉄アイアンインゴットに繩ロープをくくりつけて、それを皆で引つ張

るって感じかな？」

グンゾウが確認すると、カズヒコが答える。

「はい。そうです。人を降ろすのが1番大変そうなので、降りる人は軽い方がいいですよね」

その言葉に反応して皆の視線がチョココに集中する。一番軽そうに見えるし、何より軽業かるわざは盗賊シーフの本領だ。

「え？ あたし？」

チョコが驚いたような顔をする。

「たりめーだろ。この場面以外でどこで活躍するってんだよ。盗賊さんよ」

リョータがやれやれという顔で溜息を吐いた。

チョコは拗ねたような顔をして「ふんっ」と言った。

——いつも拗ねたような口してるけどね。

「こら、リョータ。なんて言い方なの？ チョコちゃんに謝りなさい！」

「いや、これに関して謝る必要はない。俺等戦士は役目として命をかけて敵と戦ってるんだから、この場面では盗賊が自主的に動いてもらわなきゃ困る」

ヨシノに怒られたが、リョータは悪びれもせず言つてのけた。

——たまに正しいこと言うよなりョータは。言い方が悪いけど。

「分かったわ。やるわ。やってやるわ。あたし、空飛ぶの夢だったの。ちよーどいいわ。

ミッツ、縄頂戴！

チョコはヤケクソなんだか、急にやる気を出した。零れそうな大きな目は怒っている。

「へへへ、へへへいつ」

ミッツが笑ったんだか、返事したんだか良く分からない声で背囊から縄を取り出した。ミッツ以外にも各人が持ってきた担当分の縄を取り出す。それらを組み合わせ

10メートル程の縄が2本完成した。カズヒコは置き型の滑車まで用意していた。「今更だけど、この縄って1本で何キロまで支えられるの？」

グンゾウが誰とはなく聞いた。

「買った盗賊ギルドでは、100キログラムの人でもぶら下がるって言っていました」  
チヨコが自分の腰に縄を結びながら答えた。チヨコのウエストは50数センチに見えた。

——チヨコ、細いなー。いいいなー。

グンゾウは自分のお腹を少し触った。だいぶ引き締まったとは言え、10代の身体とは全く違った。

——出ているところは出ているナイス身体だと思おう。

「そっか……なら平気だね」

縄の端が一番重いであろうクザクの腰に結びつけて、しっかりと固定した。

チヨコが井戸に向かう。

「じゃ、みんな、離さないでね」

不安そうな顔で振り返った。縄を掴んでいる男達が全員頷く。

チヨコは恐る恐る前に進む。熱風でポブカットの髪が逆立つ。チヨコが井戸の縁に足をかけると、熱風に煽られ、チヨコのスカートが全開に捲かれた。

「きゃあつー！」

チョコがスカートを押さえる。グンゾウの目に、一瞬白い何か映った。

「おおう!!」と男達は興奮をしたが、リョータとグンゾウはヨシノに、シムラとハイドはアキに手で目を覆われてしまった。「俺の位置からは何も見えないんだけど……」とクザクがぼやいていたが、ヨシノに「見えなくていいの」と一蹴された。

「こほん。気を取り直して……といやつ！」

2度目はスカートをしつかり押さえながらチョコは井戸から飛び降りた。一気にグンゾウ達の掴んでいる縄ロープに重さがかかる。それでも40キログラム未満と思われるチョコを8人がかりで持つているため、飛び降りた勢いが収まれば大した重さではなかった。

一番先頭にいるカズヒコが穴の下にいるチョコに声をかける。

「チョコー、どう？ 空を飛んでる気分は？」

「苦しいし……、思ってたのと……違う」

チョコは穴の下で宙吊りになってブラブラとしていた。

「少しずつ降ろしていこう。オーエス、オーエス……」

カズヒコの掛け声で、皆が少しずつ縄ロープを前に送っていく。

「オーエス、オーエスって、雰囲気分かるけど、なんか違ちがくねーか？」

リョータは掛け声に疑問を持った。

「確かに……なんやろう、このおうてるよーな、おうてないよーな微妙な感じ」

シムラも疑問に思ったようだ。

そうこうしている内に、チョココが鉄インゴットの山に到着したようで急に縄が軽くなった。

「まあ、まあ、細かいことは言いつこなしで。チョココ、この縄に鉄インゴットをしつかり固定してー」

カズヒコがチョココにもう一本の縄の端を投げる。

「これ、めっちゃ重いよー」

穴の下でチョココが呻いている。グンゾウが覗くと、チョココは一生懸命鉄インゴットの片側を持ち上げて、縄で全体をぐるぐる巻にしていた。

「いーよ、たぶん、大丈夫」

チョココの声がして、今度は男達が一斉に別にロープを引つ張る。チョココとほぼ同じ重さでしたが、持ち上がってきたのは幅15センチ、長さ30センチ、高さ10センチ程度のインゴットだった。

「おお、小せえ割に意外と重えな」

リョータが片手で持ち上げようとして、持ち上がらず、両手で抱えるように持った。

ヨシノも楽しそうに持ち上げている。

「よし、どんどん続けよう」

カズヒコの指示で作業は順調に進んだ。作業の間、コボルドが現れることもなかった。その日は鉄アイアンインゴット4本持って帰ることにした。

井戸から戻ったチョコは一言「なんか、夢をひとつ壊された気分」と言った。

オルタナに戻った後、皆のやる気モチベーションを下げないように口には出さなかったが、グンゾウは「正直もうやりたくないな」と思っていた。



## 22. オルタナのクズ

人は狭い洞窟の中から世界を見ているようなもので、主観的な事実を、それが真実だと誤解してしまう。真実の姿は簡単に見ることができない。事実に対して、少なくとも一面は客観的な光を照らさないと、真実の影すら見ることはできないのだ。

世の中には屑くずみたいな奴がいる。

否めない事実だ。別に否定のしようもない。

ただし、程度問題は残る。救いようもない屑くずか？ それともちよつとは良い所もある屑くずか？ 多くの人間が関わって暮らす社会では、そんなことを真剣に考えてみる必要があるのかもしれない。あなたも、そして私も実は屑くずなのかもしれないから。

その通りは北区の天空横丁から2本奥に入った裏通り。少し寂れた飲み屋小路こうじだ。

千鳥足ちどりあしの酔っ払いや、いかにも商売風の派手な女性を連れた人間が歩いている。初めての人間だと足を踏み入れるのに躊躇ちゆうちよするいかかわしがある。

その通りに、一軒のバーがある。その名も「オリビア」。入り口の木戸に看板が掛かっただけの質素な佇まいたなずである。知らない人なら間違ひなく通りすぎてしまうくらい目

立たない。

グンゾウはその木戸を開けて中に入った。

狭い店内。席はカウンターのみの12席。半分程度埋まっている。

「いらつしやい。グンゾウさん」

バーの経営者兼<sup>オーナー</sup>バーメイドをやっているオリビアさんだ。オリビアさんと言ってもグンゾウよりはずっと年下で、20代半ばといったところだ。昔は歌姫をやっていたらしいが、色々あり、今は一児を抱えながら昼は子育て、夜はこの店で働いている。色々の部分は詳しくは聞いていない。

——責任も取らないのに、そんな所まで踏み込めない。

グンゾウはそう思っていた。

グンゾウも義勇兵の習<sup>なら</sup>いで、基本的にはシェリーの酒場で食事をしたり、酒を飲んだりすることが多い。しかし、カズヒコ小隊<sup>パーティ</sup>やリョータ小隊<sup>パーティ</sup>の面々の誰かは必ずいるため、たまに独りになりたい時は顔を出す。義勇兵の客は少ない。

オリビアは濃い顔美人だ。肌は色白とは言えない。どちらかと言えば地黒な方だった。身長は165センチ位だが、顔が小さく、とても痩せているので、170センチくらいあるように見える。基本的に明るい女性だが、時々、大人びた憂<sup>うれ</sup>いのある表情をするため、ここに通う男共<sup>おとしども</sup>はドキッとさせられることがある。

バー・オリビアの客のほとんどはオリビアに会いにきていると言つても過言ではない。

グンゾウはオリビアから遠い、空いている席に静かに座ると注文をした。

「いつもの。あと、今日のお勧めは？」

「今日は、川魚の新鮮なのが手に入ったから酢漬けがあるわ。後は、グンゾウさんに教えて貰つたお肉屋さんから良い腸詰めを分けてもらつたから野菜の煮込みを作つたわ」

「じゃあ、両方とも頂戴。あと、お腹空いてるからパンも欲しいかな」

「はい。よろこんでー。はい、いつもの」

オリビアがお酒を出す。グンゾウがいつも飲んでるのはウワの実で作られた蒸留酒だった。ウワの実の蒸留酒はどこでも飲める一般的なお酒だが、オリビアのお店では微発泡のものを出してくれる。この微発泡の蒸留酒は、口当たりが軽く、料理と一緒にグイグイ進んでしまう。

——美味い！ この一杯のために生きてるよな。これでオリビアさんと好い関係だつたら、もつと楽しいんだろーな。

グンゾウはオリビアの姿を見ながら、良からぬ妄想を始めたが、何故かカレンの顔が浮かんだので、何かが萎縮して妄想が止んだ。

グンゾウが発泡酒をグイグイと飲みながら、出てきた料理を食べていると木戸が開いて、3人の男が入ってきた。

「オリビア、今日は2人連れてきたよ」

「あら、クズさん。ありがとう」

先頭の男は革製の上下を着て、羽根飾りのついた帽子を被っていた。年齢は20代前半から半ばに見えた。狐目で、唇がゆがんでいる。一見して、陰険いんけんそうな顔だ。

グンゾウはこの男のことを知っていた。バー・オリビアの常連で名前はクズオカ。義勇兵で狩人をやっている。義勇兵歴で言えばグンゾウよりも先輩だ。

クズオカは狭い店内をがさつに移動すると、3つ空いているグンゾウの隣に座った。後ろを通る時にぶつかつた人達が不満そうな顔をしている。あまり周囲の空気は読まない方の人間だった。

「お前等、何でも美味うまいから、何でも頼め」

クズオカは連れの2人に対して、偉そうな感じで声をかけた。2人は後輩義勇兵か何かなのだろうか。

「グンさん、お久しぶりっす」

クズオカはグンゾウに頭を下げた。

「久しぶり。元気だった？ クズちゃん」

本来は新人義勇兵のグンゾウに対して、クズオカは先輩義勇兵である。しかし、グンゾウの見た目もあり、クズオカはグンゾウが先輩義勇兵だと勘違いしていた。

出会った当初はオリビアを狙っている男と誤解され、感じの悪い対応をされたが、酔っ払って転んだクズオカの治療をしたり、クズオカの愚痴を聞き流してあげたりする間に誤解もほぐれ、今は良好な関係になっている。

一番面白かった愚痴の中に、こんな話があった。

クズオカは、過去にグンゾウ達と同じように記憶を失ってグリムガルにやってきた人間を一人、仲間に入れてやり、知識を授け、戦士ギルドも紹介してあげた。そして、しばらくの間はクズオカ小隊の定宿パティに泊まらせてやった。戦士になって小隊として戦ったが、どうにも使えず、仕方ないので今までの宿代と食事代をなけなしの2シルバーから奪って、突き放したそうさ。

お金を奪って突き放すことは酷いことだとグンゾウは思ったが、金額自体は至って理由の通る金額だった。

そうしたところ、その新人が作った新たな仲間から、クズオカは新人義勇兵のお金を全額巻き上げた、せこい義勇兵として見られているとのことだった。戦士ギルドの指南料8シルバーと当面の生活費を差し引けば、義勇兵団からもらったお金の残りは限られているのに……だ。「あいつ、バカバカ飯食いやがった癖に……」とクズオカはぼやいて

いた。

クズオカも誰かに嫌われることを快くは思っていない。

程度の問題はあれ、クズオカの他人に対する行いや態度はかなり屑な面があるため、グンゾウは表面上の付き合いに止めていた。

——後輩に偉そうな態度取っちゃうとことか、あんまり好きじゃないんだよね。

「なんとかやっています。グンさんは最近も新人の面倒見てダムローでやってるんですか？」

面倒臭そうなので、クズオカにはそう説明をしていた。

「ああ、うん、まあ。ここのところはサイリン鉱山でエルダーコボルドとかだったかな」

「なるほど。エルダーコボルドは初心者でも、まあまあ安定して稼げる相手ですよねー」

ダムロー旧市街の奪還は諦めましたか？」

「あれ？俺、そんな話したっけ？」

「ははは、この前会った時は地図を見ながら、悩まれましたよ」

クズオカは敬語で話しているが、どこか馬鹿にした感じを受ける損な話し方や顔立ちだった。

——あつ、あの日か。ゴブリンスレイヤーの屑とかいう暗黒騎士への苛立ちが治まらず、オリビアでべろべろに飲んだんだった。

「いやー、恥ずかしい所をお見せした。ダムローの新市街勢力を撤退させるための戦略は進んだんだけど、いくつか課題があつてさ」

「聞かせてくださいよ。おい、お前等、早く注文しろよ」

クズオカは後輩義勇兵に注意しながら、食い入るように顔をグンゾウに向けた。グンゾウは少し鬱陶しく思った。後輩義勇兵は急いでオリビアに料理の注文をする。

「重装備のゴ布林達40匹とホブゴ布林数匹を一遍に倒さなきゃいけないって制約があつてさ。12人だと少し厳しいな思つてるんだ」

グンゾウが正直に説明すると、クズオカは大袈裟に顔を顰めて、黙つて考えごとをしていた。

——大袈裟で生理的にむかつく顔だな。

しばらくして、クズオカが口を開く。

「40匹のゴ布林達を倒すと、いくら手に入るんですかね？」

グンゾウもそれは気になつていたところだった。補給物資に大量の貴金属等が含まれていれば、人を雇うのもわけないのだ。

「正直わからない。予想では貴金属で2ゴールド近くはあるんじゃないかと試算してる。後はゴブリンの食料とかなんで、人間には価値無いか。装備品は重いんで、ちよつと持つて行くのも難しそうだし。馬車は奪えるといいなと思うね」

それを聞くと、クズオカは返事もせず、またむかつく顔で考え事を始めた。

「あと、強そうなのが最低2匹いるんで、これが出てくると、こちらは主力級の戦士を2匹割かれちゃうから、それも考慮に入れないと……」

グンゾウも言葉にすると解決することの困難さに、段々と考える時間が増えてしまった。

「いやはや、俺に神が降りてきちゃいましたよ。いや、俺が神なのかもしれない。あ、神官の前で言うことではなかったですね」

クズオカが自信満々の顔でグンゾウを見た。

「俺の仲間達、いや舎弟達しゃていたちの中から最適ベストな人選をすれば、解決できますね。グンゾウさんは俺に感謝しますよ！」

クズオカは人差し指を立てて、グンゾウの顔に突きつけた。

「——くうー、むかつくー。感謝とか予告されたくねー。」

「そ、そうなんだ。じゃあ、先にお礼言っとくわ。ありがとう」

グンゾウが頭を下げようとすると、クズオカはそれを制した。

「待ってください。それは、成功サクセスしてからにしましょう。分け前は全員平等ってことでもいいですよ？ 俺が活きが良いのを20人は集めます。まあ、少し抑えないと、一声かけたなら20人以上集まっちゃうかもなー」



クズオカは自分語りに酔って、遠い目をした。グンゾウは正直うざいと思った。

「本当に？　すごいね。それはお願いしたい。じゃあ、決行日が決まったら、早めに連絡するわ。シエリーの酒場の掲示板でいいかな？」

「いや、オリビアに言付けてください。な、オリビア」

クズオカは再び人差し指を立てて、オリビアを指差す。特別な関係を匂わすような台詞と視線を送ったが、特に何もないだろうとグンゾウは思った。

オリビアは嫌な顔もせず「はい。大丈夫よ。お待たせー」と言いながら、後輩義勇兵達に料理を出した。

「じゃあ、まあ、今日は前祝いと言うことで、クズちゃんに一杯奢るよ」

グンゾウが杯を掲げると、クズオカは陰険に見える素の顔で笑顔を作った。

「あ、本当ですか？　じゃあ、オリビア、この店で一番高いお酒を！　あ、ダブルで、いやボトルで！」

「はい」

オリビアはいつものように明るい返事をした。グンゾウは顔色が変わらないように努力したが、脇の下から少し汗が出てきた。

——ほんと、こいつ天然で屑だな。まあ、一応、40匹ゴブちゃんの問題も解決したってことでいいかな？

翌日、グンゾウは朝の中庭でクズオカの話を全員に共有した。

「そのクソオカって奴は本当に信じているのかよ？」

うちの屑リョーの第一声。

「クズオカね。まあ、話半分だな」

グンゾウも正直な感想を言った。

「でも、話半分でも10人集まれば、うちの仲間と合わせて22人ですよ？ 我々より手練れの義勇兵を合わせて22人いれば、40匹のゴ布林位行けそうじゃないですか？」

カズヒコはいつでも前向きだった。グンゾウもカズヒコの意見を支持する。

「俺もそう思う。正直、技スキルもない頃だから同数程度のゴ布林達にも苦戦したけど、今の俺等なら同数くらいなら一瞬じゃないかと思ってる」

「あつたりめーよ、今は俺1人で10匹は一瞬だな。いや20匹だな」

自信過剰リョーの屑タが周りの仲間を白けさせる。

——じゃ、片方の補給部隊にはリョータを単独で突貫とつかんさせるか……。

「そうなるよ。後は紅鎧べによろいやホブゴ布林達への対応策ですね」

アキが低い、でも可愛い声で最後の課題に触れた。

アキはミディアムヘアがすっかりロングヘアになっていて、ますますグンゾウ好みになっていた。

——かわいい……。

「それにはちよつと、あたしに秘策があるんだよねー、ふっふふ」

ヨシノが楽しそうに笑っていた。皆の注目がヨシノに集まる。

「是非、教えてよ。ヨシノ」

カズヒコがヨシノに訊くと、ヨシノは悪戯いたずらっぽく微笑ほほえみながら、もったいつけた。

「どうしよっかなー、あはは。まあ、いつか。それはね……」

戦闘の天才ヨシノが思いついた秘策とは……。

## 23. ヨシノの秘策とリョータの秘密

見渡す限り緑の牧草地帯。吹く風は優しい。

風が草の頭を撫でていく。1メートルにも育ったカモガヤのようなイネ科の植物が、風に揺れる水面のようにゆっくり波打っていた。

そんな周囲の平穏な風景と異なり、グンゾウの目の前では驚愕の光景が繰り広げられていた。

「うそだろ……」

次々と戦士達が倒れていく。

ミッツは攻撃の暇いしまもなく、最初の一撃でやられた。

クザクも立て続けに上からの攻撃に曝さらされ、仰向けに倒れている。肩が動いているので、死んではない。デカいだけにタフだ。

「グンちゃん、脚を動かして！ やられるよ！」

「ヨシノ、すまない。もう俺の脚は動かない……」

グンゾウの脚は既に筋肉が焼けるように熱く、動かすことができなくなっている。腰も痛い。

「じゃあ、あたしが何とか食い止めるから、動かないで！」

ヨシノは頼もしい。

「陽炎！」  
ヘイズ

カズヒコがお得意の下段からの切り上げを繰り返そうとした。しかし、剣先が上がる前に上から剣を叩かれ、勢いを潰される。

「なっ！」

戸惑っている隙に、高い位置からの突きを立て続けに喰らい、カズヒコも倒される。

「俺がやるしかない！」

リョータが必死の覚悟を決めて両手剣を構えた。

「ふんぬうー！ 一本突き！」  
ファストラスト

リョータは両手剣を前に突きだすと、飛び出して全身の体重を踏み込んだ脚に乗せる。

「動きが大きすぎて、バレバレよ！」

ヨシノが警告を発する。

——まさかリョータまでやられてしまうのか？

リョータの両手剣はヨシノの槍に切っ先をずらされ、騎馬の先頭にいるグンゾウを

削<sup>かす</sup>つて、外れた。

「おつとと」

フアストラスト

一本突きが外れたことで体勢を崩したリョータの背中に、騎馬の上からヨシノの容赦ない突きが連続して落とされる。

「ぐわっ！　ぐわっ！　ぐわっ！　ぐわっ！　ぐわっ！」

蛙が踏みつぶされた時のような声を上げて、リョータが地面にべちよつと倒れた。間抜けだ。

残す前衛はアキのみ。

アキは盾を上斜めにしっかりと構えると、素早く足下に潜り込む。

「いいよ、アキちゃん！」

ヨシノが高角度に槍を突き出しても、アキの盾は力を分散し、威力を發揮しない。

アキは槍に接触する瞬間、盾の角度を調整し、さらに自身の体を柔らかく逆方向にずらすことで、力を分散している。一瞬間の間違<sup>アロツク</sup>いも許されない、全身を使った繊細な動きを繰り返している。真面目に盾受に打ち込んできた成果だ。

そして長剣でグンゾウの体を数回斬り付けると、素早く離れて距離を置いた。

「アキちゃんナイス！」

——わーい、アキに斬られたー！　気持ちいいー。……おおう。何か違う喜びを得て

しまった。いかん、いかん。カレンの影響だ。

ヨシノの秘策は、秘策と呼ぶほどのものではなかった。ホブゴブリンを想定して、グンゾウ、タイチ、シムラで作った騎馬の上にヨシノが乗って、巨大な敵との戦闘に慣れるというだけだった。

もちろん槍や剣は実物ではなく、木の棒に綿布を巻いたものだ。

そして、ここはオルタナを南門から出た牧草地帯だった。

既に3戦を終えたが、槍騎馬ヨシノは恐ろしく強い。馬（グンゾウ）の足が止まるまで、負けなしの戦いをしていた。

「アキちゃん、防御が上手くなったねー」

ヨシノが喜びの声を上げる。

「ちよつと頑張つてみた」

アキが微笑む。

——笑顔がかわいい。最近のアキは護衛や防御なら2匹相手でも安心して任せられるよな。誰よりも上手いんじゃないかな？

「だあーもー、防御がいくらできたって、攻撃力が無きや、敵は倒せねーんだよ」

ヨシノに叩き潰されていた蛙が、地面から負け惜しみを叫んだ。

「違うよ、リョータ」

ヨシノが力強く言う。

「攻撃力が弱いゴブちゃんなら攻撃力さえあれば防衛は鎧任せでもいいけど、ホブゴブリンみたいに攻撃力がある敵なら、如何に自分達は怪我を負わずに、敵に打撃を加えるが大事になるのよー。あたしたち、敵がいつまでもゴブちゃん前提の戦いをしているわけにはいかないでしょー？」

ヨシノが正論すぎて、リョータはぐうの音も出ない。

——ヨシノはすごいな。でも、そろそろ降りて欲しいな。

「じゃあ、今日はここまでかな。明日もやろー」

元気なヨシノの声に「うげえー」という男達の悲鳴が聞こえてきた。

「いててててて」

グンゾウはヨシノの鎧あぶみになっていて手が痛かった。もちろんタイチやシムラも痛がっている。

「ヨシノの騎乗は激しいな」

グンゾウは口にした後で、少し卑猥ひわいだったなど反省した。

「ところで、これが続けてホブゴブリンには慣れたとして、紅鎧べによろいはどうする?」

カズヒコが疑問を投げかける。



「紅鏡は……、あたしが倒す！」

ヨシノが手を挙げて、大声を出す。

「お、俺も手伝うよ、ヨシノ」

リョータ  
蛙が慌てて起き上がる。

「えー、リョータはすぐあたしの獲物を取っちゃうからなー」

ヨシノはほっぺを膨らましている。先程、男4人をこてんぱんに伸した人間らしからぬ可愛らしさだ。

「そんなことじゃねーよ。あんな危ない奴と独りで戦ったらヨシノが危ないだろ」

「んー、まあいいんだけど、リョータにはホブクザクンを倒して欲しいんだよなー」

「ホブ……クザクン？」

ほぼ死んでいたクザクがむくつと起き上がった。

「あ、クザクンより大きいから、ホブクザクンってことー」

ヨシノのそれを聞いて、そのままクザクは地面に突っ伏して死んだ。

「とりあえず、ホブゴブリンは瞬殺してヨシノを助けるから、無理はしないでくれ！」

「わかったよー。まあ、奥の手もあるし……、複数人でもいいっか」

ヨシノがぼそぼそと気になることを言ったのをグンゾウは聞き逃さなかった。

——奥の手？　　そういえば、ヨシノって雄叫び以外の技って何を覚えたんだろう？

サイリン鉞山では片刃シの曲刀ミを両手デ構ユえで戦ドつてたけど、あれは別に技スつて訳キじやなさそうだし。習ヒいに行キつたのは槍スの技キだよな……。

サイリン鉞山への4回の遠征は、橋脚を破壊するに十分な量の火薬と、それなりの資金をグンゾウ達にもたらした。そこで一旦、ダムロー旧市街攻略を休憩し、再び装備スと技キの充実スをすることを決めた。

ホブゴブリン訓練打ち上げ後、宿舎に戻ったグンゾウは、再び家族会議を開こうと思つた。しかし、酔よつ払はつて御眠おねむのヨシノは防具の強化と槍技の二段突ダブルスラストきの習得を宣言すると「アキちゃん、一緒に寝ようよ」と上機嫌にアキに抱きついた。

ヨシノがだらしなく抱きつくので、アキの服が引ひつ張はられて、胸元が大きく開く。思わずグンゾウの視線は釘付けにされた。

アキの鎖骨から胸元にかけては透けるように白く、うっすらと覆おわれた皮下脂肪の下に肋骨おうとつの凹凸が見えた。

「ヨシノちゃん、くすぐりたいよ。首に口付くちつけちゃ駄目え」

そんなアキの嬌声きやうせいと共に、眼福がんぷくはあつという間に女子部屋へ去ってしまった。

——う、羨うらやましすぎるぞ……。どつちが羨ましいのか良く分からないが、とにかく参加かしたい。

グンゾウは突然鼻血が出てきて、鼻を押さえた。癒<sup>キュ</sup>し手<sup>テ</sup>ですぐに治したが、少しだけ手に血が付いてしまった。

「俺……溜まってるのかな？ 頑張ってもあんまり報われないしな……」

グンゾウはじつと手を見る。

「グンゾウ、スケベ、キシシシシシシ」

「わおっ！」

突然傍に現れたハイドに、グンゾウは大袈裟に驚いてしまった。

「ハイド、今の見た？」

「キシシシシ、見た。でも、興味ない」

「思春期の男の子とは思えない冷静さだな。なんとも思わなかったのか？」

「衣装が萌えない、キシシ」

——衣装……、また着眼点が独特だな。

「ところで、ハイドは何を習得する予定なの？」

「秘密、シシシシ」

——相変わらず……。ハイドの秘密主義にも最近は腹が立たない。むしろ安心感が湧いてくるくらいだ。

「ハイド、お前は弁当とか隠して食べるタイプだろ？」

「ぎくうー！ シシシシ、な、何のことだ？ シシ、もう寝る」

ハイドは「シシシシ」と言いながら、そそくさと男子部屋に消えていった。

——どうせ、真夜中に起きて明け方まで魔法の練習するくせに。

グンゾウが中庭を見回すと、シムラが酔っ払って寝ていたので、毛布を掛けた。

グンゾウはまだ眠くないため、もう一杯飲みに出ようかと考えていると、リョータが沐浴部屋から出てきた。リョータは手拭いで髪の毛を拭きながら、歩いている。

「あ、リョータ、次の修練は巻撃ウインドの習得でどう？」

「んあ？ ああ、分かったよ。あんまり金も無いしな」

リョータにしては素直な返事。しかし、グンゾウの心に疑問が湧いてくる。

「金が無いの？ 俺は解呪デイスパルとか習いに行つたからあれだけど、みんなは結構貯まつてんじゃないの？」

「い、色々あるんだよ。色々」

リョータは少し動揺しているように見えた。

——怪しい……。ここは突っ込んでみるか。

「リョータくん。僕にその色々つてやつを教えてくださいませんか？」

「お、おお、教えねーよ」

リョータは益々動揺まよいますしている。

「じゃあ、本件はヨシノ先生と相談の上、調査させていただきます」

グンゾウが立ち上がって部屋に向かおうとすると、リョータが肩を掴んでくる。

「ここ、こらっ！ こら、オッサン！」

グンゾウはリョータに振り返ると、じろりと睨んだ。

「オッサン？」

「オジサマ？ いや、グンゾウ……さん？ 教える。教えるから……」

——これはしばらく握れそうな弱みだ……。キシシ。あ、いかん、ハイドが感染した。

「最近、そこそこ安定して稼げるから、すこーしだけ、すこーしだけ……店に通った」

リョータの癖に声が小さく、具体的な部分が全然聞こえなかった。

「んあ？ 何店？」

グンゾウが聞き返すと、リョータは苛立った顔をして、グンゾウに顔を寄せる。

「ば、馬鹿っ！ 声がでかいんだよ、オッサンは。風俗店だよ。風俗」

「なっ！」

——なんだってえー!!

「カズヒコが調べてくれたんだけど。まあ、なんだ、戦闘で命を懸けるストレスをだ……なんだ、少し発散しないと、色々と害があるだろ？ 別にオルタナじゃ、悪いこと

ではないらしいしな」

リョータは少し気まずそうに視線を逸らして小声で話した。

「そうか……」

——さすが情報通のカズヒコ。

「ヨ、ヨシノには言うんじゃないやねーぜ。まじで。言ったら殺す」

「アキならいいの?」

「馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>! 良い訳ねーだろ。筒抜けじゃねーか。カズヒコ以外、誰にも言っちゃ駄目だつっの。あとの奴等<sup>やつら</sup>とは行ったことねーし」

リョータが興奮して、顔が近い。グンゾウは少し後ろに下がると、溜息を吐いて、落ち着いた。

「そうか……。とはいえ、何で俺を誘ってくれないの?」

グンゾウが不機嫌な顔でリョータに聞くと、リョータは目を見開いて驚いた。そして、その後、につこりとした笑顔になった。

「あつ、そういうこと? いやー、だって、ほら、なんか神官だし? やっぱ駄目なんじゃないかなって」

「んな、訳<sup>わけ</sup>ないだろ。俺は神官の前にただの男だぜ」

「だ、だよな。悪い! これはまじで悪い! 場所とか教えるから。だけど、ヨシノには言うなよ」

——ま、そこが弱みですな……。

「はいはいっと。まあ、ここでは何なんで、外で一杯やりながら教えてくれよ」

北区の市場まで行くのは少し遠いため、グンゾウはリヨータを連れ立って、職人街方面の屋台へ向かった。

——この先か……。

リヨータはお金が無いとのことでグンゾウと一緒に来なかつた。

グンゾウがリヨータに教えてもらった地域は2箇所あつた。

1箇所は西町にある売春宿と呼ばれる宿が連なる地域。こちらは明らかに雰囲気がいかがわしく、グンゾウも丸腰で近付くのを躊躇う地域にあつた。

西町の相場は、道端に立っている女性（男性もいる）に道端で奉仕を受ける場合は2、3シルバー程度。その場合、奉仕も本当に一瞬ということ、リヨータも満足度は低いと言っていた。宿に雇われている女性（男性）の場合は、5シルバーから高くても10シルバー程度とのこと。地域柄そこまで高い料金ではないが、そこは品質と比例しているとのことだった。

今、グンゾウが目にしてるのは北区にある天空横丁の一角、今まであまり来たことのない場所だった。しかし、天空横丁自体は比較的慣れている。オリビアの店がある

し、何度も来たことがある。

横丁の賑やかな辺りにも、露出度の高い服装で客を引いている女性がいる店を何度も見かけていた。大抵は浮かれた、分かりやすい名前の店が多い。例えば「キャバレークラブ・ルンルンパラダイス」なんて感じた。グンゾウは聖職者としての倫理が最後の箍たがとなり、そのようなお店に入ることはなかった。

——そうだ。今日だって別にお店に入りに来たんじゃない。社会見学だ。そういうお店もオルタナにあるんだなってことを知りたいだけだ。知識欲だ。知識を得ることは良いことだ。

グンゾウは誰に何を言い聞かせているのか、一生懸命正当化をしながらここまできた。

そこは横丁の一角で、特に看板も出ていない店舗が数店ある場所だった。

リョータの話では、天空横丁のこの場所は女性の紹介のみで、その後花園通りの端の地域にある指定された宿に行く必要がある。いわゆる連れ込み宿だ。

北区の相場は5シルバーから20シルバー程度。しかし、場所柄、貴族や大金持ち向けのサービスもあり、最高級店では1回3ゴールドなんて破格のサービスもあるそう

だ。

——1回3ゴールドってどんな女性が出てくるんだろう？



グンゾウは職業的倫理観と欲望の葛藤かつとうで迷つてしまい、お店の扉を開けるでもなく、その付近を檻おりに捕らえられた動物のようにただうろろとしていただけであった。完全に怪しい人だ。

その時、突然看板の無い店舗の扉が開いて、光が漏れる。グンゾウが立ち止まつて見ていると、正装に近い黒い服を着た紳士が出てきた。マント姿で、帽子を深々と着用している。身長は180センチ以上あると思われた。紳士の服は光沢のある高級そうな生地で、所々光を反射している。

「店主、あれは素晴らしかった。3ゴールドも惜しくない。また出勤した時には連絡をくれ」

低いが良く通る、威厳に満ちた声で話した。

「へへっ！　ありがとうございます。もつたない話ですが、彼女は本業じゃないもんですから、かなりのレア出勤になっておりまして。また出勤したら必ずご連絡差し上げます」

店員らしき男が頭をペコペコと下げながら答えた。頭をペコペコと下げているが、この店員はかなりの偉丈夫いじょうぶで、強面こわもてだ。

——この紳士は相当偉い人間なのだろうか。

黒い服の紳士は、マントをひるがえ翻すと通り向かいに停まっていた御者付きの馬車に乗つ

て、居なくなつてしまつた。鍔<sup>つば</sup>付きの帽子を深々と被つていたので、グンゾウは紳士の顔は横顔を少ししか見ることができなかつた。

——あの紳士……どこかで見たことあるような？

入り口で黒服紳士の帰りを見送つた店員が店の中に戻ろうとして、グンゾウに気付く。

「あー、お客さんかい？」

グンゾウはどきまぎしながら答える。

「話聞いただけつてできるの？」

強面の店員は呆<sup>あき</sup>れた顔で溜息を吐<sup>つ</sup>く。

「なんだよ。いい歳<sup>とし</sup>して、貧乏の童貞<sup>とと</sup>なのか？」

「まあ、そんなもんで」

グンゾウが答えると、強面の店員は顎で店の中に促した。

真夜中過ぎのオルタナ。倫理と欲望に挟まれて、グリムガルに来てから最も悩む瞬間を迎えつつあるグンゾウであつた。

——どうする?! 俺!

## 24・前哨戦

——……1、……2、……3、……。

多くのゴ布林達がグンゾウ達の頭上を通過していく。

ガラガラと車輪が石畳を揺らす音とゴ布林達が行進する複数の足音。さらにチャリチャリと鎖帷子くさりかたびらの擦れる音が混じっている。

グンゾウ達の全員が息を潜めていた。

長く、そして苦しい。たった数十秒のはずなのに、気が遠くなるほど長い時間が流れているように感じる。

橋の幅は広いため、グンゾウ達がゴ布林達の視界には入ることはないと思われたが、いつ見つかるか分からない恐怖が迫ってくる。

「ギヤツギヤツギヤツ」

ゴブリンの声がして、心拍数が上がる。音が出そうな程、心臓の鼓動を感じる。

シヨートスタツフを握る手に、滑るほどの汗が出てきたので、グンゾウは神官衣の太股付近で汗を拭ぬぐった。

グンゾウは隣にいるアキの顔を見た。眉根を寄せて、真剣な表情をしている。いつも

の伏し目がちな目が凜々しく橋の裏側を見上げている。伸びた髪が白い顔にかかり、大人っぽい表情だ。

——白くてかわいい。

グンゾウは最近になって、アキは大人なんだと気付いた。下世話な話でなく、言葉のまま成人という意味だ。出会った当初は10代後半に見えたが、立ち居振る舞いや性格、お酒を飲み慣れている点等を総合的に考慮すると、化粧気のない幼い顔をしているだけで、リョータと同じ年くらいなのではないかと推測している。

お酒の飲み方に慣れていないヨシノやシムラの子どもつぼさと比べると、その差は歴然れきぜんだった。それにヨシノやシムラはここ数ヶ月で背が伸びている。明らかに成長期うかがを伺わせた。

——だったら……俺が好きになってもギリギリセーフ……かな？

「いや、それはアウト。キシシ」

ハイドが突然声を上げる。声を上げると言っても囁くささやくような小さな声だ。

皆がハイドに注目すると、ハイドはひきつった顔で指を差している。その指の先にはシムラ。

この張り詰めた緊張の中、シムラがくしやみをしそうな顔をしていた。リョータとヨシノが慌てて手でシムラの口を押さえる。

「へっくしっ！」

収まるわけもなく、小さくしゃみが出る。

11人の顔が全てシムラの方向を向く。全員橋の陰に隠れて上から見えないようにする。じつと耳を澄まして、上のゴ布林達に存在を気付かれていないか探る。

緊張が最高に高まった静寂の時間が過ぎる。

シムラが出したくしゃみの音は、川の流れや馬車の音にかき消され、ゴ布林達の耳までは届かなかったようだ。何事も起きず、ゴ布林達は大量の兵站と共に無事旧市街の方へ消えていった。

「よし、向こうの橋を補給隊が通るのは15分後だ。急いで行こう！」

カズヒコが静かに皆を誘導する。

全員、川に沿ってさらに奥の橋へ移動する。この所、雨が降っていないので川の水量は少ない。川の両端には乾いた砂利の河川敷ができていた。今、歩いている川はダムローの新市街と旧市街を分かつりユミエール川という。名前の由来はルミアリスからきたのではないかと予想された。しかし、そう呼ばれるようになったのは遠い過去であり、文書化された歴史は既に失われているため、詳細は不明だ。かつては旧市街の発展を支える大事な生活用水の水源であったらしい。今は新市街から流れる下水の流入先となっている。

ダムロー市街のリユミエール川は治水工事が進んでいて、河床は掘削くつきくされ、兩岸とも護岸されている。川幅は河川敷も含めて8メートル程だ。市街地とは高低差が3メートル程あるため、新市街側の岸に沿って歩けばゴブリン達には見つけにくい。

移動の途中で、リョータが思い出したようにシムラへ文句を言い始める。

「つめえ、このハゲ！ あの場面でくしやみとかするか？ 普通」

普通じゃないリョータに全員が同意している。シムラに全員の視線が集中する。

「とういまでーん。なんか昨日も中庭で寝てもうて」

シムラはポリポリと頭を搔かく。そして鼻を啜すすった。

——直前の体調管理は重要だな。

「通過時間は、全部で何秒だった？」

グンゾウが聞くと、チヨコは零れそうな大きな目をさらに大きく開いた。

「あー、えーつと、シムラがくしやみするまでで、54秒……その後は飛んじやった」

「てめ、この、ちんちくりんの目だけお化け、ちゃんと仕事しろ！」

リョータが口汚くちぎたなく罵ののったので、チヨコはほっぺを膨らましてそっぽを向いてしまった。

「別にいいんだよ。ただの再確認だから。馬車5両で54秒なら、大体全体で2分位で通過する感じだな。塔から監視していた時と変わらない。点火は車列の最後が橋の真

ん中に差し掛かった時だね。渡り始めから1分30秒つてところだ。ハイド、ノッコ把握した？」

グンゾウが魔法使いの2人に声をかけると、兩名とも頷いた。

ハイドは元々火炎弾ファイアボールを習得していたが、ノッコは直近の修練で火炎弾を習得した。ノッコが今まで覚えてきた氷結魔法カノンマジックと今回覚えた炎熱魔法アルヴマジックは統御法マスタリーが異なるため苦労したらしい。初心者の中から魔法使いギルドで教えてくれる4種のエレメンタル魔法の全てに手を出しているハイドは、特異な存在のようだ。

——良く考えたら、ハイドが戦闘中に氷結魔法カノンマジックを使っているのは見たことがないな。酒場で氷は出してくれたけど。ノッコに遠慮しているのかな？ まさかな。

グンゾウはハイドに視線をやると、ハイドは鼻をほじった指を上着で拭いているところだった。

——汚い……。

「よし、次の橋が見えてきた。ここは敵陣のど真ん中だから、静かに行動しよう」  
先頭で移動していたカズヒコが口に人差し指を当てて、振り向いた。

——確かに、ここは旧市街の一番奥だ。ゴブリン達に囲まれたらたまらない。ただでさえ、戦士達は金属鎧がガシャガシャと鳴って、隠密行動とは言いがたいからな。

次の橋の下で、もう1回同じ緊張を味わうことになる。グンゾウは溜まったストレス

を発散するように長い溜息を吐いた。

——次は誰もくしやみしませんように。

グンゾウ達は2週間に1回の兵站補給日に合わせて予行練習を実施した。

いかに監視砦からよく観察をしたと言えど、実地調査をせずに命懸けの計画を実行する程、グンゾウ達は大胆ではなかった。当初から予定していた通り、ダムロー旧市街への侵入路はダムロー市街を流れるリュミエール川に沿って南東からとした。

今日はあくまでも実地による下見のため、火薬は持ち込んでいない。虎の子の火薬を川に落として濡らしてしまつたら大事だ。おわごと

2基目の橋下での実地調査を無事に終え、グンゾウ達はリュミエール川を歩いてダムロー市街脱出のために移動していた。

「ホブゴブリン、思ったよりデカくね？ 170センチ位とか聞いてたけど、今日のは180センチ級がごろごろいたな」

一番体の大きいクザクがホブゴブリンの大きさに驚いていた。

「びびってんじやねーぞ、一番デカイクせに。2メートルの奴は俺がやるから、普通のはお前等で処理しろよ」

リョータが呵か呵かと笑いながら、クザクのお尻を叩いた。



「……全く、リョータとは話したくねーな」  
はなし

クザクがぼそつと呟いた。それを聞いてチヨコが大きく頷いている。

「ほら、クザクくんも、リョータもまだダムローの奥地なんだから、静かにー。早く脱出しよっ！」

——そうそう、油断してはいけませんよ。

ヨシノの正論に触発されて、全員黙って、早足で南東の出口へ向かっていった。

リュミエール川は大きく蛇行をしながら市街を流れている。そのため、堤防が曲がり、先が見えない場所もある。行き道では、そういう箇所ではシムラやチヨコを斥候にして進んでいたのだが、今日の監視作業は終わっているという気の緩みがあったのか、帰り道は全員気にもせずに進んでいた。

もうすぐ最初の橋という所で、突然、思いがけない光景がグンゾウ達の目の前に現れる。

「なんやつー！」

先頭を歩いていたシムラが思わず声を上げる。

目の前の川に荷馬車が落ちて、川を塞いでいる。馬が暴れたのか、橋から転げ落ちたようだ。

そして、その落ちた荷馬車を道まで持ち上げるために、2匹のホブゴブリンが上から

荷馬車を縄で引っ張り、4匹のホブゴブリンが川から荷馬車を持ち上げようとしていた。監督役のゴブリン達が3名程いる。

ゴブリン達もグンゾウ達に気付いき、既に逃げることはできない。何より、南東方向の出口が荷馬車で塞がれ、逃げ道がない。逃げるためには荷馬車を乗り越える必要がある。

——まずい、まずすぎる！ 逃げ道が無い。北側は新市街。早く片付けないと仲間を呼ばれたら危機だ。俺達は川にいる。市街地は高さが上なので、市街から複数匹に弓を使われたらなぶり殺しだ。

「戦闘隊形っ！」

カズヒコが鋭く声を出す。すぐに戦士達が前に出て、魔法使い達が後ろに下がる。

「ギャギャギャっ！」

甲冑に身を包んだ1匹のゴブリンが指示を出す。

岸に居た2匹のホブゴブリンが川に飛び込んできて、川にホブゴブリンが全部で6匹になった。さらに甲冑ゴブリンの両脇にいた2匹のゴブリン達も川に降りてきた。後ろの回り込まれる。

——後ろに回り込まれたのは何だが、岸から攻撃されるより、川に降りてきたもらった方がいい。あの甲冑ゴブリンは紅鎧とは戦術センスの格が違うようだ。

「丁度良い！ どちらにしる全員がホブゴブリンを倒せないようでは勝てない。やろうっ！」

カズヒコの掛け声で、戦士5人と聖騎士のアキが前に出る。

「あの一番アカイヤつは俺がやるぜ！」

「じゃあ、あたしは2匹いくー！」

リョータが勇ましく吠えると、ヨシノはそれを上回る勇ましさを見せた。

「おいおい、そりゃねーだろ、ヨシノ」

「えー、できるよー、たぶん、狭いから相手になるのは1匹ずつでしょー？」

「じゃ、じゃあ、俺も2匹いつてやるぜ！ ミッツ、アキ、お前らは、後ろのゴブリン2

匹を殺れ！ 速攻で戻ってこい」

「へへへ、へいつ！」

「はいつ！」

リョータの手先と化しているミッツと、優等生のアキが後ろに向かう。概ね目標が決まり、前衛が防衛戦を築く。狭い川の中での戦いなので、横は4人程が並ぶのが限界だ。それはホブゴブリンも同じで、6匹いても実質は4匹しか戦線には加われない。

——川のごブリン、ホブゴブリン達は前衛6人に任せるとして、上の甲冑ゴブリンは

……。

「シムラ、チョココ、岸に上がって、甲冑ゴブリンを素早く仕留めてきてくれ。仲間を呼ばせないように」

「りよー！」

「うっす！ グンゾウさん」

チョココは背負った鞆かばんからゴソゴソと鉤爪かぎづめの付いた投げ縄を出し、回し始める。シムラは弓を背負い直した。シムラの弓はサイリン鉱山で甲冑を着たコボルドに通じなかった。シムラはそれを気にしていたらしく、貯めたお金で合成コンボジツト・ボウ弓を新調していた。これで甲冑をも貫く必殺の一撃が放てる算段だ。

「魔法使いはホブゴブリン側に集中。タイチはミッツとアキを見ててくれ」

グンゾウが指示を出すと、ハイドとノツコはそれぞれ「キシシ、了解」、「わかりました」と杖を構えた。タイチはグンゾウが指示するより早くミッツとアキの後ろに張り付いている。

既にホブゴブリンとの戦端は開かれている。

リョータは一番大きい180センチメートル級のホブゴブリンAとグンゾウからみて右岸で対峙していた。ホブゴブリンAの武器は1メートル程の棍棒だ。筋肉隆々とはまさにこの生物のことで、あのリョータより一回り大きい肉体をしている。しかし、防具はほとんど着けておらず、裸同然だ。

「じゃあーらー！ おらあ、おらあ、おらおらおらおらおらあー！」

最近熱心に素振りをしていたリョータの剣筋は一段と速度を増していた。そして元から重い。

技術の低いホブゴブリンは打ち込まれる両手剣を棍棒で受けるのが精一杯で、全く攻勢に出ることができない。

——あれは時間の問題だな。強くなつたなー、リョータ。

カズヒコとクザクは170メートル級のホブゴブリンB、Cと戦っていた。慣れないせいか、動きがぎこちなく、少し危うい。初めての敵に面した時、カズヒコパーティ小隊は実力が発揮できない傾向がある。今日は良い訓練だったのかもしれない。ホブゴブリンB、Cも武器が棍棒なので頭部への直撃を避ければ致命傷にはならないだろう。

川の左岸で戦っているのはヨシノだ。

「ほいちよつと、はいつ、はいつと」

緊張感の無い声を出しながら、ヨシノが槍を振るっている。

ヨシノは宣言通りホブゴブリンD、E2匹を同時に相手に行っていた。こちらは170センチメートル級なので、ヨシノと変わらない背丈だが体格はまるで違う。こちらの方も両方とも武器は棍棒だ。

ヨシノはホブゴブリン達を子どものようにあしらっている。

足<sup>フット</sup>払い<sup>ワイプ</sup>で転ばしたり、多段突<sup>けんせい</sup>きで牽制したりしている。転んだホブゴブリンDが立ち上がる<sup>あがる</sup>うとした瞬間、槍の石突<sup>いしつ</sup>きで顔面を叩いて、吹っ飛ばした。

——あれは、遊んでるな……。

「ヨシノ！ 遊んでちゃ駄目だ。ここは早く脱出したい」

「あれ？ ばれてたー？ グンちゃんはよく見てるなー」

「小姑<sup>こじゆうと</sup>みてえだろ？ うるせーんだよ、オツサン。うわつと」

リョータが反対側から余計なことを言っているの、ホブゴブリンAから反撃を受けた。棍棒で叩かれ、両手剣で受ける。罅<sup>ばい</sup>迫<sup>い</sup>り合<sup>ド</sup>い状態だ。

ホブゴブリンAの力に押されて、リョータも本気で押し返している。

「戦いに集中するんだ、リョーター！」

「うるせえ……、だから……、小姑みてえだつて……言つてんだろー！」

リョータは罅<sup>ばい</sup>迫<sup>い</sup>り合<sup>ド</sup>い状態から両手剣を後ろに少し引く。相手の棍棒が滑つてリョータの方に振り下ろされる形になった。その瞬間、剣と棍棒が噛み合っている部分を起点に、両手剣の先を半時計周りに動かし、両手剣の先でホブゴブリンAの頭部に剣先をぶつける。

「ガウアーッ」

ホブゴブリンAの左前頭部がぱっくりと割け、血が飛び散る。

「ちやりーん。卷撃」  
ウインド

リョータがニヤリとしている。

——やつと覚えたか……。

リョータは狼狽うろたえて棍棒を振り回すホブゴ布林Aの血で見えない右側に回ると勢いよく両手剣を首筋に突き立てた。ホブゴ布林Aはしばらく暴れていたが、すぐにぐったりとした。

「ふふふ、俺様一番手柄だぜ！」

「ざんねーん！ もう、あたし一匹倒してるよー」

久々の俺様宣言に酔っているリョータにヨシノが水を差した。グンゾウが目を向けると、既にヨシノの足下にはホブゴ布林Eが横たわっている。ヨシノはさらにホブゴ布林Dを死の淵に追い込もうとしていた。

「何?! 俺様の一番手柄が……」

リョータが動揺していると、ホブゴ布林Aの後ろに居たホブゴ布林Fがリョータに襲いかかってくる。

「おわつと」

リョータが体を捻って躲すと、ホブゴ布林Fはそのまま戦線を抜けて後衛の方に襲いかかってくる。「やべえ！ 抜けちまった！」というリョータの間抜けな声が聞こえ

る。

「ウアウアー、ガー！」

ホブゴブリンFの狙いはグンゾウだ。ホブゴブリンはとろくさい雄叫びを上げながら、棍棒を上段に振り上げて突進してくる。

——どうしよ、あの棍棒をショートスタツフで受け止められるだろうか？

グンゾウが咎光ブレイムと護身法のどちらにしようか一瞬判断に迷っていると、グンゾウの右脇を白い影が通り過ぎていく。

「はっ！」

白い影は跳躍すると、ホブゴブリンFの顔を右から左に盾で払いのける。

——盾打?!  
バツンユ

ホブゴブリンFは、打撃の衝撃で脳を揺らされ、足が蹠踉よろめく。そこを白い影が長剣ロングソードで切り刻む。傷は浅いが、ホブゴブリンFは全裸に近いため、全身が傷だらけになる。兜かぶとから黒い髪の毛こぼが零れている。

「アキー！ どうして?」

「もう、ゴブリンは片付いていたので、こちらに来ました」

グンゾウが後ろを振り返ると、ゴブリン2匹は変わり果てた姿となつて、川の流れに浸かっていた。ミツツも既にカズヒコとクザクの助っ人に入っている。



「はやっ！　そうか、普通のゴブリンはもう敵じゃないのね。

グンゾウが皆の成長に感心していると、戦況はどんどん好転していった。

「ドシャ」という音がして、グンゾウの目の前にゴブリンが1体落ちてくる。

「今日の天気は晴れ時々ゴブリンか？」

ゴブリンの心臓には甲冑を突き破って、矢が2本突き刺さっていた。

「しゃー！　やっつてやっつたで！」

岸の上からシムラの声がする。ゴブリンが落ちてきたと思われる箇所を見上げると、チヨコがちよこつと顔を出して下を覗き込んでいた。

「ごめんなさい。ゴブリン落ちちゃいました……」

「了解。そのまま上で警戒してて、後続がきたら教えてね」

「はい」

「よし、これでリーダーも消えた。」

後は、調子に乗ったリョータ小隊パーティにホブゴブリン達は追い詰められ、殲滅されていくだけであった。

「おりゃあい！　改心の一撃！」

「なんだそりゃ……」

カズヒコ達に割り込んだリョータの憤怒レイジブの一撃ロイでホブゴブリンCの上半身が落ちる。

「ジェスキシシ・イーン・サルクキシシシ・フラム・ダルト、キシツ」

雷鳴が響いて、アキと対峙していたホブゴブリンFの体がビクツツと跳ねる。

同時に川に浸かっているグンゾウ達の足にぴりつとした刺激が走る。

「きやあつ！」

「一番傍にいた、アキが悲鳴を上げる。

「痛つ！<sup>いた</sup> ハイド、敵が川の中にいる時に電磁魔法ファルツマジックとか使うなよ」

「シシシシ、……正直すまん」

——あほハイド……。

ホブゴブリンFは良い（悪い？）ところに通電したのか、跳ねたまま硬直して後ろに倒れた。

「アキ、大丈夫か？」

グンゾウが声をかけると、アキは手を挙げて返事をした。

「だ、大丈夫です。ちよつと足が痺しびれて驚いただけで、行けます」

アキが戦闘への意欲を見せたが、丁度その時、ホブゴブリンBの首をヨシノが綺麗に跳ね上げた瞬間であった。

「しかし、ホブゴブリンってのは何も持なんってねーなー」

リョータがぶつくさ言いながら、ゴ布林達の死体から戦利品を漁<sup>あぎ</sup>っている。  
「ゴ布林から見たら、奴隷みたいだしね」

カズヒコが言う。

「リーダー角のゴ布林も装備くらいしか、貴重品は持っていないかも」

アキがゴ布林の装備を物色している。ここ数ヶ月でアキの装備は大分ゴ布林装備から卒業しつつあるが、まだゴ布林の装備には興味があるようだ。

「だけど、この荷馬車どうしますか？」

タイチがグンゾウに聞いてくる。

「2週間もあれば、その内に片付いてるんじゃないかな？ でも片付いてなかったら撤退時に邪魔になるから困るね。監視砦から監視する対象にしておこう」

「あと、縄梯子<sup>なわぼしこ</sup>は用意しておいた方がいいと思う。戦士はただの縄<sup>のぼ</sup>じゃ、上るの大変そうじゃない？」

チヨコが盗賊<sup>シーフ</sup>らしい提案をした。

「それもそうだね」

グンゾウは答えた。

——荷馬車の監視と縄梯子……と。

「今日は、骨折<sup>ほね</sup>り損<sup>そん</sup>の草臥<sup>くたび</sup>れ儲<sup>もう</sup>けだな……」

悲観主義者のクザクがぼそぼそと呟く。

「まあまあ、今日は実地調査が目的だからトラブルがあつた方が本番に役に立つんじゃないかな？」

グンゾウはクザクを慰めた。

その時、見張りのために橋の上に残っていたシムラが、川に目がけて叫ぶ。

「来たでっ！ 結構居る！」

「よし、今日の仕事は終わったから撤退しよう。シムラも川に降りておいで」

カズヒコの声で全員が撤退に向けて動き出す。

荷馬車を少し動かして通路を確保すると、速やかに全員でダムロー郊外へ撤退した。

——ここまで来れば大丈夫かな？

グンゾウ達がダムロー市街を抜けてしばらく経つ。

珍しくリョータがグンゾウの傍に寄ってきた。

「おい、オツサン」

「オツサン？ あ、ヨーシノちゃん？」

グンゾウはヨシノに話しかける素振りをする。

「あ、ここから、すいません、グンゾウさん。いや、それは何かおかしい、グンゾウ」

「んー……、まあ、いいか。どうした？」

リヨータは顔を近付けて、抑えた声で囁く。

「どうだった？ 良いやついた？」

リヨータはニヤツと口元を歪める。恐らくあのことについて聞いて聞いて聞いていると思われる。グンゾウは少し考えた後、リヨータの目を見て言った。

「ああ、それはそれは……」

リヨータの喉がごくりと動く。

「秘密！ キシキシシ」

グンゾウは歩く速度を速めて、リヨータを置き去りにした。リヨータはぼかんとした顔をしてから、叫んだ。

「てめえはハイドかつ！」

会話の前後を理解していないハイドは急に名前を呼ばれたので、「キシ？」つと言つて首を傾げた。

——次は本番だ！

グンゾウは苛立つリヨータを置き去りにして、ダムロー奪還に向けての計画を具体的に練り始めていた。

## 25. 今までの全てを

出発の朝は未明に起きなければならなかったため、前日は全員で夕飯を早めに摂り、早く就寝した。グンゾウは興奮のためなかなか寝付けないと思っただが、意外とすんなり眠ることができた。

空が白む前に目を覚ましたグンゾウは中庭に出て、いつものように習慣をこなす。未だ夜の闇は深い。ルミアリスへの祈りの時間を長く取った。

「遂に、この日が来たか……」

グンゾウは独り言を呟いた。

目を閉じて思い出す。

とても長い時間を感じた。逆にあつという間だったようにも感じる。

右も左も分からないところから始まり、手探りで進んだ。正しい方向が分からず、迷ったり、悩んだり、苦労を重ねた。

挫折も味わった。痛い思いもした。泣いたこともあった。

嬉しいこともある。

誰一人仲間を失うことが無かった。

もしかしたら他の義勇兵より順調だったのかもしれない。

そして、ここまで来られた。積み重ねた日々は、裏切ることなく成果を残した。

——でも、まだ終わってない。

グンゾウは全ての思いを胸に仕舞い、目を開けた。

「俺等は目標を完遂する。ダムロー旧市街を取り戻すんだ」

火を焚いて、体を温めていると一人、また一人と中庭に集まり始めた。今夜は流石のハイドも徹夜の日課を休んだようだ。

全員が揃うとカズヒコが話し始めた。

「みんな、準備は良いかな？」

皆それぞれに「おっけー」「ほーい」「つす」「当たり前、キシシ」「あれ？ 矢筒あら

へん」等と返事をした。カズヒコは頷いてから、ゆっくり話し始める。

「出発前に、何か言いたいことある人いる？」

カズヒコが全員を見渡す。特に誰も手を挙げない。グンゾウはヨシノに目が止まった。ヨシノは目を閉じて、ブツブツと何かを呟いていた。集中力を高めているのかもしれない。

「じゃあ、北門からは他の小隊の人も参加するから、ここで僕から」

カズヒコはここで一息吐く。

「……ダムロー初日は酷い目にあつたね。特に僕が」

カズヒコは自嘲気味に笑つた。タイチが「僕も」と遠慮がちに言つた。皆が微笑む。

「僕等は運良く、順調に正式な義勇兵になることができた」

「運も実力の内だぜ」

リョータが不敵な笑みを浮かべる。

「そうだね。でも、何だか何かを成し遂げた気持ちは正直持てていない。このままで良いかかつて思う時もある。……もう、ダムロー旧市街を取り戻すことに意味なんてないかもしれないけど、僕は見習い義勇兵からの卒業課題だと思つている。このグリムガルに来て、初めての卒業だ。……だから、行こう！ 僕等のけじめだ。今までの全てをぶつけよう！」

カズヒコが右手を空に突き挙げる。

「おぉー！」

宿舎の中庭に、皆の声の木霊こだました。

——冷静クールで温和に見えるけど、カズヒコは熱い想いを持つてる男なんだな。

グンゾウはカズヒコの演説で若い純粋な気持ちに感じ入つて、胸が熱くなつた。



「ああん？　9人しかいねーじゃねーか。軽く20人集まるんじゃねーのかよ？　話半分にも達してないな」

リョータがヤンキー丸出しで悪態をついている。ヨシノと最近すっかり手下のミツツが抑えに入つたので、その内収まると思われた。

クズオカとはオルタナ北門で待ち合わせをしていた。北門で待つていたグンゾウ達の元にクズオカが連れてきたのはクズオカ小隊6人パーティーを含めて9人しかいなかった。

「うっせえ！　俺の舎弟ブラザーにも都合があんだよ。急にお腹痛かったり、世話になつた知人が亡くなつたり、占いの結果が悪かつたりとか色々有つて15人程これなかつたんだよ。こちらら無給で手伝つてやってんだから、がたがた言つてんじゃねえ！　帰つたつていいんだぜ？　こいつつすか？　グンさんが言つてた生意気な新人義勇兵は？」

クズオカは最低な言い訳をして凄すこんだが、あまりに白々しい嘘過ぎてグンゾウ達は苦笑いしかできなかつた。

——予想通りだけど、少し下回つてきたな。事前にカズヒコ、リョータと綿密に打ち合わせしといて良かった。

「いやいや、うちの狂犬が言葉遣い悪くて申し訳ないね、クズちゃん。クズちゃんの小隊の精銳がいれば、百人力だよねー。ありがとう」

「ま、まあ、そつすね。うちの小隊がいればゴブリンなんて1000匹でも目じやないつ

すね」

クズオカは白々しい嘘に派手な誇張を上塗りした。

とはいえ、実際クズオカ小隊の面子はそれなりに熟練の雰囲気ベテランを醸し出しており、強そうに見えた。新人義勇兵が纏まとう素人臭さは漂ってこない。

小隊の構成は狩人のクズオカを始め、戦士、盗賊、魔法使い、神官、暗黒騎士だった。クズオカ小隊の盗賊が「マジかよ、死神戦士を呼んでるじゃねえか、大丈夫か？」と呟いた。

「死神戦士？」

グンゾウが聞くと、クズオカが答える。

「ああ、あいつのことですよ」

そう言うと、クズオカは少し離れたところにいるクズオカ小隊以外の3人を指差した。

「あの左端のでかい奴、タナカって言う戦士なんですけど、あいつは今まで組んだ小隊が3回も全滅をされていて、あいつだけが生き残って帰ってきているので、死神戦士とか全滅戦士って呼ばれているんです」

——縁起でもねえ……。

「まあ、実際結構な修羅場だったみたいで、むしろ良く生き残れたって感じなんですけど

ね。なんか話していると、とろい感じなんですけど、あいつは目がいいから、なかなか優秀です」

「残りの2人はこの前の?」

グンゾウが聞いた。

「そうです。まずは自己紹介やつちやいましょう」

クズオカはそう言うのと、全員に声をかけて簡単な自己紹介をすることとなった。

遠くで見て分かっていたが、近くで見ると死神戦士タナカはかなり背が高かった。リョータよりも背が高く、クザクよりは低いと思われた。意外と顔が小さいし、逆立った短髪のため、身長よりも背が高く見えた。体格は丁度リョータより細く、クザクよりも太いという感じで、均整の取れた体格であった。

松明に照らされたタナカの顔の印象は、とにかく眉毛だった。眉毛が濃く、しっかりとしている。何というか眉毛がぼうぼうだ。その下には涼やかな目と整った鼻や口があるのだが、眉毛が気になってそこまで目が行かない。

「……タナカ……です」

——暗い……。クザクより暗いかもしれない。

とりあえず恰好で戦士とわかるが名前以外は何も自分の紹介はしなかった。背負った分厚い両手剣が鈍く光輝いていた。

残りの2名はオリーブアでグンゾウが見かけたクズオカの後輩義勇兵で、シンジョーとオダと名乗った。職業はシンジョーが狩人、オダが盗賊だった。

シンジョーはがっしりとしていて体格が良く、売れるほど大量の矢と剣鉈とは思えない大ききの鉈を背負っていた。普通の人はあれを柳葉刀りようようとうと言う。そして坊主頭がシムラとお揃いだった。エラばった大きな顔をしている。

オダは対象的に痩せていてヒョロつとして、何だか妙にクネクネしていた。猫背で全身黒づくめなので盗賊っぽい。うねうねとした長髪を後ろで束ねていた。ギラギラとした目付きの悪い目の下に深い隈があった。

——戦士タナカは良いとして、盗賊と狩人って今回は微妙に使いづらいな……。クズオカも何とか集めたって感じだな。……。あ、クズオカか。

「カズヒコ……手筈てはず通りに」

グンゾウがカズヒコへ視線を遣ると、カズヒコは頷いた。

事前の打ち合わせ通り、カズヒコ小隊はクズオカ小隊と共に奥の橋を、そして、リョータ小隊は残りの3名と共に手前の橋を担当することとした。

「クズちゃんと一緒に行くカズヒコは、実力的には到底クズちゃん達に遠く及ばないけど、すごく素直で作戦もしっかり頭に入っている若者なので、かわいがってあげて。カズヒコ小隊は全員クズちゃんの話をいつも尊敬の眼差しで聞いているいい子ばかりなん

で」

グンゾウがクズオカにお願いをすると、クズオカは嬉しさを必死さに抑えつつもしか顰めた顔をして言った。

「やれやれ、仕方ないっすねー。俺はいつつも自然と尊敬リスベクトされちゃうんですよねー。まあ、そういう奴は五万といますけど、俺の舎弟志望者となれば、全力で助けてやるのが兄貴の役目って言うか。辛いつすね。この運命の星の下もとに産まれると。つまり、俺」

「いっくしー!」

クズオカの言葉をさえぎる様にシムラが小さくしゃみをした。クズオカは不愉快そうな顔をする。

「怒っちゃやーよ。あー、また風邪ひいてもうたー!」

シムラがずびずびと鼻をすす吸る。

「——ナイス! シムラ!」

「じゃあ、ここに居てもなんなので、ダムローに移動しよう」

年長者のグンゾウ指揮の下、一同は21人の大人数でダムロー旧市街に向けて移動を始めた。

東の空が枯れ葉色に染まり始めた頃には、ダムローの南東部に到着することができ

た。

火薬の設置作業には多少の時間が取られるため、急がなければならない。リュミエール川を慎重かつ迅速に移動する。

最初の橋が見えてくる。橋下の荷馬車とゴブリン達の死体は片付けられていた。

——ここでカズヒコ達とはお別れだ。

カズヒコ小隊とリョータ小隊の皆がそれぞれにお別れを言った。

「死ぬなよ！ カズヒコ」

リョータが握り拳を体の前に出す。

「ああ、リョータもな」

カズヒコが拳を合わせる。

——リョータもカズヒコにだけは素直だな。

「カズヒコ、やばくなったら『命大事に合流作戦』で」

グンゾウが念押しをすると、カズヒコは頷く。

「はい。でも、紅鎧級べによろいが出ない限り、なるべくこちらに迷惑をかけないようにしますよ」

そう言うときカズヒコはグンゾウに拳を差し出す。グンゾウも力強く拳を合わせると

「もちろん。信じてるよ」と答えた。

どちらの小隊が奥の橋を担当するかは議論があつた。奥の橋は向かうまでの距離が

長いため、それだけ敵に見つかる危険性が高い。また、退くことも難しい。

しかし、その奥の橋にあえて戦力の劣るカズヒコ小隊の配置を提案したのはグンゾウだった。

何故か。

奥の橋を輜重隊しちゆうたいが通過するのは手前の橋の15分後であるため、手前の橋に配置された小隊が戦い始める頃、奥の橋の小隊は待機するしか選択肢がない。つまり、手前の橋の小隊は援軍を期待できず自力で戦い切るしかない。

逆に奥の橋の小隊は、戦闘が終わった手前の橋の小隊の援軍が期待できる上に、退きながら戦えば手前の橋の仲間と合流ができる。それに退路は出来る限り確保しておくたい。

ならば、手前の橋に最高戦力であるリョータとヨシノを配置すべきだとグンゾウは考えた。他にも理由はあったが、とにかく手前の橋に戦力を置いておきたかった。

「タイチ、ミッツやられんなや。タイチは前例あるしな」

「言つたな。もう、大丈夫。シムラも後ろに気を付けて」

「へへへ、くしゃみすんなよ、へへ」

シムラとタイチ、ミッツがお互いに声を掛け合っている。

女の子達も固まって話し合っている。

「あたしがゴブちんとかすぐに片付けて、行くからねー」

と、ヨシノが頼もしい事を言つて、不安そうなチヨココやノツコを励ましていた。

「おら、行くぞ、新人ども！」

クズオカが先輩風をびゅうびゅう吹かしたので、カズヒコ小隊はリョータ小隊と別れて移動を始めた。

「よし、こつちも火薬の設置を始めよう。シムラ、例のものを出してくれ」

グンゾウが声を掛け、全員が動き出す。

待つ作業は退屈だ。何かしていると肉体的に疲れるけど、何もしていないと精神的に疲れる。グンゾウは暇にかまけてタナカの眉毛をよく観察していた。

——ふっさふさだな。

タナカはグンゾウの目の前に座っていた。今、グンゾウ達は最初の橋付近の旧市街側にいた。壊れた大きな建物の陰に隠れている。建物と言つても、屋根はなく、壁を残すのみだ。

火薬は既に橋の橋脚に設置済みだ。

点火係のハイドは護衛のアキと共に橋の下に隠れている。

——アキとふたりきりは、ちよつと羨ましい。一緒なのがハイドだから、ある意味で



安心。

リョータとヨシノは建物の反対側で待機をしている。ヨシノはしきりに体を伸ばしたりしている。リョータはぼろぼろの椅子に座って貧乏揺すりをしていた。暇なのと、落ち着かないんだろうと思われた。

シムラはシンジョー、オダのふたりと別の建物に隠れている。狩人には橋脚を爆破した直後に一斉掃射してもらわなければならない。オダは狩人達の護衛とした。

——それにしても眉毛すごいな。

「……な、何か？」

グンゾウの視線が気になったのから不意にタナカが話しかけてきた。

「あ、ごめん、暇でジロジロ見ちゃった」

「はあ……」

タナカは挙動不審に視線を泳がした後、下を向いてしまった。

——反応が薄いな。でかいのに人見知りか？

「タナカはクスオカと付き合い古いの？」

グンゾウが話しかけると、少し間があってからタナカはゆっくり返事をした。

「ええ、まあ」

「そうなんだ」

——無視されたかと思った。なかなか会話が円滑に続かないな。

「クズオカつて、結構顔広いんだね。俺は飲み屋で知り合っただけけど、どんな風に知り合っただの？」

しばらく沈黙の時間が流れる。

「あ、普段は……独りで動くことが多い……けど、兵団指令で知り合つて。……人手が必要な時とか、クズオカに呼ばれたり」

「へえ、兵団指令ね。俺は未経験だな」

「そ、そんなんですか？ 経験豊富そう……なのに。……俺は、兵団指令専門というか……」

そう言うと、タナカは黙り混んでしまった。

グンゾウにはタナカが何を言いたかったのか分かった。クズオカの噂話が本当なら、過去に小隊の仲間を3回も失えば、固定の小隊を組んで深い人間関係を構築するのは嫌になるだろう。

——今日はその死神能力を發揮されると困っちゃうけど……。  
グンゾウはタナカの過去の仲間を想い、ルミアリスへ祈りを捧げた。

橋の向こう側に砂塵が上がった。

——来た。

グンゾウはリョータとヨシノに視線を送る。二人共兜の面防バイザを下げ始めた。リョータがグンゾウに親指を上げて、準備完了の合図をする。

——若者にルミアリスの御加護があらんことを！ 二人共、絶対死ぬなよ！

グンゾウも親指を上げて合図を送る。

隣でタナカが兜の面防バイザを下げた。グンゾウは右拳を差し出す。タナカは一瞬戸惑ったが、直ぐに理解して拳を重ねた。

——あとは後列と共に橋が爆破されたら、混乱した中列を徹底的に叩くだけだ。ハイド、寝てないだろうな？

全員が緊張をしながら橋に注目していると、現れた輜重隊しちようたいの列が橋に差し掛かる。

——やはり、多い。

グンゾウの予想は当たっていた。2週間前にこの橋でホブゴ布林達が全滅させられているので、伏兵を予測して護衛の数を増やす指揮官がいてもおかしくないと思っていた。

護衛のゴ布林達の数はざっと見で倍近くいた。

——リョータ小隊をこちらに置いて正解だった。40匹かー。1人当たり4匹。俺、死んじやうかも。

護衛のゴ布林達が周りを警戒しながら渡り始める。全員の緊張が極限に達する。

「ギャギャギャー!」

隊列の後半が橋を渡り始めた時、警戒に当たっていたゴ布林が声を上げる。

アキとハイドが橋の下から飛び出し、姿を見せたのだろう。

次の瞬間、「ボンッ」という鈍い地響きがして、白い煙が山野を覆う霧のように川から上がってきた。橋の周囲が真っ白になり、よく見えなくなる。

火薬の燃えた刺激臭が鼻を突く。

ゴ布林達の隊列が止まる。全員が動揺して、周りをキョロキョロと見回す。

「う、やべえ」

グンゾウは少しだけ焦った。火薬が足りなかったのか、橋が一部しか崩落していない。橋脚は全部で6本あり、その内真ん中の2本を破壊する予定だったが、辛うじて1本の柱が残っている。もう一押しという感じだった。

——想定内だけどね。

「ゴバン」と2回目の衝撃音がして橋全体がガラガラと音を立てて崩れていった。瓦礫がれきがゴ布林達の中後列を巻き込んで橋下の川に落ちる。4分の1程のゴ布林達が数台の荷馬車と共に川へ消えていく。最後列のゴ布林達数匹は運良く川向こうに取り残された形になった。

グンゾウ達は橋が壊れなかった場合はハイドが魔法の光弾で残った橋脚を破壊することを決めていた。

「一斉掃射始めー!!」

グンゾウは大声で叫ぶ。

煙と砂埃のお陰で大まかな場所しかばれないだろう。目の前に延びきった輜重隊の前列、中列に矢が飛んでいく。

——おお、思ったより多いな。

所詮2名しかいない狩人が放つ矢なので、狙い撃ち的な感じだと思っていたグンゾウの予想が良い方に裏切られる。

シンジヨーが放っていると思われる矢が雨の様に降り注ぐ。狩人には連射という技がある。シムラが言っていた。命中率はともかく、集団戦闘ではかなり効果的だ。

かなりの数のゴ布林達が矢で負傷をして、何匹かのゴ布林達は矢が急所に刺さって倒れている。

「ギャツギャツ！」

「ギャー、ギャー、ギャー！」

「ギギギッ！」

「アウオアー」

ゴブリン達が混乱を収めようと、声を掛け合っている。

——そうだろう、そうだろう。混乱するよな。まさか橋が爆破されるなんて考えないよ、普通。おまけに矢の雨は嫌すぎる。

「ギャギャギャ。ギャツギャーギャギャー！」

甲冑をしつかり纏ったリーダー格のゴブリンが荷馬車の上に立ち、声をかける。紅鎧べによろいではない。

慌てるゴブリン達やホゴブリン達が荷馬車の陰に隠れて、矢を避け始めた。爆破の煙もだんだん収まってくる。

——よし、第1局面フェーズ終了。第2局面フェーズは少し命懸けだ。

「頼んだよ。タナカ」

グンゾウが声を掛けると、タナカは黙って頷いた。

「撃ち方止めー!!」

グンゾウが叫ぶと、矢の量が減っていく。

矢が完全に飛んで来ないのを確認してから、グンゾウは建物の陰から飛び出すと、ゴブリン達に姿を晒さらす。隣にはタナカだ。

「ばーか！ 来いってんだ、アホゴブリン！ ギャツギユツギョツ！ ギョギョ

ギョツ！」

グンゾウは大人気おとなげない悪口を言っ、お尻を手で叩くと、走ってゴ布林達から川沿いに逃げた。本気の逃げではない。ここはゴ布林達に追ってきてもらわなければいけない。

「ギャギャー！」

荷馬車の上にいた、ゴ布林・リーダーが槍を振るって、グンゾウの追跡を指揮する。20匹程のゴ布林達と数匹のホブゴ布林が荷馬車の陰から出てきて、少しずつ追ってくる。

——単純だなアイツ。紅鎧べによろいはカズヒコ側かもしれない。だとするとここは早く片付けないとまずいな。

グンゾウはゴ布林達から50メートル程距離を取って歩みを止める。ゴ布林達の本気まこころの速度なら10秒以内に追い付く距離だ。グンゾウが振り返ると、ゴ布林達は数えきれない程多数、そして、ホブゴ布林は5匹追ってきているのが確認できた。

——痺しびれるー。こえー。タナカちゃん、よろしく護まもってよねー。

「第2射！ つてー!!」

グンゾウが再び大声で叫ぶ。

先程と同様にシンジョーとシムラが放つ矢が横からゴ布林達を襲う。

「ギャーギャーギャー!」

「ギヤツギヤツ!」

「ギヤツギャーギヤツ!」

グンゾウに釣られたゴ布林達があたしてもシンジョーとシムラの弓の犠牲になつた。

シムラは隠れていた2階建ての建物の2階の窓、正確には窓だった穴から、身を乗り出して矢を放っている。シムラは狙いを澄まし、一撃必殺の気持ちで撃っている。

「シムラ! 目標を狙い撃つでつ!」

シムラがどこかで聞いたような、少し違うような雄叫びを上げた。

シムラの隣で、シンジョーが黙ったまま、歯を剥き出しにした笑みを顔に張り付かせ、矢を繰り出している。ものすごい速さだ。

——シンジョー顔がでかいし、笑顔だし、声出でないし、なんか怖い……。

ゴ布林達が完全に混乱をして、浮き足立っている。無傷のゴ布林は少ない。

「撃ち方止めつ——! 突撃——!!」

——号令、気持ちいい——! 第3局面突入だ。一気に殲滅するぜ!

グンゾウの隣にいたタナカが小走りでゴ布林の群れに向かつていく。

それよりも早く、群れの後ろからゴ布林達の悲鳴が上がる。リョータとヨシノだ。



「おーらー！ おらおらおらおらおらおらおらおらあー！ 一本突きー！！」  
ファストスラスト  
 「やーっ！ とうっ！ ほいちよつと！ やっ！ 二段突きー！」  
ダブルスラスト

リョータのオラオラ丸出しの掛け声と、ヨシノの緊張感が薄い声が聞こえてくる。

戦闘が始まってから大分待たされたので、欲求不満だったリョータは、大振りで両手剣を振っていた。斬られたゴブリンの破片が空に吹き飛ぶ。

同じく、うずうずしていたヨシノも次々とゴブリンを槍に懸けていった。

——こりや、もう終わつたな。カズヒコを助けに行かないと。

グンゾウは少し気が抜けて、ショートスタツフを持つ手から力が抜けた。

しかし、如何なる時も油断をすると良いことはない。況んや戦闘中に油断をするなどあり得ないことだ。

グンゾウは身を持って知ることとなる。

「ウアーッ！」

少し間が抜けた獣けだものの声。

「へ？」

グンゾウが気が付いた時には声の主はすぐ傍そばにいた。

170センチメートル級のホブゴブリンが1匹、棍棒を振りかざして襲いかかってくる。

——やばっ！

すっかりと防御姿勢が取れないまま、棍棒の一撃を両腕で受け止める。受け止めたのではなく、ただ殴られただけだ。

左腕の前腕に嫌な感覚を覚えたまま、グンゾウは後ろに吹き飛ばされた。手に持っていたショートスタッフは地面に落ちて転がる。

——痛い、これは折れてる……。ホブゴブリンはどこから来たのか？

グンゾウが混乱した頭で周囲を見渡すと、血と埃に塗れた3匹のゴブリンが川から上がってきていた。

橋の瓦礫と一緒に落とされたゴブリン達の生き残りが岸を上つてきたのだ。

「グンゾウさんっ！」

シムラが叫ぶ。

傷付いた手負いのホブゴブリンは、怒りに任せてグンゾウに止めを刺そうと近づいてくる。

グンゾウは焦りと左前腕の痛みで、次の行動が取れない。

——咎光を……。

「ウガッ、ウガッ、ウアーッ！」

グンゾウが光魔法を唱えるよりも早くホブゴブリンの棍棒は振り上げられる。

——間に合わない！  
グンゾウは目を瞑つぶってしまった。

まぶた  
瞼まぶたの向こうが白く輝く。耳を劈つんざく轟音ごうおん。

頭を潰されて死ぬと、こんな音が脳内に響くのだろうかとグンゾウは思っていた。思ったより痛くはない。

そもそも死んでしまえば痛みなんて感じる訳がない。しかし、折れてぶらぶらしている左前腕は死ぬ程痛い。

——あれ？ 生きてる？

目の前に直立したホブゴブリンは棍棒を振り上げたままの姿勢で固まっていた。そのままゆつくりと前に倒れ始める。

グンゾウは体を回転させて横に逃げると、隣にホブゴブリンが倒れてきた。グンゾウを襲ったホブゴブリンは白目を剥き、活動を停止している。

「キツシツシツシツシ、他人ひとは僕を雷帝らいていと呼ぶ」

ホブゴブリンの背後に黄色の宝石がはまった杖を持ったハイドが立っていた。

——誰もお前のことなんて、知らないし、雷帝らいていとも呼ばねー！

グンゾウは叫びたい気持ちを抑えた。それよりも感謝の気持ちが上回っていたと言

える。

「助かったよ、ハイド！　すげー嬉しい」

グンゾウは地面に寝たまま御礼を言った。

「シシシ。大丈夫かと思つて、ちよつと見てたら、やばそうだったから助けた、キシシシ。雷帝らいいていより雷神らいじんの方が格好いいかな？　フシツフシツフシツ」

啞然あぜん。

油断をしていたのは自分の過失だと反省し、グンゾウはハイドに怒りをぶつけるのを諦めた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒キュし手ア」

グンゾウは黙つて折れた左腕と傷ついた右腕を直した。

気持ちを入れ替えて周囲を観察すると、川から上がってきた3匹のゴ布林達はアキが一人で抑えていた。ゴ布林達は血だらけで、武器も持たず、手足が折れていたりしているの、脅威ではないと思われた。

リョータとヨシノは目標をゴ布林からホブゴ布林に変えており、それぞれ2匹ずつを相手に奮戦している。

タナカは余つたホブゴ布林1匹とさらにゴ布林3匹を相手にしている。

タナカの動きは特徴的だ。

ホブゴブリンやゴブリンに攻撃されても、殆ど受け太刀をしない。体を捻ったり、頭を少し動かすだけで、ギリギリのところまで相手の攻撃を躲している。両手剣も下段に構えていて、なんだか攻撃する気が感じられない。

しかし、突然両手剣を振るうとゴブリンが2匹、横真一文字に裂けた。

——タナカは滅茶苦茶、目が良いんだな。あの攻撃、全部見えてるんだ。

タナカは強い。

リヨータのように大振りして体力を消費することを避け、体力を温存しつつ、最小限の労力で最大限の戦果を得る機会を狙っている。

その他のゴブリン達はシンジヨとオダが相手にしていた。

シンジヨは長剣程の長さがある柳葉刀を振り回してゴブリン達を斬り倒している。戦士と見紛う攻撃力を誇っている。さつきは空中前転をしながら、ゴブリンを縦に切り裂いた。相変わらず、歯を剥き出しにした笑みを浮かべている。

オダは奇妙な動きをしていた。

ゴブリンと向き合うと、攻撃するでもなく、横移動を繰り返す。釣られたゴブリンはシンジヨの前まで連れて行かれた。すると、オダは急に存在が消えたように姿を消し、その場を離れる。ゴブリンはシンジヨと戦い始める。

次に新しいゴブリンを挑発すると、それをタナカの目の前まで連れて行くと同じよう

にして、タナカにゴブリンを押し付けた。

オダは自分自身でゴブリンと戦わず、後ろに抜けそうになるゴブリンを挑発しては他の前衛の前に引つ張っていくという作業を繰り返していた。

——……変な奴。盗賊ってあれが正しい動きなのか？ チョコしか見たことないから合ってるか分からないや。

「グンゾウさん、大丈夫ですか？」

低く落ち着いた、しかし、可愛いらしい声。

ゴブリンを倒し終えたアキが、いつの間にかグンゾウの傍にいた。兜の面防フェイスを上げて、覗き込むようにグンゾウを見上げていた。伏し目がちないつもの目が大きく見開いている。

——かわいい。白い肌に桜色の唇が可憐だ。

グンゾウの興奮が過去最大に高まる。

「アキーっ！ 心配してくれてありがとう。すごく嬉しいよ。逆に大丈夫だった？ 心配したよ。何年も会ってないみたいにな懐かしいよ」

「ははは。大袈裟おおげさですね。でも、私も橋の下で緊張し続けていたので、会いたかったです。今からは護衛しますね」

アキが目潤ませ、笑顔になる。グンゾウは心臓が直接手で掴まれた位、ドキリとし

た。

——え？ 何？ 「会いたかつた」？ 何？ この感じ。嬉しい。嬉しすぎる。どうしたの？ え？ これ、愛？ 恋？ それとも愛？ どうする？ 俺。ライ●カード？ もしかして最終回？ 俺、死ぬの？ よくわかんないけど、1回お風呂に入ってから、宿舎で寝た方がいいかな？ セーブとかできんの？ 再生機能リプレイとかないの？

グンゾウは混乱しながら、天にも昇る幸福感を味わっていた。

「キシシ、それは勘違い」

——ハイドの嫌みなんて聞こえないくらい幸せ。

グンゾウが天にも昇る幸福感を味わっている頃、ゴ布林達は地獄に落ちる苦しみを味わっていた。

リョータとヨシノの相手は残すところホゴ布林1匹ずつとなっている。タナカとシンジヨの活躍も目覚ましく、ゴ布林の数は既に5匹に満たない。

「ギャツ！」

という悲鳴を上げて、ゴ布林・リーダーの額がシムラの矢で貫かれた。

「だっふんだー！ やってやったでー！」

シムラが嬉しさの余り、2階から飛び降りた。

リョータ小隊の勝利は目前に迫っていた。

「俺はお宝でも確認するかな？」

オダは盗賊らしい身軽な動きで、輻重隊しちようが残っていた荷馬車に飛び乗った。

オダの目に、荷馬車の幌ぼろの向こうでキラリと光るものが見えた。

「何が入ってるのかなー？」

オダが荷馬車に掛かった幌を取ろうと手を伸ばす。すると、幌を突き破り、何か飛び出してくる。それはオダの急所を狙う。咄嗟とつさの勘かんで体を捻ひねり、急所は躲したが、オダの左肩に何か突き刺さった。

「ぎやあああああああああああ！」

オダの悲痛な叫び声がダムローに響き渡る。全員の視線が荷馬車の方向に向く。幸福の絶頂にいたグンゾウも強制的に意識を現実に戻された。

荷馬車の上、オダが槍の穂先で持ち上げられている。

その槍を持っている主は紅くれないの甲冑かむろに身を包み、不敵な笑みを湛たえている。

ゆっくり槍を動かし、オダが地面に投げ捨てられる。

——こつちに居たか……。

「紅べにまゆい鎧よろいつ!!!」



## 26. ルミアリスの光と共に

「ぎやあああああああああああ！」

オダの悲痛な叫び声がダムローに響き渡る。全員の視線が荷馬車の方向に向く。荷馬車の上では、オダが槍の穂先で持ち上げられている。

その槍を持っている主は紅の甲冑くれないに身を包み、不敵な笑みを湛たえている。

ゆっくり槍を動かし、オダが地面に投げ捨てられる。力のないオダの体が地面に叩きつけられた。

——こつちに居たか……。

「紅鎧べによろいつ!!!」

——安らかに眠れ、オダ！ 敵かたきは取るぞ！

グンゾウは地面に叩き付けられたオダを見ると、そこには血だまりがあるだけで、オダの姿は無かった。

「あれ？ オダの死体がない」

「はー、はー、勝手に殺されるのは困る……」

「わおっ!」「きゃっ!」「キシッ」

いつの間にか死んでいたはずのオダがグンゾウの傍にいた。アキもハイドもびっくりにして声を上げる。

「一体、どうやって?」

「死んだふり大作戦だ。はー、はー、地面に捨てられた瞬間、ステルス隠形を使って、……敵の意識外から逃げてきた」

「ほほーう」

——盗賊にはそんなスキル技もあるのか。

グンゾウが感心していると、オダが左肩を右手で押さえつつ、地面にしやがみ込んだ。「……どうでもいいが、出血多量であと数分しか持ちそうにない。貧血で立ってるのもキツイので回復してくれないか? できれば、そちらのお嬢さんの癒し手キュアの方が気持ちよさそうだ」

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒し手キュア」

グンゾウは間髪入れずにオダを回復した。

「ああ、穢けがれなき乙女おとめじゃなくて、汚れきったおっさんの癒し手キュアかー。付加価値が低い。ありえない!」

——死ねば良かったのに。こいつ。

「ギヤツギヤツギヤー!!」

紅鎧ベによろいの咆哮ほうごうが響く。

すると他の荷馬車から合計十数匹のゴブリン達がゆつくりと姿を現す。増援のゴブリン達は全て甲冑を着込み、剣と盾の重装備だった。紅鎧ベによろいの子飼いの精兵に見えた。紅鎧ベによろいを守るように、盾を構え、横陣おちしんを組んで集結する。

そして、いつの間にか紅鎧ベによろいの背後には2メートル級のホブゴブリンエクセルXL（ホブゴブリン）と、2匹の甲冑ゴブリン達が立っていた。

1匹は白い甲冑で、槍を持っている。もう1匹は黒い甲冑で、剣と盾を装備していた。2匹ともゴブリンとは思えぬ達人たっしんの雰囲気かちを醸し出している。

その場にいた人間達は得も言われぬ不気味な空気に包まれて、身すくが竦む。

「おらあつー!」

重たい物体同士がぶつかる音がする。リョータが最後のホブゴブリンを斬り倒した音だ。

リョータは両手剣をホブゴブリンの死体に突き刺し、空いた左手で紅鎧ベによろいへ中指を立てる。

「はあはあ、クソ紅ベにゴブ野郎! 格好つけてんじゃねえ! 橋は壊れた! 40匹も仲

間は死んだ！ はあ、お前に残されたのは子飼いのゴ布林達だけだ。はあ、ここでお前も沈むんだよっ！」

紅鎧ベによろいはニタニタと不敵な笑みを顔に貼り付かせている。

そしてリョータは振り返ると仲間に向けて檄げきを飛ばす。

「びびってんじゃねえぞ、お前めえら。はあ、俺等は勝つんだ、今日も、そして、これからも！ 2度と負けねえんだ！ はあはあ」

連戦のせいかりョータの息は乱れていた。一体、何匹のゴ布林達を斬つたのだろう。リョータの両手ツツアイヘンダー剣は血ちあぶら脂まみに塗れ、刃はこぼ毀れだらけだった。

しかし、リョータの気合いが一気にグンゾウ達の恐怖心を消し去る。

「俺様があのデカブツをぶっ倒す！ ヨシノは紅ベに……」

「あたし、あの白いのから行くー」

リョータの声を遮って、ヨシノが宣言する。けして大きくはないリョータの目が真ん丸になる。

「え？ ヨシノ、だって、紅鎧ベによろいをずっと倒すって……」

「リョータは女心が分かって無いな。あたしは、ショートケーキの苺は最後に食べるタイプなんだって。最初は生クリームの白でしょー？」

——ヨシノは何でも食べ物に例えるな。しかし、今回は全く意味が分からない。

「お、お、おう。じゃあ、まあ、白から行ってくれ。オツサン！」  
 「オツサンじゃねえ！」

グンゾウが睨んで言い返すと、リョータはグンゾウを見詰め返す。

いつにない穏やかな目だった。グンゾウはリョータの目に信頼や尊敬を感じた。

「命預ける！ 指揮……頼んだぜ！」

リョータが親指を上げる。グンゾウは一瞬涙腺が弛んだ。

「……わかった。任せろ！ クソガキ！」

グンゾウは周囲の状況を観察して、一気に作戦を考える。既にこのような状態になる可能性も頭の片隅にはあった。計画の修正は少した。

「まずは、大量の雑魚ゴブを減らす。ここで解放、ダブルオー00作戦だ！ ど真ん中を突破しよ

う。その後、リョータはホブゴブリンXLエクセル、タナカは紅鎧を頼む！べによろい ヨシノは白甲冑、ア

キは黒甲冑！ 残ったゴブリン達はシンジヨー、オダ、シムラで片付ける！ 動け！」

グンゾウは指示を出す。

リョータ、ヨシノ、アキ、シムラは無言で頷くと前を向いた。

シンジヨー、オダは分からないながら、4人の後ろに付く。

ダブルオー「00作戦？」

タナカが首を傾げる。

「大丈夫、耳を塞いで突っ込め！ タナカは強いから先頭ね」

グンゾウはタナカの背中を叩いた。

「そつすか。人使い荒いね、この小隊」

タナカはにつこりを笑みを浮かべると、兜のバイザーを下げた。

——もう1つ、確認しなければ。

「ハイドっ！」

「雷ライトニング電5、火炎弾1、シシシシ」

グンゾウは感心した。当意即妙とはまさにこのこと。

グンゾウが聞きたいことを予見して、ハイドは答えた。

一撃で死を招くような強敵が現れた時、ハイドはその敵の攻撃範囲には絶対入らない。  
い。

魔法使いとして模範的な行動だが、それは敵との距離が開くことになる。

つまり、影鳴りのような速度の遅い支援魔法は敵に当たり辛い。正確には紅鎧級ベによろいの

敵には遅い魔法など当たらない。シムラの放つ矢でも躲かわされる。

つまり、唯一高速で攻撃ができる魔法と言え、雷ライトニング電しかないのだ。

「温存っ！」

「了解だぜえ、キシキシキシキシ」

何がツボに嵌はまったのか、ハイドは大笑いしていた。

——相変わらず変な奴。

ダブルオー

00作戦の発動。ダブルオー作戦とはグンゾウが最初に思いついた戦術だった。

説明するのも恥ずかしい内容だった。しかし、大量のゴブリンや労働者ワーカコボルドを一掃する時には非常に使える。

先頭を走らされているタナカと横陣のまま前進してきたゴブリン達の先頭が接触し  
そうになる。

「るうおおおおおおおおおおおお!!」

ヨシノが先に雄叫びの技を使う。

ウオークライ スキル

ヨシノはいつの間にか槍を片刃の曲刀の両手構えに持ち替えていた。

ゴブリン達は面食らって動きが止まる。

タナカの動きは速い。跳躍からの横薙ぎで先頭の3匹を弾き飛ばす。遅れてリヨータも下段からの大振りです。2匹弾き飛ばす。アキも盾を突き出して飛び込んで行く。先端の陣が崩れるとタナカやリヨータよりも非力なゴブリン達は簡単に瓦解する。

第2弾。

「うおおおういいえええええええええええい!!」

リヨータが雄叫びウオークライ スキルの技を使う。大きな音だ。

周囲にいたゴ布林達ゴブリンが耳を塞ぐ。

その隙を逃すわけのないヨシノが混戦の中に飛び込み、素早く、そして正確にゴブリン達の首や腕を切り落として行く。

阿鼻叫喚あびきょうかんだ。花の甘い香りがする女戦士が通りすぎた後には、ゴ布林達の首や腕が無い。

タナカもゴ布林達の首や細い手足を狙い、無駄なく無力化していく。おまけに少し機転を利かせた。

「000作戦にする！」  
トリブルオー

タナカは大きく息を吸うと、普段の暗い見た目からは想像できない位の雄叫びウオークライを発する。

「おおおおおおおおおおおおお!!」  
ダブルオー

——作戦名変えるなよな。00つてのが、なんとなく格好よかったのに。  
ダブルオー

小飼いゴ布林達は動きが止まり、端から斬られていく。ついでにオダも耳を塞いで動きが止まっていた。

——あいつ、本当に役に立ってねえ。  
ダブルオー

00作戦は安直な内容とは裏腹に戦果を上げつつあった。



しかし、流石にそこそこ数がいるため、ゴブリンが1匹戦列を抜け出て、グンゾウとハイドの方へ向かってくる。150センチ程の小さなゴブリンだ。装備は甲冑に剣盾と万全だった。

「キシシ、どうする?」

ハイドがグンゾウの後ろから声をかけてくる。

「今は強敵に備えて、魔法を温存したい。1匹くらいなんとかなるさ」

グンゾウはショートスタッフを構えた。

——白兵戦なんて、やりたくないけど、俺もカレンに鍛えられてきたんだ。正直ゴブリンなんかには負ける気しないぜ。

「戦況を見て、やばかったら支援を。指揮を任せた」

「了解、キシシ」

——倒す必要はない。

グンゾウはそう決めて、防御に徹することにした。ゴブリンは精兵らしく、機敏で良く訓練された動きをしている。

——体格も俺が勝ってる。得物も俺の方が長い。しかも防御に集中すればいい。

グンゾウは慣れない白兵戦で気持ちいが乱れるのを抑えるために、理詰めで考えた。

『愚か者め。護身術の基本は明鏡止水だ。めいきょうしすい 考えるのではなく、心を澄みきった状態にするのだ』

グンゾウの耳にカレンの声が聞こえてきた。

——ああ、あれは縄で縛られた状態で、蠟燭を垂らされながら言われたな。気持ちよ……いや、熱かったなあ。

カレンの存在を傍に感じて、不思議と心が落ち着いた。

ゴブリンは神官であるグンゾウを舐めていているのか、袈裟懸けの単純な斬撃を繰り返す。

グンゾウはショートスタッフで受け止める。その威力を使って回転から打擲ちようちやくへ繋げる。

ヒットバック 突き返した。見事にゴブリンの頭へ決まるが、相手も甲冑を装備しているため、決定打にはならない。

少し目眩を起こし、ふらついたゴブリンだったが、踏み止まる。グンゾウに油断はできないと判断したのか、盾を構え直した。

少しの間、睨み合いと小競り合いが続く。

グンゾウは非戦闘員が、白兵戦で時間を稼げるのは良いことだと思っていた。その間、前衛の負担が減る。

「はい。お疲れ」

突然、ゴブリンの背後に現れたオダが、背後から甲冑の切れ目になって肩口にダガーを突き刺した。

「ギャー！」

ゴブリンが叫んで、後ろを振り向く。

——今だっ！

グンゾウは強打でスマッシュゴブリンの延髄に打撃を加えた。同時にオダはゴブリンの膝を踏み蹴った。

ゴブリンは昏倒して、前のめりになる。そこをオダは足で頭を踏みつけて、無表情のまま、後ろ首にダガーを突き立てた。

グンゾウは額に手を当てて六芒を描く。

「ありがとう、オダ」

「あんまり無茶されるとみんなの回復役がいなくなるから……俺はあの白い聖騎士が回復してくれればいいけど」

「オダの回復は俺に任せろ！」

「いや、俺は……」

「任せろ！」

「……意外とわかりやすいね、あんた」

「任せろ！」

オダは溜め息を吐くと、次のゴブリンに向かって、ヤル気がない感じに猫背で歩いて行った。

——少しは役に立つじゃん。でも、アキに癒されるなんて1000年早い。

「シツシツシツシツシ」

ハイドが愉快そうに笑っていた。

小飼いゴブリン達は概ね蹴散らされていた。

グンゾウから見て、そして鼻<sup>ひいきめ</sup>目を抜きにして、リョータやヨシノは先輩義勇兵と遜色<sup>そんしよく</sup>なく強い。それでもタナカの活躍と比べたら見劣りした。それくらいタナ

カは強かった。タナカの両手剣は、間違いなく一振りですべてのゴブリンを無力化した。

——クズオカの1番の功績はタナカを連れてきたことかも？

残りのゴブリン達がシムラ、シンジョー、オダでなんとかなる位に減ると戦士達はリーダー格の方へ抜ける。

戦局は最高戦力同士の戦いに移る。グンゾウ達から向かって左から、白甲冑、紅<sup>べ</sup>鎧、ホブゴブリンXL、黒甲冑で横に並んでいる。

客観的に見て、体力を消耗しているリョータ達は不利な状況だった。

各人お互いの相手に突っ込んで行く。

足の速いヨシノは槍を拾うと、ベによろい紅鎧達に向かつて左から回り込んで白甲冑ゴブリンに一突き入れ、飛び跳ねるように後退した。明らかに誘い込んでいる。白甲冑はヨシノに興味を持ったらしく、ヨシノの後を飛び跳ねて追った。

「光よ、ルミアリスよ、我が刃に加護の光宿らせ給え」

アキが祝詞のりとを上げると、アキの長剣ロングソードに青白い光が宿る。光魔法の光刃だ。セイバー

アキには全く似合わない動きだが、黒甲冑を誘うように光る長剣ロングソードを回転させた。

——誘われたい……。

グンゾウがフラフラと前に出たら、後ろからハイドに杖で叩かれた。

「いてっー!」

「キシシ、落ち着け、キシシシ」

——こいつは読心術が使えるのか？

黒甲冑はゆっくりとアキの誘いに乗った。

次に仕掛けたのはリョータだ。

リョータが、ベによろい紅鎧へ一本突きで突進していく。すると、リョータの両手剣を弾くよう

にホブゴブリンXLが前に出てきて、ベによろい紅鎧を護った。XLはホブゴブリンにしては珍し

く胸当や手甲で武装している。

「来いよ、ホブクザク。俺様は最強だが、手加減なんてしねーぜ」

一瞬、XLは紅鎧ベによろいに目を遣るや。紅鎧ベによろいが黙って頷くと、XLはリヨータに向かつて行った。リヨータは、紅鎧ベによろいからXLを引き離すように、ヨシノと白甲冑の方向へ移動をしていった。

その前から紅鎧ベによろいの視線はタナカに向けられていた。

タナカは紅鎧ベによろいに対して、リヨータと同じく一本突きで突つ込む。ファストスラスト

紅鎧ベによろいは余裕の表情。体を捻かつただけで、それを躲かわす。外したと見えた瞬間、タナカは体を回転させ、陽炎ヘイズに切り替えた。

——意外と技巧派！

紅鎧ベによろいはそれを嫌がり、飛び跳ねて避ける。向かつて右の黒甲冑とアキがいる方向だ。

——戦場が別れてしまったな。どうしよう。

グンゾウは戦場を見渡す。

子飼いのゴブリン達は4匹程残っている。シンジョーを中心、シムラ、オダで裁いている。

シムラが少し危ういが、シンジョーがフォローを入れているし、いざとなったとオダも助けてくれると思われた。

白甲冑とヨシノは激しい槍技の応酬をしていた。衝突しては、離れるを繰り返し、種先で火花が散るような戦いを繰り返してはいる。白甲冑は槍の名人に見えた。

——ヨシノがやられるようではこの戦いは勝てない。

ホブゴブリンX<sub>L</sub>とリョータの戦いは、現時点においてはリョータが若干攻め込んでいるように見える。上段からの素早い切り下ろしを繰り返し、X<sub>L</sub>は棍棒で防御に回っている。

しかし、序盤からの大振りが効いているのか、リョータの疲労の色が濃い。早めにX<sub>L</sub>の戦力を削ぐ攻撃が入れられないとジリ貧になる可能性があった。

紅鎧とタナカは互角の戦いをしていた。紅鎧の槍による攻撃をタナカが受け太刀で防ぎ、タナカの攻撃も紅鎧が足捌きで上手く回避するという攻防を繰り返していた。紅鎧もタナカも本気を出してないように見える。

一番不利に見えるのは、黒甲冑とアキの戦いだ。正直アキは押されていた。

黒甲冑は攻守共に優れた技術を持っているらしく、硬く盾で固めた体勢から鋭い長剣の突きや斬撃を繰り返して来る。アキも黒甲冑の攻撃を盾受を使って、上手く防いでいるが防戦一方だ。アキには荷が重そうに見えた。

長剣での攻撃の間に、アキの隙を突いて黒甲冑が盾打を繰り返して来る。これを避けきれず、喰らって後ろに下がる光景が目立つ。大怪我には繋がらないが、地味に体力を

削られる。

遂にアキが顔面に盾打を受けて、ふらつき一瞬膝をついた。

兜を被っているとは言え、盾で殴られた衝撃は頭部に伝わってくる。

「ハイド、俺はアキを助けに行くぞ」

「……キシ、仕方ない。危なくなったら勝手に魔法使う。キシシ」

「任せた！」

グンゾウは、とにかくアキの傍にいないと心配でならなかった。自分で指示したとは言え、アキが強敵と戦っている。

あのアキが戦っている。大人しい、いつも賢明な発言でグンゾウを助けてくれる、細身で、色白で、朝が弱い、見た目より意外に声が低い、でも可愛い声のアキ。

グンゾウのアキへの気持ちがどんどん高まっていく。それに合わせてアキへ向かう足が早くなった。

グンゾウの目の前で再びアキが黒甲冑の盾打を受けて膝をついた。膝をついたアキに黒甲冑が斬撃を加えていく、盾で防御をしているが、既に盾受すら有効にできないくらい体勢が崩れてしまっている。

——あんの野郎お、俺のアキをバシバシ叩きやがって。殺してやる。

グンゾウの中で滅多に湧き起こらない黒い感情が湧き上がってきた。



グンゾウの装備で敵の攻撃をまともに喰らえば一撃で死に直結する。そして、グンゾウが死ねば、小隊全体パーティーの死に繋がる。それは重々承知の上で、グンゾウは黒甲冑に向かった。ハイドも理解した上で送り出した。

——ならば、失敗は許されない。

グンゾウは神官だ。習得することができるのは光魔法と護身法。つまり、基本的には回復と専守防衛に特化した職業クラスだ。現在、攻撃に使える技スキルはたったの2つ。咎光ブレイムと強打スマッシュのみ。

相手がゴブリンとは言え、神官が剣と盾スキルの技を磨いた怪物に戦いを挑むのはあまりに無謀に思えた。

## 【過去】

ルミアリス神殿の修練部屋。

部屋の中から、時折グンゾウの苦しげな呻うなき声が漏れる。部屋の前を通りかかった神官が驚きの表情をして、足早に立ち去る。

室内では四つん這いになったグンゾウの上に座りながら、カレンは詩経典を黙読していた。左手には経典、右手には六条鞭が握られていた。

グンゾウの頭に置かれた陶器の茶碗。その茶碗に注がれた温かいお茶から、心安らぐ

柔らかな花の香りが漂う。

「……今は、何をしている……じつ、時間なのですか？ 修師カレン」

「今日やるべき修練の事項は全て終わったので、夕食の時間まで寛ぎの時間だ。今日は機嫌が良い。褒美だ。何か訊きたいことがあれば、何でも答えてやるぞ」

——俺は寛いでねえ……。

「……くつ、神官は、どうやって敵を倒せばいいんですか？」

カレンは身じろぎ一つせず答える。

「愚問だ。神官の役目は仲間の命を守ること。防御と回復だ。敵は倒す必要が無く、御のために護身法のみを極めれば良い。回復役で攻撃役など、自殺行為以外の何モノでもない。こら、動くでない。茶が零れる」

振り下ろされた六条鞭がグンゾウの臀部で鋭い音を立てる。

「うぐつ！ しかし……、咎光と強打も習得しました。どうしても……倒さなければいけない敵がいた……時は？」

グンゾウからは見えないが、カレンは少し呆れた顔をした。普段の険が取れて、可愛い表情だ。

「そんな技でどれほどの敵が倒せよう。もつと上位の光魔法でなければ、殆どの怪物に有効な打撃は与えられまい。まあ、貴様達が普段相手にしているゴブリン位であれば、

戦えるかもしれないがな。だが、やはり無駄だ。考えて見ろ、咎光ブレイムに魔法力を使うより、1回でも多く癒光ヒールを使えた方が賢明だろう?」

「いや、万が一の時で……、今は、その、ゴブリンで……いいんです……。知りたいんです……。どうしても倒さなければいけない敵が目の前にいた時、天才の……修師マスターカレンならどう戦いますか?」

「そうか……貴様は輪を掛けて阿呆な神官だな。しかし……、まあ、よかろう、私なら……」

### 【現在】

——カレンは言っていた。DSで、性癖と性格はねじ曲がつてるけど、彼女は天才だ。そのカレンが言っていた。倒さなければならぬ敵が目の前にいた時!

『私なら……敵に反撃の暇いとまも与えず、命尽きるまで叩き続ける!』

「あの師匠あつての、弟子だつーことで……」

グンゾウの口に、一瞬微笑みが浮かんでから、すぐに消えた。

「アキ! 今、助ける!」

グンゾウは叫ぶ。

グンゾウは走りながら、ショートスタッフの端を持ち、最も長く構えた。

黒甲冑がグンゾウの存在に気付く。アキもグンゾウの存在に気付いて、立ち上がる。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……咎光<sup>ブレイム</sup>」

「ギヤギヤツ！」

グンゾウが放った咎光<sup>ブレイム</sup>を黒甲冑が左に跳んで躲<sup>かわ</sup>す。

——避けるのなんて、最初からお見通しなんだよ。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……咎光<sup>ブレイム</sup>」

「ギョギョギョツ！」

2発目の咎光<sup>ブレイム</sup>は黒甲冑を驚かせる。跳躍した状態であつたため避けきれず、咎光<sup>ブレイム</sup>を受け、盾に当たった瞬間、それを放棄した。

黒甲冑は、体勢が調わないまま着地する。

——まず、これで盾は無くなったぜ。

グンゾウはさらに黒甲冑との距離を詰めると、さらに咎光<sup>ブレイム</sup>を放った。

「咎光<sup>ブレイム</sup>からの……、強打<sup>スマッシュ</sup>！ 強打<sup>スマッシュ</sup>！」

流石の黒甲冑も三連続で咎光<sup>ブレイム</sup>が飛んでくるとは予想できず、天罰の光を浴びてしま  
う。

痺れて動けなくなった黒甲冑はグンゾウの強打<sup>スマッシュ</sup>を頭部に2発受ける。

——ここまでは上出来。後は、体力との勝負。自分<sup>インナーゲーム</sup>との戦いだ。

強打、強打、強打、とにかく強打。  
滅多打ちだ。

グンゾウは休む暇もなく、強打を打ち続ける。黒甲冑は最初の2発こそ咎光の影響で完全に喰らったが、痺れが取れてからは必死で防御をしようと、目眩を抑えて、体を捻ったり、受け太刀をしようとしている。

グンゾウはシヨートスタツフを最も長く持ち、黒甲冑の頭を、頭を守る腕を、時に脚を、最大の強さと速さで打ち続けた。

衝撃で壊れたシヨートスタツフの飾りの破片が飛んできて、グンゾウの額と頬を切り裂いたが、そんなことは気にもならなかった。

——リョータのような力強さで、ヨシノのような速さで打ち続けるんだ。ここで終わってもいい。

グンゾウは相手に戦闘の調子を取り戻させたら負ける。そのため、体力が尽きるまで全力で強打を打ち続けなければならない。

強打、強打、強打、強打、強打、……。

グンゾウの上半身の筋肉が悲鳴を上げ始める。高熱を発して、動きが悪くなる。肩の周りだけで無く、肘や背中まで痛い。

——頑張ってたんだ、俺の体。カレンの修行ではもつと限界まで追い込まれたぞ……

!

強打、強打、強打、強打、強打、強打、……。

流石にグンゾウの強打に勢いと威力が無くなってきた頃、黒甲冑が体勢を立て直す。

しかし、黒甲冑も無事ではない。甲冑の上からとは言え、ショートスタツフによつて最大限の力で打たれ続けた四肢と頭部には相当の損傷が蓄積していた。もう、全力は出せないと思われた。

「ギイイイイ……、ギイイイイ……」

黒甲冑は肩で荒い息をしている。

もつと疲労困憊していたのはグンゾウだった。呼吸が乱れに乱れ、既にショートスタツフにすぎらないと立つことすら難しかった。そのショートスタツフも飾りは殆ど壊れ、先端に打撃用の重りだけが残っていた。

切れた額から流れる血が汗と混ざって目に入り、染みる。視界が赤い。

——まだだ、まだ終わらんよ。斬撃が来たら突き返し、咎光、強打の連続技をお見舞いしてやる。

黒甲冑は呼吸を調べていた。その間、目の前の敵から目が離せなかった。グンゾウの目からは何かを狙っている気迫を感じた。その目にはまだ光があった。

それは青白く光る、一筋の光。

そう、それは、今まさに黒甲冑へ突き刺さりんとする光刃セイバーの光だった。  
 「やあああああああああ！」

アキの渾身の刺突しとつが黒甲冑の背中、甲冑の隙間に突き刺さる。  
 非力なアキの力を補う光刃セイバーの力が鎖帷子を切り裂き、黒甲冑の肉を捉える。

「ギャハアツ！」

黒甲冑が血泡を含んだ飛沫を口から吐き出した。身をよじつて、後ろを振り返る。  
 黒甲冑も右手に握られた長剣を振り上げ、アキに反撃をしようと試みる。

「たーっ！」

アキは黒甲冑に刺さった長剣を素早く抜くと、懲罰パニッシュメントの一撃で黒甲冑の右腕を切り飛ばした。

——終わりだっ！

アキの攻撃に合わせてグンゾウは黒甲冑の頭部に全力の強打スマッシュを打ち込む。

グンゾウのショートスタッフが折れる。黒甲冑の兜はひしゃげ、留め具が壊れて外れ飛んでいく。

グンゾウの足が縄もつれ、体勢を崩して転ぶのと同時に、黒甲冑は糸の切れた傀マリオネット儡儡のように足下から崩れ落ちた。

「はあはあはあはあはあ、んん、やって、はあはあ、やったぜー！　ざまあみろってんだ」  
寝転ぶグンゾウの元に、アキが駆け寄る。駆け寄るといっても、アキも疲労から足が速くは動かない。

「グンゾウさん！　ありがとうございます！　本当に助けにきてもらって、涙が出る程、嬉しかったです。あんなにすごい戦い方をして……、大丈夫ですか？」

「へへへ、大丈夫。はあはあ、少し疲れちゃっただけだから、はあはあ、アキを救いたくて年甲斐もなく、はあはあ、無理しちやった」

アキはグンゾウの傍に座り、バイザーを上げてグンゾウの顔を覗き込む。

アキの目からは涙が溢れ、瞳は輝いていた。盾打で喰らった傷か、目の上と鼻が切れて腫れ上がり、鼻血が出ていた。顔半分が血だらけだ。

「おお、アキ、顔に怪我が、はあはあ、治そう」

「だ、大丈夫です。グンゾウさんこそ顔が血だらけです」

「はあはあ、本当？　じゃあ、はあはあ、お互い血だらけの顔してるんだね、ははは、はあはあ」

「私もそうなんですか？　恥ずかしい……」

アキは慌てて鼻の下を擦った。

グンゾウもアキも笑顔になる。グンゾウにとって至福の時間。



——血だらけでもかわいいけど、やっぱり治したいな。

グンゾウは上半身を起こすと、アキに質問した。

「はあはあ、痛いところは顔だけかな？　治そう」

「あ、はい。戦いに支障になるような傷はありません」

「じゃあ、癒し手キユアで。光よ、ルミアリスの加護のもとに……癒し手キユア」

グンゾウは、アキの額と鼻の傷を治すと傷付きやすい前腕にも光を当てた。そして水筒から出した水で神官衣の袖を濡らして、顔の血を拭いた。アキが抵抗もせず顔に触られていたので、グンゾウはその仕草に心臓が高鳴った。

「ありがとうございます。私はグンゾウさんを治します。顔だけですか？」

アキから嬉しい提案があったので、グンゾウは受けることにした。

「そうだね。見た目は、これ以上良くはならないだろうけど、顔と……手も痛いからお願  
いできるかな？」

グンゾウの手は限界まで振ったショートスタッフの所為で掌の皮が破れて、出血していた。

——カレンに貰った杖も折ってしまった……ばれたらどんだけのお仕置きがくるか

……。怖い。

「はい。光よ、ルミアリスの加護のもとに……癒し手キユア」

すっかり綺麗な顔になったアキが、目を閉じて癒し手を唱える。  
アキの白い肌が癒し手の光に照らされて、余計に美しく光った。

——あー、癒やされるわー。最高ー。

顔の傷が塞がり、その後、掌の傷も塞がる。至福の時間はあつという間に過ぎてしま  
う。

「終わりました」

落ち着いたアキの声で終了が知らされる。耳に心地よい。

「あ、あの、延長……、あ、なんでもないや。ありがとう。さて、リーダー格を1匹殺つたから、これで数的に優位だ。アキは少し休憩したら、まずはシムラ達の支援を。俺はハイドの所に戻って、次の動きを考える」

「はいっー!」

アキは素直な返事をして、すぐに動き始めた。

「いちいち……」

グンゾウは痛む足腰を支えながら立ち上がると、ハイドのいた所を見た。  
ハイドがいない。

——どこに行ったのかな? 問題が発生したかな?

次の瞬間、雷鳴が轟く。ハイドの雷電だ。

——次はあそこかっ！

## 27. それを乗り越えた先の明日へ

ハイドが雷電ライトニングを使う。

それはなんらかの事態が発生したことを示していた。

ハイドがいたのはリョータとホブゴブリンXLエクセルの近く、その向こうではヨシノと白甲胃が戦闘を継続していた。

「ギジジ、掠かすっただけか……!」

ハイドは悔しがった。雷電ライトニングは命中率が悪い。毎晩のように訓練をしているハイドであつても動いている敵への命中率は6、7割だった。

「アウアア?」

ホブゴブリンXLは精霊魔法エリメンタルを体験した事が少なかったため、不可解な突然の雷に疑問をいただいていた。左腕の傍を雷電ライトニングが掠かすめて、少し痺れている。リョータと距離を取り、左腕の動きを確認していた。

——リョータが大きな怪我でもしたのかもしれない。

グンゾウは軋きしむ体を引きずるように、リョータとハイドの方に歩いて行った。全身が痛くて、なかなか速く歩けない。

歩いている途中でリョータを見たが、特に怪我をしている様子もなく、両手剣ツヴァイヘンダーを正眼に構え、ホブゴブリンXと向き合っていた。

——良かった、無事っぽい。逆になんか止めを刺せる機会でもあったのかな？

グンゾウは安堵をしつつ、油断無く観察を続けた。

——あれ？ リョータの両手剣ツヴァイヘンダー……なんか短くね？

事実としてリョータが正眼に構える両手剣は短かった。正確には短くなっていた。既にアキが持っている長剣ロングソードよりも短い。それどころか先端も四角くなっている。真ん中辺りでぼつきり折れていた。まともに戦うどころではない。

「くっそー！ 安物がっ!!」

リョータは焦りと悔しい気持ちで、歯を軋きませていた。傍に死んでいるゴブリンの死骸に長剣を見つけると、根元の方の両手剣を投げ捨てて拾った。

「リョータ、長剣そで戦えるか?！」

グンゾウが叫ぶ。

「見りや、わかんだろ?! 戦える! ……いや、正直きちい! あいつの攻撃は半端ねえ。もつとデカイ得物じゃねーと渡り合えねえ!」

リョータは面防フェイスを上げて叫び返してきた。一瞬強がったが、よっぽどホブゴブリンXXが強いのか、発言を訂正した。

——両手剣が折れたので雷ライトニング電を使ったのか。ハイド、良く見てたな。

グンゾウはハイドの傍に着くと、周囲の状況を確認する。

ヨシノと白甲冑の戦いは継続している。タナカと紅ベ鎧の戦いも継続中だった。アキの加入で子飼いのゴ布林達との戦いはほぼ収束に向かっていた。残り一匹を全員で囲んでいる。

——リョータに代われる戦力といたら、シンジョーか？ ……しかし、シンジョーの装備でホブゴ布林XLと渡り合うのは死ぬというようなものだ。狩人が前線で戦うつてのは無理がある。装備で言ったらアキか？ ……あの疲労度のアキがリョータも苦戦するホブゴ布林XLと渡り合えるわけがない。う、選択肢が無い。

「ハイド、有効打が打てるか？」

グンゾウがハイドに訊くと、ハイドはしばらく唸うなつた後、突然地面に荷物を置いて横になった。

「打てる。でも、まだ全部は使えないから、寝る!! キシー！」

——分かるけどさ……、寝るなよ。

ハイドは3秒もしない内に、静かな寝息を立て始めた。

グンゾウはショートスタッフが壊れてしまったので、ハイドが地面に置いた青い宝石が付いた杖をそつと拝借した。

——氷結魔法はあんまり使わないからいいよね。

「壊すなよ、キシキシシ」

ハイドが急に寝言を言ったので、グンゾウはびつくりした。

時間が経つとホブゴブリンXLの痺れも取れたらしく、戦闘体勢になった。

選択肢がないためリョータが対応をしている。リョータにはあり得ない逃げ腰だ。ホブゴブリンXLとかなり間合いを取り、まともには組み合わないようにしていた。

「グンゾウさん！」

アキがシムラ、シンジヨー、オダを連れてグンゾウの元にやってきた。

「アキ、大丈夫だった？」

「はい。シンジヨーさんが強いから全然余裕でした。皆少し怪我をしているので、治療をお願いします。私はリョータを支援してきます」

「え？ いや、ホブゴブリンXLは危なくない？」

グンゾウが心配すると、アキはグンゾウに笑顔を向けた。

「怖いけど、大丈夫です。ヨシノとの野外訓練で唯一勝つたのは私だけです。無理はしません。リョータの支援ですし、防御を優先します。ほら、それにさっきの戦いで盾

もすごく良いのを手に入れました」

アキは目を輝かせながら、グンゾウがどこかで見覚えのある歩兵用のヒーターのシールドの盾を見せてきた。

——これ、……黒甲冑のだ。ゴ布林装備の回収が早い、早すぎるよ！ アキ！

「おお、す、すごいね、それ」

「そうっ！ すごくいいんです。全部金属で出来ているのに軽いし、表面に装飾まで施されて……、あ、行つてきます」

アキはゴ布林装備の解説を生き生きとしていたが、急に恥ずかしそうな顔をしてリョータの所に向かった。

「可憐で直向きひたむ、そして若干の狂気マニアック……好みだタイプ」

急にグンゾウの隣に現れたオダが立ち去るアキの背中を見ながら呟いた。

グンゾウは呆れた顔でオダを見ながら、「こいつとは二度と一緒に仕事しない」と深く決意した。

「死ぬかと思いましたが」

シムラは塞がった傷を眺めている。

シムラとシンジョーは、重傷ではないが、かなりの数の怪我をしていた。特にシン



ジョーは結構な出血をしており、そのエラ張った大きな顔を見ながら「よく笑っていられるな」とグンゾウは思った。

ふたりの怪我を治療しながら、グンゾウは周囲の状況に気を配っていた。

リョータをアキが援護に入ってからも状況は変わらなかった。

アキの存在は牽制として機能しているため、リョータが安全にはなっているが、ホブゴプリンXに決定打を出せる訳ではなく防戦を強いられている。

——リョータが安全になっただけでも良しとすべきか。

こういう行き詰まりを打開してくれるのはいつでもあの女神だ。

「ちよいやーっ!!」

ヨシノが気合いの叫びをすると、「バチン」と音がして白甲冑の槍が宙に弾かれた。

白甲冑の冷や汗が見えるようだ。

「もおおおおー………らったあー………!!」

ヨシノは反時計回りの回転から、横薙ぎで白甲冑の首を獲りにいく。

素手になってしまった白甲冑は屈んで躲そうとするが、ヨシノは既に予測済みで、槍の高さを合わせていく。

両腕の甲冑で防御するしかなかった白甲冑。その目論見は空しく四散し、可動部で防備の手薄な両手首が切られてしまった。

「ギヤツギヤー!!」

哀れな白甲冑は、両手を失い混乱した。彼の最大の不幸はヨシノに目を付けられたこと、最大の失敗は彼女の誘いに乗ってしまったことだろう。

「シッ!」

混乱し、冷静な判断ができなくなった白甲冑は、最後にヨシノの突きを顎下に受けて絶命した。ヨシノは刺さった槍はそのままに片刃の曲刀を抜くと、首を切り落とし、白甲冑の死を確実なものとした。

——よし! これで打開できる。

「にや——!! よーし、最後は母にや——!」

ヨシノは槍を抜くと、良く分からない感情の高ぶりのまま、興奮状態で走りだした。

「待った——! ヨシノ、こっちに戻れ——!」

グンゾウは最大限の大声で叫ぶ。

その声に気付いたヨシノは、一瞬猫のようにちらっとグンゾウを見たが、あえて無視して紅鎧の方へ行こうとした。

「こら——! 無視するな」。早く、こっちに!」

さらにグンゾウに呼ばれると、ヨシノは一気に肩の力を落とし、槍を引きずりながら、とほとほとグンゾウの元に歩いてきた。

「テンション下がるー……」

グンゾウの元に来たヨシノはブツブツと文句を言っていた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒光<sup>ヒール</sup>。……何言つてんだ。完全な状態じゃなかったら紅鎧<sup>ベによろい</sup>となんて戦えないだろ？ 自分の姿見た？」

グンゾウはヨシノの傷を治しながら、論<sup>さ</sup>した。

「ああ、癒光<sup>ヒール</sup>気持いいー。えー、何々<sup>なになに</sup>？ いつものあたしでしょー？」

ヨシノはキョロキョロと自分の姿を見た。

「いんや、全然」

身体<sup>からだ</sup>の鉄板で覆われている箇所は無事だが、それ以外の箇所はほぼ全てから血<sup>にじ</sup>が滲み

出<sup>で</sup>ていた。長い髪の毛も乱れ、兜のあちらこちらからはみ出ている。

鎖帷子<sup>チエインメール</sup>に穴が開いている箇所も何力所かあつて、下の服や肌が露出していた。また

所々革のベルトが切れて、いくつかの装備がずり下がっている。

「えっへへへ、あれー？ なんか恥ずかしいなー」

ヨシノは皆に囲まれて装備を直してもらっている間、照れて笑っていた。乱れた髪の毛は自分でまとめて、兜<sup>かぶ</sup>を被りなおす。そして大量の水分補給。

応急処置<sup>あきせうしゆじ</sup>が整うと、グンゾウはヨシノに向き合つて話した。

「ヨシノ、連戦<sup>べによろい</sup>で紅鎧とやれるかい？」

「もちろん。全然、大丈夫だよ。グンちん」

ヨシノは笑顔で頷く。その笑顔には強い意志を宿した目が輝いていた。

「この日のために、あたし腕を磨いてきたんだもん。紅鎧はあたし達にとって絶対乗り越えなきゃいけない壁だと思うの。だから……勝つよ」

ヨシノは愛用の槍を強く握りしめた。

グンゾウはヨシノに、山中の森で紅鎧と戦った時の輝きを感じた。

「そうか。……じゃあ、勝つておいで。でも無理はしないで、俺等もすぐ傍にいるから。タナカにはこつちに戻るように伝えて」

「うん、わかったー」

「ヨシノ、きばり。いざと言う時は援護できるように、紅鎧をずっと弓で狙っとくわ」

シムラもヨシノに声をかけた。

「大丈夫、シムちゃん、お姉さんに任せときなさい。危ないから離れてるんだよ。よつし、じゃあ、行ってくるー」

ヨシノは目を閉じて2、3回呼吸を整えると、タナカと紅鎧が戦っている方向を向いて止まった。

「あ、これ要らないんだった」

ヨシノは慌てて腰のベルトを外すと、片刃の曲刀が2本とも鞘ごと地面に落ちた。

——やっぱり、ヨシノは紅鎧との戦いを槍で決めるつもりなんだ。  
「んー、体が軽いー!」

ヨシノは伸びをしながら、踊るように軽くステップを踏む。最後に槍を一回転させると、飛ぶように走って敵に向かった。

ヨシノが全力疾走で、紅鎧に向かっていく。

「ギャツギャツギャギャー」

紅鎧もヨシノの到来を察知して、妙に嬉しそうな声を上げた。意味はわからないが、  
「来たか、女戦士」と言ったところか。

紅鎧はタナカから間合いを取って、離れる。ヨシノに向き合うためだ。

「あたしも会いたかったよ、苺ちゃん!」

初っ端、ヨシノは上段から叩き付けるように槍を振るい、紅鎧はそれを受けた。  
鏢迫り合いとなった。

鏢迫り合いのままヨシノはタナカに話しかける。

「タナちゃん、グンちゃんと呼んでるから戻って。紅鎧はあたしの敵だから」

「あ……、お、はい。……わかった」

タナカは急に女の子に話しかけられたため、戸惑いながらも紅鎧の元を離れて、グン

ゾウ達の方へ向かった。

「タナちゃん、元気ないなー。あたしは、元気もりもりなのよっ！ んんっ!!」

ヨシノは腕の力で紅鎧べによろいを押す。紅鎧べによろいも当然押し返す。その反動を利用して、ヨシノは後方に跳躍して一旦、間合いを取った。

ヨシノと紅鎧べによろいは対峙したまま動かない。

「今回は1対1でも負けないんだから」

ヨシノが中段右前半身構えの槍しじを抜くように握りしめた。対する紅鎧べによろいは中段左前半身構えで迎え撃つ姿勢でいた。

2人の間には、激しい戦いの前の静かな緊張感だけが漂っていた。

グンゾウは忙しく指示を出していた。

「シムラはヨシノと紅鎧べによろいの監視、いつでも仕留められるように構えててくれ」

「了解っすー!」

シムラは飛び跳ねるようにヨシノの方へ向かう、シムラなりにヨシノのことが心配なんだらう。

「疲れているところすまないが、シンジヨーはその辺りある荷馬車の縄で何本も投げ縄を作ってくれないか? ホブゴブリンXLの動きを止めたい」

——ハイドの雷ライトニング電が直撃すれば打開できるはず。

「わかった」

シンジヨーは笑顔のまま頷き、荷馬車に向かった。シンジヨーは働き者だ。グンゾウは彼の姿勢に好感を持っていた。

「オダはゴ布林達から武器を回収してくれ、あの棍棒じゃ、長剣が何本あつても折られちまう」

「あの清らかな乙女のためだな。なら仕方ない」

オダは今までに見たことがない機敏な動きで、ゴ布林達の装備を回収に向かった。

——まあ……、リヨータのためだけだね。

「ハイド！ 起きろ！ そろそろ出番だ」

グンゾウはハイドを蹴つ飛ばすと、ハイドは「ブヒっ！」と豚のような声を上げた。

「……戻って……きた、けど？」

タナカは忙しそうにしているグンゾウに、怖おず怖おずと話しかけた。ふさふさの眉毛が汗で少し撓しなっていた。

「おお、タナカ、良い時に戻ってきてくれた。あのホブゴ布林と戦ってきて。できれば倒してくれるとすごい嬉しいけど、強いよ。ちよつと規格外だな」

「え？ 突然すぎない？ ……ほんと、人使ひとつかい荒いね、この小隊パーティ」

「え？ そう？ どうせ怪我してないでしょ？ それに荒いの好きでしょ」

——わかるんだよ、最近、DMの匂いがね。カレンのお陰で。

「……ま、確かに。……あのヨシノって女の子、動きが速いね。俺より紅いあかのに向いてるかも。俺の攻撃じゃ、遅くて当たらないわ……」

「そっか。タナカがそういうなら安心するよ。遅くてデカイのは任せたよ」

「……ああ、まあ、なんとか」

タナカは微笑すると、バイザー面防を下げた。グンゾウはその肩を軽く叩いて、声をかける。

「そうだ。あのホブゴブリンは武器を折りに来るから、気を付けて」

「……厄介な敵だな」

タナカは両手剣を肩に担ぐと、一步一步踏みしめるようにホブゴブリンXLへ向かっていった。

シムラはハラハラしていた。

シムラは、ヨシノと紅べによろい鎧が戦っている傍にいる。荷馬車の陰に隠れながら、戦いの行方を見守っていた。まだ引き絞ってはいないが、弓に矢は番つがえている。

「あかん、あかんでえ。なんやヨシノの動きが悪い。グンゾウさんかハイド呼んでこよかな」



いつも遠くから全体を観察しているシムラは小隊の仲間の動きを知っている。そのシムラから見て、ヨシノの動きが良くなかった。

シムラの頭では理由は分からない。長時間の戦闘で疲れてしまったのか、出血が多くて貧血なのか、脱水症状を起こして運動機能が落ちているのか、考えられることは沢山あった。とにかくシムラの感覚的にいつものヨシノとは技のキレや動きが若干異なるように感じられた。

ヨシノの槍が精彩を欠いている。速度や初動の時期がいまいちなのだ。紅鎧も気付いているようで、余裕の表情を浮かべて対応をしている。どちらかと言えば、ヨシノは紅鎧に打ち込まれていて、防戦気味だ。

その防戦もあまり上手くいっていない。

ヨシノもかなりの部分で甲冑が揃ってきているため、大きな怪我にはなっていないが、紅鎧の攻撃が防ぎきれず、後退させられる場面が見られる。

たった今も、紅鎧が仕掛けた、多段突きからの回転薙ぎの連続技に対応しきれず、ヨシノは紅鎧の槍の穂で顔を思い切り叩かれてしまった。面防付きの兜でなければ、重傷だったはずだ。

ヨシノは顔を叩かれた衝撃で、仰け反ってしまった、2、3歩後退をした。

「こんなんで、勝てるんかいな。……やっぱグンゾウさんのところ行く」

シムラがグンゾウの所に戻ろうとすると、グンゾウがこちらに向かってくる。

「グンゾウきーん！ ヨシノが……」

シムラが手を挙げて呼ぶと、グンゾウは走って向かってきた。しかし、足が遅い。「あんなに足が遅かったかな？ やっぱりおじさんなのかな？」とシムラは思った。

「どうした？ シムラ。ゼーはー、ゼーはー」

「なんや、ヨシノの動きが悪いんです。心配で」

「本当に？ ゼーはー」

グンゾウはヨシノの動きを観察した。

——確かに、動きが悪い……ような？

グンゾウから見てヨシノの動きは疲れているような感じに見えた。ただし、致命的な攻撃は避けるようにしっかり防御をしているので、効率的に戦っているようにも見えた。

「ヨシノー！ 大丈夫か？」

グンゾウが声をかける。ヨシノは無言で答えない。むしろ紅鎧べによろいがこちらに人影があることを気にして、ちらりと視線を送ってきた。

——んー、どうしよう。向こうはタナカが入って少し安心だから、アキをこちらに入れるか？

グンゾウが善後策を考えていると、ヨシノが先程の問いに大声で答えた。

「大丈夫！ あたしを信じて！ 絶対、倒すから」

——ヨシノがここまで言うなら、答えはひとつだ。

「わかった！ 信じる。思いつきり戦ってくれ！」

グンゾウはハイドから借りている杖を握りしめた。

「はあはあ、ヨシノは続投させる。だけど、シムラ、悪いんだけど、念のためにこつそりアキを呼んできてくれ。信じることに、備えることは別だ。ヨシノの命は絶対守りたい」

「わかりました！」

シムラは弓と矢を置き去りにして、猛スピードで駆けていった。

——戦場が離れていると指揮し辛いな……。走るの疲れた。

紅<sup>ベにようい</sup>鎧は少し失望していた。

期待していた槍使いの動きが、思っていた以上に悪かった。突き一つ、回避一つとつてもキレがない。「もしかしたら、先の戦いで既に力を使い果たしてしまったのかも知れない。こんなことなら、さっきの戦士と真剣に戦うべきだったか？」と後悔すらしていた。

ゴ布林側の戦況は全く良くなかった。ホブゴ布林X L以外の兵隊は全て殺されてしまった。

しかし、ゴ布林はあつという間に増える。増えすぎたゴ布林は旧市街に送り込むなりして数を減らさなければ新市街の秩序が保てない。戦死はゴ布林の社会では織り込み済みの仕組みなのだ。

紅鎧は「今回はあの戦士が強かったので、ホブゴ布林X L以外では相手にならない」と認識していた。逆に自分自身は安全であると確信していたため、「この雌を奴隷として持つて帰るの一興だな」と良からぬ妄想をして、油断しきっていた。

しばらく、ヨシノを捕らえる方法を考えていたが、少し疲れてきた紅鎧は「さつさとこの雌を倒して、新市街に退却するか」と考えを改め、勝負を決めにかかった。

「ヨシノの動きが悪いですね」

アキが白い顔で心配そうに言った。シムラが呼んできて、既にグンゾウの隣にいた。真剣な顔でヨシノと紅鎧の戦いを見守っていた。グンゾウはそのアキを見守っている。

——真剣な横顔がかわいい。

「グンゾウさん。ヨシノが不利な状況になった時点で飛び出します。いいですか？」

——声もかわいい。

「グンゾウさん？」

アキがグンゾウの顔を怪訝けげんそうに覗き混んでいる。

——正面向いてもかわいい。

「グンゾウはん？」

グンゾウとアキの間にシムラのイガグリ頭と顔が割り込んでくる。

「うわっ！ ……ごめん、ぼーつとしちやつて。うん、そだね、危なくなったらすぐに突っ込もう」

ヨシノは今まで見たことない位、緩い動きをしていた。1番目立つのは突きの遅さだ。命中精度も低い。紅鎧は先程から甲冑を使った防御しかしておらず、ヨシノの突きは反撃の切欠きっかけとなっている。

突きで出来た隙を攻められて、体勢が崩されて打ち込まれるという動作が、もう3回も繰り返されている。

紅鎧が猛攻を始める。遂に決めにかかったように見えた。ヨシノは防戦を強いられる。時に甲冑を使い、時に槍を使い、致命傷にならないように防御を続けていた。

ヨシノの足が止まり気味になる。

——足が止まってきた。これは不味いかも？

ヨシノは長い打ち込みでポロポロになり始めた。鎖帷子チェイシメイルが斬られて血が出ている箇所もある。紅鎧は無表情でヨシノへの攻撃を続けている。攻撃の手に休みはないが、攻

撃の種バリエーシオン類等は少なくなってきた。

ヨシノは一瞬の隙を狙って、突きを繰り出す。しかし、この突きも非常に緩い。

——あんなんじゃない、駄目だ！

グンゾウがそう感じた時、紅ベ鎧はヨシノの槍を上方に弾く。

ヨシノの体勢が前のめりに均バ衡を崩す。

それを待つていたかのように、紅ベ鎧は自分の槍を大きく後ろに引いてから、全体重をかけて止めの一撃を放ってきた。

「ヨシノっ！」「ヨシノちゃんっ！」「ヨシノ姉っ！」

異口同音でグンゾウ、アキ、シムラからヨシノを呼ぶ声が出た。

アキが盾を構えながら、隠れていた馬車を飛び出す。

「ギヤギヤギヤ」

紅ベ鎧は勝利を確信して、口元に笑えみが浮かんだ。

紅ベ鎧の槍がヨシノの身体を貫かんとする寸前、ヨシノは体勢を立て直し、後ろにステツベバックしながら、槍を縦に一回転させる。

ヨシノの槍の石突きが、飛び出してきた紅ベ鎧の下顎したあごを下から打ち上げた。紅ベ鎧の頭

が上方に叩き上げられる。頸椎けいついが背中の方角へ直角に曲がる。

紅鎧べによろいは倒れぬよう必死に足を踏ん張る。しかし、脳を激しく揺すられ、意識を保つのが精一杯だ。生まれたばかりの子鹿のようにふらふらとしていた。持っている槍を杖にして、辛うじて立っている。

「え?」「え?」「え?」

再び異口同音で、グンゾウ、アキ、シムラの目が点になる。

「わーい、陽動成功!」

ヨシノは諸手を挙げて跳躍し、喜びを表現した。

数分前、ヨシノは思っていた。「やっぱり紅鎧べによろいは強い。でも、……もう勝てない相手ではない」と。

ヨシノが本気を出せば追い込むことはできそうだった。しかし、それでは高い身体能力を活かして、新市街に逃げ込んでしまおうと思われた。

「紅鎧べによろいは倒さないと旧市街を取り戻したとは言えない」、ヨシノはそう思っていた。「多少の怪我は仕方ない。一撃必殺の機会を待たないと。そのためには、敵を誘い込む!」

ヨシノは仲間にも秘密の決心をし、念には念を入れて、3回も陽動フエイントのために大きな隙を作った。見た目の身体的な陽動フエイントだけではなく、精神的に紅鎧べによろいを油断させたのだった。

「ありがとう。 苺ちゃんのお陰で強くなれたよー。 肉体的にも、精神的にも」

ヨシノはゆつくりと槍を構えて、紅鎧に声をかける。

紅鎧は何が起きたか分からなかった。意識が混濁しているし、焦点も定まらない。しかし、目の前に迫ってきた影が何者であるかは分かった。

「くそつ、何故だ。まさか、この俺が……。こんな雌を奴隷にしようなどと考えず、早く退却すれば良かった。足が……。動かない……。」、紅鎧が目眩と後悔の渦に飲み込まれている最中、ヨシノは感謝の気持ちで槍を振るつた。

「やたー！ー！ー！ ショートケーキ完食！ー！ー！ー！ー！」

ヨシノは両手を挙げて、叫ぶと、そのまま後ろに倒れた。

「ヨシノ、大丈夫かっ！」「ヨシノっ！」「ヨシノ姉さん死んだらあかんっ！」

グンゾウ、アキ、シムラが駆け寄る。

アキがヨシノを抱えて、面防を上げる。

面防が上がると、ヨシノの顔が見えてきた。ヨシノは大軒をかいて寝ていた。口からは涎が垂れている。右の鼻の穴には鼻提灯が膨らみ、左の鼻の穴からは鼻血が垂れていた。かなり間拔けな顔だ。

「ふっー」



思わずアキの口から笑いが吹き出す。

「くくく……くくく……あっはっはっはっはっは」

グンゾウの口からも堪えきれなかった笑いが零れ、そして大笑いへと変わっていった。

「あちゃー、戦いだけでなく、笑いの才能でも負けてしもうてるわー」

シムラが自分のイガグリ頭を撫でた。

「どんな怪我しているか分からないから、癒光ヒールで治療する。終わったら、向こうに運ぼう。ヨシノは俺が負ぶうから、2人は荷物をお願い」

グンゾウはアキとシムラに荷物を渡すと癒光ヒールを唱えた。

——本当に……お疲れ様、ヨシノ。

——重かった……。

ヨシノを運ぶ途中、グンゾウは自分でやると言ったことを少し後悔した。甲冑を着た身長170センチの女の子は想像以上に重かった。

ホブゴブリンXLとの戦場の傍にある荷馬車の陰に、ヨシノを寝かした。

パコーンと金属が強くぶつかったような鈍い音がする。

何の音か確かめるために、グンゾウが視線を向けると、タナカの両手剣が折れている。

「あああー、俺の剣がー!!」

タナカが大きな声を出す。落ち込んだ様子をしている。愛剣だったようだ。

——やばい、戦力大幅低下<sup>ダウン</sup>!

「タナカ、オダから長剣を受け取るんだ。シンジョー、投げ縄は？」

グンゾウがシンジョーを振り返ると、シンジョーは変わらぬ笑顔のまま多数の投げ縄を抱えていた。目の端でタナカとオダが長剣の受け取りで揉めているのが見えた。オダはアキのために長剣を集めているつもりなので、嫌がっているのだろう。

「10本はできている。もっと作るか？」

「あ、とりあえず、10本でいいや。ガンガン投げて、動きを封じよう。アキやシムラも手伝って！」

リヨータとタナカを除く仲間で、投げ縄を投げる。

グンゾウやアキの投げる縄は全く引っかかる様子がないが、シンジョーとシムラが投げた縄はホブゴブリンXLの左腕や首に掛かった。

「アウアー! アウアー! ウホオアー!!」

ホブゴブリンXLは掛かった縄を嫌がり、武器を置いて縄を引っ張り回す。

「いや、そんなんあかんてー」

体重の軽いシムラは縄に引っ張られる度に、宙に浮いてしまう。あのシンジョーもホ

ブゴブリンXLに引きずられている。しかし、2人ともせつかく掛かった縄なので手を離さない。

「わわ、わわわわわわ……、あかん、あかんでー」

「……………」

シムラは騒ぎながら、シンジヨーは無言のままホブゴブリンXLに引きずられている。「ゴチン」と大きな音がして、宙に浮いているシムラと、引きずられているシンジヨーの頭が衝突させられる。シムラは縄を手放してしまう。シンジヨーは引きずられながらも何とか縄から手を離さず、堪えている。

シムラが放した縄の端は、アキが咄嗟に掴まえていた。

——ナイス、アキ！ 相変わらず、出来る子！

「シムラっ！ 大丈夫か？」

グンゾウが駆け寄っても、シムラはうつぶせのまま起き上がらない。抱きかかえてシムラの顔を見ると、シムラは額に大きな瘤ができて気絶していた。

グンゾウが引きずられているシンジヨーを見ると、いつも通りの笑顔を浮かべていた。

——なんて力なんだ、ホブゴブリンXL。そして、なんて堅いんだ、シンジヨーの石頭。

「リョータ！ シンジョーから縄を受け取るんだ」「シンジョー、リョータに縄を渡したら、右腕にも罫をかけて動きを止めてくれ！」「タナカ！ アキが掴んでいる縄を受け取ってホブゴブリンの動きを止めてくれ！」

グンゾウが矢継ぎ早に指示を出す、ホブゴブリンXLが暴れているので中々上手く動けない。

「きゃあつ！ きゃあつ！」

「アキっ！」

アキが持っている縄がホブゴブリンXLに引つ張られた所為で、体重の軽いアキの体は宙に浮いてしまう。結構な高さを持ち上げられ、アキは縄を手放す。

そのまま下に落ちる所を、縄を受け取りにきたタナカがアキをお姫様抱っこする形で受け止めた。タナカとアキが見つめ合う。ふたりの顔が近い。

「あ、……ありがとうございます」

アキがお礼を言う。

「あ……、い……、お……」

タナカは何を言っているか分からない。アキもタナカも固まったまま動かない。

アキの白い頬が紅を点したように赤くなっている。タナカの顔も茹で蟹のように赤い。微妙に良い雰囲気に見える。

——何やってんだ、タナカ！ 早くアキを降ろせってんだ。

「あつ！ てめえ！ この全滅眉毛！ アキさんを抱いてるんじやねー！ 縄掴め、縄！」

グンゾウが心の中に思っていることをほぼオダが代弁した。

——許す。オダ、好きだけ言え。

「あの、……降ろしてもらってもいいですか？」

「あ……、お……」

アキは地面に降ろしてもらおうと、お辞儀をしてから恥ずかしそうにグンゾウの方へ走ってきた。

「おかえり、アキ」

「は、はい。あ、あの、私は軽いから、縄はもう持ちません」

「うん、そうしよう。ここにいて」

アキは何度も首を縦に振って、首肯した。

タナカはしばらくアキの方を眺めたまま固まっていたが、オダに頭を蹴られて、慌てて縄を追い始めた。

その間も真面目なシンジヨーは淡々と縄を投げ続け、ホブゴブリンXLは両腕と首に投げ縄が掛かった状態になった。シンジヨーの投げ縄は上手い。

右腕に掛かっているのは縄はタナカが、左腕はリョータが、首はシンジヨーがそれぞれ掴んでいる。

「ホウアウアアアー！」

ホブゴブリンX Lは暴れようとするが、3人の屈強な男達に動きを封じられ、動きが鈍い。

「キシシシシ、明らかにここで、雷帝の出番だな、キシシシ」

激しく寝癖のついたハイドが突然現れる。

「よし、動きが遅くなったから当たるだろ。頼むよ、もうお前の雷電ライトニングしか有効打が無い」

「フツシツシ、任せろ」

「みんな！ ハイドの雷電ライトニングが行くぞ！ ホブゴブリンの動きをしっかりと抑えてくれ！」

グンゾウが叫ぶ。タナカ、リョータ、シンジヨーの縄を持つ手に力を込められる。

ハイドが黄色い宝石の嵌まった杖を手に持つと、精霊魔法エレメンタルの詠唱に入る。

「キシシ、ジェス、キシシシシ・イーン・サルク……」

中空に光る魔方陣ファルツマジックが現れ、ハイドの顔を青白く照らす。

激しい寝癖が電磁魔法の影響なのではないかと思える位、頼もしい姿だ。

「キシシ・フラム・ダルト、フシシシシシ」

ホブゴブリンX Lの頭上に稲妻ヒトシラが走り、雷鳴が轟く。

直撃。

ライトニング

雷電はホブゴブリンXLの身体を縦に貫く。ホブゴブリンXLは一瞬痙攣し、その後、首の力が無くなり、ぐったり傾く。

「おおおっ！」

皆がその様子を見て、期待に響めきの声を上げたが、次の瞬間、その期待は打ち砕かれる。

「ガウアウアアアー！」

ホブゴブリンXLは顔を上げると天に向けて大きな咆哮を発した。そして、両手の自由を取り戻そうと、縄を力一杯引つ張り始めた。

「なっ！」

グンゾウが驚いていると、その隣でハイドが悔しそうな声を上げた。

「ギジツ！ 化け物めっ！」

「おいっ！ ハイド。どんどん行け！ さっさとするんだ、縄がもたねえ！」

パーティ

小隊のリーダーであるリョータが適切な指示をする。

「ジェス・イーン・サルク・フラム・ダルト、キシツ！」

ライトニング

2回目の雷電がホブゴブリンXLの身体を貫く。

「ギャガッ！ ガアアアアアア！」

雷ライティング電に貫かれる度に、ホブゴブリンX Lは激しい悲鳴を上げた。また、両手を激しく動かして暴れる。その度にリョータとタナカの巨軀が左右に引きずられそうになった。

ホブゴブリンX Lは恐ろしく生命力が強い。

「シシシシシ、あーんど、ジェス・イーン・サルク・フラム・ダルト、キシッ！」

ハイドも頭に来ているのか、即座に3回目の雷ライティング電を放った。先程の短い睡眠で魔法力が回復していないなら、これで雷ライティング電は打ち止めた。

「ガアアアアア………」

3発目の雷ライティング電を受けた後、流石のホブゴブリンX Lも膝をついて動きを止めた。

皮膚が電気で火傷を起こし、赤く爛ただれた箇所が見える。また、体毛が焼けるような焦げた臭においが周囲に漂ただよった。

——流石にヤったか？

ホブゴブリンX Lの丈夫さを目の当たりになっているため、全員が疑心暗鬼に陥って、緊張の糸が途切れない。

グンゾウがオダに視線を遣ると、オダは首を横に振る。

——こういうのって身軽な盗賊シンゾウが調べらんじやないのか？

ホブゴブリンX Lに近付くため、アキが盾を構えながら歩き始めた。

すると突然、オダが空中前転しながらアキの前に出ると、「アキさん、俺が調べますか



ら安全な場所にいてください」と言った。

——感情が言葉にならない。

オダは手を挙げて、縄を持つ3人に警戒を促すと、ホブゴブリンXLを慎重に観察しながら近付く。オダの歩みはゆっくりというわけではないが、全く足音がしない。盗賊シニッの技テクニックなのかもしれない。

オダがホブゴブリンXLの傍まで辿り着く。

オダはゆっくりをホブゴブリンXLの顔を覗き込み、脈を取るために首に手を伸ばす。

「ガアオオオオ！」

その瞬間、ホブゴブリンXLはオダに向けて吠ええると、その手を食いちぎろうと牙を剥く。

オダは急いで手を引っ込めると、バク転で避ける。

シンジョーも首に掛かった縄を引っ張り、ホブゴブリンXLの動きを制御する。

「ガアーウアー！ アオウウアー！」

ホブゴブリンXLはゆっくり立ち上がると、再び両手の自由を取り戻そうと、縄を力一杯引っ張り始めた。動きに鈍った様子は見られない。腕の筋肉には血管が浮かび上がり、筋量が増大したようにすら見える。

——何て奴だ……。

「ギジジジジッ！」

ハイドが愛用の杖を地面に投げつけた。いつも余裕のハイドが悔しさの感情を露わにしていた。

暴れるホブゴブリンXⅡが抑えられない。その上、こちらの戦力低下は著しい。

リョータとタナカは両手剣を折られ、渡り合う手段が無い。ゴブリン達から剥がした武器では折られてしまうのがオチだ。ヨシノは紅べに鎧よろいとの戦闘終了後に寝てしまい、目が覚めない。ハイドの雷ライトニング電も売り切れた。シムラはシンジヨーとの衝突ですっかり伸びて、仰向けになってしまっている。

「頼む、踏ん張ってくれ！」

「もう、やってんだよ。いつまでやればいいってんだ！」

リョータが不満げに抗議をしている。

「た……確かに、これはそんなに長く続かないかも」

さしものタナカも弱気な発言だ。

ホブゴブリンXⅡがリョータが持っている縄を引っ張って、リョータの体が一瞬浮きそうになる。リョータは腰を低くして踏ん張る。引っ張り合った縄が、千切れそうなく

らいブチブチと音を立てている。

リョータの言う通り、このままでは縄が切れるのが先か、縄を押さええているリョータ達の体力が尽きるのが先か、だ。

「少しの間だ。今、秘策あられを出す。オダ！ この罠をホブゴブリンの首に掛けてくれないか」

グンゾウはオダに隠し持っていた金属の筒が付いた括くくり罠を見せた。

「な、なんだと？ あのホブゴブリンに近付けつていうのか？ 俺はさつき食われかけたんだぞ」

オダは目付きの悪い目でグンゾウを睨にらむ。

「後ろからでいいんだ。あの隠形ステルスとかいう技スキルで駄目なのか？」

「簡単に言うなよ。動きまくる縄を避けながら、あの化け物に近付けつてのか？ そこまでの危険は冒せない！」

オダはそっぽを向いてしまった。

——んー、困ったなあ。

グンゾウは、傍でリョータ達を心配そうに眺めていたアキに近付くと、肩を叩いた。アキがグンゾウに気が付くと、グンゾウは耳元で囁いた。耳元に近付いたグンゾウの鼻にアキの良い匂いがした。

アキは一回嫌がる素振りをみせたが、グンゾウが頭を下げると、それを受けて動く。アキはオダに近付くと、下から見上げるように顔を覗きこむ。

「お願いします！ オダさん！ ホブゴブリンの首に罨を掛けてきてくれませんか？ オダさんしかできません」

「わかつたー。いつてきまーす！」

オダは目に止まらぬ速さでグンゾウから罨を引つたくと、連続バク転をしながらホブゴブリンXLに向かつていった。

——簡単にできんじゃねーか。クソ。

「リョータ、タナカ、シンジョー、オダがホブゴブリンに近付くから、その間だけでもいいから、なるべく縄で動きを封じてくれ！」

「まじかよっ！」「うへ。人使い荒い……」「……」

リョータ、タナカが文句を言いながら、シンジョーは無言で縄を引っ張る。辛うじて、ホブゴブリンXLの動きが止まる。

「最後だ。俺等もどんどん投げ縄を投げるんだ」

グンゾウの指揮の下、アキやハイドまでシンジョーが作った投げ縄を投げる。グンゾウも必死に投げた。縄が複数飛んでくれば、それだけオダの存在を隠せるからという目論見があつた。

## 【3週間前】

グンゾウは中庭で橋を爆破する箱から、火薬を慎重に抜いていた。

「シシシシシ、グンゾウ、箱から火薬抜きすぎ、橋が壊れなかつたらどうする？ シシシ」

「そうかあ？ 大丈夫じゃないかなー？ 今日、久々にルドウルフに会ってきたらこんなものくれてさ」

グンゾウは金属の筒をハイドに見せた。グンゾウには良く分かつたが、ルドウルフの説明では、その筒には導火線が付いており、火薬を詰めて、導火線に火を付けてから敵に投げつければ、ドラゴン竜のように大きな生き物でも死に至る大きな衝撃を与えられるとのことだった。流石に竜はドラゴン大袈裟だとしても、甲冑を着たオークであれば倒せそうだとグンゾウは思っていた。

「何やってるんでつか？ グンゾウはん？」

狩人ギルドに出発する前のシムラが覗きにくる。

「あー、シムラ。ルドウルフが強力な武器の部品をくれてさ。それを組み立てているんだよ」

「そーでつかー」

シムラはさっぱりわからないという顔をしていた。

「あ、シムラ悪いんだけどさ、狩人ギルドで動物を捕まえる投げ縄みたいな罠を作れる技スキル覚えられないの？」

「狩猟術つてのがあって、縄を使った罠は初歩の初歩でっせ。括くくりわな罠とか、なんとかか？」

「そうなんだ。それ今回習得してきてくれない？ この爆弾つてやつをその罠に付けて、導火線に火を付ければ、敵の傍で確実に爆破できると思うんだよね？」

「はあ。弓を新しくするのは決めてたんですけど、技スキルは悩んでいたの、ええですよー」  
「ありがとう。今回の作戦で役に立つといいなあ」

【現在】

「掛かったぜー！」

オダがホブゴブリンXLから前転で離れたつ、叫ぶ。

多くの縄に紛れて、オダがこっそりとホブゴブリンXLの首にしっかりと爆弾を括ってきた。鉄の筒が2本、しっかりと延髄の下、脊椎の上部にくつついている。ホブゴブリンXLは鈍いようで気付いていない。

そもそも腕と肩の筋肉が発達しすぎて、あの位置には手が届かないと思われた。

——お前に作ってもらった罠！ これから役に立つぞ、シムラ！

グンゾウは地面に横たわるシムラに目を遣やる。シムラは安らかな顔で気絶していた。

額にできた瘤こぶが痛々しい。

「ハイドっ！ 最後フィナーレだ！ 打ち上げろ！」

グンゾウがハイドに合図を送ると、ハイドにしては華麗な手捌きで杖を一回転させる。赤い宝石が付いた杖だ。

「了解だぜえ。デルムシツシツシ・エル・ヘンキシシ・イグ・アルヴ、キシシ、派手に弾ける、シツシツシ」

——最近、ハイドあいつのキャラ変わってないか？

ハイドの目の前に光る魔方陣が浮かび、その中心から拳大の火炎球が飛び出る。

ハイドは襲いくる眠気と戦いながら、必死で火炎球を操作する。火炎球はふらふらと飛び、ホブゴブリンX Lの背中に当たると「ポシユ」つという音を立てて消えた。

「フグアア？ ウエツフエツフエ」

ホブゴブリンX Lは何が起きたか分からず、一瞬間疑問に思ったが、大した魔法でないことを認識すると勝ち誇った様に嗤わらった。

ハイドはホブゴブリンX Lを嘲あざわらるように指差す。

「……キシシ……馬鹿……め」

全ての魔法力を使い果たしたハイドは、杖に持たれかかるように踞うすくまり、眠りに落ちていった。

——良くやったハイド。今はゆっくり眠ってくれ。

ジリジリ……ジリジリジリ……ジリジリ……。

「ウエツフエツフエ、ガアーウアー」

ホブゴブリンX Lは何事も無かったかのように、暴れて手足に絡んだ縄を左右へ引つ張る。その度に端を持っているリョータ達が振り回される。

「ウエツフエツフエ」

ホブゴブリンX Lはこのまま振り回し続けられれば勝てるとおもっている。グンゾウの手に持っている縄が食い込んで、血が滲んできた。かなり痛い。

ジリジリ……ジリジリジリ……ジリジリ……。

「ガアーウアー、ウオー、ウエイ？」

ホブゴブリンX Lが先程から背中でジリジリと小さな音が鳴っていることに気付く。

——やっと気付いたか。そう、お前はもう詰んでいたんだよ。ハイドの<sup>ファイアボール</sup>火炎弾が当たった時にな。

「20秒だ！ 全員ホブゴブリンから離れる！ 走れ！ 離れる！ 走れ！」

グンゾウは叫ぶ。

リョータ、タナカ、シンジョーが縄を手放し、ホブゴブリンから走って離れる。

グンゾウはハイドを、アキはシムラを引きずって離れる。オダはアキの後ろに付いて





チヨコが小隊を抜け出て、先行して走って近付いてくる。

「あれ？ こつち、なんかゴブの死体多くない？」

チヨコが零れこぼれそうな大きな目を白黒させて、ゴ布林達の死体の数を数えている。

「あん？ そつちは何匹だったんだよ」

リョータが折れた両手ツツアス、ダ剣を眺めながら、不機嫌に質問をした。

「予定通り20匹……くらい？」

それを聞いて、精神的に強いグンゾウも軽い目眩めまいを覚えた。

「ヨシノとか、シムラとか、ハイドは？ もしかして……」

「いや、大丈夫。ちゃんと生きてるよ。寝てるだけ」

そんなやり取りをしていると、カズヒコ小隊もやってきた。

「へへへ、紅鎧こうかいいるじゃん！ え？ ヨシノが倒したの？ すげえ！ へへ？ おつき

いホブゴ布林もいる！ なんか新しい白いのも、黒いのもいる。へへへ、こつちにも

青いのがいんだけど」

ミッツうるさが五月蠅さい。そしてもう一人五月蠅うるさい奴。

「だからよ。俺の、いや、俺様の小隊の活躍でほとんど倒したんじゃねーか。つまり、ダムロー旧市街はほとんど俺が取り戻したようなもんだよな。所詮ゴ布林……」

クズオカが大きな声で、大袈裟に、小さな自慢をしていた。

「タイチー、魔法力が余ってたら怪我の治療をお願いできないか？　もう俺、魔法力切れー」

「はい。わかりました」

グンゾウがタイチに回復のお願いをしていると、カズヒコがグンゾウに話かけてきた。

「なんか、こちらは大変そうでしたね」

「分かる？」

グンゾウは笑みを浮かべた。

「分かります。こちらは違う意味で大変でしたが……」

カズヒコはクズオカの方をちらりと見た。

「分かる。ちよつと、後を任せてもいいかな？　もう気絶しそうで……」

「はい。わかりました。少し休んでてください。後は、僕等でやりますので」

「助かるよ。無事でまた会えて良かった」

「こちらも。よくご無事で」

グンゾウはカズヒコと抱き合った。お互いを抱きしめる腕に力が込める。

カズヒコと離れたグンゾウは、ヨシノ、シムラ、ハイドが寝かせられた荷馬車の荷台に乗つた。空いている場所で横になった。

空を見上げると、澄んだ青空に眩しい太陽が輝いていた。

その空を白い鳥が2匹飛んでいく。静かで、穏やかな午後だった。

——ダムロー旧市街ってこんなに静かだったんだな！。

皆の寝息が聞こえる。

「本当にみんな良くやったよ。すごい。誇らしいよ」

グンゾウは誰に言うでもなく、呟いた。

「……オルタナに帰ろう」

カズヒコ達に会って安心したのか、グンゾウは目を閉じると吸い込まれるように眠りに落ちていった。

## エピローグ・黄昏の向こう

「パパ、遊べえー」

髪の毛をツインテールにした3、4歳の女の子が襲いかかってくる。その後ろからはさらに小さい男の子が覚束ない足取りおぼつかでよちよちと付いてきている。2人の顔は良く似ていた。

掛け布団の上から全体重を預けて腹部に飛び込んでくる。グンゾウはその衝撃で「おふっ」と声が出た。小さな男の子も足下によじ登ってくる。

「……今日は疲れているから、おはようございません」

グンゾウは掛け布団を引っ張り、奥に潜ろうと試みた。

「だめ、だめえ。ふぬー!」

女の子はお怒りだ。顔を般若のようにしているつもりだが、変顔にしか見えない。

グンゾウは思わず笑ってしまう。

「ここから、……ちゃん、パパはお仕事で疲れているんだから、少し寝かせてあげなさい」  
女性の優しい声がある。顔は見えない。

「やだ、やだあ、遊べ! ぬーん!」

女の子がしがみついてくると、髪の毛からシャンプーの匂いと幼い子どもの特有の甘い匂いが混ざった香りがした。

——これは起きないと駄目かな……。

グンゾウは諦めて目を開けた。

目の前には眩しい程の黄昏たそがれた風景。

西に沈む大きな夕日がオルタナの街を茜色に染めていた。

グンゾウは街の中心から義勇兵宿舎に向かう途中にある、小川にかかる石の橋の上  
いた。

石造りの低い欄干らんかんの上に座り、夕日を眺めていたようだった。

「あれ？ 夢……か」

——何か大切なことを思い出していたように思えるけど。今、見た夢すら思い出せないや。

グリムガルに來た時に味わった、体の一部を失うような微かすかな喪失感と哀しさだけがグンゾウの心に残っていた。

誰かが近付いてくる足音がして、名前を呼ばれる。

「グンゾウさん」

落ち着いた、意外と低い声。でも可愛らしい女性の声で名前が呼ばれる。声だけで誰だか分かる。あの女性だ。

「アキ」

グンゾウは振り向いて、アキの顔を見上げた。アキは街での普段着の上に神官衣を羽織り、髪の毛は片側にまとめて縛っていた。グンゾウは、自分よりアキの方がずっと神官衣が似合うと思った。

——アキの髪の毛もすつかり長くなつたな……、かわいい。

グリムガルに来てから随分長い時間が経っていた。当初数えていた日数も最近では数えることを止めていた。

アキがグンゾウの顔を見て、伏し目がちの目を大きく開き、驚いたような顔をする。

「どうかした？ 何か顔に付いてる？」

グンゾウが尋ねる。

「あ、……いや、その、グンゾウさん……」

「ん？ ごめん、鼻毛とか出てる？」

アキは言いづらそうにしていたが、グンゾウが全く気付いていない様子だと分かると意を決したように口を開いた。

「グンゾウさん……、泣いてるから」

「え?!」

グンゾウは自分の頬を触る。頬を流れる涙が指先を温かく濡らした。

——俺は……泣いていたのか……。

少しの間、時が止まったような空気が流れる。

「あれ、どうしてだろ? ちよつと寝ててさ。何だか懐かしい夢を見ていたような気が

したんだ。全然覚えてないんだけど……。恥ずかしい所見られちゃったな……」

グンゾウは、目を擦りながら照れ笑いをした。

「いえ、ごめんなさい。戸惑ってしまって。大人の男性が泣いてるのなんて、あまり見慣れてないから……」

アキも細くて白い指を体の前で絡ませて、恥ずかしそうにしている。

「あー、あつ、そう、あ、どうしたの? 俺に用事かな? シムラが怪我したとか?」

グンゾウは気まずい雰囲気を変えるために、違う話題を振った。

「あ、ち、違います。えーつと、その、そうそう、打ち上げです。今回の作戦成功の打ち上げに行こうって、みんなが。いつものように、シエリーの酒場ですけど」

「え? あ、もうそんな時間?」

グンゾウは持つてもない時計を探すような仕草をした。

「はい。リョータ達は早く飲みたいみたいで、もう出発しちゃいました」



「そっか、ごめん。探してくれたんだ。じゃあ、行こうか？」  
「ええ、一緒に行きましょう」

アキがグンゾウを誘うように、北区の方に少し歩く。

——「一緒に」か……やばい、嬉しい。

グンゾウは立ち上がると、立ち止まったまま夕日を眺める。夕日に向かうように数羽の鳥が群れを成して飛んでいた。

「夕日、綺麗ですね」

アキが立ち止まって言った。

「綺麗だね」

グンゾウは振り返り、夕日に照らされるアキの顔を見て言った。

アキの顔は、消えてしまった遠い記憶にある誰かの顔に、どこか似ているような気がした。

Fin.

## Level. 2 1シルバーの英雄

## プロローグ．真夜中の再会

通りすがりの雲が、紅い月を塞ぐ。

暗闇の先に、砂を蹴る音と激しい息づかいが聞こえる。不愉快な、金属の擦れあう音。時折、雲の切れ間から漏れた紅い月に照らされ、ふたつの白刃が煌めく。火花を散らすかのように激しく衝突し、そして離れるを繰り返していた。

グンゾウは緊張で口の中が乾く。

鼻腔には嗅ぎ慣れた銅の臭い。足下に滑る液体。そして倒れた複数の人影。

咄嗟に顔を確認し、安堵する。そして、そつと首筋に触れ、生死を確認した。手遅れだ。

——確認の順番が違う。俺は神官なんだぞ。

意味の無い反省。わかっている。

しかし、神官である前に人であり、大切な仲間を思う気持ちは止められない。

——信仰が薄い所為だと、カレンは俺を責めるだろうか？

注意深く、剣戟の音に近付く。

数合すうじう続いた後に静寂が訪れた。

ようやく、少ない光が網膜に捉えられる距離に近付いた時、目の前に衝撃的な光景を突きつけられる。

突きの体勢で槍を構えたヨシノと敵の影。両者とも動きは止まっていた。ヨシノの首先には敵の長剣が突きつけられている。

互角と言うには不利すぎる体勢だ。

「ヨシノっ!」

グンゾウが駆け付けようとする。

「駄目っ!」

ヨシノが荒々しく声を上げて、グンゾウが近付くのを制した。

「本来に来ちゃ駄目! グンちゃん」

——そうはいかない。

「勝負は付いてる! 俺等は辺境軍の正規兵じゃない。ただの雇われ義勇兵だ。俺の名はグンゾウ。神官だ。傷を負っているなら治療しよう。君等を追うことはない。仲間を解放してくれ!」

敵に声をかけながら、慎重に忍しのび足で距離を詰める。

暗闇で敵の顔はよく見えない。

明るかったとしても、見えないと思われた。影像からクローズヘルムを着けている様子だったからだ。

——咎光トケミツの射程まで、もう少し……。

緊張で足が震える。頬の汗が流れ落ち、音を立てて神官衣に染みを作った。

「グンゾウ?」

「え?」

美しい女性の声。

敵に名前を呼ばれ、グンゾウの緊張が緩む。

瞬間的に敵の影がヨシノから離れ、今度はグンゾウとの距離を一瞬で縮めた。光を反射する刃やいばの軌跡きせきだけが、残像ざんぞうとして脳裏のうりに残った。初めて目にする不思議な足捌あしさばきに目を奪われる。

感心する暇いしじまも無く、今度はグンゾウの首に長剣が突きつけられた。

——やばいっ!

緊張に体を硬くする。グンゾウは死タナトスに触ふれられた心地がした。

その時、気まぐれな風が通りすがりの雲を吹き飛ばし、月明かりをもたらず。

「え?」

再び間拔けな声を上げると、そこにはクローズヘルムバインサーの面防を上げた敵の姿があつ

た。

切れ長の大きな目に長い睫毛<sup>まつげ</sup>。印象に残る深緑の瞳と凜<sup>りん</sup>とした眉。意志の強そうな眼差し。人間離れした小ささの美しい顔。透けるような白い肌。

「ヴ、ヴェール……」

「やはり、お前達か」

ヴェールは殺気を保ったまま、口を開いた。

刃<sup>やいば</sup>の気配を首元に感じる。

「あの……、同期の誼<sup>よしみ</sup>で、これ、下ろしてくれないか？」

「貴様に状況を選ぶ権利はない」

凜とした冷たい声。

「わかった。さつき言った通り。俺達はただの雇われ義勇兵で、この件に深く関与する義務がない。よって君のことも報告しない。ルミアリスに誓おう。今、武器を捨てる」  
グンゾウは戦棍<sup>メイヌス</sup>を放棄して、両手を上げた。そして、ちらつとヨシノに視線を遣る。  
ヨシノは脱力し、膝をついて呆<sup>ぼう</sup>けている。

——もうすぐチャンス来るかもよ。ヨシノちゃん。ヨーシノちゃん。ヨシ子先生。

「追ってきたら、次は見逃さない」

ヴェールはそう言うと、剣を収めながら、不思議な動きでグンゾウと距離を取る。上半身は動かさず、直線的に移動する足捌きだ。

グンゾウは声をかける。

「ヴェール。君は何をしてるんだ？ キツカワとはなんで別れたんだ？」

ヴェールの動きが止まる。少しの静寂。そして囁くような弱々しい声にする。

「キツカワは……、キツカワは死んだ。もうここにはいない」

そういうと、ヴェールは暗闇の中に融けていった。

「それは、どういふ……？」

グンゾウは暗闇に手を伸ばしたが、そこにあるのはヴェールの残した幽かな幻影だけであった。

# 1. 始まりはいつもシエリーの酒場から

薄暗いシエリーの酒場。

その真ん中で、多くの義勇兵から注目を浴びている光り輝く一団があった。その一団はゴブリンスレイヤーと呼ばれ、先輩義勇兵から押搦やゆされる存在だった。全員、幼きすら感じさせる少年、少女達だ。

「みんなー、今日は俺達のおごりだー！ じゃん、じゃん、飲んでくれー！」

声を出したのは、見覚えがある天然パーマの小柄な少年だった。少年の顔は紅潮し、自信に満ちあふれていた。

周りを囲む義勇兵達から喝采かつさいと大きな歓声が湧き起こる。

酒が無料ただになることを聞きつけ、次々と義勇兵が集まり、お祭り騒ぎの様相を呈してきた。どこからか現れた演奏家達が音楽かなを奏で始める。楽しいな空気が酒場中に一気に広がった。

シエリーの酒場でたまに起きる、賑にぎやかな夜宴やえんの始まりだった。

「あれ？ 今日は何んかあったの？」

既に始まっていた打ち上げにアキと遅れて到着したグンゾウは、先に到着していた仲間達に尋ねた。

「なんかねー。ゴブちんスレイヤーのみなさんが、デートスポットを倒して手に入った牽制球けんせいきゅうで今夜の酒代は全部おごってくれるんだってー。ラッキーだったねー」

酒場全体の雰囲気けい気に酔っているのか、普通に酒に酔っ払っているのか、ヨシノが楽しそうに状況を説明している。手に持った杯には、今日もウワの実から作った蒸留酒が入っていた。

全員が、ヨシノの発言は少し間違っているように感じたが、既にヨシノ翻訳機を脳内に搭載しているため、間違いなく意味は伝わった。

「ほほー。なんだか得したね。デッドスポットの懸賞金けんしょうきんていくらなんだっけ?」

グンゾウはさりげなく自分の隣の椅子をアキのために引きながら座る。アキは特に違和感を覚えた様子もなく、小動物のようにちよこんと頭を下げるとその椅子に座った。

——幸福は小さな努力の積み重ねで実現する。

「なんでも30ゴールドらしいですよ。それにデッドスポットがいなくなっただことで、サイリン鉱山での狩りがずっと安全になるので、3階層目くらいまでの狩り場で安定して稼げるようになりますね」



タイチは表紙がぼろぼろに擦りきれた手帳を見ながら、興奮している。

「へえっ！ 30ゴールド！ デッドスポットつて強いんでしょ？ 彼等かれらすごいね。ま

あ、俺達のダムローの収益あがりがいくらになるか、精算しないとわからないけど」

「あいつらなんて、大したことねーよ、今回の俺様の活躍に比べれば……な、眉毛！」

既に顔を真つ赤にしたリョータが、右隣に座っているタナカと肩を組んだ。タナカは迷惑そうな顔をした。リョータの前の机テーブルには空いたジョッキが3個も並んでいる。

——え？ リョータはそんなに活躍……あ、したつて言えば、したな。うん。うん。

した。した。ん？ ヨシノは紅鎧べによろいと白甲冑、アキと俺は黒甲冑、リョータは両手剣ツヴァイヘンダーを

折られ……んー？ あれー？ 頼りになったかなー？ んー、いや、なった。なったと

思おう。

「ああ……、う、うん……、まあ……」

戦闘クラスが終わったタナカは借りてきた猫ニャアのように大人しい。そして暗い。しかし、体格は野獸級、眉毛は相変わらずフサフサだ。

「お前は根暗かつ！」

リョータがタナカをからかう。

大きい体を小さくしているタナカは、先程からちらちらと目線だけでアキの顔を伺うかがっている。先の戦闘時の件で、アキのことを少し意識しているのかもしれない。

——要注意人物<sup>ツ</sup>2だな。

今日の打ち上げにはダムロー旧市街奪還作戦に参加した仲間全員に声をかけた。クズオカ達は別の狩り場に移動する予定があり、お断りの申し出があった。意外と働きの者だ。

シンジョーとオダは用事があり、グンゾウ達よりさらに遅れてくるらしい。シンジョーとオダは同じ小隊<sup>パーティ</sup>だが、タナカは独<sup>フリーランス</sup>りだ。

胸とお尻をプリプリさせた若いお姉さんの手によって陶製のジョッキがふたつ運ばれてくる。店に入った時に頼んでおいたグンゾウとアキの分のエールだ。

「よし、グンゾウさんとアキのジョッキが来たから、本番の乾杯をしよう！」

カズヒコが立ち上がった。それに従って全員立ち上がる。

「じゃあ、乾杯の挨拶をグンゾウさんから」

「え？」

突然、乾杯の挨拶を任されてグンゾウは戸惑った。

——ここは大人の実力の見せ所か……。

「あー、何だか、ゴブリンスレイヤーにお祝いの雰囲気を取られちゃったけど。まあ、みんなが頑張ったおかげで、俺等もすごく成功した。もちろんタナカを始め、他の小隊<sup>パーティ</sup>の方々にもお世話になりました」

皆がタナカに頭を下げる。タナカも恐縮したように頭を下げた。

「オツサン、挨拶がなげーぞー！ おねーちゃん、もう一杯！」

できあがつているリョータは乾杯前に杯を飲み干している。「態度が悪い！」とヨシノに肩を叩かれて、なんだか嬉しそうにしている。

「……コホン、ダムロー旧市街にいた新市街のゴブリン勢力も弱体化し、新人義勇兵が完全に狩りができるようになるだろう。俺等は今後現れる後輩のためにすぐ<sup>ため</sup>為になることをしたと思う。未来のために良いことをしたんだ。だから、俺はみんなを誇りに思っている。今日は楽しもう！ お疲れ様！ 乾杯！」

「かんばい！ 勝つてうれしー!!」

「俺様かんばー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「かんばい」

「乾杯っ!!」

「かんばーい、あかん、俺の酒、もうないで」

「かんばーい！」

「かんばえへへへっ！」

「なにそれ？ かんばーい」

「乾杯、疲れたー」

「キシッ！」

「……乾杯っす！」

「……いい」

「おっ！ 俺ちゃんも入れてー、ぱんかーい！」

突然どこからか現れたキツカワも参加し、皆それぞれに乾杯をした。杯を何度もぶつけ合い、お互いの健闘を称え合った。

グンゾウも目の前のタナカや隣にいるハイドやアキだけではなく、全員と杯が割れそうなほどぶつけ合って生き残った幸せを分かち合った。

——稼ぎなんてどうでもいい。仲間を誰も失うことがなかった。こんな素晴らしいことはない。

「……やっぱりすごい美人ですね。あれだけ痩せているのに、あの神官衣の下の膨らみはやばい」

酔っ払ったカズヒコが目を輝かせる。カズヒコは割と女性の胸が好きだなとグンゾウは思った。至って正常だ。

「うん、そうだね……。手足が細くて長くて、顔が小さくて、均整がすごい。そして清楚な美人だ」

グンゾウも酔いで座った目で答えた。グンゾウは女性の均整バランスが好きだ。

「何て言うか、昔、組んだことあつて……あの時は二度と会いたくないって感じの性悪女だったけど、あんな笑顔を見せるなんて信じられない。今ならずと組んでいたい」

タナカが珍しく饒舌じょうぜつだ。

——アキにちくつたろ。

「……かわいいっす」

デカイクザクが頷く。

「あれ？ クザクも女の子に興味なんてあつたの？」

グンゾウがデカイクザクを見上げるように質問をした。クザクが呆れたような目でグンゾウを見下ろして答える

「当たり前……じゃないっすか。俺は普通ストレートですよ」

「俺はアキさんが……、いや、でも、メリイは飛び抜けた美人だからもつと好きだ」

後から打ち上げに参加したオダが最低な発言をした。

——この発言は絶対忘れない。

「……」

シンジョーは黙って酒を飲んでいる。リョータとタナカの間に座って相変わらずの笑顔だ。寝ているリョータに上着をかけてあげたり、妙に優しい。

夜も更けて、打ち上げは既に終わり、中締め解散していた。リョータはいつものように酔いつぶれ、<sup>テーブル</sup>机に顔を突っ伏したまま<sup>いびき</sup>鼾をかいている。カズヒコ・リョータ両小隊<sup>パーティー</sup>の女の子達や子ども達は宿舎に帰った。しかし、シェリーの酒場はまだまだこれからという盛り上がりを見せている。

そして、グンゾウ達は何をしてるか？

酔っ払った6人の男達（シンジヨは除く）は、アルコールによる影響で脳の活動水準が低下し、完全に下衆<sup>げす</sup>集団に成り下がっていた。店中の女の子を眺めながら、どの娘がかわいいなどという品評をしている。

今、評価対象になっていたのはゴブリンスレイヤーの神官メリイだった。

彼女は一時期、固有の仲間を持たず、誘われるがままに小隊<sup>パーティー</sup>を移り変わっていた。タナカが言っていた通り、その時の異名は「性悪メリイ」「恐怖のメリイ」等と呼ばれ、見た目の良さに反して、協調性の無さと、神官としての働きの悪さが有名だった。

しかし、ゴブリンスレイヤーと盛り上がっている彼女の顔を見る限り、そんな片鱗は少しも<sup>うかが</sup>窺えない。

幸せそうな笑顔で仲間と勝利を祝っていた。その美しい顔は、清楚で大人な表情の中に、一滴の幼さを感じさせる<sup>はかな</sup>儂げなものだ。

「でもっ！ あえて僕はゴブリンスレイヤーの中で言えば、あの魔法使いを<sup>お</sup>推します！」

カズヒコは飲み干したジョッキを机に置きながら、良い声と良い顔で最低な事を言い始めた。皆の目がゴブリンスレイヤーの魔法使いに集まる。カズヒコは続けた。

「だって見てください。あの白く柔らかそうな肌質。抱き心地の良さそうな丁度良い肉付き。それになんと言つても零れんばかりの……もう、巨とか、爆じゃないです。もう、魔乳ですよ。若く垂れてない、しかも太つてもない魔乳の女の子なんて、そうそう出逢えませんか！ 顔なんて飾りに過ぎないっ!!」

熱くなったカズヒコは机を握りしめた両手で叩いた。

皆の間で「なるほど！」という同意の響めきが起きた。その後、爆笑が訪れる。

「あつはっはっはっは。ひーひっひっひっひ、カズヒコくつだらねー。サイテーだな」  
グンゾウは腹が振れる程笑った。

「あれ？ なんか違いました？」

カズヒコはニヤけた顔をしながら、首を傾げた。酔いが良い感じに回っている。

「あ、面白い話ついでに、リョータはゴブリンスレイヤーの中で誰が一番良いつて言つてたか分かりますか？」

寝ているリョータのことをちらりと横目で見ながらカズヒコは謎かけをしてきた。

皆、頭を傾げる。酔っ払いなので頭が回らない。

「んー……、普通に女神官とか？」

クザクが白けた顔で答えると、カズヒコは嬉しそう微笑んだ。

「違うんだよ。なんと、あの狩人の女の子だって。あの子に話しかけたことあるけど、かなりの天然で意味不明なことを言う女の子なんだよね」

また皆の間に「ほほう」という同意の響めきとよが起きる。

「それっぽいなー、リョータは天然の女の子が好きなんだなー。……ていうか、カズヒコは何であの女の子に話しかけてるんだよ」

また爆笑が巻き起こる。グンゾウはユメにヨシノの姿を重ねて思い浮かべていた。

「じゃあ、じゃあ、次はあつちのパーティ小隊を……」

カズヒコはまた別のパーティ小隊を指差して、話を始めた。下らない酔っ払いの話は延々と続く。

——今夜はすごい楽しいなあ。

グンゾウは酒場の喧噪と酒に浮かされて、ふわふわとした幸せな雰囲気ふんいきを満喫していた。

翌朝。オルタナは未明に小雨が降り、明け方からずつと曇天どんてんだった。

稼とらぎなんてどうでもいい。仲間を誰も失うことがなかった。こんな素晴らしいことはない。そんなグンゾウの崇高すうこうな想いも、目の前に積まれた銀貨シルバの前に崩れさった。



「25ゴールド?!」

グンゾウの声が上<sup>う</sup>擦<sup>わざ</sup>る。いい歳のおじさんが恥ずかしい醜態を晒していると言われれば、あえて受け容れようと思つた。

ダムロー旧市街での戦争（既に戦闘の域を超えている）から得た戦利品は、荷馬車2台で運び出した。食料等は全て破棄し、現金と宝石、そして指揮官<sup>コマンドーシス</sup>級が身に付けていた装備を中心に、良質な装備を集めてきている。ダムローからオルタナへの経路で、馬車を通れる道は限られており、グンゾウ達は帰路でかなりの遠回りを強いられていた。

買取り品の量が膨大な量なので、店舗で経営している大きな買取り屋をクズオカに紹介してもらい、一晚預けて見積もりをお願いしていた。その店は天望楼から東区に少し入った、上品な地域の商業地域にあつた。

通されたのは買取り屋の裏にある、大きな倉庫の前だつた。倉庫には重厚な金属の扉が付いており、これまた大きな錠前が掛けられていた。周囲は高い石壁で囲われ、隔絶された静寂さが漂っていた。捕まった罪人のような気分になる。

買取り屋の壮年の男性は、疲れた様子で灰色の髪をかき上げながら、ぼりぼりと頭皮を搔く。ふけが肩にぼろぼろと落ちて、それを手で払う。そこでひとつため息を吐くと、羊皮紙にまとめられた買取り品の一覧表を見ながら説明を始めた。

「あー、大体そうなるね。価格のほとんどはこれらね」

そう言つて男性は、赤、黒、青の揃つた甲冑を指差した。

「この赤と黒と青の甲冑は、なかなかお目にかかれなくらい良質な金属で出来ていたのと、表面に施された装飾に小さな宝石が埋まつて、それぞれ6ゴールド」

「まじか……」

グンゾウと一緒に来ていたシムラが驚きの表情で固まっている。なお、アキとチョコ、チョコの付属品としてミツツも一緒に来ていて、3人とも目を大きく開けて驚いている。チョコは目の玉が落ちてしまうのではないかと思うくらい目を見開いていた。

「この青い弓が2ゴールド50シルバーね。残りの装備と屑鉄は一山で2ゴールド。宝石類や呪術品が全部で325シルバー。あと、あんたら馬鹿かね。銀貨まで一緒に預けてつたじゃろ？ 数えたら206枚あつたぞ。戦争でもしてきたのか？ ありがたいが、一遍いっぺんにこんな量を持ち込まれたから、見積もる作業で眠れんかつたわ。年寄りには堪えた」

男性は呆れた表情をして、グンゾウ達の目の前に金、銀、銅貨の詰まつた袋を積み上げると、その上に羊皮紙を2枚出した。

「受け取りの署名を2枚にしとくれ。1枚はお前さん方用の明細だ、既にわしが署名してある」

買取り屋からの帰り道、大量の貨幣を運びやすくするため、まず最初にヨロズ商会へ寄った。両替されて出てきた金貨を持つグンゾウの手が震えた。

「こんな大金、手にするのは2回目だなー」

宿舎への帰り道、グンゾウは思わず声に出してしまった。

「1回目じゃないって、すごくないですか？ また、服が買えそう」

チヨコは嬉しそうにスキップしながら進んでいた。

「へへへ、俺等、大金持ち？ へへっ！」

「ま、先輩義勇兵の中には仲間を失った小隊パーティへの餞はなむけに1ゴールドをぼんつと出せる奴等

もいるみたいだから、大した金額じゃないんだよ。……きつと」

——クズオカ達と分けたら、1人当たり1ゴールドちよつとだしな。

「それも、すごい話つすねー。俺はそんなことでけへんわー」

命を懸けた大変な作戦だったが、それなりに報われたため、皆、帰路の足取りは軽かった。

1人だけ濡れてぬかるむ地面を眺めながら、浮かぬ顔をしている仲間がいた。

……アキだ。

彼女は大金の護衛に付いてきているため、白い部分鎧の上に神官衣を纏い、黒い長剣を腰に帯びていた。

「どうしたの？ アキ。浮かない顔に見えるけど」

グンゾウが声をかけると、アキは真剣な表情のままグンゾウを振り返った。

「あ、いや。買取り金額の件で……」

「え？ なんか不足があつた？」

「いえいえ、違うんです。指揮官級の甲冑や武器が高価で買い取られていることを考えると、私がもらつちやつたこの胸当や剣や盾は換金して分配しないといけないかな……と」

アキは真剣な顔で分配の公平性について悩んでいた。そんな真面目なアキがグンゾウはたまらなく可愛かった。

「まあ、いいんじゃないの？ 最初に決めた規則ルールで装備品の中から装備できるものはおらつていいって話だつたんだし」

「そうなんですけどね……」

「買取り額を知つても、もうヨシノはあの槍を手放さないと思うよ？」

ヨシノも白甲冑の槍を接収していた。当然、槍の長さは身長に合わないため、穂だけを自分の槍に取り付けていた。

「ヨシノは……今回の戦いで一番活躍しているので。でも私は……」

——んー。どうしたらいいのかな？ ……いや、ここはいつもの型パターンだ。

アキは割と悩む性格だ。リョータパーテイ小隊で言うとは行動派のヨシノとは真逆で、悩むと積極的に解決に動くわけでもなく、いつまでもじつと悩んでいる。

最近グンゾウもアキの性格に慣れてきていて、こういう場合は解決しなくても話を聞いて、慰めてあげればいいのかと割り切っている。

「そっか、ヨシノよりも活躍していいと思ってるんだ」

「……ええ、ヨシノがいなかったら、勝てなかったと思うし」

「そうか、勝てなかったか……。でも、指揮を預かってた俺からしてみれば、アキがいなかったら、あの戦いは絶対勝てなかったけどな」

「えっ?」

アキが色白の顔をグンゾウに向けて、小さな驚きの声を出した。グンゾウは笑顔で見返す。

「黒甲冑はアキが紅鎧ベによろいから引き離れたし、止めも刺した、そして疲労困憊の俺を救った。アキが圧力をかけ続けたらから両手剣の折れたリョータもホブゴブリンX1にやられなかった。紅鎧ベによろいをヨシノが安心して倒せたのも、アキが後詰めとして控えてたからだけどな」

「そんな、それは……」

アキは恥ずかしそうに俯うつむいた。背筋を丸めて歩いている。

「それでも、もし、すつきりしないなら、悩んでないで、帰ってみんなに聞いてみようぜ」  
そう言うとグンゾウはアキの背中を背当の上から叩いた。

「は、はいっ!」

アキは叩かれた勢いで胸を張り、数歩前に出た。

そこに突然、後ろからチヨコが駆け寄って行って、アキと腕を組んだ。

アキは一瞬驚いたが、チヨコが何事かを耳元で囁くと、2人で楽しそうに話し始めた。  
アキはもう地面を向かずに話している。

——良かった、良かった。やっぱりガールズトークが一番楽しそうだな。しかし、な  
んで突然チヨコが走ってきたのか?

そこへ後ろからミッツが現れて、グンゾウを追い抜いてから止まった。がつくりと肩  
の力を落としてしている。

「どうした? ミッツ?」

「へへっ、グンゾウきーん、チヨコが俺の話の聞いてくれないんですよ。へへへ」

心なしか、ミッツの笑い声は弱々しかった。

——しかし、何故笑っている?

「へらへら、俺、ダムローで大活躍しましたよねー? でも、チヨコが全然認めてくれな  
くて、へへへーい」

「あー、うん、あ、あ、そうね……そうそう、活躍してたよ……」  
「ですよね！　へへへへへっ！」

ミッツは嬉しそうな顔を見ると、またチヨコの方へ話しかけに行つた。  
しばらく見ていると、チヨコに嫌そうな顔をされていた。

「うん、きつと。……俺は見えないけど」

グンゾウはミッツが居なくなつた後で、そう小さく呟いた。

——あー、なんだかアキの悩みは可愛いく思うのに、ミッツの承認欲求は鬱陶しいなー。……いかん、いかん。仲間だから同じように話を聴かないとな。

グンゾウは反省しつつ、ため息を吐いて空を見上げた。オルタナの空は、グンゾウの気持ちを反映させたような曇天模様だった。

「あの青い弓、もろうとけば良かったかなー？」

グンゾウの傍でまた一人悩み始めた少年がいた。しかし、グンゾウは聞かなかつたふりをした。

この世は誰もが悩みを抱えている。

## 2. それは穏やかで退屈な殺戮の日々

「軽ーい!! 本当にサイコーだね!」

ヨシノが跳び回りながら、白く輝く槍を振るった。その度に小さく醜悪な生物の命が奪われていく。そのヨシノの左手首には光る六芒が浮かんでいる。グンゾウの習得した光の護法だ。

——最高じゃないと困っちゃう。なんせ高かったからな。

光の護法の習得には金貨1枚かかった。光の護法は身体能力や様々な抵抗能力、自然治癒力が向上する効果がある。光明伸ルミアリスのシンボルである六芒と関係があるのか、1度に6人までしか範囲に含められない。これが6人小隊が最も効率が良いとされる由縁だ。光の護法の効果は30分程しか効果が継続しないため、グンゾウの戦闘での管理事項に30分という時間管理も入った。

光の護法が使えるようになって神官は初心者卒業と言われるらしい。あとは3ゴールド払って光の奇跡サクラメントを覚えれば一人前となる。

——確かに、体は軽い。まるで20代に戻ったみたいだ。

「………思ってはみたものの、20代とか、覚えてないけどね?」



スマッシュ  
強打。グンゾウは戦棍メイイスを振り下ろし、目の前のゴブリンの頭を叩き潰した。骨の砕ける感触メイイスが戦棍を通じて手に伝わる。

——不快な感触だ。

グンゾウはショートスタッフではなく、戦棍メイイスを新調した。それは先端が出縁形でぶちをしており、上から見ると六芒だ。見た目の良さと軽量化、衝撃力の集中を図っている。カレンから貰ったショートスタッフに比べると武骨さは拭ぬぐえないが、実戦的であった。

——光よ、憐れな怪物にルミアリスの慈悲のあらんことを……。

グンゾウは目の前で、今まさに命を終えようとしているゴブリンに祈りを捧げた。

「オッサンやるじゃねーか。戦士に転職したらどうだ？」

リョータがゴブリンを3匹相手にしながら、グンゾウをからかってくる。

「俺は殺生なんてしたくないの。どこかのリーダー様が、無謀にもこんな大量の群れに突っ込むから俺まで戦わなくちゃいけなくなっちゃったの」

グンゾウが皮肉で返す。

「こんな裸のゴブリン達は数の内に入んねーんだよ！ 今ならイケる！ 転輪破斬サマーソルトボム！」

リョータは信じられないことに甲冑を着たまま前方宙返りをして、目の前のゴブリンに両手剣を叩きつけた。

甲冑も含む全体重を乗せた両手剣の一撃は、ゴブリンを立ったまま開きにするのに十

分な威力を發揮し、地面まで斬り裂いた。新調された両手剣は肉厚の片刃で、大きな剣鉞ふぜいといった風情だ。

——まあた、派手な技を覚えてきたな。

サマリットボム  
 転輪破斬は空中で回転をするため、体の上下で重さの均衡バランスを取る必要がある。リヨータはこの技を使うために、両手剣の重さを増し、鎖帷子の量を減らした。防御力を落としても派手な攻撃に資源リソースを費やすという、正にヤンキー理論だとグンゾウは思った。サマリットボム  
 転輪破斬で開きにされたゴブリン。それ以外の2匹は恐れをなして逃走しようとする。

刹那、白い光が横に走った。

逃げ出したゴブリンの1匹に槍が刺さる。槍が刺さった瞬間、突進してきたヨシノの片刃シの両手剣ミが手足を切り落とした。

投げられた槍は、投げ槍ジャベリンという槍スキルの技だ。ヨシノはそれに独自の改良を加えた。投擲された槍の後を追って移動し、槍が当たれば止めを刺す。もし、槍が躲かわされた場合でも崩れた体勢を狙うという、一挙両得な攻撃方法だ。ヨシノの足の速さを活かした鬼の複合技コンボ。瞬間移動撃と呼んでいる。本人的にはまだ満足な仕上がりではないらしい。

この技を実現するために、やはりヨシノも鎖帷子の量を少し減らした。

ここにきて両戦士が防御力を少し下げたのには理由がある。彼女のお陰で後衛のた

めに防御に徹するという必要性が減ってきたからである。その彼女は今、4匹のゴブリン達と奮戦していた。

「ちよつと、……誰かー、少し手伝ってくださいーい」

アキは忙しい。

代わる代わる襲いかかってくるゴ布林達を長剣で牽制したり、盾打で弾き飛ばしたり、休む暇がない。しかも、リョータと違い、1匹も後ろに漏らすことなく、全て引き止めている。

アキの甲冑姿は美しかった。白い光沢のある金属で出来た甲冑に身を包んでいて、張り出している大きめの肩当に比べ、腰の部分は細身に絞られた意匠になっており、女性らしい曲線美を作り出している。元がゴ布林の装備だという点を除けば最高だ。

「ほいほーい」

緊張感の無い声を出して、ヨシノがアキの救援に向かった。

「待て、こらー！」

リョータは逃げるゴ布林を追いかけて行ってしまった。

——なんか、前よりまとまり悪くなってるね？

グンゾウはため息を吐いた。

「グンゾウさん、なんか新手が来ましたで」

シムラが見ている先には、3匹の新手がこちらに気付いた様子だった。グンゾウ達の方に来るかどうかは分からない。何せグンゾウ達の足下はゴ布林達の死体だらけだ。しかし、新手の3匹は賢い選択をしなかった。グンゾウ達の方に向かってきてしまった。

——愚かな。無駄に命を散らすこともあるまいに。

「キーンシツシツシツシ、ジエスキシシ・イーン・サルクシツシツシ・カルト・フラム・ダルト、キシツ」

——まあ、そうなるよな。

ハイドが気持ちの悪い笑い声と共に、現時点の最高攻撃魔法を唱える。

サンダーストーム  
暴威雷電の魔法だ。

向かってきたゴ布林達の頭上から幾筋もの雷が落ち、雷鳴が轟く。愚かで不幸なゴ布林達は数本の雷に打たれ、絶命した。……と思いきや、1匹のゴ布林は上手く雷をすり抜け、グンゾウ達に向かってくる。武器は粗末な木の棒を持っていた。

「ギジジ……」

ハイドは両手の爪を噛み、見るからに悔しがっている。「もう、寝る！ キシっ！」と言うと、地面に座り込んでしまった。

——外れたくらいで寝るなよ……。

「ピッチャー振りかぶって、投げた！」

本人もよくわかっていない台詞を言いながらシムラが、小型の刃物を3本投げた。星貫ほしぬき スキルという狩人の技わざだ。

投げた刃物は飛苦無とびくまと呼ばれる投擲専用とうてきの短刀で、ゴブリン目がけて真っ直ぐ飛翔し、顔に1本、胸に2本刺さった。相変わらずシムラの遠距離攻撃は命中精度が高い。投げた直後からシムラはゴブリンに近付くと、劍鉞で斬り付けた。

——あれなら、放っておいても勝つか……。

グンゾウは他に注意を向けた。

それは晴れた日の穏やかなダムロー旧市街だった。

先程、ゴブリン達の大量虐殺を終えたりョータ小隊パージェイは、崩れかけた建物の影に隠れて昼食を食べていた。シムラが狩人らしく白神のエルリヒに食料の捧げ物をし、感謝の祈りをしている。

グンゾウ達が兵站へいたんを奪い、補給路の橋を破壊した作戦が成功して以降、ダムロー旧市街のゴブリン達は目に見えて減っていった。特に装備の充実した新市街出身のゴブリン達が先に減っていき、今はいくつかの集団が再起を目指して大きな建物を占拠しているのを除いて、旧市街には昔ながらの粗末な装備のあぶれ者ゴブリン達が糧を求めて歩

いているだけの状態に戻った。

それらは新市街ゴ布林達との過酷な戦争を生き抜いて、成長を遂げたりヨータ小隊パーティからすれば、物足りない敵であった。今もリョータの独断専行で10匹以上いる集団に突撃したが、特に危険な目に遭うこと無く殲滅した。

「なんだか裸ゴ布林達じゃ、物足りねーな」

リョータはサンドイツチを食いちぎりながら、つまらなそうに呟いた。朝、西町手前のパン屋タツタンで購入したものだ。滋味あふれる固めのクツペから、薄く切られた肉が溢れる程飛び出している。野菜は何かの葉っぱが1枚入っただけで、あとは肉、肉、肉という肉食系男子向けのサンドイツチだ。かなり美味しい。

リョータがつまらなそうなのはゴ布林達が弱いからだけではない。

ダムロー旧市街の奪還後からグンゾウ達はカズヒコ小隊パーティと別行動をすることが多くなつた。

別に仲違いなかつたをしたという訳ではない。純粹にお互いの望む狩り場が変わつたからだ。

もちろん、ヤンキーリョータとクザクやチョコの仲が良くはないことが遠因えんいんであることは否定できない。しかし、主な要因はゴ布林スレイヤーの活躍でデットスポットという悪名高い怪物がいなくなり、サイリン鉱山の狩りが安全になつたため、カズヒコ小隊パーティは実入りが安定するサイリン鉱山での狩りを望んだことにある。そして、リョータ小隊パーティ

の面々はグンゾウを除きコボルド狩りを好まないため、ダムロー旧市街に通っている。そのため、別々に行動することが多くなつた。

「あたしは、<sup>スキル</sup>技の練習ができるから、ゴブちゃん好きだけどなー。強い敵だと、練習はできないしねー」

「俺も、劍鉈の練習はゴ布林じゃないときつい。あ、あとダムローは弓が撃てるからええー！」

ヨシノとシムラは<sup>スキル</sup>技の確認に余念が無い。

「だがよー、裸ゴ布林達だと、稼ぎもいまいちだしな」

リョータは稼ぎについても物足りなさを感じているようだった。

「チョコ達もカズヒコ<sup>パーティ</sup>小隊6人ではエルダー狙いというよりは、労働者<sup>ワーカ</sup>がほとんどで、稼ぎはゴ布林狙いときほど変わらない感じだと言つた。タリスマンを持ちかえるのは楽しいけど……」

アキは最近でもチョコやノツコとよく話をしてるみたいで、リョータにカズヒコ<sup>パーティ</sup>小隊の状況を説明している。

——確かにカズヒコ達だけでエルダーコボルド狙いは、少し危ないかもなー。

グンゾウはリョータ達の話聞きながらも、頭半分では別のことを考え始めていた。

ここ数日、ずっと頭に残っていたことだ。

それは光の護法を習得しに、ルミアリス神殿に行った時のこと。

当然、修師カレンによる厳しい責め苦を覚悟（期待？）して修練に臨んだが、指導に現れたのは初老の男性修師だった。名前は既に覚えていない。長い白髪を頭の上できつく縛っていた。

カレンは重要な祭事があり、アラバキア王国本土にあるルミアリス神殿の本部に出張中とのことだった。初老の男性修師は、厳しいながらも的確且つ確実に光の護法を指導し、最後にはグンゾウのことを「義勇兵の中では、近年稀に見る天賦の才と真摯さだ」と褒めてくれた。深く感謝の意を表して、ルミアリス神殿を下山したグンゾウだったが、下山後、何か物足りなさを心に感じていた。

「なんだか、……物足りないな」

グンゾウは思わず心の中が口を衝いて出てしまった。

それを聞いたリョータは破顔し、グンゾウの肩をバンバンと叩いた。グンゾウは3ダメージ喰らった。

「おっ！　なんだよ、オッサン、わかってんじやん。そういうことなら、これから少し西の拠点を潰しに行こうぜ。あいつ等、雑魚ゴブリン達を取り込んで、今、15匹位になってきているから、少しはやり甲斐あるぜ！」

——あ、しまった。またやつちまった。



「ほえー。慎重なグンちゃんが珍しい」

ヨシノが目皿のように丸くしている。

「キシシ、グンゾウはスケベ」

「なんでやねん!」

ハイドは的確なことを言ったのだが、ボケたと認識され、シムラの突っ込みを後頭部に受けた。眼鏡を飛ばされ、数字の「3」のように目を細めたハイドが、地面に落ちた眼鏡を手探りで探す。

「眼鏡、眼鏡……」

定番のやり取りだが、皆、声を出して笑った。グンゾウはリョータパーティー小隊がだんだんひとつになれてきたように感じていた。

——6人での狩りもいいな。今日は本当に穏やかな日だ……。

グンゾウの神官衣はゴ布林達の返り血で染みだらだったが、そんな非日常も当たり前になり、心は平穩そのものであった。

西の拠点にいたゴ布林達の殲滅戦もさほど苦労はしなかった。

建物の外にいた歩哨ほしやう3匹はシムラが狙撃で仕留める。叫び声を上げたため、建物の中から4匹程飛び出してきたが、これらもシムラの弓とハイドの暴威雷電サンダーストームの餌食えじきとなつ

た。そもそも何匹か誘き寄せ寄せる前提だったので、止めを刺さないようにしていた。グンゾウの計画は常に合理的で残酷だ。

建物は、入り口の正面に2階への大きな階段があり、高低差がある攻防は多少手間取った。弩を持ったゴブリンが数匹いたためだ。2階から射撃をされる。

それはアキを先頭に侵入し、家具で拠点を作ると、最後はハイドの暴威雷電で相手の陣を乱し、ヨシノとリョータが突貫した。

新市街の甲冑ゴブリンとホブゴブリンが最後の敵だったが、光の護法で強化されたヨシノとリョータの敵ではなかった。途中、隠れていた1匹の裸ゴブリンに背後から攻撃されるといふ想定外の出来事はあったが、勝負の趨勢は揺るがなかった。

「ふう……、思ったより、数が多かったな。みんなー、怪我はないー?」  
グンゾウは額の汗を神官衣の袖で拭った。

——まさか咎光からの強打を使うと思わなかったぜ。

甲冑ゴブリンのいた部屋は暖炉があり、高級そうだがボロボロの青い絨毯が敷かれ、ソファなどが置かれていた。ソファの前には低い食事用の机が置いてあった。

「俺等より、良い暮らししてやがんな」

リョータがソファに腰掛け、面防を上げながら言った。足を乱暴に食事用の机の上に置く。

「そうねー。でも、ちよつぱり掃除が足りないかなー?」

ヨシノが暖炉の上に置かれた小さな額縁に息を吹きかけると、埃が煙のように舞った。額縁の中に絵は無い。ヨシノは鼻がむずむずするのか、くしゃみをしそうな顔をしたが、結局出ずに元の顔に戻った。気持ち悪そうな顔をしている。

——しないんかーい!

「そろそろ、私達も宿舎から出て、宿屋に泊まつてもいいかも? 女性専用の宿屋とかあるみたいだし……泊まりたいなー」

アキが遠い目をしている。ポロい宿舎暮らしに限界を感じているのかもしれない。

——女性専用の宿屋か……。アキと1つ屋根の下で暮らせなくなるのは、……寂しい。正直、嫌だ。

「ん? なんや?」

既に硝子の嵌ガラスはまつていないボロボロの窓。その窓から外の景色を眺めようとしたシムラが素すつとんきようつ頓狂な声を上げた。

「どうしたー?」

グンゾウが声をかけると、シムラは床板を何度も踏んでは覗き込んでいる。シムラが踏む度に床板はガタガタと大きめの音を立てた。

「なんだか、ここの床下に何かあるみたいなんす」

「畏じゃねーの？ もしくは一階に抜けてるとか？」

リョータがケラケラと笑った。

シムラが床板を引っ張ると、周囲の数枚が簡単に外れた。床下から一抱え程の大きさの麻布で作られたゴ布林袋が現れる。ゴ布林袋は中身の形が分かる程、ぎつしりと何かで詰まっていた。グンゾウはその様子をシムラと一緒に眺めていた。

「おつ、大きいゴ布林袋だな。いつもながら何だか喜びを感じるね。ゴ布林袋には俺達の夢が詰まっているからな」

「詩的だねー。グンちゃん」

ヨシノも飛んできて、楽しそうな顔をしながら床下のゴ布林袋を覗き始めた。シムラが床下に足を下ろし、ゴ布林袋に手をかける。

「グンゾウさん、これ、ごつい重いつす。大当たりの予感がしてならないつす」

シムラは笑顔で上を向いた。

床上に上げられるゴ布林袋。置いた瞬間床板が撓たわんでキシキシと嫌な音を立てた。皆が集まってきて、注目している。

「いくでー!!」

シムラは袋の口を思い切って開けると、勢い良く中身を床に出した。ゴ布林袋からは大量の銀貨と銅貨、そして、高価そうな宝飾品がザラザラと音を立てて出てきた。

「おおおっ！」

「おーっ！ きれーっ！ やたーっ！」

「うわあ、すごい」

「キシっ！」

皆が喜びの声を上げる中、グンゾウは驚いて声が出ない。ゴ布林袋の中身は、ぱつと見てーゴールド近い価値があるように見えた。

——ダムロー旧市街でゴ布林達を倒して、ゴ布林袋から戦利品を獲<sup>え</sup>る。これが新義勇兵暮らしの醍醐<sup>だいごみ</sup>味なのかもな。

少し新鮮みの失われた義勇兵暮らし。グンゾウはそんな暮らしの中にある小さな幸せを改めて再認識した。

### 3. ご注文はオークですか？

旧市街に残っている新市街ゴブリン達の勢力は、雑魚ゴブリンを養うために、ある程度のお宝を隠し持っている。そう睨んだリョータ率いる小隊は、日々ダムロー旧市街にあるゴブリン達の拠点潰しに明け暮れていた。

しかし、2匹目のドジョウは中々見つからず、労力に見合うだけの対価を獲られない日々が続いていた。そうこうしている内に、大半の拠点は潰してしまい、ダムロー旧市街は正常化されつつある。

そこはダムロー旧市街にある広い廃墟だった。

保存状態が良く、天井には様々な色彩のステンドグラスが残っている。かつてはルミアリス神殿に関連する施設だったらしく、女神や天使らしき白い石像が建ち並んでいた。しかし、全ての像は顔や頭部が削り取られている。

不信心者共の仕業だ。

リョータ小隊はその不信心者共に囲まれていた。ゴブリン達が総勢12匹。窮地に陥っているが、小隊全体には余裕すら感じさせる雰囲気漂っている。

理由を挙げるとすれば……「慣れ」だ。あと、光の護法プロテクションが効いている間はゴ布林達には負ける気がしなかった。軽い高揚感に包まれている。

「リョータあ、やつぱり、あれは偶然で、そうそう上手いことはいかないんじゃないの？」

グンゾウは飛びかかってきたゴブリンの斧を戦棍メイスで弾き返しながら、小隊パーティを代表してリョータに切り出した。敵の動きがよく見える。その後ろから剣を持ったゴ布林がグンゾウを狙っていたが、シムラの飛苦無とびくまいが左目に刺さって動きが止まった。

「シムラ、ありがと」

「あんでもねーよ！　だーいじよぶだー！」

シムラは動きが止まったゴ布林に剣鉈を右から左上へ一閃。さらに怯んだゴ布林を右上から左下へ斬った。斜め十字ななめじゆうじという狩人の技スキルだ。ゴ布林は死んではないが、片目でお腹に大きな十字の傷を負った状態になった。長くはない。

グンゾウはリョータの説得を続ける。

「危ない割に得るものが少ないし……」

「いや、オッサン、そんなことあねえ。絶対ワンチャンあるぜっ！」

リョータの一本突きファストストラストが目の前のゴ布林に命中し、頭と体が永遠のお別れをする。さよなら頭、そして、さよなら胴体。ゴブリンの胴体は悲しげに赤い涙を大量に溢れさせながら、崩れ落ちた。

「リョータはまたそんなこと言つて、もう6箇所目だよ。ゴ布林に囲まれるのは3回目っ！ だっ！ よっ！ ドイハっちが怪我しちゃったのは2回っ！」

「目」と「だ」と「よ」と言う1秒ちよつとの間で、ヨシノは3匹のゴブリンの喉笛を斬り裂いた。さらにヨシノは回転蹴りを入れたゴブリンを「2回」の掛け声と同時に二段突きで貫く。数秒で4匹という恐ろしい殲滅速度。  
ダブルスラスト

「それは、オタクがとろいからだろ？ あと、アキが後ろに漏らしてるからだろーが！」  
 「アキちゃんはちゃんとやってるでしょー！ 見てみなよ。リョータより全然盾役が上手いよ」

当事者のアキはリョータの戯言たわごとが聞こえていないのか、聞こえているがあえて無視しているのか、必死にゴ布林達を惹きつけていた。その数は5匹。表情はクローズヘルムで見えない。

——だんだん、惹きつけている数が増えている。

アキは周囲をキョロキョロと見ながら盾で、そして時には長剣ロングソードで、ゴ布林を弾いたり、後ろに下がらせたりにしていた。1匹のゴ布林が隙を見て、アキに斬りかかったが盾受で攻撃を受け止められる。そのゴブリンの顔面を、アキが右拳で殴打した。ゴ布林は鼻血を出して倒れる。

アキは強突スラストという盾で防御をしながら敵を突く刺突系の技スキルを習得したはずだが、その



技を試すよりも、誰かを殴りたい衝動が強かったらしい。

——あああ、あれは聞こえてて、怒ってる。恐ろしい。

「そうだぞ。リョータ、アキに謝れ」

グンゾウは慌ててアキのご機嫌を取る。しかし、リョータは大無視を決め込んでい

る。  
「キシシシ、僕がとろいことは誰も否定しない、シシシシシシ」

グンゾウの後ろに隠れていたハイドが何故か誇らしげに笑った。

——気付いたか。……だが、それは仕方ない。

実際、ハイドが怪我をしたのは、ゴブリンにやられたのではなく、逃げ惑って転んだだけだった。逃げ惑わずにじっとしてないと、護衛する方も守りづらい。

混戦がリョータ小隊の圧勝で収まりそうになってきた時、ズシン、ズシンと床鳴りがして、建物の奥からホブゴブリンと甲冑を着たゴブリンが現れた。ホブゴブリンは180センチメートル級の大物だ。

「よっしやー！　ようやく、俺様の相手が出てきたぜ」

リョータはグンゾウの目の前にいたゴブリンを切り倒すと、嬉々としてホブゴブリンに突っ込んでいった。知能の水準が一緒なのか、リョータはホブゴブリンが好きだ。

——勝手やりおつて。あんなの2匹ともハイドの暴威雷電で片が付くの……。

グンゾウはアキから弱そうなゴブリンを1匹引き剥がして受け持つ。ヨシノは高速でアキが抑えているゴブリン達を数匹片付けてから、甲冑ゴブリンへ向かっていった。

オルタナに6回目の時鐘が鳴り響く。

ダムローへの出発前にカズヒコ達から「今夜は大事な話があるから、全員でシェリーの酒場に集合しよう」と声をかけられていたため、リョータ小隊パーティは全員、夕方から酒場の1階奥を陣取って座っていた。

「おっせーなー、カズヒコ」

リョータは暇そうに、既に食べ終わって空になった食器を、木のフォークでカンカンと叩いていた。カズヒコは何か大事な話があるようだったので、お酒の量を控えている様子だ。

「なんだろうね？ 約束して集合するなんて久しぶりだな。アキも飲む？」

「……………ん……………ふっ」

グンゾウはウワの実の蒸留酒を陶製のコップに注いだ。ついでにアキは口の中に食べ物が入っていたらしく、何か言いながら頷うなずいたので、アキのコップにも注いだ。最近、カズヒコ小隊パーティと待ち合わせすることは少なく、シェリーの酒場で会えば合流するといった感じだった。

突然、ヨシノがグフグフと怪しい笑いを始める。

「もしかしてー、誰かが付き合い始めたとかいう発表だったりしてー」

「なんやて?!」

「え? そうなの?」

素直なシムラとアキは驚く。ヨシノはその様子を見て少し満足げだ。

「いや、全然知らないけどー。想像を膨らましていただけー」

ヨシノも暇そうに冷めたスープの表面に浮かんだ油をスプーンで繋げて遊んでいる。生活は確実に安定しているが、最近のリョータ小隊は、何か盛り上がり欠けていた。

——みんな、燃え尽き症候群なのか?

その点、グンゾウは大人なだけあり、精神が安定している。感情の起伏があまりない。特に動機モチベーションが低くなることもなく、淡々と安全管理に気を配っているだけの日々だ。

恋人を待つ人のように、リョータ達は酒場の扉が開く度にキョロキョロと入口を眺めた。夜も更けてきて、ようやくカズヒコ達が現れる。

「あ、お待たせ」

カズヒコは片手を挙げて、爽やかに挨拶をし、席に着いた。

「あー、もうお腹空いたー。私、レモネード飲みたい」

「へへへ、疲れたなー、俺はエールを」

カズヒコ小隊の面々もそれぞれ席に着いて注文をするために給仕ウエイトレスの女性に話しかけている。リヨータ達は待たされた苛立ちが一周して、カズヒコ達が来てくれたことを感謝すらしていた。

「おいおい、滅茶苦茶待ったわ。注文はいいから、大事な話って何なんだよー」

リヨータが苛立ち半分、嬉しさ半分でカズヒコに話かける。カズヒコは聞こえたか、聞こえてないか給仕ウエイトレスの女性に笑顔でエールを頼んでいた。少しの間、ふたりが見つめ合う。薄暗い店内なのに、女性の顔が紅潮するのがわかる。

——あれは女たらしギルドスキルの技なのか？ 俺は持ってないぞ、あの技スキル。

ナンパスキル技を発動し終えたカズヒコが振り返ると、リヨータ達が餌を前に「待て」をかけられている犬のような顔をしていることに少し驚く。そして、伸びてきた前髪を掻き上げると徐おもむろに話始めた。

「ああ、ごめん、リヨータ。話というのは例の件だよ」

「例の件？」

リヨータはカズヒコに放つとかれて、少し不機嫌になっている。幼い子どものようなだ。

「えーっと、〃双頭の蛇〃という兵団オウダ指令のオーク退治だよ。ブリトニーから聞いてない？」

「聞いてねえなあ」

リョータ小隊はカズヒコと一緒に行動をしなくなってから、情報収集能力がめつきり低下していて、世間の情報に疎くなっていた。

兵団指令オーダというのは、オルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンが団所属の義勇兵達に下す指令だ。ただし、指令といいながらも強制では無く、受託するかしないかは個人の意思に委ねられている。

「デッドヘッド監視砦及びリバーサイド鉄骨要塞奪取作戦、暗号名『双頭の蛇』だよ。今この作戦への参加要請が兵団指令オーダとして出ているんだ。初心者はデッドヘッド監視砦を襲撃する青蛇隊の別働隊に参加するみたいだけど、それでも報酬はなんと1ゴールド。全員で、じゃない。1人当たりだ。俺達は参加するつもりだよ」

——俺達？

グンゾウは兵団指令オーダの内容より、一人称の変化に違和感を覚えた。カズヒコの表情は自信に満ちあふれている。

冷静に分析すれば当然だ。

リョータやヨシノと離れたことで、カズヒコは小隊パーティで一番の戦士だ。指揮においてもグンゾウから離れた今、誰に気兼ねすることもなく自分の差配で全てを動かすことができる。おまけに爽やかな容姿にも恵まれ、女の子（やブリちゃん）に持もて囃はやされる。恐

らく、ここ数週間の環境がカズヒコにリーダーとしての自信を漲みなぎらせている。

「オークとの戦争なんて、危なくないの？」

グンゾウはカズヒコに尋ねると蒸留酒で喉を潤した。

「大丈夫みたいですよ。赤蛇隊が狙うリバーサイド鉄骨要塞は、初の試みで難易度が高いみたいですが、青蛇隊が狙うデッドヘッド監視塔は、何度も陥落させたことのある拠点のようです。その青蛇隊の別働隊に参加する義勇兵の役割は牽制けんせいと陽動で、正面突破は辺境軍正規兵の役割だそうで、周辺のオークと少しやり合えばいいだけです。それに我々はあの数の新市街ゴブリン達と渡り合ってきたんですよ。他の義勇兵より集団戦には慣れてるはずですよ」

——とはいえ、カズヒコ側はなあ……。こちらもタナカやシンジヨーに頼った部分が大きいし。面と向かっては言えないけど……。

「へへへっ！ あの時の俺の活躍をみんなにも見せたかったぜ！」

「そんな、活躍してた？」

チヨコが冷たい目でミッツを見ていた。零れるような大きい目が疑わしように細くなっている。カズヒコ小隊パーティの他の仲間も生暖なまあたかい笑顔を浮かべている。

「おまけに、リョータは戦士見習いにしてオークを倒したオーク殺スレイヤーしだろ？ こんなに相性の良い兵団指令オーダーないんじゃない？」

カズヒコがリョータに向けて左目を瞑ってウインクした。

「お、おう……」

リョータは何故か口籠もった感じで返事をした。何だか自信なさげで、カズヒコのこゝとを真つ直ぐ見詰め返さない。

——ん？　なんか変だな。自慢話が始まってもいいのに。……まさかりョータはびびってる？

「そのオークン戦争はいつなのー？」

ヨシノが興味を持ったのか、伸びをしながら聞いた。

「丁度10日後の午前3時にオルタナ北門前に集合で、2時間程移動して夜明けと共に開戦だよ。義勇兵団事務所への申し込みは5日後が締め切りだったかな？　俺達は明日にでも申し込みに行こうかと」

「えーっ！　10日後なのー？」

ヨシノは嫌そうな顔を見ると、指折り何かを数えて考え始めた。

——ん？　10日後になんかあったっけな？　準備期間が足りないってことかな？

ヨシノは意外と慎重派だからな。模擬訓練をみっちりする方だし。

「10日後……」

グンゾウの隣で、アキが下を向きながら静かな声で呟いた。

——あれ？ みんな10日後を気にしてる？もしかして俺だけ知らされていない飲み会があるとか？ 何だか寂しい……混ざりたい。

好戦的な狂犬リョータを始め、前衛陣が静かになってしまったため、場が静まってしまった。酒場に集まった義勇兵達の馬鹿話の音が大きくなる。

「報酬も魅力的だし、前金で20シルバーもらえるらしい。12人で行動した方が戦場でもきつと安全だと思うから、リョータ達も参加しようぜ。……まあ、いきなりだし、少し考えてくれよ」

カズヒコは普段と違う雰囲気を感じたのか、リョータの肩を叩いて話を切り上げる。

「これはヤバイぜえ……キシッ」

「なんや？ ハイド、まあた、独り言かいな」

ハイドとシムラの緊張感のない会話が始まると、皆それぞれに他愛も無い話を始めた。

今日、初めて兵団指令のことを知ったりリョータ小隊は、参加申し込みに若干の猶予があるため、それぞれ冷静に考えてから決めることにした。

その夜、宿舎でグンゾウが風呂から出てくると、何故か沐浴室の前にリョータが立っていた。部屋着ではなく、外出用の普段着を着ている。腰にはほぼ使わない長剣、手に



は行灯ランタンを持つていた。

「オツサン……、ちよつと外へ飲みに行かね？」

珍しくリョータがグンゾウを誘う。

「〃オツ〃 って名前じゃねーけど。どうした？ 恋の悩みなら俺も聞いて欲しいくらい、全く縁がないぜ」

「ちげーよ。恋なら悩む必要がねー。門で待つてるわ」

言いたいことを言うと、リョータは立ち去った。

——だから、〃オツ〃さんって名前じゃねーけど？

若者の話も聞いてあげないといけないと思つたグンゾウは、リョータに付き合ひ西町手前の職人街にある屋台で飲むことにした。夜も更けているため、客はリョータとグンゾウを除けば、ぐでんぐでんに酔つ払つた職人風の男だけだつた。

道中もリョータは黙つたままだつた。今もグンゾウの横に座つて、深刻そうな顔をしてる。

——ただでさえ嚴いかつい顔なのに、怖いんだよ。

席に着くと、お摘みとエールを頼んだ。グンゾウは出てきたエールを一口飲む。生ぬるいため喉ごしは今一だが、香ばしい穀物の匂いが口の中に広がった。飲みやすくはな  
いが、癖になりそうな味だ。

——「このエールはこういう味か。

突然、リヨータが話を切り出す。

「……俺はオークに勝てると思うか？」

もう一口飲もうと、持ち上げたグンゾウのジヨッキが止まる。一旦、下ろす。

「オークに勝てるも何も、お前勝ったことあんだろ？」

「あれ、ちゃんと戦ってねーんだわ」

「は？」

「これ、絶対他の奴には言うなよ」

「お前が俺のこと『オッサン』て呼ばなければな」

「じゃ、言わねー」

リヨータは拗ねた子どものように黙ってしまった。拗ねたような顔はチョコの専売

特許だから、リヨータがやっても可愛くない。

「分かった、分かった。そんな拗ねた顔をするなよ。言わないから、言えよ、言いたいん

だろ？」

リヨータがちらつとグンゾウを見る。少し逡巡しゆんじゆんしてから口を開いた。

「……あれはさ……、転こけたんだよ」

「は？」

「俺がびびって固まったら、オークの奴が勝手に転けたんだよ。石か何かに躓いて……、それを俺は上からタコ殴りにして、止めを刺しただけなんだ。だからまともには戦ってねーんだ」

——まじか……。

「お前、それなのにあんだけ自慢してたの？」

「うっせえ、まあ、倒したことに変わりねーだろ」

「ま、まあな……」

2人の間を沈黙の時間が過ぎる。周辺には、屋台の店主が瓶に汲んだ水で食器を洗っている音と、酔っ払いの躑躅だけが響いていた。

「オッサン、なんか言えよ……気まずいだろ」

——また、オッサンって言ってやがる。だが……。

「あ……の……さ……」

グンゾウは下を向いたまま、ボソボソと話し始めた。

「ああん？」

「お前、オークに勝てると思うよ。絶対」

「え？ どうしてだよ？」

リョータが驚いた様子でグンゾウの方向を向いている。

「以前、オークに勝った話の真実を話せなかったのは、自信も実力も無かったから虚勢を張る必要があったんだと思うんだよ。でもゴ布林達との戦いを経て、お前すごく成長しただろ？ あのデカイホブゴ布林達をバンバン狩ってき、それにエルダーコボルドだってお前とヨシノは1人で倒せる。もうオークにだって勝てる自信があるから、真実を受け容れて、話せるようになったんじゃないかと俺は思うんだよ。だから、お前なら勝てるよ」

それを聞くと、リョータは少し笑顔になった。憎たらしくもない、素直な笑顔だ。

「そつか……そうだよな。……俺は」

「盾役タンクな」

「はあ?!」

「お前さあ、少し自分の役割を認識しろよ。お前は小隊パーティの盾役タンクなんだよ。攻撃役はヨシノ。アキは支援役サポーターだから。カズヒコ達が居たときはカズヒコが盾役タンクしてくれてたけど、そもそもはリョータの役目だから。最近、自由に暴れすぎなんだよ。忘れてたろ？」

「それは……忘れて…………た」

「よろしい。オークみたいないなデカイ敵相手じゃ、アキは盾になりきれない。リョータが俺等の命を全部背負ってるんだから、頼むぜ、リーダー！」

グンゾウはリョータの背中を叩いた。「バシッ」と良い音が夜空に響く。

「いてえよ、オツサン。神官の癖に乱暴だぞっ！」

リョータは悪態を吐いていたが、その顔は笑顔だった。

「まあ、細かいこと言わずに、飲め、飲め」

グンゾウはリョータと乾杯をした。

深緑の夜空と紅い月は姿を消し、群青の空と白い太陽が姿を現わし始めた。

屋台の主人は早朝から働く職人達のための食事を準備している。

爽やかな朝に相応しくない男達が、相応しくない会話をしていた。

「まあ、今回のオークとの戦争でえ……ばしつと盾役したら、ヨシノもチュウくらいしてくるんじゃないの?」

何度目の同じ話だろう。グンゾウは酔っ払ってぐでんぐでんになっていた。机テーブルに顔

を伏せている。酒を飲む時だけ顔を上げていた。

「まじかー。チュウかー、ういっく。……オツパイくらい揉ませてくれないかなー?」

リョータも酷く酔っ払っている。既に右目と左目の向いている方向が違う。寝ていないのが奇跡だ。

「2回くらい揉ませてくれんじゃないの? 減るもんじゃなし」

「まじかー。2回じゃ、逆になんか溜まるなー、ういっく」

「0ゼロよりいいんでねーの？ 0ゼロより。俺も……」

「おっ！ オッサンも何かあるのか？ よっ！ エロ親父おやじ！ いや、エロ神官！」

——言えない……。

グンゾウはそのまま机テーブルを枕に寝てしまった。リョータもグンゾウの返事が返ってこないで、涎よだれを垂らしながら寝てしまった。

そんな2人の様子を見て、屋台の主人が声をかける。

「お客さん！ そろそろ帰ってくれんかね？ それか席オイダーにいるなら何か朝飯を注文オーダーしてくれないか？」

グンゾウは半目を開けて、口を開いた。

「ああ、ああ、兵団指令オイダーはオークでしょ……」

屋台の主人が大きなため息を吐いた。

## 4. 運命の別れ道

人は、未来を予知することができない。

それなのに、常に自分の未来を選択し続けなければいけない運命にある。

時に、どうしてそのような選択をしたのか、激しい後悔を抱えながら、それでも前に進まなければならない。

その選択が未来を大きく変えるものだとしても、それに気付くことはできない。

それは「運命の別れ道」と呼ばれる。それは気付かないくらい優しく、そして残酷に運命を別つ<sup>わか</sup>。

今日も、その選択をする日だと気付かない者達がいた。

二日酔いの重たい頭と体を抱えて、グンゾウとリョータは昼過ぎに宿舎に戻った。

途中でリョータが光<sup>プロテクション</sup>の護法の存在に気が付かなければ、2人は宿舎まで戻れなかったかもしれない。光<sup>プロテクション</sup>の護法は酷い二日酔いも軽くしてくれる。

昼過ぎだというのに、中庭の食卓では、ヨシノ、アキ、シムラが仕事の格好をしたまま待機していた。

グンゾウ達に気付くと、ヨシノは立ち上がり、駆け寄る。

泣き出すのではないかと勘違いするくらい、興奮して、両手でリョータの胸を叩いた。「リョータ！ どこ行つていたの?! 事件に巻き込まれたんじゃないかって、みんな、すーっごい、心配したんだから！」

「すまない、ヨシノ……ちよつと、今回の兵団指令オーダの件でオッサンと議論しすぎて……」  
嘘うそは言つていない。

——9割は別の話だつたけどね……。

アキとシムラも安堵あんどの目で、グンゾウとリョータを見詰めていた。

グンゾウは仲間に仕事をさぼつたことを責められるのではなく、事件に巻き込まれたのではないかと心配されていたことに罪悪感を覚えた。良く考えてみれば、天涯孤独の身となつてグリムガルにやってきたグンゾウ達にとつてみれば、家族と言える存在は小隊パーティの仲間だけだ。さらに年長者である男2人が居なくなつたとなれば、残された仲間が極めて不安なことは予想がついた。

——申し訳ないことをしたな……。

「あれ？ ハイドは？」

グンゾウは周囲を見渡す。頭を動かすと重たい頭痛が走つた。

「あー、ハイドは仕事がないなら寝るつて、寝てまつせ」



シムラが呑気のんきに答えた。

「そっか……」

——雷帝、流石だな……。

「ちよつと、今日は一日休みにして、兵団オーダー指令ダイについて考えてくれ。夜、シエリーの酒場で話し合おう」

そう言うと、リョータはふらふらとしながら、寢室の方に向かっていった。

グンゾウが風呂に入ってから寝るか、そのまま寝るか逡巡していると、ヨシノが話しかけてくる。

「グンちゃん、リョータとの話し合いでは、兵団オーダー指令ダイについてはどうなったの？」

ヨシノは不安そうな目をしていた。

——ヨシノらしくないな。

グンゾウはそう感じた。

「なんだか、不安そうだね？」

「……うん、そう……かな」

「一応、色々な要素を考慮した結果、リョータはやる気だよ。俺はまだ悩んでる。みんなの納得感が大事だから、夜までじっくり考えて、意見を聞かせてよ」

ヨシノは明らかに悩んでいる様子だった。傍で聞いていたアキも同様だった。

シムラは完全に気持ちを切り替えて、木の的相手に星貫の練習をしている。

——ハイドは……まあ、いつか。

浴室で、水蒸気が結露した天井を眺めながらグンゾウは考えていた。  
兵団指令を受ける利益と危険を天秤にかける。

——利益は……、1日で1ゴールド。これは確実だ。それに他の義勇兵に聞いた話じゃ、デッドヘッド監視砦にいる砦守のゾラン・ゼツシユを倒せば金貨100枚、呪術師アバエルを倒せば金貨50枚が手に入るといふ。呪術師は能力が不明なので不確実性の影響が大きいが、武闘派のゾラン・ゼツシユはリョータとヨシノがいればもしかしたらいける……かもしれない。

そう思った後、グンゾウは考えを改めた。

——駄目だ。なんて稚拙で酷い妄想だ。この兵団指令は積極的に利益を得ることが目的じゃない。全員無事で生きて帰ることが目的だ。そうなると、利益は金貨1枚。そして、リョータ小隊が参加することで、カズヒコ達の安全は格段に上がるということだ。どれくらい確率が上がるかを定量評価するのは難しいなあ……。

グンゾウは湯の中に頭の天辺まで埋める。湯の中に全身が浸かることで重力から解放され、脳が重たい悩みから解放されたように感じた。



環境の悪さに眠ることを諦めたグンゾウは、情報収集に街へ出た。

シエリーの酒場で昼間から酔っ払っている義勇兵を捕まえて、情報収集を行った。

グンゾウはよく独りで飲み歩いていたので、酔っ払いの知り合いは多かった。顔が広い同期のキツカワが、遠方へ狩りに出掛けているのが少し痛手ではあったが、それなりに情報を得ることができた。

結論として、オークはとて強いということ。

身長は人間と同様に様々だが、体軀は間違いないで良く、力強さは戦士として一流とのこと。知能も人間並みで隙が無い。数的優位性か、戦闘技術に大きな差が無いと勝てないということだった。逆を言えば、常に戦力を分断して、数的優位性を確保したまま戦えば勝てるということでもあった。

数の話に限れば、200匹程度のオークが守る砦を、正規兵700人＋義勇兵の軍勢で攻めるため、圧倒的有利が確定していた。門を突破し、開けた地で戦えれば、だ。

ただ、砦と言っても、梯子を掛ければあちこちから登れてしまうくらい低い壁ということも同時に聞かされた。それは良い情報だった。

次は指揮官についてだ。人数が多くと指揮官がアホでは烏合の衆になってしまう。

それは本人に直接会いに行った。

グンゾウはできれば近寄りたくなかった。まして、2人きりになるなんて遠慮したかった。

しかし、どうしてもやらねばならなかった。

決死の覚悟をして、その扉を開ける。蝶番ちようつがひが軋きしむ嫌な音がして扉が開く。

「あら、珍しい。いらつしやい。何か御用かしらね？ そうねー、きつと兵団オーダー指令ダイの件ね」

「そうだ」

義勇兵の指揮官であるオルタナ辺境軍義勇兵団レットムーン事務所の所長、そしてオカマのブリちゃんことブリトニーだ。相変わらぬ奇抜な容姿をしている。緑色の髪に、黒い唇、長くて量の多いバサバサとした睫毛まつげに青い瞳、そしてムツキムキの筋肉だ。ブリトニーはその青い瞳で、グンゾウを見透かすように見詰めてきた。舌なめずりをしている。グンゾウの下半身でナニカが30%縮み上がった。

「色男パーテイの小隊は参加するみたいだけど、筋肉馬鹿パーテイの小隊はどうするのー？ まだ悩んでるとか、どんだけー」

「前向きに検討中だよ。ただ、指揮官に今回の作戦について考えを聞きたい」

グンゾウはブリトニーの不気味さに負けないよう胸を張る。

——少し戦いの経験を積んだから分かる。ブリトニーは練達の戦士だ。体の動きに

キレがある。

ブリトニーは両掌を上に向けて、お手上げのような姿勢をする。

「あーら。指揮官がアタシって情報が漏れてるの？ 嫌だわあ。軍隊は秘匿性ひとくせいを保てることが肝心なのに。そう思わない？ グンちゃん。誰かしら、話しちやったのは。後であっつーいお灸きゆうを挿いれてあげないと。あはっ」

グンゾウの下半身でナニカが60%縮み上がった。グンゾウの額あごから脂汗あせが出始める。

「やばい、やばすぎる。早くこの場を去らないと、人生最大の心的外傷トラウマを負いそうだ。」

「それは……、当日の戦略等について、事前には話せないってことかな？」  
ブリトニーが怪しい目でグンゾウを見詰める。突然、右の人差し指を軽く舐めてから、服の上から自分の右乳首に当てた。指先を小さく、そして優しく、ゆっくりと回し始める。

「な、何をしているんだ。これは圧力プレッシャーをかけられているのか?!

グンゾウは背中から腰にかけて冷たい汗が流れるのを感じた。グンゾウの下半身のナニカは90%縮み上がっている。

「そうねー。そうなるかもね。まあ、人間からオークに戦略が漏れるとは思わないけど、

念には念を入れるに越したことなくない？ 集団を指揮する者としてはねー」

「だが、複数人で戦略を練った方が、抜け漏れのない戦略になるとは思わないか？」

「ふーん、そうかもねー。その複数人に新人のグンちゃんルキキが適任かどうかはわからないけど」

ブリトニーは右手は乳首に置いたまま、左手の黒い爪の汚れを息で吹き飛ばした。完全に相手にしていないといった風だ。

「作戦が上手くいかなくなった時の退避手順、正規軍との連絡手段等、何か安全対策の情報が欲しい。俺には若い仲間を守る義務がある」

ブリトニーの呆れたような表情。

「どんだけー。過保護ね。最初にも説明したけど、義勇兵団の流儀は“自己責任”よ。己が才覚、独自の判断で敵を叩く。言わなかった？ それに兵団指令オーダーは義務じゃない。そうでしょ？」

——軍隊の戦略にそんなのいい加減なことあるか？!

グンゾウはストレスで右の脛まふたが痙攣けいれんするのを感じた。ブリトニーはそれに気付いたかもしれない。

「そうか……、よくわかった」

——マネジメント管理のない組織は烏合の衆だ。こいつが指揮官では必ず多くの死者が出る。

そう確信したグンゾウは話を切り上げて、仲間の元に帰ることにした。

「参加、待つてるわ。グンゾウちゃん」

扉を開けると、ブリトニーが猫なで声でグンゾウに呼びかけてきたが、気持ち悪いおっさんの声にしか聞こえなかつた。

——取るべき道は2つだな。兵団指令オーダーに参加して、カズヒコ達を助けるか。カズヒコ達を兵団指令オーダーから降ろすか、だ。

軍義勇兵団事務所を出ると、グンゾウの歩く速度は次第に速くなり、最後は走るようにして宿舎へと向かつていった。

夕べのシエリーの酒場は、いつものように義勇兵の武勇談や悲劇、怪しい儲け話や怪談話で溢れかえっていた。一時ひとときの癒やしを求めて、男女が恋の駆け引きをしている現場を目にすることも多い。今夜も胸の大きな給仕の女性を、何人ものむさ苦しい義勇兵達が必死に誘っていた。給仕の女性も義勇兵の扱いには慣れていて、また酒場に来てくれる程度に適度に誘い乗っては、軽くあしらっている。

そんな楽しい風景の中、リョータバウティ小隊は真剣な顔で、1階奥の机テーブルを陣取っていた。机テーブルを囲うようにリョータから時計回りにグンゾウ、シムラ、ハイド、アキ、ヨシノの順で座っている。



机に両手を置いて前のめりになり、リヨータが唐突に話し始めた。

「先に言っておく。俺は兵団指令を受けて、オークをぶつ倒すつもりだ。皆の意見を聞かせてくれや」

——なんか、アホっぽいな。

「リヨータ。参加、不参加の判断と併せて、理由もみんなに聞かせてくれよ」

グンゾウが冷静に突っ込むと、リヨータは自分の意見を言い終わって油断していたのか、不意を突かれたように慌てた。

「おっ、おう、そうか。まあ、1ゴールド手に入るし、今の俺等なら負ける気しねえ」

普通の理由。次にリヨータ小隊全員の視線がグンゾウに集まる。

——次は俺か？ ……そりや、そうか。

「俺は悩んでる」

「なんだそりや？」

リヨータが呆れたような表情をする。ブリトニーの反応と似ている。

「理由は2つある。ブリトニーに会ってきた感じ、義勇兵団の軍隊としての統制は期待できなかった。つまり、敵から組織的な攻撃を受けると痛手を負う可能性が高い。だから、今回の兵団指令は危険性が高いから受けたくない。しかし、俺等が受けないと既やる気のカズヒコ達が危ないから、受けたい気持ちもある」

リョータパーティイ小隊の面々が「うーん」と唸るうな。

グンゾウは、手で合図をしてシムラに順番を回した。シムラはイガグリ頭をさする。頭を使っている時の癖だ。

「俺は、どっちでもええかなーって。受ければお金が手に入るし、危険が高そうなら受けなくてもそんなにお金に困ってないしなー?」

「キシシ、右に同じ。シツシツシ。僕の最強は変わらない」

——単純だが、妥当な選択だよな……。中立が3か。あとは女性陣次第だな。

並び順のアキを飛ばして、ヨシノが話し始める。

「あたしは……、受けたくない。理由……は言えない」

「言えない? おいおい、ヨシノ、いくらなんでもそりやあ……」

リョータの言葉を遮るさえぎるように、アキが口を開く。相変わらず低くて静かで、でもかわいらしい声だ。

「私も。今回はちよつと」

「おいおいおいおいおい。アキ、『ちよつと』って何だよ。そんな理由あるか?」

「リョータ、女の子には色々あるんだよー」

ヨシノが責められているアキを助ける。

「なんだそりや?!」

リョータがヨシノに対して苛ついた顔をする。

——はっ！

グンゾウはヨシノの台詞セリフを聞いた瞬間、ヨシノやアキが参加に消極的な理由に思い当たってしまった。

——あれ？ やばいぞ。きつとそうだ。ヨシノもアキも日数を気にしていた。記憶は失われているが俺には思い当たることがあるぞ。この流れ、俺が止めないと駄目な気がする。

「ヨシノ！ らしくねーぞ。ここはオークをぎったぎたに倒すぞー！ って流れ……」  
「んんっ！ おほんっ！」

グンゾウが咳払いでリョータの発言発言を遮さへぎる。

「オツサン、うるせえぞ。痰絡たんからまり爺じいか！ 今、ヨシノと話してんだよ！」

「あー、リョータ君、もう、いいんじゃないかな？ 俺も反対にするわ。賛成1、反対3、中立2で。俺等是不参加でいいんじゃないかなー？」

「ああん？ 何言つてんだよ、オツサン。さつき悩んでるつつたろーが。ボケてんじゃないぜ。止めるやにしたって理由なしじゃ納得いかねーんだよ」

「そこら辺をふわつとさせとくのも大人なんじゃないかなー」

「てめえ、さつき俺には理由言えつつたろーが！」

「うん、うん、そう！ さつきは言った、さつきはね。でも、何て言うの？ 状況がなー。なんだからー、わかんないかなー？」

「何、訳わかんないこと言ってるだよ。まじで、ボケてんのかよー！」

ヤンキーリョータの苛立ちが頂点に達したのか、グンゾウの神官衣を左手で掴んで、右の拳を振り上げた。

グンゾウはやむを得ないと、受け入れ体制を整えて、損害を最小限にしようと防御姿勢を構えた。

「リョータっ!!」

いつもは、にこやかなヨシノが金切り声かなきを上げて、机に激しく両掌りょうてを叩き付けながら立ち上がる。グンゾウを掴んだまま、リョータは動きが止まる。ヨシノの方を向いて固まった。

リョータ小隊の全員が、ヨシノに注目する。シエリーの酒場全体が少し静かになったように感じる。少しの静寂の後、ヨシノがおずおずと口を開く。

「その日、2日目なの……」

——あーあ、言わせちゃった。

「キシっ？」

ハイドが首を傾げる。

「はあ？ なんの……」

と、途中まで言いかけたリョータの鼻の穴がぷくつ膨らんだ。どうもようやく理解したらしい。

「よ、ヨシノちゃん……」

アキが驚いた表情をする。アキの顔は耳まで真っ赤だ。その恥じらいの顔を見たグンゾウの鼻の穴が2倍に膨らんだ。

——これはルミアリスのご褒美だな……。

「あー、あああ、あえー、あ……えつと……」

リョータが二の句を告げられず、振り上げた右手で頭を掻いている。グンゾウはリョータの左手を振り払うと神官衣の襟を正した。

ヨシノが続きを話す。

「今までも、当然あつただけど。結構重くて……。貧血で力が入らないから動きが鈍くて……。ゴブちゃん相手でもすぐ疲れるの。最近は日にちを管理して、なるべくお休みか訓練の日にしてた……。だから……。ちよつとオークんと戦争は自信がないかな……。つて。……。あつ、アキちゃんは違うよ？ あたしだけだからね。アキちゃんは別に2日目ふつかめじゃないよ」

ヨシノは急に気付いたようにアキの理由について自分とは違うと否定した。しかし、

この流れで2回も名前を出されたアキは、恥ずかしさに顔を上げられなくなったのか、下を向いて机に顔を伏せてしまった。

——あー、これ助けた風で、実は一番恥ずかしいやつだ。ヨシノ……天然なだけになかなか悪質だな。

「お、お、おう」

リョータが動揺して返事をする。顔を向け、グンゾウに助けを求めてくるが、グンゾウはさつき殴られそうだったのでさっぱり助ける気が無い。グンゾウはリョータから目を背けた。

「なんや姉さん、2日目ってなんですかのん？」

シムラが空気を読まずに質問をする。

「馬つ鹿！ 馬鹿シムラ、黙れ！」

「とういまでーん」

リョータが怒鳴ったので、シムラは黙って小さくなった。

「あの、だから、みんなで兵団指令を受ける機会を潰しちゃうかもしれないけど、今回はお休みにしたい」

ヨシノが凜として言い切る。誰も反対できるわけはなく、リョータ小隊は兵団指令を受けられない方向で意志決定がされた。

打ち合わせを解散した後のシエリーの酒場。

リヨータとゴンゾウは居残つて毎度の反省会を繰り広げていた。

「オツサン……、俺はヨシノに嫌われたかな？」

リヨータは陶製のジョッキからエールを浴びるように飲んだ。グビグビと喉のどが鳴る。

「まあ、2歩くらい後退したことは間違いないな。あと、俺の名前は『オツ』じゃねーけど」

「はーあ……、そうかー、ヨシノはもうすぐ生理かー」

「聞いてないな。あと、お前、俺のこと殴ろうとしたろ？ あの時点で間接的に教えて

やったのに。これから俺が意見を翻ひるがえした時は気を付けるよな……聞いてるか？」

「はーあ……、ヨシノはもうすぐ生理かー」

——全然聞いてねえ……。

オルタナの街は今日も平和そうに夜が更けていく。

しかし、この決定がリヨータ達、そしてカズヒコ達の運命に大きく影響を与える別れ道であったと、後になって気付くのがあった。

## 5. 本当は理解して欲しいけど、伝わらないから……

「どうだった？」

中庭でカウヒー茶を飲んでいたらリョータが立ち上がり、グンゾウに聞いてくる。グンゾウは何も言わずに頭を横に振った。

リョータが飲んでいたカウヒー茶から湯気が立ち上っている。温かいものを飲んでた。最近は茹<sup>う</sup>だる暑さもすっかり影を潜<sup>ひそ</sup>め、朝晩は涼しく感じる時すらある。

「ちっ！ 意地っ張りが！ いいじゃねーか、1ゴール<sup>くろい</sup>位、すぐ稼げんだろ」

リョータは長椅子<sup>ベンチ</sup>に勢い良く座ると、手で机を叩いた。

「まあ、それだけではないんだろ。人の気持ちはなかなか変えられないさ」

「くそっ！ すぐ諦<sup>あきら</sup>めんよ、悟<sup>さと</sup>り爺<sup>じい</sup>か！」

——別に諦めたなんて一言も言っていないけどな……。

「ごめんね。あたしのせい……」

ヨシノが済まなそうな顔で下を向いた。

「ヨシノ、全然違うぜ。カズヒコが頑固なだけだ。俺等がいなくて、オークなんかとやれんのかよ！」



——カズヒコからすれば俺等にそういう風に思われたくないってところもあるんだろうしな……。

兵団指令への参加を止めたりヨータ小隊。グンゾウはカズヒコ小隊が単独で参加するのは危険と考え、兵団指令への参加を取りやめさせる方向で、説得を開始した。

まずはリーダー同士で話し合いをしてもらったが、カズヒコの意志は固く、リーダーの説得には応じなかった。

次にグンゾウもカズヒコを説得に行ったが、成果を上げることが出来なかった。

少し前、宿舎にて。

「今回の兵団指令の危険性については、リョータからも聞きました。グンゾウさん達のおっしゃることも分かりますが、ほ……俺も色々調べた結果決めています」

カズヒコは口調は優しくしたが、曲がらない強い意志を感じさせる声だった。胸を張り、背筋を伸ばした姿勢も自信を感じさせる。

「あのカジコ率いるクラン・荒野天使隊や、イシユ・ドグランを倒したチーム・レンジが青蛇隊に参加するそうです」

荒野天使隊はカジコという大柄な美人が代表を務める女性のみのクランで、全員、白い羽ストールを巻き、装備のどこかに白い羽根飾りをつけている。グンゾウは、カジコ

自体を見たことはないが、克蘭の構成員を見たことがあった。男を寄せ付けない強い雰囲気<sup>まじ</sup>を身に纏<sup>まと</sup>っていた。

そして、イシュ・ドグランとはオルタナがオークの一団に攻められ、城門を突破されるというイシュ・ドグラン事件を起こしたオークの頭<sup>カシラ</sup>だ。事件は、グンゾウ達がギルドで修行中に発生した。転<sup>こ</sup>けてリョータに殺されたオークもその一団の一匹だった。

チーム・レンジとは戦士レンジ率<sup>パーテイ</sup>いる小隊だ。その小隊のリーダーであるレンジは、イシュ・ドグランを一騎打ちで破るといふ快拳<sup>カイケン</sup>を遂げている。レンジ達はグンゾウ達の前に、あの塔で目覚めた新人義勇兵だ。

「おまけに義勇兵全体で既に150人を超える受諾があつたようです。オーク200匹に対して正規兵700人＋義勇兵150人ですよ。4対1の戦いで1ゴールド。上手いけば、剣を交えることなく終わります。こんな機会<sup>チャンス</sup>は滅多にありません」

——そんな甘い話、あるわけがない。

グンゾウはカズヒコの見通しの甘さに少し呆れた。

最近、グンゾウは暇さえあればルミアリス神殿にある図書館で兵法書を読み漁っていた。数は少ないが、古典と呼ばれる名作が多く所蔵されているため、学習効果は高い。

——戦争は数だけの勝負じゃない、機動<sup>キドウ</sup>が重要なんだ。寡兵<sup>カヘイ</sup>でも、常に有利な位置に動かれれば、組織立ってない軍隊は分断されて、各個撃破されてしまう。まして、砦を

守るのが勇将率いる精兵200匹なら言わずもがなだ。そんなこともわからないのか？ 義勇兵は、個人責任至上主義ブリトニー率いる、訓練されていない野盗同然なんだぜ。

そう思っているもグンゾウは強く言えない。

「そうか。カズヒコは今回はいい機会だと思っててるんだね」

「ええ、そうです。だから、例えリョータ達がいなくても参加したいと思ってます」

「参加したい……のかあ」

カズヒコの発言からは兵団指令に対する積極的な参加意欲が伝わってきた。

「ふふふ」

カズヒコが急に笑い出す。グンゾウは訳が分からず頭を捻った。

「どうした？」

「あ、いや、全然違うなって思ってる」

グンゾウはますます分からず、顔の皺が濃くなった。

「リョータは来るなり、『おい、カズヒコ。ヨシノが生理だから、今回の兵団指令は止める』って言ったんですよ。グンゾウさんは大分違うなと思ってる」

——やっぱりリョータはアホだ。

「本当に………面白いだろ？」

「ええ。まあ、気持ちは分かります。ただ、俺にも思うところがあるので、今回は単独で

もやれる計算があるんです。リョータやヨシノ、またグンゾウさんに頼り切りではありません」

「そうか……」

——リョータやヨシノに頼ってないと見せたいところもあるんだろうな……。それでも、俺はカズヒコ達に死んで欲しくない。

グンゾウは今日カズヒコを説得することを諦め、カズヒコ小隊パーティが生き残るための戦術を少しでも多く伝えることに気持ちを切り替えた。

「じゃあ、せめて、俺の戦術論を聞いてくれないか？」

「もちろん。グンゾウさんの戦術は聞いておきたいですよ。教えてください」

「最初に、俺が守っている大原則を3つ……」

グンゾウはカズヒコに思いが伝わるように、懇切丁寧に戦術を説明し始めた。

アキが普段着の上に神官衣を羽織り、腰ロングソードに長剣という出で立ちで中庭までやってくる。少し猫背で、目立って華やかな容姿ではないが、清楚な佇まいたたずだ。

今日も長い髪を片側にまとめ、細い肩から胸にかけて垂らしていた。大きくとつた前髪バンダから、少し垂れた目がのぞく。大きく開いた襟デコルテぐりからは、白い肌デコルテに覆われた鎖骨が見えていた。

——ほんと、好み。

「あの……、リョータかグンゾウさん？　ブリちゃんが『ふたり2人のどつちか、または両方、義勇兵団事務所まで来てねーん、ハート』って伝えてと、管理人のおじさんから伝言をもらいました」

アキがリョータとグンゾウに管理人経由のブリトニーの伝言を伝えてくる。宿舎の管理人は元義勇兵がやっついていて、義勇兵団事務所と繋がっている。

それを聞いて、リョータとグンゾウは顔を見合わせた。目が合った後に、両方とも顔を顰しかめる。

「オッサン行けや」

「俺、昨日も会ってるんだぜ。今日会ったら、猛毒が致死量を超えちゃうよ。あと、俺は『オツ』って名前じゃねーけど」

リョータはグンゾウの言葉を完全に無視して、話し始める。

「アキ、代わりに行ってきてくれや」

「わ、わたし？　いいけど、ちよつと……」

——んん？　いいのか？　行くのかな？

「お前、『ちよつと』が多過ぎだろ？　生理なら、生理と女らしく言えよ」

「ちがつー！……」

アキは否定しかけて、恥ずかしさに顔を赤らめ、下を向いてしまった。

「こらっ！ 馬鹿リョータ！ アキちゃんになんてこと言うの?!」

ヨシノの平手がリョータの肩を叩く。

「アキちゃんは違うし！ アキちゃんは生理じゃないから！ 生理なんかならないから！」

——出た。ヨシノの天然殺し。これ、攻撃力高いな。俺まで恥ずかしい。

「ヨシノ、お前、嘘が下手すぎてバレバレなんだよ」

リョータが呆れた顔をする。

「え？ ほんとー？」

ヨシノは一瞬きよとんとしたが、直ぐに訂正をした。

「……あ、いや、嘘じゃないし！」

アキは居たたまれない。グンゾウはこの状況に機会チャンスを見出だした。

「アキ、一緒に行つてくれる？ 俺、ブリトニーとふたりつきりになるのは、嫌なんで」

それを聞くと、この場を離れたかったアキはすぐに返事をする。

「は、はいっ！ はいっ！ 行きましょう。行つて下さい」

——んー、リョータの意図しない素晴らしい援助アシスト。

「おろろ」

グンゾウは驚ろかされる。アキがグンゾウの腕を掴み、つかつかと宿舎の外に小走り  
でグンゾウを引っ張っていった。

義勇兵団事務所までの道中をアキとふたりつきりで歩いてきた。先程までの恥ずか  
しさを晴らすように、アキは紅潮した顔をぱたぱたと手で仰ぎながら、口を尖らせて深  
呼吸をしている。

「ふー……、暑いなー」

「じゃあ、事務所に寄る前に少し北区の市場でお茶してからにしない？」

「あっ！ いいですね。甘い物でも食べないと、元気出ないですもんね」

「たまには奢るよ<sup>おご</sup>」

「ほんとですか？ やったー」

アキの顔が笑顔になった。

同時に、一陣の涼風がグンゾウとアキを撫でていく。アキから漂う女性特有の甘い香  
りが風に運ばれて、グンゾウの嗅覚を刺激した。嗅神経から伝わった心地よい信号に  
よって、グンゾウの脳内に大量の何かが放出された。

——嗚呼、幸せ。

——嗚呼、不幸せ。

グンゾウのことを睨み付ける青い瞳。その回りには瞬く度に渦巻きができそうな程、バサバサとした黒い睫毛。その下には、唯一特徴のない整った鼻、悪魔を思わせる黒い唇、そして、全ての生き物を飲み込まんばかりに割れた顎。

——嗚呼、俺はあの顎に吸い込まれて死んでしまうのかー。

「どこ見てんのよー！」

ブリトニーが凄む。

「はっ！ はい。なんででしょうか？」

グンゾウは背筋がしゃきつと伸び、直立不動の姿勢になる。釣られて、一緒にきたアキも直立不動の姿勢になる。ここは義勇兵団事務所。

「あらやだ、冗談よ、グンちゃん。筋肉馬鹿は来ないのね。まあ、いいわ。別に誰に伝えてもいいから」

——だったら、リョータと俺を指名すんなよ……。

「あんた達はさー。何でも、今回の兵団指令を受けないって言うじやない？」

ブリトニーは何だかよく分からない金属と革でできた装備を弄りながら話した。布で磨いたり掃除をしている。腰に付けるような装備だが、内側に変な突起が生えている。何に使用するかは分からない。

「選択は自由だからな」



グンゾウは胸を張って堂々と答えた。この件に関して何も後ろ暗い気持ちはない。質問したわりに、ブリトニーはグンゾウを一顧だにしない。

「ふーん。まあ、やっぱり女って大変よねー」

そうブリトニーに言われたアキが、恥ずかしそうに顔を赤らめて、下を向いた。

——どこまで情報が漏れているのやら。

「まあ、いいわ。オルタナに残る義勇兵も必要だしね。他でもない、あんた達に誰でもできちやう安全な兵団指令の斡旋よ」

「は？ 何を？」

ブリトニーは奇妙な装備を棚に片付けながら、話を続ける。

「グラハム・ラセントラ将軍率いる赤蛇隊がリバーサイド鉄骨要塞、レン・ウオーター准将率いる青蛇隊がデッドヘッド監視砦を攻めている間、オルタナの防備は手薄になるわ。その間、オルタナを防衛する役目を担っているのがイアン・ラッティー准将なの」  
グンゾウはよく分からない人物の名前が複数飛び出てきたので混乱していたが、ブリトニーは気にせず続ける。

「そこで、オルタナの防衛にも義勇兵団の力を借りようと、辺境軍から要請があつたわ。つまり、兵団指令よ。ただの夜警の手伝いね。通常なら戦闘が発生することすらないわ。オルタナの中を一晚中ぶらぶらお散歩。酔っ払いが寝てたって助ける義理はな

いわ。それだったら心配性の神官でも、仲間を説得できるでしょ?」

グンゾウはブリトニーがお得意の両掌を上にした、お手上げの姿勢をしてから、首を傾<sup>かし</sup>げた。

「さあ? 報酬次第かな? その夜警のお手伝いってのはいくらなんだい? 俺等はとびきり優秀な新人義勇兵だからな。お高いぜ」

ブリトニーは口をへの字にして、同じくお手上げの姿勢をしてから口を開いた。

「ゴブリン退治くらいしか実績無いのに、大した自信ね。でも、喜んで。破格の報酬よ」  
「ほう」

グンゾウは期待して、ブリトニーの次の台詞<sup>セリフ</sup>に耳を傾ける。

アキも興味津々で耳を傾けていた。腕には道中に喫茶したお店で買った、ヨシノへのお土産を抱えている。

「なんと……………」

ブリトニーは長くて黒い睫毛をバサバサ鳴らしながら、目を閉じる。次の言葉までの貯<sup>た</sup>めを作った。1秒、2秒、3秒経ってもブリトニーは動かない。

——貯<sup>た</sup>めるな。一体、いくらなんだ……。

グンゾウの心に苛立ちが芽生え始める。

すると、ブリトニーは突然目をバチつと開く。そして、右手の人差し指を立てて、グ

ンゾウの方に勢い良く突き出す。グンゾウとアキは驚いてびくつとなる。アキはヨシノへのお土産を落としそうになって、慌てて空中で掴つかまえる。

「1シルバーよ。新米さん」

ブリトニーはこの上なく気味悪い笑顔でそう言った。

「んだよ。夜勤やって、1シルバーかよ。そんなんやる価値あるか?」

グンゾウは宿舎に帰ると小隊パーティの全員を呼んで新たな兵団指令オーダーについて説明をした。相変わらずリョータが不満を言っている。

「まあ、いいじゃないか。深夜3時くらいから朝までの短い時間だし。オルタナの街の平和を守るっていう崇高な目的もある。カズヒコ達を見送ってからすぐに天望楼に行けば十分間に合うから」

「あたし、夜のオルタナ楽しみー。過去に死んだ女義勇兵の幽霊とか出るかもー? 長い黒髪を垂らしてさー。怖いー! ふふふ。生理中は眠くなるから、昼から寝とこつと。ところで、これしつとりしてて、おーいしーねー!」

ヨシノは積極的ポジティブだ。そして、仲間に対して「生理」という言葉を使うことへ恥じらいがなくなっている。アキからもらったお土産のドーナツを頬張ほおぼって上機嫌だ。

——開あけつびろつ広げ過ぎていて、おじさんは逆に恥はずかしい……。

「ヨシノ……」

アキも苦笑している。

「キシシシ、夜警はいいが、カズヒコ達が兵団指令オードラに行くとは限らない。シシシ」

突然ハイドが妙なことを言い出した。

「なんやねん、突然。何か根拠でもあるかいな？」

シムラが疑わしそうにハイドに訊きいた。

「シツシツシ、僕には確実に引き留められる策がある。キシシ」

「まじかよ。オタクっ！ 言ってみろ」

リョータが膝を叩いてから、ハイドを指差す。

「キシツ！ 当日まで黙っておく。今から準備する。シシシシシシシ」

そう言うのと、ハイドは「シシシシ」言いながら出掛けてしまった。皆、不思議そうな

顔でハイドを見送った。

——相変わらず、言行げんこうが謎だ……。

それから、グンゾウ達はカズヒコ達を説得することができないまま、時間だけが過ぎていった。気が付けば兵団指令オードラは明日へと迫っていた。

## 6. 先が見えない暗闇の中で、僕等は再会を誓った

盛り上がった筋肉が、その力の全てを刃に込めた。

肉厚の刃が、唸りを上げて振り下ろされる。刃はカズヒコを狙っていた。バスタードソードで受け止める。

金属が擦れ合う不愉快な音。

「きやつー！」

チヨコの叫び声。

受け太刀の衝撃インパクトを上手く打ち消せず、カズヒコは後ろに吹き飛ばされて、仰向けに倒れる。

「へへえりやああああいー！」

彼を助けるために飛び出したミッツ。剣先を後ろに引き、右上から左下への斬り下ろす。

しかし、恐怖から踏み込みが甘い。目には涙が浮かんでいた。

彼の体格に合った小さめのバスタードソードは敵に届かず、小さな弧を描いて空を切る。

体勢が大きく崩れる。

そこへ、横から敵に体当たりを喰らい、数メートル空中を散歩する。受け身が取れないまま、前のめりに地面に突っ込む。立たなければ、止めを刺されてもおかしくない。

「っ、っつちだっ!!」

怯えた声。クザクが敵の注意を惹く。

敵も背後にクザクがいるため、ミツツに止めを刺せない。

3対1の数的優位。

しかし、圧倒的に不利な状況。

向き直った敵の気迫に押され、クザクの足がジリジリと下がる。

「下がっては駄目だ！ 前へ！ 距離を詰めなければ！ 相手の武器の方が長い！」

カズヒコが頭を上げて指示をする。甲冑が重く、なかなか起きることができない。

しかし、クザクの足はさらに後ろへ下がる。敵の身長はクザクよりも低かったが、体格は圧倒的に敵が上回っていた。その圧力に押され、クザクは後ろへ後ろへと下がっていった。体が開いてしまっている。

敵は、その口に不敵な笑みを浮かべながら、武器を下げ、クザクとの距離を無防備に詰める。

「チャンスだ！」

カズヒコの声に触発され、クザクが長剣ロングソードを振り上げる。

同時に敵は速度を上げ、一気にクザクとの間合いを詰める。

クザクが狼狽うろたえて長剣ロングソードを振り下ろす。

いかにも遅い。

甲冑に守られた敵は、腰の入っていない長剣ロングソードなど意に介さず、腰を落としてクザクの

下半身へ肩から体当たりを喰らわす。大柄なクザクが後ろに吹き飛び、倒れた。

もう誰も止める者はいない。

敵はクザクを踏みつけると、ゆっくり刃を振り上げた……。

グンゾウが骨笛を吹く。

「しゅー……りょー……りょー……！」

ここはオルタナを南門から出たところにある牧草地だった。

ホブゴブリン対策で散々訓練をした場所だ。

「おいおい、まじで、こんなんでおークとやる気かよ。下手しなくても、オークは俺よりでかいぜ」

オーク役のリョータが溜め息交じりに嫌みを言った。真実なだけに、全員苦々しい顔になる。

「リョータも本気でやりすぎ。今夜兵団指令に行くのに、大怪我したらどうするの?」

ヨシノがリョータを窘める。ヨシノは槍を持つてきたものの、至って軽い装備だ。お気に入りとなったドーナツをもぐもぐ食べながら、ゆったり観戦と決めこんでいる。生理中は食欲が止まらないとかで、昨日から何かを食べ続けている姿を見せていた。

隣にいるシムラも良く分からない対抗心を燃やして、昨日からヨシノに負けまいと大量にドーナツを食べている。

——見るだけで胸焼けがする。たぶん、油が駄目なんだな。2個も食べれば十分。グンゾウは歳の影響からか、ドーナツはそんなに食べられない。

「丁度いい。準備不足なら、むしろ行かせたくない。怪我は出発時刻を過ぎたら、オッサンが治す」

——後始末は俺かいつ!

「あいててててて、本当に……容赦ないな。もう足をどけろって」

リョータの下でクザクが不満の声を上げた。リョータは意地悪に、少し強く踏んでからどけた。

「今日兵団指令から逃げて、賞金首になったら、リョータが追ってくるのかい?」

バスタードソードを杖にして立ち上がったカズヒコが、苦笑しながら言った。

「まあ、それも悪くねーな」



リョータが呵呵と笑う。

「へへっ、ちよつとだけ、不安になってきた……」

同じくミッツがヨレヨレと立ち上がった。タイチに癒光ヒールの魔法をかけてもらっている。

「びびってんじやねーぞ、お前は。踏み込みが浅いんだよ。やるならもつと踏み込まねーと意味ねーし、時間稼ぎなら、カズヒコとの間に立つて防御に専念しろよ。どんなに重い攻撃だつて横から打ち込めば、剣筋をずらせるだろうが」

リョータが俺様顔で手下のミッツへの確な指導をしている。

——カズヒコ達を死なせたくない気持ちは一緒なんだな。

チヨコが少し不安そうな顔をして呟く。

「やっぱり、やめた方が………、これ、しつとりしてて美味しい」

発言の途中で横にいるヨシノからドーナツをもらって口に頬張ると、目玉が落ちるのではと思われる程、目を大きく開いた。

「にひひ、でしよー？」

ヨシノがニコニコしている。

カズヒコとしては、どうしてもチヨコの意見が受け容れ難かったのか、真面目な顔をして言う。

「いや、今のは連携が良くなかった。次はノッコも入れてやってみよう」

「おいおい、ちよつとまで、俺に精霊魔法エレメンタルマジックを喰らえつてのか？」

リョータが慌てる。

「あれ？ 駄目だった？ 流石に氷アイスジャベリン 槍や氷結球アイスグローブは使わないけど、凍てつく血位フリージングブラッドならい

いかなつて……。リョータ、オークでしょ？」

カズヒコが笑うと、皆が大笑いした。

氷アイスジャベリン 槍は氷で出来た複数の槍を勢い良く射出する氷結魔法カノンマジックで、氷結球アイスグローブよりも殺傷能

力が高い。

「ふざけっ……」

「あっ！ 私、ファイアボール 火炎弾もいけるよ」

リョータの言葉を遮さえぎるって、ノッコが面白いことを言ったので、さらに全員が大爆笑をした。

訓練を終えると、その日は重めの昼飯ヒルメシを摂とって、日が傾く前に全員で就寝することにした。

カズヒコ小隊は、集合が北門外に午前3時なので、軽く腹ごしらえをして、装備を完全に調えることを考えると、遅くとも午前2時には起きたいところだった。リョータ小

隊も夜警の準備をしてから、カズヒコ達を見送ることを考え、同じく午前2時には起きたいと思っていた。

しかし、1点、困ることがあった。新人義勇兵なので、誰も時計など持っていない。つまり太陽に頼ること無く、真夜中に起きなければならぬ。

時計はドワーフの細工師しか製作することができない。以前、興味本位でグンゾウがルドウルフに懐中時計の値段を聞いたら、目が飛び出る程高かった。その後、2度と聞くことはなかった。

幸いにして義勇兵宿舎の玄関には柱時計が設置されいているため、それで時刻を確認することができる。時計の中でも柱時計は比較的安い。それでもグンゾウ達には手が届かなかった。

——これ売つ払つたら、いくらになるんだろう？ でも、ブリトニーに殺されるんだらうな……。それとも殺された方がましなくらい酷い目に遭うのだらうか？

グンゾウはお尻の筋肉が無意識に引き締まるのを感じた。

「まあ、老人は長く眠れないから、誰かさんが一番に起きるだらう。オッサンよろしくー」

そう言うトリョータはさつさと男部屋に向かつてしまった。

——リョータめ！ いや、リョ<sup>ぼ</sup>ータ<sup>か</sup>め！ 俺は体が若々しいから長時間爆睡だわ！

全員で寝過オーごして兵団指令ダーはお流れさ。

「そうなのー？ 確かに、グンちゃんいっつも一番早いよね。じゃ、おやすみー。こんなに早く寝れるかなー？ 今日みんなと一緒に寝ようよー！」

ヨシノがいつものようにアキに抱きつきながら、チョコとノツコに手を振って呼ぶ。チョコが気付いてノツコに声をかけると、4人一緒に女部屋に向かつていった。

「そうでつか？ じゃあ……、俺も」

「なんでやねん！」

シムラが呆ぼけて、女子に付いていこうしたので、グンゾウはイガグリ頭をひっぱたいて突っ込んだ。シムラは振り返ると、嬉しそうに片目を閉じて親指を差し出す。

「グンゾウさんは突っ込みも冴さえてるな」

そして笑顔のまま、再び女部屋に向かおうとしたので、再度ひっぱたいた。

——俺も混ざりたいっ！

全員が期待した通り、一番最初に目を覚ましたのはグンゾウだった。目が覚めたら、まだ真夜中の12時だった。

——何故か8時間位で目が覚めてしまう……。認めたくないものだな、自分自身の、老化ゆえの早起きというものを。

グンゾウは、朝食（夜食？）の準備等をしつつ、午前1時までには全員を起こした。3号舎の中庭に全員揃い、食事をする。よく見ると1人足りない。

「ところで、ハイドはどこに？」

グンゾウが見渡すが、ハイドの姿はない。シムラもキョロキョロと回りを見渡す。

「いーひんな」

「そういえば……、今朝の訓練の時も見かけなかったですね……。あ、昨日……だ」

アキは幼児のようなくしゃくしゃの寝癖をそのままに、寝ぼけ眼まなこでスープをく**rb**

啜く／rb><rp></rp>></rp><rt>すすく／rt><rp></rp>></rp>>

くっていた。ほとんど目は開いていない。

——油断した姿が、たまらなく可愛い。

「そういえばさー。ドイハっち、何日か前に『シツシツシ、僕には確実に引き留められる策がある。キシシ』とか言つてなかったっけ？」

ヨシノの渾身こんしんの物真似ものまねが意外とハイドに似ていて、全員がクスクスと笑う。シムラが堪こらえきれずスープを目の前のミッツに吹き出した。結構な量のスープがミッツの顔にかかる。

「うわっ！ きたねっ！ へへっ！ 何すんだよ？ へへへ」

ミッツがへらへらしながら嫌そうな顔をしている。

——相変わらずミッツの感情は、怒ってんだか、笑ってんだかわからん。

「怒っちゃやーよ」

シムラは全く反省した様子を見せず、クザクの陰に隠れた。クザクは隠れん坊に適した大きさだ。

ミッツがそれを追いかけて始め、クザクを中心にぐるぐると回る。クザクは迷惑そうな顔をしている。

「うるせえぞ！ 飯めしに埃ほこりが入るだろうが！」

リョータに一喝され、びびったミッツが直立不動となる。追いかけるのを諦めた。

シムラはミッツを振り返り、後ろを向いたまま、これ幸いと中庭から逃走を凶ろうとして何かとぶつかる。

「おっとー！ とういまでーん。………って、誰やねん、お前っ!!」

シムラの大声でそこに居た全員が注目する。シムラが何者かとぶつかっている。洋燈ランブの灯りに照らされて、その人物が明らかになっていく。

そして、全員の目が点になった。

「あ、て、あ、こ？ あ……」

衝撃すぎて、リョータは思考が言葉にならない。

「ハ、……ハイドウ？」

グンゾウが出すことができた声は、弱々しく、情けないおならのような声だった。半日ぶりに登場したハイドの姿は、異様……でもないが、いつもとは大きく異なる格好をしていた。

髪型は頭の両脇と後ろを短く刈り上げ、前髪から頭頂部は長い髪を盛り上げている。髪は油でしつかりと後ろに流し固めていた。いつもの鬱陶しいおかつぱ頭と異なり、清潔感を感じる髪型だ。その整った髪型の下に、いつもと同じハイドの顔があった。眼鏡は外しているが、大して変わらない。

グンゾウの失われた記憶の中で、ポンパドール及びリーゼントと言う言葉が浮かんだ。

——ちよつと禿げてる……？

ハイドはいつもおかつぱ頭なのであまり気が付かなかつたが、実はかなり額が広く、禿げているとも思える広さだった。特に額の両脇はだいぶキテいる。

さらに服装も魔法使いギルドで購入可能な普通の長衣<sup>ロブ</sup>ではなく、表面に光沢のある毛織物で出来た、上下揃いの服を着ていた。ハイドの体型にぴったりと合っている。白い綿の襟付きの服を中に着込み、首には赤いタイを結んでいた。一言で表現するならば「決まっている」だ。

ハイドの服装を見て、何故かグンゾウの心に少しだけ寂しさが訪れる。

——あれ？　なんだろうこの気持ち……。理由が分からない。

そんなグンゾウやその他の仲間の戸惑いを尻目に、ハイドは「キシシ」と小さく笑うと、すたすたと歩いて、ノツコの前まで歩いて行く。

「え？　あ？　えっ？」

ノツコは近付いてくるハイドに困惑し、何も出来ずにおろおろとしている。隣にいるチヨコの肩に手を掛けたり、離したり、意味のある行動が出来ていない。チヨコも大きな目をさらに大きく見開いて硬直している。

——止まるな！　逃げるか、……。戦うんだ！

そんなグンゾウの思いも空しく、ハイドがノツコの前まで来ると、ノツコに覆い被さる様に目の前の机テーブルに左手を叩き付ける。その衝撃で机テーブルの上の食器が浮き、ガチャリと音を立てた。

「おいっ！　ノツコ」

今まで誰も聞いたことのない低い声で、ハイドがノツコを呼ぶ。

「は、はひっ！」

ノツコは引きつった声で返事をする。正確には顔も引きつっている。

しばらくの沈黙が流れる。

ダムロー旧市街の橋の下に隠れていた時以上の緊張感を全員が味わっていた。



その静寂をハイドが破る。

「お前はずっと俺の横に居ろよ。兵団指令なんか行くんじゃない！」

再び静寂が訪れる。

——な、なんだってー！もしかして……これ、壁ドン的な何か?!  
 ハイドが言っていた、確実な引き留め策的な何かなのか?!

ハイドが嘯まずに、そして、いつもの不気味な笑いも挟まず台詞を言った。それを聞いていた全員が、固唾かたずを飲んでノツコの反応に注目する。

「ごめん、無理」

ノツコがさらつと断る。中庭の空気がノツコの氷結魔法で凍る。

——ですよー。あー、全く違和感ないわー。

ノツコは戸惑いながらもショートカットの髪の毛を右手でなで付けると、言葉を繋いだ。

「……生理的に……か、な？」

——おおっと、ほぼ殺人に近いことしたぜ、あの娘さん。

絶望的に気まずい雰囲気の中庭に漂う。

「え、え?……なんで? シン?」

ハイドが重たい空気の中、頑張つて口を開く。ハイドの動揺が、その声の震えから伝

わる。

「……だだって、ほら、シシシ、女の子は傍そばにい、いる男を好きに……、急にか、変わったりするとドキドキして……」

——も、もう止めるんだ！ ハイド！ これ以上、傷を広げると致命傷になるぞ！

グンゾウが見ていられず、ハイドから目を逸らす中、ハイドの肩を掴む者がいた。リョータ、そして、シムラだ。

「よし、オタクにしては頑張った。中で着替えるぞ！」

「俺の中では伝説レジェンド級に面白かったぞ」

ハイドは、リョータとシムラに腕を組まれて、引き摺られて行く。既に自分で歩く力は無い。

「シシ……、だだって、壁ドン……」

ハイドは譚言うわごとのように何かを呟きながら宿舎の中に消えていった。

全長160センチにも満たない台風が過ぎ去った後は、台風一過の晴れた夜空だけが残った。

——成果は出なかったが、記憶には残ったぞ。

きっと文学者であれば、この状況をこう表現するのではないか。

『まだ暗い空の下、オルタナ北門前は騒然としていた。』

真夜中にも関わらず、オルタナ北門外は大勢の人でごった返していた。

デッドヘッド監視砦の攻略を目指す「青蛇隊」、正規兵700余名と義勇兵団190余名が群れを成している。

参加する兵士以外にも見送りの者達や物見高い野次馬、それらを目当てに飲食物や装備品を売る物売りまでいる。総勢1000人を越す人集りが、オルタナ北門外に出来上がっていた。

そして、ここで見送りの者と参加する者に別れる時が来る。リョータ小隊は、カズヒコ小隊が義勇兵の列に加わる前に最後のお別れをすることにした。多少のかがり火が焚かれているとは言え、真夜中のオルタナ北門外は10メートル先は見えない程暗い。

グンゾウが見渡すと、女子は背の高いヨシノを中心に集まっている。

「2人とも頑張つてね！ 危なかったらすぐ逃げるんだよ！」

ヨシノがチョコとノツコの肩を強く抱きしめる。

「うん……、逃げる」

「ありがとう、ヨシノちゃん」

次はアキがチョコとノツコを1人ずつ抱きしめる。

「光よ、ルミアリスの御加護がありますように。2人とも危ない場所に位置取らないよ

うしてね」

「うん……」

「うん、うん、アキちゃんありがとう」

チヨコやノツコは不安そうな顔をしていた。幼くて脳天気な所もあるが、戦闘では圧倒的に頼り甲斐のあるヨシノや、精神的に大人で、戦局を冷静に見ている伶俐れいりなアキと別れる不安は計り知れない。

「キシ……、壁ドン……」

ノツコに「生理的に無理」と言われたハイドは、相当衝撃が大きかったらしく、グンゾウの後方で繰り返しうわごと謔言のようなことを言いながらノツコを見つめていた。格好は魔法使いの長衣ローブにおかっぱ頭へと戻っている。

——膨らんだ妄想ファンタジーと現実の差が酷かったのかなー？

そのハイドの横で、シムラがミッツやタイチと体を叩き合って気合いを入れている。

「ミッツ、タイチ、オーク童卒してこいや！」

「へへへ、分かってるよ。当たり前だろ。シムラより先に卒業さ」

「僕は、積極的に前へ出る気ないけどね」

「なんや、タイチは覗き専門かいな」

「ははは。シムラ、下品だよ？」

グンゾウもタイチとミッツに声をかけた。

「タイチ、カズヒコを戦術的に支えてくれよ。俺が渡した手紙は読んでくれた？」

グンゾウは、カズヒコへ戦術について小忠実こまめに講義をするのと同時に、タイチへも手紙を認しんめて情報共有をしていた。

「はい。読みました。戦術の基礎が整理されていて、すごく勉強になりました」

グンゾウは頷くと、タイチと握手をしてから抱きしめた。抱きしめつつルミアリスへ祈りを捧げる。

「タイチ、ルミアリスの御加護が君に光を照らし続けますように」

「はい。グンゾウさん、ありがとうございます。グンゾウさんにもルミアリスの御加護がありますように」

グンゾウはしばらく抱きしめてから、タイチを解放した。次はミッツへ話しかける。

「ミッツは……」

そう言いかけて、特にミッツへ言うことがないことに気付いたグンゾウは言葉が止まってしまった。ミッツは何か褒めてもらえるのではないかと、ご飯に待てをかけられている子犬のような目をしている。

「へへ、なんですか？ グンゾウさん。俺、やっぱり最近は戦士としてイケてますか？」

「お、おう、イケてる、イケてる。ま、まあ、命大事にな。カズヒコが動けない時は、無

理に前に出ず、盾役タンクに徹した方がいいぞ」

「へへへへいっ！ 任せてください。ぼっちりチョコを守ります！」

「お、おおう。そうだな。ノッコもな」

「なんや、お前はいつもチョコだけかいな。ノッコとタイチも守ったれや」

「あ、へへいっ！」

ミッツは発言をグンゾウとシムラに突っ込まれ、恥ずかしそうに頭を掻く。タイチは温かい微笑みでミッツのを見ていた。

リョータはカズヒコ、そしてクザクと居た。リョータがまた何か悪いことを言ったのか、クザクは顔を背けてしまった。

——最後の最後まで……。

カズヒコとリョータはガツチリと右手で握手をする。

リョータは左拳でカズヒコの肩を軽く叩く。

「もうここまで来たら何も言わねえ。生きて帰ってこいよ、カズヒコ」

カズヒコもリョータの肩を左拳で叩く。

「ああ、必ず帰ってくるよ。全然無理はする気ないからね。一晩でーゴールド稼いでくるよ。リョータもーシルバーばっちり稼いできなよ」

「おうおう、言ってくれんなー。俺はやりたくねーのに、オッサンが引き受けるから

……」

リョータが左手で髪の毛をくしゃくしゃと崩した。

「俺の名前は、〃オツ〃じゃねーけどな」

グンゾウが話かけるとリョータは少し驚く。さらにグンゾウは話に割り込む。

「カズヒコ！ みんなを頼んだよ。戦いの大原則を守ってくれろと嬉しい」

「はい、必ず。グンゾウさん、色々ありがとうございました」

グンゾウがカズヒコの手を取って握手をすると、カズヒコはキラキラした瞳でグンゾウを見つめ返した。

——女の子はこのキラキラスキル技にやられちゃうんだろうな。俺にも欲しい。

グンゾウは、カズヒコの横で白けた顔をしているクザクにも話しかけた。

「クザク。クザクは一番ガタイが良い。オークにも負けやしない。ダムローの森でもす

ごく良い戦いをしてた。だから積極的に盾役としてタンクみんなを守ってくれろと嬉しい。

頑張つてな！」

「はあ、あ、えーつと、まあ……、はい」

クザクは少し恥ずかしそうに、ぽりぽりと頬を搔きながら、とても頼りない返事をした。

——頼りない……でも、十分。もう言うことは無い。

そんなお別れをしていると、「青蛇隊」の集団は段々と縦長の長方形へ形を変え、緩やかに整列を始めた。

「じゃあ、そろそろ列に加わるか。よしっ！ みんな、行こう！」

カズヒコが声をかけると、小隊の仲間はそれぞれカズヒコの元に集まる。

「リョータ小隊のみんな。必ず無事に帰ってくるので、また、明日の夕方にでも打ち上げをしよう！ じゃー！」

そう再会を誓うと、カズヒコ小隊は列が形作られつつある「青蛇隊」の後方に向かって行った。カズヒコは自信に満ちた笑顔だ。その後ろをクザクがのっしのっしと重い足取りで付いていく。その後ろにはチヨコがちよこちよここと付いていく。

「みんな、気を付けてねー。絶対帰ってくるんだよー」

ヨシノが大きな声を出して手を振っている。その横で、アキも小さく手を振っている。ヨシノは見たことが無い位、不安そうな顔をしていた。グンゾウはヨシノの目元が少し潤んでいるように見えた。

カズヒコ小隊はどんどんと遠ざかっていく。

チヨコが何度も後ろを振り返り、不安そうにしていたのがグンゾウの印象に残った。

ヨシノとアキはカズヒコ小隊が夜陰に消えて、見えなくなるまで手を振り続けた。



「さて、俺等も遅刻するとまじいから、そろそろ行くか」

リョータが促す。

リョータ小隊はカズヒコ達の加わった「青蛇隊」に背を向けて、オルタナ北門の中に戻っていった。

オルタナ北門から夜警兵団指令の集合地点である天望楼へ向かう途中、グンゾウの隣をアキが歩いていた。アキは悩んでいるような、真剣な表情をしている。

——カズヒコ小隊のことが心配なのかな？ それとも、生理が重いのだろうか？

「どうした、アキ？ 何か問題でもあった？」

グンゾウに声を掛けられ、アキは何かに気付いたような顔をした。

「あつ！ いや。別件ですが、何か気になって……」

「え？ 何が？ 何が？」

グンゾウはアキの顔を見つめる。アキもグンゾウの方を向いて、真剣な顔をする。

「あの時、ハイドが着ていた揃いの服ですが……、あれ、グンゾウさんが大切にしている服じゃないですか？」

「え？ いや、でも、あれはハイドにぴったりだったよね？ ハイドと俺じゃ、全然服の

寸法が……」

そう口にしていく傍そばから、グンゾウの頭の中で情報の点が線で繋がれていき、事象の全容が見えてきた。隣にいるアキは全てを察しているようだった。

——あいつ、俺の服を修理に出しやがったんじゃないか？ 俺の失われた記憶に唯一繋がる可能性を持った、あの服を。あの時感じた、不思議な寂しさは、それだったんじゃないか？

普段は冷静なグンゾウの頭へ、急に血が上り始める。

「ハア————イ——ードオ————！！」

「シシシシシシシ……」

グンゾウが叫ぶと、それを察知していたかのようにハイドはもの凄い速さで逃げ出した。

戦争の前夜。違う道を進んだ2つの小隊パーティ。

紅い月と深緑の夜空は、いつもと同じようにきらきらと音を奏でていた。

## 7. 序奏

「遅いぞ、このならず者共が！ 何でこんないい加減な奴等に頼らねばならんのだ。大體、貴様等義勇兵はオルタナの治安を乱す、ゴミのような輩だ。その存在は下手をすればあのゴブリンよりも劣り……」

夜警兵団指令のために、天望楼の近くにある辺境軍司令本部の衛兵事務所へ出頭したリョータ小隊だったが、カズヒコ達の見送りのため、少し遅刻をしてしまった。

受付の兵士はそれに腹を立てて、先程からくどくどとお小言を言っている。

遅刻したことは全面的にグンゾウ達の過失であるが、お小言の言い様は酷いものだった。遅刻に対する叱責に止まらず、義勇兵全体に対する存在意義の否定にまで及んだ。

そもそも義勇兵になっている人間の多くは、あの塔から謎に湧いてきた得体の知れない外様の人間であり、オルタナにとっては異物だ。そのため、自尊心の高い正規兵の中にはあからさまに侮蔑した態度をとる者も少なくない。

そんなオルタナの社会的背景もありながら、さらに今夜オルタナにいる正規兵の機嫌は頗る悪い。何故なら、今夜は「双頭の蛇」という大きな戦があるからだ。兵士にとつて戦は最大の活躍の場であり、戦で手柄を挙げる事が最大の荣誉である。そんな日に

リバーサイド鉄骨要塞にも、デッドヘッド監視砦にも行くことができず、オルタナの警備に就かなければならないイアン・ラッティー准将率いる部隊は出世の道から外れた存在であり、悪く取れば戦力外通知を受けた部隊であると言える。それは機嫌も悪くなるというものだ。

グンゾウ達の目の前で長いお小言を繰り返している兵士は、典型的な義勇兵嫌いの兵士らしい。そして、体格が貧弱で如何にも戦には使えなそうな事務処理専門の役人系兵士だ。

「よって、虫ケラのように湧いた貴様等下等な存在が、辺境最強の武人、イアン・ラッティー准将配下で働けるだけで名誉なことであり、むしろこの兵団指令で死ぬぐらいの心構えが相応しいにも関わらず……」

——嫌みな上に、説教が長いな……。

「むかちーん。なんや、その言い草は。温厚な俺もそろそろ切れるで、ほんま」

シムラが興奮をして、食ってかかろうとする。グンゾウは後ろからシムラを羽交い締めにして、捕らえた。背負った矢筒の矢がグンゾウの顔に当たって痛い。

「まあまあ、シムラ落ち着いて。いつものことじゃないか、どうどう」

ヨシノやアキもうんざりした表情をしている。義勇兵だって好きで塔から湧いたわけではないし、好きで義勇兵になったわけでもない。

リョータがゆつくりとシムラの前に出て、そのイガグリ頭を左手で制しながら話しける。

「おいおい、シムラ。こんな雑魚一般兵にガタガタ言つてんじゃねーよ」

——おっ！ 珍しくリョータが大人だ。成長したな！

グンゾウはリョータの成長について、大きな感動をもつて受け止めた。

「文句言う前に殴っちゃえばいいんだよ、殴っちゃえ。面倒臭え」  
めんどうくせ

そう言うなり、リョータはお小言兵士の顔を全力の右拳で殴る。殴られた兵士は後ろに吹っ飛んで、壁にぶつかりと床に崩れ落ちた。

——なんですとー!!

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒キュし手ア」

グンゾウの手に慈愛の光が宿り、伸びている雑魚一般兵Aの傷を治す。顔に残る傷と共に、犯罪の証拠が消えていく。

グンゾウは顔の傷を癒やしながら、手首を取り、脈を確認した。

——特に命に別状はなさそうかな？ 犯罪の片棒を担がされた気になる。こういうことするから、義勇兵の立場が上がらないんだよ。アホリョータめ。あれ？ なんだろこれ？

一般兵Aの手首には月と雲が意匠されている小さな入れ墨が入っていた。兵士の中には過去に所属した特殊部隊の入れ墨を入れている者がいる。

——この弱さは、特殊部隊経験者って感じじゃないけどな—。

「なんだかよー、俺等は時間通り来たのに、あいつがぐずぐず手続き遅らしてたんすよねー。おまけに足を滑らせて転けたし。普段からとろくて使えないっしょ、あいつ?」

犯罪者はしれつとした顔で、奥から次に現れた一般兵Bと話している。全く悪びれた様子が無い。一般兵Bはまともな戦士らしく体格の良い中年男性だった。

「ああ、……まあな。今夜のオルタナに使える兵士は少ないさ」

一般兵Bは自嘲気味にそう説明した。

「義勇兵も今夜は似たようなもんだろ? ただ、警備には比較的荒事に役立つ者を回してもらったみたいだがね」

一般兵Bは、まだ伸びて寝ている雑魚一般兵Aを一瞥した後、リョータ小隊の面々を見回した。

——ばれてるな……。

オルタナはアラバキア王国の辺境に存在している。つまり領土争いの最前線だ。そのためオルタナ生まれの兵士には、身分の貴賤や性別、時には種族にも拘ることなく、実力を重んじる気風がある。

——好い人も居て良かった。

「配属の指令を言い渡す。戦士リョータは天望楼の正面警備隊、戦士ヨシノは天望楼の裏門警備隊、聖騎士アキは要人警護隊にそれぞれ配属だ。オルタナの中樞警備だ。最善を尽くしてくれ。何をするかは、それぞれの部隊で説明がある。この指令書を持って早速向かってくれ」

一般兵Bのおじさんは蠟で封をした指令書を3人に渡した。

「狩人シムラと魔法使いハイドは南門警備隊だな。ついでいるぞ。ここからは少し遠いが比較的治安もよく楽な場所だ」

そう言つて、同じように指令書を渡した。

「やったでー！」

「シシシ、日頃の行いだな」

——いいなー。あれ？ 俺は？ 俺は？ アキと一緒に良かったなー。

「神官グンゾウ殿は、一番キツイ即応部隊だ。何か有った時に、オルタナ全体に駆け付ける。すまん、今夜は戦のせいで神官が少ない」

「はい……」

——がーん。治療要員として待機とかじゃないのー？ それなら、お姫様の護衛とか良かったなー。

「シシシ、全くもって日頃の行いだな」

——人の思い出の服を勝手に盗み出して分解ぼしたり、空気読まず壁ドンしたりしてたくせに。

グンゾウはハイドに軽く殺意を抱いた。

しかし、アキに声を掛けられたので、グンゾウの機嫌は一気に良くなる。

「グンゾウさん、頑張ってくださいね」

「ありがとう、アキ。アキも気を付けて」

「はい」

アキは、はにかむように笑った。いつもの笑い方だ。

——キタコレ！ あ、が、る、わー！

全員で衛兵事務所を出る。

リョータの分厚い手が勢い良く合わされ、「パン」と大きな音が空高く響く。

「うっし、朝番が起きるまでのたかだか数時間の仕事だ。さくつと勤めて、1シルバーもらって寝るぞ。じゃ、解散！」

珍しくリョータが綺麗に締めたので、「ほーい」「ほいほい」「シシシ」等と言いながら、銘々自分達の持ち場に散っていった。

「じゃあ、みんな無理しないで、気を付けてー」



一旦は皆と外に出たものの、グンゾウは即応部隊なため衛兵事務所で待機だ。皆が散らばるのを見届けると、衛兵事務所に戻った。

——一番近いのが正門のリョータじや、会いに行く動機モチベーションが低いな。

——オルタナで大きな犯罪なんて聞かないし、ゆつくり茶でもしばきながら、衛兵の知り合いでも作ろうかな？

なんて考えていたグンゾウの予想は大きく裏切られることになる。

事務所に入って即応部隊の役割や編成等の説明を受け終えた直後、午前3時半を過ぎた辺りで、急報がもたらされた。

「南区で爆発を伴う火災だ！ しかも広範囲で火の回りが早い。明らかに油や火薬が使われている！」

「同じく、東区でも火災。こちらも広範囲」

「北区でも火事だ！ 範囲は狭いが、人の多い市場の一部が燃えている」

早馬で駆けてきた兵士が、次々と衛兵事務所へ飛び込んでくる。オルタナの南区、東区、北区で同時発生した大規模な火災の知らせだった。

西区でも火災が発生しているかもしれないが、泥酔したホームレスが日常的にそこらに火を付けたりにしているの、あまり取り上げられない。ホームレスが起こした火災の

被害はたかが知れている。西町の不祥事は盜賊ギルドか暗黒騎士ギルドが方を付けるので、よっぽどでない限りは辺境軍は手出ししない。

オルタナの建物は石造りが主なので、延焼しづらい。そのため何も原因がなく大規模な火災に発展ことは考えがたい。さらに、午前3時半では人が活動していることも少ないため、火の不始末を除けば火災も起きにくい。となれば、火災の原因は放火だ。

即応部隊の指揮官とおぼしき恰幅かっかくの良い人物は、オルタナ市街地の地図を机の上に広げると、火災の発生状況を地図上に展開する。

グンゾウはお茶を啜りながら、地図を眺めていた。

——被災地域が随分と城壁寄りだな。外からの攻撃だろうか？

白髪の混ざった口髭を触りながら、悩んでいる。周囲の兵士はいつでも動けるように緊張した面持ちで控えていた。

「んーむ、一番の被災地は南区だが、東区はお偉いさんの家が多い。よし！ 南区に第1、第2小隊が向かえ、戦士ギルドと連携して当たれ！ 東区には第3、4小隊、魔法使いギルドと連携！ それぞれ、到着と同時に状況報告の早馬を出せ！ 北区の火災は北門警備隊のみで対応しろと伝えろ！ 商工会とルミアリス神殿に協力を要請しろ！

急げ！」

周囲の兵士達は指揮官の命を受けると、「はっ！」という返事をすると同時に弾けるよ

うに動き出した。

即応部隊は6小隊から構成される。1小隊は6人である。ルミアリス信仰が盛んなアラバキア王国では六芒にちなんだ数字を使うことが多い。

今夜は戦で何人が駆り出されているため、補充要員として義勇兵団から何人かが加わっているが、普段は朝番、昼番、夜番でそれぞれ36人の兵士が任務に就いている計算になる。

グンゾウは第5小隊に配属されている。つまり、出勤命令が出ていない。緊急事態であつたが、指揮官は第5、6小隊を温存しておいたことになる。

——人員を余らせておく理由はひとつだ……。これ、俺、やばくね？

グンゾウはお茶をちびりちびりと啜りながら、指揮官の顔をちらりと覗き込む。恰幅かつぶくの良い指揮官は、元々なのか、緊急事態からなのか、眉間みけんに深い皺を作つてオルタナ市街の地図を覗き込んでいた。

そこへ騒さわがしい音を立てながら、1人の兵士が衛兵事務所に駆け込んでくる。兵士は傷付き、鎖帷子チェーンメイルには1本の矢が刺さつていた。

「急報!! 天望楼の裏門が何者かによつて襲撃を受けている! 応援を求めろ!」

——ヨシノの居る場所だ! 普段なら全然安心だが、今日は大丈夫だろうか?

傷付いた兵士は叫ぶと、床に倒れ込んだ。死んではいないようで、聖騎士らしき男が

光魔法を使っている。

「よし！ 来たか！ 第5、6小隊は裏門に急行！ 伝令！ 引退した者を含め、予備役を全部呼び出せ！ 天望楼内を守るぞ！」

指揮官は机を叩くと、大きな声で吠えた。

「まぢかー。そうだと思っただよねー。最近アキが優しいなーと思っただら死亡フラグの伏線かー。短かっただなー、俺の人生。……いや、気持ちを切り替えて、ヨシノを早く助けに行かないと！」

「義勇兵、準備だ！」

第5小隊の隊長がグンゾウを急ぎ立てる。第5小隊の隊長はジニーと言う名前だった。長身で筋肉質の若い男だ。金髪碧眼で割とイケメン。

「はいはい。光よ、ルミアリスの加護の元に……光の護法」

グンゾウはまず最初に光の護法を唱える。第5小隊の面々の左手首に光る六芒が浮かぶ。グンゾウは身体がふわっと軽くなるのを感じた。

「第5小隊、出発するぞ！」

第5小隊は全員松明を手にとると、衛兵事務所を飛び出す。そのまま天望楼の堀沿いに走って、裏門へ向かった。光の護法がかかっているため、全員全速力に近い速さで走っている。第6小隊も後ろからついてきているが、第6小隊には神官が居ないため、

明らかに遅れている。

あつという間にグンゾウと第5小隊は天望楼の裏門近くまで到着する。

裏門まで残り150メートルというところで、突然「うっ！」という呻き声を上げて、グンゾウの隣を走っていた兵士がしゃがみ込む。瓜実顔うりくねがほをしているので、グンゾウは「ウリリン」と名付けていた。

「どうした?!

ジニーが訊くと、しゃがみ込んだ兵士が答える。

「肩に矢を受けました。天望楼とは逆方向の暗闇からです」

「なんだと!」

ジニーの慌てた声。

足が止まり、全員が周囲を警戒する。

目が松明たいまつの灯りあかになれてしまっているため、灯りあかの届かさない先は見る事ができない。  
い。

次の瞬間、またしても呻き声うめがして、グンゾウの後ろにいた太った兵士がしゃがみ込む。褐色の丸顔で、横と後ろ髪を刈り上げ、頭頂部だけ毛が生えた髪型をしているので、グンゾウは「カボチャン」と名付けていた。

「脚を撃たれました！ 狙撃です！ 我々は狙われています！」

次々と矢音がする。

——遅い！

「たいまつ松明を捨てて、散開するんだ。左手首の六芒を隠せ。敵は光を目がけて狙撃しているぞ！」

グンゾウが叫んだ。一瞬の静寂の後、ジニーが叫ぶ。

「神官の言う通りにしろ！」

その声に従い、第5小隊の全員がたいまつ松明を投げ捨て、散開する。

訪れる暗闇。

人間の目は、あんじゅんのう暗順応に時間がかかる。このままでは歩くことも怪しい。

全員、息を殺して、暗闇の中、静寂を保っている。時折、矢が刺さった兵士の痛みを堪える声がある。

——まだ目が暗闇に慣れないな。

あか紅い月とまほゆ眩い星々の煌めきが辛うじて周囲を照らしてくれているが、少し離れれば完全な暗闇だ。

グンゾウはジニーの傍そばにいた。正確にはジニーを盾にして、天望楼側に身を置いていた。

——神官がやられたら、お話にならないからな。

「グンゾウと言ったか……お前の方が戦の経験が豊富なようだ。次はどうしたらいい？」

ジニーが静かな低い声でグンゾウに訊いてくる。

「敵の所在が分からない以上、光魔法は的まどになるから使えない。そろそろ動ける機会チャンスが来る。もしたら掛け声を頼む。一気に走って天望楼裏門まで向かおう。俺の仲間が裏門にいるんだ。腕は立つが、早く助けに行きたい」

「何故、機会チャンスが来るって分かるんだ？」

ジニーにはグンゾウの発言が理解できなかつた。

「それはね……俺が、……俺が残酷だからだよ」

グンゾウは悲しそうな顔をしたが、暗闇の中、ジニーがそれを見ることはなかつた。

機会チャンスは刻一刻と近付いてきていた。

## 8. 女戦士達の輪舞曲

空気を切り裂く音。

暗闇の向こうから、次々と矢が飛んで来る。

——狩人の連射つらなれを考えると、敵が何人かわからないな……。

その風切り音はグンゾウにとつては脅威だ。金属鎧を身に付けていない神官など一撃で致命傷を負う可能性があった。

そもそも大弓から放たれた矢は、薄い金属鎧なら簡単に貫通する威力がある。

第5小隊の全員は体勢を低く保ち、暗闇に身を潜めていた。

「いつなんだ、その機会チャンスってのは？ 隊員の傷も手当てしなくては……」

ジニーは訝しげだ。グンゾウは口に指を当てて答える。

「しっ！ とりあえず動脈が切れていなければ、平気さ。痛いけど……ほら、聞こえてきたろ？ それに見えてきたぜ」

ジニーが耳を澄ますと、先程第5小隊が来た道の後方から、音が聞こえてくる。

金属鎧の擦れ合う音。

第6小隊の行軍する音だ。松明たいまつの灯りも見えてくる。



「まさか、……第6小隊を囮にするつもりなのか？」

「声がかいよ。よく考えろ、別に第6小隊に死ねというわけじゃない。俺等と同じように、暗闇に潜んで敵を惹き付けていればいいんだ。それに、あっちには光の護法がない。光の護法がかかっている第5小隊が裏門に向かった方が戦力になる。俺等の最優先は天望楼の護衛と、迅速な敵の排除だろ！」

ジニーは黙る。反論をするだけの理論武装がない。

グンゾウは少し嘘を吐いた。グンゾウの頭にはヨシノを守ることしかなく、1秒でも早く天望楼裏門へ辿り着きたかった。

「分かった……だが、第6小隊に警告だけはする。いいな」

「問題無いよ。むしろ、そうしよう。」

ジニーとグンゾウの間で合意が得られた頃、後ろから追いついてきた第6小隊が狙撃手に狙われ始める。「うわっ！」等といった叫び声が聞こえ、混乱している。

第5小隊に飛んでくる矢の量が激減した。

「よし！ 今だ、第5小隊は全速前進！」

ジニーが叫ぶと、全員動き出す。グンゾウもジニーの影を追った。

天望楼裏門の篝火は見えていた。

「第6小隊！ 松明を消して闇に身を伏せるんだ！」

さらにジニーが叫ぶと、しばらくして第6小隊の松明たいまつが消える。その頃には、グンゾウを含む第5小隊は既に危険地帯を脱していた。

裏門前は篝火かがりびが煌々こうこうと焚かれていた。

「……なんなんだ……」

ジニーが呆然として立ち尽くす。

天望楼裏門前に到着した第5小隊の目に、普段では考えられない風景が飛び込んでき  
る。

鉄格子で出来た門は、既に開け放たれ、目の前には両手で数えきれない程の死体が横たわっていた。横たわっている死体の半数は辺境軍の兵士のものだが、半数はあまり見ない黒ずくめの装備だった。グンゾウが見たことのない怪物モンスターの死体もある。

——敵は怪物モンスターを従えているのか？

グンゾウが回りを見回したが、倒れている人影の中にヨシノの姿は無かった。

——ヨシノがそう簡単にやられるわけない……よな。主戦場は天望楼内か？ アキ

は大丈夫だろうか？

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒キユし手ア」

グンゾウは天望楼の方を見つめながら、矢傷を負った2名の傷を癒いやした。

——こういう時に1人ずつ治すのは効率が悪いな。恵みの光陣サークレットでも覚えれば良かった。

恵みの光陣とは神官を中心に光の円陣を発生させ、持続的に光るその円陣の中にいる者達の傷を少しずつ回復させる光魔法だ。

天望楼は建物の入口が開け放たれ、中から光が漏れている。建物内から戦闘の気配は感じられない。

中庭の暗闇から兵士達の声が聞こえた。何らかの戦闘が行われているようだ。

「天望楼内は正門から援軍が駆け付けるだろうし、辺境軍で最強の兵士達が守っているので大丈夫だろう。我々はこの門を封鎖して、中庭の敵を殲滅しよう。生存者を中庭に入れて、味方は回復、敵は尋問しよう。門を閉鎖しろ！」

ジニーが指示をする。

——そうかな？ 追撃して天望楼内の敵を挟み撃ちした方が良いような気がするけど……。まあ、早くヨシノを探したいから黙つとこう。

第5小隊の面々は素早く生存者や大盾等の使える装備を探すと、天望楼の裏門を閉じた。生存者は裏門を警備していた兵士1名しかいなかった。怪物モンスターの死体を見て、隊員の1人が「これは……不死族アンデッド」と呟く。不死族とは不死の王の呪いによって生み出された種族だとされている。

——これが噂に聞く不死族か、……不死族なのに死ぬんだ。

グンゾウは動かない不死族の亡骸なきがら(?)を戦棍メイストの石突きで突ついた。不死族は生命機能が停止しているようで、ぴくりとも動かなかつた。

「グンゾウ、この者を回復させて話を聞くんだ」

——人使い荒いな……。早くヨシノを探しに行きたい。でも、そのためには生存者に話を聞かないとな。

「へいへい。光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒光ヒール」

ジニーが指示するまま、グンゾウは兵士の傷を癒やした。負傷の程度が分からないので、癒光ヒールを使うことにした。

癒光ヒールによって兵士の傷が癒える。

グンゾウは生存兵を揺らしたり、顔を叩いたりして起こそうと試みた。目を覚ました生存兵は「うわあ！」と驚き、グンゾウを突き飛ばす。

「いてて……。おいおい、こんな善良な顔をした神官を突き飛ばすなんて、不信心なやつだな」

グンゾウは尻餅を搗ついたお尻を摩さする。混乱してグンゾウ達から這はつて遠ざかった生存兵は、状況が分かるかと冷静になった。

「……す、すまない」

ジニーがすぐに質問をする。

「おい、戦況はどうなっている？ 何者が攻めてきたんだ？ 敵の数は？ 味方はどうした？」

「……わ、わからない、10人は居たと思う。突然、弓矢で狙撃を受けた後、黒ずくめの戦士達と怪物モンスターから襲撃を受けた。こちらは18人でしばらく防戦していたが、俺はでかい怪物モンスターに蹴り上げられて、気を失ってしまった……」

「敵は10人強か？ 20人はいなかったんだな？」

ジニーが確認すると、生存兵は無言で頷いた。

「……すると、それ程門内には入られていないな……。多くて5、6人か。こちら側の死体の数も足りないな。中庭や天望楼内に敵を追っていったのだろうか？」

ジニーが敵側の死体を目で数えながら、安堵の表情を見せた。

「よし、それでは門の護衛に4名残り、残り3名は中庭の搜索に向かおう。護衛の4名は援軍が来たら収容するんだ。そして……」

ジニーが小隊と生き残りの生存兵に役務を割り振り始める。

「俺は、中庭の搜索に行きたい」

グンゾウは搜索隊の3名に名乗り出た。

「わかった。ではグンゾウとライアンは付いてこい。行くぞー！」

ライアンと呼ばれた男がジニーの後に付いていく。ライアンはリョータと同じくらの体格をした兵士らしい兵士だ。

——とにかくヨシノを早く見つけないと……。

出発しようとするジニー達に先程の生存兵が声を掛ける。

「1人……、凄腕の剣士がいた……。あいつのせいで3、4人があつという間にやられた。気を付けろ！」

「……ああ……、……わかった」

ジニーが緊張気味に返事をする。

グンゾウは戦棍メイスを持つ手に力が入った。

紅い月と星々の煌めきが微かに照らす天望楼の暗い中庭を進む。

先刻まで、人々が争う声がしていた方向だ。今は静かになっている。

ジニーを先頭に、グンゾウを挟んで、殿しんがりはライアンが務める。お互いの気配が感じられる範囲で、並んで歩いていた。

「向こうの木立に灯りが見えるな……」

中庭の疎まばらな木立の中、転々と2、3個の行燈ランタンが灯っている。グンゾウの目にもそれが見えた。

——みんな行燈ランタンを置いて戦っているのだろうか？

「目印かもしれない。あの木立こだちの先には、開けた芝生ひらが有ったはずだ。そちらまで行くう！」

ジニーが早足で動き始める。グンゾウ達は置いていかれないように急いで付いていった。

近付くにつれ、木立こだちが一塊ひとかたまりの大きな影から、木々の集まりに見えてくる。

「うわっ！」

グンゾウの後ろを歩くライアンが何かに躓つまずいて転んだ。甲冑がガシャッと派手に大きな音を立てる。

「落ち着け！」

ジニーが振り返り、控えめな声で叱かる。

「すいませんっ！」

——暗いし、緊張してるし、急いだら仕方ない。一方的に叱られてもなー。

「ほら、手を貸そう」

グンゾウは転んだライアンの手を掴んで、力を入れて引っ張る。しかし、ライアンは一向に立ち上がる気配が無い。

「ライアン、どうした？ 自分で立たないと俺の力じゃ重たくて全然……」

と言いかけてグンゾウは凍り付く。既にライアンがグンゾウの隣に立っていることに気が付いたからだ。ライアンも凍り付いている。

グンゾウが掴んだ手は、ライアンが躓いた何かだった。

グンゾウは、呼吸が浅くなった自分を感じる。

「ジニー……」

「なんだ、グンゾウ……」

「死体だ……この辺りには死体があるぞ！」

グンゾウが興奮して声を上げて、ジニーはグンゾウの言葉を無視をしたように黙っている。

「ジ……」

「わかつている！ ……あの、灯りも味方の死体だ」

ジニーが指差す先にある行燈は、その光を金属の鎧に反射させ、明るく輝いていた。

行燈ランタンの持ち主は全て辺境軍の兵士だった。誰も生存者はいない。最初に躓いた死体

以外、不思議と敵の死体は見つからなかった。

木立こだちが開けた場所に立つと、目の前には広い芝生が広がっていた。木立は少し高台こだちになっ  
ていて、芝生全体が見渡せた。地面のうねりで芝生には明るい部分と暗い部分があ



り、一見、波打つ大きな黒い湖を思わせる。

その黒い湖の湖面で、数人が戦闘をしている。

素早く動く1つの影を4、5つの影が囲んでいた。どちらが敵で、どちらが味方かはわからないが、数的には有利不利がはっきりしていた。

「あれか?! よし、加勢するぞ」

ジニーは声を出すと荷物を落として、突撃する。ライアンも続いた。

「ちよ、ちよ待つ……」

グンゾウは光の護法プロテクションをかけ直したいと思ったが、ジニーとライアンに置いていかれてしまった。

——わりと猪武者いのししむしやだよな。神官置いてっちゃ駄目でしょ。

「ぎやつー」と声がして、争っていた黒い影の内、多人数側の影が一体倒れる。その後、影の集団は、素早い影を追いかけけるように遠くの暗闇へ移動して行った。グンゾウの視覚が認識できる範囲から消える。

グンゾウは周囲を確認しながら、慎重に歩を進めた。僅かな明かりと、劍戟けんげきの音を頼りに、暗闇の中を進む。

通りすがりの雲が、紅あかい月を塞ふさぐ。

グンゾウが見つめる暗闇の先に、砂を蹴る音と激しい息づかいが聞こえる。不愉快ふゆかい

な、金属の擦れあう音。

時折、雲の切れ間から漏れた紅い月に照らされ、ふたつの白刃が煌めく。火花を散らすかのように激しく衝突しては、飛翔して離れるを繰り返していた。まるで幻想的な小曲集のようだ。

グンゾウは緊張で口の中が乾く。

鼻腔には嗅ぎ慣れた銅の臭い。

——血の匂いだ。

足下に滑る液体。そして倒れた複数の人影。

ヨシノかもしれないと、咄嗟に倒れている人間の面防を上げ顔を確認する。

漏れる安堵の溜め息。そして、そつと首筋に触れ、生死を確認した。

——脈がない。

まだ温かいその身体から、急速に体温が失われつつあった。もう手遅れだ。

——確認の順番が違う。俺は神官なんだぞ。

グンゾウは意味の無い反省をした。わかっているが、神官である前に人であり、大切な仲間を思う気持ちは止められない。

——信仰が薄い所為だと、カレンは俺を責めるだろうか？

暗闇の向こうで剣戟が続いている。

注意深く歩を進め、劍戟の音に近付く。

数合すうごう続いた後に静寂が訪れた。静寂が緊張を高める。

気紛れな雲が通り過ぎ、紅い月が深緑の空に輝く頃、ようやく少ない光がグンゾウの網膜に捉えられる。

突然、グンゾウは目の前に衝撃的な光景を突きつけられた。

突きの体勢で槍を構えたヨシノと敵の影。両者とも動きは止まっていた。ヨシノの首先には敵の長剣が突きつけられている。

互角と言うには不利すぎる体勢だ。

「ヨシノっ!」

グンゾウが駆け付けようとする。

「駄目っ!」

ヨシノが荒々しく声を上げて、グンゾウが近付くのを制した。

「本当に来ちゃ駄目! グンちゃん」

——そうはいかない。

「勝負は付いてる! 俺等は辺境軍の正規兵じゃない。ただの雇われ義勇兵だ。俺の名はグンゾウ。神官だ。傷を負っているなら治療しよう。君等を追うことはない。仲間を解放してくれ!」

敵に声をかけながら、慎重に忍び足で距離を詰める。

暗闇で敵の顔はよく見えない。

明るかつたとしても、見えないと思われた。影像からクロースヘルムを着けている様

子だったからだ。

——咎光ブレイムの射程まで、もう少し……。

緊張でグンゾウの足が震える。頬の汗が流れ落ち、音を立てて神官衣に染みを作った。

「グンゾウ？」

「え？」

美しい女性の声がする。

敵に名前を呼ばれ、グンゾウの緊張が緩む。

瞬間的に敵の影がヨシノから離れ、今度はグンゾウとの距離を一瞬で縮めた。光を反射する刃の軌跡だけが、残像として脳裏に残った。初めて目にする不思議な足捌きに目を奪われる。

感心する暇も無く、今度はグンゾウの首に長剣が突きつけられた。

——やばいっ！

緊張に体を硬くする。グンゾウは死に触れられた心地がした。

その時、気まぐれな風が通りすがりの雲を吹き飛ばし、月明かりをもたらず。「え？」

再び間拔けな声を上げると、そこにはクローズヘルムの面防フェイスを上げた敵の姿があった。

切れ長の大きな目に長い睫毛まつげ。印象に残る深緑の瞳と凜りんとした眉。意志の強そうな眼差し。人間離れた小ささの美しい顔。透けるような白い肌。

「ヴ、ヴェール……」

「やはり、お前達か」

ヴェールは殺気を保ったまま、口を開いた。

刃やいばの気配を首元を感じる。

「あの……、同期の誼よしみで、これ、下ろしてくれないか？」

「貴様に状況を選ぶ権利はない」

凜とした冷たい声。

「わかった。さつき言った通り。俺達はただの雇われ義勇兵で、この件に深く関与する義務がない。よって君のことも報告しない。ルミアリスに誓おう。今、武器を捨てる」  
グンゾウは戦棍メイスを放棄して、両手を上げた。そして、ちらっとヨシノに視線を遣る。  
ヨシノは脱力し、膝をついて呆ほうけている。

——もうすぐチャンス来るかもよ。ヨシノちゃん。ヨーシノちゃん。ヨシノ先  
生。

「追ってきたら、次は見逃さない」

ヴェールはそう言うと、剣を収めながら、不思議な動きでグンゾウと距離を取る。上半身は動かさず、直線的に移動する足捌きだ。

グンゾウは声をかける。

「ヴェール。君は何をしてるんだ？ キツカワとはなんで別れたんだ？」

ヴェールの動きが止まる。少しの静寂。そして囁くような弱々しい声がある。

「キツカワは……、キツカワは死んだ。もうここにはいない」

そういうと、ヴェールは暗闇の中に融けていった。

「それは、どういう……？」

グンゾウは暗闇に手を伸ばしたが、そこにあるのはヴェールの残した幽かな幻影だけであつた。

「ヨシノ！ 大丈夫か?!」

グンゾウが駆け寄っても、ヨシノは呆然としていた。地面に両膝を着いて、項垂れていた。

「怪我はない？ とりあえず癒光ヒールを。光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒光ヒール」  
暗闇の中に、温あつたかな癒光ヒールの光が輝く。

「……あ、温あつたかい」

ヨシノがようやく口を開いた。ヨシノはグンゾウの方に手を伸ばすと、グンゾウの腕を掴んだ。

「ん？ どうした？」

「手、……触ってみて……」

グンゾウはヨシノに言われるがままに自分の手を重ねた。

「あたし、今日、初めて死んだと思った。……ヴェールちゃん、今まで戦った誰よりも強くて、……怖かった」

ヨシノの手は凍こじえているかのように、小刻みに震えていた。

「そうか。悪い夢のようだな……」

グンゾウは深緑の夜空を見上げた。

戦争の夜。

悪夢の争乱はまだ終わらない。

## 9. 名将イアン・ラッティー

火災を広めた夜の風が凜なぐ。

朝の到来だ。

枯葉色に染まる東の空に、木々の緑が映はえる。徹夜明けの兵士に、朝の光は痛いほど眩くらしかった。

血と吐瀉物としゃぶつの臭気が立ち込める天望楼の中庭。グンゾウは、名前も知らない生きてい  
る兵士と一緒に、名前も知らない死んだ兵士の死体を運んでいた。中庭から死体安置所  
へ。

皆、襲撃のショックで無言だ。

運ばれている死体も口を開くことはない。

天望楼裏門近くの敷地に仮の安置所が設営されていた。身元を確認するために兜を外したり、装備品を確認する。確認した同僚の兵士には、悲しみに打ちひしがれ崩れ落ちる者や、怒りに任せて暴れる者等がいた。

知らぬ間にグンゾウの手や服が血に染まっていた。喉頭部こうとうぶを頸動脈けいどうみやくごと掻かき斬きられている死体が多い。



手に付いた血を神官衣で拭いながら、グンゾウの脳裏にヴェールの剣技が浮かぶ。喉元に突き付けられた長剣ロングソードの冷たさを思い出して身震いがした。

——ヴェール、君はなんてことをしてくれたんだ。救えない。救えないじゃないか。くそっ！

やり場のない憤りいきどお。並んだ死体を見渡した後で、グンゾウは溜め息交じりの深呼吸を  
してしまった。

——しまった！

血としゃぶつや吐瀉物としゃぶつ、死亡時に出た糞便が混ざった複雑な臭いを味わい、急な吐き気に襲われ  
る。涎よだれが止まらない。

吐きそうな瀬戸際、カレンとの修行ブレイで鍛え上げられた不屈ドエムの精神力で吐き気を抑えた。誰かが吐くと、その吐瀉物としゃぶつがまた臭いを放ち、我慢している他の兵士の嘔吐感を惹き起こす。嘔吐の連鎖は地獄だ。

「口で息をしろー！」

隊長風の兵士が叫んだ。

皆、そう心がけているが、たまに油断して鼻呼吸をしてしまう。そして、不快な臭いに襲われ、吐く。その繰り返しだった。

ヨシノは体調が思わしくなくともあり、早々に音を上げて、木陰で休んでいる。グ

ンゾウが目撃しただけで、2回は吐いていた。

この所の義勇兵生活で、グンゾウは血にもヒト型の死体にも慣れていたが、ヒトの死体には慣れていなかった。

——他のみんなは無事なんだろうか？

グンゾウが心配していたのはアキのことだった。天望楼裏門の兵士が最も被害が多く、15人も死んだ。次いで、天望楼内でも多くの兵士が死んだらしい。

即応部隊に死人は出なかったが、無傷ではなかった。ジニーとライアンは何処どこに行っていたのか、グンゾウがヨシノと合流した後、しばらくしてから奮戦した風の顔でひよっこり現れた。

「よーしー！ 全員、正門前に集合だー！！ イアン・ラッティエー准将から今後の体制について説明があるぞー！」

隊長風の兵士に声を掛けられて、正規兵はきびきびと、義勇兵はとろとろと、天望楼の正門前に集合し始めた。

「立てるかかい？ ヨシノ」

グンゾウは木陰で休むヨシノに声をかける。ヨシノは太い落葉樹の根元に座り、下を向いたまま目を閉じていた。いつも健康的なヨシノにしては、顔色が悪い。

「うんー……、行けるよー」

弱々しい声。

顔を上げると、弱々しい笑顔。朝日を浴びて、清楚な美しさだ。元氣印のヨシノも良いが、倦怠感のあるヨシノも、影のある魅力が加わって美しかった。

「血の匂い、普段なら全然大丈夫なだけどねー。あたしもドバドバ出てるしー」

——なかなか返答に困る発言です……な。

ヨシノは、グンゾウの差し出した手を掴むと勢いよく立ち上がった。

「あっ………」

立ち上がった瞬間、頭を押さえてグンゾウにもたれ掛かる。

貧血による立ち眩みだ。

グンゾウは踏ん張ってヨシノを支えた。

口に出すのは憚られるが、甲冑を着た170センチの女の子は相当重い。

グンゾウはヨシノを抱き締める形になる。少し曲のある柔らかな髪の毛がグンゾウの顔を撫でくすぐりたい。次の瞬間、ヨシノの髪の毛から、項から、身体から、何とも言えない女性の甘い香りが漂い、グンゾウの鼻孔を包む。

——ああ、良い匂い。……いかん！ いかんぞ！ 身内とも言える少女に邪な気持ちを抱いては。

撓垂れたヨシノの顔がグンゾウの首筋に触れ、くすぐりたい。強くなるヨシノの香

り。

——はあうっ！ このままでは身体が反応を……。ああ、でも、なんか久々に幸せな気持ち。幸福な何かが脳内に出てる。……いかん、いかん、俺にはアキが！ ……ああ、でもアキとは別に何も無いし……。

グンゾウが快感と倫理と欲望の狭間で葛藤していると、もぞもぞと動くヨシノ。

「う、……ん、く、はあ……はあ」

その柔らかい唇がグンゾウの耳朶みみたぶに触れる。雷電ライトニングのような快感が全身を突き抜けた。「ああ……」至福の感触に思わず声が出る。ヨシノの吐息がグンゾウの鼓膜に直接届く。

神官衣の下で完全に屹立きつりつしたグンゾウがいる。

——屍臭漂う天望楼で、女の子と抱き合ってフル勃起して……どんだけ現実離れしてるんだ！

そのままの体勢で、ヨシノがグンゾウの耳元みみもとで囁く。

「グンちゃん……、あたし……、もう……」

甘く切ない喘ぎ声は、さらにグンゾウの理性を襲う。昨夜の襲撃が霞む攻撃力だ。グンゾウの身体からどんだん力が抜けていく。快感に腑抜ふぬけた顔。

「ど、ど、どうした？ どうしたい？ 俺はどうすればいい？」

——こんな刺激的な状況は耐えられない、厳しい。止めるか、進むかしたい！ ……  
 いや、止めたくはないかな？

「……吐く」

「え?!」

グンゾウの疾しい<sup>やま</sup>気持ちを非難しているのか、「エロエロエロエロ」という音を立てながら、ヨシノの吐瀉物がグンゾウの神官衣を流れ落ちていった。

グンゾウは心身共に萎んでいくのを感じた。

——あー、このオチかー。なんか、前にもこんななんあったなー。

整然と居並ぶ兵士達。装備を整え、直立不動の姿勢で、イアン・ラッティー准将の登場を待つ。

その後ろに、ばらばらと並ぶ義勇兵。姿勢も悪ければ、装備もちぐはぐだ。

中にひとり、秋風吹くオルタナの空の下、上半身裸で立つ男がいた。

「だから、なんで、オッサンだけ裸なんだよ。まじクソうけるんだけど、うつひやつひやつひやつひやつひやつ！」

ゲラゲラと笑うリョータの声。

時と場を間違えている。また、倫理観と仲間を<sup>いたわ</sup>労る気持ちにも欠けている。グンゾウ

のこめかみがピクピクと痙攣した。

グンゾウとヨシノは天望楼正門前でリョータと合流していた。

「ごめんねー、グンちゃん、なんか最後に吐いたのですつきりしちゃったー。光プロテクションの護法で体も軽いし。ありがとー！」

ヨシノの濟まなそうな顔。その左手首には光輝く六芒があった。グンゾウにもある。

——光プロテクションの護法プロテクションって生理痛にも効くのね……。初めて知った。

「気にしなくていいよ。ヨシノは悪くない」

グンゾウは右脇に抱えた汚れて丸めた神官衣を見つめた。早く洗いたい。季節的に裸は寒いが、光プロテクションの護法のお陰で少しだけ冷気から守られている。光プロテクションの護法は全裸の壮年

男性にも優しい。

「なんだ、まーたオツサン、ゲロシャワーを浴びたの？ 好きだなー、おい。むしろ、大好きすぎんな。オツサンの趣味だとしたら、闇が深すぎんぜ。ひゃっひゃっひゃー！」

無神経にリョータがゲラゲラと笑う。ヨシノに「リョータ、うっさい！」と肩を叩かれたが、全く反省した様子がない。むしろ喜んでいる。

「やかましいっ！ 場の空気を読め。多くの兵士が亡くなったんだぞ。残された家族だっていたかもしれない！」

グンゾウが声を荒げる。自分への愚弄を、集団の問題にすり替える老獪さを見せた。

よく見ると、周囲の正規兵の憎々しげな視線がリョータに集中している。流石のリョータもそれに気付いき、口を閉じた。

「ほほう。義勇兵にも場をわきまえた人間はいるようだな」

突然、低いが良く通る威厳に満ちた声。周囲の兵に緊張感が走る。

グンゾウ達の傍にリョータよりも少し大きい中年の男性が立っていた。立派な口髭を蓄え、総オールバック髪の毛は灰色だ。高級そうな装飾入りの甲冑の上に、陣羽織を身に着けている。見るからに地位が高い。存在感の影響なのか、リョータより二回り大きく感じさせた。

——あれ？ この人どこかで……？

グンゾウが、その男性を見上げながら記憶の糸を手繰っていると、彼の方が話を続けた。

「お前はどこかで見たことあるな……。そうか、ゴブリンカーバンクル妖魔石榴石を辺境伯へ献上に来た時の神官殿か……」

「ああ、……はい。そうですね。その時お目にかかりました」

グンゾウは即座に応える。社交的な挨拶に慣れていたのか、グンゾウの言葉に淀みはない。

——この人、記憶が良いな……。でも、それ以外でも会ったことあるような？ ない

ような？」

「そうか……、何故、その神官殿が裸なんだ？」

「死体の搬送等で、神官衣を大きく汚損おそんしました。即応部隊を担当していて、天望楼裏門の支援部隊だったので、一番……被害に遭いました」

——主要因はヨシノの嘔吐ゲロだけだね……。

「そうか……。それはご苦労だったな。おいつ！ この者に服を与えろ！」

その男性が近侍の兵士に指示をすると、「はっ！」とすぐに周囲の兵士と連携して服が準備される。濃紺の服を抱えた兵士が、その男性に報告をする。

「ラッティー准将、この者の体格に合う服は士官用の制服しかありませんが、よろしいですか？」

「構わん。我等の同胞と共に戦い、剩あまつさえ亡き同胞を弔ってくれた神官を裸あまつさにしておくわけにはいくまい」

近侍の兵士からグンゾウの手に服と帯革ベルトが手渡される。光沢のある毛織物で出来た濃紺の生地に、黒い革の縁取りがされ、胸には銀の糸で六芒の刺繍がされていた。

「ありがとうございます。ラッティー准将。ルミアリスの光が貴方にあらんことを」

「うむ……」

ラッティー准将は頷くと、近侍を従えて、集まった兵達の前方に向かった。尋常でな



い威圧感によつて、雑然と並んだ義勇兵の列が割けるように、道が出来ていった。

嵐が去つた後で、グンゾウはもぞもぞと下賜された服に袖を通した。高い襟ハイカラが付いているお洒落な長衣ガウンだ。

——良い生地だ。黒つぽいところ、神官としてはなんだが……俺らしい。

「ほえー、グンちんすごいねー。偉い人と知り合ひなんだねー」

ヨシノが目を皿のように丸くして感心している。

「知り合ひつてわけじゃないよ。まあ、名前を知つたのも今日が初めてだしね。俺はあの人のが辺境伯かと思つてた」

「ほえー、でも受け答えとか緊張しなくてすごいねー。あたし、偉いおじさんつて時点で、固まっちゃつたー」

「けつ！ 辺境伯だか、准将だか知らねーが、1シルバーでこき使われちやたまんねーよ。おらあ、もうさつさと飲みに行きてーぜ」

ヨシノが自分以外を褒めているのが気に入らないのか、辟易へきえきとした表情のリョータ。遂に立っていることを諦め、両手剣を地面に突き刺し、ヤンキー座りに移行した。剣術における蹲踞そんぎよの姿勢とも言える。

——確かに、今夜の仕事は1シルバーじゃ割りに合わないよな。ヴェールに殺された可能性もあつたし……。ブリトニーの野郎め……。

「まずは、失われた同胞の命に哀悼の意を捧げたい。……そして、オークという長年の脅威を排除するために、乾坤一擲を賭した。双頭の蛇。作戦が発動している今夜、命懸けでオルタナを守ってくれた諸君等……」

イアン・ラッティー准将から、兵士に対して演説があつた。当然、グンゾウ達義勇兵は初めて聞くことになる。

語り口は穏やかだが、その低く通る声は、その場にいる全員の心に響く。中には、泣いている兵士もいる。

演説は続く。

「……………こんな火事場泥棒のような真似をした不逞の輩を許しておける程、我々辺境の兵士は懦弱ではない！」

「そうだ、そうだ！」

兵士達の怒りに満ちた鬨の聲が上がった。

「よつて現在……………」

オルタナ出身の名将ということもあり、話し方には人を惹き付ける熱が入っている。聞いている兵士達の弱った心を奮い立たせ、戦意が高揚していくのが感じられた。

「……………そこで、今一度、私に力を貸して欲しい！ 辺境の兵士達の不屈の魂を奴等に

見せてやるのだ！」

「うおおおおおおおおお！！」

という歓声と熱気に包まれて演説は終わった。

気が付けば隣にいるリョータやヨシノも涙を浮かべながら演説を聞き入っていた。

——おおう、単純<sup>ビュア</sup>。

その内容を整理すれば3点に集約される。

最初に、失われた命に対する哀悼の意、そしてテロから天望楼を防衛した兵士に対する感謝。

次に、報復活動が必要であり、既に追撃の第一陣は出発していること。

最後に、双頭の蛇作戦が進行中での報復活動なので、人手が足りず、現有戦力には<sup>ダブルシフト</sup>昼夜連勤をお願いすること。

——義勇兵<sup>おれら</sup>は徹夜仕事なんてしないけどね。さて、いいもん聞かせてもらった。そろそろ時間だし、1シルバーもらって帰ろうつと。そうだ、アキ。アキはどこ行つたんだろう？

アキに会えない時間が長くなってきて、グンゾウは不安が募り始めていた。

アキを始め、ハイドやシムラとも合流できないグンゾウ達は衛兵事務所に行った。

通常、報酬は義勇兵団事務所を通して受けとるのだが、額が額だけに衛兵事務所での取っ払いの約束となっている。

「おっせえーなー。あいつ等死んじまったのかなー?」

「馬鹿リョータ! 何てこと言うの?!」

待ちくたびれたリョータがとんでもないことを言い、ヨシノに怒られる。肩を叩かれてニコニコ顔のリョータだ。

——本当に不謹慎な奴。しかし、普段ドS面<sup>づ</sup>してるけど、実際はMだよなー、リョータは。ヨシノに叩かれて至福の表情を浮かべてるもんな。

2人のやり取りをぼんやりと眺めながらグンゾウは思った。

そこに1人の兵士が現れて、伝令を告げる。

「義勇兵の戦士ヨシノ、神官グンゾウ。イアン・ラッティー准将がお呼びである。天望楼まで出頭せよ」

「えー? なんでー?」

リョータと嫌々じゃれ合っていたヨシノが急に兵士の方を向く。夢中で遊んでいる最中に、大きな音で驚いた猫<sup>ニャア</sup>のようだ。

「おい、てめえ、俺のヨシノを呼び出そうだなんて、太え度胸じゃねーか。なんだってんだ、こら。さっさとシルバー払って解放しやがれ!」

「これは強制命令である。お前等も義勇兵団に所属しているんだろ？　ならば、従わなければならぬ」

伝令の兵士は無表情なまま、羊皮紙の巻物ロールを広げて示した。知能水準の低いリョータにそんな理屈は理解できない。ヨシノを背に匿かくまうと両手を広げた。

「うっせえ！　インジエクシオンだか、ベンジョンソンだか、マイケルジョーダンだか知んねーけど、俺のヨシノを連れて行くなんて認めねーんだよ。これから飲みに行くんだ！」

ヨシノはリョータの後ろからひよっこり顔を出して、巻物ロールを覗き込む。

「守ってくれるのは嬉しいんだけど、あたし、リョータではないよー？　あと、お腹痛いから、今日は早く寝たいんだけど？」

「なんつーの？　そこはなんつーの？　まあ、勢いのな？　まあ、いいじゃねーか、いずれそうなるかもしれないしな」

リョータはヨシノの方を振り返ると、歯を見せて笑顔を作った。

「うええ、そ、そうかなー？　あんまり期待されると悪いな」

ヨシノは困った顔をしている。

「まあ、俺が読むから待つてなよ……」

グンゾウは兵士から巻物ロールを受け取って読む。本物かどうかの判断は付かないが、確か

にイアン・ラッティー准将の署名サインが入った出頭命令だった。そして、兵団指令オーダーとは異なり、強制命令インジャンクシヨンは拒否すると投獄、場合によってはオルタナを追放と説明書きがあった。

——んー、これはリヨータが殴って逃げるつてのはまずそうだな。

「仲間は同行していいんだよな？」

グンゾウが聞くと、伝令の兵士は「構わない」と頷く。

「わかった。じゃあ、これから出頭する」

グンゾウが答えると、伝令の兵士は「緊急事態につき、迅速に」と言い残して、去って行った。

「んだよ、オッサン！ 勝手に決めてんじゃねーよ」

「えー、グンちゃん。あたし、眠いよー。お腹痛いよー。ドーナツ食べたいよー。光プロテクシヨンの護法ヒールと癒ヒール光ヒールかけてくれないとやだー」

凄すこむりヨータ。そして、甘えん坊のヨシノ。

「わーかった、わーかった。リヨータも一緒に来てくれよ。行き道で説明するから。後、ヨシノには光魔法をかけてあげるから、付いておいで。ドーナツは明日食べよう。行かないと、投獄又はオルタナ追放だつて。これから2人で野外生活は辛いでしょ？ リヨータも嫉妬しちゃうし」

「わーい。野外生活は……いいけど、今日はちよつと辛いなー」

——俺等が准将に呼ばれるような悪いことしたかなー？ ……少し……した……かな。

グンゾウが思い当たることは2つあった。

ひとつは、リョータが兵士を殴ったこと。しかし、それならば呼び出しはリョータの  
はずで、ヨシノとグンゾウというのは道理が通らない。

もうひとつは、ヴェールと会話をしたこと。もし、ヨシノとグンゾウが敵性人物と会  
話している所を正規兵に聞かれていたら。そして、無事に解放されている所を目撃され  
ていたら。

想像は悪い方に傾く。

——さて、どう言い訳するかなー？

グンゾウは思案を巡らせ始めた。

## 10. 英雄の資格

「我々は相手に投降を勧めただけです」

——うーん、でも会話の内容までばっちり聞かれてたらずいよな！。

グンゾウは左手を口元を持って行く。悩んでいる時の定番姿勢。

「我々は相手を騙して不意を打とうとしていただけで、賊と仲間などではないです」

——この方が真実に近くて騙しやすいな……？

「なーに、ぶつぶつ言ってるだよ、オッサン！」

准将のイアン・ラッティイーから強制命令インジャンクションの呼び出しを受けて、グンゾウ達は天望楼に

向かっていた。天望楼に向かうと言っても、衛兵事務所から天望楼は目と鼻の先だ。

しかし、真っ直ぐに向かう訳にはいかなかったため、作戦会議を開くために、天望楼から

少し離れた広場の真ん中に立っていた。

「こんな所に突っ立ってても寒さみーし、早く行って、さつさと終わらせようぜ、オッサン」

リョータは苛いら立っている。ガタガタと振るわせる身体。全身から「早くしろ！」とい

う主張オウラを発している。

「いや、だから、その前に色々あんのよ……」



「だーかーらー！ 色々ってなんなんだよつ！ アキといい、オッサンといい、理由が曖昧な・ん・だ・よつ！」

——単純シンプルに生きられる奴って幸せだよな……。こいつに話しても大丈夫かな？

グンゾウは不安を覚えたが、周囲に人がいないことを確認すると、襲撃の夜にヴェールと出遭ったこと、ヨシノと命懸けの戦いを繰り広げていたこと、総合的に勘案してほぼ100%近く敵性人物であることを説明した。

「んだとーっ!! ヨシノに手を上げやがったのか、あいつ！」

「うん、まあ、な。手を上げたって言うか、殺し合い？」

「うーん、ヴェールちゃん強かったよー、あたし、本気で死んじゃうかと思つたー」

興奮でリョータが口をばくばくさせている。なかなか次の言葉が出ない。

「……そ、そういうことじゃないだろっ!? ヨシノ、大丈夫だったのかよ？」

「ああ、う、うん、大丈夫。ほら、元気なヨシノちゃんでしょ？」

ヨシノがその場でくるつと空中を時計回りする。柔らかな髪の毛がふわつと舞つた。

「殺す。殺す。あの女まじで殺す……」

普段から物騒なりョータの目が怒りに燃えていた。

——いやー、逆にリョータが殺されちゃうなー。たぶん。

「殺す前に話は聞こうぜ。もしかしたら、何か深い理由があるかもしれないしさ」

「うつせえ！ 俺のヨシノに手を出したら、どんな目に遭うかきつちり調教してやらねえとならないんだよ！」

「調教」という言葉に一瞬ゾクツとした快感を覚えるグンゾウ。

——ううつ、やべえ、一瞬カレンの顔が浮かんだ。愛？ それとも愛？

「だから、あたしはリョータではないんだけどな……」

——ヴェールを……調教か……。

愛に燃えるリョータに、ヨシノが水を差している様子を眺めながら、グンゾウはヴェールのしなやかで美しい裸の肢体が、目の前のベッドで寝そべっている姿を想像していた。

肌理きめが細かい大理石のような白い肌に、長く艶つややかな漆黒の髪の毛が絡みついている。

抱けば折れそうな程、華奢きゃしゃな身体からだ。

これ以上ない位美しい曲線カーブを描く肩から首の延長線上に、美の女神を原型モデルに彫刻したような美しい顔と、印象的な深緑の瞳。

憂うれいを宿したその瞳は、恥じらうように伏し、淑女のような振る舞いを魅せた。それに反して、鮮やかに紅あかい唇は、淫みだらに濡れて光っている。

その唇から漏れる吐息は、切なげで、熱と湿り気を帯び、否応いやおうなしにこれからの情事

を期待させた。「もう我慢なんて、できないんでしょ……」差し出された細長く白い指が、グンゾウを誘うように滑らかに動く。

その手を掴んだグンゾウは……。

「大丈夫ですか？」

不意に戻される現実。

現実とはイガグリ頭。

イガグリ頭とは……、グンゾウの顔を覗き込むようにシムラが見上げていた。そして、グンゾウと握り会うシムラの手。

「うわっとー！」

グンゾウが慌ててシムラの手をはね除けると、シムラは戯けた。

「やんっ！ 急に掴んだかと思ったら放り出して、グンゾウはんたら、乱暴やわー」

「キシシシシ。グンゾウはどうしようもない変態でアホ」

完全にグンゾウの妄想を言い当ててるハイド。

——ハイドは俺の心が読めるんだろうか？

グンゾウが妄想の世界に引き込まれている間に、シムラとハイドがグンゾウ達を見つけて合流したらしい。2人とも消火活動の影響なのか、少し煤すすけていた。

「あーん？ 後は“ちよつと、ちよつとちよつと”のアキだけか……何やってんだ、あい

つ

リョータが周りを見渡す。

「おい、リョータ。アキをデブの双子みたいな言い方すんなよ」

「デブの双子なんて言つてないだろーが、頭おかしいのかよ、オツサン」

「あれ？　ほんとだ……おつかしーなー。デブの双子がちよつと、ちよつとちよつとつて覚えてない？」

「誰も覚えてなんてねーんだよ。昔のことなんざよー！」

「……それもそうだな。まあ、とりあえず、そんなに時間もないし、状況を共有してから、基本的な交渉の決め事<sup>ルール</sup>だけ決めて、天望楼に臨もう。その後、アキを探しに行こう」

グンゾウは昨夜有った悪夢のような出来事を、再度語り始めた。

イアン・ラッティ―准将との面会は、足が埋まるような毛足の長いふかふかの絨毯が敷かれた25メートル四方の部屋で行われた。窓は無い。上座<sup>かみざ</sup>と思われる壇上には、優雅な彫刻が施された木製の椅子。椅子の座面は、紅い天鷲絨<sup>ベルベット</sup>仕立てで、光沢のある生地が燭台の灯りに照らされ、揺れるように光っていた。

その椅子に座っている人物がグンゾウ達に声をかける。

「面<sup>おもて</sup>を上<sup>あげ</sup>げよ」

そう言われてグンゾウ達は顔を上げた。目の前には威厳溢れる中年男性がゆったりと椅子に腰掛けて、鋭い戦士の眼光をグンゾウ達に向けていた。

部屋に入る前、警護の兵士に「イアン・ラッティー准将と対面する際は、はんげざしろうく半下座で頭を垂れて待て」と言われていた。リョータは「嫌だ」と散々抵抗したが、「守らないなら部屋に入れない」と言われ、最終的には渋々従った。ヨシノと離れるのが嫌だったらしい。

「戦士ヨシノは数少ない裏門警備の生き残りだそうだな。また、神官グンゾウも神官とは思えない戦術を見せたと聞いている。ご苦労であった」

——この人、必ず下の者を褒めるところから入るんだな。理想的な上司。

「あつ、いやー、照れるなー、あたし……」

ヨシノが緊張からか、頭を掻いている。

「お褒めの言葉、恐縮です。兵団指令の任をまじこ全うしただけで、過分なご対応をしていただくには及びません……」

「では、失礼させていただきます」と言いかけたグンゾウを咳払いで制し、イアン・ラッティーが話し始める。

「ただ、そのためにだけ呼んだわけではない」

——ですよねー。

「お主等に頼みが有つて呼んだ。どうだグンゾウとやら、引き続きアラバキアのために一肌脱いでくれないか？」

——あれ？ ヴェールのことじゃないのか？ うー。なんか嫌な予感。

そんなグンゾウの躊躇を払拭するように、リョータが啖呵を切る。

「おいおい、オッサン。話しかけてる相手が違うんじゃないの？ この小隊のリーダー、ここ大事だからもう一回言おうと、リーダーの俺様から言わせてもらおうとだな。わりーけど、もう疲れてるから、帰りにーんだわ。ーシルバーなんてはじか端金で命懸けの戦いなんてしてらんねーからな」

——この場でその態度ができる精神力に感服するわ……。よっほど肝が据わっているのか、単なる馬鹿なのか……。

「貴様！ それがラツティー准将に対する口の利き方か?!」

グンゾウ達の後ろに控えていた兵士の1人が声を荒げる。声を聞く限り女兵士だった。

——珍しいな。

とグンゾウは思った。

百戦錬磨の鍛え上げられた精神は、義勇兵の失礼さなどに動揺するところがないのか、リョータの発言に呆れた様子も見せず、イアン・ラツティーは片手を挙げて女兵士

を制した。

「まあ、よい。それも一理ある。金かねな……。もちろん、これから話す兵団指令オーダーは命懸けの内容故ゆえ、1シルバー等という金額ではない。そうだな。前金で1ゴールド、そして一夜を越す毎に20シルバーを約束しよう。もちろん1人につきだ」

「なんやて?!」

シムラの悲鳴。

実際はシムラだけでなく、グンゾウ達全員が予想を超える報酬の提示に浮足立っていた。

「せやから、一晩で内臓の煮込みが……。ひーふーみーの……。250杯?」

「キシシ、相変わらず違ちがつ……。合あつてる、フシシシシシ、血の雨が降るな」

「やったでえ!」

グンゾウがコツコツ苦勞して教育した成果が出たのか、シムラの計算が珍しく合っている。

——血の雨かよ。縁起でもない。

「しかし、我々は新人義勇兵で、それだけの報酬がもらえる兵団指令オーダーをやり遂げる実力があるか分かりません」

イアン・ラツティーの愉快そうな顔。グンゾウの正直な弱気に、口や鼻から抑えられ

ない笑い声が漏れる。

「ふふ……ふふふ、ふつふつふふ。命知らずの義勇兵にしてはなかなか慎重なことよ。そこは儂も馬鹿ではない。よつて、命懸けではあるが、お主等の実力以上の兵団指令<sup>オーダー</sup>をさせる気はない。安心せよ。話を進めても良いかな？」

グンゾウはリョータに視線を遣った。不敵な笑みを浮かべて頷くりョータ。格好良いと思つているのか余裕ぶつた態度だ。

次にヨシノの顔を見る。ヨシノは慎重な顔で頷く。

それを受けて、グンゾウはイアン・ラッティーを真つ直ぐ見据えた。

「はい……謹んで」

グンゾウ達が天望楼を訪問する前に決めた交渉の決め事は単純<sup>シンプル</sup>だった。

交渉の基本はグンゾウが進め、小隊<sup>パーティ</sup>の危険が上がる判断の際は、リョータとヨシノに確認を取る。それだけだった。

兵団指令<sup>オーダー</sup>の内容を聞く。

それは場合によつて、引き下がれない立場に追い込まれる可能性もあり、グンゾウはリョータとヨシノに確認をした。

——ここからは薄氷を踏むような交渉だな。

「儂の私兵以外にはまだ伝えていないが、実はこの度の賊の襲撃には明確な目的があつ



た」

「お待ちください。それを話すことは我々双方にとって利さないのでは？」

「報告通り賢い神官だな。……だがしかし、この話は兵団指令の内容に深く関わる故、全て聞いてもらわなければならない。もちろん、他に漏らすことはならない」

——これは嵌められてねーか？

グンゾウの頭の中で、交渉の安全な選択肢が消えていく。

「あの賊達の目的は要人の誘拐だ。具体的には、辺境伯ガーラン・ヴェドイーのご令嬢セシリア・ヴェドイーだった……。彼女は既に賊の手に落ちてている」

「シシシシ……こつちのイベントが想定外にでかい……」

ハイドが謎の言葉を放つ。しかし、脳を最高速で回転させ、目の前の会話に集中させているグンゾウの耳には届かない。

「以前から、我々は要人の誘拐を企む組織について把握をしていた。そこで密偵を侵入させ、その動きを探っていたのだ。しかし、具体的な方法や誘拐対象を調べるところまでは内偵が進まなかった。ここからは、お主等が知つての通り。『双頭の蛇』の夜に、大規模な火災を起こすという常軌を逸した作戦が行われ、翻弄された我々は、セシリア嬢をお守りすること叶わず、誘拐を許してしまった」

イアン・ラッティイーはそこで一旦間を開けると、居住まいを正す。

威厳に満ちた声が、グンゾウ達に要求を伝える。

「そこで、お主等に依頼したいのは、反攻部隊と同行して、秘密裏に我々の密偵と接触し、賊が人質を殺す前に誘拐された要人の救出を行うことだ」

グンゾウは息を飲む。

——話がでかすぎる……。危険度最高だ。

「そんなことあ、辺境軍の正規兵でやりやあ良い話なんじゃねーのかよ」

単細胞のリョータが単純な答えを出す。

——リョータ、素直。

イアン・ラッテイーはそこで一回大きく溜め息を吐く。

「まあ、正論だな……。しかし、恥ずかしながら、辺境軍にも敵対組織の密偵がいる。そして、その見極めが付いていない。そのため、この任務を辺境軍の兵士に頼むことはできないのだよ。十分な報酬でも、この兵団指令はやりたくはないかね？ 一介の義勇兵から英雄になる機会だと思わんか？」

「ああん？ まあ……。そういう難しいことは、よくわかんねーな」

リョータはグンゾウの方をチラチラと見る。

「ふむ。そつちの神官はどう思っている？」

イアン・ラッテイーがグンゾウを見つめる目の奥に愉悦が隠れている。グンゾウの対

応に興味があるようだ。しかし、グンゾウにはここでイアン・ラッティイーを満足させる案が出せる程、精神的な余裕が無い。

「言葉は異なりますが、要人誘拐の解決といった専門性の高い使命について、我々の仕事ではないと思う気持ちは一緒です」

「ふむ……、英雄と呼ばれるにはほど遠い、利己的な意見だな」

「リコテキつてなんだよ。難しい言葉使つてんじや……ふっふっ……」

「リヨータ、うっさい、本当に。黙つて」

馬鹿リヨータの口をヨシノが手で塞ぐ。ヨシノに抱き寄せられて、膝枕状態になっている。リヨータは抵抗する素振りをしているが、まんざらではない様子だ。ヨシノが目でグンゾウに「続けて」と合図する。

「ありがとう、ヨシノ」

グンゾウはヨシノにウインクを送ると、イアン・ラッティイーの方を向き直る。

「ラッティイー准将、利己的というには、あまりに我々に求めるアラバキアへの奉仕の期待が大きすぎませんか？ 我々は火災以降、家族とも言える仲間の1人と合流できておらず、捜索に行きたいと考えています」

イアン・ラッティイーの口から意外な名前が出る。

「もう1人というのは聖騎士アキのことか？」

「そうです……」

——何故、アキのことを？

その一言が口に来ず、グンゾウは頭が白くなっていくのを感じる。

——まさか……。

「聖騎士アキはセシリア・ヴェドイー嬢の護衛をしていた」

「なっ！」「えっ！ アキちゃん！」「なんやてっ！」「キシッ！」「ふっ（ふっ）……」

鮮やかにアキの笑顔がグンゾウの脳裏を掠<sup>なぐ</sup>める。

グンゾウは心臓が悪魔の手に掴まれた気がした。急に脈拍が上がり、それとは逆に手足から血の気が引いていくのを感じる。気分が悪い。

「じゃ、じゃあ、アキは?!」

ようやく口にすることができた言葉。

イアン・ラッティーは鷹揚に両手を広げ、興奮気味のグンゾウ達を抑えるような姿勢を取る。

「安心せよ。聖騎士アキは無事である」

イアン・ラッティーから告げられた『聖騎士アキは無事である』という言葉で、少し動揺が収まるグンゾウ達。しかし、状況は不透明で予断を許さない。

「いや……あつた。の方が正しいかな。今はどうだか知れない」

イアン・ラッティーは首を捻り、遠い目をした。

「責任感溢れる彼女は、護衛の任に就いていた他の兵士と共にご令嬢の奪還に名乗り出、既に先遣隊として出発している。敵との遭遇をしていれば、どうなっているかは分からぬ……」

椅子から立ち上がり、グンゾウ達の近くに來る准将。その手がグンゾウと隣にいるヨシノの肩に置かれた。

「さあ、どうする？ 義勇兵達よ。この兵団<sup>オー</sup>指令<sup>ダー</sup>、受けるのか？ 受けないのか？」  
静寂の時。

グンゾウは目を閉じて考える。

——明らかな挑発。この男は、相当危険な任務に俺等突っ込もうとしている。これからの判断は、本当に仲間の為なのか？ 俺の個人的な感情じゃないのか？ しかし……。

「……行くー！」

グンゾウはそう声を出していた。

「グンちゃん……」「グンゾウはん」「キシッ」

仲間の視線が集まるのをグンゾウは感じる。

この返答には誰の意見も聞かなかった。誰に反対されようと、少なくとも自分は今行く

気だった。グンゾウの<sup>まぶた</sup>瞼には、責任感と孤独に押しつぶされそうなアキの泣き顔が浮かんでいた。

「みんなにはすまないが、俺は……」

その後を続けようとしたグンゾウの言葉を遮るように、リョータが声を出す。

口を塞いでいたヨシノの手は外れているが、大事に握っている。

「オッサン、それ以上言わなくてもいい！ それはリーダーの俺様が言うことだ。取んじゃねえ」

「リョータ……」

グンゾウは胸が熱くなり、言葉が詰まる。

「どんな危険があるって分かってたって、仲間を見捨てるなんてできるわけねーだろ！

チーム・リョータはこの<sup>オー</sup>兵団<sup>ダー</sup>指令を受ける！ てめえら、命懸けんぞっ！」

数時間後、グンゾウ達は旅支度を調べて揺れる馬竜車に乗っていた。時速は10数キロメートルといったところだ。道が良く整備されているとは言いがたい。グンゾウ達が馬竜車で走っている場所は、少し背の高い草が生えているだけのただっ広い風早荒野だった。

密偵からもたらされた情報により、反攻部隊はオルタナを襲った賊が<sup>もく</sup>潜んでいると目

される旧ナナンカ王国領に向かっていった。旧ナナンカ王国領と言えば過去は人間族の領地で、現在はオークが新生王国ヴァンギッシュを築いている。辺境軍が踏み込むことは、オーク本土への挑発行動になりかねず、危険な行為であると言わざるを得ない。

移動行程は、オルタナから10キロメートル程度北上した所に有る風早荒野を突つ切り、エルフが住むという影森まで300キロメートル程、影森の北までが旧アラバキア王国領で、旧ナナンカ王国領はさらにその北。オルタナから4く600キロメートル離れている。

兵士が馬竜に騎乗し、単騎で駆ければ時速40キロメートル程度は出せるため、12く15時間で到着するが、兵站を考慮するとそうはいかない。風早荒野の西35キロメートルにある辺境軍の寂し野前哨基地さびしのぜんしやうと連携しながら進まなければならない。

寂し野前哨基地には昨夜リバーサイド鉄骨要塞の攻略のために“赤蛇隊”が駐屯していたはずだ。

「うええええええ。……きつついわー。こんなんあかんでー」

馬竜車酔いでシムラ何度も吐いている。どうも乗り物が苦手のようだ。確かに乗り心地が良いとは言えない。

2頭立て馬竜車の中には、リヨタ小隊に割り当てられた当座の物資と一緒に、イアン・ラツティ―准将の私兵で御ぎよ（馬車の操縦）を行う連絡官リエンが1人と、その他に6人が

乗っていた。アキを除くりョータ小队5人に加えて1名、イアン・ラッティイーが助っ人としてこの兵団指令オーダーに加えた人物がいた。

その人物とは……。

【数時間前】

リョータが兵団指令オーダーの受託を決めた後。

「……話はまとまったようだな。では、早速手続きをして反攻部隊と共に行動を共にしてもらおう。儂とお主等の連絡官リエゾンは彼女が務める。名前はブリセイス」

「はっ！」

歯切れの良い、勇ましい声。先程リョータと叱り付けた女兵士が足を鳴らして前にでる。兜から曲くせのある焦げ茶髪ブルネットが零こぼれている。

「それと……この兵団指令オーダーにはもう1人、信頼のおける人物と行動を共にしてもらおう」  
 そう言うといアン・ラッティイーは分厚い両掌を打ち鳴らす。

すると、部屋の扉が開き、輝く神官衣を纏まとった小柄な女性が入ってくる。装飾が施された金属製のスタツフが不釣り合いに長い。

「え？」

思わずグンゾウの口から声が漏れる。



白いほどに金色の髪。透けるような白い肌に小さな顔。眼鏡のレンズの向こうには、薄い二重ふたえの目と長い睫毛まつげ。そして、可愛らしい容姿と対照的な鋭く睨み付ける眼光。

グンゾウの心臓が複雑な感情を伴い高鳴る。

「カ、カレン……」

【現在】

「キシキシシシ、……ミンウだな」

馬竜車の中で転がって寝ているハイドが良く分からない寝言を呟いた。

カレンは膝を抱えて、丸くなって寝ている。

揺れる車内を移動して、ヨシノがグンゾウの隣に座った。顔を近づけてこそこそと耳打ち。

「ねー、ねー、グンちゃん。グンちゃんのお師匠さんはすーつごい怖い人だつて聞いてたけど、本当にあの可愛らしい女性なの？」

——ひいひい。ヨシノちゃん、何てこと言い出すの。

「おいおい、そんな台詞聞かれたら、殺されるぞ。主に俺が」

「ええー、殺されないよー。すごい、可愛い人だよ。あの人、戦闘なんてできるのかなー？」

グンゾウは笑顔になった。笑顔になれた。

襲撃の夜から悲惨な光景、ヴェールとの死闘、強制命令インジャンクションの呼び出し、アキの不在と精神的に抑圧されてきた。

その間、ずっと苦虫を噛み潰したような顔をしてきたグンゾウだが、カレンと会ってから急に心が軽い。

「少なくとも、考えられる中で最強級クラスの助っ人だよ。カレンあのひとがいればもう大丈夫って思える位」

「ふーん。すごいんだねー、カレンさんって」

グンゾウが全幅の信頼を寄せている様子を見て、ヨシノは目を丸くして感心した。

——待っててくれ、アキ。すぐに駆け付けるぞ。

グンゾウは馬竜車の後ろに流れる景色を眺めながら、蒼い空に誓った。

## 11. テッドヘッド監視些編① 双頭の蛇

※本話は全て「カズヒコ」主観で描かれています。

——見られている。

そう、じつと見られていた。そう感じた。夜暗やあんの向こうにある、どろっとした眼まなこ。

“観察”という言葉がしつくりくる視線。何かを推し量るように、こちらを見つめる人物がいる。

その視線に含まれる感情の好悪はわからない。

カズヒコは仲間を見回すふりをしながら、気付かれないように目の端で、視線の主を確認した。

虚ろな目だ。あまり好意的なものだと思うこともできないが、特別な害意は感じられない。

——放っておこう……、男だし。

カズヒコはそう判断した。

知らない人と目が合った時、カズヒコは極上の笑顔をする決めていた。笑顔は敵意

が無いことを示すのに最も手っ取り早い。また、自分の笑顔には人の警戒心を解く特別な力があると信じていた。

しかし、同時に「積極的に目を合わす必要はない。特に男の場合は」とも思っていた。この世界Ⅱグリムガルは、カズヒコが認識する普通の基準よりも荒っぽい人間が多い。あるいは辺境という土地柄なのか。

特に義勇兵という人種は、生活環境のせい<sup>す</sup>か荒んで<sup>す</sup>いる。または、どこか壊れている人間が多い。

記憶を失つてこの地に現れ、毎日命懸けで、怪物と戦い続けることを強<sup>し</sup>いられば、そうなる<sup>ら</sup>なくても仕方ないのだろうか。

——しかし、この世界で生きていけないといけない……。そのためには、色んな意味で僕……俺は強<sup>く</sup>ならないと。

前向きなカズヒコは、今回の機会にオーク退治を経験し、義勇兵として一皮剥けようと考えていた。

カズヒコの目の前で、チョココがちよこつと頭を下げた。

——誰に<sup>か</sup>対してかな？

チョココの視線の先に目を遣<sup>や</sup>ると、先程の視線の主。

ゴブスレこと、ゴ布林スレイヤーのリーダーだ。もう半分寝ているのではないかと  
 思える位、眠たそうな目をしている。

——確か……小柄な男の子、壊れ気味の暗黒騎士に「ハルヒリオン」とか呼ばれてた  
 な。変わった名前だ。盗賊<sup>シニフ</sup>っぽいから、チョココとはギルドの知り合いってことかな？

あのハルヒリオン君はチョココのことを見ていたのか。なるほどね……そういうことか。  
 ……なら、安全かな。

「よし、装備の確認をしよう」

カズヒコは笑顔で小隊<sup>パーティ</sup>の仲間に声をかける。始めから、ずっとカズヒコは声をかける  
 役目だった。あの塔を出た時から。

「へへへ、チョココ、俺が装備確認してやろーかー、へへっ」

「うえ。やめてよー、気持ち悪い」

相も変わらずミッツがチョココにちよっかいを出す。迷惑そうなチョココ。少し限のあ  
 る零れそうな大きな目でミッツを睨む。

「それはちよつと……というか、かなりセクハラ？」

ノツコが帽子の被り具合を直しながら、チョココを後ろに庇<sup>かば</sup>った。

ノツコの背中からチョココがちよこつと顔を出す。小動物的な愛らしさだ。

「うんうん、今のは完全にアウトだね」

タイチはいつものように笑顔のまま、ノッコの意見を支持した。

「へへへっ！ まじかよっ！ ショーツク!! 立ち直れない。立ち直れない。ハイドくらしい立ち直れない」

ミッツはへらへらしながら大袈裟に仰け反ぞつて、心理的な衝撃を表現した。

「ハイド」という固有名詞が出てきたので、ノッコは顔を赤らめた。

過去の記憶が無いノッコにしてみれば、人生で始めて告白されて、まだ数時間しか経ってないことになる。相当大胆な告白だった。嬉しかったかどうかは別にして、相手が誰であっても、明らかかな好意を示されて気恥ぢずかしい。生理的に無理だったけれど。

——まだ、こつちを見ているな……。

カズヒコはハルヒリオンの視線が気になって仕方がない。それくらいジロジロ見られていた。

女性やブリトニーから熱い視線を感じることは度々あったが、普通ストリートっぽい男の子から視線を感じるのには慣れておらず、妙な新鮮さがある。

「やつぱ……周りは慣れてそうな義勇兵が多いな。……止めといた方が良かった……かな？」

クザクがボソボソと緊張した声で言った。戦争前で、既に雰囲気はきに飲まれている。相変わらず覇はき気が無い。

そんなクザクの様子を見ながら、カズヒコは苦笑した。

——俺は人と仲良くなる「腕」はあっても、人を見る「目」はないな。

カズヒコはグリムガルに来たあの晩のことを思い出していた。

最初に小隊パーティに選んだ仲間がクザクだ。あの中だったら当然、体格の良さを考慮してクザクを選ぶのが妥当だと思った。

実際、クザクの潜在能力は圧倒的に高い。

ただし、その肉体に宿る精神があまりに薄弱だった。

未だに盾役タンクとしての自覚が無い。盾も買わない。技スキルもあまり熱心に習得しようとして

ない。無い無い尽くしだ。

装備はそこそこ充実してきているが、同期の聖騎士であるアキと戦っても技量の差で完敗するのではないかと思われた。アキが体格的に遙かに劣る瘦身せうしんの女性であっても

……だ。

リョータ小隊パーティと別々に行動するようになって、カズヒコ小隊パーティも全員少しずつ変わってきている。だが、それでも実力差を感じない日は無かった。あの時、流石にヨシノは無理だったとしても、グンゾウやシムラ、アキが小隊パーティに入っていたら、全然違ったのではないかと想像する日がある。

後悔は先に立たない。それが人生だった。

カズヒコの小さな後悔を吹き飛ばすように、派手な声をする。

「はいはい！ あんたたち、ちゅーもーく！ ちゅーもーく！ 今すぐアタシのところに集合して！ 作戦についてぎーつと説明するわよ！ はい！ 急ぐ急ぐ!! 大至急、大至急よおーっ！」

義勇兵団の指揮官たるブリトニーが手を叩きながら義勇兵を呼び寄せた。

「行こうっ！」

カズヒコは仲間急ぎ立てるように手を振って、ブリトニーの方に向かった。

今夜のブリトニーは一段と不気味だ。睫毛まつげはいつもよりも黒々とし、頬紅ほおべにもいつもの1.5倍紅い。そして顎はいつもの3倍割れている。

——そんなことはないか……。

闇夜の陰影が、ブリトニーの顔の凹凸に濃く反映していた。

ブリトニーは六芒の刻まれた鎧を身に着け、片手剣を帯びている。その剣にかけた指の爪は真っ黒に塗られていた。聖騎士なのだろうか。

——どちらかと言えば、暗黒騎士……いや、いつそ悪魔っぽいけど……。

「デッドヘッド監視砦の外回りは今、言ったような感じ。簡単に復習すると、砦の周りに櫓やぐらを中心としたキャンプが点在してて、それぞれのキャンプには2人から5人のオーク



が在るわけね。ま、ここに在るみんなは大体知つてると思ふけど、知らない人も若干在るみたいだから、念のためめよ。このキャンプ群と砦をひつくるめて、アタシたちはデッドヘッド監視砦つてよんでるわけ。ここまではいいわね？ 何か質問は？ ない？ ないわね？ あつたら困るわよ。んじや、次は砦本体のほうね」

ブリトニーは一メートル四方の大きな羊皮紙に描かれた図面を地面に広げると、洋燈ランペンの灯りで照らした。

あまり綺麗ではないが、デッドヘッド監視砦の本体を描いたものらしい。

周囲を多くの義勇兵が囲んで在るため、後方に在るカズヒコ達からはあまりよく見えない。前の方に行き、人混みに潰されかけていたチヨコがよれよれで帰つてきた。

「駄目！ 全然、前に行けない。197人で図面一枚とかどうかしてる！」  
拗すねたような口で頬を膨らましている。いつもの表情。

——さて、どうしたものか？

集団の中でもクザクは頭ひとつ抜けて在る。

チヨコが何かを思いついたような顔でクザクを眺めると、話しかける。嫌そうな顔をするクザク。しかし、断るのも面倒臭かつたのか、渋々しやがむ。

チヨコはクザクによじ登ると肩の上に立つた。

——チヨコが立つた！

「クザク、上向いたら絶対許さないからね。おおー、見えるーっ！」

チヨコは服の裾を押さえながら言った。クザクがよたよたと前後左右に揺れる。

「そんな余裕はねえし……。こんな無茶なお願いしてるのに、何でそんな上から発言が言えんの？」

「上にいるから……。かな？」

チヨコが小洒落の利いた面白いことを言う。

クザクという<sup>あげそこぐっ</sup>上げ底靴を手に入れて、身長340センチメートルのチヨコは、義勇兵達の頭上から凶面を眺めている。

「おいおい、クザク。なんか、羨ましいぞ」

いつもの薄ら笑いも出ないミッツの嫉妬。しかし、隣に立つノツコに気持ち悪がられていることを気付いていない。相変わらずの失敗だ。

「いつでも代わるけど……。ミッツ。……。重ーし<sup>おめ</sup>」

「失礼ね。そんなに重くないはずですけど……」

「ああ、じゃあ、僕が<sup>プロテクション</sup>光の護法をするよ。光よ、ルミアリスの加護のもとに<sup>プロテクション</sup>光の護法！」  
カズヒコ<sup>バウティ</sup>小隊全員の左手首に光る六芒が浮かぶ。

いつものお気楽な様子を横目に、<sup>プロテクション</sup>光の護法の支援を受けたカズヒコは、なるべく集団の前方、ブリトニーの話が聞こえる位置に食い込んだ。

姿が見えないので、完全におっさんに聞こえるブリトニーの野太い声がする。

「はいはい。砦を囲んでる防壁の高さは、正門がある南側が6メートルくらい、東側西側はこれよりも低くて約4メートル、裏門がある北側は5メートルつてとこよ。防壁を越えてから砦の中に入るには、外階段を使って屋上まで上がらないといけないわ。1階には出入り口がないってわけ。で、その出入り口が、ここ」

ブリトニーが鞆に収めた剣で屋上の一点を示した。

カズヒコからは図面の全体が見えないため、そこがどこなのかは見えない。

チョコを見上げると、図面をじつと見詰めていた。チョコの目と記憶の良さは折り紙付きだ。きつと記憶したと思われた。

「……見ればわかるでしょうけど、防壁と砦の東南角が接してる造りになってる。外階段は砦の東面、ずつと南寄りの場所にあるでしょ？ つまり、南側の正門から入っても右回りに1周近くしないと、砦の外階段には辿り着けないってこと。で、外階段を駆け上がって屋上階の出入り口から中に入ったら、今度は1階まで下りないといけない。なんでこんなめんどくさいことになっているのかは、わかるわね？ もちろん、防御のためよ。1階まで下りれば、北西、南西、北東に、それぞれ監視塔に上がるための階段があるわ。……あ、そうそう、これも新人向けの話だけど、この砦つて、三本の監視塔がぬぬつと突き出しているの。これが監視砦の名の由来よ。敵の親玉、砦守は、三つある

監視塔のうちどれかにいると予想されてるわ。だいぶイメージできたかしら？」

「ふ、ふっ」

カズヒコの口から小さな笑い声が漏れる。自嘲と苦笑いの混ざった笑いだ。

——さっぱり分からない。……不安だ。

カズヒコは聴覚が主な情報源であったため、あまり明確に想像できなかった。

砦守<sup>キーパー</sup>がいると目<sup>め</sup>される監視塔に入るためには、平面的にも立体的にも遠回りが必要ということだけが、漠然と把握できた。

つい最近のように、ダムロー旧市街での戦いが思い起こされる。

——ダムロー旧市街戦とは情報量が違いすぎるな。あの時は何週間も監視を続けて、地理も敵の量も動きも完全に頭へ入っていたから、全然不安が無かった。計画の緻密<sup>ちみつ</sup>なグンゾウさんがいたしな。

追憶<sup>おぼえ</sup>に耽<sup>ふけ</sup>っていると、人垣の隙間からハルヒリオンの姿が見えた。

盗賊<sup>シフ</sup>らしく、すばしっこいのだろうか。集団の最前列に位置取り、ブリトニーが説明する凶面を凝視しながら、小さく頷いている。

——眠<sup>ね</sup>そうな目をしているけど、盗賊<sup>シフ</sup>でリーダーをやってるだけあって、こういう場面では素早く行動して、理解をしてるんだな。見習わないと。

カズヒコのなんとか凶面の全体を見ようと、さらに前へと割り込んで行った。

「カズ君っ！」

突然、後ろから囁くささやくような声をかけられ、カズヒコは振り返った。

そこには白い神官衣に身を包んだ、長身の女性がいた。ニコニコとした笑顔で、おでこに敬礼のような形で手を当てている。

黒髪のポブカット。ふつくらとした色白の顔は少女と言うのは大人びていて、大人と言うには幼すぎる雰囲気だ。困ったような下がり気味の眉毛の下に、扁桃アーモンド型の大きな二重の目があった。

身長は160センチ。特徴の無い白基調のぴったりとした神官衣を着ていた。

しかし、身体的に特徴的すぎる部分があった。

神官衣では隠しきれない程の大きな胸。胸の部分だけ妙に突っ張った神官衣が、聖職者としては不謹慎なくらい、その大きさを強調していた。その大きな胸の上に白い羽スツールが乗っかっている。克蘭・荒野ワイルドエンジェルズ天使隊の構成員である証だ。

ここそこそと人混みに紛れ、2人の距離で話す。

「リホー！……よく俺がわかったね」

「わかるよー。カズ君のこと大好きだもん」

「さつき少し探したんだけど、どこにいたの？」

「荒野天使隊のみんなと一緒にいたんだー。カズ君と一緒に行って、嬉しいなー」

リホと呼ばれた女性性は、甘えるようにカズヒコの腕にしがみついた。押しつけられる胸の柔らかな感触が心地よい。

彼女がカズヒコが今回の兵団指令オーダーを受託したもう一つの理由だった。リホはカズヒコが現在最も親しく付き合っている女性だ。リホから今回の兵団指令オーダーに参加すると聞かされた時に、カズヒコの中で参加が確定していた。

「そっちの小隊はバード隊バード大丈夫そう？」

リホは記憶喪失組の義勇兵で、カズヒコよりも1年以上前にグリムガルに来ていた。運良く荒野天使隊ワイルドエンジェルズに拾われ、士官として重宝がられていた。カズヒコとの出会いは北区ノースの市場。たまたま情報収集で聞き込みをしていた際に、意気投合し、その後親交を深めていった。サイリン鉱山の詳細な情報を教えてくれたのもこのリホだ。

「うん、大丈夫だよ。今日は克蘭で来てるから強い人いっぱいだもん。カジコさんとか、マコさんとか、キクノさんとか、アズサさんとか……えーっと」

「そうなんだ。いっぱいいるんだね」

「うん。いっぱい。カズ君の所は大丈夫？」

リホは甘えたような目でカズヒコを見上げた。

「ん？ 大丈夫……かな？」

「なにそれー？ うけるー。マッチョなヤンキーとか、人類最強の女子とか、新人のおじさんがいるんじゃないのー？」

リホは口を押さえながらクスクスと笑った。扁桃型の目が細くなる。

——最高に可愛いな。……胸も大きいし。

「次。作戦のあらましについて」

ブリトニーが作戦のあらましについて話続けている。

「アタシ達は夜明けと同時に攻撃を開始する。本体は南側正門、別働隊は二手に分かれて東側と西側を受け持つことになってるわ。はい、そこ、ビビらない！ 大丈夫よ。別働隊の役目はあくまで牽制と陽動だから。先に動くのは別働隊。東西から攻め始めて、敵が防衛にあたらうとした所で、本体が正門に押し寄せて一気に突破するってわけ」

——え？ 説明それだけ？ まじか……。

カズヒコは驚いた。作戦というにはほど遠い。端的に言えば、東西に別れて4メートルの防壁めがけて“特攻”だ。

「二手に分かれるって言ったわよね。東は20小隊、こっちはアタシが指揮を執るから、緑嵐隊りよくらんって呼ぶことにするわ。わかるでしょ？ アタシの素敵な髪の色からとったのよ。西は17小隊パーティー、そっちはカジコに任せる。てことで、名前は荒鷲隊あらわし。どう？ 悪く

ないでしょ?」

カジコと呼ばれた大柄な美人の女戦士は、片方の眉毛をつり上げて「ええ。悪くない」と言った。

「隊分けはアタシがもう考えてあるわ。いい? 緑嵐隊りよくらんの小隊パーティだけ指してくから。いいわね? はい、あんた、それからあんた、あんた……」

ブリトニーが気味が悪い科しなを作りながら、緑嵐隊りよくらんの小隊パーティを選らんでいった。カズヒコは小隊パーティのリーダーなので、前の方に出るように進む。後ろにリホも付いてくる。

カズヒコが最前列パーティに出ると、ブリトニーは気が付いたようにその顔を指差した。「最後あんた。これで20小隊パーティ。残りはカジコの荒鷲隊あらかしよ。わかったわね?」

義勇兵達が適当な返事をした。初めてみる顔も多い中、ブリトニーの決定に異論を挟む根拠が無い。戦力の均衡バランスなどわからなかった。

「あーあ、別々の隊なんだねー。残念。せつかくカズ君の格好いいところ見たかったのにー」

リホががっかりとしたように肩を落とした。

カズヒコがリホを慰めようとすると、ブリトニーとカジコが話を始めた。リホは「あ、カジコさんに見つかったらやばいから、向こうに行くね。砦の中で会おうね。ばいばーい」と言っ、そそくさと去って行った。カジコが恐ろしいようだ。



「またね」

カズヒコはそう言って控えめに手を振った。

——さて、俺も仲間と合流するか。

カズヒコは仲間を呼び寄せるように手を振って合図する。

クザクの上に乗っていたチョコが気付いた。拗ねるような尖った口が「りよ」という形になる。カズヒコの位置から、チョコがクザクから下り始めるのが見えた。

ブリトニーが剣で地図を指し示しながら、作戦の続きを話し始める。砦の周りにあるキャンプの上で円を描くように剣を回した。

「……それじゃ、作戦の進行について。作戦が始まったら、アタシ達は手当たり次第にキャンプを制圧しながら防壁めがけて進むことになるわ。オークがいるキャンプは全部潰すこと。もたもたしていると、キャンプからオークが出てきて囲まれちゃったりするかもしれないから、できるだけ素早く潰すのよ。これが第一段階」

——うーん、散開での突撃ってことか……な？

次にブリトニーは絵図面の防壁を指し示す。

「第二段階は、防壁に取り付いて攻撃を仕掛ける。敵はたぶん、弓矢で迎撃するでしょうけど、盗賊隊の偵察によると守備についているオークの数は200つてとこよ。大した

人数じゃないから、そんなに怖がらなくていいわ」

——そうかな……？

カズヒコはグンゾウの言葉を思い出していた。

「兵の数はもちろん大事だけど、同じ位きとう機動きとうが重要だよ。寡兵かへいでも分散した敵に対してなら、集中して各個撃破すれば勝てるわけだし、あまり数に頼って敵を侮あはらない方がいい。ましてオークは全部がリョータ位の戦闘力があるわけだしね。リョータ6匹に今のカズヒコ小隊パーティーで立ち向かうとか、考えるだけで嫌でしょ？ あははははは」

——うちのパーティー小隊は気を付けよう。

「そうは言っても、当たり所が悪ければ即死ってこともあるし、盾を用意してもらったから……」

ブリトニーがクツキリ・シツカリ・ハツキリ割れた顎あごをしゃくって道脇みちわきを示す先には積み上げられた板のようなもの。

——あれが盾かな？

「出発する前に各自、持ちなさい。盾は使い捨てて構わないわよ」

「アキちゃんとか喜びそう……」

いつの間にかカズヒコの隣にいたチヨコが呟つぶやいた。その言葉にノツコが笑って頷うなく。

「あはは。本当、本当、無料の盾とか大好きそうだよね」

全員チヨコに連れられて、カズヒコの元に集まってきた。

「へへっ、お土産に持って帰っ……」

ミッツが軽口を叩こうとしていたら、ブリトニーに睨まれ、急に黙る。

「……で、アタシ達は門が無い防壁を攻めるんだけど、梯子をかけて一気に登っちゃうことにしたわ。もちろん、そのための梯子も用意してある。と言うわけで、梯子係がいるわね。現地まで梯子を運んで、組み立てて、防壁にその梯子をかけるところまでが仕事よ。梯子はアタシの緑嵐隊りよくらんと荒鷲隊あらかしに、それぞれ4台ずつ……」

——4台？ 1台当たり25人が殺到するの？ 4メートルの防壁に？ 待ち構えるオークは最大200匹。東西南北で50人いる期待値だよな？ 大丈夫なのか？

4人ずつ登った義勇兵が防壁上の50匹のオークに次々斬り落とされていく映像が浮かぶ。カズヒコはブリトニーの説明を聞く度に、どんどん不安になっていく自分を感じた。

——……先頭を登るのは絶対避けたい感じだな。

「荒鷲隊あらかしの梯子係はカジコに決めてもらうとして、我が緑嵐隊りよくらんの榮譽ある梯子係は……」  
考え込むブリトニーは、悪魔のような黒い爪が生えた指先を口に啞えた。甘えん坊の姿勢だ。

——全く可愛くない。



「……カツコイイ」

ランタはその単語を繰り返して、何度もその語感を味わっている。最初は眉根を寄せ、顎に手をやったまま疑問に満ちた表情をしていたが、自分なりの解釈が進み、徐々に気分が高揚してきたのか、その内ニヤケタ顔になる。

「ぐふふふ……まあ、そういうことならな？　しょうがねえ。やってやつか。そういう大事な仕事は、やっぱ俺くらいの格がねーと無理だろうしな？」

ランタは胸を張り、腰に手を当てて言い放つ。

「俺等もやるんだけど」

止よせばいいのに普段は寡黙なクザクがランタに絡んでいった。

——あちやー。

君子危うきに近寄らず。

古いどこかの国の偉人がそんなことを言ったような記憶がある。カズヒコは、クザクの軽率な行いを見るに堪えない気持ちから、顔に手を当てた。指の隙間から恐る恐る成り行きを見守る。

ランタは大袈裟に振り向き、クザクを睨ねめ付ける。身長差約30センチ。

「黙れ！　それはそれ、これはこれだ！　つーか、おまえ、俺等の後輩だろうが！　先輩が良い気分浸っている時に邪魔すんじゃないやねえ、タコツ！」

瞬間風速毎秒50メートルを超えるような台風並の先輩風。

——「ビュービュー吹いてるな。まあ、先輩らしいことしてもらったことないけどなあ。あんたらのちらかしたあと新市街のゴブリンを後始末したのは俺達だし。

普段から表情の冴えないクザクだが、少し苛ついて興奮した顔になった。

「タコじゃねーし」

「だったらイカか?!」

ランタの口撃はクザクの3倍速い。赤い上に角ツノまで生えている。おまけに顔がむかつく。

一瞬、さらに言い返そうとしたクザクが息を吸ってから、そのまま溜め息を吐く。

「……………いいや。何でも」

クザクの顔は普段通りの冴えない表情に戻った。

「ウワハハハハハハハハハハハハハハハハアツ！ 勝ったな……………！ 俺の勝ちだ……………！」

天パー暗黒騎士の高笑いが夜空に響き渡る。ランタの勝ち誇った顔。

ノツコが小さく「……………最低」と呟いた。

梯子の全長は5メートル程だった。組み立て式で、中間で2分割されている。

2 小隊<sup>パーティ</sup>で4台の梯子を運ぶということは、実際には8台の分割された2メートル半の梯子を運ぶということだった。

「……じゃあ、半分ずつ運ぶって事でいいかな?」

ハルヒリオンが「僕はもうすぐ寝ます」という目で、カズヒコに話しかけてきた。ラ  
ンタという暗黒騎士を飼っている小隊<sup>パーティ</sup>のリーダーにしては、まともそうな少年だった。

「ええ、そうしましょう」

カズヒコはいつもの最上級の笑顔で答える。ハルヒリオンは一瞬驚いたような顔をしたが、ひよこつと頭を下げると、仲間を呼んで2台の長梯子を運んでいった。少し動きがチヨコに似ているとカズヒコは感じた。

——盗賊<sup>シフ</sup>ってあなるのかな?

カズヒコがチヨコに視線を向けると、チヨコは零れるような大きな目で、ハルヒリオンのことを見詰めていた。ハルヒリオンのことを見ているようで、もう少し遠くを見つめているような表情。

チヨコはカズヒコの視線に気が付くと、少し恥ずかしそうな顔をしてクザクの影に隠れた。チヨコの隠れ家だ。

「へーへーへー!」

カズヒコの隣にミッツがいる。嫉妬が言葉にならないミッツの怒気を含んだ不気味

な笑い声（？）が聞こえてきた。クザクが羨ましいらしい。

「よし、男でひとつずつ持とう」

カズヒコの声掛けで、クザク、ミッツ、タイチがそれぞれ梯子を1台ずつ持った。木製で丈夫に作られているため、重量感が手に伝わる。さらに盾を背負っているため、体が重たいことこの上ない。

義勇兵達に盾が行き渡り、梯子係の準備が完了するのを見届けると、ブリトニーが最後の説明に入った。

「さあーで、砦の中への突入と敵の掃討は主に本体がやることになるはずだけど、一応、敵戦力についても説明しておくわ……」

ブリトニーは、オークの数、武装、ゼツシュという氏族であることを説明した。

さらにゼツシュ氏族は強悍きょうかんであること、氏族長のゾラン・ゼツシュの見た目の特徴、氏族長の側近及び呪術師の特徴、そして、リバーサイド鉄骨要塞ようさいに援軍を請うための狼煙のろしについて説明が加えられた。ただし、狼煙のろしが上がったとしても、リバーサイド鉄骨要塞ようさいには赤蛇隊が向かっているため、援軍は来ない。

時折、ゴブリンスレイヤーの狩人である女の子が意味不明な問いを投げかけるため、あのブリトニーが困惑させられる場面も見受けられたが、ブリトニーはなんとか説明をやり遂げた。



「……どつちにしても、難しい戦いじゃないわ。経験値低めの子達も安心なさい」  
最後にブリトニーが新人のカズヒコ達やゴブリンスレイヤーに気休めの言葉をかける。

「……へへ、良かったぜ」

敵戦力の話を聞いて、緊張していたミッツがほっとしたような表情をする。ノッコとチョコも安堵の表情。

そこへ急に険しい声と顔をしたブリトニーが声を出す。

「とはいえー」

「ひゃっー」

ブリトニーの声に驚いてチョコが首を竦める。

「相手はアタシ達の天敵、不死の王<sup>ノーライフキング</sup>亡き今、不死族<sup>アンデッド</sup>を抑えて、この辺境で最大の勢力を誇るオークよ。油断したら、しっぺ返しを喰らうくらいじゃすまないわ。あっさり死ぬわよ。」

チョコは首を竦めたままだ。シムラが居れば「どつちやねん！」と突っ込みを入れて笑いが起きたと思われる。

「ひひひひ……だ、大丈夫だよ……チョコー」

ミッツが強張った表情のまま、チョコに強がったところを見せたが、手足の動きがぎ

こちなく、見るからに挙動不審だ。

ブリトニーが不気味な笑みを浮かべた顔で、ハルヒリオン小隊パーティーとカズヒコ小隊パーティーに視線を遣った。そのままピンク色の舌が蛇のようにニョロツと飛び出し、黒い唇を舐める。

「ま、そういうことなんで、気合い入れていきましようか、子猫ちゃん達」

——不気味だ。

青蛇隊がデッドヘッド監視砦に向けて動き出す。カズヒコ達義勇兵は最後尾だ。

「よーし。じゃあ、梯子を運んで行きますか」

カズヒコが声を掛けると、ミッツが素すつとんきようつ頓狂な声を出す。

「うひゃあ、へへへ、蛇だー。しかも双頭の蛇だぜ、へへへ。超珍しい。双頭の蛇作戦の出発に双頭の蛇を見つけるなんて、俺ついでるー」

へらへら笑っているのか、蛇の「へ」の字が上手く言えていないのかは分からない。

「あ、結構かわいいかも……」

「チヨコは蛇とか好きなの？ あ、ほんとだねー。意外」

チヨコとノツコが、ミッツの照らす行燈ろうたんの灯りで双頭の蛇を観察している。

カズヒコも覗き込む。

黒く小さな双頭の蛇がどこに向かうでもなく、草むらの中で蠢うごめいていた。

——初めて見た。本当に珍しい……。

「双頭の蛇つて頭は別人格……別蛇格かな？　なので、バラバラに行動してお互いが足……胴かな？　を引つ張るから早死にしてしまいうらいよ」

タイチがどこからか仕入れてきた蘊蓄うんちくを語った。

——あんまり縁起えんぎが良くないな……。

「クザクも見るー？」

チヨコがクザクに声を掛ける。

「んー？　……ああ……すぐ行く」

カズヒコが顔を上げる。

クザクは少し離れた場所であさつての方向を見詰めていた。視線の先にはゴブリンスレイヤーの女神官。メリイという美人の女神官だ。

凜りんとした振る舞いで、他の2人ふたりの女性と梯子を運んでいる。ゴブリンスレイヤーの女性の中では最も背が高い。リーダーのハルヒリオンと遜色そんしよくない身長だ。白い神官衣を纏まとった立ち姿は、清らかで力強く、そして美しい。

——クザクはああいうのが好みか……。いいねっ！

「あー、居なくなっちゃったー」

チヨコが残念そうな声を上げる。

双頭の蛇が暗い藪の中に消えてしまったらしい。

「へへへ、俺が見つけるぜ——！」

「おいおい、みんな。遊んでないで、そろそろ行こうよ。置いていかれちゃうぜ」

カズヒコが藪の中に入ろうとするミッツを制した。チヨコに良い所を見せたかったミッツは、ふくれ面ぶくれで渋々返事をした。

「へへへーい。ちえー、仕方ねーなー」

「ぐずぐずしてると、ブリトニーに2度と笑顔になれないくらい酷いことされちゃうかもよ？」

カズヒコが冗談を言う。

脅しが効いたのか、ミッツは「へっへへーいっ！」と奇声を上げ、梯子を抱えて全力疾走で青蛇隊の列に向かっていった。その様子を見るカズヒコパーティ小隊の残りは、全員笑顔だ。

「うん。普通にきもい」

チヨコが笑顔のまま、全く感情のこもっていない口調で呟いた。

## 12. デッドヘッド監視砦編② 戦場の風（上）

※本話は全て「カズヒコ」主観で描かれています。

夜に吹き荒れた、戦場の風。

その風も、闇が振り払われると時を同じくして弱まる。

空は深い藍色から、枯れ葉色、そして鮮やかな蒼へと変わろうとしていた。

その青空を突き上げるように3本の黒い塔がそびえ立っている。

デッドヘッド監視砦。

その悪魔の角を想起させる禍々しい黒い塔に、人間族を監視するためのオーク達が駐屯していた。人間族が辺境で勢力を伸ばすことを抑制するための忌まわしい楔。奪われた領地に建てられた屈辱の象徴。

今日、人間族はこの砦を地図上から消し去ろうとしている。

そんな歴史的な瞬間に立ち会う意義を噛みしめながら、英雄達は突撃の時を待っていた。

デッドヘッド監視砦の東壁側で待機しているのは、ブリトニー率いる緑嵐隊。カズヒ

コ小隊パーティもその中にいる。

監視塔の周囲にはオーク達のキャンプがあり、その周辺には幾度もの戦争でできた廃棄物の山がある。それらに隠れ、全員が息を潜ひそめていた。

周囲の空気は張り詰め、緊張感が漂っている。音を立てないように、全員が身じろぎひとつしていかない。

「くしゅんっ」

その音に動揺が走った。幾十もの視線が集まる。その先にはゴブリンスレイヤーの壊れた暗黒騎士、ランタだ。

ランタはくしゅんをしたことを悪びれる様子もなく、両手を広げて「まあ、落ち着け。慌てるような事態じゃない」とでも言いたげな身振りをしている。全く反省の様子は見えない。

——すげーな。

チヨコが無音で移動して、廃材の隙間から周辺のキャンプを観察する。

「気付かれてない……と思う」

カズヒコ小隊パーティは安堵の胸をなでおろした。

「へへへ、あのアホ暗黒騎士どうしようもねーな」

「シムラも同じ事してたけどね……」

「シムラもどうしようもねーからな、へへへ」  
「静かに」

カズヒコがミツツとタイチのお喋りを制した。小声とは言え、今は少しでも気付かれる危険を避けたい。2人とも口を閉じる。

——さて、いつになつたら突入するのやら？

カズヒコが指揮官の方を見ると、ブリトニーは何度も金色の懐中時計の蓋を開いては確認し、それを閉じている。

——まだまだか。……リホ達の方はどうしてるかな？

荒鷲隊はデッドヘッド監視砦の反対側なので、伺い知ることはできない。

カズヒコは金属鎧を身に着けているため、少し動くだけでガシャガシャと大きな音がする。そのため先程からずっと同じ姿勢だ。いい加減、身体が痛い。

その点、盗賊シーフや狩人かりうとは装備が身軽なため、どの小隊パーティでもちよろちよろ動いたりして、キャンプを観察等している。忍び歩きスニッキングや隠形ステルスという技スキルがあるので、動く時に全く音がしない。

チヨコは盗賊作法の奥義のひとつである隠形ステルスを覚えていた。習得するのに2ゴールドもかかったらしい。「地獄を見た……」習得を終えたチヨコの一言だ。カズヒコにはグンゾウが妙に同情をしていたのが印象的だった。

カズヒコはチヨコに喧嘩殺法けんかを覚えて、少し戦闘に参加して欲しいと思っていたが、チヨコは盗賊作法を優先スキルに技習得スキルしていた。体格的な不利もあり、喧嘩殺法けんかは敬遠しているようだ。

最近では、レッサーコボルド程度であれば、隠形ステルスで気配を消して後ろから忍び寄り、背面打突バックスタブで止めを刺すようなこともできるようになっていたので、カズヒコも特に何も言わなかった。

今もチヨコは気配を消して、ちよこちよここと動き回っている。全く音がしない。それどころかたまに存在を見失う。隠形ステルスはチヨコのお気に入りだ。

しばらくすると、ブリトニーが立ち上がる。

手に抱いた金色の懐中時計を確認してから頷いた。

右手を挙げ、声を上げる。

「作戦開始よ……!」

振り下ろされる右手。

同時にどこからか関の声上がる。正門の本体か、監視塔の西側にいる荒鷲隊か。

「突撃……! キャンプを潰して……!」

ブリトニーの野太いおっさん声の号令で、緑嵐隊りよくらんは隠れていた廃棄物から飛び出し、



一斉にオークのキャンプを襲い始める。  
奇襲だ。

全く襲撃を予期していないオーク達は慌てふためいている。外辺部のキャンプにいたオーク達は荒々しい義勇兵の群れに飲み込まれ、一瞬にして物言わぬ骸と化した。

「俺達も行こう……！」

思いっきり出遅れたカズヒコ達は、蹂躪されたキャンプの痕跡を眺めていくことになる。

目の前には焼き落とされ、散乱したキャンプの残骸。

キャンプは大抵1つの櫓と2、3個の天幕からなる構成だ。キャンプの櫓には動物の頭蓋骨や干涸らびた死体の頭部が吊されていた。オーク独自の呪術なのか、敵である人間族に対する脅しなのかはわからない。

——あれがデッドヘッドⅡ死に首の由来かな？ あの材料にはなりたくないな。

それにしても、カズヒコ小隊は動きが遅い。

光の護法が切れているという理由もあるが、とにかく梯子が邪魔で重い。周囲を見渡すと、一番後方をえつちらおつちら走っているという状態だ。

時折、爆発物が爆裂する音が響く。

炎熱魔法が使われているのか、至る所で煙が上がり、視界が悪い。風が凪いでいるの

で、煙が散らないのだ。

煙の隙間から、斜め前方にゴブリンスレイヤーの一団が見えた。やはり梯子の重さで出遅れている。

「あそこ！ 狼煙だね」

チヨコがデッドヘッド監視砦の方向を指差す。

皆が視線を向けると、デッドヘッド監視砦から濃い灰色の煙が立ち上っている。

——おつ、例のやつだな。

デッドヘッド監視砦とリバーサイド鉄骨要塞は互いに狼煙で連絡を取り合って防衛をしている。そのため、双頭の蛇作戦では同時に攻撃をしかける作戦となっている。

「へへ、もう一本上がってる。また、上がった。今度は黄色っぽくね？ へへへっ！」

デッドヘッド監視砦から西側に向けて次々と灰色の狼煙が上がったかと思うと、次は西側から先程よりも黄色っぽい煙が立ち上り始めた。

「きつとりリバーサイドが攻められているから狼煙で伝えあってるんだ。灰色は『援軍求む！』で、黄色っぽいのが、『こっちも攻められてる！ 無理っ！』かな？ あはは」

タイチが笑いながら予想する。

リバーサイド鉄骨要塞で慌てている滑稽なオークを想像して、カズヒコ小隊は全員少しおかしみを感じた。

——しかし、梯子が重い。

カズヒコ達は4分割されている2台の梯子を男4人で分担していた。持ち運びやすくするため縄ロープで身体に結わえ、背負っている。

「オ、オークだ……！ 2人くる……！」

左の煙の向こうから誰かの声がする。聞いたことのあるような、無いような少年の  
声。

「止まろう」

カズヒコは立ち止まって周囲をぐるっと確認する。

右側の立ち上る煙のぼの向こうに動く黒い影。オークが2匹、近くまで迫っていた。

オーク達も煙の中、必死に逃亡をしようとしているのか、周囲を警戒しながら走っている。オーク達は金属製の鱗スケイルメイル 鎧アーマーに身を包み、兜と少しだけ反った肉厚の片刃刀を持っていた。ブリトニーはオークの持つ片刃刀のことをガハリイと説明していた。

兜から見えるオークの顔は、肌はくすんだ緑色、鼻が上向けに潰れ、口が大きく、猪みたいな牙がある。人間の美意識からすれば美しいとは言いがたい容姿だ。しかし、両目に宿る眼光は鋭く、戦士の勇猛さと知性を感じさせた。

カズヒコが2匹を認知したのと同時に、オークもカズヒコ達の存在に気付く。

「近い。2匹こっちに来るぞ！」

カズヒコが指差すと、ミッツがキョロキョロと探し始める。煙で見えないようだ。

「おっ!! どこ? へへへっ、見えない。あ、見えた、へへへ」

「やばっ! 意外に近いじゃん」

チヨコがクザクの後ろに隠れた。

「ちよっ、梯子……! 下ろさねえと……!」

クザクが縄をほどき始める。全員気が付いて、慌てて縄をほどく。

カズヒコ達は持ち運びやすくするため、縄をしっかりと結んでしまった。なかなか縄目が解けない。

どんどんとオーク達が近付いてくる。完全にカズヒコ達を目標に定めている。

焦燥感が募る。

——やばい。梯子背負ってオークとなんて戦えない。

「そ、その前に光の護法……!」

カズヒコが呟く。

「え? あっ! 切れてた。あ、ど、どうしよ。縄がほどけない」

「口は動くだろ!」

クザクが言うのとタイチは慌てて光魔法を唱え始める。

「そ、そっか。ルミアリスの加護の下に……光の護法」

全員の左手首に青白い六芒の光が浮かぶ。ふつと身体が軽くなる。

しかし、状況は一向に好転していない。焦れば焦る程、まるで縄目が固くなつていくかのように解けない。

オーク達はどんどんと近付いてくる。

——やばい……、やばい……。

「クザク！ 俺の梯子の縄を切ってくれ」

カズヒコはようやく縄を解くのを諦め、縄を切ることにした。梯子は抱えても運べる。焦って冷静な判断ができなくなっていた自分が恥ずかしくなる。

クザクが縄を切ろうと長剣を抜いた瞬間、大きな影がカズヒコ小隊の横を走り抜けていった。

巻き起こる風圧に焦るカズヒコ小隊。

——オークか?!

カズヒコがオークに勘違いした大きな影は、カズヒコ達には目もくれず、こちらに向かってきていたオーク達の1匹に突撃していった。

「むおおおおお!!」

ゴブリンスレイヤーの戦士だった。カズヒコの記憶では名前はモグゾー。オークに引けを取らない体躯でオークAに斬りかかっていた。正面に相対して斬り合っている。

る。

続いて、素早く黒い影がまたしてもカズヒコ小隊パーティの横を通り抜けていく。

「うひゃあ！ へへえ！」

ミッツがびびってしゃがみ込んでしまう。ミッツの悪い癖だ。

戦闘中にしゃがみ込むなど過去何度となくリョータに怒られていた。

同じく、黒い影もオークBに飛びかかってくる。飛びかかってくるというよりも滑り込んでいくといった表現が正しい。カズヒコ達が見たことの無い、素早い足捌あしさばきで距離を詰めていく。

黒い影は壊れ気味の暗黒騎士ランタだ。ランタは体格的にオークBに負けているため、全く打ち合わない。一撃離脱ヒットアンドアウェイ戦法。不思議な足捌あしさばきで間合いを詰め斬り付けては、次の瞬間にはまたしても不思議な足捌あしさばきで逃げていく。

——あれ、きつと暗黒騎士スキルの技なんだな……。

オークBもランタをその剣先に捉えられず、追いかけて回している。その後ろを狩人の女の子ユメと、リーダーの盗賊シフハルヒリオンが追いかけている。命懸けの真剣な追いかっこ。不思議な光景だ。

戦士モグゾーもオークAと一進一退の攻防が続いていた。オークAは、モグゾーよりも背丈は低い、体軀は一回り大きい。五分五分か、若干モグゾーが劣勢のように見え

た。

「怖じ気づかないで！」

女性の美しい叫び声がして、カズヒコがその方向を見る。すると声から想像するよりも美しい容姿の女性が立っていた。神官のメリイだ。

「慣れれば、渡り合える……」

「メリイの言う通りだ……！ 俺達はまだ、オークの動きに慣れてない！ それだけだ！  
モグゾー、お前ならやれる！ やれないわけ、ない……！」

ハルヒリオンが鼓舞すると、モグゾーという戦士の動きが良くなる。

「もおー……っ！」

モグゾーはオークAのガハリイを肩当てで受け弾き飛ばすと、体勢の崩れたオークAに肉厚の剣鉈のような大剣を打ち込む。重装式戦闘術の鋼返しスチルガードからの連続攻撃ラツシユだ。モグゾーという戦士は見た目の重たさに反して、剣技は緻密ちみつで素早い。振り回す大剣はあのデッドスポットから奪い取った剣という噂だ。

カズヒコがぼうつとその様子を眺めていると、急に身体が軽くなった。背負っていた梯子が倒れる。クザクが男全員の縄ワタを切って回っていた。

「ああ、ありがとう。クザク」

「いや……。格好わりいな……。俺等」

クザクは気恥ずかしそうに、頬をぼりぼりと搔いていた。

「全く……」

カズヒコも反省する。

——ちよつと気が抜けてたな。俺等は遊びに来たんじやない。戦争をしにきたんだ。

オークAはモグゾーに打ち込まれ続け、押され始めた。

一方、オークBも防戦に入り始めた。オークBには3人が代わる代わる攻めかかっている。

「……言われなくたってなあ……」

逃げ回っていたランタが、一瞬オークBと鏢迫り合いし、オークBのガハリイを押し弾く。意表を突かれたオークBは足が止まり、腕が上がってしまう。

「つああーっ！ 憤慨突アアア……ッ！」

そこに狙い澄ましたランタの刺突。

「わかってんだよ！ 俺は無敵なんだっつーの……」

オークBが身を振り、ぎりぎりの所で突きを躲す。

そこに盗賊のハルヒリオンが後ろから襲いかかる素振りを見せた。意図的な如何様なのかもしれないが、オークBはハルヒリオンが気になって身体を捌いて、躲せる姿勢をとる。



注意が暗黒騎士ランタと盗賊シーフハルヒリオンに分散されたところで、意識外から狩人のユメが突撃する。

「ちよいやー！ たーっ……！」

足下を掬すくうように斬る刈り払いかばらから繋いで、右上から左下に斬り下ろし、時計回りに回転するように身体を使って左から右に斜め十字の連続技コンボを見せた。

「シムラより綺麗……」

チヨコが思わず眩く。ノツコが頷いている。

「あいつ、禿げてるしな……へへへ」

ミッツのずれた発言。

——シムラの頭は輝いて綺麗だ。

オークBは、流れるようなユメの動きに惑わされながらも、鎧やガハリイで剣鉈を弾く。そもそも狩人の小さな剣鉈では、鎧の上からの攻撃が効くとは思えない。

反撃しようと振り下ろしたオークBのガハリイを穴あなねずみ鼠スキルの技でコロコロと転がってユメが躲かわす。

「はにゃーっ」

——これらは全部、あいつのための陽動なんだな……。

そのあいつが飛び出してくる。

「おらおらおらあつー！」

ユメを追撃しようと身体が開いたオークBに、ランタが長剣ロングソードを振り回しながら突撃する。目が回るような連係攻撃だ。

流石のオークBも情報処理能力が限界に達し、余裕がなくなってくる。焦って、振り回すガハリイの精度が下がっている。無駄振りをすればするほど体力も減っていく。

——それそろ俺等も参加して大丈夫かな……？

カズヒコがバスタードソードを握りしめ、参戦意欲を出そうとすると、別の場所に動きがあった。

「どうもーっ……！」

不思議な掛け声と鈍い音がして、モグゾーの大剣がオークAの身体を捉えた。肩口に極きまる憤怒レイジブローの一撃。

憤怒レイジブローの一撃の衝撃でオークAの巨体が踉蹌よろよろめいている。巨体と言っても、オークとしては並の大きさだろう。鎖骨が折れてしまったのか左腕がだりとして上がらない。勝利は目の前だ。

オークAの窮きゆうじょう状を見てオークBは狼狽ろうばいし始めた。一転、さつきまで五月蠅うるさく攻め立てていたランタがいつの間にか残像だけを残して離れる。

その様子をゴブリンスレイヤーのリーダー、ハルヒリオンは見逃さなかった。

オークBの後ろから無音に近い足音で近付くと、柔らかい果実に刃物を入れるように何の抵抗もなくダガーを突き立てる。

「すん……」

チヨコがハルヒリオンの動きを見て眩く。その耳に届いていたらきつと嬉しかったことだろう。その声はオークBの叫び声で掻き消される。

「ガアアアアフシユルツシユー！」

ガハリイを振り回してハルヒリオンを追い払おうとするオークB。ハルヒリオンは素早くその場を跳び去った。

その隙を突いて、ユメが剣鉈をオークBに全力で叩き付ける。全身のバネを完全に使って全く反撃など意に介さない攻撃だ。それを2発、3発と繰り返す。鱗スケイルメイルの鱗が何枚か飛び散った。流血はしていないが、流石のオークBもその衝撃に蹠踉よろめく。

——あの女の子、なんて勇氣……と力があるんだ……。

憎悪斬オオオ……ツ！」

オークの間合いの倍近く遠くから飛び込むように袈裟斬りの格好でランタが突っ込んでくる。オークBは体勢が不安定で避けることができない。

ランタの長剣ロングソードはオークBの肩口に当たる。次の瞬間、くるつと方向転換。ランタは手首を捻り、長剣ロングソードをオークBの鎧の上で滑らせた。

滑った先にあるのはオークBの兜。その兜の顎紐を裁ち切る。幸運にも剣先がひっかかったのか、そのまま長剣が兜を引っかけ、腕がせてしまう。

「チャラーン……！」

空中で振り向き様にランタはオークBの生身の後頭部を長剣で斬りつけた。これが決定打となった。オークBの動きが止まる。

その後は意識が混濁し、動きの緩慢になったオークBの頭部をランタの長剣が繰り返し襲い続けた。

オークBが膝を着き、倒れても、ランタは手を休めること無く斬撃を加え続けていく。オークBの頭部は、頭蓋骨が割れ、脳は飛び出し、形の半分程が失われつつあった。既に飽きた単純作業のように、同じ律動で斬り続けている。

「どうもーっ……！」

不思議な掛け声とドスンという鈍い音がして、オークAが地に伏した。すかさずモグゾーが止めを刺す。オークAの頭が兜ごと吹き飛んだ。

それを横目で確認してから、ランタはオークBを切り刻む作業を止めた。

「くつくつく……！」

ランタは血塗れの長剣を空に一直線に掲げた。そこら中にオークBの肉片と血飛沫が飛び散っている。

顔の见えない黒ずんだバシネットを被り、返り血に染まったランタは、暗黒騎士の名に相応しい見た目をしていた。ある種の残酷な三流絵画のようでもある。

「悪徳ツッ！ ゲエーツツ……！ ついでに、童貞卒業……！ おめでとう、俺……！」

ランタは周囲に投げけるように何度も投げキッスをした。

「やたつ！ ユメ達、ちよつとすごいやん!？」

ユメが底抜けに明るい声で喜んだ。両手を挙げて、何度も飛び跳ねている。

「ガハハハハッ、おまえはちつぱいだけに、跳びはねても一向に揺れねーなあ」

ランタが面防フェイスを上げて、ユメの胸を眺めながら言うと、すかさずユメがランタの頭を叩いた。

「あいだつ。グーで殴るんじゃねえ！」

「殴られるようなことゆうからやろつ」

ランタはオークの血と脳漿のうしように塗れたまま、いつまでもユメとちつぱいについて言い合まみいをしていた。血とちつぱいと暗黒騎士。

——なんというか、すごい世界観だな……。

「……すげ」

カズヒコは思わず口から思っていることが零れてしまった。

「流石、先輩ばいせん。へへへ」

ミッツは相変わらずヘラヘラしている。

「た、助かった……」

心の底から安心したように座り込むタイチ。

「へえ……」

ノツコは溜め息を吐いて、メイジスタッフに縋り付く。

チヨコはその大きな目で、ハルヒリオンの方を見ていた。口を少し開き、驚きと何か言いたそうな表情だ。

一方、見られているハルヒリオンもその眠たそうな目でチヨコを見詰めていた。少し照れているのかもしれないが、目に表情がないので真相はわからない。

ゴブリンスレイヤーの面々は、それぞれにオーク初討伐の余韻に浸っていた。

「まあ、みんなそこらじゅうでオーク倒しまくってるけどね」

クザクがその喜びに水を差す。

——あちやー。良くやるなー。

カズヒコは右手で顔を覆った。

「オイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

ランタは血塗れの長剣の先端をクザクに向けた。飛び散った血飛沫で地面に破線が描かれる。

「お前なあ！ 人が誇らしい気持ちになつてゐる時に、水を差すんじゃないよ！ 水掛けおじさんかっ！」

「……そこまで歳いつてねーし。てか、何者？ 水掛けおじさんつて」

「んなこと俺が知るかあつ！」

「あんたが言つたんじゃん」

「うっせつ！ うっせんだよ！ ちよつと背がでけーからつて……！」

ランタとクザクの険悪な雰囲気<sup>キバツキ</sup>が激化し始めた時、ハルヒリオンが止めに入る。

「ランタ！ もういい！ それより、行かないと！ 梯子係……！」

そう言うと、ハルヒリオンは梯子と荷物を置いてある場所に走り始めた。

——本当だ！ 急がないと！ ハルヒリオンは冷静で周りのよく見えるリーダーだな。少年とは思えない……。

カズヒコが防壁の方を見る。煙も落ち着き、視界は良好だ。他の義勇兵の多くが防壁の傍まで迫つてゐた。既に防壁の真下へ取り付いてゐる義勇兵もいそうだった。

「うわ……手招きしてゐる義勇兵もいるよ。怒られそー」

チョココがよく見える目で解説してくれる。

「俺達も急ごう！ みんな、梯子を持って走ろう！」

カズヒコパーティ小隊も慌てて、ゴブリンスレイヤーの後を追つかける。

防壁に向かって走りながら、カズヒコは併走するクザクに話しかけた。

「クザク……ゴブリンスレイヤーには助けられたんだ、もう少し仲良くしてくれよ」

「……わらい。……ちよつと」

クザクはカズヒコの方を向きもせず、そのまま黙ってしまった。

——ちよつと何だったんだらう？ ……こういう時、グンゾウさんがいると結構納得

できる答えを言ってくれたりするんだけどな。

悩んでも答えが出ないので、カズヒコは考えるのを止め、黙って防壁を目指した。



## 13. ゲツドヘッド監視砦編③ 戦場の風（下）

※本話は全て「カズヒコ」主観で描かれています。

雨のように降り注ぐ矢。

防壁に取り付いた先輩義勇兵達の怒鳴る声がする。

「おらっ！ 遅えぞお前等、早く梯子掛けろっ！」

「俺等を殺す気かっ！ さっさと梯子持つてこいっ！」

盾に次々と矢が突き刺さる中、カズヒコとミッツは必死で梯子を運んだ。

少し離れた場所にはクザクとタイチが梯子を運んでいる。

チヨコやノツコは盾で身を守るので精一杯だ。

「くそーつと、お前等来てやれっつんだ、へへ」

ミッツはヘラヘラとしている。相変わらず、怒っているのか、笑っているのかわからない。

必死の思いで防壁下まで辿り着く。

周囲の義勇兵達に引ったくられるように、梯子を奪われる。

5メートルの梯子が4メートルの防壁に取り付けられた。殆ど直角の急角度だ。

ゴブリンスレイヤー達の梯子もかかったのか、防壁の東側全体から鬨とぎの聲が聞こえる。

防壁上のオーク達は当然梯子を外そうと梯子を蹴つ飛ばしたりする。そのため、梯子係のカズヒコやミッツは倒れないように梯子の脚をしつかりと抱きかかえなければならなかった。

鳴り響く爆音。

「うくっ！」

「ひゃあーっ!! へへへーい！」

熱風がカズヒコとミッツの頭上から降り注ぐ。防壁の上で、登ってくる義勇兵を待ち構えるために群がっていたオーク達を、どこかの義勇兵がアルヴマジック炎熱魔法の爆発で吹き飛ばしたようだ。効率よくオーク達を葬ほうむった。

黒焦げになったオークの残骸が、いくつか梯子の足下にも落ちてくる。降り注ぐ矢の勢いが少し収まった。

「待ちなさい、レンジ！ そんなに急ぐ必要は……！」

いつの間にかカズヒコ達の近くにいたブリトニーが叫ぶ。

ゴブリンスレイヤーが掛けた梯子を、チーム・レンジのリーダーであるレンジが登り

始めたらしい。防壁の上は少なくとも2、30匹のオーク達が待ち受けている。とてもない度胸だ。蛮勇と言っても過言ではない。

次の瞬間、戦場の空気が揺れる。そして大地が震えた。ここではないどこかからもの凄いい怒号が聞こえる。オーク達の叫びだ。南側正門方向からだとわかる。

——正門の本体が動き始めたのだろうか？

「まずは東側防壁を制圧するわよ……！」

南側防壁の異変と、レンジの暴走が制御できないブリトニーは、義勇兵達を動かすことに決める。

「防壁の上に拠点を作るのよっ！」

目の前の梯子を左手で掴むと、甲冑を着ていないかのように身軽に登っていった。梯子を登る際に、右手で舐めるようにカズヒコのお尻を触っていたところまで抜け目が無い。

——鳥肌が出来た……。

カズヒコは冷静を保ちながら、義勇兵が登る度に軋きしむ梯子を支え続けた。

しばらくすると、周囲に義勇兵がいなくなつた。

防壁上では近接戦が開始されているのか、矢の勢いも極端に衰えている。ほぼ飛んでこない。

「俺達も登る?」

カズヒコが声をかけると小隊の仲間も頷いた。

「よしっ! 登ろうっ!」

カズヒコを先頭に梯子を登り始める。クザクとタイチは別の梯子から登り始めた。

カズヒコ達が防壁の上になると、多少の小競り合いを除けば、戦闘は既に終結しつつあった。

義勇兵達の圧勝だ。周囲にオークは居ない。

現在の主戦場は防壁の北東角に近い場所にある階段に移っていた。

そこは防壁から監視砦中庭の1階に降りる階段で、中庭に降りると監視砦の屋上から建屋に侵入されてしまうため、オーク達も必死の防衛をしている。

その防衛戦の先頭で剣を振るい続けているのが、甲冑の上に紅い陣羽織を羽織った戦士。チーム・レンジのリーダー、レンジだ。

レンジの剣は早く、動きに無駄が無い。

剣先が動いたと思った瞬間には、敵の体は斬られている。しかも、剣の返しが早いので、敵が攻める隙も少ない。

——信じられない位、洗練された剣捌きだ。血の滲むような努力をしてきたのだろ

う。

また、強いのは剣術だけではない。攻撃の種類が多様なのだ。剣だけ防いだとしても、足下から下蹴りが飛んできたり、さつきは一匹のオークが腕を取られ、腰投げで階下へ投げ飛ばされていた。剣術を中心とした格闘技だ。

「いけえ……！」

ゴブリンスレイヤーのランタが叫ぶ。

レンジがオークを一匹斬り倒して、もう一匹を蹴落とした。

「突入よ……！」

敵の前線が乱れてきたところで、ブリトニーが声を上げた。

チーム・レンジが中心となって階下で横陣を築いたオーク達と押し合いになる。

「押せやあ……！」

チーム・レンジのもう一人の戦士、ロンが叫ぶと、それに呼応するように他の義勇兵達がレンジとロンの背中を押し始めた。

重力の勝利なのか、階上から押ししている義勇兵達の力が体格で上回るオーク達を押し切り、オーク達が将棋倒しになる。

——グンゾウさんが高所をpushさえろって言ったのはこういうことかな？

将棋倒しになったオーク達の上を、レンジやロンが止めを刺しながら踏み越えていっ

た。他の義勇兵達もここぞとばかりに倒れているオーク達に襲いかかっている。あまり心地よい風景ではない。

「へへへ、やべえ。何もすることがない……」

「ああ、そうだな……。俺等は1匹もオークを倒すことなく帰ることになるかも……」  
防壁上から階下の戦鬪を眺めていたミッツとクザクが妙に息を合わせていた。

——それはあまり格好が良くないな……。せめて1匹くらいは……。

「2人とも、盾役なんだから、ちゃんと働いたら？ 大体、ミッツなんて……」

チヨコが尖らせた口で、ミッツに働き振りに突っ込みを入れようとする。

「あまり突っ込みすぎないで……！」

近くからブリトニーの通る声。それに驚くチヨコ。

「えっ?! ごめんなさいっ……！」

「本体が正門を破ってないわ……！」

ブリトニーは防壁の上から他の義勇兵達に言っていたのだが、チヨコがそれに反応してしまっただけだった。

声を張り上げているブリトニーに監視塔から矢が飛んでくる。

ブリトニーは矢に一瞥をすることもなく、剣で打ち払った。

——紅<sup>べにしろい</sup>鎧もやってたけど、あれはどういう技術なんだろうか……？

「あたしじゃなかったのか……。でもいいや。言う気もなくなっちゃったし」  
「え?! チョココ、何? 何なの? へへへ、大体、俺がどうしたの? へへ?」

チョコに何かを言いかけられたミッツは、それを止められたのが気持ち悪いらしい。何を言われそうだったのか聞き出そうとして、チョコを追いかけている。逃げるチョコ。

——まあ、聞き出せても……。幸せにはならないよ。諦めろ、ミッツ。

カズヒコも後々面倒になりそうだったので、思いを口にするのはぐつと控えた。

監視塔から時折降り注ぐ矢で義勇兵達が怪我をし始めたので、皆、死んだオーク達から盾を奪い始めた。

——やつてゐることは完全に強盗だな……。

カズヒコは比較的血に染まっていない綺麗な盾を探して、頭上に構えた。

3本の監視塔を持つ監視砦へは、長い外階段を上って屋上から入る必要がある。

現在の主戦場はその外階段だった。監視砦から次々とオーク達が湧き出てくるため、レンジ達を含む前線の義勇兵達も苦戦している。

監視砦の造りは意外と狭い。

100人近い義勇兵が防壁から中庭への階段、中庭、中庭から監視砦の屋上へ続く外

階段へ移動しようとする大渋滞だ。統制が取れていないため、全員が適当に前に進むために、真ん中の辺りの義勇兵達は前後から潰されて身動きが取れなくなっている。

カズヒコ達は義勇兵団の最後尾にいたため、まだ防壁から降りる階段にいた。

——行軍が酷いな……。

長く伸びた義勇兵の列を見ながら、カズヒコはグンゾウの言葉を思い出していた。

「行軍中に身動きが取れない位置取りはしてはいけないよ。攻めるにしても、退くにしても、陣立てを変えるにしても、素早く動けるってことが大事だからね。長く伸びて、動きの悪くなった集団の横っ腹を攻められて、前後に分断されたりするのも最悪だ。戦力は半分以下になると思っただけで間違いはない。後ろは散開して逃げちやうだろうし、前は挟み撃ちされるからね」

「いい調子よ！ 押しあつてれば、その内味方がくるわ……！」

ブリトニーの声でカズヒコは追憶から目覚める。

階段の上から見ていると、裏門のある北側防壁の方からオーク達の一団がやってきた。ぱつと見で数は20匹程度。

「まずい！ レンジ達が挟み撃ちにされる……！」

ゴブリンスレイヤーのハルヒリオンが声を上げる。カズヒコが見ると、興奮した声とは裏腹に今にも眠りそうなお爺ちゃん猫みたいな目をしている。



——あれが通常なのかな……？ 鋭い観察眼だが、見た目はほとんど寝ている。  
「手が空いている者は、反対側の敵を防いで……！」

ブリトニーが慌てて指示をすると、いくつかの小隊パーティが階段から北側に飛び降りた。階段にいる義勇兵達はまだ身動きが取れる。

しかし、中庭にいる義勇兵達は押し合いへ押し合いで身動きが取れなくなっていた。

——やばいな……、あんな身動きの取れない中軍をオーク達に横から攻め立てられたら全滅の憂き目に遭ってしまう。身動きの取れる俺達でなんとかしないと。

「みんなっ！ このままだと緑嵐隊リョウラン全体が危ない。混乱している中庭の義勇兵達を守るために、俺達も降りよう……。無理はせずに、迎撃している義勇兵達を抜けてきたのだけ叩くんだ」

カズヒコは全員の顔を見渡す。全員が神妙な顔で頷く。

「へへへいっ！」

ミッツだけが緊張のあまり、敬礼の姿勢で固まっていた。

——大丈夫か……？

カズヒコが悩んでいる間にもカズヒコパーティ小隊の側にいた義勇兵達はどんどんと新手のオーク達を防ぐために階段から飛び降りていった。残っているのはゴブリンスレイヤー達だけだ。

「俺達もやるぞ……！」

カズヒコは階段から下に飛び降りる。それを追ってクザク、ミッツ、タイチが飛び降り、チヨコやノツコも後に続く。カズヒコが確認のために振り返ると、ゴブリンスレイヤー達も階段を飛び降りようとしていた。

北側から駆け付けてきたオーク達は疾風のような攻めを見せた。

本丸である監視砦を守るために、命を省みず突撃してくる。監視砦を落とされれば、そもそも命は無い。オーク達の士気は極めて高かった。監視砦を落とされれば、

迎撃に向かった義勇兵の何人かがあつという間に倒され、オーク達は前線を抜けてくる。

前線を抜けた3匹のオーク達がカズヒコパーティ小隊に向かってくる。

——まずいっ！ 結構多いぞ。固まって1匹ずつ相手にしないと……。残りはゴブリンスレイヤー達に任せよう。

「クザクっ！ ミッツっ！」

カズヒコが声をかけ、壁際にいる1匹のオークを指差すと、クザクとミッツは頷く。そして、それぞれが壁際にいるオーク以外の1匹ずつに向かつて行ってしまった。「俺はあれをやるから、他のを頼む」という意味に取られたようだ。

「ああ……違つ……！」

カズヒコが訂正しようとするのも空しく、それぞれ目の前のオークと斬り結び始める。カズヒコの目の前にも残りの一匹が来てしまったので、仕方なく相對する。

——まずい、まずいぞ……っ！

眼前のオークの強さを評価すれば、並だった。エルダーコボルドと大差無い。普段のカズヒコであれば普通に対応できる水準だが、クザクとミツツのことが気に掛かり、目の前のオークに集中できないでいた。

クザクがオークの威圧に押され、少しずつ防壁の方に追いやられている。背の高さではオークに勝っているが、完全にびびっている。

「へへへーいっ！」

ミツツは斬り結んだオークに圧倒され、びびって尻餅を衝いてしまった。悪い癖がまた出ている。オークが止めを刺すためにじりじりと近寄る。

振り下ろしたガハリイがミツツに届く前に、タイチがショートスタッフで防いだ。<sup>ヒットバック</sup>突き返して反撃しようと体を柔らかくしていたのかもしれないが、力負けし、くるくると回転してから、ぽてつと倒れた。

その間にミツツは立ち上がることができる。

新手的オークが現れて、チョコとノッコを狙っている。

「逃げるんだっ！」

カズヒコは叫んだが、チヨコとノツコは抱き合って身を竦めていた。

——不味いっ！ 不味いっ！ 女子がやられるっ！

焦れば焦る程、カズヒコの剣は乱れていった。自身の戦いすら危うい。

チヨコとノツクを襲おうとするオーク。

そのオークの頭に何か黒い影のような物体が当たった。その影はぐしやりと潰れると、オークの鼻や口の中から体内に入り込んだ。

——……?!

次の瞬間、オークは突然ほかんとした。そして、両手をだらんとさせて、無防備な格好になった。

「うおらああああああっ！ 憤慨突アア……！」

そこに壊れた暗黒騎士ランタが飛び込んできて、オークの喉元に深く長剣を突き立てる。倒れるオークと共に着地すると、オークの喉元を抉るようにもう一回掻き斬った。

露わになったオークの気道。血の混じった泡が「こぶっ」という音を立てた。

オークの頸動脈から吹き出る血飛沫が噴水のように飛び散る。面防を上げ、死んだオークを見下ろすランタ。顔や鎧が血に染まっていった。

「悪徳<sup>ヴァイス</sup>ゲーッツ！ やべえ、俺様、今サイコーに暗黒騎士っぽくね？」

ランタはニヤリと不敵な笑みを浮かべると、すぐにミッツとタイチが苦戦をしているオークに向かつて、地面を滑るように移動して行った。

同じ頃、防壁際まで追い込まれていたクザクはなんとかオークの斬撃を防いでいた。背丈では勝っているが、体格で負けているため、防戦一方だ。

「くそっ！ 本当にリョータみたいだ……」

小さな声でぼやきながら、なんとか命を繋ぐ。

そこへ突然の転機が訪れる。

クザクが相対していたオークの背中に男の子が組み付き、オークの首元にダガーを突き立てた。あまりの速さにクザクは男の子が何をしたのか正確に把握することができなかった。男の子はハルヒリオンだ。

武器と盾を取り落とし、喉元を抑えて蹠<sup>よろ</sup>蹠<sup>ろ</sup>めくオーク。

クザクは長<sup>ロングソード</sup>剣を振り上げると、最上段から全力でオークを振り下ろした。オークはその威力に耐えきれず、地面に伏す。

クザクは手を休めることなく、オークが身動きひとつしなくなるまで、長<sup>ロングソード</sup>剣を振り下ろし続けた。

「……………ど、どもっす」

息を切らせて礼を言うクザクを無視するように、眠たそうな目でハルヒリオンは周囲を観察していた。

チヨコが新手のオークに狙われている。

「チヨコ、後ろ……！」

「っ……！」

ハルヒリオンの警告で、チヨコは間一髪オークの斬撃を横つ跳びで逃れる。

「ガツシユワルル……！」

邪魔をされ、腹を立てたオークとハルヒリオンが戦い始める。

——良かった……！

仲間の様子を見ていたカズヒコは、ほつと胸をなで下ろし、ようやく目の前にいるオークに集中できるようになる。

「全員で一匹の相手をするんだっ！」

——最初から言っておけば良かった……。

カズヒコがそう言うと、チヨコ以外の全員がカズヒコの方に向かってきた。

ミッツとタイチが戦っていたオークは、現在はランタの獲物になっている。

チヨコはまだゴブリンスレイヤー達と一緒に居たが、ハルヒリオンが気にかけているので、安全と思われた。

——さて、そろそろ並ばせてもらうぜ、リョータ。俺も童貞卒業だつ！

カズヒコはオークのガハリイを左に躲かわすと、得意の陽炎ヘイスでオークの逆胴なを薙ないだ。

中庭の渋滞が解消されるにつれ、中庭裏門側の攻防は段々と安定してくる。一進一退の戦いながら、当初のオーク達の勢いは無くなっていく。

カズヒコ達も全員で一致団結することで、なんとか無事に生き延びていた。

今は、全員階段の陰に隠れて体力を回復している。

「なんていうか……、ゴブリンスレイヤーって強いんだな……」

血に染まった顔を拭きながら、クザクがカズヒコに呟く。心から感心している様子だ。

「そうだな……。流石、先輩達という感じだよ。リーダーのハルヒリオンには、チョコもだいぶ助けて貰ったみたいだし」

カズヒコがチョコに視線を遣ると、チョコはもの凄く不思議そうな顔をした。

「ハルヒリオン？ ……誰？」

「え？ いや、リーダーだよ。ゴブリンスレイヤーの……」

「え？ ヒロのこと？ ヒロの名前は『ハルヒロ』だよ？」

「えっ……？」

「『ハルヒリオン』って……、カズヒコうける……あはははは」

チヨコがけらけらと笑っている。

——そうだったのか……じゃあ、あのランタが言っていた『ハルヒリオン』はあだ名か……。

「チヨココオオオ……なんだよ、ヒロって誰なんだよ？ そんなに親しいのか？」

ミッツが嫉妬200%の様子で会話に割り込んできたが、チヨコは完全に無視をしてノツコと『ヒロ』の話をしていた。

「うおおおい、無視かい、へへへっ！」

むしろ無視も既に快感に変わりつつあるのか、ミッツは笑顔だ。カズヒコは人間の適応力を感じた。

「そろそろ、行こうか。また、押され始めている。あの端っこの小隊パーティが戦っている一匹を剥がして戦おう」

カズヒコが促すと、全員の顔に緊張感が戻る。

次の瞬間、晴天の空を斬り裂く、けたたましい雄叫びが響き渡る。

「イリイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
……！」

オークではなく、完全に人間の声だ。それも女性の。



「きた……！」

ブリトニーが防壁の上で跳びはねて喜んでいる。両腕は体の前で組まれている。

——所作しよさが気持ち悪い……。

北側のオーク達が雄叫びに動揺し、動きが鈍る。

「きたわよ！ 増援が……！ 荒鷲隊……！ 愛してるわ、カジコ……！」

オーク隊の後方からワイルドエンジェルズ荒野天使隊を中心としたあらわし荒鷲隊が現れた。オーク達の後方から悲鳴のような声上がる。

——リホ……っ！

カズヒコの心臓の鼓動が少しだけ早くなった。

そこからの戦いは一方的な流れになった。

オーク達の裏門部隊は、りよくらん緑嵐隊の迎撃組とあらわし荒鷲隊に挟撃され、瞬く間に命を狩り獲られた。士気が限界まで下がり、逃げだそうとするオークまで出た。

数分の内に、20匹以上のオーク達が物言わぬ骸と化す。

ワイルドエンジェルズ荒野天使隊の活躍は凄まじく、カズヒコ達はただ見ているだけであった。ひとたび一度クランマスターのカジコが指示をすれば、統制の取れた攻撃で巨躯のオークが弾け跳ぶように消えた。

「ブリトニー！ 正門は!？」

豪華な美しさを持つカジコが威圧感のある声でブリトニーに訊く。防壁の上で全体を見渡していたブリトニーは首を横に振った。

「ダメね！ 破れてないみたい！ こつちからは見えないけど苦戦しているようだよ！」

「だったら、私達で陥<sup>お</sup>としてしまえばいい！」

そういうとカジコは両腕を広げて、演説を始めた。

「聞きなさい、義勇兵達！ 辺境軍は、砦守<sup>キパー</sup>ゾラン・ゼツシュに金貨100枚！ そして、今まで何人もの兵士や義勇兵をその呪術で殺<sup>あや</sup>めてきた呪術師アバエルの首にも、金貨50枚の賞金をかけている！」

「100枚……！」「金貨100枚……だと……！」「ざわ……ざわ……！」「100ゴールドと50ゴールド?」「まじか……」「すげえな……!！」

どよめく義勇兵達。下がり始めていた士気に熱が入る。義勇兵達の目に欲望の光が宿った。

——とはいえ……それは危険な欲望だな……。

既に収集済みの情報だったカズヒコは冷静に受け止めていた。

丁度その時、監視砦から矢が降り注ぎ何人かの義勇兵に当たる。

「いでででで、へへへ、でででで……タイチー治してくれえー」

ミッツの肩、その甲冑の隙間に偶然矢が刺さり、五月蠅うるさい。慌ててタイチが治療を始める。

カズヒコ達はそこら中に落ちているオーク達の盾を拾って、上に構えた。

「うおらああああああああああああああああ……」

と、聞き覚えのある声が響き渡った。それはチーム・レンジの戦士ロンだ。

監視砦の外階段の攻防を制し、遂に敵の守りを突破したのだった。

「砦に入るぞ……こらあ……俺等が一番乗りだ……」

ロンが勝ち名乗りを上げると、義勇兵達は一斉の監視砦の中に一筋の濁流となって流れ込んだ。監視砦からは次々と矢が降り注いだ。だが、全員気に掛けることもなく監視砦の屋上から階下に雪崩れ込んでいった。

「アタシは一度、正門のほうに……本体を見てくるわ！ カジコ、頼むわよ……」

ブリトニーが軽やかな跳躍で戦列を離れると、監視砦の屋上を正門の方に向かった。

——え？ 指揮官が隊を離れちゃうのか？

カズヒコが戸惑っている間も、カジコとブリトニーの間で会話が進む。

「ブリトニー、あんたが帰ってくる頃には終わってる……」

「煽あおらないで抑えを利かせないよ……子どもじゃないんだから……」

「役立たずの正規軍に言え……！ 賞金は私がいただく……！」

「もう……！ 無茶するんじゃないわよ……！」

適当な引き継ぎが終わり、義勇兵達の指揮官はブリトニーからカジコに変わった。ブリトニーと違いカジコはイケイケだ。義勇兵達を駆り立てると、砦の中を3階から2階、2階から1階へと押し込むように雪崩れ込んだ。

先頭集団においては砦内にいたオーク達と小競り合いがあつたようだが、後方にいたカズヒコ達にはさっぱりわからなかつた。監視砦の1階まで降りていく中で、オーク達や義勇兵達の死体を踏み越えるくらいだ。

遂に監視砦の1階に到着する。

監視砦の1階は2階分くらいが吹き抜けになつた、天井の高い広場になつていた。

部屋の四隅に階段が有り、義勇兵達が降りてきた屋上へ続く階段は1階の東南角にあつた。残りの3つの階段は監視塔へ続く階段と思われた。

部屋の壁には扉も4つ有り、全て開け放たれ、搜索済みといった感じだ。

「さて、当たりはどこかしら」

ワイルドエンジェルズ

カジコら荒野天使隊は北西角の監視塔を攻めるために準備をしている。チーム・レンジは南西角の監視塔を選んだ。その他の義勇兵達の多くは北東角の監視塔に向かおうとしている。強豪の荒野天使隊やチーム・レンジとの競り合いを避けた形だ。

もちろん、ワイルドエンジェルズ荒野天使隊やチーム・レンジの尻馬に乗ろうとする小隊パーティーもいた。ゴブリンスレイヤーは同期であるチーム・レンジと行動を共にする決断をしている。

「俺達は……どうする？」

カズヒコが小隊パーティーの仲間を振り返ると、全員疲労困憊ひろつじんばいという顔をしていた。チヨコは首を横に振っている。

——止めとくか……。無理をする必要はない。オークは狩ったし……。このまま無事に帰ればーゴールドは手に入るわけだし。これ以上の危険を冒す利点はないか……。

「余計なお世話だろうけどさ、君等は無理しない方が良いよー」

カズヒコが判断を言葉にしようとした時、ゴブリンスレイヤーのリーダー、ハルヒリオン改めハルヒコが話しかけてきた。チヨコを心配そうに見つめる。

突然で不躰ぶしつけな提案だったが、これが決め手となった。

散々命を助けてもらったゴブリンスレイヤーに逆らう気も起きず、カズヒコパーティー小隊は1階に残って待機すること決めた。

「あ、光プロテクションの護法が切れているからかけるね……」

タイチが光プロテクションの護法を唱えると、カズヒコ達の左手首に青白い六芒の光ともが灯る。体がふわっと軽くなるのを感じる。

「……………くん。……………カズ君……………」

——あれ？ 呼ばれている？

カズヒコは誰かに小声で呼ばれている気がした。周囲を振り返ると、少し離れたところでリホが手招きして呼んでいた。

カズヒコの胸が安堵で熱くなる。自然と駆け寄る足。

「リホ……良かった……。無事だったんだね……」

カズヒコの目の前には、扁桃型の大きな二重の目。そして大きな胸。

「うん。荒野ワイルドエンジェルズ天使隊は全然大丈夫だったよ。他の義勇兵達には少し被害が出たみたいだけれど……」

リホは少し悲しそうな顔をした。

「リホが無事で良かった……。」

「うん、私も。カズ君に会えて嬉しい……。私は北西の階段を攻めるみたいんだけど、カズ君はどうするの？」

「ああ……うーん、小隊パーティの仲間がもう危険を冒す気がないみたいで……ここで休んでるよ」

——格好悪いな……。

カズヒコは好きな女の子の前で格好付けられない決まりの悪さを感じていた。

「そっか……。危ないから、いいんじゃない？ それより弱い仲間を守ってあげてね。」

私からお守りをあげる」

リホは祝詞を唱える。カズヒコの左手首に光の護法プロテクションとは色違いの六芒の光ともが灯る。カズヒコは体がさらに軽くなるのを感じた。装着した甲冑が布の服のようだ。

「これは……?」

「守人アシストの光。カズ君を守る私の愛情だよ」

そう言うとりホはカズヒコの頬に口づけした。

「リホっ！ 行くよ——!!」

背が高い赤髪の女戦士が遠くからリホを呼んでいた。少し怒っているような声だ。

リホは笑顔でぺろつと舌を出すと後退あしずきした。

「もう行かなきゃっ！ また後でね。浮気しちゃダメだよ……」

そうして手を小さく振りながら、リホは北西の階段に小走りで向かっていった。

「ああ……」

カズヒコは気の利いた言葉をかけることもできず、呆然とりホに手を振って送り出した。

概ね30〜40人ずつの義勇兵達が3本の監視塔に別れて上っていった。10数分程経ったが、監視塔に上っていった義勇兵達が戻る気配は無い。

監視砦の1階には40人強の義勇兵達が残っていた。中には負傷者を抱え、治療をしている小隊パーティもいる。人数が少ないので、脱落して監視砦まで来られなかった義勇兵達もいるのだろう。

カズヒコ小隊パーティは疲れもあり、休憩していた。早朝から動きつばなしだ。色々なことがあった。恐らくそろそろ正午に近い時間だろう。

クザクとミッツは地面に座って、何やら話をしている。チョコはクザクの陰に隠れ、膝を抱えて休んでいた。あの位置だとミッツからは見えない。安全地帯だ。

タイチとノツコはどこかに行ってしまった。傷付いた義勇兵の治療を手伝っているのかもしれない。

カズヒコは光プロテクションの護法アシストと守人の光が両方かかっている妙な高揚感で落ち着かず、座らずに立っていた。

——うーん、暇だな……。俺だけでも荒野ワイルドエンジェルズ天使隊の後ろに付いていけば良かったかな？

バスタードソードを石畳の隙間に突き刺し、それにもたれかかる。それくらいしかやることはない。

周囲を見渡すと、1階に残った厭戦気分の義勇兵達は皆、帰った後の報酬の使い道等を楽しそうに話し合っていた。敵地のど真ん中だが、完全に油断している。



——呑<sup>のん</sup>気なもんだな……。

ふと、鋭敏になったカズヒコの感覚が頬に風の気配を捉えた。さつきりホに口づけされた頬だ。

——あれ？ ……風？ ……どこから？

監視砦の1階に出入りできる窓は無く、天井近くにある明かり取り用の窓を覗けば外と繋がっている場所はない。

しかし、カズヒコは明確に風を感じていた。その風は、心地の良い風ではなく、戦場を漂う生臭い熱気にも似た、禍々しい気配だった。

束の間の安堵を楽しむ義勇兵達。そこへ黒い風が近付いてきていた。

## 14. デッドヘッド監視砦編④ カズヒコの最期

※途中まで「カズヒコ」主観で描かれています。

穏やかな日差しが射す義勇兵宿舎の中庭。

グンゾウは最近読んだ古書の内容について熱く語っていた。戦略や戦術に関する本だ。

カズヒコはその行動の裏にある本心を薄々感じていた。

——双頭の蛇作戦に参加させたくないんだだろうな……。

しかし、カズヒコの決意は固い。だから話を逸らす。

「一番、命の危険がある時機タイミンつていつですかね？」

興味本位でカズヒコは訊いてみる。

グンゾウは少し考えこんでから話し出す。

「うーん……簡単に命を落とす時。……やつぱり『油断』した時じゃないかな？ どんだけ安全に思っても戦地で油断すると命を落とすよね。そういう俺もダムローで油断して、もうちょっとでホブゴブリンに殺されかけたんだけどさ、ははは……。今思い出

しても笑えないや……。まして敵の策略に落ちている時に油断しているなんて、間違ひなく命を落とすよ。オルタナに戻るまでが戦争つてことかな。ちよつと違うか？ カズヒコも油断せずに、気を付けてね！」

「ええ、もちろんです……」

——その時は、理解しているつもりだった。

石畳の隙間に突き刺したバスタードソード。カズヒコはその腹を軽く蹴つ飛ばしていた。

その行為に意味など無い。ただ、暇だからそうしていた。

——やることないから暇だな……。

素振<sup>すぶ</sup>りなどして体を鍛えても良かったが、多少の疲れも有り、そんな気分にもなれなかった。

有力な義勇兵達が監視塔に攻め登った後は、砦の1階には戦う意欲の無い義勇兵達だけが残り、その持ち帰る戦果を期待して雑談をしているといった感じだった。

——リホがいつ戻ってくるか分からないから、女の子の知り合いを増やすわけにもいかないしな。

左手首に光る光プロテクションの護法とは色違いの少し緑がかった六芒を眺めた。カズヒコに守人の光をかけてくれたリホは、荒野ワイルドエンジェルズ天使隊の仲間と監視塔のひとつに登っていつてしまった。

ふと周りを見回すと、ぼーっと座っているクザクを中心として、チョコがしつこく追いかけてくるミツツから逃げ回っている。その内、バターになりそうだ。

——タイチとノツコの姿が見えないな？

カズヒコが一瞬警戒してタイチとノツコを探すと、ふたりは少し離れた所にいた。屋上から降りてきた階段の付近だ。

ノツコが何かをタイチに手渡して、タイチは照れくさそうにしている。微笑ましい風景。

——へえ、あの2人がね。……意外……でもないか。

カズヒコパーティ小隊が単独で行動するようになってから、戦況の見極めと判断はタイチが担っているし、チョコやノツコの護衛はタイチが護身法で頑張っている。そのような中で、ノツコが頼れる近くの男性に好意を抱いてもおかしくはなかった。ハイドには残念な結果かも知れないが。

邪魔をするのは野暮かと思つたが、戦場で小隊パーティがばらばらになっているのは良くないと思つたカズヒコは頃合いを見て、呼び戻すことにした。

——いつ、声をかけようかな？

タイチとノツコは楽しみに話している。

カズヒコはそれをぼーっと眺めていたが、次の瞬間、その視線は別のものへ奪われる。2人の後ろに黒い大きな影が複数姿を現わした。

その影は明らかに人間族のそれとは異なり、巨大で凶悪な姿をしていた。

——な……っ！

思うよりも早くカズヒコが大声で叫ぶ。

「タイチっ！ ノツコっ！ そこを離れるんだっ！！」

カズヒコの叫びに反応して、クザク、チヨコ、ミッツがカズヒコの視線の先を見つめる。そして、1階にいた多くの義勇兵達も突然の叫び声に反応していた。

視線の先にはオーク達。最初は2匹がいただけだったが、階段からどんどん湧いてくる。あつという間に10匹近いオーク達の群れになった。

タイチとノツコも突然の出来事に混乱して、動くことができない。

「早くっ！ 離れろっ！」

カズヒコの次の言葉が届くか、届かないかの刹那にオーク達が階段近くの義勇兵達に襲いかかる。

それは一瞬だった。

オークは上段に振り上げたガハリイをタイチに振り下ろす。全力の袈裟斬り。

そのガハリイはタイチの左肩口から体の奥深くまで斬り裂く。まさに、裂いたという言葉が当てはまるような強烈な一撃だった。ほぼ半分に裂かれたタイチの体がゆつくりと倒れる。

それを見ていたノツコの横顔が恐怖で引きつった。口元が震え、恐怖の叫びを上げた。いが、あまりの恐怖で声が出ない。

「……ああ……ああ……」

言葉にならず後退あしすさるノツコにもオーク達は襲いかかった。

複数のオーク達が一斉にノツコへ斬りかかり、戦闘技術を持たないノツコは一瞬にして刃の餌食となった。

茫然自失。

何も出来ないカズヒコ達は、ただ小隊パーティーの仲間が殺されていく様子を見ているだけだった。

空白の時間が数秒過ぎた後、義勇兵達が事態の把握をし始める。オークの伏兵が現れたのだ。

至る所で小隊パーティーが戦闘準備を始め、隊列を組み始める。

カズヒコ達は既に2人の仲間を失い、危機的状況だ。しかも神官を失うという致命的な失敗を犯している。

突然現れたオーク達は、タイチやノツコを含む階段周辺にいた義勇兵だけを片付けると、一斉に整列し始めた。

オーク達は全部で20匹以上いる。

整列が終わると、全員盾とガハリイを構えた。

——一体、何を始めるんだ……。

あまりの衝撃に、遠のく意識の中で、カズヒコはぼんやりと思った。

『オツシユシユシユシユ！ オツシユシユシユシユ！ オツシユシユシユシユ！ ゾラ  
ンツ!! オツシユシユシユシユシユ！ オツシユシユシユシユシユ！ オツシユシユシユシユ  
シユ！ オツシユシユシユシユシユ！ オツシユシユシユシユシユ！ オツシユシユシユシユシユ  
！ ゾランツ!!……』

鬨とぎの声と同時に打ち鳴らされるオーク達の盾。ガハリイで撃ち鳴らす即席の打楽器だ。

一斉に踏み鳴らす足は、地響きの音楽を奏でた。

その響きに呼応するように暗闇から巨軀のオークが一步、また一步と地面を踏みしめながら徐おもむろに姿を現わした。

2メートルは優にある体軀。通常のオークの3回は大きい。

毒々しい紅くれないよついかぶとの鎧よろい兜かぶとを身に纏まとい、兜から黒と金に染め分けられた長髪が垂れている。鎧の下には、弾けんばかりに盛り上がった筋肉が見え隠れしていた。

胸当に大書された黒い呪まじない文字が、そのオークは触アれてならンない者ンだと警告していた。その姿は正まに殺せ鬼き。そして死への恐怖。それは見る者の戦う意志を奪った。

『オツシユ！ オツシユ！ オツシユ！ ゾランツ！！ オツシユ！ オツシユ！ オツシユ！ オツシユ！ オツシユ！！……』

オーク達の掛け声が一層大きくなり、速くなる。周囲の温度がどんどん上昇していく。

熱を帯びるオーク達とは反対に、恐怖に凍り付く義勇兵達の心の温度は、どんどんと下がっていった。

「……シユフー……」

精神統一をするかのように、巨軀のオークが大きな息を吐く。吐いた息で白い渦巻きができる。

ゆつくりと、しかし、流れるような動作で両手を背に遣り、背負っていた湾刀を2本とも抜く。

鞘がカランカランと濁いた音を立てて落ちる。



片手に一本ずつ持った湾刀は通常に人間であれば両手で扱わなければならないくらい、肉厚の大刀だ。

巨軀のオークは地面に足を踏ん張り、湾刀を二本共頭上に突き上げる。湾刀に斬られ、その場の空間が歪んだ……ように、カズヒコには見えた。それ程の迫力だった。

そして、高い天井に目がけて大音量の唸り声。

「ウウウウオオオオオオオオオオオ、ツシユウウウウウウウウウウウウウウウ!!!」

大気が震え、その振動がびりびりと伝わる。敵味方の誰もが身震いした。唸り声の大きな響きに思わず耳を塞ぐ義勇兵。

『ゾラー……ン……ン……ン!!!』

周囲のオーク達も一斉に巨軀のオークを頌える雄叫びを上げた。

——あれが、ゾラン……ゾラン・ゼツシユ! 何なんだ……初心者でも大丈夫な兵団指令? 話が違いすぎる……。あのオーク、桁違いの化け物じゃないか。

悔やんでも悔やみきれない後悔がカズヒコを覆っていた。

しかし、それよりも何よりも恐ろしい。

恐怖が足下からカズヒコに襲いかかり、心臓を鷲掴みにされていた。

——……怖い。何なんだ、あれは。足が動かない。

目の前で、タイチとノツコを斬殺された怒りと悲しみは、恐怖で塗りつぶされていた。

ゾラン・ゼツシユは飛び跳ねるように近くの義勇兵に斬りかかると、その側近オーク達も周囲の義勇兵達に飛びかかっていった。ゾラン・ゼツシユに斬り付けられた義勇兵の戦士は、受け太刀をすることもなく、一瞬で頭と上半身が別れた。

被害は拡大していく。

——不味まずいっ……！ 一方的だ。逃げなくては……。でもどこへ?!

義勇兵が進んできた屋上からの階段はゾラン・ゼツシユの側近達が固めている。そこに飛び込むのは自殺行為だ。

——監視塔か?!

監視塔は当然昇るだけで逃げ道はない。しかし、監視塔には荒野ワイルドエンジエルス天使隊やチーム・レンジ等の強豪義勇兵がいる。合流できれば、この規格外の怪物達を何とかしてくれるかもしれない。一縷いちるの望みをかけて、カズヒコは腹を括くった。

「クザク、ミッツ、オーク達を端から回り込んで、どこでもいいから監視塔の中に逃げ込  
むんだっ！ チョコ！ 隠形ステルスで隠れて、俺等じゃなくても、誰でもいいから盾にして監  
視塔まで逃げ切るんだ。手練れの義勇兵達と合流しよう!!」

クザクとチョコは神妙な顔で頷く。

「いやだっ！ タイチとノツコをどうすんだよー！ へへへ、あいつ等まだ生きてるか

もしれないじゃないかつ！」

ミッツが泣きながら、カズヒコに食ってかかってきた。

2人が生きている。

そんなことは考えられなかった。

オーク達が階段から湧いてきた時、タイチは袈裟斬りで半分になり、ノッコは数回切り刻まれ、バラバラになっていた。

ミッツもそれは見ていたはずだ。

「俺は2人を助けに行く……へへへ、お前等は、勝手に逃げればいいじゃないか……へへ」

既にミッツは現実を正確に認識する理性を失っているのかも知れない。

ミッツは何かに取り憑かれたようにオーク達の方へゆつくりと歩き始めた。

——不味まずい。不味まずすぎる。こんなことで時間を取られている場合じゃ無い。

聞こえてくる義勇兵達の悲鳴。

監視岩の1階は、のんびりとした厭戦えんせんの雰囲気から阿鼻叫喚の地獄絵図と変わり果てていた。ゾラン・ゼツシユとその側近、そして呪術師が周囲の義勇兵に襲いかかり始めたのだ。

1階に残っていた義勇兵の数は、出現したオークよりも多かった。そのためまだ微妙

な均衡を保っている。しかし、あつという間にそれが崩れることが予想された。

新たに現れたオーク達は明らかに強い。

「クザクっ！ チョココを頼んだ！ 俺はミッツを連れて後を追う！」

「で、でも……」

チョココが不安そうな顔でカズヒコを見上げた。

「大丈夫……」

カズヒコはチョココの頭に手を置いた。その後、クザクの顔を見詰める。無言で頷くクザク。

「チョココ、行けるとこまで行くから、俺の後ろに隠れとけよ……」

クザクは兜の面防バイザーを下げながら言った。

「うん……」

チョココは震える両手でダガーを握りしめた。

カズヒコはミッツを追う。ミッツはタイチとノツコが殺されたあの場所、屋上への階段付近に向かっていた。しかし、その手前で複数のオーク達が殺した義勇兵の死体を乱暴に片付けていた。

吐き気をする光景。

バスタードソードを引き摺るように、ミッツはとぼとぼ歩いてそこに突っ込んでいく。追いつくカズヒコ。ミッツの肩に手を置いて言う。

「ミッツ……。辛いのは分かる。でも、もうタイチとノツコは戻らない。それより、監視塔に逃げて生き延びよう。チョコもお前を待ってるぞ。こんな所にいたら奴等に見つかる」

ミッツは立ち止まってから、ゆつくりとカズヒコに振り返る。

カズヒコは戦慄した。

ミッツの目には既に狂気が宿っていた。

「はへへへへへ？ 戻る？ 戻るって？ そうだあ、今からオルタナに戻ろう。あそこの階段を上れば、また防壁まで出られるよお、へへっ」

ミッツはカズヒコの手を振り払うと、ふらふらと死体を片付けるオーク達に近付いていく。

「馬鹿っ！ 見つか……っ！」

カズヒコが声をかけると同時に2匹のオークに見つかるミッツ。

「へへへ……もーかえろうよー」

明らかに狂気に支配されたミッツを見て、オーク達は退屈そうな顔をした。

ゆつくりと各々のガハリイを手に取ると、けだ気怠そうにそれらを振る始める。

「ミッツ……っ！ ああああああっ!!」

あつという間に斬り倒されるミッツ。悲鳴を上げる暇もなかった。

振り下ろされるガハリイの回数が10回を数える頃、完全にミッツはバラバラの肉塊へと化していた。

カズヒコは、ミッツが狂気の中で殺される恐怖を感じる事がなかったと信じたかった。

——ただ……。何も……。何も……。できなかつた。

カズヒコは後悔の念で押しつぶされそうになる。

——俺が……。俺の誤った選択がミッツをおかしくした……。

頭を抱えるカズヒコ。

1匹のオークがカズヒコの存在にも気付き、新たな獲物を屠ほふろうと近付いてくる。ミッツを殺したオークだ。ニタニタと下卑た笑顔を浮かべている。

「グルッフシュツシュー」

オークが声を出して、初めて気付く。オークはガハリイを構え、カズヒコをその間に捉えていた。

——しまったっ！ 逃げなくてはっ！

カズヒコは焦る。

次の瞬間、オークのガハリイが唸りを上げて襲いかかってきた。

——何故?! 何でこんな事になってるんだっ!

カズヒコはそんな疑問を心の中で繰り返しながら、眼前の敵と斬り結んでいた。目の前にいるオークは今まで見た中で最も体格が優れ、剣技も長けていた。

——今は余計なことを考えている暇はない! どうやって目の前の敵を倒すかだけを考えるんだっ!

カズヒコは気持ちを切り替え、持てる全ての力を出し切ることに集中した。

激しく入れ替わる立ち位置<sup>ホジション</sup>。

オークの素早い横薙ぎを躲<sup>かわ</sup>すために、一歩下がる。

何かが足に当たった。

カズヒコが面防<sup>バイザー</sup>の隙間から見ると、それはかつてミッツと呼ばれた人間の一部分<sup>た</sup>だつた。

吐き気と憎悪が同時に湧き起こり、カズヒコが剣を持つ手に力が籠もる。

「うおおおおおおおおお!!」

左手首に灯る2つの六芒の影響で、カズヒコの身体はいつもより速く、力強かった。

ファストスラスト  
一本突きから、カズヒコが最も得意とする陽炎<sup>ヘイズ</sup>に繋ぎ、下段からの切り上げでオーク

の腕を跳ね上る。そして、がら空きになった胴体を旋回破斬で横一文字に斬り裂いた。  
トルネードスラム  
 旋回破斬は体を数回横回転させてから横に薙ぐ技だ。スキル リヨータが輪転破斬を習得した時期に身に付けた。

よろろ  
 蹠跟めくオーク。

そのオークの首元に一本突きを撃ち込み、決定的な一撃を加えた。

オークの両手がだらりと落ちる。

びくびくと痙攣するオークの体が完全に動かなくなるまで、カズヒコは何度もバスタードソードを押し込んだ。

最後にオークの体を蹴って、剣を抜き去る。

—— かたき  
 仇は討ったぞ。ミッツ……。

カズヒコの目に涙が光った。

カズヒコの面防とオークの顔が直接押し合う。オークの生臭い息が顔にかかる。

不愉快な豚の臭い。

オークのガハリイは鎖帷子を貫通し、カズヒコの左肩に刺さっている。

しかし、カズヒコのバスタードソードはオークの鱗スケイルを貫通し、腹部を貫いていた。  
ベによろい  
 「紅鎧の槍の方が痛かったぞっ！ らあああああ……！」



オークに刺さったバスタードソードを捻<sup>ねじ</sup>るように斬り上げ、同時にオークを蹴り倒す。

ガハリイを手放し、お腹を押さえるようにしやがみこむオーク。  
赤黒く光る内臓が飛び出ている。

カズヒコが止めを刺そうと右腕だけでバスタードソードを上段に構えると、オークは崩れる落ちるように倒れた。

「リヨータ……、俺は3匹目を倒したぞっ！ 俺の圧勝だな。はははは……」  
空笑い。カズヒコは居るはずのないリヨータに声を掛けた。

たった2匹の側近オークを倒しただけで、既に体力は限界を迎えつつある。呼吸が乱れて、体が重い。

バスタードソードを杖に少し息を整える。

刺された左肩も痛い。神官に止血してもらわないと命に関わる怪我だ。

——これは痛いけど……抜かない方がいいな……。

バイザー  
面防を上げ、地獄と化した監視塔1階を見回すと、義勇兵の数はぐつと減っていた。ざつと見て、オーク20匹に対して義勇兵は10人強だ。当初の4分の1になっていた。

——だいぶ……やられたな……。

戦って討たれた義勇兵もいれば、どこかに隠れたのもいるだろう。今、戦っている義勇兵も遅かれ早かれ殺されるのが予想された。まともに側近オークと渡り合えているのはカズヒコを含め2、3人だったからだ。

——光プロテクションの護法アシストと守人の光が効いている内に、逃げないと……。そろそろ監視塔に入つた奴等が戻ってきててもいいくらいなのに……。塔の中もみんなやられたのか？ ブリトニーは？ 本体はどうしたんだ？

「ミッツ、また後でな……」

足下に転がるミッツに別れを告げて、カズヒコはクザクとチヨコの後を追つた。

——いた……っ！

クザクとチヨコは数匹のオークに行き道を塞ふさがれ、何人かの義勇兵と一緒に立ち往生していた。2人ともほぼ無傷の様子だ。

——救わないと……っ！ くそっ、邪魔だ！

「はっ！」

カズヒコは左肩に刺さつたガハリイを抜くと、走る激痛を我慢して、クザクとチヨコの前にいるオークに投げつけた。そしてそのまま、旋回破斬トルネードスラムで一番手前いるオークに斬り付ける。

斬撃自体は盾で防がれるが、オーク達は突然の闖入者ちんにゆうしやに隊列が乱れる。オークの混乱

を衝いて義勇兵が逃げ出す。

「カズヒコっ!!」

「カズヒコ……っ!」

クザクとチョコがカズヒコに気が付く。

2人はカズヒコに近寄ろうとするが、カズヒコは怒鳴って2人を制した。

「行けっ! 早くっ! 今の内にっ!」

「だけど……あたし……」

「行くぞー! チョコっ! カズヒコ、……頼んだっ!」

カズヒコは振り返ること無く、震える左手の親指を立ててクザクに合図を送った。

正眼に構えたバスタードソード。目の前には3匹の側近オーク。左肩の傷から出血が止まらない。

——もう、ここで終わりかな。

そんな感傷的な気持ちになったカズヒコに僅かな希望が灯る。

カズヒコの目の前に光る神聖文字が浮かび、温かい光が身体を包んだ。……癒光だった。

どこか離れた場所にいる神官がオークと相対するカズヒコを見かけて癒光をかけてくれたのだった。もしかしたら、さつき逃げた義勇兵の中に神官がいたのかもしれない。

い。

カズヒコは体中から痛みが引いていくのを感じていた。

——モテル男は辛いな……。でも、まだこれで戦える……。

しかし、カズヒコは少し目立ちすぎた……。あの怪物に目を付けられる位に。

「……フツシユルルルーイウイ」

大きな手がカズヒコと相対する側近オークを横に押しつける。

一瞬、不機嫌に振り返った側近オークが、慌ててその手の主に空間を譲った。

カズヒコの近くからオークが次々と離れていく。

響く足音。

——ああ、終つひに……俺の番か……。

目の前に現れた大山のようなオークを見上げて、諦めにも似た感情がカズヒコの中に湧き起こった。不思議と、もう怖くはない。

——さあ、これを倒せば敵は逃げ出すだろう。……それで戦争は勝ちだ。賞金1000ゴールド。俺は英雄になっちゃうな。……義勇兵を辞めて、リホと結婚もできるかもしれない。……あの体型なら、子どももいっぱい作れそうだし……楽しいだろうな。

楽しい妄想で、兜の中は笑顔になる。その笑顔を消し去るように、カズヒコは深く息を吐いて、そして吸った。

「来いっ！ ゾラン・ゼツシユ!!」  
カズヒコはバスタードソードを八相はっそうに構え直した。

それからのカズヒコは義勇兵人生最高の戦いを繰り広げた。  
しかし、その時間はあまり長くは無かった。

防戦一方。

淡く抱いた幻想とは異なり、勝機など見出す余裕も無く、嵐のような凶刃の中で、命の灯りが消えるのを守るのが精一杯であった。

ゾラン・ゼツシユは二刀流。

しかし、その一刀一刃は人間族の両手剣と同様の大剣であり、上下左右から繰り出される高速の斬撃は、質量を持った無限の雷のようにカズヒコを攻め立てた。

甲冑の板金が至る所で飴細工のように曲がっている。

当然、中の身体も無傷で済む訳が無い。

カズヒコの身体は立っているのも不思議なくらいボロボロだった。

——あと少し……。もう少しだけ防げば、きつと監視塔から強い仲間が降りてくるはずだ……。

その希望と左手首に光る2つの六芒だけが、カズヒコの身体を支えていた。

ゾラン・ゼツシユの最後の連続攻撃ラツシユから数秒の間があった。ゾラン・ゼツシユも最後の攻撃に備えて呼吸を整えている。むしろ、肩慣らしが終わってこれから本番という様相だ。

普段の倍以上間合いを取るカズヒコ。疲労困憊。苦しすぎて、呼吸もままならない。

——これが最後だ。もう、その次は……無い。

死を待つ、苦しい時間。

しかし、次の瞬間、監視塔からカズヒコが想像していたのとは違う銀髪エンジェルの天使が舞い降りてきた。

「おおおおらあああつ!!」

1人の戦士が側近オークに斬り込む。

動揺する側近オーク達。

その戦士の後方から、紅い陣羽織まとを纏い、長身で銀髪の男がゆつくりと南西の監視塔から降りてきた。

銀髪の下には睨んだものを凍り付かせる程、冷たい瞳が宿っている。

しかし、それを見ていたカズヒコの心には不思議と無上の優しさが伝わってきた。

——遂に来たっ! あれはチーム・レンジのレンジだっ!!

レンジは兜を被り直すと、近くに居る側近オークに攻めかかり、刹那の内に1体を斬

り伏せた。

その後ろからセクシーな女盗賊や眼鏡をかけた知的な魔法使いの男が姿を現わす。

さらにチーム・レンジの後ろからは、ゴブリンスレイヤーのモグゾーとランタ、その他同じ監視塔に登った義勇兵達が姿を現わした。

ゾラン・ゼツシユも騒ぎが気になり、レンジ達の方を向いている。

——これは助かった……かもしれない。

カズヒコはほんの少しだけ戦闘中だということを忘れて喜んだ。

「フシユルツシユ、シユシユオツシユ、ガツシユシユル」

ゾラン・ゼツシユは主<sup>メインディッシュ</sup> 菜の前に、前菜<sup>オードブル</sup>を平らげてしまおうという気なのか、カズヒ

コに向き直る。

——不味<sup>まず</sup>いっ！

長い間合いを恐ろしい速度でゾラン・ゼツシユが詰める。

正眼の構えで待ち構えるカズヒコ。

稲妻のような斬撃の急襲。

——大丈夫っ！ さっきまでと同じ要領で、あと1回防ぎ切れれば助かるっ！

しかし、そう思い、受け太刀をしようとしたカズヒコの左手首から青白い六芒の光が

1つ消える。タイチが最後にかけて光<sup>プロテクション</sup>の護法の光だ。

重たくなる身体。

僅かな支援だったが、光プロテクションの護法の喪失によって、薄氷の上を歩むようにして防いできたゾラン・ゼツシユの攻撃に間に合わなくなる。

動けないカズヒコ。

左から襲ってくるゾラン・ゼツシユの湾刀が、カズヒコの両腕を共に斬り落とす。

左手首に灯った緑色の六芒。リホが別れ際にかけてくれた守人アシストの光の輝きがカズヒコの体から離れていった。

「ああっ！」

カズヒコは両腕を失うことより、リホとの繋がりが無くなることに心が痛んだ。

次の瞬間、首元に向かってくる疾風のような斬撃の気配をカズヒコは感じた。

カズヒコの頭部は監視塔の1階の石畳の上を転がった。

最後に、顔が上向きに止まる。

首から流れ落ちる血液。

急激に失われていく意識の中で、カズヒコは1階の高い天井を眺めながら考えていた。

——ああ、やられたのか……。不思議だ、何も聞こえない。苦しいけど、そんなに苦



しくないや。手足が動かない。……ああ、腕は斬られちゃったつけ。

脳内の酸素欠乏の影響で、カズヒコの記憶は混濁していた。

——こんなはずじゃなかったんだけどな……。何かが……間違っていたのかな？

リョータや……グンゾウさんの言うことを……聞かなかったからかな？ クザクや  
チヨコは……、逃げられたのだろうか？ ……わからない。リホ……、君は無事だとい  
いんだけど……。

その間、時間にして5秒程。

——ここはやけに太陽が眩しいな……。

どこからか射し込む光が眩しくて、カズヒコは目を閉じた。

※以下は「グンゾウ」主観で描かれています。

寂し野前哨基地さびしのぜんしやうに向かう馬竜車の上。

シムラが馬車後部から輝く頭を出して、ぐったりしている。

「うおいつ!! カズ……っ!!」

リョータが急に大声を上げて目を覚ました。

小隊パーティーの仲間が全員ビクツとなる。ひとり、微動だにしないカレン。

「……修行が足りん」

カレンは飲んでいた熱々のお茶をグンゾウの手の甲に垂らした。そのお茶は馬車の上だと言うのに、ハイドの魔法で置炉おきろに火を起こさせて、お湯を沸かしたものだ。

「おわつちやつちやちや……そんな無理です。修師マスタ」

——ひー、熱いあち。これから兵団指令オーダーが終わるまで、ずっと虐待ブレイされると思うとたまらないな。

グンゾウの火傷の遠因を作った当の本人は座ったまま下を向いている。

グンゾウがリョータに話しかける。

「おい、リョータ。どうした？ みんなびつくりしちやつただろ。悪い夢でも見たのか？」

「そーだよー、リョータ。あたし、オシッコちびつちやうかと思つたよ。ずっと我慢してるんだから。……膀胱炎ぼうたうえんになりそー」

——ヨシノ……、最近ぶつちやけすぎだぞ。もう家族の会話だな、これ。

ヨシノがリョータに近付くと、リョータはヨシノに抱きついた。お腹の辺りに顔を埋うずめている。

「こらっ！ リョータ!! だから、オシッコしたいんだって、膀胱を押・さ・な・いでー！ 漏れちゃう……、あつ！ ……なんてね。ほんとにやばいんだってー」

ヨシノが何度かリョータを引き剥がそうとしたが、がっちり抱きしめて離れない。  
 「悪い……ちよつと、このままでいさせてくれや……」

リョータが押し殺したような声で呟く。

ヨシノは諦めたのか、そのままリョータの頭をなでなでし始めた。

「怖い夢でも見たのかなー？ 甘えさせてあげるから、寂し野前哨基地に着いたらなんか買つてねー」

——なんだ、ヨシノに甘えたかっただけか……。いいなー、俺もしてもらいたい……。アキに。

そう思ったグンゾウの股間に熱いお茶が注がれる。

「おわつちやいちやいちやい！ ……何すんですか?! 修師」

カレンは素知らぬ顔で新しいお茶を茶壺ティーポットからカップに注ぎ、啜る。

「ふう……、何だかルミアリス教の神官らしからぬ邪な気配を感じたんでな。清めたのだ」

「シツシツシツシツシツシ……」

ハイドはカレンと馬が合うのか、執事のように喜んでその小さな顎先あごで使われている。  
 そこへ、ラツテイー准将との連絡官リエッソで馬電車の御ぎよをしているブリセイスが後ろを向

て話しかけてくる。

「お楽しみ中の所、邪魔をして申し訳ないが、寂し野前哨基地さびしのぜんしやうが見えてきたぞ」

それを聞いたシムラが飛び起きて、馬竜車の先頭まで来る。

額に手をやり先を眺めると、反攻部隊の馬竜車の列の先にそれらしき村が見えてきた。

「やったでっ！ やつと、この地獄から降りられるで。ほんま、良かったー！」

——まあ、本当の地獄はここからなんだけどね……。

グンゾウは手に持った地図の上で、指を使って目的地までの距離を測った。

「全然、お楽しみじゃないよー。甘えん坊さんが放さないんだよね、ブリちゃん」

ヨシノがブリセイスに変な愛称を付ける。

——ブリちゃん……。

「あのさ、ヨシノ。ブリセイスのこと『ブリちゃん』って呼ぶの止めない？ なんか違うの思い出すし……気分が悪い」

グンゾウが苦笑すると、ブリセイスもブリトニーを知っているのか苦笑した。

「えー、なんでー？ ブリちゃんじゃん」

「じゃあ、オカマのブリトニーのことは？」

「ブリちゃん……んー、じゃあ、あつちは『ブリちゃん』にするよ」

——うーん、なんだかなー。……向こうは丁度“ちん”付いてるし、それでいいか。取ってたらどうしよう？

「わかった。……まあ、区別してくればいいや。紛らわしいし……」

そのやり取りを聞いていたプリセイスは、呆れた顔で溜め息を吐いた。

『……さん……………た』

「ん…………？」

グンゾウは誰かの声が出た気がして、馬竜車の外を見上げた。

——こっちの世界に来てから、変な声が良い聞こえるな……。元からなのかな？

すつきりと晴れた蒼い空。太陽が眩しく輝く。

グンゾウの気分も急に晴れ晴れとした。

「はー。良い天気だなー。デッドヘッド監視砦の攻略はもう終わったかなー？ いい

なー、一晩でーゴールド。俺等はこれから地獄だ」

ルミアリスにカズビコ達の無事を祈るため、グンゾウはデッドヘッド監視砦の方を向くと、ゆつくりと目を閉じた。

## 15. 白と黒

「おおおおおらあああつしよつしよーい!!」

リヨータの豪快な憤怒の一撃が決まり、オークは仰向けに倒れる。そこをすかさず巨大鈍のような両手剣で叩き潰す。肉が潰れる不快な音。躊躇いなく止めを刺すところがリヨータらしい。

「よつつつつつしやーーーーーっ! 10匹目っ!! これは流石にカズヒコも抜けぬーだろ。10人斬りだぜ、俺様っ! んーちゅっ! むちゅっ!」

リヨータは鍛え抜かれた自分の二の腕に口づけをした。両腕共にだ。

——自己陶酔が微妙に気持ち悪い……。

グンゾウはリヨータの後方の岩に登り全体を見渡している。隣にはハイド。

「はいはいリヨータ、自分にキスはいいから、左のブリセイスを支援してくれ。次は右から1匹来てるよ。いや、2匹だな。呪術師連れてるから気を付けてね」

「呪術師は厄介だから、到着する前にシムラに殺らせとけよ、オッサンっ!」

「シムラはヨシノの支援に行ってるから駄目だ。ハイドっ!」

ハイドは黄色い宝石の嵌まったメイジスタッフで空中に画を描き始める。お気に入

りの杖だ。

——あれは電磁魔法用だな。

フアルツマジック

「キシツ……6月6日に雨ざーぎー……シシシ、三角定規にヒビ逝つて……シシツ」

「えっ？ 何それ？ 新しい精霊魔法？」

エレメンタルマジック

「そんなわけないだろう、シシシシシ。グンゾウ馬鹿か、馬鹿かグンゾウ、キシシシシ」

——むかつく。

「なー、わりーんだけどさー、突っ込み入れなくても普通に戦つてくんねーかなー。俺も疲れただけどー」

グンゾウは両腕を下げて脱力する。台形になった口はだらしなく開いている。

「もがつー！」

突然、グンゾウの口の中に大量の羽虫が湧き出る。必死に吐き出すがなかなか上手くいかない。しゃがみ込んで咳き込む。

「貴様は何をやっている」

労りの無い、厳しい台詞セリふが聞こえる。カレンの声だ。

グンゾウはいつの間にか現れたカレンに首根っこを掴まれ、顔を上に上げられる。口の中に注ぎ込まれる水。

「がふっ！ ぐへっ！ ぺっ！」

水筒の水によって口の中から羽虫を流し出すことに成功する。

「ごほっ……！　ありがとうございます。修師<sup>マスター</sup>」

「呪術師がいると分かっているのに油断しているからだ……あれは発動が早い。目を離すな」

「さーせん……」

「しかし、見た目の冴えない中年の貴様が、無能なりに指揮をしていることが敵にばれたようだな……」

——気持ちいいー、じゃなくて、傷付くー。

カレンの大好物はグンゾウを罵る<sup>ののし</sup>言葉だ。しかし、この程度の言葉責めでは、カレンの小腹も満たない。

「戦士が狙われると不味だ。呪術師から片付ける。魔法使いっ！」

凜とした声。

傷付いたグンゾウを放置して、指揮を執り始めるカレン。ハイドが即座に反応する。

「了解だぜえ……。キシシ、オーム・レル・エクト・ヴェル……シツシツシ」

——俺にもこれくらい素直ならいいのに……。影鳴り<sup>シャドレイト</sup>か？

「レフト、キシシシ・ヨイン・プリベ・ジェス・イーン・キシシ、サルク・カルト・フラム・



——ん？　なんだかえらく長い呪文スベルを唱え始めたぞ……。

グンゾウへ虫による攻撃をしかけてきた呪術師オークは、腰に呪術用の壺をぶら下げている。今度はリョータかブリセイスへ呪術による攻撃をしようと、その壺に手をかけようとしていた。

ハイドは中空に浮かんだ輝く魔方陣の上に、杖を使つて複雑な精霊エレメンタル文字を書き殴つている。

「ダルト・ダーシユ、シツシツシツシツシッ！」

魔方陣から影精霊ダーシユエレメンタルが中速で撃ち出される。普段の黒色より少し紫がかつた色をしている。時折、黄色い輝きを放つた。

——オーク級に影鳴り単体の攻撃なんて効果あるかな？　あれは戦士との連係用じゃ？

ハイドの影鳴りは操作ができるので、敵を追尾することも可能だ。必中だが動きは速くない。

呪術師オークは飛んできた影精霊ダーシユエレメンタルを小馬鹿にするように、手に持った呪術用の鎚で叩いた。

衝撃に弱い影精霊ダーシユエレメンタルは割れて弾ける。

——だよな……。

轟音。

グンゾウが落胆をした瞬間、雷鳴が響き、呪術師オークが黒焦げになる。ゆつくりと膝をつき、それから地に伏す呪術師オーク。

「えっ……?」

「キーーーーーッッッッッッッッッッ!」

愉快そうにハイドが笑う。陰険な笑いだ。

「何をしたの?」

「キシシ、グンゾウ馬鹿か、馬鹿かグンゾウ。エレメンタル 精霊魔法の**カブセル化**インキャブセルーションだ、キシシシシ

シ。隠蔽と言ってもいいだろう、キシッ!」

ハイドは自信に満ち溢れた顔で言い切る。いつも無駄に自信に溢れているが……。

数秒の沈黙。

そよ風がハイドの前髪を揺らし、広いおでこが光る。

「ごめん、全然意味が分からない……いん陰キヤ?」

グンゾウは首を傾げながら尋ねた。カレンは仏頂面をして、グンゾウとハイドを眺めている。仏頂面だが顔の造りは可愛い。

「シシシ、低脳なグンゾウには説明してもわかるまい」

「低脳で悪かったな。それを分かりやすく説明するのが天才なんじゃねーの?」

「キシシ……なかなか言うじやないか。分かりやすく言うのだなキシシ……このやり方は通常より1. 2倍疲れる。だから寝る、キシッ！」

そういうとハイドはどこから取り出した枕を地面に置いて寝始めた。

唹然とするグンゾウ。傍に立ち、仏頂面のままグンゾウを見詰めているカレン。

「マスター修師は分かりましたか？」

「訊きくなっ！」

カレンは不機嫌そうに言い捨てると、お尻をぶりぶりさせながらヨシノ達が戦っている方へ行ってしまった。

その後ろ姿に見える小さなお尻を眺めながら、グンゾウは溜め息を吐いた。

——喋らないから、カレンは顔よりお尻の方が可愛いな……。

遠くのカレンが手でお尻を隠した。

——……俺が思っていることは、口から出ているのだろうか……？

グンゾウは少しだけ不安になって、口に手を当てた。

「やー、ゴブちゃんと違って、オーくん2匹相手はなかなか大変だねー」

と余裕の様子のヨシノが槍を肩に担いだまま、元気に歩いてきた。

「全然大変そうに見えなかったで」

シムラも後ろから付いてくる。ニコニコと余裕の表情だ。

「ほんとう？ おかしいなー？ 頑張ってる感をアピールしてみたんだけどなー」

「よし、この辺りの掃討は終わったから、本体と合流しよう。本体がああ丘を押さえたら、それで終わりだ。ああ丘は湧水しているし、拠点造りにはもってこいだ。我々には時間が無い」

兜を外したブリセイスが、その場を引き締めるように言う。

地黒の肌に、彫りの深い顔。まとめた長い髪が汗でぐしょぐしょに湿っていた。色っぽい。

彼女は職業軍人だけあって真面目で無駄がない。好感が持てる。剣の腕も立つ。リョータ程の腕力は無いが、恐らく1対1で戦えばリョータが技術で負けると思われた。

オルタナを立ってから既に2日が経過している。

当初、敵の本拠地は旧ナナンカ王国にあると聞いていたが、グンゾウ達は旧アラバキア王国領内で戦っていた。

理由はいくつかある。

ひとつは、単純に補給線の問題。ある程度の数の兵が動くとなれば敵地で補給線を切らすことはできない。補給線を確保するために経路基地を作る必要がある。そこで、

オーク達の掃討と拠点作りに勤しんでいる。「この辺りに現れるオークは使い捨てに近い。氏族もばらばらで身分も低いため、そこまで強くない」というのがブリセイスの言だ。例えば戦争で族長を失って逃げてきたオーク達だという。

ふたつ目は、敵の隠れ家が旧アラバキア王国領内にあるからというのがある。イアン・ラツティーが放っている密偵からの報告によれば、敵は現在、影森から西へ100キロ程度の場所に隠れ家を構えているとのことだった。

そもそもオルタナを攻撃したり、要人の誘拐をするためには旧ナナンカ王国からでは遠すぎる。また、旧アラバキア王国領内には不死の王が成立させた諸王連合時代からの有力者等が割拠していて、一枚岩ではない。そのため移動するだけでも非常に危険だ。

恐らく敵も直近は旧アラバキア王国領内に潜み、寂し野前哨基地から物資の調達をして、生活をしていたのだろう。

反攻部隊の拠点作りは恐ろしい速さで進んでいた。丘の上に生えていた木は切り倒され、簡易な砦がどんどん形作られている。グンゾウ達が丘の上に着く頃には、既に砦としての体を成していた。

イアン・ラツティーの配下だけで構成された隊の天幕の中で、ブリセイスから今後の動きについて説明がある。

「敵は今、ここから20キロ東に拠点を構えている。情報によれば、いくつかの洞窟に分かれています。できれば10キロ手前までを掃討しておきたい。ここからはリバーサイド鉄骨要塞の敗残兵だけでなく、本命の敵勢力とも衝突の可能性が高くなるだろう。本体の兵士達と一緒に今から10キロ圏内の掃討に向かう。オークなら呪術師、人間の場合は魔法使いに気を付けるんだ。人間の場合は可能な限り生かして捕らえるように。口さえ動けば良い」

——まー、怖い。

兵士達はそれぞれ小隊に分かれて動き始める。

「んだよ、休みなしかよ……」

リョータが悪態を吐いた。

「給料もらってんだから仕方ないだろ……」

グンゾウはリョータの肩を叩いた。

「オッサンは何もしてねーじゃねーか」

「そんなことないだろ？ 俺だって……まあ、なんだ……色々、さて、怪我をしている奴はいないかー？」

「やっぱ仕事してねーだろっ！」

グンゾウとリョータのやり取りを見ていてハイドやシムラも笑っている。

「キシキシキシキシ」

「あはは、なんや、グンゾウさんさぼっとんのかいなっ！」

過酷な戦いの中でも、リョータ小隊の面々には明るさが戻っていた。

理由は単純。

彼女がいるからだ。

「グンゾウさんはみんなが危険な目に遭わないように、いつも全体の動きを見てくれるんだから、大変なんだよ」

アキがグンゾウに助け船を出す。

アキがいる。

そう、アキは既にグンゾウ達と合流をしていた。

グンゾウ達が寂し野前哨基地さびしのぜんしやうに着いた時、そこには砂埃まみれの伝令が居た。敵を追

跡していた要人警護部隊は、時折、敵の位置を伝えるために伝令を発していた。

寂し野前哨基地さびしのぜんしやうへの伝令に任命されたのがアキだった。

アキからもたらされた情報によって、反攻部隊は行軍の方向を旧ナナンカ王国から、

旧アラバキア王国領内に変更したのだ。

アキは馬竜を連れて寂し野前哨基地さびしのぜんしやうに待機していた。突然の再会にリョータバーテイ小隊は

全員で抱き合って喜んだ。……ハイドを除いて。

【2日前 寂し野前哨基地内】

「自分でも、あんなにスムーズに馬竜に乗れると思いませんでした」

アキは自分自身の乗馬能力に驚いていた。特に訓練をすることもなく馬竜に乗ることができたらしい。恐らく、失われた過去の記憶に関係していると思われる。

アキは埃だらけの顔を濡れた布で拭き、その汚れの酷さに恥ずかしそうな顔をした。グンゾウはそんな様子を微笑ましく眺めていた。じつくり。穴が開くくらい。

「セクハラだな……キシシ」

ハイドがグンゾウの背後で呟く。グンゾウはどきつとして、アキから目を逸らした。目を逸らした先ではカレンが睨むような目でグンゾウを見ていた。グンゾウは2重でどきつとした。

「——え？ 何？ 駄目なの？ おっさんと大切な仲間の無事を微笑ましく眺めるのもセクハラですか？ 差別じゃないっすかねー？」

「アキも戻ってきたし、もうこの兵団指令抜けてもいいんじゃないの？」

相変わらず真つ直ぐなりヨータは、思い切った案を出してきた。

「あたしもアキちゃんさえ戻ってくればどっちでもいいかなー？ お金も使っていないから、そのまま返せばいいし」



ヨシノも頷いて同意している。

——うーん、確かに。俺もアキが戻ってくれば別に危険なことをする必要はないと思うな……抜けられればの話だが。

シムラヤハイドも特にどちらでも良いといった感じだった。

それに対してアキだけがもじもじとしながら別の意見を出す。

「私は……、続けたいと思ってる。誘拐されたセシリアは盲目の少女で、天使のように優しい子なの。きつと、今すぐ怖い思いをしていると思う。……だから、私も無理をして、追跡部隊に志願しちやって……」

——アキ……天使かっ！

「ほんと、無理しすぎだぜ……よえーくせに。まずは小隊パーティに話すべきだろ？ 普通。反省しろっ！」

リョータがアキに嘯みつく。

——リョータが普通を持ち出すとは……。

「ごめんなさい……。みんなに連絡取っている時間もなくて……」

アキは小さな声になり、下を向いてしまった。

「リョータは相変わらず優しくくないなー」

ヨシノがアキの肩を抱いて、リョータを睨み付ける。リョータもヨシノの眼差しには

弱いのか、そっぽを向いてしまった。

「まあまあ、リョータでさえもアキのこと心配してたってことだよ。だから、本当に無事で良かった」

グンゾウはアキを慰める。アキは顔を上げて、微笑む。目には涙が浮かんでいる。

「兵団指令オーダーについて、アキの気持ちはセシリアを助けたいってことだね。俺等はアキさえ助けられればいいって思いだったけど……、機密情報を知りまくって、今更抜けられるかどうかはわからないな……。ねえ、修師マスター？」

グンゾウはカレンに話を振った。カレンは右の眉毛を少し上げる。

「無理だな……。良くて作戦終了まで軟禁、悪ければ口封じに殺されるのがオチだ」

カレンの厳しい言葉に慣れていないリョータパーティ小隊全員の顔色が変わる。慣れているグンゾウと、何故かハイドだけはあまり変わらなかった。野生の本能なのか、リョータですらカレンにはあまり嘔みつこうとしない。流石、DS中のDSだ。

アキの思いやカレンの言葉により、結局、グンゾウ達は兵団指令オーダーを継続することにした。

「しゃーねー……。大人数で戦うのは嫌いじゃねーし、カズヒコにオーク斬りの人数で負けるわけにいかねーしな」

「あつ！ あたしもその勝負に乗る乗る！ 勝ったら何貰えるのー？」

「うおっ！ ヨシノに乗つかられるのはちよつと……」

「えー、なんでー？ 男女差別ー？」

「姉さん、それ、姉さん参加すると勝てないからとちやいます？ 差別とか格闘技の

階級分け的な……」

なんだかんだ言つても、アキが戻つてきたことで小隊パイヤに明るさが戻つた。

——まあ、同じ戦争なら、あつちのブリちゃんより、こつちのブリセイスの指揮で戦つた方が安全そうだしな……。

【現在】

グンゾウ達は拠点から5キロ圏内の掃討を終えた頃、日が暮れたため補給基地に帰つてきた。街からずつと離れた山中の夜は暗い。深緑の空に紅い月と星々が煌々と輝いていた。

配給の夕食を摂つた後、リョータ小队には辺境軍から休息用に3つの小さな天幕が与えられた。そのため、天幕の分け方をどうするか話合いがもたれる。

「夜は技術の高め合いをするために、戦士は戦士同士、一緒に寝た方がいいんじゃないかな？」

リョータが意味の分からないことを言い始める。鼻の穴が通常の2倍程広がって

る。

——その理論だと、ルミアリス教の信徒は信徒同士、一緒に寝た方がいいってことか……期待はしてないけど、頑張れ、リョータっ！

「何言ってるのリョータは？ あたしとアキちゃんやんで寝るから残りは自由に分けてねー。おやすみー、アキちゃん一緒に寝よーっ！」

ヨシノがアキを連れて、天幕の中に入っていった。

「みんな、おやすみなさい……」

天幕の締めまり際、アキが顔を出して皆に挨拶をしてくれた。天幕の中から楽しげな声がする。

——いいなあ……。

グンゾウの願いも空しく、リョータの提案はあつという間に却下されてしまったため、残りは男性用2つということになった。リョータは「ちっ！」と舌打ちしてから男性達を睥睨する。

「じゃあ、シムラだな」

そういうと言うと、リョータは無言で天幕の中に入っていった。

「それでつか？ ほな、おやすみなさいです」

と言いながらシムラは後に続いた。

「キシシ……」

残されたハイドとグンゾウはお互いに見つめ合ったが、いつものことなので、無言のまま天幕の中に入った。天幕に入っても特にすることはないので、グンゾウは背囊を枕に、用意されていた毛布を被って横になった。

「なあ、ハイド。今日使ってたあの魔法はなんだったの……?」

グンゾウはハイドに背を向けたまま気になっていたりすることを訊いた。返事は返ってこない。

「無視すんなよー、ちよつと傷付くだろ……もう、寝てんのか?」

グンゾウが振り返ると、後ろにいるはずのハイドは居なかった。

「はへっ……?!」

思わず間拔けな声が出る。

——いつも通りの修行か……な? まあ、寝床が広く使えるから良いか。

グンゾウはハイドと話すのを諦めて、毛布の中に身を丸くした。

目を閉じる。

暗闇の中で、ここ2日ふっかの出来事が頭を駆け巡る。

——色々あったな……。リョータが兵士を殴って、あの馬鹿……。ヨシノとヴェールの戦い。ヴェールの美しい顔……。美しい身体……。美しい……。いかんいかん、それ

だけになってる。ヨシノに吐かれて……、おっさん……誰だっけ？ イアン？ まあ、どうでもいいわ。カレンが加わって、ブリセイスと会って……今日汗でびっしょりだったな。お風呂どうするんだろ？ 違うな……。アキが帰ってきて良かった。アキの可愛い顔……。白い……。白い……。

昼間の戦いの疲れからか、あつという間に睡魔ヒュプスがグンゾウを暗闇の深淵に引き摺り込む。

途絶える意識。

夢の中なのか、わからないふわふわとした感覚の中で声が聞こえる。

「……きろ……」

——声……。？ 白い……。アキ……。いや、カレン？ ……カレンの声?!

「起きろ……グンゾウ」

グンゾウは腰の辺りがぐりぐりと足で踏まれているのを感じる。

「はっ！」

慌てて起き上がり周囲を確認するグンゾウ。

暗闇の中、誰かの気配がする。

眠りに落ちていた頭は目眩がしているかのように不安定で、周囲の状況が把握できない。

「やっと起きたか……、きつさと付いてこい」

何者かが、天幕から出て行く。

意味もわからないまま、声に誘われてグンゾウは這うように天幕から外に出た。

這っているグンゾウを見下ろすように、人物が立っている。眩しいくらいに輝く紅い月に照らされ、白いまでの金髪が紅く透ける。

それがカレンだとはつきり認識するまでに、さらに数秒を要した。

「戦棍メイイスくらい持つてこい。馬鹿者」

カレンがグンゾウを詰なじる。グンゾウは慌てて天幕に戻ると、戦棍メイイスを掴んで戻ってくる。

「行くぞっ！」

「は、はい……っ！」

グンゾウは立ち上げると、全く状況が掴めないまま、カレンの後を追う。カレンはそのまま砦の出口に向かう。門番の兵士から行燈ランタンを受け取ると、砦の外に出た。

カレンはどんどんと森の中に入っていく。森の中に入ると周囲は一気に暗くなり、行燈ランタンが無いと何も見えない。気温も下がり、湿気を含んだ冷気が身体を包む。空気の冷たさが寝ぼけたグンゾウの頭をだんだんと明瞭にしていく。グンゾウは置いていかれないように必死でカレンの後を追った。

「修師カレン……っ！ 一体、どこに行くつていうんです？ 説明してください。砦からあまり離れると危ないです」

「……まあ、この辺りで良いだろう」

カレンが連れてきたのは砦近くにある湧水地だった。静かな森の中で、水の湧き出る心地よい音がする。黒い砂利の下から、滾々と水が湧き出て、その水面にきらきらと星々が輝いていた。

カレンは近くの岩の上に行燈ランタンを置くと、グンゾウに向き直る。カレンと目が合う。その目は、修練部屋でグンゾウを見詰める目そのものだった。不機嫌そうな目のようで、その奥に愉悦を含んでいた。グンゾウはこれからどんな虐待ブレイをされるのかと恐怖と喜びに打ち震えた。

カレンが口を開く。美しいソプラノの響き。

「この2日間貴様等の戦いを見ていて気付いたことがある」

「はあ……」

「……貴様だけが戦力になっていない」

「はあ？」

「正直、役立たずだ……。むしろ要らない。全く要らない。老いぼれた塵ごみだ」

——うわー、心地よい程、全否定。傷付くー。



「マスター修師。私は神官ですから……マスター修師にも言われた通り無駄に前線には出ませんよ……」

「貴様のような使えない男の師だと思われのは、私のこけん沽券に関わる」

——俺の話は無視かーい！

「そこでだ……。神殿には内密で修行をつけてやろうと思つて呼び出した次第だ」

——そういうことか……。素直じゃないなー、カレンちゃんは。俺と2人つきりになりたかつたのね。

「なるほど……。お心遣い痛み入ります……。では、早速よろしくお願いします」

グンゾウはカレンに頭を下げる。

少しして頭を上げると、カレンがすぐ傍にいた。上げた頭がカレンの控えめな胸に当たる位の近さだ。グンゾウの心臓は高鳴り、声が出そうになる。そこをカレンがグンゾウの口に左手を押し当てて、声が出ないようにする。

「ふぐぐ……う？」

カレンが耳元で囁くように話す。

「黙れ……。修行の前に邪魔が入るようだ」

グンゾウ達と同様お風呂には入れていないはずなのに、カレンからは甘すぎる大人の香りがした。時折、みみたぶ耳朶に触れる唇。震えるような快感がグンゾウの身体を突き抜ける。

——ふわあ……たみやらん……。ん……？ 邪魔？ もしかして敵襲？

快感に絆ほだされていた思考が、遅ればせながら機能し、カレンの言葉を理解するグンゾウ。急に緊張が高まる。

「出てこい。隠れていても分かっている。こちらは無力な神官2人、恐れることはあるまい」

カレンが誰も居ない暗闇の中に話しかける。

——カレンが無力つてのは嘘だけだね……。

カレンが見詰める先の暗闇が少し歪ひずんだように見えた。グンゾウは歪みに目を凝らす。

暗闇の中、黒い物体がだんだんと形作られていく。行燈ランタンの灯りに照らされ、次第に黒い剣士が姿を現わした。黒い金属で補強された黒い革鎧カウロに身を包んでいる。革鎧には良く油が塗つてあるのか、移動してもほとんど音がしない。

——暗黒騎士?!……まさかっ！

グンゾウの心臓が掴まれたように苦しくなる。ここ2日間は心臓に悪いことばかり続いている。

「忌々しい暗黒神の手先か……っ！」

カレンが吐き捨てるようにその剣士に言い放つ。

「そう言われたら、偽善の愛を語る光明神の下僕……とでも言い返せばいいのかな？」  
美しい声。そして、グンゾウはその声に聞き覚えがあった。

「……ヴェール……」

グンゾウは戦棍メイスを握る手に力が入った。

「知り合いか？」

カレンの問いに、グンゾウは黙って頷いた。

「グンゾウ……か。お前と私とは、つくづく縁があるようだな……」

黒い剣士はそう言うと、竜のような意匠をしたクローズヘルムの面防バイザーを上げる。その面防バイザーの下にはグンゾウが予想した通りの美しい顔があった。

切れ長の大きな目に長い睫毛。印象に残る深緑の瞳と凜とした眉。意志の強そうな眼差し。人間離れた小ささの美しい顔。透けるような白い肌。

——まさか、こんなところで出会うとは……。まずいな……カレンが強いのはわかっているとして、だからといってあのヴェールの剣に勝てるのだろうか？　そもそも俺が狙われたら10秒持つかどうかわからない……。ヨシノもブリセイスもない……くそっ！　不味まずすぎる。

焦るグンゾウの目の前に、カレンが立つ。悠然とスタツフを構え、緊張した様子もない。

——カレンはやる気……なのか?! 戦いを避けることはできないのだろうか?  
紅い月に照らされた森の中。

グンゾウの目の前には白い神官と黒い剣士。奇妙な静寂が、この美しい白と黒を包んでいた。

## 16. 深夜の森で

「はああああああああああつー！」

森に響く美しい声。意志の強さを感じるのに、優しく誘惑されるような艶がある。

張り詰める緊張を突き破り、ヴェールが不思議な足捌きでカレンとの距離を直線的に詰める。

迫り来る黒い剣先、ヴェールの刺突がカレンを襲う。

既に杖と身体の向きを斜めにして待ち構えをしていたカレンは、素早くスタッフでヴェールの剣先を打ち払った。

——速い……っ！ あそこまで速いスタッフ捌きは見たことがない。本気だ。

追撃を試みたカレンの強打。スタッフがヴェールの身体を捉えた、とグンゾウが知覚した瞬間、ヴェールの姿は霧のように消える。急な展開に身体も意識もついていけない。

——どこへ……？

グンゾウは狼狽えて、周囲を見渡した。見つからず、首を傾げる。少しだけ戦棍を握る手が弛んだ。

「油断するなっ!」

カレンの鋭い声。

——え……………?

グンゾウが夜陰の中に金属の輝きを感じた瞬間、黒い長剣が首に突き刺さる。

「がっ……………ぐ……………っ!」

声にならない声。

刃はグンゾウの頸動脈を断ち斬ると、そのまま気管と頸髓けいずいを切断した。

——熱い……………っ!

グンゾウは首元に灼熱しゃくねつの痛みを感じた。

「グンゾウっ!!」

——あれ……………?

どんどんと暗くなる視界の中に、初めて見るカレンの動揺した表情があった。

——カレン……………君にそんな顔は似合わない……………、戦っ……………て。

訪れた完全なる暗闇と、途切れるグンゾウの意識。

それは突然の終わりだった。

暗闇を照らす紅い月と行燈らんとんの灯り。

その灯りの中で、白と黒の女が向かい合っている。

周囲には漆黒に染まる夜の森が広がり、流れる小川の潺<sup>せせらぎ</sup>だけが響いていた。

脳内で繰り返される絶望的な想<sup>シミュレーション</sup>。定<sup>シミュレーション</sup>から、グンゾウは現実に戻っていた。

——やっべえ。今、自分の想<sup>シミュレーション</sup>。定<sup>シミュレーション</sup>の中で死んでた……。バッドエンディングBー2だぜ。俺を心配するカレンの顔に萌えるパターンだな。

グンゾウは少しだけカレンの横顔を見る。カレンは全くグンゾウを気に止めていない様子だ。グンゾウは緊張で滲<sup>にじ</sup>み出る汗が止まらない。

——今の想<sup>シミュレーション</sup>。定<sup>シミュレーション</sup>を踏まえて初動は何をすればいいか……？

戦闘の初動をどうするか。グンゾウはそれを決めかねていた。

——俺にできることは限られている。ヴェールは最初にカレンと俺のどちらを狙うのだろうか……？ わからない……。選択を誤れば、俺の命は一瞬で消える。いや、俺の命なんてどうでもいいのかもしれない。目的、目的だ。それはカレンの生存だ。カレンさえ無事であれば、ヴェールに勝てる見込みもあり、俺も命さえ失っていないければ光<sup>サクラメント</sup>の奇跡で助かる。ならば……。

取るべき戦術が決まる。

いつ始まるかもしれない死闘を予期しながら、汗が額から垂れるのをただ感じていた。

ミシツと土を踏みしめる音がして、ヴェールが前傾姿勢になる。

——来るっ!!

「ひっ、光よ、ルミアリスの加護のもとに……っ!」

グンゾウの唱えた光魔法でカレンとグンゾウの左手首に青白い六芒の光が宿る。  
光の魔法だ。

すると、カレンがグンゾウの方向を向いて、不思議そうな顔で見詰める。普段の睨むような目付きではなく、驚いたように目を見開いている。かなり可愛いらしい。

「<sup>マスター</sup>師っ! 前っ! 前、見ないとっ!」

グンゾウが慌てて指差した方向から、ヴェールがゆっくりと歩きながら近付いてきて、カレンに革製の袋のような物を渡した。抜刀はしていない。

——あれ? ……なんで?

カレンとヴェールは耳打ちをするように小さな声で少し話すと、ヴェールはカレンから離れていく。立ち去り際に、ヴェールはグンゾウの方を向くと一言。

「なんだ、グンゾウ。私には光の魔法をかけてくれないのか? ふふふ……また……、  
な」

ヴェールは震える程に綺麗な笑顔を浮かべると、兜の面防を下げ、直線的に移動する足捌きで、夜の闇に消えていった。



グンゾウは開いた口がふさがらない。ぱくぱくと下顎を上下に動かしていた。「何を間拔けな面つらをしている」

カレンのスタツフの先端がグンゾウの下腹部に刺さる。脳天に突き抜ける痛み。「はあう……っ！　なんで……」

グンゾウは股間を手で押さえながら地面に伏した。バッドエンディングC—1。

「一体全体いったいぜったいなんだってんですか？　あれは？　ヴェールは敵じやないんですか？」

グンゾウはカレンに顔を近付けて詰め寄る。カレンは鬱陶しそうにグンゾウの顔を手で押し返した。自分が詰め寄るのは好きだが、詰め寄られるのは嫌いらしい。

「……何を言っているのだ。あれはラッティー准将の密偵だ。敵勢力に侵入して情報をもたらししている。なかなか優秀だ」

カレンは行燈らんたんの傍に寄って行った。ヴェールから受け取った革袋を開けると、中に入っている紙切れを読み始める。

「いやいや、でも修師マスタは『忌々しい暗黒神の手先か……っ！』って言ってましたよね？」

「あれは符牒だ。だから相手も『偽善の愛を語る光明神の下僕』と返しただろう？」

カレンは紙切れを読みながら、返事をする。

「あ、いや、でも、あの、ヴェールは天望楼で兵士を殺して……」

「その場面を直接見たのか？」

「え？ いや……んー、暗くて良く分からなかったですけど……死体は沢山あったし、ヨシノは殺されそうになったし……。ヴェールって何というか神秘的というか、謎が多いというか……。悪い女っていうか……。遊びたい、遊ばれたい的な？」

「貴様は何を言っている」

いつの間にか傍にいたカレンのスタッフが再びグンゾウの下腹部を捉える。

「はぐお……っ！」

グンゾウはびよんびよんと周囲を跳ねて、大事なものを元の位置に戻そうとした。カレンは紙を読む時間をたつぷりと稼いだ。

収まってくる痛み。グンゾウはカレンを指差すと抗議する。

「下腹部ばかり責めるのやめてもらえますかねー？ まだこれから結婚とかして、子どもとか作りたいんですけどー。できれば沢山」

「なっ……、ふん……っ」

カレンは恥ずかしくなったのか、そっぽを向いてしまった。

「まあ、良い。偶然に密偵と接触することとなったが、本来は貴様の調教……おほんっ！ 教育が目的だからな」

——今この人、*“調教”* って言ったぜ……。

「……はい。よろしく……お願い……致しま……すん」

「なんだか歯切れが悪いな……。まあ、いいだろう」

そう言うとかレンはスタッフの飾り部分を掌に打ち付けながら、グンゾウの目の前を左右に往復して歩き始めた。

「貴様の小隊は新人にしては光るモノがある。それは認める。しかし、貴様の働きは悪いっ！ もう一度言おう、働きの悪いっ！」

カレンは「悪いっ！」の部分だけ立ち止まりグンゾウを指差す。背が低いいため、目一杯仰け反って、見下すように指を突き出した。その後、また歩き出すと話を続ける。

「特に攻撃技スキルの少なさは絶望的だ。先程の光プロテクションの護法も悪手ではないにしても、正に命懸けだったろう？」

——うっ……。

「貴様の弛たるんだ醜い身体では、動きが硬くて突き返しも強打ヒットバックもあの密偵には通用しないと踏んだのだろう。愚か者にしては一理ある選択だ。……まず初手で死ぬだろう。その後、私は貴様を回復する暇いとまなどない。その気も無い。無駄死に……いや、犬死にだな」

「……もうちよつと、なんとというかこう、表現を包んで貰っていいですか？ 余計な修飾語が多いです」

カレンはグンゾウの言葉を完全に無視して続ける。

「これは貴様の鍛錬不足によって、戦闘における選択肢が少ないことが原因だ。今から身体を鍛えるのには年齢的且つ時間な限界があるが、せめて光魔法の選択肢を広げておけば、戦闘における貴様達小隊の優位性も変わってくるだろう」

「はあ……。しかし、回復のために魔法力を保存しなきゃいけないですし……。戦闘ではかばか光魔法を使うのも難しいですよ？ しかも俺が覚えているのは咎光ツレミツだけですし……。あれ、攻撃補助っていうか……。少し痺れるくらいであんまり……。ぐええええええええつ！」

話している最中のグンゾウをカレンが放った咎光ツレミツの光が襲う。グンゾウは全身を痙攣けいれんさせて、うつ伏せに倒れた。

そのグンゾウの上にカレンが座る。いつもの様式スタイル。

「この方が落ち着く。どうだ？ これでも咎光ツレミツが攻撃補助と思うか？ 貴様の信心が足りぬ所為とは思わぬか？」

グンゾウは未だに痺れの取れない口で返事をする。

「へい……。そのとほりです。修師マスタ。でも、咎光ツレミツは燃費ヒューが悪いといいまふか……。癒光ヒユウの方がひひようなひがしまふ」

カレンはグンゾウの上に座ったまま、小さな口で欠伸あくびをひとつ。口に手を当てる。

「あふ……。そうだな。つまりあなたが貴様の台詞は、まさに私の教えの通りだ。……。しか

し、同程度の魔法力で複数の敵に対して損害を与えられるならどうだ？ 又は、複数の敵を一時的に無力化できるならどうか？ 選択肢のひとつになるう」

「それは……そうですな」

グンゾウは身体の痺れが取れてくると、四つん這いになりカレンのために椅子となる。カレンはご満悦の様子だ。

「ふむ。そのため、今夜はまず複数の敵に対して損害を与える光魔法を教えよう。貴様ならルミアリス様から天恵を得られるだけの光徳があるう」

カレンはグンゾウの背中を台にして高く跳躍すると、空中で一回転した後には音もなく地面に着地した。

「さて、立ち上がれグンゾウっ！」

アラバキアにおけるルミアリス信仰は厚い。国民の大多数が、程度の違いこそあれルミアリスを信仰している。

ルミアリス信者は幸せだ。どんなに過酷な試練に曝さらされたとしても、信仰の過程で、誰もルミアリスの存在を疑うことはない。神の恩寵が得られない時、それは明らかに個人の信心や修練に不足がある時とわかるからだ。

ルミアリスはどこぞの神と異なり「沈黙」をしない。ルミアリスの聖隷である神官

や聖騎士は、人々の前で度々<sup>たびたび</sup>ルミアリスの奇跡を起こしてみせた。多くの人々の怪我を癒やし、悪を払ってきたのだ。

振り返ってみれば、グンゾウはグリムガルと呼ばれるこの世界にきてからずっと、カレンの起こす様々な奇跡を目の当たりにしてきた。グンゾウの信仰はカレンがいてのものかもしれない。

「まずは見ているが良い」

カレンは小川の傍にある岩に軽々上ると、小川の方を向く。透明で穏やかな流れの水面に、紅い月とカレンの白金髪が映っていた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……っ！」

カレンがスタッフを高く掲げる。

すると岩の上に光る神聖文字が浮かび、カレンの周囲には色とりどりの小さな光の粒子が瞬いた。<sup>またた</sup>粒子は、熱せられた空気のように渦巻きながら上昇する。

カレンの髪の毛が柔らかに舞った。

「はっ！」

カレンが掲げたスタッフを小川に向けて振り下ろすと、小川の水面に、半径5メートル程の大きな光る円陣が浮かぶ。

「はいっ！」

再び、カレンが掛け声を出すと、そこへ天から光の粒子がきらきらと降り注いだ。  
——綺麗だな……。

揺れる水面に乱反射する光の粒子を眺めながら、グンゾウは思った。しかし、その綺麗な風景以外、特に目立った事象は起きなかった。光の粒子が小川に全て消えると、辺りには暗闇が戻った。

グンゾウはカレンの後ろ姿をぼーっと眺めていた。小さなお尻の陰影が白い神官衣の下にはつきりと見える。

一仕事終えたカレンはくるりとグンゾウの方を向くと、岩から飛び降りた。

——どきつ……。

「ちゃんと見ていたか？ この光魔法は審判の光ジャッジメントと言う。この光魔法の威力は、貴様の未熟な信心に影響を受けない」

「……と、おっしゃいますと？」

「この光の粒子は触れた者の悪徳ヴァイスの量に応じた威力で弾ける。つまり、悪徳の者は爆発とも呼べる大きな威力の衝撃を受け、我々のような光の信徒には無害なのだ。……貴様に対して無害かどうかは知らぬが……な」

「……そう……です……ね……。素直な心の持ち主なので、無害か……と？」

カレンは呆れたような眼差しで、グンゾウを見つめた。

カレンが少女のようなソプラノで祝詞のりとをあげると、彼女の指先に光が灯った。光に照らされて、白い肌が透き通るように輝く。

グンゾウは彼女の目の前に跪ひざまずいて、その様子を見詰めていた。

囁ささやくような祝詞のりとは至近距離のグンゾウにも聞き取れない。早口で祝詞のりとを口にしながら、カレンは指先をグンゾウの額に近付ける。

ルミアリス教に伝わる「秘蹟ひせき」のひとつ。「授光」。

光魔法を体得するためには、いくつか方法がある。主な方法は3つ。

ひとつは、突然ルミアリスの啓示を受けて、光魔法が使えるようになる場合。これは所謂奇跡きせきと呼ばれる類いで、信徒でもなんでもない市民が突然にして神に選ばれ、光魔法を覚えてしまう場合がある。

ふたつ目は、神の恩寵を学習し、修行や光徳を積むことによって長い時間をかけて光魔法として精錬していく場合。カレンが古文書の記載から失われた光魔法を復活させた行為等はこれに当たる。時間はかかるが神殿に所属する神官には必須の責務である。日々新たな光魔法を発見することは、神の御業みわざの理解、つまり神の愛を知ること繋がり、信仰行為そのものである。

最後は、この「授光」。ルミアリス神殿に伝わる「秘蹟ひせき」のひとつで、高位の神官に



のみ伝授され、門弟に対して自らが使える光魔法を強制的に覚えさせる儀式だ。ただし、必ずしもその光魔法を体得できるわけではなく、一定の光徳を積んだ弟子だけが覚えることが出来る。また覚えたといっても熟練度は最低であり、最低限使いこなせるようになるだけでも一定の修行期間が必要となる。

「……目を閉じよ」

カレンが優しい口調でグンゾウに言った。儀式の時のカレンは清楚で慎み深い。

——可愛い時のカレンが見られなくなつて残念だな……。

そう思いながらグンゾウはゆっくり目を閉じた。

カレンの柔らかな指先がグンゾウの額に触れると、グンゾウの額に光が宿つた。

人の体温だけではない温かさが指先から伝わり、グンゾウの頭の中に入っていく。目を閉じた暗闇の中、温かな光が自分の中に満ちていくのを感じた。

グンゾウは、その光が自分の中に止まるように、心を穏やかにし、意識を集中させる。正直、今までグンゾウはこの儀式において、光に拒絶をされたことがない。難しいと言われる最初の規定修練ですらも、癒し手を1回で受け容れた。

——でも、驕り高ぶつたりはしない。……いい大人だし。それにこれはルミアリスの愛であると共に、カレンの光なんだ。それは放さないぜ。

少しの時間が経ち、やがてグンゾウの額で輝く光が、ゆつくりと弱まり、消える。カレンが軽く溜め息を吐いた。

「よし……っ！ では始めよう。一晩で使い物にするのだ。今夜は不眠不休と思え」  
カレンが相変わらず無茶苦茶なことを言う。グンゾウが目を開けると、微笑んでいるカレンが目の前にいた。

——笑顔だと、こんなに可愛いものにな……。

「はいっ！ 修師マスター！ よろこんでー！」

深夜の森の中、グンゾウは酒場の店員のように声を張り上げた。

## 17. ハナシノコシ

地面に敷き詰められた落葉樹の葉が、歩を進める度にぱりぱりと音を立てて、グンゾウの緊張感を高める。

涼風が吹く山間部の林。しかし緊張の冷や汗が額から垂れ、目に入りそうになる。グンゾウは音を立てないように服の袖で顔を拭いた。木の陰に隠れながら視線は1点に注目している。

林の中の小道をオークが2匹歩いていた。両方とも装備は金属製の鱗スケイル鎧メイに短槍。頭から生えた毛は逆立ち、鮮やかな緑色に染め上げられていた。同じ氏族なのだろう。どこかの氏族の先遣隊なのか、或いは1日で陥おとされたと噂のリバーサイド鉄骨要塞から逃げてきた敗残兵なのだろうか。

敵の隠れ家アジトまで5キロ程度の距離。1時間も歩けば到着してしまう。当然、敵の警戒範囲だ。その周辺では慎重に事を進めなければならない。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……」

グンゾウが小さく呟くと、審判ジャッジメントの光の粒子がオーク達に降り注ぐ。

その七色の粒子が描く幻想的な風景とは異なり、魔法の効果は容赦が無い。

「オルツシヤ?」

オークの1匹が景色の変化に気付いた時には既に手遅れだった。「ポシユウツ、ポシユウツ」という静かな爆発音がして、光の粒子に触れたオークの身体が弾ける光の粒子に削られていく。既に周囲を光の粒子に囲まれているため、衝撃力で弾き飛ばされた先にも粒子があり、次々と損害が蓄積していった。

血だらけのオーク達。武器や盾も取り落としていた。

周囲の森に隠れていた兵士達が一斉に襲いかかる。オーク達は混濁する意識の中で、自分達の身に何が起きたか理解する間もなく命を失っていった。

「はっはっはっはっは。やるじゃねーか、オツサンっ! 流石、俺様の参謀だ」

リョータが兜の面防バイザーを上げて、大声で笑う。

「リョータ、うっさいっ! 敵の隠れ家アジトが近いんだってっ!」

ヨシノに肩を叩かれて、リョータは満面の笑みを浮かべながら口を手で押さえた。

——ドMかっ……!!

グンゾウは心の中でリョータを突っ込んだ。

「……お前もな……キシシシシ」

グンゾウの背後でハイドが呟く。グンゾウがドキツとして振り返ると、ハイドは立ち

ながら居眠りをしていた。

——なんなんだ、こいつは？

ブリセイスを始め、兵士の面々が呆れた顔でリョータ小隊を見ている。その視線に気付いたのか、アキは恥ずかしそうにそつと盾で顔を隠していた。

——いいな……、盾。……俺も欲しい。

「しかし、これ……、ちいつとずれてまへんか？ お掃除の道」

シムラが汗で光り輝く頭皮を木綿の布で拭いながら誰とはなく訊いた。シムラにしては珍しく、狩人らしい発言だ。

「確かに……、今日は今まで進んできた方向より北にずれて……る？」

グンゾウは辺境軍から与えられている地図を広げ、自分達がいると思われる場所を指で押さえた。反攻部隊の主力が進んでいる道よりも、かなり北側に外れていた位置で戦っていた。

「よし！ 一旦、基地まで戻るぞっ！」

兵士達がオーク達の痕跡を消し終えると、ブリセイスは声を抑えて、号令した。

——早いな……。

まだ、太陽は中天に輝いていた。

「お。もう終わりか……、これで20シルバーとは楽な商売だぜ。帰っても何も娯楽は

ねーが、ゆつくりすつか……。そうだ、おいつ！ シムラっ！ 将戲盤しょうぎばんの続きすつぞー！」  
 リョータがシムラを掴まえて、肩を強く叩く。シムラは少し嫌そうな顔をした。

「リョータはんはなあ……。負けそうになると盤返しするしなあ……」

将戲盤しょうぎばんとは、木の板の上に13×13の枱目ますめが描かれ、その上に職業クラスが書かれた駒こまを配置し、順番に駒こまを動かしながら大将たしやうを討ち取った人が勝つという盤上遊戯ボードゲームだった。

駒こまの動かし方と基本的な規則ルールさえ覚えてしまえば、木の板と小石等を調達すれば遊べるため、兵士の間での娯楽として流行していた。小隊内パティでは今のところグンゾウが頭ひとつ抜けて強く、反攻部隊の兵士達と勝負してもかなりの勝率を誇っていた。

小隊内パティでは、次いでハイドが強い。リョータは最も弱く、唯一近い実力のシムラを誘って勝負をしていたが、負けそうになると盤をひっくり返すという、子ども染じみた禁忌をよく犯した。女子2人はあまり興味がなさそうだった。

「う……。も、もう、あれはしねーよ!!」

「ほな、やりまひよかあ……」

呆れ顔の周囲の兵士達に囲まれながら、リョータ小隊パティは帰路に着いた。

——恥ずかしいなあ……。しかし、この時間で作戦終了つてのは違和感あるな。

帰り道、グンゾウはブリセイスの部隊について考えていた。

——昨日……。ヴェールがカレンに渡した紙と何か関係があるのだろうか？

月明かりに浮かぶヴェールの美しい肢体が、グンゾウの脳裏に浮かんで消えていった。

そんなグンゾウの傍にアキが寄ってくる。

「グンゾウさん……」

グンゾウの顔を下から覗き込むように見上げるアキ。少し伸びた前髪が目にかかり、しきりに手で前髪を横に流している。その深い前髪がアキの顔の小ささを際立たせて、美しかった。ヨシノのように派手さはないが、肌の色が白く、伏し目がちな表情は神々しさすら感じさせた。

「ん？ どうした？」

——かわいいな……。

グンゾウは、前髪の下から覗くアキの黒い瞳へ、吸い寄せられるように顔を近付けた。「あの……、この隊だけ他の隊と違う動きをしませんか？ こんなに早く引き上げるし……、ちよつと今日の動きは少しおかしいと思うんです。……カレンさんから何か聞いてますか？」

——本当にかわいい……。ずっと見ていたい。

グンゾウはアキの表情を呆けて見詰めていた。

「グンゾウさん……？」

グンゾウが機能停止に陥っているため、アキが不思議そうな表情を浮かべた。

「答えろ、ロリコンすけべ。シシシシシ」

グンゾウの背後という定位置にいたハイドが、杖でグンゾウの頭を叩いた。

「ロ……………り……………」

アキが何度も目を瞬かせる。

「つて……、何すんだ、ハイド。この野郎、髪の毛抜くぞっ！」

グンゾウが声を荒げると、ハイドは「シシシシ……」と言いながら兵士達の陰に消えていった。グンゾウはアキに向き直る。

「逃げる時だけ妙に素早い動きしやがって……。えつと……あー、ごめん、アキ。カレンからは特に何も聞いてないんだ……」

「そうですか……。戦争だし、しっかり情報を集めて、正しく立ち回らないと危ないですよね……」

アキは下を向いて考え込む。

将戲盤しょうぎばんの話に夢中になっているリョータとシムラヤ、鼻歌を歌って軽くステップを踏みながら歩いているヨシノに比べると、アキはこの戦争で生き残ることに真剣だった。

「確かに変だよ。基地に戻ったら、カレンやブリセイスに聞いてみるよ」

「あ、はい……」



——アキは真面目だなあ……。よしっ！ アキの役に立って株を上げようっ！  
そして、実績を積み重ねて、いつかは……っ！

「……ないな……キシシ」

いつの間にかグンゾウの後ろに居たハイドが小さく呟いた。

休息期間の兵士達は基地の広場に集まり各々好きな息抜きに興じていた。

グンゾウは慣れたもので、士官用の黒い服に身を包み、兵士達の間を散歩する。

「おう、神官殿ー。一戦どうだい？」

顔馴染みの中年兵士が将戲盤しょうぎばんに誘ってきたが、グンゾウは笑顔で手を振りながら断る。

「今日はこの後も仕事がありそうだから、やめとくよ。それより怪我はないかい？」

「あー、神官殿に頼るような怪我はないな。昼番の奴等が帰ってきたら頼むよ」

グンゾウは笑顔で首肯した。

笑顔のまま、注意深く基地内の兵士達を観察する。

いつもと違う動きがないか。

いち早く集団の異変に気付くことが、自分の命を助けることになる。

また、グンゾウにはもう一つ気になっていたことがあった。イアン・ラツティーの

言っていた辺境軍に潜む敵側の密偵の存在だった。

グンゾウは今回の兵団指令オウダイを受けてから、多くの兵士達と積極的に会話をしながら、怪しい人物がいなか探りを入れていた。

グンゾウ達は正規兵ではなく義勇兵だ。

義勇兵は言ってしまうえば卑しい身分であり、金さえ積まれば汚い仕事でも何でもやると思われているくらいがある。その辺りの社会的背景を含め、運が良ければ何らかの接触があるのではないかと考えていた。

グンゾウが兵士達のいる広場の先に目を向けると、彼女が居た。

一際目立つ白銀の長衣ひとぎわに身を包み、小柄な身体に釣り合わない長いスタツフを持って、グンゾウの方を睨んでいた。

カレンだ。

カレンにしてみれば睨んでいるつもりはないのかもしれないが、眼鏡の奥から覗く鋭い眼光は、グンゾウの精神に深く突き刺さった。

グンゾウがカレンの方を見ると、カレンは小さな顎を後ろにしゃくり、「付いてこい」という無言の合図を送ってきた。

——あわわわわわ……。俺、なんか不味いことしたかな……？

何も悪いことはしていないのに、グンゾウは緊張で身が引き締まる。

ゆっくりと歩くカレンの後を黙って付いていく。

カレンは少し離れた1つの天幕の前で止まり、再び小さな顎をしゃくる。その天幕は幕僚が会議をするような大きなものだ。現在は兵站の保管に使われている。木箱や樽が詰まっているだろう。

——入ってことだな……。一体、この中でどんな責め苦が待っているのだろうか……。

グンゾウは気が滅入るような、期待するような、相反する感情を携えて天幕の入り口を開いた。

「おっ！ グンちゃん、いらっしやーい」

「あ、グンゾウさん……」

「……」

天幕の中に入ると、ヨシノが木箱の上に座ってひらひらと手を振っていた。その横には、同じく木箱の上に体育座りのアキ。天幕の一番奥にはブリセイスが樽に腰掛けていた。

——おおっ！ びっくりした。女性だらけ……。え？ 仲間の女性の前で公開プレイなのか？ 新境地っ！

グンゾウが状況把握をしていると、天幕の後ろからぶつぶつと文句を言いながらリョータが入ってきた。その後ろにはシムラ。

「あれ？　なんか違うな……。カレンがリョータパーティ小隊をここへ集めているのか……。」

「せっかく将戲盤しょうぎばんでシムラに勝てそうだったつてのに、なんなんだよ……。」

「そうでつか？　あと少して詰んでまへんか？　重装歩兵も、騎馬兵も無かったですやん」

「るせえ、左端の槍軽歩と傭兵が上つていく戦略なんだよつ！」

「あれは敵陣の手前で魔法使い達に潰されまっせ……。」

「何言つてんだよ、両手剣の傭兵が魔法使いなんかには負けるかつての!!」

2人は将戲盤しょうぎばんの話でまだまだ盛り上がっている。

将戲盤しょうぎばんにおいて、重装歩兵は大将を守る要駒で、騎馬兵は攻めの要駒なので、それを奪われているリョータは間違いなくシムラに陣地深くまで攻め込まれていることが覗えた。

しばらくすると、ハイドを連れ立ってカレンも天幕の中に入ってきた。

「さて……、集めたぞ。ブリセイス」

カレンがその小さな口を開く。

その声に呼応するように、ブリセイスが樽から立ち上がると焦げ茶髪ブルネットを後ろに撫で付ける。それから腰に手を当てると、リョータ小隊パーティーの面々を見回し、話し始めた。

「よし、静かに聞けっ！ ……お前達の使命はセシリア・ヴェドイー嬢の救出だ。忘れた訳ではあるまい？」

ブリセイスが再度全員の顔を一瞥する。

「昨夜、我々の密偵よりセシリア嬢の正確な居場所に関する情報もたらされた……。そこで……」

——ヴェールのあれはこれだったのか……っ！

「おおっ！ 密偵さん、すごい!!」

ヨシノが感嘆の声を上げたため、ブリセイスは続きが話せなくなる。

ブリセイスは溜め息を吐くと、ヨシノの方を向いて言った。

「……ヨシノ、話の腰を折らないでもらってもいいか？」

「は、はい、ごめんなさいっ！ ……とところで、ハナシノコシって何……？ 人の名前？」

ヨシノがアキの方を向いて質問すると、アキは自分の口の前に両手の人差し指で小さく×を作った。ヨシノは驚いた表情をして、両手で自分の口を押さえた。

「……いいかな？ そこで、我々は本隊を離れて隠密任務に着く。当初説明している通

り、オルタナティブ軍には敵の密偵が潜入している可能性が高い。そのため密偵に気取られぬよう最低限の人員で救出作戦を実施する。……つまり、ここに居る8人だ」

「キシシッ！ やばいねえ……、誰かさんの死亡フラグかも……」

グンゾウの後ろでハイドがぼそつと不吉なことを呟く。

そう言うと、ブリセイスは羊皮紙の巻物を地面に広げた。そこには基地周辺と思われる地図が描かれていた。

「セシリア嬢が監禁されていると思われるのはここだ」

ブリセイスは腰に付けていた長剣で街道沿いの北側にある山を指し示した。そこは午前中にセシリア隊が索敵攻撃をしていた場所の近くだった。

「この辺りには旧ナカンカ王国よりも遙かに昔の時代に作られた地下遺跡が多く点在している。その中の1つを利用して、奴等は隠れ家アジトとしていているらしい。この隠れ家アジトには20〜30人の比較的多い賊が潜んでいるとの情報であるため、侵入に当たっては慎重を要する。お前達には『黙る』ということ覚えてもらわなければならない」

グンゾウが手を挙げると、ブリセイスは眉根を寄せた。

「なんだ？ グンゾウ」

「話の腰を折ってすまない。ラツタイー准将の私兵はもつといたはずだが、同行者は君だけなのか？」

ヨシノが小さな声で、再びアキに「やっぱり、ハナシノコシって何……？」と訊いている。

ブリセイスはそれを無視して続けた。

「そうだ。他の者には継続して反攻部隊に加わり、敵の削りと陽動を続けてもらう。それは我々の救出作戦を辺境軍にも気付かせないためだ」

「……なるほど。あと、救出は8名だけで可能なのか？　リョータ小隊には盗賊がいないんで、隠密行動には不向きなんだが？」

「その辺りも含めて、作戦を説明する。最後まで聞いてくれると嬉しいんだが……な」  
グンゾウは謝意を表するために、頭を軽くと下げると黙った。

ブリセイスは、その様子を見て満足したのか作戦の全容を話し始めた。

## 18. セシリア救出作戦① 灰色エルフと最凶の暗黒騎士

ヴェールのもたらした情報は精度が高かった。

隠れ家の侵入経路から途中の目印、敵の配置まで、分かっていることは明確に、不明なことは不明である旨の記載があつた。

ブリセイスが手にしていた密書には、隠れ家の見取り図の周りに、繊細な角張った文字で細かくヴェールの注記が書き加えられていた。

——ヴェールは剛胆なようで、実は几帳面な性格なんだな。

とグンゾウは思った。

セシリア救出の作戦はそれに従って立案された。

救出班はブリセイスをリーダーとして、カレンとリョータ小隊の8名だ。敵の数は最低でも3倍以上いることが分かっている。

作戦は単純だ。

辺境軍で用意した隠密行動用の装備に着替え、最も敵との遭遇可能性が少ない経路を辿り、セシリアが居ると思われる部屋まで到達する。そして、元の経路を辿り帰る。途



中で遭遇する敵は皆殺し。とても野蛮で、単純だ。

ヴェールの情報によれば、10程度の敵と遭遇する計算になる。騒がれると3倍近い敵に取り囲まれる。そのため、全ての敵を短時間で沈黙させる必要があった。

グンゾウは作戦の最優先事項に「小隊の安全」を主張したが、ブリセイスの強い主張により、最大の優先事項はセシリアの救出となった。隠れ家への侵入が露見すれば、セシリアが別の隠れ家に移送されたり、最悪殺害され、今後の救出に望みが持てなくなる可能性があるからだ。

「私からもお願いします。どうか彼女の命を救ってください……」  
渋い顔をしていたグンゾウだったが、アキの一言で折れた。

セシリアは盲目であることが分かっているため、急いで脱出する際は、担ぐ必要がある。

彼女を担ぐ役目は、装備も軽く、基本的に戦闘へ参加しないグンゾウの役目となった。事前説明の後、グンゾウ達は装備を整えると、反攻部隊にも気付かれないよう、そつと出発した。

目の前には隠れ家の入り口。

最も使われていない出入り口Cだ。基地の北東にある森を抜けた先にある岩壁に開

いた小さな洞穴で、周囲には草木が茂っているため、ぱつと見では洞穴があることもわからない。

洞穴の入り口付近にはゴブリンが2匹くつろ寛いでいた。2匹とも短槍と盾を所持しているだけで、ほとんど裸同然のゴブリン達だ。その短槍と盾すら岩壁に立てかけ、座つて何か楽しそうに雑談をしている。

門番を任されているのだろうが、知能も土気も低いため、真面目に職務を果たしていない。

グンゾウ達は銘々森の中に潜み、ブリセイスの指示を待っていた。

「ブリセイスの指示通りに動く」、これが今回の救出作戦の規則ルールだった。あのカレンですら大人しく従っている。

黒い革鎧に身を包んだブリセイスが、ゴブリン達を2本指で差し示してから、左手で首を掻き切るような動作をした。

殺しの合図。

シムラが弓に矢を番つがえて、1匹のゴブリンを狙う。

「ピンツ」という弦の音が森に響くと、ゴブリンは糸が切れた人形のように倒れた。即死の時は、いつも同じ動きをする。

「ギャツ!? ギャツギャツ! ギャ……」

残りの一匹が驚きの声をあげ、角笛を手にしようとしたり。

しかし、ゴブリンの手が角笛に届く前に、ヨシノの片刃シの曲刀ミがゴブリンの背中に刺さり、もう一刀が喉笛を掻き斬った。

ブリセイスと同じく黒い革鎧に身を包んだヨシノは、鎖帷子チエイヌメルから解放され、明らかに動きの速度が上がっていた。目にも留まらぬ速さだ。ヨシノの後ろをドタドタと両手剣を構えて追っかけていたリョータが、ポカンとした顔になって止まった。

「リョータ、気を抜いては駄目っ！」

抑えているが鋭いアキの声。狼狽うろたえるリョータ。

用を足しにでもでかけていたのか、森の中からひよっこりと新手のゴブリンが現れた。リョータが一番近い。

「ギャギャッ！」

仲間の惨事に気付いたのか、短い叫び声を上げた。

「オームキシシ・レル・エクトキシシ……」

グンゾウの耳にハイドの詠唱が聞こえる。

次の瞬間、ゴブリンにアキが飛び込み、盾で顔面をひっぱたいた。分厚い金属が当たる鈍い音がする。

盾打だ。

彼女も黒い革鎧に身を包んでいる。

ゴブリンは脳震盪のうしんどうを起こしたようにその場で蹠跟よろろめいている。ゴブリンを打ち据えたアキは前転して、その背後に回る。

「……ヴェル・ダーシユキシツ！」

黒い藻のような影の精霊ダークシユが一直線にゴブリンを襲った。

影鳴りシヤドレイト。

弾けた影の精霊ダークシユがゴブリンの自由を奪う。

振動に震えるゴブリンの背後に立ったアキは、その延髄ロングソードに長剣を深々と突き立て、戦鬪を終わりにした。

長剣えぐを扶ひねるように捻り、ゴブリンの死を確実なものにしてから、アキはゴブリンから

長剣ロングソードを引き抜いた。そして、ルミアリスへの祈りは欠かさなかった。

「はへえ……、なんもすることねーわ」

リヨータが呟く。

リヨータとグンゾウは一連の動作を呆然と眺めていただけだった。

「……恐るべし連携。成長していないのはリヨータと俺だけなのか……？」

「油断はするな。4時間程で見張りは交替だ。行くぞっ！」

ブリセイスは短くそう言うと、洞穴の中を覗き込んだ。

洞穴の中に入ると、湿った温い<sup>ぬる</sup>空氣がグンゾウ達を包む。

この隠れ家<sup>アット</sup>は古代の原始的宗教の祭祀場の跡地を利用したものだ。洞穴はその祭祀場まで続いているはずだった。

洞穴の中は暗く、所々に曜華<sup>ヒカリギク</sup>が繁茂<sup>エメラルドグリーン</sup>されていた。誰かが人工的に植えたものだろう。暗闇に目が慣れてくると、涼しげな金緑色の光がだいぶ先まであることが見えた。

ブリセイス率いるセシリア救出小隊は慎重に歩を進めていた。実は慎重に歩を進めざるを得ない。足場は藻の生えた岩だ。

ゆるやかな下り坂と上り坂が繰り返されて奥まで続いていく。

道中、ヨシノが小さな声でグンゾウに尋ねてくる。

「グンちゃん。なんで、ゴブちゃんは敵の味方してるんだろー？ アラバキア王国に反対する組織と言っても人間なんだよねー？ 人間なのにゴブちゃんと一緒にいたり、変な生き物がいたり、どうしてなんだろー？」

ヨシノの素直な疑問。

正直、グンゾウにもよく分からなかった。変な生き物は、死者の肉体を使う死霊術<sup>ネクロマンシー</sup>という術によるものと理解していたが、人間と敵対する亜人種が一緒にいる理由は分からなかった。

「なんでだろうね？」

敵に見つからぬよう、黙って進むことが推奨されるため、グンゾウは短く応えた。

「灰色エルフだ……」

珍しくカレンが口を開く。リヨータパステイ小隊全員の視線がカレンに集中した。

「ここから北北東に300キロも行けば影森がある。……そこにはエルフという種族が住んでいて、その都、樹上都市アルノートウには、かつて5万人のエルフが暮らしていたらしい。その一派が灰色エルフだ」

「ほええええええ……」

ヨシノが感心をしたように、少し間拔けな声をあげる。

「キシシ、半裸ダークエロフフラグキタコレっ！ ……シシシシシシ」

ハイドがよく分からないことを呟いて、キシキシと笑っている。

「え、エロフ？ エルフじゃ……？ 私の発音の問題？」

真面目なアキが反応した。

「……しかし、不死の王ノライフキングが復活の折、灰色エルフは彼のかものに加担した。灰色エルフの離反によって、半数のエルフがアルノートウを去ったということだ。戦乱の後、美しいエルフの都是衰退の一途を辿り、今は3千人程しか住んでいないと言われている。……つまり、灰色エルフは不死の王ノライフキングに与くみした故、ゴブリンやオークと言った魔物とも友好関係

だということだ」

——カレンは修行の途中でも、結構こういう世界の常識を教えてくれるんだよなあー。

「へー、そうなんだーっ！ カレカレって物知りなんだねーっ！」

ヨシノが言った一言に、ヨシノ以外のリョータパージェイ小隊全員が固まる。

——カ、カレカレ……。やばい、どうしよう、殺される……。多分俺が……。

リョータ小隊パージェイの動揺とは裏腹に、カレンは特に怒る様子も無く話を続けた。ヨシノの性格については、ここ数日間で彼女なりに受け容れているのかもしれない。

「しかし、真に恐ろしいのは魔物ではない。灰色エルフそのものだ。エルフの都には古来から七剣、六呪、五弓と呼ばれる十八家の名門があり、剣舞師、呪医、弓使いの達人を輩出している。そもそもエルフ達は幼少期よりそれぞれ剣、呪まじない、弓の訓練を詰んでおり、我々から見れば全員十分な達人だ。それらが敵対する。それだけで脅威だ」

——弓……。？ どこかで嫌な思いをしたような……。？

「そうかー。あたし、オルタナで剣舞師ソードダンサーの話聞いた時にすごいピンときたんだよねー。

その時は、シエリーの酒場で見たすごい綺麗なエルフのお姉さんだったけど

……。  
クラスチェンジ  
 転職……。しよかなー」

「おお、ええね、ヨシノ姉さん。それならワイは、弓使い目指すでっ……。！ 弓の達人と

いえば、この……」

「うっせえ、黙れハゲっ！」

シムラがヨシノの話題に乗っかろうとしたのが気に障ったのか、リョータがシムラの発言を制した。リョータは洞穴に入ってから緊張しているのか、少し神経質になっている。

「確かにそろそろ、おしゃべりは終わりだ。洞窟を抜ける。遺跡の周辺には敵の歩哨がいることは分かっているが、人数は不明だ。油断するな。見つけたら静かに、そして迅速に始末するんだ。繰り返すが、人間は口が利ける程度に生かしておけ」

ブリセイスが指差した150メートル程先には、明るい光が射し込む出口らしきものが見えた。

——明るい？ 洞窟の奥なのに？

グンゾウはその明るい出口を不思議そうにぼんやりと眺めた。

「ふわっ……」

警戒をしていたはずだが、思わず声を出してしまうヨシノ。

皆、その気持ちが良い分かる。

洞窟を抜けた先は峡谷の底だった。しかし、そこには明るく広い広場が広がって



り、白く壮麗な石造りの神殿が姿を現わした。神殿は3階建て程の高さがある。神殿の周りには一層の壁があり、一部に楼たかのがついているものもあった。

——昔にもこんな立派な建物を建てる技術があつたのか……。その技術はどこから来たのだろうか？

谷底なので周囲を高い岩壁に囲まれているが、天井部は抜けている。そこは何かの植物に覆われていて、その隙間から弱々しい茜色の木漏れ日が注がれていた。

——もうじき日が落ちる……。

「あれ、結構でかいな……」

リョータが呟く。

グンゾウ達が出た洞窟の出口は、神殿の北側に当たる位置で、神殿の全容が窺えるわけではないが、相当な広さがあることがわかる。神殿の外縁部まで200メートル程だ。

「神殿の最上部にセシリア様はいるらしい」

ブリセイスは単眼鏡を取り出して神殿を見てから、背囊にしまった。

「ここから近い裏口から最初の門を突破するが、ここが一番の難所だ。5、6名の門番がいると密偵からの報告がある……。騒がれると後々が厄介だ。もちろん、騒ぎになったとしても我々には突撃しか選択肢は無い。セシリア様をゆつくり救う時間があるか、急

いで救うかの違いだけだ。いいな」

日が暮れていく静寂の中、緊張で唾液を飲み込んだグンゾウの喉が鳴った。リョータ小隊全員が緊張の面持ちで頷いた……、ひとりを除いて。

「密偵ちゃん、色々調べてすごいな」

緊張感の無いヨシノの声。

——そういうことじゃないような……。あつ……！

「……言いそびれてたけど……、辺境軍の密偵つてヴェールだよ……」

グンゾウの説明に、リョータ小隊全員が目を丸くする。

「はあつ!? てめ、何そんな大事なこと、今言つてんだよ、オッサンっ！」

「キシシシシ……グンゾウはアホ……そして、スケベ」

「さすがや……、ものっせいボケや……」

「そうかい、ヴェールちゃんかい、だからあの時、天望楼にいたのかい」

「……びっくり……」

銘々に色々な反応。

グンゾウは噛みついてくるリョータを手で押さえながら続ける。

「ああ、ごめん。別に命に関わる話じゃなかったから。でも、もしこの先遭遇しても、

『あつ!』とか言っちゃ駄目だよ。ヴェールも命懸けで潜入してるわけだからさ」

「だから、言うのが遅えつてんだよつ！　今までも遭遇の可能性あつたらうがつ！」  
たまに正しいことを言うリョータ。

「静かにしろつ！　そろそろ行くぞつ！　門は東、西、南にあるが、我々は階段に一番近い西側を目指す」

ブリセイスが一喝し、全員黙る。

全員意識を入れ替え、岩壁に沿って一列になって動き始めた。

岩壁と神殿の間には疎<sup>まば</sup>らな木立が広がっているため、グンゾウ達はなるべく目立たぬよう身を低くして移動した。

夜の闇はどんどんとその深さを増し、世界を黒色に変えていった。

——この夜陰<sup>やいん</sup>に乗じれば見つからずに門まで行けるな……。

グンゾウがそう思った時、ブリセイスが左手を上げて、全員が止まる。

ブリセイスが左手を振って前方を見るように指示する。

その指示された神殿の方から声が聞こえる。その方向には門があり、誰かが騒いでいるようだ。

「うおらあつ！　暗くなってきたから松明を点けろつてんだ、このウスノ口共があつ!!」  
声がる方に何人かの人集<sup>ひとだか</sup>りが見える。

正確には人ではなく、人ならぬ者も混ざっていた。

数人の人間が門を通ろうとしてるようだった。しかし、暗闇でよく見えない。全員その騒がしい声だけに集中していた。

「俺様がわざわざ盲目のお姫様つてのを興味本位で見に来てやったつてのに、美女のお迎えもねーのかよっ！ 酒くらい用意してんだろーな?! ミーリア! ヴェール!

お前から気持ちよく酌しやくくらいできんだろーなっ! この史上最強の暗黒騎士リంతタ様と同席できるんだから光栄に思えよっ! ぐわっはっはっはっ! どけっ! このボケアンデッド不死生物がっ!

——ミーリア……ヴェール?!

騒がしいその声が聞こえなくなると、しばらくして門の松明に炎が灯った。

松明に照らされた門の外には少なくとも3体の敵が見えた。実際には門の奥にもう少しいると予想された。

「よりよって……ついでないな……」

ブリセイスが呟く。

「どういうことだよ? ヴェールが居たつてことは仲間がひとり増えたつて事じゃねーのかよ?」

リంతタにしては珍しく抑えた声で質問する。

「そのことではない……」

その質問に対して答えたのは、ブリセイスではなくカレンだった。カレンは続ける。

「さつき騒いでいた愚かで下品な暗黒騎士……リントアがいたことが問題なのだ」

その後をブリセイスが継いだ。暗闇のため表情はよく見えないが、声から動揺が伝わってきた。

「……そうだ。半分はカレン師の言う通り。暗黒騎士リントアは元義勇兵にして賞金首。敵組織の幹部と目される人物だ。辺境軍では、天望楼襲撃で最も被害を出した中庭の戦いにおいて、兵士を殺したのは奴だと踏んでいる」

「ほへえ……、そう言えばヴェールちゃんもあたしと戦ってたもんねー」

——なるほど……俺がヴェールだと思っていた黒い影はあのリントアって暗黒騎士なのか……。リントア……暗黒騎士リントア……。どこかで似たような名前の暗黒騎士がいたような？

「……そして、これは辺境軍の一部しか知らされていないが、一緒に居たミーリアという灰色エルフは敵組織のN.O. 2……疾風とあだ名される剣舞師だ……。セシリア様誘拐の実行犯で、ひとりで天望楼内の近衛部隊を赤子の手を捻るかのように殺害して回った張本人だ……」

「え？ あの惨事をひとりで……?! 私は大量の部隊が突入してきたのかと……」

アキも震えるような声で疑問の声を上げた。アキだけは天望楼内部に配置されていたため、内部の被害状況を知っていた。

「キシシ……灰色エルフ……やばそ……う……？」

ハイドがグンゾウの後ろで呟く。

思わぬ状況の変化に戸惑うブリセイス率いるリョータパーティ小隊。

先が見えなくなる程に深まる暗闇の中、ブリセイスの双肩に重い選択肢がのしかかってくる。

## 19. セシリア救出作戦② ヴェールの策略

「……待機だ」

それが、しばらくの沈黙の後、ブリセイスの下した判断だった。

暗闇の中、全員がゆっくりと頷く仕草をする。……ひとりを除いて。

「いつまでだよ？ ……俺らは限界まで荷物を減らしてきてるから、水も少ねえし、食料なんて持ってきてきてねえ。つか、もう食った。そして、うんこしてえ」

——うんこは関係ない……。

リョータが真つ直ぐな疑問をぶつける。リョータに善悪の判断はない。ただ、思ったことを口にする。それだけだ。ブリセイスがそれに反論する。

「五月蠅い。上官の判断に従うのがこの使命の規則だったはずだ。……そして、うんこはその辺でしてこいっ！」

——あ、やっぱりうんこは気になったか……。

「んだとっ！ 俺はこんな落ち着かない環境じゃ気持ちよくうん……」

「ブリセイス。君の指示には全面的に従う。ただ、迅速に行動したい。突入と撤退の判断基準を共有してくれないか。それくらいいいだろ？ 相手の戦力が減るまで……と

か。このまま朝が来たら……とか」

議論が下ネタに向かいそうだったので、グンゾウは議論の方向性を正した。

——冒頭から議論がうんこじゃ、嫌になっちゃうからな。………なんのことだ？

「正直、あの2人を相手にこの戦力では勝てそうもない」

ブリセイスは軽く溜め息を吐いた。その語りぶりには諦念が漂っている。

「暗黒騎士のリンタは相対して生き残った兵士がいる。複数人で相手をすればなんとかなるだろう……。しかし、剣舞師のミーリアの強さは常軌を逸している。何せ、天望楼内で相対した者は手練れも含めて全員死んでいる。生き残った目撃者はセシリア様お付きのメイドのみだ。自分の恐怖伝説に箔を付けるために殺さずにおいた………という方が正しいかもしれない」

「護衛隊の大半は待機室にいましたが、通路を警備していた兵士のほとんどが反撃した様子もなく斬られていました」

アキがブリセイスの話を裏付けた。

——アキ……危なかったのね。

「だから、ミーリアがああから離れば、突入する。離れない場合は……」

そこで、ブリセイスは一息置く。悩んでいるのだろうか。主君イアン・ラツティールか



ら至上命令を与えられた身としては、次の言葉は口にし辛い。

「撤退……？」

待ちきれないグンゾウが言葉を口にする。悩んでいる女性の話は待つものだ。せつからは女性に好かれぬ。ブリセイスの返事には若干の怒気が籠もっていた。

「……仕方ないがそうなる。そして、朝までは待てない。裏口の見張りが死んでいることに気付かれれば、侵入者の搜索が始まるだろう。……つまり、2〜3時間以内に必ず動きがあるはずだ……」

——うーん……、あんまり良い情報がないな。

「……お主は密偵に期待しているのであろう？」

カレンが口を開いた。彼女の言葉は年寄り臭いが、身体が小さいせいからか、声は若い。可憐な少女のようにソプラノだ。グンゾウはその声音に心拍数が上がった。

「……そうです、カレン師。彼女はこちらの作戦に気付いているはずですよ。そうすれば、<sup>おの</sup>自ずと、作戦実行上ミーリアが最も障害になると考え、その隔離又は排除に動くはずですよ……」

ブリセイスの説明。暗闇の中であまり表情は窺えないが、その声は弱々しく、いつものような張りはなかった。あまりにも理が拙<sup>つたな</sup>すぎるからだろう。

——ヴェール頼りか……、そんなに都合良くいくだろうか……？ とはいえ、それを

言ったところで……か。

「まあ、そういうことなら、いいわ。俺は頭悪いから良くわかんねーしな。……うんこしてくる」

その会話でリョータなりに納得できたのか、そう言い残すと闇深い木立の奥へ消えていった。……うんこをしに。

「……リョータはん、逃げ道にせんといてやー……」

シムラが小声で呟いた。

小一時間もすると動きがあつた。

リョータパーティ小隊は交替で門の方向を観察していた。門番は恐らく6体。人間が3人に、不死生物アンデッドらしき巨体が1体、オークらしき亜人が2匹だった。オークも含め全員軽装備だ。

その門の方角が騒がしくなる。

複数人が出てきて、その内の1人が大声でがなり立てている。汚い声と言うより、不快になる声と言う方が正しい。

リインタだ。

松明に照らされて浮かび上がったリインタは、想像していたよりも小柄な男だった。小

柄と言つても戦士としてであつて、グンゾウと同じ位の身長はある。くしゃくしゃに曲がりくねつた黒い長髪を、後ろ頭でまとめていた。

リンタは誰かと口論をしているようだった。酔っているのか若干呂律ろれつが回つていない。

グンゾウ達は全員門の方へ注目し、耳を敬そぼだてる。

「てんめえー、ミーリアあ、俺様との酒が飲めねえつてどういふこつたい！ しかもヴェールう、貴様まで帰るとは巫山ふざけ戯てんのかつ！ 誰が俺様の酌と夜の相手をするんだつ！」

ミーリアと呼ばれた灰色エルフは頭巾フールドの付いた漆黒のマントを羽織つている。

「……我々エルフ族は貴様のように下賤ほんしよくの者と伴食せぬ」

「うつせえ！ この顔黒がんくろエルフがつ！ まぢ、ぶつ殺すぞ……」

リンタがそのマントを掴むと、頭巾フールドが脱げた。

ランタン  
行燈に照らされて、褐色の肌を持った灰色エルフの顔が浮かび上がる。

その造形は人間族における美しいという基準を遙かに上回り、美の理想を具現化した彫刻のようであつた。

額は緩やかで美しい弧を描き、その下にある二重の目は、切れ長で大きく、長く豊かな睫毛を蓄えていた。目の中にある黒く大きな瞳は潤み、白目は幼い少女のような碧あおい

輝きを持つている。

その眉間に細く高い鼻筋が続き、つんと立った小さな鼻先が付いていた。

鼻の先に下に見える薄く透き通った唇は、今日の前にいる男に対する不快感でへの字に歪んでいた。

「……死にたいのか？ 貴様など、首領の指示が無ければ今頃草木の肥やしだぞ」

「なんだとおう……やろつてのか？ やろつてのか？ 俺様の長剣『黒王』は固くて

長えーんだぞ、こら。まあ、ちよこーつち、早えけど、そこは脅威の回復力とだなあ……」

リンタの下ネタに呆れたのか、不愉快そうに眉を寄せたミーリアは頭巾を被ると華麗に半転し、リンタに背を向けて歩き出す。重力が無いような軽い足取り。

「……行くぞ、ヴェール。足下を照らせっ！」

「はっ……」

今まで、眉ひとつ動かさずに黙って立っていたヴェールがミーリアの後を追いかけた。そして離れ際、最後に警戒するような仕草で周囲を見渡す。誰にも違和感を抱かせない自然な動きだった。

——合図だ……。こうなることを仕組んだんだ……。ミーリアはヴェールが隔離するだろう。ヴェール……。とんでもないやり手、恐ろしい子っ！

「んだこらあらあーっ！ 無視すんじゃねーよ、傷付くだろーがっ！ この傷付いた心

を舐めて癒やせつ！ 左乳首中心に舐めろつ！ とにかく舐めろつ！ ざっけんなよおーっ!! ちよめちよめさせろつてんだ、この売女ほいた共めえつ！」

両手を挙げて抗議するリンタを周囲の男達が宥なだめる。その様子を、オークラしき亜人が馬鹿にするようにニタニタと下卑た笑いで眺めている。

「まあまあ、リンタさん、戻って中でやりましょうよ……」

「うっせえっ！ 野郎ばかりの宴会なんてしたくねーんだよっ！ 畜生っ！ あの盲目のガキをやつちまうぞ、ごらあつ！」

「リンタさん、首領に怒られちゃいますよ……」

「うるせー……」

——三次会の面倒臭い課長かよ………カチヨウ？ 誰だっけ？

騒がしいリンタの叫び声は神殿の中に吸い込まれていき、段々と小さく聞こえなくなつていった。

「ブリセイス……」

グンゾウがブリセイスに声をかける。

辺りが静寂になるまで黙って観察していたブリセイスが暗闇の中で口を開く。

「よしっ！ 突入の機会チャンスだ。この先は迅速に動く必要があるから、今後の動きについて再度確認するぞ。全員暗記してらるだろうなっ！ まずは……」

賊の歩哨は眠かった。

先程、何度目かの欠伸あくびをかみ殺した。毎晩のように門を警備しているが、敵の襲撃などに遭ったことは無い。

無駄な作業。そう感じていた。もう少し我慢すれば交替の時間で、夕飯にありつける。

眠さを抑えるために神殿の壁に取り付けられた松明の灯りをじっと見詰めた。

灯りは周囲を茜色に照らす。

照らすと言っても、15メートルも離ればそこは漆黒の闇。

つまり、光に包まれた中にいる者達は、闇に潜む者達からすれば格好の獲物だ。

最初に気付いたのは目の端に映った光るものだ。それは闇の中に潜んでいた。

「んっ。」

歩哨の男は闇に向けて目を凝らした。

「どしたー?」

のんびりした声で仲間が声をかける。仲間の方を向いた歩哨は髪の毛を掻き上げた。

「あー……、いや、何か向こうで光ったような気がしたから……」

と言って振り返った男の目に、鬼のような形相の女騎士の顔が映った。

ブリセイスは一撃で歩哨の首を刎ね飛ばす。見事な居合い切り。リョータ小队は賊に対して三方から一斉に襲いかかった。

「どうなっているっ!」

ブリセイスが確認する。

「オークンはあと一匹なのよっ! ほいちよつと、よつと、2番、はいよつと、5番っ!」

ヨシノがよく分からない番号を数えながら、舞っていた。ヨシノは不意打ちでオークの後ろ首を半分切断し、今は次のオークと戦っている。不意打ちとは言え、オークの固い首を深々と斬り付けるためには、最も速度が出る瞬間に、最も威力の乗る剣先を当てる必要があり、相当の感性を要する。

「ごめんなさいっ!」

ハイドの影鳴りで震える賊Aの頭をアキが盾打で思いつきり叩いた。左右往復で2回。賊Aは意識を失い崩れ落ちる。

賊Bもカレンの強打を頭部に受け、既に地面に伏していた。

一番苦戦をしているのは、不死生物と戦っているリョータだった。

「なんなんだよっ……こいつっ!」

不死生物は人型で、爬虫類を想像させる鱗状の肌は、黒く、鈍い光を放っていた。体

長は2メートル近くある。背の高さの割に幅はそれ程なく、ひよろつとしていた。頭部には目なのか、光るガラス玉のようなものが3つ嵌まっついて、腕が異様に長い。

片腕だ。

2本のあった腕の内、右腕は最初の不意打ちでリヨータが叩き落とした。

しかし、片腕が落ちた損傷を感じさせること無く、長い左腕を全力で振り回し、リヨータに攻撃を加えている。

「ぐわっ！ あぶぶぶ……」

リヨータは不死生物の攻撃で両手剣ごと吹き飛ばされる。膝を突いた。

「油断するなっ！ 不死生物は痛みを感じない。動けなくなるまで細かくバラせっ！

素早くっ！ 静かにだっ！」

ブリセイスはリヨータに楯を飛ばしながら、ヨシノと戦っていたオークの膝頭ひざがしらを長剣

で斬り付けた。オークが体勢を崩す。

こうなるとヨシノの相手ではない。

ヨシノが両手に持った2本の片刃シの曲刀ミを律動的リズムに繰り出して、オークを追い詰めていった。

「鎧着てないオークなんて、シフォンケーキみたいなものよー！」

ヨシノの発言に、賊Aの手足を縄で縛っていたアキが反応する。その隣には、賊Bが



亀甲の紋様のような独特な縛られ方で転がっていた。傍かたわらでカレンが暇そうに突っ立っている。

「それって……、見た目は大きくても、柔らかくてペろつと食べられるって意味？」  
「違うっ！」

ヨシノはオークの反撃を左刀の峰で滑らすと、右刀で無防備な脇腹を深々と斬り付けた。鎧では守られていない。オークは痛そうに傷口を押さえ、動きが鈍い。完全に弱っている。

「紅茶が無いとー……」

オークの後ろに回り込んだヨシノは両刀を振りかぶって、流れるような動作でオークの背中に突き立てた。

「口の中がパサパサするってことーっ!!」

ヨシノはオークの背中を蹴って、後転跳びで離れる。オークは背中に刀が刺さったまま、うつ伏せに倒れた。

「……ごめん、ヨシノちゃん。……その例え、全然意味が伝わらなかつた……」

アキは疲れたように項垂うなだれる。その肩を無表情のカレンが優しく叩いた。

「アキっ！ 遊んでねーで、俺様とブリセイスをフオローしろっ！」

リョータがアキを呼ぶ。不死生物アンデッドの鞭のように撓しなる長い腕に苦戦していた。既にブ

リセイヌも加勢しているが、2人とも盾が無いので、間合いを詰めることができない。

「あつー！ はいっー！」

アキは跳ねるように不死生物<sup>アンデッド</sup>へ向かう。

カレンはアキの縛り方が気に入らなかつたようで、アキが離れると賊Aの縄をほどき、恐ろしく慣れた手付きで新たに縛り直し始めた。

その様子をハイドが見て頷く。

「シシシシ……ドSの美学……シシ」

リョータ達が奮戦している頃、グンゾウとシムラは戦場をこつそりと抜け、神殿入り口に向かっていった。

暗闇の中、自分達の行燈<sup>ランタン</sup>が標的にならぬよう、覆いで隠しながら慎重に歩を進める。

神殿の壁の一部に光る部分を見つける。入り口だった。入り口は長方形の板を何枚か並べて作ったボロボロの木戸で出来ていた。板の隙間からうつつすらと中の光が漏れている。

周囲に人が居ないことを確認してから、グンゾウは木戸の隙間から中を覗いた。薄暗い廊下が続いていて、人影は見えない。扉が入ってすぐ右手に階段らしきものがある。

——よし……、誰もいないな。

入り口の扉を慎重に引くと、蝶番が嫌な音を立てて、木戸は開いた。

「鍵も掛かっていない。これなら簡単に侵入できる。灯りを焚こう。シムラ……」

グンゾウが手を伸ばすとシムラが松明を手渡してきた。

その松明にグンゾウは行燈ランタンの火を移す。パチパチという音を立てて、松明が燃え始めた。松明は入り口に掲げる場所があつた。

「なんや、みんなが戦っている時に、自分達だけ参加しないのは気持ち悪いですねー」

シムラが周囲を警戒しながら、イガグリ頭を掻いた。

「弓矢構えという……。まあ、リョータ小隊パーティーじゃ、シムラが唯一斥候のできる職業クラスだし、カレンが居たら、戦闘じゃ俺は用無しだしな。斥候も大事な仕事さ……」

グンゾウはシムラに声を掛けると、木戸かんぬきの門を壊し始める。

木戸は経年劣化でボロボロなため、門かんぬき 錠かぎが道具も要らずに取れそうだった。

シムラは真剣に弓矢を構えている。

時折グンゾウの耳に、神殿の奥から乱痴気騒らんちきさわぎの音が僅わずかに聞こえてきた。

——ついでな。あれだけ騒いでれば、こちらの音は聞こえないか……。

門かんぬき 錠かぎが付け根からボロりと取れる。

「よしっ、門かんぬきを壊した。これでもうこの木戸は閉まらない……」

グンゾウがシムラの方を見ていると、シムラが真剣な顔をして壁の方を見詰めてい

る。

「どうした？」

「誰か来ますっ！」

グンゾウが見詰めると、確かに<sup>ランタン</sup>行燈の灯りが近付いてきている。

「一旦、ここから離れよう。リョータ達じゃなかったら、やばい」

「はい……」

グンゾウとシムラは神殿入り口から離れ、暗闇に身を潜めた。

しばらく観察していると、ブリセイスを先頭にリョータ<sup>パイティ</sup>小隊の面々が松明の灯りの下に現れた。不思議なことにリョータだけ上半身裸で兜が焦げて半壊している。

「……大丈夫だったか？」

グンゾウが声を掛けながら現れると、一瞬全員身構えた。ヨシノは一瞬で抜刀する反応の良さ。シムラもグンゾウの後ろに続く。

「おわつと、殺さないですよ。……どうしたの？ リョータ」

全員、若干暗い顔をしている。特にリョータが。

「……最期……火を噴きやがったんだよ、あの化け物」

「火……？ 不死<sup>アンデッド</sup>生物が？」

「鎧も小手も燃えちまった……。革だったから……。兜も……」

「なんでもありだな……、てゆうか、お前大丈夫だったのかよ？」

「大丈夫じゃない、からカレン師が光の奇跡サクラメントを使った。ぐずぐず無駄話をしている暇は無い。行くぞっ！　ここから先は密偵の情報が少ない。緊張しておけ」

ブリセイスが割り込んだため、会話は終了。全員足早に、神殿内部へ侵入を始めることになった。

——大丈夫じゃない……。光の奇跡サクラメントを使うって事は命の危険があつたってことだな。

無駄に待機の時間があつたからか、ブリセイスには焦りの様子が浮かんでいる。

そして、焦るブリセイスの後を全員急ぎ足で追う。

神殿内部に入ると、湿気を含むひんやりとした空気が身体を包んだ。

宴会から漏れる声から予想して、敵のほとんどは1階の奥にある広間で宴会を繰り広げているようだった。

グンゾウ達には関係が無い。グンゾウ達は、入ってすぐ右にある階段を上り、最上階の4階を目指す。階段は石造りで、壁に沿って最上階まで作られている。

——これなら無駄なく辿り着けそうだ。

ブリセイスを中心に、ヨシノ、カレンと続く。グンゾウの前にはリョータツヴァインダーがいた。上半身裸のリョータが両手剣を直接背負っている。

——裸……うける。

「キシキシ……裸、うける……キシキシ」

グンゾウの後ろでハイドが呟いた。

——やべっ！ ハイドと感想が被ってしまった。

グンゾウの額から汗が出た。ハイドと思考が被るのは何とも言えない気恥ずかしさがある。誰にも気付かれないように、そつと額の汗を拭った。

当初の予想通り、4階まで簡単に辿り着くことができた。

「4階のどこかの部屋から梯子を登れば、セシリア様が監禁されている部屋だ。ただし、どの部屋に梯子があるかは……わからない」

「おいおい、まじかよ……、入った部屋で敵が寝てたらどうすんだよ」

ブリセイスの説明にリョータが文句を言う。

「敵のほとんどは1階だ。寝室も2階で、4階はあまり使われていないとのことだ。それに……梯子の前には牢番くらいいるだろ。やるしかあるまい？ 行くぞ、抜刀せよ」

ブリセイスは自身が抜刀すると、4階の最初の部屋を覗いた。部屋と言っても扉は無く、壁で仕切られた空間というだけだ。行燈で満遍なく照らしても最初の部屋には何もなかった。

奥まで続く廊下をゆっくり歩む。部屋があれば確認する。同じ作業を繰り返した。

いつ敵と戦闘になるかもしれない緊張で、グンゾウの戦棍メイイスを握る手に汗が滲んだ。それは他の仲間も同じだろう。

何度かの緊張と安堵を繰り返し、神殿4階の廊下を進む。

——長いな……。

とグンゾウが思った時、廊下の奥から光の漏れている部屋が目に入った。

「ブリ……」

グンゾウが口になると、ブリセイスも気付いたように手を挙げて制した。

その手を握る。

人差し指だけ残し、それを自分の口に持って行った。

「しっ……。行くぞっ！」

今まで以上に慎重に、誰ひとり声を上げること無く歩を進める。部屋の前まで来ると

ブリセイスは光の漏れる部屋の前に手鏡を差し入れた。

左手の指が1本立つ。

——敵は1体っ！

リョータバイテイ小隊の全員が武器を構えると、ブリセイスは自ら斬り込んでいった。

続いて、ヨシノとリョータが飛び込んだが、既に事は終わった後。

そこは6メートル四方程度の部屋だった。

部屋の真ん中には、胴を真一文字に斬り裂かれて死んだゴブリンが1体。

その傍には、木の机と椅子、その上には洋燈ランペン。壁の棚には本やカード等の娯楽用品が転がっていた。そして……。

「これだ……」

部屋の端に木でできた梯子がある。天井には四角い穴。

ブリセイスはグンゾウ達を振り返りもせずに登り始めた。

「おいおい、ちよつと焦りすぎだろーが?」

裸リョーの大将が声を掛けたが、ブリセイスに無視された。グンゾウはリョータに「お、おむすびは美味しいんだな」って言って欲しいと思った。理由はわからない。

ブリセイスが登り始めたので仕方なく、リョータパイヤ小隊も順番に梯子を登り始める。ブリセイスの後をヨシノが、その後をカレン、リョータ、グンゾウ、ハイドと続いた。シムラとアキは背後を警戒している。

「セシリア様っ! セシリア様っ!」

ブリセイスの声が聞こえる。

グンゾウが梯子を登ると、そこは先程の部屋と同じ位の小部屋だった。部屋の半分は鉄の格子で仕切られていて、その向こう側にはベッドや机、整理筆筒だんす等、最低限の家具らしくものが置かれていた。部屋に灯りは無い。



そのベッドの上で動く人影があつた。

暗闇の中、ゆつくりと上半身を上げて、そのままじつとしている。

「灯りを……」

そう言つて、グンゾウが<sup>ランタン</sup>行燈を向けると、<sup>だいたいいろ</sup>橙色の灯りの中にひとりの少女が浮かんだ。

## 20. セシリア救出作戦③ 囚われの美女

橙色の灯りの中に浮かんだ少女は、怯えたように震えていた。

少女は13〜4歳程に見えた。もしかしたら、もう少し幼いかもしれない。真つ直ぐで柔らかな金髪ブロンドに、透き通るような色白の肌。美少女と言つて間違いない。光を失っていると聞いていた通り、明るくなつた部屋でも瞼は閉ざしたままだつた。

「セシリア様っ！ ブリセイスでございますっ！」

ブリセイスが叫ぶと、強張こわばつていた少女の表情が少し緩む。

「ブリセイス？ ブリセイスなの……、私は助かるの？ ……ぐずつ、ひつくひつく

……」

嬉しかったのか、または、安心したのか、突然セシリアと呼ばれた少女は泣き始めた。

「はい。もうしばらくの辛抱です。今、ここからお出します。……くそっ！」

ブリセイスが鉄格子を開けようとしたが、当然鍵が掛かつていて開かなかつた。苛立ち、ガシヤガシヤと音を立てる。感情的になつて、冷静さを欠いている。

——鍵は牢番でしよ。

グンゾウは階下のシムラに呼びかける。アキとシムラが階下で警戒に当たつていた。

「おーい、シムラー。ゴプリンが鍵持ってない？」

「あいーんつと……、ちよつと待ってやー。……これでつかー？」

シムラーがこれを放る。

グンゾウ達が登場してきた穴から、鈍色にびいろに光る金属製の鍵が飛び出してきた。

「それだよ、それっ！」

鍵は尖った放物線を描いて、重力に引かれていく。再び穴に戻る寸前、カレンがスタッフの先端で上手に受け止めた。そのまま弾いて、ブリセイスの手元に飛ばす。

見事な杖捌さばき。

「おおっ！ カレカレすごいっ！ どうやるの？ 教えて、教えてー」

ヨシノが感心して、キャツキャツと騒いだ。カレンは冷静な様子を見せていたが、内心嬉しそうだった。全く共通点のないふたりだが、相性が良さそうに見えた。

ガシヤリと音がして牢の鍵が開く。

「セシリア様っ！」

ブリセイスが牢の中に入り、セシリアの手を引く。セシリアは怖々こわこわとする様子もなく、目を瞑つむったまま歩いて牢屋を出たきた。近くで見ると、その整った容姿が分かる。そして遠目よりも幼なかった。

「ありがとう、ブリセイス。そして、従者の方々……」

セシリアは着ている服のスカート部をつまんで軽く礼をした。服の裾はすり切れ、裸が目立つ。これまでの旅路が快適なものではなかったことが窺えた。

「従者……？」

リョータが不満そうな声を出した。上半身裸の男は従者というより奴隷か山賊に見える。ヨシノが肘でリョータを突いて喜ばせた。肘打ちはご褒美。

「急いで脱出するぞっ！」

ブリセイスが言う。

すると、突然ハイドがセシリアに歩み寄り、背を向けてしゃがんだ。

「えっ？」

異口同音。全員が同じ声を漏らした神殿最上階の牢屋前。

「シシシ……ど、どうぞ、ミミス・ヴェドイー、ワタクシの背中にお乗りください……シシ」

ハイドはセシリアを促すように、後ろ手でセシリアの足下を触った。

「え?! わ、私のこと？」

セシリアが突拍子もないハイドの言行に戸惑ってしまう。リョータ小隊もハイドの不意の行動に動きが固まってしまった。

——はわわわわ……。今度はお偉いさんの娘。しかもこんな幼気な少女にやらかす

のか……。

「こらっ！ 気安く近付くなっ！ 触るなっ！ セシリア様のお付きはグンゾウと決めているっ！ グンゾウっ！ 早く背を貸すのだっ！」

ブリセイスが慌ててセシリアの手を引くと、グンゾウの近くに連れてきた。

「はいはい。セシリア様。ルミアリス教の神官でグンゾウと申します。ここはまだ敵地で、変な奴もいるので危のうございませうから、不肖私めが、セシリア様のご案内を致します。ささっ、こちらへどうぞ」

そう言うくとグンゾウはセシリアの手を取って、自分の肩を掴ませた。

「梯子を降りますので、その間だけしがみついていたいただけますか？」

「は、はい。よろしくお願い致します。神官さま」

ルミアリス教が広く信仰されているアラバキアにおいて、神官は一定の信用と尊敬が得られる。セシリアはグンゾウを信用して、すぐに背中にしがみついた。

セシリアが負ぶさると、その控えめな胸がグンゾウの背中に触れる。薄布越しに柔らかな感触が伝わってきた。素敵な感触。

——おっ………思ったより柔らかか……、いや、いかん、いかん。俺は神官なんだぞ。それに幼すぎる……。邪念は捨てねば……、ニヤケた面して、アキの所には降りられないし。

しかし、グンゾウの反省が次回に活きたことはない。特に下半身に關しては絶望的だ。

相変わらずの無意味な反省をしながら、グンゾウは梯子を降りた。

セシリアは痩せているとは言え40キログラム近くある。グンゾウは1段1段、慎重に下がっていった。グンゾウの頭が完全に床の下に入る直前、ハイドが目に入る。

「キシキシ……これで十分……シシシ……深いぜ」

——深い？ 何が？

ハイドはグンゾウに理解できないことを呟いていたが、いつものことなので聞き流すことにした。

——相変わらず……変な奴。

グンゾウを見て、アキの表情がぱっと明るく輝く。グンゾウは思わず嬉しくなって、照れ笑いしてしまった。ただ、正確にはアキはグンゾウの後ろに背負われているセシリアを見ていた。

「セシリア様っ！」

——ですよねー。

「その声は……アキ？ 生きていたのですね。良かった……っ！」

その後、一頻りアキとセシリアであの夜について盛り上がって話していると、上の階からブリセイスやカレンとリョータ小隊の面々が続々と降りてきた。

「では、行きませう。ここからは見つからないことが重要です。静かに、急いで……」

——なんだか……既に随分騒いだような気がするけど……。

全員、黙って静かに出口へと向かう。

グンゾウの予想に反して、1階まで敵に遭遇すること無く進むことが出来た。

もうすぐ神殿の出口というところで、カレンが異変に気付く。

「待て……」

「カレカレ、どうしたのー？ もうすぐ出口だよ？」

ヨシノが首を傾げた。

「しっ……」

カレンが目を閉じて、じっとしている。

「カレン師……早く行きませう。賊に見つかるっ！」

ブリセイスが焦っている。皆も敵の隠れ家アジトにいる緊張から逃れたいため、早く出口に向かいたい気持ちで一杯だ。カレンだけ冷静に遠い目をしている。小さな顔に少し尖ったあごが可愛らしい。

——性格ぶがなあ……。

グンゾウが関係ないことを思い始めた頃、カレンが呟く。

「……音がしない……」

全員が息を飲む。

気が付けば、1階奥の部屋から宴会の乱痴気騒ぎらんちきさわの音がしない。

「もう寝ちまつたんじゃねーの……」

リョータが樂觀的な意見を出したが、誰も同調しない。あれだけの大騒ぎがこの20分足らずで収まる訳が無い。となれば、理由はひとつ。

「露見したか……っ！」

ブリセイスが唇を噛む。

「できればセシリア様をお連れして強行突破は避けたかったのだが……、致し方あるまい」

ブリセイスが長剣ロングソードを抜こうとした。逸るブリセイスをグンゾウが抑える。

「おいおい、待って待って。西門はまずい。西門の警備が全部殺やられてるんだから、敵は西門に戦力を集中して構えてる確率が高い。西門以外から出よう。例えば反対の東門なんかどう？ そもそも他の門はどういう状況なんだ？」

ブリセイスは咄嗟に記憶を探る。

「東門はここから遠い。そして、この峡谷から出る洞窟も遠いのだ。南門は最も大きい



門で丈夫にできている、壁に楼たかのもあり、ここを兵で固められた場合、戦力差がないと突破が厳しい」

「どう………思いますか？ 修師マスタカレン」

グンゾウが訊くと、カレンは眉ひとつ動かさず答えた。

「貴様の答えは出ているのだろうか？」

「まあ、そうですね………ここは師匠の意見も聞かないとです」

「………私なら………」

「どうらああああーっ！ バレてるならしようがねえ、派手にやってやんぜっ！」

リョータが上半身裸のまま派手に突っ込む。飛び出してきた賊に斬り付けると、そのまま力で押し倒した。

「リョータは逆に賊にしか見えないから安全かも………」

盾を構えて先頭を走るアキが的確な指摘をした。

「セシリア様、手を離さないでくださいねっ！」

グンゾウはアキの後に続く。グンゾウの台詞セリフにセシリアは黙って頷くと、グンゾウの手を強く握った。

「敵の数は少ないっ！ 一太刀浴びせたら突破するんだっ！」

ブリセイスが行燈ランタンを振って指揮をする。全員走って東門を突破する。

「ほら、ドイハっち、死んじやうよっ！ 走って、走って！」

「ブヒシシシ、ブヒツ、フヒンツ、キシシ……」

ハイドのお尻を叩きながらヨシノも走っている。通りすがりに、賊の腕を切りつけて無力化した。

「シムラっ!!」

ブリセイスの声。

「あいーんっ！ 速目はやめっ！」

シムラが矢を放つと、賊の持っている行燈ランタンが壊れた。走って止まっただけの繰り返しなので、それほど命中率は高くないが、速目はやめの技スキルと天性の才能で、次々と敵の灯りを奪っていった。

「松明だっ！ 松明持ってこいっ！」

「西門と、南門に連絡するんだっ！ 全員、東側に連れてこいっ！」

賊は灯りを奪われて、だいぶ混乱をしている。

カレンとグンゾウが選んだ選択肢は東門の突破だった。ふたりとも盲目のセシリアを抱えての強行突破は無理と判断したのだ。このふたりの意見の一致に反論する者はおらず、選択が採用される。

一番の問題点は、峡谷を抜けるための洞窟までが遠いことだった。門から洞窟まで2キロメートル程ある。一旦洞窟に入ってしまったら、入り口に障害を作ったり、効率的に敵を防ぐことができるが、そこまでの平地で襲われると、囲まれる可能性があり危険だ。敵の方が数が多い。

また、行きに通っていない道であるため、不案内だ。暗闇の中では早くとも30分はかかる。

「はあ、はあ、駄目だ……苦しい……。もう、ちよつと走れない……」

「はあ、神官さま、私も……はあ、ちよつと、休みたいです……はあ、はあ」

グンゾウはセシリアと共に暗闇の中、止まって、息を整える。

周囲を見渡すと、灯りが前後に見え、ずっと後方には神殿に集まる灯りが見えた。神殿の周囲に集まった灯りはまだ動き始めていない。指揮系統の乱れだろうか。

グンゾウ達は3つに別れて逃走していた。

前方で灯りを持っているのはブリセイス、ヨシノ、カレンの隊、後方はリョータ、アキ、ハイド、シムラの隊だ。

グンゾウとセシリアは灯りを持たず、前後の灯りを頼りに、月明かりの中を進む。灯りを持っていなければ、敵に見つかりづらいと考えた。逆に灯りを持っている2隊は囲の役目だ。

無防備なセシリアだけは守らなければならぬ。

グンゾウは後ろの隊を見る。

——リョータ達がゆっくり歩いていいるとは言え、追いつきそうだな……。

「はあ、はあ、セシリア様、ゆっくりでいいので歩きましょう。ブリセイスの隊と離れすぎてしまいます」

「はい……、頑張ります。はあ、はあ」

グンゾウはセシリアの手を引いてゆっくり歩き出す。

——癒<sup>キュ</sup>し手<sup>ア</sup>や癒<sup>ヒール</sup>光<sup>ル</sup>で持久力も回復すればいいのに……。

暗闇の中、黙々と歩き続けるグンゾウとセシリアだったが、リョータ達に追いつかれる。

「こらっ！ 遅<sup>おそ</sup>いぞ、オッサンっ！ 追いついちまったじゃねーか。やつぱオッサンは体力ねーな、使えねー」

——うるせえ……。

「もうすぐ洞窟だから、もう合流しましょう。なんだか神殿の方の灯りは動きが無いようだし。セシリア様もお疲れでしょう？」

アキが合流を提案したので、グンゾウはそれに甘えることにした。

「なんか、前の灯り減ってまへんか？」

シムラがブリセイス達の方を指し示す。全員がその方向を見ると、ブリセイス、ヨシノ、カレンで3つ有った灯りが今は1つになっている。

——普通に考えれば、ブリセイスとヨシノが戦闘に入ったということか？

「少し急ごう……。アキ、セシリア様を任せてもいいかな？」

「は、はいっ！ もちろんです。グンゾウさん」

「セシリア様、これからはアキが護衛します……」

グンゾウはセシリアの手をアキに渡す。革手袋越しのアキの手に触れ、それでも少し嬉しい。

次にその右手で戦棍<sup>メイ</sup>を握りしめた。

「リョータ行こう……。多分、敵がいたんだ」

「お、おう！」

「シムラとハイドも付いてきてくれ」

「あいよつと」

「シシシシ、仕方ない……」

「アキはセシリア様を連れてゆっくり来てくれ。もし、神殿の敵が近付いてきたら、急いで欲しいけど……」

「はい、わかりました。慎重に近付きます」

グンゾウはアキに向けて深く頷いた。

「行こう……っ！」

ひとつ深呼吸。そして、リョータ達を引き連れると早足でブリセイス達の灯りに向かっていった。

グンゾウ達が到着した時、洞窟の前ではまだ戦闘は行われていなかった。

カレンがスタッフの先端に<sup>ランタン</sup>行燈を引っかけて、周囲を照らしている。

ブリセイスとヨシノは抜刀し、構えた状態で一点を見据えていた。

その視線の先には予想外の人物がいた。

「おんやーっ?! やっぱり、全員集まっちゃう感じかなー? 俺様の読みつてば、やっぱ最強だな。読みきつて洞窟に先回りとか、超かっこよくね? 怖い……、完璧すぎる俺

様が怖い」

<sup>ランタン</sup>行燈の灯りが照らすその先には、暗黒騎士のリンタがいた。

「でも、おっかしーな……あの盲目少女がいねーんじゃねーの? もしかして、もう少し待ってると来るのかなー?」

「来ないっ! もうセシリア様は先に洞窟に入った」

ブリセイスが嘘を吐く。バレバレだ。ブリセイスはあまり嘘が上手くない。人間と

しては好感が持てるが、真っ直ぐすぎる武人だ。当然のことながらリントは少しも信用した様子でない。

「ふうん……。まあ、この場所が本命つてことね。まあいいわ。少し待ってたけど女は増えないし、お前等と話すのも飽きたから、そろそろ男は殺して、女は半殺しにでもして犯すか……。くつくつく、やばい……。楽しくなってきた。ひやつはーっ！ 色んな意味で天国見せてやんぜっ！」

そう言うのとリントは腰に着けていた長ロングソード剣を抜いた。

次の瞬間、不思議な足捌あしはばきで、直線的に移動するとブリセイスに斬りかかる。

「憤慨突っ!!」

——速いっ！ ヴェールと同じ動きっ！ あれは暗黒騎士の技スキルなのか？

ブリセイスがなんとか受け太刀をすると、リントは反転して隣のヨシノに斬りかかる。

ヨシノが慌てて両刀で斬撃を防いだ。

そして、次の瞬間、リントはくるくると回転しながら、5メートル程後退して離れた。

流れるような一撃ヒットアンドアウェイ離脱。

「あれれー？ これくらいは大丈夫か……。俺様が酔ってるからか？ なんだな……。ま

あ、そこそこ楽しめそうじゃーん？」

リンタはヘラヘラとしながら、自分の長剣<sup>ロングソード</sup>を舌で舐めた。そして、再び腰を落とした戦闘態勢になる。

張り詰めた空気が漂う。

リンタは動きが狡猾で素早いので目が離せない。

——あの攻撃……。後衛は距離を取らないと危ないな……。

「グンゾウ、持っっている……」

カレンがスタッフの先に付けた行燈<sup>ランタン</sup>をグンゾウに預けてきた。

——カレンも戦闘に加わるのか?!

グンゾウはその行燈<sup>ランタン</sup>を受け取ると近くの木の枝に掛けた。そして、そのままシムラの耳元に近付き、囁いた。

「アキに……。セシリアと暗闇に潜んでいるように伝えてくれ……。それとシムラは少し離れたところから狙えるか?」

シムラは神妙に頷くと静かに暗闇へ消えていった。

——ハイドは……?」

グンゾウがハイドを探すと、相変わらず上手いこと暗がりになしがんで身を隠しているのを見つけた。

——あそこなら大丈夫か……。俺も危ないから気を付けないと……。



グンゾウは戦棍<sup>メイヌ</sup>を両手で構えると、いつでも咎光<sup>フレイム</sup>が放てるように心の中で準備した。「グンゾウさんっ！」

グンゾウはアキに声をかけられて驚く。しかし、その顔を見て心が安らいだ。

「ど、どうしたの？ ……………セシリアは？」

最後の方は小声になる。

「シムラ君に任せました。シムラ君から、リインタが居ると聞いて…………、リョータが裸ですし、装備が厚い人間も必要だと思って支援にきました」

「そっか…………、ありがとう。今、加わるのはちょっと危なそうだから、誰か怪我をした時のために飛び込む準備をしておいて」

「はいっ！」

アキは素直に返事をしてから、両手でガツポーズをした。伏し目がちの少し垂れ目だが、眉根をぎゅつと寄せて、頑張る感じが出ている。

——純粹にかわいい…………。

「働け、ベーすけ…………キシキシ」

「うわおっ！」 相変わらず突然現れるハイドがグンゾウの後から話しかけてくる。「なんだよ?! どうかしたか？」

「見ろ。神殿の灯りが動き始めた…………キシ。あと30分もしたら、敵に囲まれるぞ、シシ

「シ」

「なんだと?!」

グンゾウが神殿側を眺めると、集まっていた松明の灯りが列を成して移動し始めていた。その数はざっと見出し10以上ある。

——やばい……。なんで位置がばれたんだ?!

「ブリセイスっ! まずいぞっ! 敵の本隊に位置がばれたっ! 囲まれるっ!」

グンゾウが叫ぶと、返事したのはリンタだった。

「ひゃっはーっ! 今頃気付いたのかっ! 俺様が無駄に女に手を出さずにぶらぶらさせてる訳ねーだろっ! 雑魚達が無駄に動かないように、各出口に2人ずつ配置して、伝令を走らせたんだよ。まあ、ここに俺様がいたのは本当に読み勝ちだけだっ!」

——うっ! こいつ、ただの性格破綻者じゃねーのか……。

「ならば、今、独り<sup>ひと</sup>の貴様を倒して、進むのみっ! やーっ!」

ブリセイスは掛け声と共に袈裟斬<sup>けさぎり</sup>りを繰り返す。剣の反射光が素早く円弧を描き、残像が闇に消えていく。しかし、剣先が捉えたはずのリンタの影像も同様に、揺らぐ残像のように消えていった。

「どこに……っ?!」

「だあーっしやーっ! 憎悪斬<sup>ヘイトレッド</sup>おあああーっ!」

暗闇から突然ブリセイスの後に現れたリンタが、逆に袈裟斬りを繰り出し、ブリセイスの背中を捉える。頑丈な革鎧が裂け、剣先が背中に達した。斬撃の鋭さの証明だ。

「がはっ!」

ブリセイスが前に倒れ、膝と両手を地面につけてしまう。

「グッバイ、ラッテイーの愛人よ……」

リンタが剣の持ち手を変えて、ブリセイスを串刺しにしようとするところを、大きく片刃の曲刀を振りかぶったヨシノが飛び込む。

「うなーーーーーーっ!!」

リンタは受け太刀をしてから、ヨシノを鏑迫り合いで押し返すと、独特の動作で後退し、距離を取った。

「はははっ! 邪魔くせーな、野生児みてえなお嬢ちゃん。でも、そういう女がベッドの上で女の部分を見せる時に興奮を覚えるぜっ! うるうらあーっ!」

今後は、ブリセイスと交替したヨシノがリンタと戦っている。ヨシノは本気の攻めを見せているが、リンタはニヤついた顔をしながら、時に攻撃を躲し、時に反撃する。

「ブリセイス、動くなっ! 光よ、ルミアリスの加護のもとに、癒光っ!」

ブリセイスを癒光の温かな光が包む。グンゾウはブリセイスの背中の中の傷を癒やした。

「くそっ! 私では奴に勝てないのかっ?!」

ブリセイスは地面に拳を叩き付けた。

「にゃーっ!!」

斬り付けていたはずのヨシノが、リンタの剣に吹き飛ばされて転がる。谷の岩壁にぶつかって止まった。

「いてててて……っ! 何で?! オークんにだつて弾き飛ばされたことなんてないのにっ!」

「ギヤははははっ! 剣圧の重さがちげえーんだよ、お嬢ちゃん。タイミング、スピード、打撃の方向、全部パーフェクツだかなあ! 俺様の剣技は。いや、俺様という存在が……かな。良かったら、俺様の剣の秘密、ベッドでコツテリ教えてやんぜっ! えっひやっひやっひや!」

リンタが下品に笑う。

余分な肉は皆無とは言え、ヨシノは背も高ければ筋肉質で、女性としては線の細い方ではない。そのヨシノが転がる剣圧とはどれほどのものなのか。グンゾウは想像がつかない。

「槍なら勝てるのにっ!! 悔しいっ! にゃーっ! ……ところで、何でベッドでなの?」

「ヨシノちゃん……」

アキが恥ずかしそうに顔を押しさえる。そんな天然なところがヨシノの可愛いところでもある。そして、そのヨシノを愛して止まない男が切れる。

「ぎっけんなっ！ ヨシノに手を出したらぶっ殺すっ!!」

リョータが上段の構えから全力で斬りかかる。

空気が音を立てて裂ける剛剣。

しかし、その剣はリントアの影しか捉えることができなかつた。両手剣ツウアイヘンダーが地面にめり込む。

リントアは最低限のステップで躲かわすと、リョータに冷たく言い放つ。

「うるせえ……、俺と彼女のデートを邪魔すんじゃねーよ。裸の男はすっこんでろ」

リントアが八の字に剣を動かし斬り付ける。派手で美しい剣技。

リョータは地面にめり込んだ両手剣ツウアイヘンダーが抜かず、回避動作が遅れる。しかも、上半身は全裸だ。額、両腕、胸、脇腹が裂け、勢いよく血が吹き出る。両腕は千切れんばかりに裂けている。

——やばいつ！ リョータが死ぬっ！

「がは……っ！」

リョータが血泡を噴いて仰向けに倒れる。胸の傷が肺にまで到達している証拠だ。

「首だけ守ったか……やるじゃねーか。堅え骨しやがって、腕が落とせなかつたじゃねーか。まあ、どうせすぐ死ぬけどな」

そう言うと、リンタは長剣を振り上げた。瀕死のリョータは動くことなどできない。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、咎……」

グンゾウが咎光を唱えようとした時、リンタに白い影が襲い掛かる。

リンタは暗黒騎士独特の足捌きで、5メートル程後退る。リンタの居なくなつた空間をカレンのスタツフが唸りをあげて通りすぎた。

「あつぶね……。殺気がありすぎんだよ、この腐れ●●●神官さんよっ！ おわつ！ と排出系っ！」

さらにリンタは、ヨシノとプリセイスの追撃を受けて後退した。

リンタの後退を横目に、カレンは光魔法を唱えながら、リョータの胸に手をおいた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、光の奇跡」

リョータはカレンが放つた光に包まれると、すぐに起き上がって、いそいそと両手剣を構えた。光の奇跡の回復力は目を見張るものがある。まさに奇跡。

「裸で迂闊に斬りかかるでない。それに1日2回も光の奇跡の世話になるな……、まあ首を守つたのは正解だ」

「うるっ……、すまねえ……」

カレンに反論しようとしたリョータだったが、思うところがあつたのか謝罪する。慎重にリインタとの距離を詰め始めた。

敵ながら、そして人格破綻者ながらリインタの戦いは見事だった。

ブリセイスの斬撃を剣の峰で弾き、みぞおち鳩尾付近に蹴りを入れる。ブリセイスが膝を衝く。

その反動を使つて、反対側から襲つてくるヨシノの右刀を弾き、左刀は姿を眩ましてかわ躲す。

——たまたまに消えるあの動きはなんなんだ？ あれも暗黒騎士のスキル技なのか？ わからなすぎる。ヴェールに聞いとけば良かった。

ヨシノの背後から現れたリインタが上段から斬りかかろうとするのを、リョータがファストストラスト一本突きで防いだ。ヨシノも咄嗟に前転で逃がっている。

目を見張るような速さで戦闘が展開されていく。

グンゾウは目で追うことが精一杯で、ブリセイスやヨシノを助力することができない。  
い。

「その暗黒騎士の目的は、仲間を追いつかせるために足を止めすることだ。足を止めず、洞窟の中に退きながら戦うのだっ！」

カレンが一喝した。

「そうだつ！ カレン師の言う通りつ！ 撤退せよつ！」

ブリセイスがカレンに指揮を譲ると、アキを先頭にセシリア、シムラ、ハイドの順で洞窟の中に入っていく。グンゾウもその後続く。

「おんやーつ?! そんな所にいるじゃねーかっ！ 盲目のお嬢ちゃんよーつ!!」

どれだけ戦闘に余裕があるのか、リントはブリセイスとヨシノの攻めを回避しながら、洞窟に入っていくセシリアを見つけた。

——くそつ……ばれたか……。

グンゾウが洞窟の入り口で振り返ると、リントはブリセイスとヨシノが頭を押さえている状態だった。鎧の無いリョータはなかなか戦いに加われない。その様子を油断無くカレンが見守っている。

「リョータつ！ もういいつ！ 下がるんだつ！ 敵は洞窟の出口にもいるつ！」

リョータは逡巡をしている。自分は役に立たないと理解しつつ、ヨシノを置き去りにすることができないようだ。その愛情は悪いことではないが、今は状況を悪くしている。刻一刻と敵の増援が迫っていた。

「リョータつ！ ブリちゃんとあたしでこいつは押さえるから、アキちゃん達を守ってつ！」

「くそつ！ ヨシノつ！ 早く退くんだぞつ！」



ヨシノに頼まれたリョータは、仕方なく洞窟内に向かう。

「シシシ……ここは一旦、援護だな。ジェスキシシ・イーン・サルクシシシ・フラム・ダルト、キシツ！」

グンゾウの後ろから洞窟の外を見ていたハイドが、ライトニング雷電を放った。

エレメンタルマジック精霊魔法の発動を察知したリインタは、独特の足捌きあしはばでかわ躲す。

——あの動き……。つくづく厄介。

その隙にカレン、ヨシノ、ブリセイスが洞窟内に入ってきた。

「今の内に距離を稼ぐぞっ！ 奴は洞窟内で仕留めるっ！ はあはあ……」

息を切らしたブリセイスが、グンゾウ達を先に促す。「仕留める」という言葉とは裏腹に、全員逃げるように後退をした。

「俺様を仕留める？ くつくつく。せいぜい満足させろよ、ピッチ雌犬共っ！」

その後から不敵な笑みを浮かべたリインタが追ってくる。

——ちゅうちよ躊躇なし……。これだけの人数差があっても、全く負ける気がしないのか？

グンゾウは圧倒的な数的優位にありながら、リインタのプレッシャー圧力を脅威に感じていた。

洞窟の中はヒカリバネ曜華のお陰で、外よりも明るい。

その薄明るい洞内で戦いは継続する。

少し稼いだ距離も、躊躇無く距離を詰めてくるリンタに追いつかれる。入り口まで残すところ100メートルという所で、完全に追いつかれた。

「うー……うーっ！ にゃー……うーっ！」

鏢<sup>バインド</sup>迫り合いからヨシノが押し負けている。要因はリンタとの体格の差だ。身長差はさほど無いが、身体の厚みが違う。そもそもヨシノの戦いは素早い動作で翻弄するのが持ち味で、力比べになってしまっている時点で良くない。

「この外道めっ！ 死ねっ！」

足が止まったリンタへブリセイスが斬りかかる。しかし、リンタはヨシノの曲刀を弾いた反動で距離を取り、そのまま後退して躲<sup>かわ</sup>す。

「おっとっとー。そんなに嫉妬するなよ。年増の嫉妬は醜いぜ？ んー、ふたり平等に扱ってあげないといけないから、3Pは難しいな。ひやつひやつひやつ！ お前等、奉<sup>サービス</sup>仕精神が足りねーぞっ！ 舐めるように仕えろっ！」

「先に出口の敵を片付けるんだっ！」

ブリセイスがリンタの攻撃を防ぎながら指示をする。

「リョータ、アキ、シムラ、ハイドで出口の敵を片付けてくれ。セシリア様は修師<sup>マスター</sup>お願いします。リンタはブリセイスとヨシノに任せようっ！」

グンゾウが促すとリョータが渋々と、アキが素直に出口に向かっていく。その後には

シムラとハイドも付いていく。グンゾウもその後を追った。

——くそっ！ 想像よりも多いっ！

洞窟の外へ出たグンゾウが抱いた最初の感想はそれだった。

目の前に飛び込んできた景色で敵の数は8。オークが2、人間が4、ゴ布林が2。

——リョータの鎧が焼けてしまったことがこんなに悔やまれるとは……。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、光プロテクションの護法プロテクションっ！ リョータはオーク達、やれるか?!

アキとシムラで人間を、ゴ布林は俺がやるっ！ その前に、ハイドっ！ ぶちかませーっ！」

逃走中は目立つため控えていた光プロテクションの護法プロテクション。グンゾウはそれを解放した。リョータ、ア

キ、シムラ、ハイド、そしてグンゾウの左手首に青白い六芒の光ともが灯る。

「やってやんぜーっ！ うおおおーっ！」

訪れた光プロテクションの護法プロテクションの高揚感で恐怖を消し、リョータがオークに突っ込む。

「ギジジジ……、馬鹿がつ！ オークを狙えないだろ……、ジェス・ギジジ……イーン・

サルク・シシツ……カルト・フラム・ダルトキシツ!!」

ハイドが黄色い宝石の付いたメイジスタッフを振るうと、耳を劈つんざく雷鳴と共に幾筋も

の稲妻が、賊の一団を襲った。

ゴブリン2匹が吹き飛ぶ。生死はわからないが、地面に倒れ痙攣している。

——もう一撃……と期待したいところだが、これで精一杯だな……。

アキは賊AとBを相手に剣と盾を構えた。光刃セイバーを使ったのか、剣が青白く眩い光を放っている。非力なアキに十分な攻撃力を与える魔法だ。

賊Cはシムラが迎え撃つ。賊Cの武器は鉞のような刃物を持ち、シムラより二回りは体格が良い。

グンゾウは配置を誤ったと思ったが既に戦闘は始まっている。

グンゾウにも賊Dが目の前まで迫っていた。グンゾウとの体格差はさほど無い。それでも戦棍メイストを持った手に力が入った。

——こんな最前線に立たされるのは久しぶりだな……。早めに決着してやる。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、……ブレイム 咎光」

グンゾウの前に現れた光の輪から、七色の光りの渦が放たれる。グンゾウが神官だと油断していた賊Dは咎光ブレイムをまともに喰らい、痺れる。

——咎光の有効時間は約10秒っ！ その間に無力化してやるっ！

グンゾウは素早く距離を詰めると強打スマッシュを左の膝頭に打ち込む。

「ぐああああああああああつー！」

戦棍メイストの柄頭が賊Dの大腿骨を粉砕し、飛び散った骨が皮膚を突き破って飛び出した。

血飛沫が飛び散りグンゾウの顔を朱あけに染める。

左足が内側に曲がり、倒れこんだ賊D。

グンゾウは賊Dが既に戦力にならないと判断したが、万が一のことを考えて戦棍メイヌを振り下ろし、右腕もへし折った。

「悪いな……。」

「おぶうつっ！」

賊Dは言葉にならない声を出す。オークやゴブリンならいざ知らず、流石に人間の命を奪う気にならなかったが、グンゾウは痛みに呻く賊Dの顔を蹴っ飛ばし、気絶させた。

「次……っっ！」

グンゾウが振り返ると、賊Cがシムラを壁際まで追い詰めていた。あれでは、穴鼠あなねずみで逃げることもままならない。賊Cの振り下ろす鉞が勢いを増し、シムラが防ぎきれなくなる。体格差が大きすぎる。

シムラに駆け寄るグンゾウ。

「シムラ……っっ！」

グンゾウが声を掛けるのと同時に、シムラが剣鉞を弾かれ、落としてしまう。

「シムラー……っっっっっっっっ!!」

賊Cの剣鉞が振り下ろされる。

シムラは革の手甲で鉈を受け止めようとしますが、そのまま押されて頭に鉈が当たった。

鮮血が飛ぶ。

シムラの頭がぐらつき、ゆっくりと横に倒れていく。

賊Cがシムラにもう一撃、止めの一撃を加えようとする所をグンゾウの戦棍メイヌが防いだ。賊Cは憎々しげにグンゾウを見ると、今度はグンゾウを相手に攻撃を加えてくる。賊Cはグンゾウよりも体格が良い。

グンゾウは得意ではない護身法の基礎を思い出しながら、体力を温存して賊Cの猛攻が止むのを待つ。

——俺は落ち着けば大丈夫だが、シムラの傷を早く手当しないとまずい。頭部にあれだけの怪我を負ってはもって数分だ……。

グンゾウはシムラの事が気になり、護身法に集中できない。一瞬気を逸らした瞬間に賊Cの鉈と罠バインドり合い状態になってしまう。

——しまったっ!!

賊Cが下卑た笑みを浮かべながら、力任せにグンゾウを押してくる。このまま押し込んでグンゾウを叩き切るつもりだ。

罠バインドり合い状態の賊Cの鉈が、グンゾウの戦棍メイヌを押す。じりじりと力負けをしてい

る。

——まずい……このままじゃ殺られる……っ！ それにシムラ……。

グンゾウは横目でシムラを見ると、シムラの頭から血が流れ続けていた。腕も変な向きに曲がっている。起き上がる気配はない。

戦況を確認すると、リヨータは裸でオーク2匹と戦っていて気が抜けない。ハイドが常に魔法で支援し続けないと危ない。アキも賊2人を相手に防戦していて、シムラを回復する余裕が無さそうだった。

——早く……、早くしないと。

そう思ったがグンゾウだったが、グンゾウ自身が命の危険に曝さらされていた。咎光ブレイムを放つ隙が無い。賊Bの鉈は両手でないと防げない。

「修マスター師カレ……ンっ！ 助けてくれっ！」

グンゾウが洞窟に向かって叫ぶ。しばらくして、また叫ぶ。3度ほど繰り返した。

「へっへっへ。男が情けなく助け呼ぶんじゃねーよ。このまま大人しく斬られる……神官さんよお」

賊Cの口が汚物の臭いを漂わせながら動いた。

「くそっ……、面白いなお前……。顔に肛門がくつついてんじゃねーか。屁がが漏れるから開くんじゃねーよ」

グンゾウが悔し紛れに悪態を吐くと、賊Cは怒りに顔を紅潮させ、さらに鉈を力強く押し込んできた。

「……修師……っ！」

グンゾウが呟いた時、洞窟の出口にカレンが現れた。後ろにセシリアを連れている。

「修師っ!!」

状況を確認すると、カレンはもの凄く速さでグンゾウに駆け寄り、賊Cの頭部を強打で碎いた。迷いが無い。

脅威から解放されたグンゾウも強打を連続で繰り出し、賊Cの左鎖骨と左膝を碎いた。これで立ち上がることはできない。

「修師カレン、ありが……」

グンゾウが礼を言っている間にも、カレンはすぐにシムラのもとに駆け寄り、光の奇跡を唱えた。

——恐るべき状況把握能力……。

「うーん……、あれ……、俺やられた……?」

シムラがむくつと起き上がり、状況が分からず混乱している。

「シムラっ! 良かった……っ! 具合は悪くないか?」

グンゾウはシムラに駆け寄ると思わず抱きしめた。



「グンゾウさん……、すいません。助かりました。何かあったか覚えて無くて……。あの、グンゾウさんに抱きしめられて、ちよつとだけ気持ち悪いっす。……あつ！ 思い出したつ！ われっ！ 舐めてんのか?! いてこますぞっ！」

シムラは昏倒している賊Cを見つけると、グンゾウを振り払ってその腹を蹴りまくった。シムラは時に柄が悪い。

カレンが加わり、数的優位が変わると急に戦況は良くなった。

「おうらあつ！ 輪転破斬!!」

サマーソルトボム

リョータが前方宙返りしながら、両手剣をオークAに叩き付ける。実際は外れて両手剣は地面に刺さっただけだが、オークAもオークBもその威力を恐れて、一瞬後ろに下がった。

その隙をあいっつが狙う。

「キーンシツシツシツシ、馬鹿リョータ離れろっ！」

ハイドに言われ、リョータは両手剣を地面に刺したまま、全速力でオークから離れる。

「ジェスキシシ・イーン・サルクシツシツシ・カルト・フラム・ダルト、キシツ」

再びの轟音。

ツヴァイヘンダー

両手剣を中心に暴威雷電が発動し、オークAとBは共に電撃による損害を受けた。

踰よ踰ろめいて膝をついている。

リョータはすぐに引き返すと、両手ツヴァイヘンダー剣を地面から抜く動作の流れで、そのままオークの頭部に叩きつけた。オークが1匹減る。

月も隠れた曇り空から、ぽつぽつと雨が降り始めた。

冷たい夜の雨が疲れているグンゾウ達の体力をさらに奪う。その頃、グンゾウ達は、残り2人と1匹になった賊の一団を全員を地に伏せさせていた。

「ふう……」

カレンが溜め息を吐く。普段から白い顔が今は青白い。ほとんど感情の起伏を表に出すことのないカレンが明らかに疲れた雰囲気サクラメントを漂わせていた。グンゾウが知っているだけでも光の奇跡を3回は使っていて、肉体的にも獅子奮迅の働きをしている。

もちろん全員が疲れ果てていた。日の出から索敵攻撃をし、午後は少し休みがあったとは言え、夕方から出動し、緊張しっぱなしだった。現在の時刻は夜の9時か10時近いだろう。

「いかん。中に戻ってブリセイスを助力せねば。余力あるものはついてこい。セシリア様のことは……アキに任せた」

カレンがアキをセシリアの護衛役に指名する。

——なんか、一瞬迷った？

「はいっ！」

元々セシリアの傍にいたアキは素直に返事した。

「俺は中に戻るぜっ！」

リョータが最後のオークBの死体から両手剣ツヴァイスハンダーを抜くと、カレンの後に付いていこうとした。

丁度、その時、洞窟の出口からヨシノが顔を出し、行燈ランタンの灯りに照らし出された。とても緊張した面持ちだ。

「ヨシノっ！……無事だっ……」

ヨシノに会えて喜んだリョータが駆け寄ろうとする。

しかし、次の瞬間、全員の時間が凍り付く。

「ご、ごめん、みんな……」

洞窟から出てきたヨシノの首には後ろから長剣ロングソードが突きつけられていた。手首は紐のようなもので、後ろ手に縛られている。長剣ロングソードの持ち主は当然リインタだ。

リインタも無傷ではなかった。左目の上が切れ、血が垂れていた。

ヨシノは髪の毛を掴まれ、顎あごが上がっている。この姿勢では、すぐに首を斬られてしまう。

「へっへっへ……、いやー、気性の激しい女との3Pは疲れたぜ……、女は身動きできないから一方的に犯すのが一番だな……。ま、この後、洞窟で転がってる女も回収して、たっぷり楽しむけどな」

リンタはヘラヘラとしながら減らず口を叩いた。しかし、目は全く笑っていない。何かあればヨシノを斬る心構えが出来ている。

「ふーっ！ ふーっ！」

荒い鼻息。

グンゾウの隣で、リョータが憤怒の表情をしている。何も考えず、今にもリンタに斬りかかりそうな勢いだ。ヨシノの首に長ロングソード剣が突きつけられているため、辛うじて飛びかかりたい衝動を抑えている。

「さて、盲目のガキを渡せっ！ そしたら、この女は返してやる。なんなら、洞窟の中の女もだ」

「……もう、……ここにはいない。……先に、……逃がした」

カレンがゆっくりと嘘を吐く。一瞬、アキとセシリアいた方に視線を遣る。

グンゾウがアキとセシリアがいた場所を見ると、既に2人は暗闇に紛れ隠れていた。

——素晴らしい判断だ……。アキ、有能だな。

「だったら早く連れてこい、ってんだっ!! 1分毎に、この女の身体を切り刻んでやる

ぞっ！ 早くしろっ！」

リンタの持つ長剣がヨシノの首に食い込み、僅かな傷を負わせた。表皮が切れ、ゆつくりと血が滲む。

「早くしろってんだっ！」

「シムラ、呼びに言ってくれ……」

グンゾウがシムラの目を見ると、シムラは頷いてから、その場を離れた。

——……狙撃……できるかな？

「くっそ、暇だな。早くしろよー。まあ、俺様は女には優しいからな……、切り刻むと行っても、まずは手始めに鎧から……」

そう言うリンタはヨシノの鎧を止めている革紐を斬った。革鎧の胸当が落ちて、肌着姿になる。後ろ手に縛られているため、ヨシノの大きな胸が強調される。

「おーっ！ いいねーっ！ やっぱ女は鎧なんか着てちや駄目だな……。さーて、次はこの服を破やぶつてみようかなー、おいっ！ お前等も見てーだろ？ ひやつひやつひやつひやつ！」

「ふーっ！ ふーっ！」

リョータの手足がガタガタと震え始める。我慢も限界に近い。

「駄目っ！」

ヨシノが叫ぶ。

リンタが訝しげな顔をして、ヨシノの顔を覗き込む。

「ん？ 何が駄目なんだ？ もしかして恥ずかしいのか？ おうおう、いいじゃねーか、

そういう女戦士の恥じらいとか俺様の大好だいこう……」

「怒っっちゃ駄目っ！ リョータっ！」

「ああん？」

リンタが訳がわからないという表情で、呆れている。

「あたしが……、あたしが何されても怒っっちゃ駄目っ！」

ヨシノの目は真剣だった。興奮している様子はなく、母親が子どもを諭すような口調だ。

「あたしがどうなっても冷静に……、隙を狙って、敵を倒すのっ！ わかったリョータ  
？」

——なんてことだ……。

グンゾウはヨシノの死をも恐れぬ勇氣に目頭が熱くなった。逆にリョータは泣きそ  
うな子どものような顔をしている。

「だって、ヨシノ……」

「こうなったのはあたしの責任だし、仕方が無いことなの。何が起きてもしっかりして。

リョータは……リーダーでしょ？」

少しの沈黙。そして、リョータがまたひとつ成長する。

「……ああ、わかった……。必ず……。必ず……。必ずそいつを仕留める。お前を不安にさせてすまねえ」

リョータが冷静さを取り戻し、両手剣ツヴァイヘンダーを正眼に構えた。その様子を見て、リントは興奮きょうごめた表情をする。

「はっ！ くそつまんねーっ！ 俺様はそんな三文芝居を望んじやいねーんだよっ！

おい、くそ雌犬ビッチ。次、余計なこと言ったら、……ぶっ殺すぞ」

リントはヨシノの髪の毛を強く引つ張ると、左腕でしっかりと自分に抱き寄せた。その分、剣で斬り付けるには少し離れる必要がある。ある意味安全だ。

——くそっ！ あんな汚い野郎の腕にヨシノを抱かせておく訳にはいかない。何としても打開策を考えないと……。それにしてもふたりが近すぎる……。

その時、闇夜に身を潜めたシムラはリントに狙いを絞って、弦を引いていた。しかし、万が一、ヨシノに当たったことを考えると矢が放てない。

「近すぎるでえ……ヨシノ姉さん」

それぞれの思惑が交錯し、しかし、一向に事態は前向きに進まない。

そんな中、動きがある。

洞窟の出口から、ブリセイスが静かに顔を覗かせた。ブリセイスの髪の毛は乱れ、唇は切れ、鼻血が出ている。立ってはいるが、長剣を杖にして、肩で呼吸をしていた。

グンゾウと目が合うと、ブリセイスはゆっくり頷いた。

——生きてたっ！ しかし、ボロボロだな。……俺以外に気付いている人間はいるだろうか？

グンゾウはカレンの顔を見る。カレンはグンゾウの方を見ない。しかし、グンゾウが見ている目の前で、スタツフを逆手に持ち替えた。

——あの持ちは打ち落と<sup>ノック</sup>し<sup>オフ</sup>の持ち手だ。ということ、カレンはリンタの長剣<sup>ロングソード</sup>を打ち落とす準備をしているということだ。きちんと確認できないのがもどかしいっ！

しかし、ヨシノとリンタを離すのはこれしか方法がない……っ！

「リンタっ！ 人質交換の方法について確認したい。セシリア様を差し出せば、ヨシノを離すんだな？」

グンゾウがリンタに質問すると、リンタは眉を顰<sup>ひそ</sup>めながら答えた。

「ああ、だが先にあのガキを俺の傍に連れてきたらだ。同等の条件では交換しねえ……。ガキが俺様の間合いに入ったら、このお嬢ちゃんを解放してやる」

「それでは、俺等が不利すぎる。セシリア様もヨシノも取られたらどうするんだ？」

「うるせえっ！ てめえらに選択権があると思うなっ！ この女を失いたくなければ、



俺様が決めたルールに、奴隷のように従順に従いやがれっ！ ついでに靴でも舐めてーのか、このジジイっ！」

——ジジイ……。わー、ショッカー。オッサンはあつたけどさー、ジジイはないよねー。

リンタへの殺意を胸に、グンゾウは判断を下す。

「わかった……。いいだろう……。アキっ！ セシリア様を連れてきてくれ……」

「おいっ！ いいのかよ？ オッサンっ！」

リョータがグンゾウに問う。しかし、視線はリンタから外さない。隙あらば突撃する構えだ。

「俺等おれらはヨシノを救いたい。……そうだろ？」

「ああ……。まあ、そうだけど……な」

——カレンが何も言わない……。つてことは正解なんだ。

しばらく静寂の時間が流れる。

そして、セシリアを連れたアキがゆっくりと灯りの下に出てくる。セシリアは今にも泣きそうなくらい顔を歪めていた。

「んだよっ！ やっぱいんじゃねーか……。てことは、さっきの坊主頭は俺様を狙ってやがんな。おいっ！ 出てこい、禿げっ！ 武器は下ろせよ。おら、全員武器を下ろ

せつー！」

——くそ、相変わらず読みが良いな……。

グンゾウは戦棍メイヌを腰に戻した。カレンはスタッフを手放していない。

「シムラ……出てきていいぞ……」

グンゾウが言うのと、シムラもゆつくりと出てくる。弓は下ろしている。

「よしっ……。おらっ！ ガキをこっちに歩かせろ。ゆつくりだ。転ぶんじゃねーぜ」

そう言うのと、リントはヨシノを抱き寄せている左腕で手招きをした。

しかし、セシリアは泣きじやくって歩こうとしない。アキが何か小声で説得している。

迫真の演技……ではない。本気の涙だ。グンゾウの狙いを誰にも何も説明していないのだから当然だ。付き添いのアキすら何の確信もない。ただ、今までの信頼関係の中で、グンゾウが何かを策を練っていると信じているだけだ。

「おら、ガキ……っ！ さっさとこっちに来るんだ。お前は見捨てられたんだよ。仲間の方が大事だとき……。おら、早くしろってんだよっ！ ぐずぐずしてっつと、お前からぶっ殺すぞっ！」

セシリアはさらに涙を流しながら、とほとほとリントの声がする方に歩いた。

もうすぐセシリアがリントの腕が届く範囲まで近付く。

緊張がどんと高まってく。

「いいぞ……。従順な女は好きだぜ。……逆に生意気な女は嫌いだっ！」

リンタは突然左腕で抱きしめていたヨシノの首を斬り付けると、地面に投げ捨てる。ヨシノの首から噴水のように血が吹き出る。ヨシノは受け身も取れず、顔から倒れた。

リンタが追い打ちをするために、右手の長剣ロングソードを振り上げた。

カレンが脱兎の如くリンタに詰め寄り、下から打ち上げるように打ち落としを仕掛ける。

それを予想していたように、リンタはセシリアを左腕で抱き寄せると、いつものように独特の後退をしようと屈む。

その瞬間をブリセイスが見逃さなかった。全力の袈裟懸けさがげでリンタを背後から斬り付けた。部分鎧と鎖帷子チェインメイルに守られて、致命傷こそ与えられないが衝撃は防ぐことができない。

「がはっ！」

リンタが咳き込んで、動きが止まる。そのまま膝を突き、右手に持っていた長剣ロングソードを落とした。

「何回使わせるんだ？ 光よ、ルミアリスの加護のもとに、光の奇跡サクラメント」

カレンがヨシノに光の奇跡サクラメントを使い、ヨシノが立ち上がる。顔色は青ざめているが飛び

起きたので、大丈夫だろう。

「よしっ！ 全員退けっ！」

ブリセイスが叫ぶと、全員一斉に走り出す。

「リョータっ！ セシリア様を担げっ！」

グンゾウも叫ぶ。

「おっしやーりーりーらあっ!!」

リョータは意味不明な雄叫びを上げると、状況がつかめず啞然としているセシリアの腕を引っ張ると肩に担いで走り出した。

アキも、シムラも、ハイドも走っていく。

グンゾウは傷付いているブリセイスの足が止まっているのが気になり、見守っていた。隣にはカレンもいる。

「ブリセイスっ！ 君も早く行こうっ！」

ブリセイスがグンゾウの方を向いて、「わかっている」と口が動いたような気がした。しかし、奴はしぶとかった。

「うおらあああーっ！ ふっぎけんなよ、てめえらあああああーっ！」

起き上がったリントアがもの凄い速さで前進し、足が止まっていたブリセイスに後ろから組み付く。

そのままブリセイスは押し倒されて揉み合いなる。

最終的に持久力が尽きたブリセイスが組み伏せられると、リントは足下から短剣を取り出し、ブリセイスの喉元に突きつけた。

「行けっ！ 私のごとは置いてっ！ 早く行くんだっ！ 使命を果たせっ！」

リントに組み伏せられたブリセイスが叫ぶ。喉元には短剣が光る。

「うるせえっ！ 黙れってんだ、この売女っ！」

その時、洞窟内から複数人の声がし始めた。敵の本隊だ。

これから何か策を練っている時間は無い。

このままでは、グンゾウ達は不利な状況に追い込まれていくだけだった。

グンゾウがカレンの顔を見ると、カレンもグンゾウを見返してくる。

カレンの顔は眉が下がり、唇が小刻みに震えていた。瞳はグンゾウとブリセイスの間を何度か往復する。グンゾウは、かつてこんなに自信のないカレンの表情を見たことはなかった。

——カレンすら、判断に迷っている……。もう、カレンも光の奇跡を4回も使っている。そろそろ魔法力もきつはずだ……。

「オッサンっ！ 今は退くぞっ！ このままじゃ、全滅しちゃうっ！」

リョータがセシリアを担いだまま叫ぶ。

グンゾウはブリセイスと目が合う。気が付いたブリセイスは、微笑んで頷いた。

——くそっ！ くそっ！ くそっ！ 無力だ……。俺は無力だ……。

「……絶対助けに来るぞっ！ ブリセイスっ！ 光よ、ルミアリスの加護のもとに、  
ジャッジメント審判の光」

「ブリセイスっ！ ルミアリスの加護があらんことを！ 光よ、ルミアリスの加護のもとに、  
ジャッジメント審判の光」

グンゾウとカレンの審判の光が周囲一帯を眩しい光の粒子で満たす。

この密度では、暗黒騎士のリンタはグンゾウ達を追うことができない。

その七色の光が、これから孤独と恐怖の時を迎えるブリセイスの心を慰めたかどうかはわからない。

それから、冷たい雨は強さを増していった。

暗闇の中、逃走を続けるグンゾウ達は全員無口だった。ただ、ひたすらに基地を目指した。

体が痛い。疲れている。それらもある。しかしもちろん、それが沈黙の理由ではなかった。

使命が困難過ぎた。敵が強すぎた。苦渋の選択だった。そんな言葉達では、何も贖あがなう

ことはできない。

本人が望んだこと。

そう理解しつつも、降り注ぐ罪悪感の雨は容赦なくグンゾウ達の心を削り続けた。グンゾウ達はセシリアを救うため、自分達が助かるため、ブリセイスを置き去りにして逃げたのだ。

ブリセイスが敵に囚われた。

この事実を、いつまでも明けない雨空のように、グンゾウ達に重くのし掛かった。

## 21. 誰かのための戦争と、ひとりだけのための戦争

「おーい、お前達ー。どうしたーうい、そんな格好で」

基地の見張りに見つかり、ようやくグンゾウ達は基地に着いたことを実感した。一晩中降り続いた雨も止んで、朝日を迎えた曇天の空。清々しいはずの朝の空気は、グンゾウ達に冷たい。

立っているのもやつとな程、全員が心身共に疲弊していた。

本来であれば3時間もあれば辿り着くであろう道を、グンゾウ達は迷いに迷い、明け方近くになってしまった。辿り着けたのが奇跡だ。あまりに道を迂回したので、逆に追手に遭うことがなかった。

迷ったのは、雨で星が確認できなかったこともあるが、一番の理由は地理を把握していた案内がいなかったからだ。

ブリセイス。

彼女は基地に戻れなかった。

この旅の目的であったセシリアは、ブリセイスとの別れを知り、散々泣いていたが、今はリョータの背中で雨避けの外套マントを掛けられて、安らかな寝息を立てて眠っている。背



負っているリョータは疲れ果て、大分前からいつもの悪態すら吐けていない。

「至急、ラツティ―准将に報告したいことがある。側近の者と連絡を取ってくれ。極秘任務を終えてきた」

カレンが見張りの兵と話をつけている。グンゾウ達は本来の作戦以外で基地を抜けているため、極秘任務に就いていたことが保証されないと基地の中に戻ることができない。

普段は凜とした立ち居振る舞いのカレンも、今はスタッフにもたれかかっているように見える。否、実際スタッフにもたれかかって立っていた。

「あかん、しんどい。もう疲れたでー」

そう言いながらも一番元気そうなシムラ。基地の傍にある岩に座った。

「みんな……、ちよつと、ここで休もうか?」

グンゾウがそう言った瞬間、ハイドが「ドシャッ」という音を立てて、うつ伏せに倒れた。ヨシノがハイドを仰向けにひっくり返そうとして、疲れてできないので諦めた。リョータもへたり込んだ。アキは立ったまま寝ている。本当にみんなへとへとだ。

——ブリセイスのことを考えたら、眠る事なんて出来ないな。

そんなことを思いながら、目を閉じたグンゾウは、一瞬で意識が無くなり倒れた。

女性の悲鳴が聞こえる。助けを呼ぶ悲痛な叫びだ。

——どこだ？ 悲鳴を上げているのは誰だろう？

必死に探すが見つからない。それどころかグンゾウは自分の居場所すらわからなかった。周りは少しも灯りの無い暗闇だ。

次に、不快な男の音がする。傲慢で、下品で、人を蔑む響きがある。

——ああ、五月蠅い……。

悲痛な女性の叫び声と不快の男の声。その2つの声が暗闇の中でグンゾウを責め立てる。その内、2つの声は様々な声や音と混ざり合い、止まない眩暈のように、ぐるぐると渦を巻き耳元で響き続けた。

「五月蠅い……、やめろ……っ！」

不快な気持ちで目が覚める。

うつすらと目を開けたグンゾウ。目の前には見覚えのある天井。天幕の中で寝ていた。微妙な明るさのため時間が分からない。天幕の外からは騒がしい音。人の怒鳴り声や物のぶつかり合う音などだ。

ぐっしよりと冷や汗をかいて、眩暈がする。

悪夢の中を彷徨さまよっているような不自由感に身体を包まれたまま、天幕の外へ出た。

強い日差しが降り注ぐ天幕の外。太陽は中天を少し西に過ぎていた。

「ようやく起きたか……」

天幕の外にはカレンが立っていた。スタッフを持ち、いつものように凜とした立ち姿で目の前の風景を眺めていた。眼前では兵士達が馬車に荷物を積み込んだり、武器や防具、果ては兵器の準備をしたりと大忙しに動き回っていた。基地内の兵士の数が、以前より明らかに多い。

「マスター  
修師カレン……」

「寝ている仲間を起こせ。出発前に集まった天幕に集合だ。戦が始まる」

カレンは淡々と告げるとグンゾウの戦棍メイスイを投げて寄越した。ずしつとした金属の重さがグンゾウの手に伝わる。鈍く光る金属の柄頭に乾いた血糊がこびり付いていた。

——また戦争なのか……。

グンゾウは溜め息を吐いた。

出発前に集まった天幕の中。出発時とは一人以外同じ顔ぶれが集まっている。

「良くやってくれたっ！ 君達のお陰でようやくこの度の戦いに終止符を打つことができてる。」

君達には追って報酬が与えられるだろう」

彼はラツティーの腹心のひとりで、年齢はグンゾウに近い。グンゾウ達にお褒めの言

葉を授けにきた。悪い人間ではない。名前は聞いたがすぐに忘れた。グンゾウは、心の中で「腹心1号」と呼ぶことにしていた。

笑顔の腹心1号は上機嫌に話を続ける。

「セシリア様は我々の仲間が既にオルタナにお送りしている最中だ。君達も良ければ、我々の馬車でオルタナまで送ろう」

「え？ 帰ってええんですか？」

シムラが裏声になった。シムラは早くオルタナに帰りたかったのだろう。思わず気持ち前に出てしまった。

しかし、グンゾウには浮かれる前に聞きたいことがあった。

「……プリセイスの救出はどうするんですか？」

腹心1号は一瞬、不思議そうな顔をする。

「彼女の救出は戦に勝った後だ。彼女は騎士として立派に使命を果たした。彼女の名はオルタナの歴史に名を残すだろう」

「はあ……、それは……」

グンゾウは話が噛み合っていないように感じたが、言い返すことができなかつた。プリセイスを失ったのは自分達の未熟さ故だ。その尻ぬぐいを目の前の男に求めるのは、何かおかしい気がした。

グンゾウが黙っているため、正義感の強いアキが手を挙げて質問する。

「敵からの人質交換要求とか無かつたんですか？」

「有った。敵はあろうことかブリセイスとセシリア様との交換を申し出てきた。そんなもの、通るわけなからう」

グンゾウの後ろでハイドが「キシシ、やはり……」と呟いた。さらにリョータが口を挟む。

「おいおい、仲間なのに随分冷てーな……」

「冷たい？ ブリセイスとて覚悟の上で今回の使命に望んでいる。セシリア様を救い、戦に勝てば、死したとて本望だろう。騎士が望む英雄としての死だ」

「英雄って……」

アキは納得いかない顔だったが、それ以上言葉を継げず、口元に手を当てながら下を向いてしまった。

「死んだら……、死んだら何にもならないじゃん……っ！」

ヨシノが小さな声で呟き、頬を膨らませた。優しい彼女が、彼女の心が、今の状況を良しとしているとは思えなかった。

しばらく沈黙の時間が流れる。

その気まずさを払拭するように腹心1号が話し始める。

「ともかく君達は自由だ。後は、兵団指令を受けて明日の戦に加わってもよし、このまま今夜馬車でオルタナに帰ってもよしだ。戦は明日の朝から始まる。まあ、昼過ぎには凱歌を奏しているがなっ！ はっはっはっ！ 今夜までにはどうするか決めてくれ。君達は使命を果たした。一旦、オルタナに帰って休んでも恥じることはないと思うぞ……っ！」

腹心1号が「よしっ！」と手を叩いて話を切り上げた。そそくさと去ろうとする彼を、グンゾウが手で押し止める。

「……極秘の救出作戦とかは考えないんですか？」

腹心1号は少し呆れたような顔をした後、溜め息を吐いた。

「君達の言いたいことは分かる。しかし、これは戦争なんだっ！ 1人の命と引き替えに多くの命を危険に曝す訳にはいかないっ！ ……そもそも君達が彼女を置き去りにしたんだろう？」

腹心1号は言葉を荒げた後、最後にゆっくりとグンゾウ達の痛い核心を突いた。

その後は誰も何も言えなくなる。

——そう……、これは俺達の失敗だ。

グンゾウ達の目の前には2つの選択肢が提示された。

ひとつはオルタナに帰ること、もうひとつは戦争に加わる兵団指令オーダを受けること。オルタナに帰れば報酬を得て、しばらくはのんびり暮らせる。逆に戦争に加われれば、ブリセイスを救い出すこともできるかもしれない。あくまでも可能性があるだけだが。

どちららを選ぶかをひとりひとりで頭を冷やして考えようということになり、リョータ小隊は一旦解散した。

グンゾウはひとり、自分の考えを整理するために、戦の準備で慌ただしい基地内を散策していた。

「俺はどうしたいんだろうか？ ……この歳になつても迷つてばかりだ」

すると、目の前から見知った顔が歩いてくる。多くの兵士のように目的意識を持った感じではなく、怯えた猫ニャアのように周囲をキョロキョロしながら、ゆっくり歩いている。挙動不審な感じだ。しかし、その体軀たいくは野獣そのもの。そして、ふさふさの眉毛。

「おっ！ タナカじゃね？ こんなところで奇遇だね」

グンゾウが声を掛けると、それに気付いたタナカはグンゾウの目の前まで来た。目の前に立ったタナカは分厚い石の壁のように偉丈夫だ。それに反して精神面は硝子ガラスを超える脆さ。

「あ、ああ、お久しぶり……です」

「お、おう、久しぶり。なんでそんなに緊張してるの？ 俺、怖い？」

タナカは頬を掻き、たまに視線を外しながら、薄ら笑いを浮かべた。

「あ、あの……久しぶりの人に会うと……少し緊張して」

——ただだけコミュ障やねんっ！

グンゾウは心の中でそう思ったが、言葉に出すのはぐっと抑えた。

「どしたの？ こんなところで」

「……双頭の蛇が終わったら、あ、赤蛇隊にいたんだけど……ですけど、終わった後、寂し野前哨基地で少し稼いで……、まあ、そんな感じで」

「は？ 良くわかんねーんだけど？」

グンゾウの少し苛ついた感情が言葉にこもってしまう。タナカは少し怯えた様子で狼狽うろたえた。体と心の強さが全く比例していない。

「あ、ごめんごめん。えつと、寂し野前哨基地にいたことと、今この基地にいることの繋がりが全然わからなかったのさ」

「あ、ああ、えーつと、兵団オウ指令ダイがあつて。明日からの戦争に加われれば、1日1ゴールドつていう……。食料や生活雑貨も支給されるからいいかなつて……」

「おおっ！ そうなのか。いやー、そうかそうか、タナカが加わってくればなんだか頼もしいな」

グンゾウはタナカの肩を叩こうと思ったが、届きづらいので丸太のような二の腕を叩



いた。筋肉馬鹿よりはちよつと細い。

「あー、んじゃ、明日の戦争頑張つて。タナカなら1人でも全然大丈夫だろうけど……」  
グンゾウが別れの挨拶をすると、タナカはまだ話したそうにグンゾウの前に手を出して止める。

「ん？ どした？」

グンゾウは怪訝そうな顔でタナカを見上げる。人の目を真つ直ぐ見られないタナカは目を逸らした。今度は頭を掻きながら呟く。

「あ、いや、その……グ、グンゾウさんは何で？」

「ごめん、言えないんだ。戦争とは別の兵団指令でね」

「あ……そうなんすか……。……ちなみにアキさんは一緒に……？」

タナカはグンゾウから目を逸らしたまま、こつそりと一番聞きたかったことを聞いた。

——止めた理由はそれか……。

「おっ！ タナちゃんじゃーんっ！ もぐもぐ……どつたの？」

リョータ小隊が寝泊まりしている天幕の前。樽の上に腰掛けていたヨシノがその長い右腕を空に目掛けて伸ばした。腕から真つ直ぐに伸びた背筋が綺麗な弧を描く。左

手には何かパンのような食べ物を持っている。

隣ではリョータが両手剣を素振りしていた。それだけは真面目なのか、リョータの素振りは日々速くなる一方だ。

「お、……おとおお……お……」

女の子に話しかけられて完全に言葉にならないタナカ。中途半端に挙げた手が腰の辺りで止まっている。しかも若干震えている。どういう成長をしたらこんなに体と心が不均等に育つのだろうか。グンゾウは不思議でならなかった。

「あん？ お、眉毛じゃん。なんでこんなところにいんだよ？」

「お、おおう、おう、まあ、な」

タナカはリョータに対してなら緊張せずに話せるようだ。それでも饒舌ではない。キョロキョロと広い視野で周囲を確認するタナカ。その優れた目にも死角はある。

「あれ？ もうみんな集まってんだ……」

——来ちゃったか……。

グンゾウとタナカの後ろからアキの声がする。アキの姿を見ないまま、タナカが「うお……」と声を出して固まった。

アキは水浴びをしてきたのか、髪の毛が濡れそぼり、片側にまとめていた。鎧は脱いでいて、白い襟付きのシャツを着ている。飾り気は無いが、それがアキの清楚さを際立

たせていた。

——はわー、可愛いー。色白小顔薄顔垂れ目……たみやらん……。

「アキちゃん、タナちゃんが来てるよ。ふっふふ……」

ヨシノはタナカの気持ちに気付いているのか、愉快そうに笑う。それを聞いたアキは特に表情を変えることなく、通りすがりにべこりと頭を下げて挨拶をした。

「ほんとー？ あ、こんにちわ。久しぶりですね」

タナカは動かない。それどころかアキと目を合わせることもなかった。口がぱくぱくして、半分魂が抜けている。

——死んだ……、こりや、全然駄目だな……。よしよし。ふふふ。

「またね、タナカ君……。打ち合わせは中なかだよ？ 私、決めたよっ！」

アキはタナカの様子をちらつと不思議そうに見た後、何やら決心をしたように勢い良く天幕の入り口に飛び込んで行った。

ヨシノがその様子をニヤニヤと眺めている。リョータは関心が無さそうだ。

アキの姿が天幕に消えると、硬直が取れたタナカは大きな息を吐いた。

「はああああああ……、緊張したっ！」

——生き返ったっ！

「じゃあ、タナカ。そういうことで、約束通り、また後でな」

グンゾウはまたタナカの太い二の腕を叩くと天幕に向かった。ヨシノとリョータもグンゾウの後を追う。

「は、はい。あ、あの……、グンゾウさん、あ、ありがとうございます」

タナカはグンゾウに対してぺこりと頭を下げると、兵士達の雑踏に消えていった。

天幕に入るとリョータバイデー小隊の面子は揃っていた。居ないのはカレンのみ。

「おせーな、あの金髪眼鏡。さっさと話し合い始めちまうか？」

リョータの大胆な発言がグンゾウを震え上がらせる。

「おいっ！　なんて口を利くんだった！　そんなのカレンに聞かれたら殺されるだろうがっ！　……俺がっ！」

「オッサンが殺される分にはいいじゃん。俺にはなんも被害ねーし、はわわわわ……」  
リョータは欠伸あくびをしながら、のんびりと構えていた。グンゾウだけがひとりで怒っている。

「それよりも師を呼び捨てにすることを後悔した方がいいのではないか？」

突然、鈴の音のような美しいソプラノの声がして、カレンが天幕の入り口に現れた。グンゾウと一緒にリョータの身体がビクツと震える。本能的にはリョータもカレンが怖い。

「カ、カレン……師カレン……これはですなー、えーっと……」

「よいっ！ その件は後で片を付ける。それより貴様達に客を連れてきた」

——後で片付けられるううう……、ん？ 客？

「入ってこいっ！」

カレンの声に導かれて、頭巾付きの外套マントに身を包んだ黒ずくめの人物が天幕へ入ってくる。

リョータ小隊パーティの全員の視線が黒ずくめの人物に集中する。

その人物は、天幕に入ってくると徐おもむろに頭巾フールドを取って美しい姿を現わした。

頭巾フールドの奥から、素直で艶つややかな長い黒髪が流れるように広がる。豊かな黒髪の下に真

珠パールのような白い肌。真珠パール白の額ホワイに凜々しい眉毛と、その下に切れ長の大きな目があり、

長い睫毛またたが瞬く。そして、印象的な強い眼差し。

その強い眼差しが、リョータ小隊パーティを見詰めた。睨んだ訳ではないだろうが、美人の特

徴なのか、そのような印象を受ける。

「ヴェ、ヴェール?!」「ヴェールちゃん?」「ヴェールっ!」「ヴェール……」「ヴェ、べっ

びんさんっ!」「シシシシ……」

リョータ小隊パーティはそれぞれにヴェールへの驚きを口にした。

「なんで……ここに居るんだ? 君は敵側に潜入していたはずじゃ……?」

グンゾウがヴェールに疑問を投げかけた。ヴェールは前髪の無い長髪をかき上げながら返事をする。その仕草が魅力的過ぎて、グンゾウは心臓が大きく鼓動した。ヴェールの身体から何か男を惑わす物質が浮遊しているとしか思えない。

「そうだ。今も敵側の伝令として人質交換の書簡を届けにきた。なので、そこまで長くは留まれない。こちらにも内偵者がいるからな」

強く芯の通った美しい声。その美しく強い声が端的に物事を伝えてくる。

「ヴェールちゃん、あの晩、すごかったねー、あたし死ぬかと思ったよー」

「あつ！ そだ、てめえ、よくも俺様のヨシノを殺そうとしたなつ！ 乳揉むぞつ！」

ヨシノが襲撃の晩、始まりの夜のことを話すと、リョータが思い出したように吠えた。

——乳ちちは関係ない。

「殺すつもりなら既にヨシノは死んでいる。当然手加減していた」

ヴェールが眉ひとつ動かさずに答えた。ヨシノが「うー、ちよつとへこむうー……」と言つてしょんぼりとした。

——槍装備のヨシノに手加減つて、どんだけ強いんだよ……。

「ところで、あたしはリョータではないんだけど？ まったく……、リョータのポンポ

コナスっ！」

「ポンポコナスっ?! それはオタンコナスなのかっ?! それとも、ポンコツなのか?!」

「うーん……、どつちも?」

「どつちもつ?!」

ヨシノとリョータがいつものじやれ合いを始める。

——ポンポコナス……。

「しかし、キツカワもヴェールに会いたがつてるで、きつと」

そんな中、シムラがニヤニヤとしながら言う、元々暗いヴェールの表情が一瞬暗く  
なったように見えた。シムラは何故かヴェールを呼び捨てだ。度胸がある。

——あれ?　なんか、まずい話題なのかな?　そう言えばあの晩に「キツカワはもう  
居ない」とかなんとか言ってたような?

「昔話はそれくらいにしたらどうだ?」

カレンが睨むような目付きでグンゾウ達の会話を制した。怒っている訳ではないが、  
眉間に皺がある。

——あれ位の皺ならまだ怒ってないな……。

最近グンゾウはカレンの眉間の皺の深さで機嫌の良さを判定していた。カレンは機  
嫌が普通の時でも眉間に皺がある。そして機嫌が良い時は眉間の皺が一切無い。これ  
は余りないことだが、ヨシノと話している時は比較的眉間に皺が無いことが多いのをグ  
ンゾウは気付いていた。

——笑ったら、きつと可愛いと思うんだけどな……。

「カレンさんは……、どうしてヴェールをここに連れてきたんですか？」

アキの質問にカレンの右眉毛が上がった。どうも本質を突いた質問のようだ。

「……貴様達の今後の判断に影響がある情報をもたらすからだ。ヴェール……、貴様が潜入している組織の話をしてくれ」

カレンがそう言うのと、ヴェールの暗い表情が少し和らぎ話を始める。

「ああ……。私が居るのは『ザムーンインザクラウド』という組織だ」

——ザムーンインザクラウド……初めて組織の名前を知った……。

「反アラバキアを標榜している組織だが、実態は反辺境軍といった趣が強い。その証拠に天竜山脈より南には興味が無いようだ。組織の首領はシャトウと呼ばれる男であまり表に姿を現さない。直接会えるのは幹部のみで、私も直接面会したことはない。組織 No. 2 のミーリアが護衛に付いていることが多く、無理に会おうとすれば命と引き換えだ……」

「へー、あのミーリアちゃんってヴェールちゃんより強いの？」

ヨシノが早速「ちゃん」付けでミーリアを呼んでいる。ヴェールは全く表情を変えずにヨシノの方を向いて、「ここにいる全員で立ち向かってもかすり傷一つ付けられないだろう」と言った。



「ははは……へこむ……」

ヨシノが項垂れる。アキが慰めるようにその肩を抱いた。ヨシノはここにきて自分より強い敵ばかりが現れてへこんでいるようだ。しかし、その目はどこか嬉しそうだった。

——ヨシノがああいう目をしている時は乗り越える気満々の時なんだよな……。

『ザムーンインザクラウド』は元義勇兵や辺境軍のあぶれものの集まりを中心として、内部紛争で負けた灰色エルフやオークの一部の氏族、ゴブリンの一部等の亜人種も取り込んで相当多くの戦力を抱えている一大勢力だ」

「なんなんだそりゃ？ 何が目的なんだ？」

リョータが思ったことを聞いた。やはりヴェールは全く表情を変えることなく、つまり飛びきりの美人のまま淡々と答える。

「私のような新入りでは組織の目的を探ることまではできていない。ただ……、多くの戦力を抱える理由は明白だ。辺境を生き抜くには力がある。旧ナナンカ王国領にしろ、旧イシユマル王国領にしろ、自然は過酷でおまけに勢力図は一枚岩ではない。様々に入り乱れる勢力均衡の中で、戦力を持つことは生き残る上で重要だ。それを行使するか、しないかに関わらず……。実際、ザムーンインザクラウド以外にも『フォルガン』と呼ばれる似たような組織も存在している」

——フオルガン……。聞いたことないな。

「それにしても、そのシャトウって首領は、オルタナに攻め入ってまで誘拐したセシリア様は奪還され、戦争でもそろそろ追い詰められそうで、何だか今回の行動は意図が読めないな」

グンゾウは首を傾げる<sup>かし</sup>。視界の先でハイドが鼻くそをほじって、リョータの服に付けていた。グンゾウは見なかったことにする。

「首領のシャトウは目的に対して無駄な行いはしない男だと聞いている。今回の行動にも何らかの意味があったと考えるのが妥当だ」

ヴェールがそう言い放つ。ヴェールの声は意志の強さを感じる美しい声だ。

何も分かっていないリョータ小隊<sup>パーティ</sup>は全員黙った。

そんな空気をカレンが破る。

「奴等が提示した人質の交換期限はいつになっているのだ？」

リョータ小隊<sup>パーティ</sup>の全員がヴェールの方を一齐に向いた。

「明日の正午」

——明日の正午……。辺境軍が朝に総攻撃をかけるとして4、5時間……。その間はブリセイスは生かされている可能性があるということか……。

「ブリセイスは……。どうなってるか？」

皆が知りたかったが、聞けずにいたことをカレンが聞いた。天幕内に雷ライトニング電のような緊張が走る。全員おしやべりを止めて無言になる。

「……生きているはずだ。……よく、……頑張っていた」

ヴェールは誰とも視線を合わさずにそう言った。相変わらずの冷たい口調だが、グンゾウ達のために言葉を選んだ。ヴェールは以前と違い、どこか血の通った人間らしさを感じさせた。

「だあああああああ、明日の朝にはどこに捕らわれているかわかんねーんだから、救出もくそもねーだろっ！ よく考えろっ！ ぼけっ！」

リョータが怒鳴り声が天幕の中に響く。

誰に向けてか。その相手はアキだった。

ふたりはブリセイスの救出に関して口論をしていた。

リョータは嘯みつかんばかりにアキに詰め寄り、ふたりの距離は普段では考えられないほど近い。身長差分だけ離れている位だ。

今後、リョータ小隊パーティとしてどうするかを話し合い始めてから口論は始まった。

アキはブリセイスを救出するためにリョータ小隊パーティは独自に動くべきだと主張していた。それに対してリョータは闇雲に動いても仕方ないため、オルタナに帰るか、戦に参

加してブリセイス救出の機会を探すかすべきとの主張だ。

「で、でも……、戦争が終わる頃にはブリセイスは殺されているのよ。それじゃあ、あまりにもあまりすぎる。私達が弱かったせいでブリセイスは捕まった。それなら助けに行くべきじゃない!?」

珍しくアキが強い口調でリョータに食ってかかっていた。眉間に皺が寄り、少し垂れた目元が今は険しい。リョータの圧力に負けじと、両腕を広げて主張している。

「ヴェールですら既にブリセイスの居場所が把握できないのでは、迂闊うかつに動いても小隊パーティーを危険に曝さらすだけだ」

外野を決め込んで、樽の上に座っていたカレンが珍しくリョータの肩を持つ。カレンの言う通り、ブリセイスは当初グンゾウ達が襲撃した神殿の遺跡に監禁されていたが、その後は場所を移され、今はヴェールも居場所を知らない。

「……っ！」

アキはカレンの発言に反駁はんぱくすることができず、唇を噛む。そんなアキを庇かばうように、ヨシノがりリョータとの間に割り込んだ。

「ふたりして、そんなにアキちゃんを責めることないでしょー。アキちゃんはなんとかブリちゃんを救いたいって気持ちなのよ……。なんでリョータはそんなに優しくないの？ この、ヒトデナスっ！」

「ヒトデナスっ?! それはオタンコナスなのかつ?! それとも、人でなしなのか?!」

「どっちもっ!」

「あああ、あかんで、みんなそないに喧嘩したら……。仲良―せな……。っ! 怒っっちゃーよつたら怒っっちゃーよつ!」

その場の険悪な雰囲気には耐えられなくなったのか、シムラがびくびくしながらヨシノとリョータの周りを怯えた犬のようにうろろとし始めた。

「うっせえ、禿げっ!!」

「は、禿げちやうわっ! 坊主やっちゅーねんっ!」

リョータとシムラまで主題テーマと関係のない口論を始めた。ハイドは騒音の中も、ぶひぶひ言いながら寝ている。

「もうっ! とにかくブリセイスを救うために私達ができる限りのことをするべきよっ!」

アキが手近にあつた木箱の上を両手で叩いた。

堂々巡りの口論と緊張の沈黙が続く天幕の中。リョータ小隊パーティが真つ二つに崩壊をしような時に、調整役のグンゾウは何も発言をしない。それどころか、その場の議論に関心を払うこともなく、天幕の隅でひとりブツブツと呟きながら地面に図を書いていた。

「だから……、しかし、そうすれば……。でも、その場合……。ん……。不安だ……。あつ！」  
グンゾウは突然顔を上げると、ヴェールに話し掛ける。

「ヴェール。君とリンタはどっちが強い？」

「五分五分だ」

ヴェールは感情のこもっていない美しい顔で答えた。

「五分五分ね。……。上出来だつ！ それならイケるかも？」

グンゾウは顔を綻ほころばせた。それを見付けたカレンがグンゾウに問う。

「グンゾウ、思案が纏まとまったなら、この騒がしい内輪揉めを止めよ。内容次第では、先の場合、見逃してやっても良いぞ」

「それはついで。よしっ！ 聞いてくれ、みんなっ！ 作戦を実行しようっ！」

グンゾウが全員に声をかけると、リョータ達の口論が止まる。

リョータの両手が、ムラの頬を思いつきり横に引つ張つたまま止まった。

「よっしやーっ！ オツサン、漸ようやく頭使つたかつ！」

そのリョータの手をヨシノとアキがふたりがかりで頬から外そうとしていたが、それはそれで痛い。シムラは涙を浮かべている。

「いへへへへへ、はいっちゅへんっ！ 離してひやーっ！」

そのシムラの叫び声が五月蠅うるさかったのか、ハイドが「ぶひっ！」と声を出して起き上

がった。

グンゾウは天幕の一番奥まで歩くと、そこにいる全員を見渡した。  
「みんな聞いてくれ……」

グンゾウが声調を落とした声で話し出す。

「もう聞いているよ……てっ！」

リョータが悪態を吐いた瞬間、カレン、ヨシノ、アキの3人に装備で叩かれる。ヴェールは溜め息を吐いた。女性陣に総スカンを喰らっている。

グンゾウは気を取り直して、話し始める。

「みんなも知ってる通り、明日は戦争だ。辺境軍はオルタナの市民のために、ザムーンインザクラウドと戦う。……けど、明日ブリセイスのために戦ってくれる人はいない」

リョータは下を向く。別にグンゾウはリョータを責めている訳ではないし、リョータが悪いとも思っていない。リョータもリョータなりに小隊を無駄に危険に曝さらしたくないと考えた結果だ。それはカレンも認めている。

「ブリセイスとは出会って数日しか経っていない。短い間だったけど、でも俺達は仲間だった。そして今も仲間だ。俺達は仲間は放っておかない」

「グンちゃん、カッコイイっ！」

ヨシノが褒める。グンゾウは照れを隠すように手を振って否定した。

「俺は格好良くなつてないよ。俺は弱い。そして、俺達は弱い。すごく弱い。だからブリセイスの献身的な犠牲がなければ助からなかった。カレンが居なかったら多分ヨシノも失つていた。リョータなんて2回も死んだ。俺だつてどうなつていたかわからない。敵はそれくらい強い。だから、……すごく怖い」

リョータもヨシノも真剣な表情をしている。死への恐怖は前線で直接敵と渡り合った彼等が身をもって味わっていた。

ここでグンゾウは語調を強めて、はつきり言う。

「でもきつとブリセイスは、今もつと怖い思いをしていると思う……っ！」

グンゾウがヴェールを横目で見ると、彼女は床に座つたまま、地面を眺めていた。垂れた髪が邪魔をして表情は何えない。

「だから、俺達は明日ブリセイスを救うために戦おうっ！」

「グンゾウさん……。私、すごく嬉しいです。私、やりますっ！」

アキが潤んだ瞳でグンゾウを見詰める。目の端から涙が零れ、鼻の頭がほのかに赤い。白い肌にも赤みが目立つ。

——嗚呼、泣かしちゃつた……。でも可愛い……。

「あたしも、あたしもっ！」



ヨシノが左手を挙げて、跳びはねる。それにシムラとハイドも乗っかる。  
「俺もやるでっ！ 大丈夫だあつ！」

「シシシシシ、まあ、天才の僕がいないと始まらないしな……キシシッ！」

最後はリョータだ。リョータは仕切られて不機嫌そうな顔をしている。しばらく黙っていたが、その内、頭をワシワシと搔いてから、低い声で呟く。

「まあ、オッサンがどうしてもつてーなら、乗つてやらねーこともねーわ」  
これでリョータパーテイ小隊の方向性が決まる。

「具体的にはどうする？ 策があるのだろうか？」

カレンが静かな声でグンゾウに尋ねた。それを首肯して受け止めたグンゾウはカレンと同じく静かな声で伝える。

「ある。でも、それは大きな危険を伴う。……申し訳ないが、みんなには覚悟をして欲しい……」

グンゾウはもったいつけるように、一呼吸置いた。リョータパーテイ小隊の注目がグンゾウに集まり、緊張が高まる。

「明日、俺達は辺境軍を裏切る……っ！」

グンゾウの発言に、そこに居た全員が唾を飲み込む。

「セシリアとブリセイスを交換するんだっ！」

## 2.2. それぞれの戦場

「えっ?! なんぞっ?!」

戦争の朝。起き抜けからのグンゾウの素すつ頓とん狂きやうな声が朝の静し寂じまを乱す。目の前の景色に、寝ぼけ眼の低血圧が一気に上がった。

「いや、なんでっと言うか……、今日は戦争やし、ここ一発気合い入れへんといかんか  
なあって……イケるところまで、イキましたっ!」

シムラが勢い良く頭を撫でると、そこには青みがかった肌色の球体があった。東の空から今まさに昇り始めた太陽が反射して輝く。シムラの屈託の無い笑顔と輝く頭皮が眩しい。

「あかんかったですかね?」

シムラが上目遣いでグンゾウを覗き込む。

「ああ、いや、あー……、そ、そう……か、まあ、さっぱりして、いいんじゃないかな……。  
すぐ生はえるし」

何が起きているか。

夜明け前の早朝から天幕テントの前に集まったりヨータ小隊パーティ。

ハイドを除くリヨータ小隊パーティが起きて集まったところ、昨晚寝る前と違い、シムラの頭がつるつるのスキンヘッドになっていた。今までも髪の毛が長かったことはないが、五分刈り程度で坊主頭の少年といった程度だった。今回は本当につるつるだ。五厘もない。というか、髪の毛が無い。

「シムちゃんまじうけるーっ！ つるつるしてるねーっ！」

早々に出発の準備を済ませたヨシノが、楽しそうにその頭皮を指先で撫でた。その指先に伝わるチクチクとした刺激に、笑顔を浮かべている。ヨシノにべたべたと頭を触られて照れるシムラ。その様子が気に入らないリヨータは不機嫌そうな目でそちらを見ると、

「馬鹿だな……この馬鹿っ！」

と言いつ捨てた。

すつかり早起きに慣れたアキは既に装備を整え、さつきから口に手を当てて必死に笑いを堪こらえている。その姿がアキの控えめな性格を反映していて可愛らしい。

そして、雷帝ハイドはまだ起きていない。相変わらずだ。

「次、不敬な行いをした場合の罰はあれだな……」

カレンが物騒なことを呟きながらグンゾウの傍を通りすぎた。

グンゾウは慌てて、その後ろ姿に向き直る。

「え？ それ、俺っすか?!」  
師、マスター それ、俺のことっすか?!」

グンゾウの質問を完全に黙殺して、カレンの小さなお尻をぷりぷりさせながら、無言のまま遠ざかっていった。

ようやく起きたハイドがもそもそと背囊の中身を確認している。とことんマイペース。本来は素直な直毛だが、今朝は凄まじいまでの寝癖がついている。静電気を帯びた子どもの髪のような。

「早くしろっ！ このキモオタっ！」

リョータが悪態を吐いている。手が出ないのでまだ良い方だ。

ハイドの準備を待っている間、ヨシノは完全武装のまま体の動きを確認していた。

そのヨシノの視界に見知った兵士が目に入る。

「リョータあ……、あれってあの時のあれ?……」

ヨシノがリョータの腕を掴んで、少し離れた場所を指差す。その指が示す先では、何人かの兵士が戦争の準備をしながら話し合っていた。

「おいおい、どうした、ヨシノ? あの時のあれだけじゃわからねーぞ」

ヨシノから触られて、機嫌が戻ったりリョータ。満面の笑みを浮かべながらヨシノが指

差す先へ目を遣った。その弛緩した目が、一瞬で不愉快な目へ変貌を遂げる。ガンを飛ばすヤンキースタイル。

「けっ！ あの時のあれか。あんなクソまで連れて来てんのかよ……っ！」

リョータの怒気に気付いたグンゾウや他の仲間も、その方向を見る。皆、クソの示す対象に気付いた。

「ああ、あの時のあれね……。もう殴っちゃ駄目だぞ」

リョータがクソと言ったのは、天望楼警備の兵団指令を受けに行つた際、詰所で最初に應對した兵士だった。義勇兵を愚弄しまくつた結果、リョータに殴られ、気絶させられた兵士だ。

あの時のリョータの暴挙を思い出して、グンゾウは胸が詰まるような緊張を覚えた。一歩間違えれば全員牢屋行きだ。オルタナの文化水準を考えると、牢屋暮らしは健康で文化的な最低限度の生活を営む権利が満たされるとは思えなかった。

「相当、ポンコツまで駆り出してやがんな……っ！ 辺境軍も終わつてんぜっ！」  
リョータは腹立たしげに装備の革帯を締め直しながら言った。

「彼等は、なんだか他の隊より準備が早いですね」

アキは不思議そうにその兵士達のことを眺めていた。白い金属の鎧に包まれたアキは、さながらひ弱な女の子が大活躍してしまう非現実的な妄想に出てくる女性主人公

のようだ。この暴力と権力が全てを支配するグリムガルでは、ただの非力な聖騎士にすぎないのが悲しい。

「そう言えば、あいつ……」

グンゾウが思い出したことを口にしようとする、

「今は関係ないことを喋っている暇は無い。辺境軍より早く動かねばならないのはわかっているのだろうか？」

グンゾウの言葉を遮るように、カレンが現れた。カレンは銀白の頭巾付きフード外套マントに身を包み、外からは明確に個人が特定できない。頭巾フードから漏れる金髪と、尖った小さな顎が見えるだけだ。

「これは貴様が持っている」

そう言つてカレンは装飾が施された金属製のスタッフをグンゾウに投げて寄越した。グンゾウの手に収まると先端の飾りがシャラリと涼しげな音を立てる。

「何も持たなくて、護身術はどうするんですか？」  
マスター 師

グンゾウが訊くと、返事の代わりにカレンは腰の辺りから伸縮式のショートスタッフを抜いた。勢いを付けて振るとショートスタッフが一瞬にして伸び、軽い金属音を立てた。

「はあ……なるほど……」

グンゾウは納得して頷く。カレンはそのショートスタッフを再び短くすると腰の辺りにしまった。その腰にどこかで見たことのある六条鞭がチラリと覗く。

——なんとっ！ 六条鞭あは常時携行なのか……っ！

焦りと僅かな喜びが心に芽生え、独りひと変な汗をかくグンゾウだった。

「じゃあ、みんな行ける？」

グンゾウの視線にリョータパーテイ小隊全員が無言で頷いた。

グンゾウとカレンは、ラツテイ准将の腹心1号ことマルコに単独行動の許可を事前にと取っていた。そのため、戦争前で緊張が漂う基地を円滑に出発することができた。

マルコは理解の良い男で、カレンとグンゾウの作戦を聞いて、彼ができる最大限の配慮をしてくれた。

「辺境軍を裏切る」と宣言したグンゾウだったが、それは言葉の通りではない。あくまでも敵側に「辺境軍を裏切つて、セシリアとブリセイスの交換を持ちかける一派がいる」と思い込ませるということだった。

理由はわからないが、敵側はセシリアの確保に高い優先度を見出している。ならば敵側にブリセイスがセシリアとの交換価値があると誤解させ、ブリセイスを殺させないようになすことをグンゾウは思いついた。少なくとも戦争が始まって、ブリセイスを殺

すという判断が下るまで、時間が稼げるかもしれない。戦争開始から1時間も稼げれば、救出の可能性があるかもしれないと考えた。

この作戦にはもうひとつ利点メリットがある。人質交換をする場所が相手からもたらされるため、ブリセイスの監禁されている位置を特定できるという点だ。行方不明になつてい  
るブリセイスを敵自身が連れてきてくれる。

そのため上手く立ち回る最重要人物はヴェールだ。敵に悟られぬよう、上手く偽情報を信じさせる、信じるに至らなくても疑心暗鬼にさせる程度には誘導する必要がある。一歩間違えれば、あの美しい首が飛ぶ。

ヴェールには、裏切り者達ことグンゾウ達からの情報を敵側に伝達してもらうと共に、ブリセイス救出の手助けをしてもらう。事の成否は、組織における彼女の信頼性がもの言うだろう。

さらにヴェールへ、今日の戦争に関する情報を組織に流すように指示をした。既に他の密偵からも情報が伝わっているだろうが、ヴェールから裏を取る形で情報が敵側に流れる。彼女の信頼は上がるだろう。少しでも作戦成功の確率は上げておきたい。

次に、交換の時に必要な偽の人質である。セシリアの替え玉はどうするか。

それは……。

「いつもながら、貴様の不敬には感動すら覚える」



彼女は今、<sup>フード</sup>頭巾を目深に被り、<sup>フード</sup>頭巾から零れる<sup>こぼ</sup>金髪が見える程度だ。おまけに色白で小柄。

「恐縮です……。昨夜はこの作戦で死んだ方が楽かも知れないと思いつながら寝ました」セシリアは小柄色白で金髪の少女だ。敵も幹部が出てこない限りはその程度の要素しか知らないと思像された。幹部は戦争の対応で手一杯だろう。つまり見た目の大まかな要素さえ合っていれば良い。

その程度でよければリョータ<sup>パーティ</sup>小隊には適任者がいた。

小柄色白で金髪眼鏡のトSと言えばカレンだ。眼鏡とトSは余計だが。

つまり、グンゾウはカレンをセシリアに見立てて人質交換の場所まで進もうと考えた。

<sup>つたな</sup>拙い理を繋ぎ合わせて、なんとか立てたブリセイス救出作戦だった。成功する確信なんて少しもなかったが、グンゾウ達はその<sup>つたな</sup>拙い理を信じて心を決めた。

丘の上を駆けた風が、右から左へ、左から右へと草原の緑を揺らす。

その風は草の絨毯に波模様を作っては消えていった。

平和な時であれば、お弁当箱等持って遠足するのに丁度良い場所だろう。

だがそうではない。

ザムーンインザクラウドから指示された人質交換の場所へ向かう途中、丘の上から眼下に広がる草原が見えた。

太陽は明るさを増し、完全にその姿を東の空に現わしていた。

あと1時間もすれば戦争が始まる時間だ。周囲には両陣営の偵察が潜んでいるが、双方にグンゾウ達の存在は知れている。そのため、特に移動をさまたげられることはなかった。

「あそこが今日の戦場なんですわ……」

その平地を眺め、立ち止まったアキが言った。胸の前で握り締めた手が表すアキの不安。

その不安を解くように、グンゾウはアキの肩に優しく手を置いた。

「急ごう……、プリセイイスが待ってる」

女心の分からないグンゾウにはこれが限界だった。

「……はいっ！」

少しの沈黙の後、力強い返事をしたアキはグンゾウに向き直ると、垂れた目の上にある眉毛をきゅつと寄せて、凜々しい顔になる。そして、甲冑の重さを感じさせない軽い足取りで前に歩み始めた。

グンゾウ達が通り過ぎてから1時間もすると、その草原には両陣営の兵士達が集まっていた。両陣営とも丘を背に平地戦の構えだ。

辺境軍の正規兵は騎馬兵が10〜20騎程に、長槍を装備した歩兵が70〜80人程の2小隊だ。反攻部隊の半数が集まっている。正規兵は2列の横陣を敷いて、整列していた。残り半数の兵は、基地の防衛に残っているのか戦場には見当たらなかった。ラツティーの腹心達の姿も見当たらない。

一方、ザムーンインザクラウド側は50人に満たない。正確には人と数えるにはいささかそぐわれない生物がいた。体長が3メートルを優に超える長い腕を持つ馬面の生物。小さな頭がふたつ生えた生物。腕が4本生えた巨人。そう言った異形のもの達がオークやゴブリンと言った亜人種の中に紛れていた。もちろん人間族もいるが武器も防具もバラバラで統一感が無い。陣形もなく、巨大な生物を中心に4〜5人で徒党を組んで正規軍に野次を飛ばしている。お互いの陣営に緊張と殺気が漲みなぎっていた。

どこからか角笛の音が鳴り響くと、戦争開始された。

辺境軍が横陣のまま、ゆっくりと歩を進める。それに呼応して、賊軍も散発的に攻撃を開始した。勢いに任せた特攻だ。

身体大きく装甲が強固な不死生物を先頭に、辺境軍の横陣に当たっては跳ね返された。後列からの長槍の餌食になる亜人種もいた。

体力のある戦闘序盤は、訓練度の高い辺境軍が陣形の高い防御力を活かして、個体差の不利を撥ね除ける形になった。

しばらくすると賊軍の後方で動きがあり、一筋の魔法の光弾マジックミサイルが空高く上がる。

すると突然、辺境軍の横陣に乱れが生じて、中心付近から陣形が崩れる。辺境軍の正規兵の一部が同士討ちを始めたのだ。そこから手練れの賊が突破し、陣を分断する。陣形が崩れた一角には、あの灰色エルフらしき姿が垣間見られた。さらに丘の上に陣太鼓が鳴り響き、野獣や不死生物を従えた賊の騎馬兵が30騎程現れる。

仲間の裏切りと伏兵に遭った辺境軍は混乱し、ちりぢりとなって後方の丘へ撤退を始めた。

そんな戦争が始まる30分程前、グンゾウ達は賊から指定された場所に到着していた。

そこは古代に造られた円形闘技場の遺跡だった。積み上げられた長方形の岩は苔生こけむし、所々崩れ落ちている。その闘技場の外で賊の一味が待っていた。人間を中心に15人程が思い思いの武器を手に屯たむろしている。あまり友好的な雰囲気には見えない。

——多おほいいな……。

グンゾウは眉を擡ひそめる。

賊の中には黒い甲冑に身を包んだヴェールの姿が見える。そのことはグンゾウ達を少し安心させた。

ヴェールの凜とした佇まい。長身に小さな顔。あまりにも周囲の人間と等身が違うため、同じ種族とは思えない。

グンゾウ達が10メートル程の距離に近付くと、賊の弛んだ雰囲気が変わる。ニヤニヤとしながらも、凶暴な雰囲気は漂ってくる。

賊の中のひとり。闘技場の外壁よりも苔生したようなひげ面の男がグンゾウ達に言い放つ。

「お前等、それ以上近付くな！ セシリアとかいうガキを渡せっ！」

ひげ面は大きな片刃の剣を肩に担いでいる。

「ブリセイスとの交換が条件だ。ブリセイスの姿を見せろ」

グンゾウは叫ぶわけではないが、通る大声で話した。

すると、ひげ面をはじめとする男達は「やれやれ」とでも言いたげな様子で仲間を見回した。

「阿呆か？ この状況を見て、お前等が要求を言えると思っているのか？ どんだけ茹であがった頭してやがんだ。殺されなだけましだと思えっ！ さっさとその小娘を渡すんだ、呆け共っ！」

グンゾウの横にいたリョータの歯が、クローズヘルムの中でギリリと音を立てた。歯の低いリョータにしては良く我慢している。

「駄目だ。ブリセイスが生きていることの確認が先だっ！」

グンゾウが叫ぶ。

すると、ひげ面は呆れた顔をして、「しつけーぜっ！」と怒鳴る。その後、ニタニタとそのひげ面に下卑た笑いを浮かべた。

「ちゃんとは生きてるさ。さつきまで、この奥でしつかり俺等を楽しませてくれていたからなっ！ はっはっはっはっはっはっ！」

ひげ面は隣にいる同じく汚い顔をした禿頭の男と肩を組んで笑った。

「用はすつきり済んだからなっ！ ガキサえもらえれば、もう返してやってもいいよな。ひっひっひっひっひっひ」

周囲にいる賊達も喜びを共有した犯罪者の笑みを浮かべて、顔を見合わせては愉快そうに笑っている。不快な表情。

グンゾウの頭の中に汚い男達の慰み者になっているブリセイスの姿が浮かんだ。

丈夫な鎖で繋がれた全裸のブリセイス。鍛え上げられ、性的にも成熟した大人の姿態。その滑らかな褐色の肌を男達の汚い手が這い回る。ブリセイスの抵抗も空しく、なすすべもないまま男達の手に委ねられ、その苦痛と恥辱に表情が歪む。その歪みすらも

欲望の糧にしようとする貪欲な男達は、さらに興奮を募らせ、激しくブリセイスの敏感な部位を責め立て始める……。

——予想してたけど、ひくわっ！

「早く……進めましょうグンゾウさん……もう、これ以上は聞くに堪えません。どうぞ……」

正義感の強いアキは甲冑の内側で、怒りに震えている。

「アキ……」

グンゾウは憤懣やるかたない気持ちを抑えながら、交渉を進めることにした。

「仕方ない……、先に渡してやるっ！」

そう言うと、グンゾウは頭巾を被ったカレンの背中を押した。カレンは一瞬振り返り、深い眉間の皺でグンゾウを睨む。グンゾウは寿命が1年程縮むかと思った。カレンは「ちっ」っと小さく舌打ちをすると俯うつむきながら泔々と賊の方へ歩いた。

盗賊達の視線がカレンに集まる。

その間にグンゾウの目の端、木立の中を大きな黒い影が素早く動く。しかし、盗賊達を始め、誰も気付いていないようだ。

カレンと賊達の距離が詰まっていく。既に盗賊達はカレンを包囲するように動いている。

——あと少し……。

もうすぐカレンが賊達と接触するという時に、グンゾウは口を開いた。

「そのお姉さん凶暴だから気を付けろよっ！」

「はあ？」

グンゾウがその言葉を賊が発した瞬間、賊の注意が一瞬逸れる。

カレンは外套マントの下から伸縮式のショートスタッフを取り出すと、横に一閃して伸ばす。次の瞬間、ショートスタッフが大きな円を描いて振り回された。「ぐわっ！」「うっ！」「ぎやっ！」等と円周の範囲にいた賊が次々と呻き声をあげる。

回転の勢いで外套マントの頭巾フードが取れ、カレンの素顔が明らかに。いつもの金髪が頭巾フードでくしゃくしゃとなって幼女のような。金髪の下は不機嫌極まりない表情をしている。賊達を挑発するように、回転でずれた眼鏡をびんと立てた右手の中指で上げる。

賊達はカレンの攻撃範囲から遠ざかった。

「ぶっぎげんなよっ！ 騙しやがったな?! てめーら、ぶっ殺してやるっ！ ヴェール、やれっ！」

ひげ面が唾を撒き散らして叫ぶ。

ヴェールは腰に手をやると長剣ロングソードを徐に抜き始める。徐々に現れる長剣ロングソードの鈍光がヴェールの横顔を照らした。



「お前達みたいに信用できない奴等との取引に、ノー準備で来るわけねーだろ？ 不意打ちや密偵スパイはお前達の専売特許じゃないんだよ。じゃあ、みんなっ！ いっちょよ、派手にやろうかつ！」

グンゾウの掛け声と共に、リョータやヨシノはそれぞれ近くの敵に目掛けて切り込んだ。

それに合わせて、グンゾウは手に持っていたスタッフをカレン目掛けて槍投げのように投擲する。スタッフは、少し外れて高い位置に飛んで行ったが、カレンは高い跳躍で掴み取ると、回転しながら近くにいる賊のひとりへ襲いかかった。

使い慣れたスタッフに持ち替えたカレンは、残像が残る素早さで打撃を繰り返す。あつという間に賊を昏倒させた。周囲の賊達がさらに一歩カレンから遠ざかる。

「……『やろうか？』それは誰に言っている？」

賊を叩き終えたカレンが、呼吸を整えながらグンゾウに振り向いて言った。

「はっ！ しまったっ！ すいません。やらせていただきます、マスターカレン」

脊髄反射の土下座。グンゾウはその場で地面に額をつける。

「……まあ、良かろう」

カレンからのお許し。目にも止まらぬグンゾウの土下座に若干満足げな様子だ。

カレンとグンゾウが仲良く戯れに興じている一方、深刻な別れ話に直面している男女もいた。

「ぐわっ！ ……この売女め……、裏切ったな……っ！」

典型的なやられ役の台詞。ひげ面の弛んだ腹部にヴェールの長剣が突き刺さっていた。

膝を着くひげ面。ヴェールは面防を上げたまま、その小さな顔についた大きな目でその男を見下ろしていた。その視線はどこまでも冷たい。

「……最初から……貴様等の仲間ではない」

そう冷淡に言うのと、右手の長剣をそのままに、左手で引き抜いた黒い錐状短剣でひげ面の眼窩を串刺した。ひげ面は錐状短剣に脳を貫かれて、糸の切れた傀儡のように倒れる。

「ヴェールっ！ 裏切ったのか?!」

禿頭の男が叫んだ。

突然のヴェールの裏切りに動揺する賊。それでも賊は倍近くいる。数的には賊側が有利だった。

「くそっ！　だが、まだまだ余裕だっ！　2、3人で1匹やれっ！」

「囲むんだっ！　逃がすなっ！　あの女は殺すように、首領ボスへ連絡しろっ！」

誰かが叫ぶと賊達はグンゾウ達の周囲を取り囲むように広がり始める。そして何人かの男達が闘技場へ向かって走り出した。

「まずいっ！　伝令を走らせちゃ駄目だっ！」

グンゾウの叫びにハイドが反応する。

「……ヴェル・ダーシユっ！　キシッ！」

ハイドの放った影鳴りシャドローパーが男達に向かつて飛んで行く。黒い藻のような影ダーシユの塊がひとりの男に当たって弾けた。男は影鳴り超振動シャドローパーに震えて、立ち尽くしていた。これで数秒は動くことはできない。

その男の背に1本の矢が突き刺さった。数歩進み、倒れ込む男。

「シムラ……っ！」

グンゾウが振り返ると、本日最も輝いている男が怒りで顔を真っ赤に染めていた。

「人は殺したないけど、クズは別やつ！」

弓矢を構えるシムラの手が震えている。

リョータ小隊パティはまだ人間族を殺したことはなかった。厳密に言えば、怪我は負わしているんで、その傷が元で死んだ人間はいるかもしれない。しかし、意識的に止めとどめを刺し

たことはなかった。

人を殺してはいけない。そんな今まで悩んだことも無い、当たり前を、今日は許して貰えそうになかった。

「くそっ！ 後衛を先に殺せっ！」

賊の誰かが叫ぶ。

——嫌なことを言いやがる。しかも、何人かは闘技場の中へ行かせてしまった。早く追わないと……。

グンゾウは考えを巡らせた。司令塔は自分だ。

ヴェールやヨシノ、リョータは複数人を相手に善戦しているが、敵の数はそれでも多い。余った敵はカレンやアキが防いでいるが、それでも余分が出る。4人の男達がグンゾウとシムラ、ハイドを狙ってくる。周囲を囲うようにゆっくりと距離を詰めてくる。グンゾウ達はジリジリと後退あしすきした。

しかし、危機ピンチ中でもグンゾウの表情には余裕があった。戦力不足は予想の範囲だったからだ。

——できれば、もっと効果的に手札を切りたかったが……。

カレンとグンゾウは昨夜、腹心1号ことマルコに単独行動の許可を願い出る際に、1つだけ追加のお願いをしていた。

そのお願いとは人をひとり動かす権利だ。

可能であれば、それは後半まで温存しておきたかった戦力だったが、いきなりの危機ピンチとあれば使わないわけにはいかなかった。

「んじや、先生お願いしますっ!」

グンゾウが緊張感の無い声を出すと、大きな影がグンゾウ達を狙っていた4人の男達に横から襲いかかった。最初の一撃で2人の男が憐れにもボロ雑巾のように地面に倒れた。残りの2人も突然の伏兵に動揺が隠せない。

そこには、巨軀の大男が立っていた。鋼鉄の鎧に身を包み、凶悪なまでに長く厚みのある両手剣をひと振りし、剣に付いた血糊を払った。  
ツヴァイヘンダー

その姿は、グンゾウ達にとっては頼もしく、賊達にとっては脅威そのものだった。

「頼りにしてるぜっ! ……タナカちゃんっ!」

大男は面防バイザーを上げる。豪快な眉毛の下にある優しい目。

「うす……」

タナカは消え入るような細かい声で返事をする、残りの敵に襲いかかっていった。

## 23. 時よ止まれ、いま君は輝いている

古い円形闘技場前で繰り広げられる戦い。

ブリセイスを取り戻すためのための小さな戦いだ。

多勢に無勢の戦いも、ヴェールの寝返り、タナカの参戦のお陰で、グンゾウ達は少しずつ優勢になりつつあった。

その2人の戦い方は対照的だ。

ヴェールは一撃離脱を中心とした攻撃を繰り返し、ひとりひとり賊を無力化している。彼女は重力が無いかのように、地面の上を滑っていた。彼女が踏む地面の上だけ、水が張っているのではないかと錯覚させる動きだ。

ヴェールは目の前にいる賊へコツンと当てるだけの浅い一撃を加えると、滑るような

バックステップ

バックステップ

後退で離れた。賊は反撃しようとしたが、空振りに終る。後退に釣られて、前のめりになる賊。身体が開いてしまう。踏みとどまって体勢を立て直そうとしたが、すかさず反転前進したヴェールの正確な突きを喉元に喰らった。

そして、ひとつの命が消える。

流れるような足捌きと、正確な剣技の組み合わせ。それは美しい死神の剣舞。

一方、タナカは相変わらずの豪剣を振るっていた。無駄な動きはしない。べた足で構え、賊2人を惹きつけている。

上半身の動きだけで賊達の攻撃をぎりぎり躲す。わざと相手の武器の切っ先だけを装甲の上で滑らせる時もある。繊細な動作を繰り返しながら、太い眉毛の下にある目は猛禽類のそのように獲物を襲う機会を探していた。

タナカが突然ひるがえ翻ひるがえったかと思えば、賊は2人まとめて肉厚の両手剣で横薙ぎにされた。鎖帷子チェインメイルに守られ、切断という悲劇は免れたが、凄まじい衝撃力に吹き飛ばされ、2人同時に地に伏した。ひとりは両腕が壊れた人形のようにあり得ない方向に曲がっている。

周囲の賊達は怖じ気づいてタナカから遠退く。タナカの半径2メートルは死キルゾーンの空間だ。

死への恐怖。誰だって死にたくはない。

「しかし……」

——そろそろ切り抜けないとまずいな……。

優勢になりつつある現状を眺めながらも、それでもグンゾウは少し焦っていた。走り去った伝令が何人か逃げている。奴等がブリセイスの下へ辿り着けば、殺そうとするかもしれない。早く追いかけるなければ、彼女の命が危ない。

「ほいちよいやーっ!!」

緊張感の無い叫び声と共にヨシノが賊の武器を跳ねとばした。そのまま、狼狽<sup>うろた</sup>える賊の側頭部を石突きで強打し、鈍い音と共に昏倒させた。

「おっ? こら、やんのか? てめえ? おらっ! おらっ!」

リョータも目の前の賊の胸ぐらを掴み、何度も殴って気絶させた。正確には気絶した後もしつこく殴っている。オークも気絶する重たい拳だ。

その奥ではアキが、斧持ちの賊に劣勢を強いられていた。ぼろ切れだか、鎧だか分からない服を身に着けた賊は、何度も斧を振り下ろす。斜めに構えた盾で斧の威力を受け流し、アキに損傷<sup>ダメージ</sup>はないが、防戦一方で反撃の隙が無い。グンゾウが助けに向かおうとした瞬間、ひらりと現れたカレンがアキを襲っていた賊の頭部を全力で叩いた。

「……あれは俺がやりたかったな……」

「カレンさん、ありがとうございます」

アキの感謝に、カレンは不機嫌そうな視線だけ返す。別に怒っているわけではない。あれが通常、むしろご機嫌だ。

カレンは倒れている賊の股間を蹴り上げ、アキを怯えさせた。

「こわっ……」

気が付けば、立っている賊は残すところ6、7人。気のせいかグンゾウの耳には、優



勢を告げる軽快な背景音楽すら聞こえそうだ。

「タナカっ！ 残り任せられるか?!」

グンゾウが叫ぶと、タナカは周囲をぱっと見渡した後、

「……っす」

と言つて、軽く手を振った。

「よしっ！ みんな、ここはタナカに任せて伝令を追おうっ！ 急がないとブリセイスが危ない」

「うおっし！ ふんどし締めて行くぞ、てめえらっ！」

グンゾウに続いて、リョータの上品な声の掛け声で、全員が動き出す。伝令を追って、円形闘技場の入り口通路へ向かった。

「シシシシシ、MP温存、MP温存、キシシ……」

ハイドが訳のわからないことを言いながらグンゾウの後に続いた。

グンゾウの前にはシムラ。シムラは自分が矢で射貫いた賊の横を通る際、横たわる賊の顔を覗き込んだ。賊の生死はわからなかった。

小隊の最後尾にタナカもついてくる。

「俺等を無視するのか？ 舐めてんのか?! 逃がすなっ！」

しつこく生き残っていた禿頭の男が、グンゾウ達を追おうとする。

タナカは歩みを止めると、振り返って円形闘技場の入り口通路に仁王立ちした。日陰になり、ヒンヤリと黴臭い空気がタナカを包む。その空気が戦いで火照った身体を心地よく冷やした。

「ふうー……」

タナカは溜め息をひとつ。

「さて……、今日は失いたくない人が居るんで、後ろには通さないぜ」

そう言うのと、タナカは長い両手剣ツツワイスヘンタイを正眼に構えた。

グンゾウは石畳の通路を走りながら振り返り、遅たぐましいタナカの後ろ姿を見る。

「タナカ、死ぬなよ……」

そう呟くとグンゾウは前を向き、走る速度を上げた。

目の前には通路の先に小さく光る出口と、青々と輝くシムラの頭が有った。

通路を途中まで進むと先行していたヴェールとヨシノが立ち止まっていた。その脇には地下へ向かう階段の付室があった。地下は奈落タルタロスのように真つ暗だ。

グンゾウは追いつくと足を止めて、乱れた呼吸を調える。アキやハイドも追いついてきた。

「はあはあ、どうした?」

グンゾウが尋ねると、

「ブヒシシシシ、ブヒシシシ、ゲボツ」

グンゾウの斜め後ろで、ハイドが危険域の異音を立てている。いつまで経っても運動不足から抜け出せない。

グンゾウの問いにヨシノが答える。

「グンちゃん、あのね、向こうの出口に向かった人影もあつたんだけど……、聞いて」

ヨシノが黙って階段の方を指差すと皆が黙る。

石造りの通路の中に冷たい静寂が漂う。

「ブヒシシシシシ。ブヒシシシ」

ハイドの呼吸を整える音が五月蠅うるさくて何も聞こえない。

「うるせえ、キモオタっ！」

リョータに一喝され、ハイドは頑張つて息を殺す。このままだとリョータはハイドの息の根を止める勢いだ。

グンゾウは目を閉じて、意識を聴覚に集中した。すると、地下の方からカツカツと人の走る音が石壁に響いてきた。

——聞こえた！

グンゾウは目を見開く。

音が聞こえたのを確認してから、ヨシノはその大きな瞳をグンゾウへ向ける。

「聞こえた？ グンちゃん どうするの？」

「え？ どうするって……、俺？」

リョータ小队全員の視線がグンゾウに集まった。

グンゾウはひどく困った。

早く決断をしなければならぬ状況だが、どちらの道が正解なのか判断がつかなかった。時間は残酷にも刻々と流れていき、仲間の視線は痛く突き刺さる。

「う……えっと、……そだな……」

判断が付かず、10秒ほど時間が経つ。グンゾウの額から汗が出てくる。

「悩んでいる時間は無い」

カレンが静かにそう言うのと、背囊から行燈ランタンを取り出した。

「火を」

カレンが小さく尖った顎をしゃくると、ハイドが精霊魔法の詠唱を始める。

「キシキシキシ、イグシキシキシ・アルヴ」

ハイドが赤い宝石の付いた杖を振ると、小さな火の玉がカレンの持っている行燈ランタンに灯あかりを灯ともした。行燈ランタンの炎がカレンの顔を紅く染める。

「師……みんなで地下へ行くんですか？」

「違う。二手に別れるのだ」

「この寡兵かへいを分けるんですか？」

グンゾウはカレンの顔を覗きこむように見る。

「それしかあるまい。ここまで来た目的を考えろ。……そもそもブリセイスを救えなければ、来た意味が無い」

カレンはグンゾウの顔を手で押しのけると、ヨシノとハイドの方を向けて手を上に向けて呼び込んだ。

「ヨシノ、魔法使い……来い」

「シシシ、良くわかつている……」

「え？ あたし？ 地下かー、槍が使えるくらい広いといいなー」

カレンに呼ばれて、ハイドとヨシノがカレンに付いていく。

グンゾウの心に微妙な嫉妬心が湧き起こった。しかし、もっと嫉妬心を心に燃やした男がいた。

「おいっ！ 駄目だ！ 俺もヨシノと一緒に行く。絶対に離れないぞっ！」

リョータが割り込んで行き、ヨシノの肩を抱く。抱きすくめられて、蹠よろ跟ちめくヨシノ。

「よよよ……リョータ、ちよつと強引にしないでよ……」

その様子を見たカレンは少し考えたが、すぐに視線を背け、静かに「好きにしろ」と

言い放った。カレンは背囊から木炭を取り出し、通路の床に出口方向へ大きな矢印と「タナカへ」と書く。

「これで、タナカは闘技場の方へ行くだろう」

「しかし……師、<sup>マスター</sup>これで本当に……」

グンゾウは納得していない様子を見て、カレンは溜め息を吐く。

「いいか、敵の全てを倒しに行くつもりはない。伝令に追いついて、そいつだけを仕留めるのだ。伝令を仕留めたら、戻り、貴様達の後を追う。いいな……、では、全員急ぐぞっ！」

カレンの一言で全員に緊張が走り、全員が動き始める。ヴェールは早くも通路を滑るように走り始めた。シムラがばたばたと後を追う。

「みんな、……無事でね」

アキが不安そうに胸の前で右手を握っている。

「うん。アキちゃんも気を付けて」

「ヨシノは俺が守るから完璧だぜ」

「シシシシ……」

ヨシノ達もそれぞれに返事をして、地下の階段を降りていった。

——本当にこれでいいのだろうか……？ 検討が足りないんじゃないか？

グンゾウが結論の出ない不安の迷宮を彷徨さまよっていると、カレンが声をかける。

「グンゾウ」

「はいっ！」

凜としたカレンの声に、グンゾウは思わず背筋を伸ばして、直立する。

カレンはいつものように眉間に皺の寄った表情をしていたが、機嫌が悪い時の顔ではないとグンゾウにはわかった。

「答えの出ぬ悩みに囚われるな。今は一秒でも早く前に進まねばならない時だ」

「は、はい……」

それでも浮かない顔でいるグンゾウに、カレンは少しだけ優しい口調で話しかけた。

「この試練は超えられるはずだ。私の直感がそう判断した。……本当に困った時は、ルミアリスの声を聞け」

そう言うと、カレンは白銀の外マント套ひろがえを翻し、地下の階段をふわりと降りていった。

その背中を見送ったグンゾウは、

「はい……。わかりました、マスター師」

と、届かない返事を呟く。そして、視線を出口の方へ向けると、気持ちを切り替えて走り始めた。

光の中へ飛び出すと、そこは円形闘技場の中腹にある出入り口だった。

グンゾウ達の目の前には、円形闘技場がすり鉢状に広がっている。相当な広さだ。中心は広場になっていて、元々は整備されていたかもしれないが、今は背の高い多年草が生えている。

広場には岩が積み上げられた塔のような物体が何本も立っていた。高さは約3〜4メートル。何のために立てられたものか、グンゾウにはわからなかった。岩肌は苔こけむ生し、蕨植物が這っている。古いにしえからあることは誰にも予想できた。

「みなはん、あそこっ！」

周囲を見渡していたシムラが円形闘技場の反対側を指差す。

その先には、同じく円形闘技場の外側に出られるであろう通路、そして、その入り口に向かって駆けている甲冑姿の太った男が見えた。伝令のひとりだ。重装備と蓄えた脂肪のせいで遅れたようだった。

「流石に射程外やで……」

矢を番つがえ、狙いを定めていたシムラが射撃を諦めた。

「……仕留める」

そう短く言うのと、ヴェールが最初に動き始める。全員でそれを追う。

階段状になった闘技場の観客席を円弧に沿って走って行く。観客席は長方形に切り



出された石灰岩で造られていた。長年の風雨にさらされ表面は滑りやすくなっていて、所々、割れているところもあり走りにくかった。

各人滑りやすい足場に苦戦していたが、ヴェールは甲冑を着ていないかのように軽やかに跳びはねて行く。ヴェールはここでも不思議な足捌あしさばきだ。神官の装備が軽いとは言え、グンゾウは悪い足場に苦戦をしていた。グンゾウの後ろにはアキ。アキは装備が重い。

隊列が少し間延びしてしまう。先頭のヴェールと最後尾のアキでは200メートルくらい離れている。

——あれ？ シムラは？ 前の方に居たはずだけどな……。

足を止めてシムラを探すグンゾウ。その後ろへ追いついたアキが息を弾ませながらグンゾウに話しかけてきた。

「はあはあ……グンゾウさん……んくつ、どうしたんで……はあはあ、すか？」

——ちよつと色つばい。

「いや……、シムラがね……何処行っちゃったかなって」

グンゾウの視線がシムラを捉える。シムラは真つ直ぐ出口へは向かっておらずに闘技場の階段を少し登り、高い位置にいた。何やら広場の方を見ている。

——何してるんだらう？

「おーい、シム……」

グンゾウの呼びかけを遮り、大声でシムラが叫んだ。

「みんな、伏せろっ！ 狙われてんでっ!!」

「え？」

全員の動きは止まり、視線がシムラに集まる。

「岩陰に誰かおるっ！」

大きく腕を振り、再度シムラが叫ぶ。その指先が闘技場の広場を指差すと、全員回れ右して、そちらを見る。次の瞬間、グンゾウは岩陰に鋭い光を感じた。

「危ないっ！」

突然、隣に居たアキがグンゾウの前に立って、盾を掲げた。

雷鳴のような金属音。グンゾウは重たい鈍器が盾に当たったと錯覚した。

「キヤッ！」

小さな叫び声を上げたアキがグンゾウの胸元に飛び込んでくる。二人して岩の上へ倒れ込んだ。尻餅をつくグンゾウ。響くような痛みが脳天まで届く。

「おわっ！ つてててて……」

甲冑の上からとは言え、グンゾウがアキを抱きかかえる形になる。

アキのうなじから漂う柔らかな甘い香りが、尾骶骨びていっの痛みに耐えるグンゾウの鼻孔をふわっと包んだ。

——痛いけど……いい香り……。

「ごめんなさいっ！ でも、なんて重たい矢なの?! 盾がへこんでる！ グンゾウさんは私の後ろにいてください」

アキが慌てて立ち上がり、バイザー面防を下げ、広場の方へ盾を構える。

何が起こったか分からないグンゾウは、キョロキョロと周囲を確認する。すると、近くの観客席に太くて長い矢が落ちていた。

——太くて……、長い……、そして固い。……それは分からないか。

「ああ、アキ。ありがとう、助かったよ。アキが守ってくれなきゃ、即死だったよ……」  
「気にしないでください。神官を守るのは聖騎士の務めですから」

アキは真剣な顔で円形闘技場の中心をじっと見詰めていた。グンゾウはアキの勇ましい姿を頼もしく感じた。聖騎士として成長したアキ。

「ふたりとも足を止めたらあかんっ！ 援護するから動いてやーっ！」

シムラが再び大声で叫ぶと、同時に円形闘技場の中心目掛けて矢を放つ。狙いは緩く、数を多く放った。

ヒュウツヒュウツという風切り音がして、上下に矢が飛び交う。

一本の矢がアキの護衛の隙を縫って、グンゾウの鼻先を掠めた。

——俺、狙われている?! 何で?

「う、動きましょう! 矢の狙いが正確性を増してきました。グンゾウさんは私の陰へ」

「そ、そうだね」

グンゾウとアキは広場から離れるように、播<sup>す</sup>り鉢<sup>ぼち</sup>状の円形闘技場を登り始めた。

アキは常にグンゾウを庇うように位置取る。アキの盾に矢が当たる度に、大太鼓のよ  
うな低い音が鳴った。矢の勢いがとても強い。

矢はグンゾウの動きに合わせて、飛んできています。広場から少し離れても、その勢い  
はあまり変わらない。

「完全に俺が狙われてる……何でだろう?」

「……もしかして、その士官服じゃないですか?」

冷静に分析していたアキ。グンゾウは思わず自分の服を見詰める。

「うっ! ……そうっばいね」

グンゾウ達がシムラの傍まで辿り着く。

アキはグンゾウとシムラの2人を守るため、自らが的になるように身体を開いた。飛  
来する矢に意識を集中するアキ。矢の勢いは、甲冑の隙間に当たれば鎖帷子<sup>チェイヌイル</sup>を貫通する  
くらい強い。

「アキ、すまないっ！ シムラっ！ 敵は見えてる？」

「あー……、なんや、灰色い耳っぽいのがちらつとしか見えてまへん。あの岩の塔を使って、上手く隠れ取るんですわ。位置は下にいるから不利なんやけど……えらい強弓や」  
「灰色？ エルフなのか？」

グンゾウの脳裏に、谷間の砦で見かけたミリアの姿が浮かんだ。

「そうやと思います。知らんけど……」

「知らんのかーい」

シムラの適当な返事に呆れるグンゾウ。そんな短いやり取りの間も、矢は一定間隔でグンゾウ達に飛来する。

「とりあえず早くこの矢の雨を抜きたい。段を上がりつつ、ヴェールと合流しよう」

「はいっ！」

アキの素直な返事。

そのアキの背後に隠れながら、グンゾウ達はヴェールの方へ向かおうと視線を向ける。

すると、ヴェールは複数の何者かと戦闘をしていた。

「あれは……？」

グンゾウの目には懐かしい生き物の姿が飛び込んできた。緑色系の肌と尖った耳、小

さな身体にぼっこりと出たお腹。そして、とても醜悪な姿だ。

「懐かしい……そして、多いな」

久々に対面する裸ゴブリン。

ヴェールが簡単に負けるとは思えなかったが、数が多い。ぱっと見で10匹近くいる。

隠れていたのか、広場に生えた草むらから、つぎつぎとゴブリン達が湧き出て、ヴェールを襲っている。中には小さな弓を持っている個体もいて、事故が怖い。ヴェールも手一杯らしく、グンゾウ達には気が回せないようだ。

「あんなに数が……、ヴェールを助けに行かないと……」

アキが油断無く盾を構えながら、ちらつとヴェールの状況を確認した。

「行こう！ ゴブリン達の近くに行けば、矢は飛んでこないはずだ」

「はいっ！」

飛来する矢を避けつつ、グンゾウ達はゴブリンの群れにぶつかっていった。

「ヴェール、大丈夫か?!」

プライトム スマッシュユ  
咎光からの強打。グンゾウの戦槌が手近のゴブリンに振り下ろされ、頭部がトマトの

ように潰れた。

「問題ない。……しかし、急がねば伝令を見失う！」

ゴブリンから振り下ろされた手斧を回避しながら、ヴェールは斬り上げでそのゴブリンの右腕を飛ばした。右腕の動脈から血飛沫が吹き出す前に、後ろから素早く首を斬り落とす。崩れるゴブリン。その生死を確認する暇もなく、次の相手へ向かっていった。様相は氷の上で舞う殺人競技。

——確かにこんな雑魚に構っている暇は無いが……、弓使いの灰色エルフをそのままにしておくのも怖い。後顧の憂いは断つておきたいな。

周囲にいるゴブリン達は所謂泥ゴブリンと呼ばれる類いの種類で、ダムロー旧市街でも見かけない位、雑魚中の雑魚だ。定住地を持たず、主に山中を彷徨うろついてる。

「ちっちきちーやでっ！　ちっちきちー！」

シムラが刈り払いからの斜め十字で1匹のゴブリンを圧倒している。体格的に勝っている敵は久しぶりなのか、活き活きと戦っている。

アキは円形闘技場から、グンゾウやシムラを守る位置取りをしながらも、得意なゴブリンを3匹程相手にしていた。

「グンゾウさん、ヴェールと先に進んでください。ここはシムラ君と私で片付けてから後を追います」

「そんな……アキを置いてなんて……」

「でも、あの灰色エルフを惹きつけておかないと、カレンさん達が戻ってきた時、危ないわ……来るっ！ きやつ!!」

アキの盾が鈍い音を立てる。そして、盾に弾かれた矢が近くのゴブリンの頭部に刺さった。倒れる不幸なゴブリン。ゴブリン達と混戦になってから、矢の数は減っていたが、その分、狙いを澄ました一撃が飛んできた。

「ギギギギ……」

周囲のゴブリン達にも緊張が走る。的が外れでもすれば、装備の薄いゴブリンは流れ矢で間違いない死亡だ。

「……この弓使いの相手は、装備的に私しか無理だと思えます」

戦闘中にもかかわらず、アキがグンゾウを見詰めてくる。強い意志を感じる視線だ。

「グンゾウ、決めろ。急がねば何もかも無駄になるぞ」

ヴェールが珍しく饒舌だ。それだけ時間が無い。話しながらも目の前のゴブリンの喉笛を掻き斬った。

「あいーん、だ。こんにやろ、あいーん、だつてんだ、だつふんだー!」

シムラはいつの間にか弓矢に持ち替え、周囲のゴブリン達に乱れ撃っていた。次々矢に貫かれて倒れるゴブリン達。接射つぎあてという接近した状態から弓で矢を発射して攻撃をおこなう技だ。スニケル



ヴェールとシムラがゴブリン達をだいぶ倒したため、伝令が駆け込んだ出口までの行き道が見えてくる。

——くそっ！　なんで今日はこんなに悩まされる日なんだ。アキを置いていく……そんなことできるのか？　確かに後を追ってきたカレン達が狙われたら、被害が出る。盾が無く装備の薄いカレンは特に厳しい。ゴブリン達も少なくなつたし、弓矢で狙われているのは俺だ。くそっ！

「シムラっ！　弓であいつに勝てるかっ?!」

グンゾウがシムラに視線をやると、そこには太陽に照らされ、汗でキラキラと輝く青みがかつた後頭部があつた。

シムラは言う。

「グンゾウさん……」

シムラはスローモーションで振り返ると右手の親指を上げる。今まで見たことも無いような目一杯の笑顔。そんなに大きくない目が真ん丸に見開き、剥き出しになつた白い歯がきらりと光る。

「……だーいじょーぶだーっ！」

形容しがたい感情がグンゾウの中で高まり、何故だか涙が溢れそうになつた。しかし、シムラの一言がグンゾウの意思を決定した。

「アキっ！ シムラっ！ 弓使いは任せた。絶対に死ぬなよっ！ 行くぞ、ヴェールっ！ 俺等は前進だっ！ 全員全力で走るぞっ！」

4人が全速力で出口に向けて走り始める。後を追ってくる2、3匹の残党ゴブリン達。

疾走に呼応して灰色エルフの射的が、グンゾウ達へ目掛けて飛んできた。大量の矢。連射だ。

ヴェールを狙った矢は、その残像しか捉えることができず後ろの岩へ刺さる。

シムラは穴あなねずみ鼠で矢を躲かわした。

グンゾウも精一杯体勢を低くして矢を躲かわしたが、躲かわしきれないものはアキが盾打バッシュで弾く。全力疾走しながら回転して矢を弾くアキの姿は、神話に登場する戦乙女ヴァルキューレを思わせ

た。「はあはあ、あぶねー、あぶねーって！」

飛んでくる矢の多さに躓つまずきながら出口の通路に転がり込むグンゾウ。太股もふくらはぎも筋肉が痙攣している。背囊に何本か矢が刺さっていた。

——うおお、筋肉が熱い……。

既にヴェールとシムラは通路の中にいる。ヴェールは呆れた様子で、体力不足のグンゾウを見下ろしていた。最後にアキが通路に飛び込み出口で盾を構える。

「はあはあ、苦しい……。じゃあ、私は……。ここでシムラ君と敵を防ぎますので、……はあはあ、ヴェールとグンゾウさんは急いでください」

アキは残党のゴブリンを防いでいる。アキが盾打で2匹同時に吹き飛ばすと、ヴェールが後ろから飛び込み、余った1匹のゴブリンの眼窩をひと突きにした。倒れたゴブリンへシムラが矢を撃ちこむ。

「アキ……。本当に大丈夫？ はあはあ、君が心配だ」

「大丈夫です、グンゾウさん。はあはあ、惹き付けておくだけなので、危なくはありません」

アキは闘技場を注視し、グンゾウを振り返りもせず答えた。小隊を守る頼もしい姿に、少し寂しさを感じるグンゾウだった。

「グンゾウはん……。アキばかりで、俺の心配は……。？」

グンゾウの心拍数が上がる。シムラが若干拗ねたような声と、恨めしい目でグンゾウを見詰めてきた。疑念と微妙な嫉妬が混ざる微妙な雰囲気。

「お、おおう、おう、シムラもな……。そうな……。まあ、男の子だから大丈夫かなって」

その微妙な雰囲気<sup>ドレッツナイト</sup>を暗黒騎士が一刀両断する。

「行くぞ、グンゾウ。既に伝令の姿が見えない」

救いの悪魔を得て、助かるグンゾウ。

「よし、<sup>プロテクション</sup>光の護法だけかけ直す。光よ、ルミアリスの加護のもとに……」

グンゾウの唱えた<sup>プロテクション</sup>光の護法が4人の手首に青白い六芒の光をもたらす。

「じゃあ、アキ、シムラ、無理はするなよ。タナカやカレン達の戻りを待つんだ」

2人共にグンゾウの方を向いて、笑顔で返事をする。

「はいっ!」

「はいなっ!!」

その笑顔を確認するや否や、ヴェールとグンゾウは奥へと走り始めた。

——待ってろ、ブリセイスっ!

「きゃっ! もうっ、ちよっとななの」

円形闘技場に残ったアキとシムラ。

姿を見せると灰色エルフから狙い澄ました狙撃をされ、姿を隠すとどこからかゴブリンの小集団が現れ、索敵攻撃を受けた。その度に、アキとシムラは消耗していく。

アキは少し腹立たしくなっていた。

「さつきから、隠れるとちよこちよこゴブリンは湧いてくるし、姿を見せるとすごい速い矢は飛んでくるし。何なのかしら、あの灰色エルフ」

「確かに、腹立つわ。何や自分は全面に出ず、こここそと……ハイドみたいな奴やな」

シムラはケラケラと笑う。

2人とも今は闘技場出口の中で盾だけ外に出しつつ、しゃがんで姿は隠していた。

お気楽なシムラに比べ、アキは面防フェイスの奥で、苦々しい顔をしていた。

相手の姿はよく見えない。持久戦に持ち込まれている。集中力が切れるのが一番辛い。アキは、いつか自分の気力と体力が尽きるのでは無いかと心配していた。

「シムラ君。あの灰色エルフを弓で狙えないの？」

アキは少し苛立った声で訊いた。シムラはアキの語勢に少し驚く。汗ですべての頭を撫でながら答えた。

「正味な、弓同士の戦いは上からの方が圧倒的に有利やんか。もうちよつと高い所に登ったら、あの岩の柱があっても絶対狙えると思うわ」

「そっか……」

アキの中で色々な思いが複雑に渦巻く。シムラと自分の体力の限界。カレン達が狙撃される危険性。グンゾウとヴェールを援護したい気持ち。それら全てを評価して、結論を導き出す。

「……シムラ君。打って出しましょう」

アキの発言に、きよんととしてしまうシムラ。しかし、アキの口から出た意外な言葉に逆らう気は起きなかった。

「合点承知の助」

「私が先に出るから、私を盾にして階段を上つて。狙える場所まで行つたら、弓使いを狙つて。シムラ君は私が守るわ。だから……絶対仕留めて。行くわよ」

「狩人のプライドにかけて絶対当てるでっ！ 知らんけど」

シムラの言葉にアキは突っ込むこともなく、出口から飛び出した。後ろにシムラが続く。

飛び出した瞬間、風斬り音が唸り、一射飛んでくる。予想していたアキは盾を繰り出し、矢を弾く。

「いでえーっ！」

「え？」

アキは驚いて後ろのシムラを振り返る。弾いた矢が勢いを保つたまま、シムラのふくらはぎに刺さつたようだった。アキの背後でうずくまるシムラ。

「シムラ君っ！」

アキが後悔する暇も無く、次々と矢が飛来する。防御に専念しなければならず、シムラの治療に集中力が割けない。

「いぢぢぢぢぢぢぢぢぢ。アキ……大丈夫や……。痛いけど、苦しくはない。毒は無いらしい」

「シムラ君。ごめん……私が……」

後悔と焦燥がアキを襲う。アキの視界が涙が滲む。

「ちやうねんで、2人で決めたことやんか。……でも動けへんからここから狙う」

シムラは闘技場出口の壁に寄りかかりながら立ち上がると、弓に矢を番つえた。

「うん……。絶対、守るから」

アキは頭を振って湧き起こる後悔と不安を振り払った。「今は敵の攻撃に集中しないと」と心の中で呟き、アキは目の前の景色に意識を集中させた。

闘技場中央から少し右にずれた岩陰に金属の光が見える。

「シムラ君っ！ 中央右、4段の岩陰」

「だーいじょうぶだーっ！ 速目はやめっ！」

シムラも勢い良く矢を放つ。

シムラの放った矢は狙い通りに放物線を描き、岩陰に吸い込まれる。

「当たった？」

「駄目やつ！」

シムラの言葉通り、お返しとばかりに凄まじい一射が飛んでくる。盾受ブロックしたアキの盾を高くかに鳴らした。アキの手が痺れる。

「手が痺れる……。盾を落としそう……。シムラ君どうする？ 一旦、出口の中に隠れ

て治療した方が……」

アキの提案にシムラは首を横に振った。

「駄目やねん。次の一射に全てをかける」

「どうし……」

アキの言葉が切れるのを待たず、シムラが話し続ける。

「弓つて脈拍で狙いがずれんねん。それくらい繊細で、心身に影響されるん。それを抑えるために速目はやめと止目とめりめっていう技があんねんけど、さつき速目はやめは使つてまったもんで、しばらく使えんねん。それに……」

そこでシムラは一息吐く。しばしの沈黙。そして思い立ったように言葉を続ける。

「……こんな言うんもアレやけどな、俺、怖いねん。だから指も震える。さっきの射撃もやけど、本当は嫌やねん。怪物モンスターならいざ知らず、人を狙うのも、人から狙われるのも。

たぶん今度隠れたら、二度と出られへんし、当てられへんと思うわ……」

「シムラ君……」

シムラの独白を背中に受け、アキは何を言つて良いか分からなかつた。普段、それほど話した事がないシムラの深い感情を知つて、戸惑つた。

「気持ち切り替える！ さつきは少し早すぎた。あいつも弓を放つ瞬間は、顔を出さなあかん。その一瞬を狙うつ！ ぎりやから、しつかり守つてやつ!!」



「……うん。任せて」

シムラの気持ちに返事はできなかったが、アキは自分の役目をしっかりと果たそうと思った。自分は聖騎士で、人を守るのが使命。シムラの気迫に勇気づけられたアキは、無言で何度も頷いた。

精神力を削る最高の集中力を持って、アキもシムラも闘技場の中央に灰色エルフの気配を探る。

高度な集中に入り込んだ時のアキは、白昼夢のように景色がぼやけ、何も聞こえなくなる。逆にシムラは少しの寛くわんぎがないと集中できない。

「あいつは多分右利きや。せやから、必ず岩の向かって左側に顔を出す」

「うん、わかった」

「少し見えたくらいでは、矢は放たん。あいつが弦つるをリリースする直前、完全に頭が岩陰から出た瞬間を狙う」

「うん、わかった」

「……来週の食事で番変わってくれへんか？」

「うん、わかった」

「なんでやねんっ！」

「うん、わかった」

「……。アキ姉さん……。おっぱ……」

シムラが冗談を言いかけた時、闘技場の草むらに動きがある。先程、灰色エルフが居たと思われる場所から若干手前の岩陰の傍に草の動きがあった。

「いたわ……。っ！ 手前の3段の塔」

アキの言葉にシムラも闘技場へ集中する。シムラは弓に矢を番え、完全に引き絞る。

シムラは狩人になった時から集中する儀式がある。その儀式が上手くいくと、不思議とどんなに狭いでも当てることができた。

深く息を吸い、それから極限まで吐く。そのまま息を止めた。

軽い窒息感。1分間に100回、心臓の鼓動が耳に聞こえる。

自分の精神を矢と一体化させる。まるで矢の先に自分の目があるように錯覚するまで精神を統一させた。その矢の先の目からの的を見る。視界は狭まり、心臓の鼓動だけが自分を感じさせる。まだ視界の先はゆらゆらとして、陽炎の向こうにあるようだった。

そのまま心臓の鼓動を減らしていく。死へ向かう集中。

手や足等、末端の感覚が失われていく。もう自分という存在はなく、一本の矢があるだけだ。後は放たれるだけ。

心音が遠のき、同時に視界はさらに狭まる、その代わりに景色は鮮明さを増していく。

まるで、望遠鏡の焦点が合っていくかのよう。

その焦点の先に灰色エルフが居た。

シムラのそれよりも1.5倍はあろうかという大弓を構え、こちらを見据えていた。

一瞬目が合う。

お互い認識できる距離ではなかったが、シムラはそう感じた。

灰色エルフの弓使いは練達で、その冷淡な眼光には次の一射でシムラを仕留める気迫が宿っていた。シムラの未来予測に灰色エルフの狙いが見える。シムラの眉間を貫く見事な射線。

シムラは心の中で「これはあかんかもしれない。俺に時間を止める力でもあればなー」つとぼんやり思った。

次の瞬間、中天を過ぎた太陽が傾き、少し角度を持った秋の日差しがシムラの頭部に当たる。その剃りたての頭皮に輝く青春の汗が、太陽光を眩しく反射した。

その輝きが、シムラの額へ意識を集中させていた灰色エルフの目を眩ます。

生死を分ける一瞬の揺らぎ。

まはた瞬き程度の刹那。

「喰らえっ！ 学研都市線名物、放出っ！」  
はなてん

灰色エルフの一瞬の揺らぎを感じ、シムラは無意識で渾身の矢を放つ。

矢は真つ直ぐに灰色エルフ目掛け飛翔し、認識できない時間の中で残像だけの軌跡を描いた。そのまま静かに、そして吸い込まれるように灰色エルフの眉間を貫いた。

「ういいやつほおおおおおいつ！ やってやったでっ！」

シムラは両腕を天高く突き上げて歓喜の雄叫びを上げた。そのまま尻餅をついてしゃがみ込む。

「え？ ほんと？ やったー！ シムラ君。やったねーっ!!」

少し遅れて、灰色エルフが倒れる様子を目撃したアキも喜んだ。

「俺はやったで、やったんや。勝ったんやー」

シムラは感激で涙を流していた。その姿をみて、アキも嬉し涙が溢れてきた。

「本当によくやったよー。シムラ君、おめでどう……あ、足、治療しないと」

「え？ あ？ ほんまそれ。いででで、あかん、これめつちや痛いで、ありえへん。これ抜かんと駄目？」

「んー、駄目だね。とりあえず、刺さった矢を斬ろうか？ 自分でやる？」

「そないな……っ！ 鬼やでアキ姉さん」

アキとシムラは笑顔で足の治療方法について相談を始めた。

「矢が抜けた瞬間に癒し<sup>キコ</sup>手<sup>ア</sup>をするから、自分で抜いて」

「そないな怖いことある？ ……そんなんあかんで」

「でも、早くしないといつまでも痛いでしょ？」

今回の兵団指令で最大の敵を敵を倒した安堵感から、痛い治療も楽しくて仕方が無い。

普段あまり組むことのないアキとシムラであったが、今回の戦闘を通じて仲間としての信頼の高まりを感じていた。

そんな戦闘後の穏やかな治療時間。

怪我の治療に夢中になっている2人は気付かなかった。

背後に異形の者が迫っていることを……。

## 24. あなたが食べられる全て

「くそっ！ ここのじゃ音が反響して、どっちだかわかんねーよっ!!」

リョータの声が暗い地下通路に木霊する。大声に驚いた数匹の鼠が走って逃げ去る。

「黙れ、貴様が最も五月蠅い。その脳髓まで筋肉なのか」

目を閉じ、耳を澄ましていたカレンの眉間に谷より深い皺が寄る。少女のような容姿から出てくる容赦ない罵り。グンゾウがいれば涎もののご褒美だっただろうか。

しかし、リョータの精神はその領域に達していない。

「な…………っ！」

反論しようとリョータの口が開く。その口から大きな音が出る前に、ヨシノの手が優しく塞いだ。

「キシシ…………シシシシ…………」

カレンへの配慮か、ハイドの笑い声も静音モードで運用されている。

グンゾウ達と二手に分かれた後、地下通路へ足音を追ったカレン達4人は足音の主を見失っていた。正確には聞き失っていた。

そこは地下の十字路。目の前には四方へ暗い地下通路が伸びている。一本は今来た

路だが、目を閉じて3回も回れば、どれがどれだかわからなくなる位、相似の風景だ。行燈ランタンで照らせる範囲は狭く、とても先は見通せない。

「んー、にゃーっ!」

かわいく唸ったヨシノ。目を瞑ってふわりと飛ぶと、くるり一回転。

「なんとなくだけど、こつちかにゃ?」

おちやらけた姿勢ポーズで指差した方角は、元に戻る通路。

「違う。それはもと来た通路だ」

目を開いたカレンは、溜め息まじりにぼっさりと一刀両断した。

「うにゃー……、地下迷宮とか苦手なんだよねー。明るくて広いところが好きー。カレ

カレンなんとかしてー」

地下ではヨシノの元気は出ないのか、力なく項垂うなだれている。

カレンの決断は早い。悩んだ時は単純に。

「やむを得まい。真っ直ぐ行く。戦士は左を、魔法使いは右を警戒せよ。馬鹿は帰れ」

そう言うと、早足で前進し始めた。

「何? 馬鹿だどっ?! それは誰の……」

興奮したりリョータがカレンに後ろから掴みかかる。しかし、リョータの大きな手はカレンに触れることなく、後ろ手のスタッフに弾かれた。格闘技の達人が見せるような心

眼術。

カレンが肩越しに振り向くと、金色の柔らかな前髪の下に侮蔑するような双眸があった。

「ふん。私は、『戦士は左、馬鹿は帰れ』と言った。貴様は自分を戦士ではなく、馬鹿だと思ったのか？ なかなか殊勝なことだな。ふふふ」

珍しく笑みを浮かべる。

真つ赤な顔。リョータは窒息した魚のように口を開閉した。何を言っても深みにはまる、必至の言葉遊び。

一方、愚かな動物を餌にかける喜びで、カレンは湧き起こる焦燥感を紛らわしていた。焦りは過ちを生む。

厭うべきものだ。そう思っていた。

しかし、通路を進むにつれ、カレンの歩みは次第に速まる。手に握る金属製のスタッフも汗で滑り始めた。神官衣で汗を拭い、強く握り直す。

「……どこにいる、ブリセイス」

カレンは叫んでいた。誰にも聞こえない声で、誰にも聞こえないように。

「あ……」



ヨシノが声を上げ、立ち止まる。全員の足音が止み、辺りが静寂に包まれる。染み出た雨水がチヨロチヨロと石壁を伝う音だけが闇に響いた。

「どうした？」

「しっ！ 静かに……っ！」

カレンが問うと、ヨシノは左手を耳に当てながら、右手でカレンを制した。カレンにこんな態度をとれるのはヨシノだけだろう。

「……聞こえる……。こっちだ……。っ！」

突如、脱兎のごとく飛び出すヨシノ。こうなったヨシノに追い付ける人間は少ない。全員全力で後を追う。

「見えたっ！」

ヨシノが左に曲がった通路を進むと、しばらくして、丁字路に突き当たる。

右側が明るい。

そこには地上へ出る階段があった。ヨシノを先頭にカレンとリョータが競って、地上への階段を上がる。

階段は円形闘技場の外に繋がっていて、目の前には別の建物があった。石造りで入り口には鉄格子の扉がある。扉の向こうは薄暗い通路が続いていて、人影は見えない。

ヨシノ、カレン、リョータはその建物が目的地であることを察知した。暗闇の奥から、

明らかに騒がしい複数人の声がある。

リョータが格子扉へ手を伸ばす。

「静かにね……」

ヨシノが声をかけると、リョータは黙って頷いた。

輪になってしている金属の取っ手へ手を掛け、慎重に力を込めていくリョータ。緊張の瞬間。

「ブヒシシシシシ……ゲボオ。グジジジジジジ……」

遅れて地上に出てきたハイドが、階段のそばに嘔吐した。

残りの全員が振り返り、注目する。

しかし、全員ハイドを無視して、再度扉へ集中する。

「ぼぐにづ、冷たい……ギジジジジ。いつか僕の奥の手を見せて、腰を抜かしてやる……キシツ」

何を言っても無視の嵐。

日頃の行いの報い。

「鍵は掛かってない……開くぞ」

リョータが鉄格子の取っ手をゆつくりと引く。

錆び付いた枢とびせが嫌な音を立てて、鉄格子が開くひら。

「歯が浮くー……」

ヨシノが歯ぎしりをしながら、小さな声で呟く。沈黙を促すカレンの視線が刺さり、ぺこりと頭を下げるヨシノ。

息を殺して、慎重に石造りの建物へ侵入する。

全員を黴臭い臭いと湿った空気が包み込んだ。

カレン達は薄暗い通路を進むにつれ、この建物が正解だという予想が確信に変わっていく。

通路の突き当たりには、覗き窓付きの鉄扉があり、その下から灯りが漏れていた。

中からは、リョータ小队の襲撃について警告を発する男の声がした。

「おいっ！ お前等、そんなことしてる場合じゃ無いぞっ！ 敵襲だぞ。おいっ！ 人質を移動させるんだ」

ひとりの男が叫んでいるが、話しかけている相手からの反応は無い。

カレンが背伸びをするように覗き窓に目を近付けた。

鉄扉の中は円形の広場になっていた。土の地面で、闘技の練兵場といった雰囲気だ。古くは人間と獣の格闘や、剣奴隷達の訓練に使われていたのだろうか。広場を複数の檻が囲んでいた。

天井の中心には大きな燭台。しかし、高価な蠟燭は灯っていない。天井付近に明かり取り用の格子窓が並んでいて、そこから光が差している。周囲には複数の篝火が焚かれ、練兵場内を照らしていた。

そして、練兵場の真ん中にそれはあった。

地面に突き刺された大木の柱。そこに鎖が繋がれていた。

鎖の伸びる先には複数の賊達が集っている。賊達の中にはオークやゴブリンなどの亜人種もいた。その賊達を、少し遠巻きにさらに複数の賊達が囲んで観ていた。その数は30より多い。

彼等の姿が異様なのは、裸の者が多かったことだ。

カレンはその人集りの中心を注視した。

「生きてる……」

カレンは低く、静かに呟いた。すぐさま反応するヨシノ。

「え？ 生きてるってどういうこと？」

「し……っ！」

人集りの中心にカレンはブリセイスを見つけた。ブリセイスは過去数多の捕虜がそうであったかのように、賊達に囲まれ翻られていた。既にぐったりしていて、抵抗の様子は無かったが、身体の動きが死人のそれではない。

伝令はブリセイスの傍まで行き、ブリセイスをなぶ捌はつてゐる賊達のお楽しみを邪魔する。

「うるっせえっ！ 敵襲くらい、てめえらでなんとかしやがれ！ お前等は散々楽しんでかもしねねーが、俺等は今からなんだ」

「そんなこと言つてる場合じゃねーだろっ！ 敵に襲われたらそれどころじゃうゝあっ  
！」

叫んでいた伝令の声が突然消える。

「……醜い」

カレンは目撃した。

伝令の頭部が背後に現れたオークの大槌で潰される。それは今まで見たどの個体よりも遙に大きなオークだった。その巨軀から振り下ろされた大槌は、伝令の頭部を胴体へ埋めるのに十分な威力があつた。

カレンは練兵場の景色を優れた映像記憶イメージメモリーで記憶していく。瞬間的に練り上げられていく戦術。

「ねえねえ、どうなつてるの？ ブリちゃんは生きてるの？ カレカレ教えてー！」

「おいっ！ カレンっ！ ……さん……。どうなつてんだよ。俺等にも見せろっ！」

中を覗き込んだまま、カレンの説明が無いため、ヤキモキするヨシノとリョータ。

カレンは徐に振り返ると、真剣な表情で2人の口に指を当てた。

「静かにせよ。……今から御前達に大事なことを問う」

眉間に皺が寄っていない、優しきすら漂うカレンの表情に、ヨシノとリョータは口を噤んだ。

カレンは幼子に問うように、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「ブリセイスが中に居る。……しかし、大勢の賊に囲まれている。このまま突入した場合、我々の戦力では勝てない確率が……低くない……」

カレンは言葉を選び、そこで一度間を置く。

「ふー……。勝てなかった場合、待っているのは悲惨な運命だ。死か、それよりも苦しい結末が待っている。今からグンゾウ達を呼びに行った場合、ブリセイスを見失うだろう……永遠にだ。私は……今ブリセイスを救いに行きたい……。しかし、御前達を巻き込むことになる。それで良いだろうか？」

一瞬、返事を躊躇するリョータ。ちらりと隣のヨシノを伺う。

リョータの隣で、躊躇することなく何度も頷いているヨシノ。それを見て、リョータもカレンに力強く頷く。

「……御前達の若さを利用してすまない」

あのカレンが頭を下げる。驚いて声も出ないヨシノとリョータ。カレン自身も「こん

な姿をグンゾウには見せられないな」と思っていた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……」

恥ずかしさを隠すように、カレンは光プロテクションの護法を唱える。4人の左手首に青白い六芒の光がもたらされ、軽い浮遊感が全員を包む。

「筋肉……、光よ、ルミアリスの加護のもとに……守人アシストの光」

美しい声で祝詞が唱えられ、リョータの左手首に、もう一つ、色違いの小さな六芒が灯った。今までに感じたことの無い高揚感が、リョータの中に湧き上がる。肉厚ツウアイヘンダーの両手剣が小枝のように軽い。

「これは……?」

「貴様の力を更に高める光魔法だ。……貴様が来てくれて良かった。ヨシノに生き残る道が生まれた。……その武勇、期待している」

カレンが腕を全力に伸ばして、リョータの肩に手を置く。

「……お、おふおおう……っ！ 任せろってんだ」

「いいな、あたしもそれ欲しー。リョータだけずるーい。カレカレ、なんでリョータなのー?」

認めたくない嬉しさで、ニヤツキが止まらないのを必死で堪こらえるリョータ。珍しいものが欲しくて拗すねるヨシノ。

そのふたりの様子を見て、安心したようにカレンは鉄扉へ向き直る。眼鏡を指で押し上げた。きらりと光る眼鏡。

「よしっ！ では、狂信者のごとく息絶えるまで私の指示に従って貰うぞ。日頃の行いが良すぎるせいかな、当たりを引いてしまったようだ。我々でブリセイスを助ける。勝つても負けてもこの扉の先は英雄への道だっ！」

そう言い放つと、カレンは目の前の鉄扉を勢い良く蹴り開けた。

「シシシシシ、ぼ、僕の意見は訊かれない、キシシシシ」

鉄扉が大音を立てて開く。その音に気付き、賊達に殺気と緊張が広がる。

しかし、進入してきた人数を見て、あつという間にそれは弛緩へと変わっていった。カレン達を無視して、ブリセイスを犯し続ける賊すらいた。

「へへへ、なんだよ。敵襲って、たつた4人じゃねーか。馬鹿だったのか、死んだあいつ」「おいおい、しかも2人は貧弱な神官様と魔法使い風情だぜ」

「丁度、いいぞ。この騎士様と一緒に、その女神官も喰っちゃまえ！」

ブリセイスの暴行に加われない賊達が、カレンに目を付ける。適当に手近にある武器を手に取ると4人を包囲するように動く。

「あたしも女の子なんだけどな……」



「しーっ！ 静かにしてろよ、ヨシノ。ばれない方が好都合だ」

慌てるリョータ。ヨシノは既に兜ヘルムの面防フェイスを下げているので女性だと気付かれていないようだ。

ブリセイスを犯し続ける賊達、カレン達を包囲しようとする半裸の賊達、楽勝の霧囲気に薄笑いで動く様子もない賊達、統一感の無い混沌とした練兵場にカレンの高く通る声が響く。

「ブリセイス！ ……すまない、待たせたな。今から助けるぞ……っ！」

カレンの声に賊達が笑い出す。

「うわっはっはっは。まじかよっ！ この人数差で勝てるつもりなのか？ 頭茹だっせんじゃねーか」

「頭おかしい女神官なんてのも、たまにはおつだぜ」

「とりあえず、さっさとやっちまおうぜ」

賊達の殺気が増し始め、一触即発の雰囲気となってくる。カレン達の包囲も次第に狭まってきた。ヨシノとリョータの武器を握る手が汗ばんでくる。

「おい、カレン………さん………。どうすんだよ。なんか指示しろよ。ひー、ふー、みー、結構多いな………大丈夫か？」

カレンはリョータを無視して、返事をしない。ハイドへ何かを耳打ちしている。

緊張で焦るリョータとは異なり、緊張で気分が高揚しているヨシノが笑い始めた。

「ふっふっふ……ふふ。これは食べ放題だね」

「え？ ヨシノ、何言ってるんだ？ 食べ放題？」

「リョータ、食べ放題だよ。覚えてない？ バツフェ？ バイキング？ うーん……何だっけ？」

「良く分からないぞ」

「つまり……、『あなたが食べられる全て』ってことよ！」

ヨシノから食事例え話たとが出た直後、ハイドと話し終えたカレンが叫ぶ。

「魔法使いっ！ 削れるだけ削れっ！」

カレンが賊達に向かって腕を突き出すと、ハイドは黄色の宝石が嵌まったメイジスタッフを取り出した。不敵な笑みを浮かべるハイド。前髪から覗く広い額がきらりと光る。皮脂で。

「シシシシ……っ、遂に、遂に僕が本気を出す場面が来た……っ！」

練兵場に眩しい程の雷光が幾筋も走る。

その度に雷鳴が響き渡り、至る所で賊達が弾け跳んだ。

ハイドの得意な電磁魔法フェルツマジックの暴威雷電サンダーストーム。現在ハイドが覚えている最強魔法だ。

「オークが厄介だ。オーク中心に潰せっ！」

「ジェスキシシ・イーン・サルク・キシツカルト・フラム・ダルトシシシシシシ……そもそも僕は最強。僕は最強。……ジェスキシシ・イーン・サルク・キー……シツシツシツシツ……」

狂人のように暴威雷電サンダーストームを唱え続けるハイド。温存していた魔法力を思う存分発散した。

人間や亜人に対し、精霊魔法エレメンタルマジックは圧倒的な威力を発揮する。事実、魔法使いの瞬間最大火力は最強だった。見る見るうちに、多く賊達を無力化していく。

「くっそ、やべーぞ、あの魔法使い何とかしろ」

「散れっ！ 散れっ！ 固まると不味いっ！ その内、すぐに魔法力が尽きる」

倒れていない賊達は練兵場内に散開して、散り散りとなる。雷の嵐に追い立てられて、ブリセイスを嬲り続けていた賊達も短衣を履いて逃げ始めた。

「ブリセイスを救うぞ。突っ込め！」

暴威雷電サンダーストームに狼狽える賊をスタツフで叩き伏せると、隙ができた人集りの中をカレン自らブリセイス目掛けて突っ込む。

ハイドを護衛しつつの移動。散発的に襲いかかってくる賊達をヨシノとりヨータで牽制する。

その4人の目の前を巨大な怪物が塞いだ。

「うわー、おおきーい」

ヨシノが感嘆の声を上げる。

それは先程伝令を殺した巨大なオークだった。

その見た目は常軌を逸している。

体長は通常のオークの1.5倍。横幅も同じく魁偉だ。その姿は肉の塊と言う表現が相応しい。

全身の筋肉には太い血管が浮き出、胸も腕もはち切れんばかりに盛り上がっていた。そして手には、血と脳漿がこびりついた長い戦槌が握られている。

頭には逆立つ緑と金に染め分けられた髪の毛。目は赤く充血し、狂気的な怒りに満ち満ち、その下半身には巨大な陰茎がそそり立っていた。呼吸の度に大きく脈打つ。陰茎の先端はカレンの顔程の大きさがある。

「グルルルルル、フツシュー……っ！」

「不浄の化け物め。貴様もブリセイスを犯せるとでも思っていたのか？ 人間にそんなデカイもの入るかっ！ 魔法使い！」

カレンは嫌悪感を顔に浮かべながら、ハイドに指示をした。

しかし、ハイドは精霊魔法の詠唱に入らない。

「シシシシシ……、駄目だ。フア、ファルツマジック電磁魔法は、き、金属鎧を着ている奴には、い、威力が少ない。そ、それにもうサンダーストーム暴威雷電は終わりだ。キシッ！」

ハイドの言ったことは事実だった。

相手が金属鎧を着ている場合、ファルツマジック電磁魔法は金属鎧の表面を流れ、熱傷を負わすことはあつても、致命傷を与えることはできなかった。実際、ハイドのサンダーストーム暴威雷電で弾き飛ばされた賊達も何人か起き上がり始めている。

人間やゴブリンのような薄い身体ならまだしも、ほぼ立方体に近い巨大オークの心臓まで電流を流すのは難しい。

ハイドは無駄な魔法力の消費はしない。

「そうか……」

「……グモオツツシユーツ!!」

後ろを向いてハイドと話していたカレンに、巨大オークが襲いかかる。3メートル以上の高さから振り下ろされる戦槌。凄まじい威力で、周囲の空気が歪んだ。

咄嗟に、カレンはスタツフで横薙ぎすると戦槌の落下方向をずらす。戦槌は練兵場の地面に深く突き刺さり、震動を起こす。そして、攻撃の威力を流しきれなかったのか、カレン自身も後方へ飛ばされ、一回転して着地する。

「カレカレっ！ 大丈夫?!」

ヨシノが次々に襲い来る賊達を相手にしながら心配した。ヨシノはハイドを守りながら3人も賊達を相手にして忙い。

ゆっくりと手を挙げて、無事を表わすカレン。一方、巨大オークは地面に刺さった戦槌を抜こうともがいていた。

その様子を見ながらカレンは左手を振った。その掌てのひらに痺れを感じる。持っていた金属製のスタッフを見ると、先端の方が折れ曲がっていた。

「痺れた……。そして折れたか」

そう言うときカレンは金属製のスタッフを放り捨て、腰から伸縮式のスタッフを勢い良く抜いた。その勢いでスタッフが伸びる。

「グモッ！ グモッ！ グモツシユーツ！」

戦槌を抜き終えた巨大オークが、再びカレンに狙いを定めた。

想像以上に早い動きでカレンを襲う。

カレンの脳裏に「受け流しきれるか？」という不安が過ぎよる中、怒濤の戦槌が彼女に迫っていた。

激しい金属の衝突音がして、目の前に火花が散る。

一瞬、目を閉じるカレン。

目を開いた時、目の前には静止した戦槌の先端があった。そして、戦槌を受け止めたリョータ。肉厚で野蛮な両手ツグエスヘンダー剣が鈍く優しく光る。

「おい、カレンっ！ 神官なんだから下がってろよ……。こんなのは俺様の餌だろ」

驚きの表情。一瞬思考が止まったカレンだったが、すぐにいつもの機嫌の悪そうな顔に戻る。グンゾウであれば、カレンが最高に上機嫌だとわかるだろう。

「……わかった、筋肉。そのデカブツは任せた。倒さなくて良い、ヨシノが雑魚を片付けるまで生き延びろっ！」

「おうっ！ 任せろっつてんだ」

「それに私を呼び捨てにした罰を、後できっちり受けてもらわねばならない」

「え……っ？」

多少の疑問を感じつつ、リョータは目の前の巨大オークに集中した。戦槌を受け止めている両手に感じたことの無い圧力を感じていた。光プロテクションの護法アシストと守人の光アシストの倍掛けでなければ耐えられないかもしれない。

「カズヒコもデッドヘッドでゾランを狩ってるかも知れないから……。俺様もこれくらいのデカイの相手にしないと……なっ！」

リョータが巨大オークの無防備な股間に下段蹴りを入れると、巨大オークの身体が揺らいで後退する。その隙に、後退して間合いを取る。

「戦場で汚ねーちゃん●とか出してんじゃねーよ、ポケツ！ 弱点以外の何物でもねーだろ」

「グモモモモモ……、オツシューツ!!」

「おらっ！ 来いよ、デカブツ。今日の俺様はマックス調子がいいぜ」

リョータは両手剣ツツエイヘンダーを肩に担ぐと、巨大オークに中指を立てた。

「食べ放題は忙しい……、急がないとお腹いっぱいになっちゃうし……」

良く分からないことを呟きながら、ヨシノは次々と賊達を槍に懸けていた。

「これは食べ物……、これは食べ物……」

ヨシノは自分に言い聞かせながら、賊達を攻撃し続けた。シムラがそうであったように、ヨシノも人間を殺すことに抵抗があった。例えそれが目の前でプリセイにひどいことをしていた悪人であっても。

「今、二段突ダブルスラストきで刺した相手は肺と腸が傷付いて、治療が遅れば致命傷だ……」

意図せず思ったことをそのまま口にしてしまい凍り付く。

動きが止まったヨシノに賊のひとりが後ろから襲いかかる。

「きゃっ！」

片手剣で背中を斬り付けられ衝撃を受ける。背当があるため損傷にはならないが、息



が止まる。無意識で振り向き様に槍を横薙ぎし、賊の喉笛を斬り裂く。

頸動脈が切れ、勢い良く吹き出す血飛沫。

目の前が紅く染まる。

喉を斬り裂かれた賊は、傷口を手で押さえながら口を何度か動かし、そのままのめに倒れた。

「ごめんね……」

涙が溢れ、目の前が滲む。

その滲んだ景色の向こうに、ボロ雑巾のように倒れているブリセイスの姿が見えた。目の前に立ちほだかる賊はあと2人。

この賊達を振り切れればブリセイスを救うことができる。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……癒し手」

「え？」

ヨシノの横でカレンが先程の賊に癒し手を施していた。軽い呻き声を上げる賊。そして、悔い改めよ」

そう言つて、カレンは賊の股間目掛けてスタッフを振り下ろした。全力の強打。賊は取り戻した意識を再び失う。

「ヨシノ、心置きなく戦え」

グンゾウが聞いたことのないカレンの優しい声。

「カレカレ……」

涙でぐしゃぐしゃになった顔で、ヨシノはカレンを抱きしめた。大きいヨシノに抱きすくめられる小さなカレン。カレンは身動きができなくなり、慌ててヨシノの甲冑を叩く。

「こらこら、そんなことをしている時間はないぞ。早くブリセイスを救うのだ」

「うんうん、あたし頑張る……」

吹っ切れたヨシノは強かった。思い切つて槍を振るい目の前の賊達を一瞬で叩き伏せた。装備の整わない半裸の賊など、完全武装のヨシノの相手ではなかった。

カレン達は、ようやく念願のブリセイスの下へ辿り着く。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに……光の奇跡」サクラメント

カレンの手から放たれた光が、ブリセイスの全身を包み込む。ブリセイスの身体に複数有った傷がみるみる塞がっていく。

「ブリセイス……待たせたな……」

ブリセイスの乱れた焦げ茶髪ブルネットを優しく撫でるカレンの白い手。

カレンは素早く銀系の外套マントを脱ぐと、ブリセイスの上にかけた。

ブリセイスの手首には金属製の手枷が嵌まっている。

「魔法使い、壊せ」

「ひ、人使いが荒い……シシシシ……マリク・シシエム・パルク……」

輝く魔方陣から飛び出た光弾が、ブリセイスと柱を繋いでいる鎖を壊す。

「カ、カレカレー！ 手伝ってー。ちよつと増えてきちゃったよ。どうなってるの、ドイツっちーっ！」

ブリセイスを治療している間、ヨシノはひとりで襲いかかる賊達と奮戦していた。4人程に囲まれている。

リヨータは今オークと対峙しており、他の賊に構う余裕がない。リヨータと巨大オークの1対1は激しさを増し、巻き込まれるのが危ないため、賊達ですらその戦いに近付こうとはしていない。

「き、気絶してただけつてことだぜー、キシシシ」

一時的にハイドの暴威雷電で散開した賊達は、次第に戻ってきたり、回復して起き上がったたりするものが増えてきた。

ブリセイスは身体は癒えているものの、まだ意識が戻っていなかった。

「魔法使いっ！ あと何発撃てる？」

「シシ、サ、サンダーストーム暴威雷電で1発」

少し逡巡したカレンだったが、すぐにショートスタッフを抜くと戦列に加わった。

「ならば、貴様は自分自身で守れっ！ ブリセイスにも敵を近付けな」

「シシシシシシ……愚問だな。キシッ！」

カレンの指示にハイドは自信満々で答えた。魔法力の残りが少ない割に勝ち気な点  
がカレンを少し不安にさせる。

ヨシノとカレンが一進一退の攻防を繰り返している間、リョータと巨大オークの戦い  
は熱さを増していた。

巨大オークはその見た目に反して機敏だった。戦闘が長引くにつれ冷静さを取り戻  
し、大きな戦槌を自在に繰り出してきた。

そんな強敵と戦う最中、リョータは不思議な感覚に漂っていた。

まず、時間がゆっくりと流れているように感じ、相手の動きが手に取るように見えて  
いた。五感も鋭敏になり、甲冑を着ていないかのように肌で周囲の空気の流れを感じる  
ことができた。耳には相手の息遣いも聞こえる。

光プロテクションの護法アシストと守人の光の効果なのだろうか。

目の前には自分よりも巨躯のオークが立ちはだかっていたが、全く恐怖は感じなかつ  
た。

むしろ、負ける気がしなかった。

「うおおおおりやあああいいいいっ!! 陽炎!」<sup>ヘイズ</sup>

カズヒコのお株を奪う下段からの切り上げで、巨大オークの攻撃を打ち返す。

鈍い音がして、巨大オークの戦槌の柄が折れた。

リョータは武器を失った敵にすぐに攻勢に出ない。まずは自分の優位性を満喫する悪い癖がある。

「あつらー? これは勝ちちゃったかなー? うっへっへっへっへ、ばーか、ばーか。てめえがデカくたって、獲物は俺様の方が高級品なんだよ」

軽くステップを踏みながら、間合いを保って次の攻撃の準備をするリョータ。

リョータの悪態が通じたのか、巨大オークの緑色の顔は紅潮し、紫色になった。筋肉が怒りで震えている。

浮き出た血管は今にも血が噴き出しそうだ。

「グモグモ……グモグモ……、オルツシュー……」

巨大オークは怒りに任せ、戦槌の柄を勢い良く投げる。投げた先に休んでいた賊がいて、頭が柄が刺さり倒れる。

「ひでえ奴だな……」

リョータは余裕ぶつた口調ながらも、えも言われぬ気持ち悪さを感じて、さらに巨大

オークとの間合いを開けた。

この臆病なりヨータの間合いが命を救った。

巨大オークは突然両手を背に遣り、背負っていた片手用の湾刀を2本抜く。  
デュアルウイールド  
両手構えた。

片手用の湾刀と言っても、巨大オークのそれは人間では両手持ち用に見える大きさだった。

巨大オークが練習のように何度か湾刀を振ると、湾刀の残像がリヨータの感覚記憶に残った。

その残像がリヨータの本能に恐怖を伝える。

「なんか、やべえっ!!」

リヨータは後ろへ振り向くと、巨大オークから全速力で逃げた。

後ろには暴威雷電サンダーストームで受傷した賊達が、数人武器を構えていたが、リヨータは体当たりをして、その隙間を抜けた。

次の瞬間、恐ろしい咆哮がして巨大オークが湾刀を振り回しながら襲いかかってきた。

不幸にも、リヨータと巨大オークの間にいた賊達は微塵切りになる。血の上ったオークに敵味方の区別は無い。

ぼとぼと肉の塊が地面に落ちる音。

「くっそ、こんなの勝てるのかよ……」

リョータは冷や汗が止まらなかつた。

「シシシシシ……絶体絶命……ギジッ！」

今までになく追い詰められるハイド。

ヨシノやカレンが相手にしきれない賊達が5人程、後ろで眠そうにしているハイドを狙ってきた。全員暴威雷電サンダーストームで受傷し、ハイドに対して腹が立っている。手足を引き摺ったりはしているが、戦闘力の無いハイドを殺すには十分だった。

ハイドはじりじりと押され、壁際付近まで追い詰められていた。

「てめえのせいで、散々な目に遭ったぜ。きっちり御礼をしてやる」

「キシシ、御礼は現金のみで承ります……シシシ」

「この、くそガキ。たっぷり後悔するくらい苦しい殺し方で、ぶっ殺してやる」

「遠慮します……キシッ！」

「死ね！ とにかく、死ね！」

「人はいつか死にます、シシシシシシ」

「お前のせいで、あの女を犯せなかつたじゃねーか」





ているはずの人間を捉え損ねていた。ハイドは、突如として賊達の目の前から消えていた。そこには落ちた眼鏡だけが取り残されている。

「くそっ！ 何処に行った、あのおかつぱ頭」

「魔法使いのガキ……消えやがった」

「あの弛たるんだ小デブが、素早く動ける訳ねー。魔法に違いない」

賊達が口々にハイドの悪口を言う。

「シシシシシ……、言イタイ放題ダナ……」

賊達の後ろにそれは居た。

ゆつたりと直立し、両手を左右に広げ、ふわふわと空中に揺蕩たゆたわせている。身体を包む布が膨らみ、時折放電の火花スパークが散った。黒い髪の毛は真上に逆立ち、生え際の薄さが目立つ。以前よりも禿げてきている。

「ドイハっち、生きてた……」

ヨシノの安堵の声。

「奥の手とはそれかっ!? 魔法使い」

カレンの問いに対して、ハイドが余裕の表情で答える。余裕があるせいかな、心なし顔が凜々しく見える。

「ソウダ……。ボ、僕ノ究極奥義、ライジン雷神ⅡR・I・S・I・N・G、シシシ……シシシシ

シシシ……」

ヨシノとカレンは意味が分からず、首を傾げた。

「うるせえ、このクソガキ。ぶっ殺してやる！」

賊のひとりがハイドに斬りかかる。振り下ろされる片手剣。

常にかからの物言いだだが、普段は何を考えているかわからない表情のハイド。しかし、今日の彼の笑顔には嘲りと蔑みの色が見て取れた。

「キシシシシシシシシ、馬鹿カカカカ、ボ、僕ノ、スピードニ付イテ、イテ、コレルカナ？」

そう言うのと残像だけを残して、ハイドの姿が消える。

賊の斬撃が空を斬る。

「シューッシューッシューッ……ザーコ、ザーコ」

ハイドは遠く後方に5メートルは離れた場所に後退していた。

「な、速い……っ！ ヴェールちゃんやあたしよりも速いかも」

「このクソガキー!!」

馬鹿にされた腹の立った賊達がハイドを追いかけ回す。ハイドは追いかけてくる賊達をからかいながら、人間わざとは思えない速さで逃げ続けた。

目の前の戦闘に集中しなければならないのは理解しつつも、新しい出来事には気が

散ってしまうヨシノは、ハイドに質問せずにはいられない。

「ドイハっち、どうやってるの？ 教えてー」

「ファルツエレメント電磁精霊ヲ直接操ツテ、ボ、僕ノ筋肉ニ電荷ヲカケテ、イイイルイル、キシシ」

このグリムガルに来てから、ハイドは脅威的な早さでエレメンタルマジック精霊魔法を理解していた。

規定修練の時点で、ハイドは魔法文字が扱っているのはエレメント精霊ではなく、自然界に満ちあふれるマナであると予想していた。マナを用いて超自然的な自然の現象を操っている。実際、魔法使いギルドで最初に習うマジックミサイル魔法の光弾は何のエレメント精霊も使役しない、純粋なエネルギーの塊だった。

ハイドは理解していた。エレメント精霊とはエレメンタルマジック精霊魔法を万人向けにわかりやすくするため、魔

法生物という形でけんげん顕現しているもので、術者の認知的負担を小さくするための機能的にまとまったシステムであると。

だから、ファルツエレメント電磁精霊の統御法に熟知すれば、必ず自在に制御して、新たな性能を出すことができると信じ、日々仮説と検証を重ね続けた。

その努力の結実が、ライジン雷神Ⅱ R I S I N G だった。

「すごいっ！ 全然分かんないけど、すごいじゃんドイハっちっ！」

ヨシノに手放しに褒められ、満更でもない顔をするハイド。

その内、追いかけて回している賊達が疲れて、ハイドを追いかける速度が遅くなる。

座り込む賊も出てきた。

ハイドはその様子を少し離れた場所から、ゆったりと眺めていた。特に攻撃に移るでもなく、ふわふわと揺蕩たゆたっている。

その様子を見ているヨシノの中に素朴な疑問が浮かぶ。

「それ……、逃げる以外にすごい攻撃とかないのー?」

「……ナイ。キ、基本的ニ、僕ノ筋力ヲ超エルコトハデキナイ……、キシツ!」

ヨシノの隣で八面六臂の戦いを繰り広げているカレンが聞こえるように大きな溜め息を吐いた。

「え? あ、そうなんだ……、そつか……、あ、うん、頑張つて逃げてね、ドイハっち……」

ヨシノもそれ以上言うことが無くなり、戦闘に集中していった。

「……シシシ……アレ?」

「やべえぞ、畜生っ! よけろっ! ヨシノ、カレンっ!」

激しく、そして何度も金属同士がぶつかり合う音がして、リョータと巨大オークがカレン達の戦闘に飛び込んでくる。カレンとヨシノは素早く戦線を離脱する。

巨大オークの双剣が無数の斬撃を繰り返して、リョータを打ち据える。逃げ遅れた賊達が巨大オークの斬撃の餌食となって、肉塊と化した。

リョータも肉厚の両手剣を玩具の竹光のように軽々と振り回し受け太刀をするのが、倍の量で迫る攻撃には対応しきれず、鎧を使つての防御にならざるを得ない。

先程からリョータは致命傷を避けるため、後退を繰り返しながら対応をしている。

「こいつ、敵も味方もねーぞ！ いい感じに賊を殺しまくつてやがる」

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、審判ジャッジメントの光」

カレンの放つた審判ジャッジメントの光の粒子が巨大オークの周囲を七色に染める。

空気の入った袋が割れるような軽い破裂音が響いて、巨大オークに衝撃を加えていく。

「グモオツ！ グモオツ！ オツシユーツ！ オオオツシユーツ!!」

明らかに審判ジャッジメントの光による損傷を嫌がっていた。

巨大オークの足が止まる。

「はあ、はあ、これで少し時間稼ぎができる」

カレンは汗に濡れた金髪をかき上げる。流石の連戦に息が切れていた。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、恵みの光陣サークルレット」

揺れきらめく光の円陣が現れ、カレンを中心にリョータやヨシノを包む。

「この中に居れば、少しずつ傷が癒えるはずだ」

カレンは眼鏡に付いた汗と血飛沫を神官衣で拭きながら、注意深く周囲を観察する。

巨大オークとリョータの戦いの跡には、賊達の血溜まりが広がっていた。

戦場の変遷が容易に把握できる。

既に戦意のある賊はいなかった。大半は逃げだし、逃げることもできない負傷者は壁際で死への恐怖に震えていた。

カレンはリョータへ目を遣る。その鎧は至る所で金属が曲がり、傷付いていた。壮絶な戦いを伺わせる。リョータは乱れた息を整えていた。

「よく頑張ったな、筋肉。貴様が逃げ回ったお陰で敵は既にあの化け物のみだ。……すぐに審判ジャッジメントの光を突破するだろう。ここからはヨシノとふたりだ。私は支援に回る。思う存分……潰せ」

「はー、はー、けっ……、どうせ逃げて回ってただけだよ……。ふっ！ だが、ここからは逃げねーぜ……」

リョータは両手ツウエイヘンダー剣を正眼に構えた。

その隣に並んで、ヨシノが右前半身構えで立つ。

「初めての共同作業だね」

ヨシノの一言にリョータが驚きの表情をする。

「それは所謂いわゆる、けっこ……」

「いや、いつつもリョータが勝手にあたしの獲物を奪っちゃうってことだよ」



しかし、ヨシノとリョータも攻めあぐねていた。ふたりの攻撃は何度か巨大オークの身体を捉えていたが、丈夫な身体表面を捉えるのみで、決定的な損害を与えることができないでいた。

巨大オークの間合いは広い。

決定的な一撃を食らわすためには、その間合いに飛び込まなければならなかった。自殺行為為寄りの命懸け。

高速で襲いかかる凶刃の中をかいくぐって、全力での攻撃態勢を取るには万全の時機を狙わなければならない。

3秒。最低2秒は欲しいと、ふたりとも思っていた。

そう考えている内に、どんどんと時が過ぎていつていた。

「こいつ……ゆで蟹みたいだねっ!」

「……一応、聞いてみるぞ。どういう意味だ、ヨシノっ!」

「殻が固いし、食べる時に無言になっちゃうってことーっ!」

今回は割と分かりやすいなとリョータは思った。

リョータの目の先に、カレンの足下の床で寝ているハイドの姿が映る。

「こらっ! キモオタっ! てめー、休んでんじゃねー。このクソオークを止められねーのか?! 3秒でいいっ!」



反応が無い。ただ熟睡しているようだ。

冷めた目をしたカレンがハイドの腹部をショートスタッフで突く。

「ぐえっ！……ギジジジ」

鼻提灯を膨らませて寝ていたハイドが目を覚ます。

「ドイハっち。このオークンを止められない？ 3秒。2秒でもなんとか……」

「シシシ、……す、全ての魔法力を使ってしまうと、ぼ、僕は倒れてしまう。……だ、誰か負ぶってくれるか？ キシッ！」

「負ぶう、負ぶう。あたし、負ぶうよ」

「バツカ、ヨシノ、俺が負ぶうからいいよ。あんなの……」

「キシシ、わかった……イチヂヂヂヂヂヂヂヂ」

メイジスタッフを頼りにして、よれよれとハイドが立ち上がる。その瞬間、両足の筋肉へ焼け付くような痛みが走った。

極度の筋肉痛。

雷神<sup>ライジン</sup> R I S I N G の性能は抜群だったが、筋肉を電氣的に操作する負担は全て術者

の身体に返ってきた。普段以上に顔色が悪いハイド。

「どこまで効くか分からないが、私も同時に咎光<sup>ブレイム</sup>を放つ。……時機を合わせるぞっ！

ファイナル  
終幕だ、全員動けっ！」

カレンが指揮を執る。カレンの顔にも疲労が色濃い。

「おうっー」「にやっー！」

リョータとヨシノが返事をする。精気のある、いい返事だった。

ハイドは息も絶え絶えにメイジスタツフを構えると、ライトニング雷電の詠唱に入った。スタツフの先で中空に魔法文字を書き連ねる。

「キシシ、ジェス・イーンシシシ・サルク・フラム・キシツ……」

そこで魔法文字の記入を止め、カレンの顔を見るハイド。

カレンはヨシノとリョータの動きに集中し、時機を見極めていた。

時は来る。

何度目かの攻防の後、巨大オークが双剣を大きく振りかぶって、ヨシノとリョータへ振り下ろそうとする。

ヨシノとリョータはそれをかわ躲そうと後バックステップ退で間合いを作った。

「放てっ!!」

「ダルトっ！」

カレンが叫ぶと同時にハイドの詠唱が完成し、巨大オークの頭上に光輝く魔方陣ができる。

次の刹那、一筋の稲光がオーク目掛けて降り注ぐ。

電子の流れが空気を斬り裂く轟音が響き、巨大オークの身体がびくりと爆ぜる。周囲に体毛の焦げる臭いが一瞬で広まる。

焦げた豚の臭い。

雷電の命中を確認すると、崩れ落ちるように倒れるハイド。

「光よ、ルミアリスの加護のもとに、咎光」

カレンの白い顔を咎光の光がさらに白く照らし出した。

七色に輝く絹糸のような光の筋が螺旋を描き、交わりながら強い光の鎖となって巨大オークへ向かって伸びていった。

「ヴォオオオオオオッジュッヴヴヴヴ……」

巨大オークの動きが止まる。

それを確認するよりも前に、獯猛な獣と化した戦士達が動き出す。

「シヨーーータイムだぜえ!!」

リョータが左上からの袈裟懸けで両手剣を振り下ろす。戦士の基本技、憤怒の一撃。

「ヴォッシュッ!!」

渾身の力を振り絞って、巨大オークはその斬撃を双剣で受け止める。

飛び散る火花。

「シッ……っ!」

両手の塞がった巨大オークの喉笛を狙って、ヨシノの槍が唸りを上げる。終わった。

誰もがそう思った瞬間、巨大オークは左手で持っていた湾刀を手放し、ヨシノの槍を掌てのひらで防ぐ。恐るべき生存への渴望。ヨシノの槍は巨大オークの掌てのひらを貫いて、止まった。リョータの両手ツツアイヘンダー剣は片刀だけでは防ぎ切れないため、肩で支える形になる。

しかし、両者の攻撃共、致命傷にはほど遠い。

硬直する三者。

一斉攻撃の失敗に悔やしがるヨシノとリョータ。体力と気力の限界が一気に訪れる。

一方、危機を凌しのいで笑みを浮かべる巨大オーク。

巨大オークは、余裕の表情でヨシノとリョータを見下ろした。生存の喜びから、自然と鼻から笑いが零こぼれる。

次の瞬間、その笑いが止む。

ヨシノとリョータの背後で、睨み付ける眼鏡の下の双眸。その可愛らしい小さな唇に笑みを浮かべる神官がいた。

その神官の不気味な笑みに疑問を覚え、巨大オークは不足気味な脳みそを最大限使つて、笑みの理由を考えた。

分かるはずもない。

ルミアリス教団において辺境オルタナーの天才少女と称された神官カレンと、生まれつきの恵まれた体躯とその肉体から生み出される暴力だけで生きてきたオークとで、見えている景色が同じ訳がない。

「祈れ……」

静かな祈りと共にカレンが右手を額に当てると、六芒の輝きが灯った。

その輝きを不快そうに眺める巨大オークの背後に黒い影が舞う。握り締められた鈍色の白刃。

次の瞬間、その白刃は疾風の如き速さで巨大オークの項に突き刺さり、その脊髄を断ち切った。

崩れ落ちた巨大オークの上に、銀糸の外套を羽織った全裸のブリセイスが立っていた。その手には死んだ賊のものと思われる片手剣が握られていた。

「重い……、畜生！ 重いぞ。それになんか見えない。なんか良い景色が見えそうなのに、見えない……。早くどこかせっ！」

崩れ落ちた巨大オークの下敷きになって、潰されているリョータ。

「ブリちゃんっ！ あたし、あたし……うえっ、うえっ、うえーっーん」

ヨシノが面防を跳ね上げ、歓喜の声を上げる。それと同時に双眸がみるみる内に涙で

いっばいになり、泣き始めた。

リョータの声を無視して、ブリセイスはヨシノを抱きしめる。

「無理をさせたな……。もう大丈夫だから泣くなヨシノ」

その傍にカレンが立っている。

「カレン師……。ありがとうございます」

ブリセイスは済まなそうな表情でカレンを見る。

カレンは恥ずかしそうにブリセイスから目を逸らした。

「ルミアリス様に感謝をすることだ……。そして……。生きていて良かった」

「……はい、もう……。大丈夫です」

ブリセイスは笑顔で返事をした。

「そうか、……。ならば帰ろう」

そう言うと、後ろに振りくカレン。

その顔には、誰にも見せたことがない優しい笑顔が浮かんでいた。

## 25. 知りすぎた神官、知らなすぎる神官

「ひ、ひ、ひい、助けごぐあ……っ！」

鈍色の長剣が男の顔を貫く。

延髄を断ち切られ、一瞬で生命いのちを失った。

命乞いをしている賊を容赦なく殺した暗黒騎士。今はグンゾウの仲間だった。正確にはこのグリムガルに來た時からの仲間だった。グンゾウはそう信じている。

そして、このグリムガルでグンゾウが出会った中で最も美しい人間だった。

紅き月の夜に現れた、闇より暗き漆黒の女神……その名はヴェール。

伝令を追いかける道中、今後の連携のためグンゾウは暗黒騎士の技スキルについてヴェールから説明を受けた。暗黒騎士の技は移動系の技スキルが多く、敵を翻弄して倒すのが主であるという。そのため、神官を守るような動きはできない。グンゾウは自分自身で身を守らねばならないことを知った。

そして、遂に、ヴェールとグンゾウは円形闘技場の奥で伝令に追いつくことができた。そこは古代の神々を模した像が建ち並ぶ、神殿のような場所であった。

2対1では伝令の男に勝ち目は無く、僅かな戦闘の後、ヴェールが伝令の男を串刺しにした。

男が死んだことを確認すると、ヴェールは長剣を抜く。そして、長剣に付いた血糊を振り払った。無感情な横顔は見とれる程に美しい。

グンゾウはその様子を悲しげに見ていた。美しいものを見るのとは異なる感情が溢れている。

「殺さなくても良かったのに……」

思ったことが口を衝いて出てしまう。

ヴェールは何も言わずに黒い錐状短剣ステイレットを腰元から抜くと、男の死体の眼窩へ突き刺した。

「お、おい、何をっ?!」

沈黙のヴェール。

「やり過ぎだ。死者への冒瀆は止めるんだ、ヴェール」

グンゾウはヴェールの腕を掴む。振り返り、グンゾウを見る鋭い眼。

特に怒りの感情は宿っていない。ただ無感情にグンゾウを見詰めていた。

ヴェールは無言でグンゾウの手を振り払う。

そして、慣れた手付きで目玉を剥くり貫くと、腰の革袋へしまった。



「グンゾウ……」

ヴェールの凜とした声。グンゾウを真っ直ぐに見詰める。

揺らぐことの無い強い意志を感じる視線。

「お前にルミアリスの信仰があるように、私にも信仰がある。お互い、仕える神が異なっているだけだ。だから、そこはお互いの利益に反さない限り、踏み込まないのが礼儀。そうだろうか？」

ヴェールに言われてグンゾウはハッとす。

ヴェールの職業は暗黒騎士<sup>クラウス ドレットドナイト</sup>。そして、暗黒騎士は暗黒神スカルヘルに仕える騎士だ。

実はグンゾウは自分の周りに暗黒騎士が居ないため、スカルヘルの信仰についてほぼ知識が無かった。ルミアリスの神官であるから当然と言えば、当然の結果だった。

「……ああ、すまない。ヴェールの言う通りだな。……教えてくれ。死んだ敵の目玉を刳<sup>く</sup>り貫くのがスカルヘルの信仰なのか？」

「……少し違う。暗黒騎士は殺した相手の死体の一部を神殿に捧げることによって信仰の証とする。これは悪徳<sup>ヴァイス</sup>と呼ばれている。そして、悪徳<sup>ヴァイス</sup>を積むことによつて新たな力を得ることができなのだ」

——趣味が悪いな……。

グンゾウは言いたいことをぐつと飲み込んだ。

「死体の一部であれば良いのであれば、髪の毛でも何でもいいってことか？」

「……そうだ」

ヴェールはグンゾウから顔を逸<sup>そ</sup>らした。

——何故、あえて目玉……？

もう一度、グンゾウは言いたいことをぐぐつと飲み込んだ。

「……しかし、私は、今まで目玉以外の悪徳<sup>ウツアイス</sup>を捧げたことがない」

ヴェールの異常な告白に、恐怖で身を固くしたグンゾウ。身体の一部が縮こまる。

そんな告白をしたヴェールの横顔には、異常性とは相容れない寂寥感が漂っていた。

「さて、伝令も捕らえたし……というか殺しちゃったけど……、カレン達と合流するために戻ろう」

グンゾウは空気を変えるためにあえて明るい声を出した。

ヴェールに目を遣ると、ヴェールは長剣を抜いたまま周囲の神像を眺めている。

「どうした……？」

「……この神像達から……殺気を感じた」

「殺気……？」

グンゾウもヴェールと同じく周囲を見回す。周囲には台座の付いた5メートル程の

神像が建ち並ぶ。模しているのはルミアリス信仰とは異なる宗教の神で、グンゾウが知っている様相の神は居なかった。

確かに、居並ぶ謎の神像は威圧感がある。ずっと眺めていると一体の女神像がグンゾウを目で追っているような気になってきて、グンゾウは身震いした。

「……怖いこと言わないでくれよ。ただの像さ。俺等の信仰からすれば異端だ」  
「……そうだな……」

ヴェールも納得して、警戒を解いて長剣を鞘にしまおうとする。

その瞬間、ひとつの神像の後ろから素早く黒い影が飛び出してくる。

「憤慨突アアアアーっ！」  
アンガー

鋭い刺突がヴェールを襲う。

紙一重でかわ躲した長剣が、ヴェールの美しい黒髪を散らした。

「さっすが、ヴェールウウウ。俺様の熱い一発をよくもかわ躲してくれたなあ」

黒い長剣に舌舐めずりする男。

そこに現れたのは、漆黒の甲冑に身を包んだいつぞやの暗黒騎士だった。

刺突が外れたと知ると、あっという間にグンゾウ達の目の前から忽然と消えた。

「なっ！ まさか……、リンタだと……」

グンゾウは急いで護身術の構えを取った。

そのグンゾウの耳に聞き慣れない男の声がある。

「なーっはっはっはっはー。そこにいるのはえーっど……誰だっけ……えーっど、あ、えーっど、ちよっど待ってね。えーっど……ヴェール！　そうだ、裏切り者のヴェールちゃんじゃないのー？　本当にもうっ！　うちの組織裏切ったら命は無いぜー、無かつたぜー、無くなつちやうぜー」

緊張感のない間が抜けた声。ヴェールもグンゾウもその声がある方向を見る。

神殿の奥にある階段の上にその男はいた。

そこには青い長衣に身を包んだ短髪の男が立っていた。手には金属製の飾りが付いたスタッフを持っている。カレンの物に似ているとグンゾウは思った。

歳の頃は50過ぎ。短髪には白い物が大分混ざっている。身長はグンゾウと変わらないように見えた。一言で言えば中肉中背の中年という感じだったが、少し背が低く見える。その理由は目立つくらい顔が大きかったからだ。その大きな顔に分厚い一重瞼の目が付いていた。けして大きくない目だったが、対峙する者を畏怖させる不思議な威圧感があつた。

その男を見たヴェールが呟く。

「シャトウ……」

「何だつて？」

グンゾウは慌ててヴェールの顔を見ると、あまり感情を露わにしないヴェールの表情に緊張の色が浮かんでいた。唇を噛みしめ、額に汗が浮かんでいる。

——シャトウと言えば、ザムーンインザクラウドの首領じゃないか……。まさか、あんな巫山戯た感じの男が、あれだけの荒くれ者達を組織しているというのか？

実際、シャトウからは緊張感なるものは全く感じる事ができず、話し方も緩慢だった。

シャトウと呼ばれた男はグンゾウに気付き、笑顔で話しかけてくる。

「おつやあ？　こんな所に辺境軍の士官がいるのかい？　あら、珍しー」

「俺の名前はグンゾウ。辺境軍ではない。服が汚れたから、この服を拝借しただけで、士官で義勇兵だ。ブリセイスを返してもらいにきた！」

グンゾウがシャトウに答えると、シャトウは愉快そうに笑い始めた。

「汚れ……。なはははははははははは。あー、うける。そうかそうか、汚れた義勇兵ね。ルミアリス神官は良いよね、良いっ！　そうかそうか、ブリセイスというのは……？」

シャトウがぶつぶつと独り言のように呟きながら、ブリセイスのことを思い出せずに悩んでいると、どこかからリンタの声が響く。

「捕らえた女将校だぜ、大将っ！」

リンタの声は神殿の天井や石壁に反響して、残響を残した。反響のせいでリンタの本体がどこに居るか、正確な場所が掴めない。

ヴェールとグンゾウはリンタを警戒して、背中合わせになって周囲を確認する。背中にヴェールの温もりを感じて、グンゾウは安心感を覚えた。ヨシノを圧倒した暗黒騎士の強さは頼もしい。

「あー、リンタ君が連れてきたあの色が黒い女騎士か……。あのセクシーダイナマイーツ！ な感じの？ おういえ、ダイナマイーツ！ ダイナマイト……。なんだったつけ？ まあ、いいか。えーつと、と言うことは、ここはハズレだな。あの女騎士はここにはいないよ」

「どこに居るんだ?!」

グンゾウは素直に聞く。

「それは、外の……。あつ！ やばつ、言いそうになっちゃった。駄目ですー、騙されませんー、それは言いませんー。お口チャーツク……。つ！」

シャトウはブリセイスの居場所を言いそうになり、慌てて話を止めた。

——ちつ！ 惜しかった。でも外の……。か。

「グンゾウ君って言ったか？ 君、中々の策士だなー。シャトウちゃん人質の居場所を言っちゃいそうになっちゃたよ。やらしいなー、このグンゾウ……。グンゾウちゃん。グ

ンちゃん。グン君。グン。いやん、ばかん」

——何だかキャラが濃すぎる……。まともに相手にすると異常に疲れるぞ、こいつ。グンゾウがシャトウのボケに眩暈を憶え始めた頃、ヴェールが美しい声で呪文を唱え始める。美女が奏でる賛美歌。ただし、その賛美歌が奏でられるのは地獄の底らしい。

「悲鳴も届かぬ奈落の深淵、不和の詩に苦悩と軋轢の非業を甘受せよ……。後悔の流転に果てた終末の悪意に、因果応報の恐怖が震撼す……。暗黒よ、悪徳の主よ……。悪霊招来……！」

——んんん？　なんか妙に詠唱が長かったぞ……。

詠唱が完結すると、ヴェールの目の前に不気味に光る紫色の魔方陣が浮かぶ。目の模様を象った魔方陣から粘性の血液のような紅い液体が垂れ、ヴェールの掌に落ちる。

ヴェールがその液体を握ると、それは黒っぽい紫色の雲のような形状になった。

その雲が渦巻いて、急速に人型の形をなしていく。

「行け！」

ヴェールが指示すると、煙は人型を成しながら上空に音も立てずに飛んでいく。次第に煙の形が定まり、悪霊が姿を現す。

悪霊は100センチメートル程の女の子の姿をしていた。3、4歳児といったところ

だ。

黒くて長い素直な直毛ペールブルーに病んだ青の肌。

グンゾウからは後ろ姿しか見えなかったが、背中に小さな黒い翼を持ち、黒い天使という感じでなかなか可愛らしい。

黒い光沢のある生地のできたロマンティック・チュチュを身に着け、そこから長くて細い手足が出ていた。悪霊の動きに応じてベル型のスカートがゆらゆらと揺れ、霊くびな雰囲気かモが醸し出されている。

——あれ モデル悪霊の原型はヴェールなのだろうか？

アイトウラムーサ「黒い女神」

ヴェールが眩く。

「へ？」

グンゾウは間拔けな声で聞き返してしまった。

「あれは、アイトウラムーサ黒い女神と言う。……行けっ！」

ヴェールが命令をすると黒い女神はふわふわと高度を増し、周囲を回り始める。暗くアイトウラムーサて黒い女神の顔はよく見えない。

「ふふふふふふふふ……。あははははははは……。あそこにいるよ……、ほら、いるよ、いるよ」



悪霊に性別があるかは不明だが、彼女は複数の子どもが笑うような声でひとつの神像を指差した。基本的には幼い少女の声だが、中に老婆のような声が混ざっているのが不気味だ。

その神像の方へヴエールは長剣を構えた。

「ちっ！ 暗黒よ、悪徳の主よ……、悪霊招来アアアッ！」

リンタの掠れた濁声だみこえがして、大きな黒い塊が黒い女神を襲う。大きな黒い塊は蛸や烏賊のような触手を持った巨大な四足獣の様な見た目だ。頭や顎が異様に発達し大きい。それに比べ、身体に当たる部分は小さかった。よく見ると身体は猿のような霊長類に近い形をしている。

獣の触手は口の中に生えており、大きく開かれた口から何本もの触手が飛び出していた。

触手の先端は鋭い。黒い女神の身体を何本もの触手が貫いていた。身体が折れ曲がり、小刻みに震える黒い女神アイトウラムーサ。

「あはは……、痛い、痛いよ……。はあ、はあ、痛い。ママー、助けデボつ……！」

悲痛で切ない喘ぎ声と共に黒い女神は黒い霧となって消えてしまった。

後には、巨大な四足獣が残った。

グンゾウは目の前で起きている戦慄の光景に立ちすくんでいた。

「いい、良いのか、あれで？ やられちゃったぞ?!」

「構わない。また呼び出せる。日中ではあれが限界だ。それよりリンタの悪霊デーモンへ光魔法をつー！」

ヴェールは少しの動揺も見せずに言い放った。

リンタの悪霊はその大きな口をヴェールとグンゾウに向けるとゆっくり開いた。涎が糸を引く口の中に、何本もの触手がてらてらとした爬虫類のような不気味な光を放っていた。

「ひ、光よ、ルミアリスの加護のもとに！ 審判の光」

狼狽えながら、グンゾウは所有する光魔法の中で一番威力のある審判ジャッジメントの光を唱えた。

降り注ぐ七色の光が悪霊を包み込むと、悪霊は音も立てずに黒い霧となり消えていった。まさに雲散霧消。

「悪霊は純粋な悪徳の塊だ。光魔法には極端に弱い。もちろん、暗黒騎士もだ」

ヴェールが説明をしていると、神像の陰からリンタが審判ジャッジメントの光の粒子を剣で払いながら出てくる。飛散した光の粒子に当たり、損傷を受けたようだ。

「いてて、いてっ！ 死ぬ程いてえっ！ くそっ！ 何てことしやがる。ルミアリス神官つてのは本当に腹が立つぜ……」

その姿を見て、ヴェールの構えに緊張感が増す。

——リントはそれ程の実力者なのか……？

そこへ再び緊張感の無い声が割り込んだ。

「おいおい、リント君。ルミアリス神官のことを悪く言うのは感心できないな。シャトウちゃん、ぶんぶんだぜえ？」

「おつと悪いな、大将。あんたは一応、ルミアリスの信奉者だったな……。ちようどいい、ここはひとつ、光は光の信徒同士、暗黒は暗黒の信徒同士、仲良く決着をつけようじゃねーか」

そう言うのと、リントは右手を高く上げ、長剣の切っ先をヴェールに向けて頭の上で構える。左手には逆手に構えた諸刃ダの短剣ガ。頭を下げ、腰を一段低く落とした姿勢は、明らかに通常の剣術からは逸脱した変形の構えだ。

対峙するヴェールは細身の剣を右手で構え、左手は均衡バランスを保つために後方へ引いている。

「ヴェール……せいぜい俺様の最強伝説に箔はくを付けろっ！」

「……っ!!」

「ヴェエエエエールウウウウーッ!! 憎悪斬ヘイトレットオオエエエエエエツ!!」

リントが汚い声で叫びながら、ヴェールに襲いかかる。上から振り下ろす素早い斬

撃。

その剣先がヴェールの身体を捉える前に、ヴェールは素早いステップで後ろに高速移動して、リンタの斬撃を躲す。排出系と呼ばれている技だ。

ヴェールはあまり受け太刀をしない。

そもそも暗黒騎士は攻撃を主体とする職業だ。防御のための剣技は多くない。その分、多くの移動系の技を習得している。

「綺麗な顔しやがって、よくも俺等を裏切りやがったなっ！」

リンタの顔は憎しみで歪んでいた。

「……」

ヴェールはリンタの事を完全に無視している。その表情のない顔が、氷に彫られた女神のように美しい。

「……くつくくくっ！」

憎しみを露わにしていたリンタが突然笑い出す。不安定な精神。不気味の一言に尽きる。

「だあがなあっ！ 俺は嬉しくて仕方ないんだよ……。ぐわっはっはっ！ 憤慨突あああああああっ！」

——戦闘中なのに五月蠅い。

「俺はなあつ！ お前の事を犯したくてしようがなかつたんだよ。でもなあ、流石に仲間をぼろくそに犯すわけにはいかなからなつ！ 我慢して、我慢して、我慢して、我慢して、我慢してえええつ!! もー、我慢しないで、その綺麗な顔をぼこぼこに殴りながら、首を絞めて、あああ、あああ、あああ、ああ、締めりまくつたお前の奥に、散々ぶち込んで犯せると思つたらああああああ……、もう興奮が収まらねー……んだよつ!! ……実際、あの色黒の女は良く締まつたぜー、イアン・ラッティーの愛人にしとくにはもつたいたい位だつ！ 憎悪斬オオつ!!」

リンタがべろべろと長い舌を出し、涎を飛ばしながら斬撃を繰り出す。

ヴェールは一瞬眉根を歪ませてから、バイザー面防を下げた。リンタには顔を見られることすら嫌になつたらしい。

——最低のクソ野郎だな。俺に戦闘能力の無いことが悔しい……。

「逃げ回つてんじやねええええつ！ とつとと捕まつて、俺にハメハメさせろつてんだよつ！ スカルヘル様に会わせてやるぜつ！」

実際、ヴェールは全くリンタを剣を合わせず、逃げ回っているように見えた。グンゾウには、それ程実力差があるようには見えなかつた。剣を合わせた者同士にしかわからないのかもしれない。

「あ……、リンタ君？ ちょーつと、おげれつ御下劣じやないかな？ まあ、美人は皆好きだけ

どね、ふふっ、ふふふふふ……下品」

シャトウが祭壇の上からリンタに声をかける。

「大将、黙っててくれよ。これは俺の戦闘スタイル様式なんだっ！ 大将もヴェールとヤつてもいいぜ、……俺の後あとで良かったらなっ！ 憤慨アンガ突アアアアっ!!! だから、そこで大人しく見ててくれ。あんたは戦えないだろ?！」

「ふー……、ほんと下品……、そして、君の後あとは嫌だな……」

シャトウは両手を上げて、お手上げような姿勢を取った。先程から、シャトウは全く戦闘には参加せず、身動きひとつしていなかった。

——シャトウ自体に戦闘力は無いのか？ 顔はデカイが、全く強そうに見えない。

反アラバキア組織ザムーンインザクラウドの首領、シャトウ。

そのシャトウが目立つ大きな顔と小さな身体をゆっくりと動かそうとした。その瞬間をグンゾウは見逃さなかった。

「動くなっ！ 光よ、ルミアリスの加護のもとに！ 審判ジャッジメントの光」

審判ジャッジメントの光の粒子がシャトウを包み込む。グンゾウは精神を集中し、審判ジャッジメントの光の粒子を空中で持続させた。

シャトウは動きを止め、微笑を浮かべた余裕の表情でグンゾウを見詰める。その目の



くつく、くくくくく……うける」

シャトウの笑いは堰を切ったように止まらなくなる。上を向いて大きく笑うと、それを我慢するようにお腹を抱えて下を向いた。グンゾウにはシャトウの余裕の態度が気に障った。

「てんめえ、この野郎、馬鹿にしてんのかっ！ まじ、なるべく怪我しないように考えてやってんのに、腹立つう！」

怒りのあまり、グンゾウのこめかみ付近の筋肉がびくびくと震えた。

シャトウは一頻りひとしき笑い終わると、冷静さを取り戻したのか、片手を上げてグンゾウを制した。顔はまだ下を向けたままだ。

「くつくくつくつく……、ふふふ、ふう。……あー、いや、すまない。君を馬鹿にするつもりはなかったんだが、あー、何だ？ グンゾウ君があまりにも丁寧なんで、義勇兵っぽくないなって……思っちゃったんだよね。ほら、義勇兵って野蛮だろ？ なっはっはっはっはー」

シャトウはその大きな顔でまだ笑っていた。

——むかちーん!!

グンゾウはこんな巫山戯た男のために多くの人が傷付き、命を落としたと思うと最高に怒りが込み上げてきた。



「もう、そのニヤついたデカイ顔も見飽きたわ！　続きはオルタナの御白州おしらすで聞いてやるっ！」

グンゾウはシャトウに向かって走り出すと、強打スマッシュのために戦棍メイイスを持つ右腕を最高まで後ろに引いた。

——どうせ動けやしないっ！　連撃で両鎖骨を折ってやるっ！

グンゾウはシャトウが自分の間合いに入ると左足を上げ、思い切り地面に踏み込む。地面を蹴った威力が下半身から捻ひねった上半身に伝わる。

回転する身体。

肩は素早い円軌道を描く。

反動をつけるために後ろに引いた腕が鞭のようにしななって、全ての威力が戦棍メイイスの先端に伝わる。

——渾身の強打スマッシュを喰らえっ！

「ぐええつつつつ!!」

踏みつぶされた蛙のような声を上げて、地面に膝を突いていたのは……グンゾウだった。

「グンゾウっ！」

リンタと交戦中のヴェールが気付き、グンゾウの名を呼ぶ。

グンゾウの鳩尾みぞおちに突き刺さったスタツフの飾り。シャトウが手に持っているスタツフのものだ。

刃は付いていないため重症ではないが、急所を突かれて身体が言うことを聞かない。吐瀉物が止まることなく湧き出てきた。息もできない。

グンゾウは、そのスタツフを振り払うと、苦しきの余り、地面を転がり回る。

「ぐう、おあつ！ ……あ、あ、あ、あ、あ……」

その様子を穏やかに見つめるシャトウ。審判の光による損害ダメージは見受けられない。

——何故だ？ なんで？ 奴は審判の光ジャッジメントに囲まれていたはずだったのに……。何故、

無傷なんだ……。だが、それよりも今は逃げないと……。今、攻撃されたら防御もできない……っ！

グンゾウは地面を這いずるように、シャトウと距離を取った。

「なははははは、少し格好悪いな、グンゾウ君。……今、君は思っているだろう。『何故だ？ 奴は審判の光ジャッジメントに囲まれていたはずだ』と」

シャトウはグンゾウの思考を完全に言い当てた。

グンゾウは嘔吐を繰り返しながら、地面を舐めるように這って距離を稼ぐ。もう胃の中は空っぽで、吐くものもない。

「ああ、安心したまえ。まだ君のことを殺したりはしないよ。殺すなら最初から強打で頭を砕く。油断しまくった君になら簡単にできたよ。……でも、しなかった。それはね……」

シャトウはグンゾウに向けて、ゆっくりと大きく両腕を開いた。

「……僕はグンゾウ君に可能性を感じているんだ。……そう、僕等の仲間になってくれるんじゃないかってね」

シャトウは怖いくらい優しい声で、グンゾウに語りかけてきた。

——仲間……だと?!

グンゾウは徐々に収まってきた痛みを堪え、戦棍メイスイを支えに立ち上がった。まだ、足下が覚束おぼつかない。吐きすぎで消化器官が傷付いたのか、口の中に血の味が広がっていた。

グンゾウは込み上げる唾液を地面に吐くと、シャトウを睨んだ。

「……そうだつ! 再び立ち上がったご褒美にグンゾウ君の疑問を解決してあげなきゃね。何故、僕が審判ジャッジメントの光の粒子に囲まれた状態から、君に反撃することができたかを。それはね……」

先程までのニヤけた顔とは打って変わり、シャトウの表情が暗く真剣なものとなる。

シャトウの次の台詞セリフにグンゾウは耳を疑った。

「それは……、僕がルミアリス教の神官だからなんだよね……。グンゾウ君」

——なんだっ……と?! 今、こいつは何と言ったか? 神官? 神官って言ったのか?  
 ? それもルミアリス教の……っ?!

グンゾウはいつまでも止まらない吐き気を感じていた。

シャトウの顔は再び元のニヤけた顔に戻っていた。

「少しだけおしやべりをしよう。グンゾウ君ならわかってももらえるかもしれない。僕が何故、反アラバキア組織なんてものを率いているか……だ」

静かに喋りながら、シャトウはゆつたりと歩いた。スタツフの石突きが石の床を突く度にカツカツと音を立てる。

「実はね……、リンタ君も僕も元は義勇兵だったのさ。あの塔から湧いて、選ぶ選択肢も無く、生きるために義勇兵になった。グンゾウ君も……そうだろ?」

——な、なんだ……と……?!

グンゾウはシャトウから聞かされる情報に混乱し、再び頭が朦朧としてきた。グンゾウは頭を振って、意識を保つ。

——駄目だ……惑わされるな……。今は早く身体を元に戻すんだ……っ!

シャトウの独白は続く。

「いやー、あの頃は楽しかったなあ。仲間と一緒に怪物を狩り、お宝を手にし、シエリー

の酒場で飲んだりしてな……。ふふふ。まだ、ダムローの旧市街なんてみんな行くのかな？」

心の底から楽しそうに、シャトウはその大きな顔に笑みを浮かべ、グンゾウに返事を求めた。

「……行く」

グンゾウは氣力を振り絞って声を出した。少しずつ意識が明瞭になってくる。その返事で、シャトウは嬉しそうにガッツポーズを取った。

「おおっ！ そうか……。だよな。ダムロー、懐かしい。少しずつ装備を調べて、スキル技も憶えて、オーダー兵団指令を熟こなしたりしてさ……」

そこでシャトウの声がぐっと低くなる。シャトウの表情に影が差す。

「そして、みんな死んでいくんだよ……」

沈黙。

シャトウは下を向いたまま、口を噤つぶんでいた。

その目に光る物が見えた気がして、グンゾウは思わずシャトウから目を逸らしてしまった。カレンが居れば「戦闘中に敵から目を離すな」と怒られただろう。

近くではヴェールとリンタが死闘を繰り広げていたが、その剣戟の響きも何故か遠く霞んで聞こえた。

しばらくの沈黙の後、シャトウは再び話し始める。

その顔には笑顔が戻り、暗さは見えない。

「そうだ、そうだ。グンゾウ君はさ……、辺境軍義勇兵団が本当に我々塔から湧いた人間達の味方だと思ってるかい？」

——何を言ってるんだ……？

「捨て扶持ぶちの10シルバーを与えられて、右も左も分からない中、生きる目的も与えられず、命を懸けて戦いの毎日を送らされる。これで本当に僕等はいつか幸せになれるのかな？」

その質問にグンゾウは衝撃を受ける。

感情的には反論をしたかったが、「幸せになれる」と口にすることができなかった。シャトウが話している言葉は、日頃からグンゾウが感じていたことそのものだったからだ。

「僕はね……、ある事件をきっかけに、この世界の絡繰からくりを少し覗いてしまったのさ。だから、あの日、義勇兵団を離れて、反アラバキアの活動を始めたんだ」

——この世界の絡繰り……。

グンゾウはシャトウが話す世界の絡繰りについて何も分からなかった。

この世界、グリムガルに来てから、グンゾウは仲間の何倍もの速さで世界の把握に努

めた。本を読み、人の話しを聴き、よく世界を観察した。しかし、学んでも学んでも自分の置かれたこの世界の理解に達するためには、果てしない距離を感じていた。

「どうだろう？　グンゾウ君。君には僕と同じ匂いを感じるんだ。僕の右腕になつて欲しい。僕と一緒に幸福な世界を作らないか？」

優しい笑顔。そして、シャツウの腕がグンゾウに向けて大きく広げられる。

グンゾウは怖かった。何も知らない自分が。

そして、グンゾウは恐ろしかった。今、目の前にいる男に惹かれて<sup>ひ</sup>いる自分が。

## 26. 光の奇跡

「さて、どうするグンゾウ君」

シャトウは徐おもむろに話し始める。まるで学府で講義をする教師のように、ゆっくりと歩きながらグンゾウの返事を待っていた。

「……何を……？」

「なはははは、スカウトの件さ。とぼけないでくれ。それともとぼけ好き？ とぼけ

ボーイ？ とぼ……」

「黙れっ！ 俺がテロリストなんかになるわけないだろ」

シャトウの小ボケが始まる前に、言葉を遮るグンゾウ。胃の痛みが和らいで、スタツフを構え直した。

その様子を見たシャトウは渋い顔になる。グンゾウをしばらく見詰めた後、視線を外すと再び歩き始めた。

「ちつちつち……、テロリスト？ それは違うな。賢くなりたまえ。別に義勇兵団へ忠誠を誓う義理もないだろう？ オルタナではそれなりに理不尽な思いをしたろう？

僕は知っている。何故なら君と同じ義勇兵で、神官だったからだ。我々と来ればそんな



思いは無いと約束しようっ！」

グンゾウは頭の中で、義勇兵として過ごしてきた日々が思い浮かべた。

——確かに……理不尽な思いは多くある……。でも……。

「しかも、ここはザムーニンインザクライドの拠点だ。今は、ヴェールちゃんもリントラ君と戦っている。もしここでリントラ君がヴェールちゃんを倒しちゃうと君はひとりぼっちの無力な神官だ……今の内に寝返った方がいいんじゃないの？　うちのリントラ君結構強いぜー、勝っちゃうぜー」

グンゾウを見てにつこりと笑顔を浮かべるシャトウ。

グンゾウの背後では剣戟の音とリントラの下品な言葉が鳴り響いていた。

——嫌なことを言う……。しかし、冷静になるんだ……。さつきもそうだが、シャトウのペースに乗るとやられる。これは心理戦なんだ。熱くなるな……。熱くなるな……。熱くなるな……。

グンゾウは深く息を吐いた。

興奮していた何かが身体から抜け落ち、いつもの冷静な自分を取り戻す。

「確かに……。義勇兵団がまともな組織運営とは思わない。それに……。辺境軍自体に義理は無いし、このままの生活が良いなんて少しも思っちゃいない」

グンゾウの言葉にシャトウは満足げに頷いた。

そして、グンゾウは続ける。

「しかし、お前達の組織がまともだとも思えない。オルタナに火を付け、兵士達を殺め、盲目の少女を誘拐し、捕虜のブリセイスに対する虐待を認めた。俺の感覚からすれば、よっぽど人道に反する事をしている」

シャトウはグンゾウの言葉をひとつひとつ頷いて聞く。特に動揺や感情の高ぶりは見せない。

「そうだな……。グンゾウ君の言うことはいちいちもつともだ。確かに、僕等のやっていることは非人道的だ。ただ、その中で謝らなければならないのは女騎士の件だけだ。その扱いについては配慮が欠けていた。すぐに正そう……」

「それ以外のことは?！」

グンゾウが食ってかかろうとすると、シャトウは両手を胸の前に持ってきて落ち着けという姿勢を取る。大きな顔に付いている小さな目でウインクをした。

妙に余裕のある態度がグンゾウの気持ちに苛立たせる。

「まあ、まあ、落ち着きたまえ、グンゾウ君。慌てる乞食はなんとやらだぜー」

そこまで笑顔で話していたシャトウの顔が急に真剣になる。

先程から急激に変化する表情にグンゾウは恐怖を覚えていた。

「それ以外のことは、全て我々の大きな目的のために動いた手段だ。つまり、方便だよ。

多少の犠牲は厭いとわれない。それだけの価値がある目的だつて事だ」

「目的とは……？」

グンゾウが呟くように訊く。

「それは言えない」

シャトウが凜とした声を出す。顔が大きいからか、声が大きいからか迫力がある。そして、すぐに顔が笑顔になり、元のとほけた感じに戻る。

「グンゾウ君がうちに来れば、その内教えてあげられるかもしれないけどねー。それに今回の目的はあの少女にあったのだよ……、あの少女が我々の探していた鍵なんだ……」

「鍵……？」

「そう、鍵だ……。理不尽な我々の運命を変える、自由への扉のね。つまり、この戦争は自由を得ようとする者達とそれを妨げようとする者達の戦いなんだ。いつだつて、革命や戦争はそんな理由で起きるだろ？ そう考えると多少の犠牲など小さなものだ。……ともかく、君は自由への招待状を手に入れた。その夜会パーティーへ参加するかしないかは……、それも君の自由だ」

——話を聞けば聞く程分からなくなっていく……。シャトウは何を言っているのだろう？ 大体シャトウが言っていることが全て真実だとも限らない。大嘘つきか、精神

異常者か、それとも……。

シャトウの言葉を真剣に受け止めてはいけなと思う気持ちと裏腹に、グンゾウは思考の渦に迷い込んでいた。

「どうだい？ ミステリアスだろー？ やっぱり、ここはひとつうちに参加して、この謎を解いてみないか？ グンゾウ君なら破格の扱いをするよ。そうだな……秘書に若い女の子をひとり付けてもいい。毎日楽しいぞー。何だかわからないけど、やりたい放題だぜー」

——秘書……。やりたい放題……。

何故かグンゾウの頭にアキの姿が浮かんだ。

アキは神官衣に身を包んでグンゾウの横に付き従っていた。手には羊皮紙の巻物をいくつも持っている。

アキの神官衣は丈が短く、伸ばしても膝上までしかない。神官衣の下には何も履いていないため、歩く度にアキの白くて細い太股ふとももが眩しい。

アキは髪は毛は上げてまとめていて、白い項うなじに後れ毛が垂れて色つぽい。顔を見ると何故か黒縁の眼鏡をかけている。いつもより大人っぽい姿にグンゾウは喉が鳴る程、唾を飲み込んだ。

何故か歯止めが利かず、グンゾウは思ったことを率直に言ってしまう。

するとアキは少し恥ずかしそうに、そして嬉しそうにグンゾウの方を向いて笑った。

——かわええ。

その桜色の唇がわずかに開き、何かを言う。

何故か音がせず、聞き取れない。何を言っているか分からず、グンゾウは唇の動きに

注目する。

アキは何度も何度も同じ口の形を繰り返す。

——なんだろう……。み？ ん？ だ？ だい……。？ 大好き？ 俺のことが大好

き?!

「……ゾウクーん？ グンゾウクーん？ グンゾウクーん？」

白昼夢から戻ると目の前にはシャトウのデカイ顔があった。厚い一重瞼に、大きな

口。

「うおっ！ でっけえ顔っ!!」

グンゾウは驚いて後ろに跳びはねる。驚きのあまり無様にも尻餅を衝いてしまった。

石畳にぶつけた痛みが、尾てい骨から鼻に抜ける。涙が溢れてきた。

アキとの幻想ファンタジーから、おっさんとの現実リアルへの着地は幸福度の落差が大きい。

グンゾウは素早く立ち上がると、シャトウから離れるように後退った。

「うおい、うおい、ひどいな君は。意識が飛んだグンゾウ君を攻撃もせず、優しく介抱してあげようとしたのに、顔がデカイなんて……。まあ、正直、大抵の盾よりデカイんだけどね……。つてそんなことあるかーいっ！ 馬鹿にすんのもいい加減にしろよ……。とは言え、気持ちは分かるよ。僕も毎朝鏡見る度、驚きと共に1日を迎えるよ、グンちゃん……。もう、グン……。」

——うっかり現実逃避するところだった。……が、今の俺にとって何が大事なのか分かった気がする……。

「つまり、僕とグンゾウ君の相性つてばすこく……」  
「待ってくれ、シャトウ……。」

相手の事を一切考えず、脈絡もなく話し続けるシャトウ。

グンゾウはそのシャトウを押しとどめる。スタツフを持った手をぶらりと下げ、戦闘態勢を緩めた。

「おや？ 遂に帰順してくれる気になったかい？」

シャトウがニコニコと笑顔を浮かべながらグンゾウを見詰める。しかし、その笑顔の瞳の奥は笑っていない。何か得体の知れない意志が宿っていた。

グンゾウは溜め息をひとつ吐くと、頭を左右に振る。

「おや？」

「……正直、俺はザムーンインザクラウドは悪の組織だと思っていた。いや、今もどちらかと言えばそうだ。しかし、今日の前にいる首領のお前と対峙して話を聞けば、その考えが正しいのかわからなくなる。シャトウ、俺はお前が何者かわからない。悪か、正義か、敵なのか、味方なのか……、好きか、嫌いか、それすらもわからない。だけど……、今俺の帰る場所、帰りたい場所はわかつている。だから、お前とは行かない。これは俺の意志だ。ブリセイスを解放して、そしてここから俺等と一緒に帰してくれ。頼む……」

グンゾウは強い意志でシャトウを見詰め返す。シャトウはその様子を見て、クスリと笑った。

「ふふ、そうかそうか……。まあ、他でもないグンゾウ君の願いだ。義勇兵の先輩、同じルミアリス神官として、できるだけ聞き入れてあげたい。……そうだな、ブリセイスという女騎士は解放しよう。それは約束する。恐らく、まだ生きてはいるだろう……」

そこでシャトウは1回言葉を区切る。視線をグンゾウから外し、そして、考え込むように顎に手を遣り腕を抱えた。

「うーん、後半の帰りたいだが……、グンゾウ君は無事このまま帰してあげても良いかな」

「じゃあ……」

「……しかし、そこで戦っているヴェールちゃんも別だ。彼女はうちの組織を裏切っている。『裏切り者には死を』、これはうちの鉄の掟だね。そうじゃないと組織に示しがつかない」

両手を横に上げて、シャトウは困ったと言う様子を示した。実際は困っていないだろうとグンゾウは思った。シャトウはそんなにやわではない。

似たもの同士の不思議な理解。

そして、グンゾウもそんなにやわではない。

「……そうか、利害の対立……か。お前はヴェールを殺したい。だが、……俺はヴェールを生かしたい。ヴェールは大切な……仲間なんだ」

グンゾウは右足を後ろに引くとスタツフを中段に構える。その顔は何か吹っ切れた爽やかさがあつた。

「だったら……、悲しいけど貴方は敵だ」

グンゾウは初めてシャトウに笑顔を投げかける。

シャトウは一瞬驚いた表情をした後、すぐに普段通りの薄笑いに戻った。

「ふふふ……、短い間でぐつといい顔になったね。神官はいつも笑顔で。顰めつしか面づばかりの神官なんて駄目だよ。いつか死神に喰われちゃう。……いいだろう。少し稽古をつけてやろうじゃないか。本気で来い、後輩君」



シャトウはスタッフを八相に構える。斜めに立ったスタッフの先がシャトウの頭上を遙に越える。

——攻撃重視の構えか……。舐められているな。見せてやろうじゃないか、カレン仕込みの操棒術を。

相對する壮年と中年の神官。始まりの緊張感が2人を包む。

その傍では、暗黒神の手先同士による緊張感をとうに越えた激戦が繰り広げられていた。

面前に構えた長剣を蛇のようにすり抜け、剣先が目の前に迫る。

ヴェールはそれを僅かな後傾で躲した。

剣先が面防を引つ搔く。不快な金属音が両耳に届いた。

その一撃を逃れた直後、面防の死角を衝くように、装備の薄い脇腹を狙った短剣が襲ってくる。

致命傷となる攻撃。

咄嗟の判断で地面を蹴って、ヴェールは素早く後ろに下がった。左足から右足と素早く繰り返し蹴り下がり、グンゾウ曰く不思議な足捌きで間合いを取る。排出系という暗黒騎士の基本的な技だ。

「おらおらおらおらおらあつ！ 逃げてばつかりじゃ、その内詰うちんじやうぜえつ！  
俺様の手は無限に存在してるんだからさああああつ！」

実際、リンタの攻撃に対してヴェールは逃げの一手だった。追いかけてくるリンタの斬撃を剣先で逸らしながら、さらに後ろへ後ろへと後退し続ける。

しかし、その魔手は確実にヴェールを追い詰めつつあり、余裕を持って躲かわせていた攻撃が僅わずかかながら擦かするようになってきていた。

理由の1つは明白。

心身の限界だ。

鍛え抜かれたヴェールの精神と肉体であつても、無限の持久力があるわけではない。身体の動きが少しずつではあるが、悪くなつてきている。また、細い糸の上を渡るように研ぎ澄ましていた神経も疲労してきた。リンタの口撃が効果を發揮しつつあるのか、冷静なヴェールの精神に僅わずかかな波が立ち始めていた。

しかし、ヴェールだけが消耗しているわけではない。

間合いを広く取ったヴェールを追いかけないリンタ。足を止めて、一呼吸ついている。

ヴェールは、リンタも確実に体力を消耗していると感じていた。

「よーし、ヴェールう。俺様も鬼じゃねえ。大将がお前を殺すと言っても、それは周りの

奴等への筋を通すためだ。つまりお前に皆が納得できる罰さえ与えれば、それでいいってことだ。そこでだっ！ お前が俺様の性奴……」

「断る」

説明の途中でヴェールはリンタの提案を拒否した。

僅かな感情も込めず、静かだが意志の強さを感じる声で短く放った。

少しの静寂。

「てめっ！ 最後まで聞きやがれっ！ いいか。良く聞け、俺様専用の性奴……」

「断ると言っている」

リンタの戯れ言に付き合うのに疲れたヴェールはその言葉を遮るように攻撃を仕掛けた。

素早い跳躍でヴェールがリンタに刺突を繰り出す。

予想していたかのように、リンタは仰け反ってヴェールの突きを躲すと横薙ぎで反撃した。

「うく……っ！」

呻き声が漏れるヴェール。

リンタの長剣が脇腹を捉えていた。鎖帷子チェインメイルに守られているとは言え、重たい衝撃が

腹部に伝わった。内臓が大きく動かされ、不快感が込み上げる。

ヴェールは急いでその場を離れ、思わず通常の倍以上間合いを取った。

片膝を衝き、込み上げてくる唾液を床に垂らした。

「ばーか、ばーか。てめえの攻撃なんざ当たるわけねーだろ。予想済みなんだよ。どうよ？ 俺様の『黒王』は。子宮までずどーんと響いたろ？ いい加減、俺様の女になれ。そしたら、その身体に飽きるまでは生かしておいてやるぜ？ うへっへっへ、お前の器量ならそこそこ飽きねーよ、きつと」

リンタの愛剣黒王は片刃で僅かに湾曲している。先端の方ほど剣身が幅広になっていて重い。よほど鍛えられた前腕と手首の持ち主でないと繊細な剣技は発揮できない。扱い難さと引き替えに斬撃の威力が強化されている剣だ。

「くだらないな……」

ヴェールが呟く。誰に対してというわけでもない。

「ああん？」

リンタが不愉快そうに聞き返す。ヴェールの呟きが期待した答えと違っていたからだ。

「そんな人生はくだらない……」

ヴェールは徐おもむろに立ち上がると長剣を構えた。いつもよりも体勢を前傾姿勢にし、右足に体重がかかる。石畳が踏みしめられて軋む音を立てた。

「私は生きたいように生きる！　そして死ぬだけだっ！」

普段では聞くことのできない感情的なヴェールの声が神殿内に響くと、ヴェールは射出系リープアウトで突撃した。

振り返りにする気満々のリントは、ヴェールの動きを注視する。直線的に喉笛を狙う長剣の動きは如何にも単純で、その剣筋には感情の苛立ちが見て取れた。大きな舌舐めずりで、極上の獲物を喰らおうとするリント。

しかし、リントの間合いに入った瞬間、ヴェールの影は揺らぎ、姿が消えた。

「ぬっ！　立鳥不濁跡?!」

リントは首と眼球を素早く、そして大きく動かして、視界を広げる。リントは左後ろに風圧を感じて、即座に身体を半回転させると、一步後退する。

眼下には体勢を低くしたヴェールが、下段から斬り上げる寸前だった。

「おらあっ!!」

リントは、ヴェールの斬撃を上から叩き突けるように黒王こくおうで防ぐ。

飛び散る火花。

鏢迫り合バドインドいとなり、ヴェールの動きが止まった瞬間、リントは素早く左手の短剣でヴェールの首筋を狙った。

定石であれば、一旦排出系イグゾーストで距離を置くのが暗黒騎士の戦い方だが、ヴェールはその

長剣をあえて右の肩口で受ける。

肩当と胸当の隙間から短剣がヴェールの肉へ深く食い込む。

鮮血。

それを見たリンタの顔がこの上ない愉悦の表情となる。

次の瞬間、それが苦悶の表情へと変わる。

ヴェールが左手で抜いた黒い錐状短剣ステイレットをリンタの肩口へ突き立てた。

錐状短剣は錐状となつてゐるため、貫通力が強く、リンタの鎖帷子チェインメイルをゆうに潜り抜け、

深々と刺さつた。

「ぐわあああああああつ！ 畜生つ！ 畜生つ！ やりやがつたなあ！ ぐああああ

あああああつ！」

たまらず、その場を排出系イクソーストで離れるリンタ。

ヴェールは肩に刺さつたリンタの短剣を抜くと地面に放り投げた。

同時に鮮血が吹き出す。

「グンゾウっ！」

ヴェールが声を上げると、ヴェールの近くに白く輝く神聖文字が浮かぶ。

その光を浴びて、ヴェールの傷が塞がっていく。

癒光。

「……あんま、無茶すんなよっ！ 女の子なんだから……」

グンゾウはシャトウと対峙しながら、ヴェールへ癒光ヒールを放っていた。

ヴェールは始めから、自分の力量がリインタより劣っていることを理解していた。そこで、ヴェールとグンゾウはあらかじめお互いを支援すると決めていた。ヴェールが大きな掛け声を出したら、グンゾウは光魔法を準備する。たったそれだけの単純な決ルめ事ルだった。

「あらあらあら……グンちゃん、僕との教レ練スの最中に味方へ光魔法なんて、余裕だ、なっ  
!!」

シャトウの強打スマッシュがグンゾウを襲ってくる。

「わおっ！ つと……」

グンゾウはシャトウの強打を受け流しながらも、ヴェールへの癒光ヒールに集中した。

「とは言え、僕もリインタ君を癒やしてあげないとねっ！ 光よ、ルミアリスの加護……」

同じくシャトウがリインタを癒やすために、光魔法を唱えようとする。

「させるかっ！ 光よ、ルミアリスの加護のもとに」

グンゾウが得意とする咎光ブレイムからの強打スマッシュの連打。

「おわつとつと……。グンゾウ君は攻撃が荒いな。そんな攻撃、誰に教わったんだか

……、けしからん修師マスターだ……。護身法の基本は敵の力を利用した守りなのだよ」

シャツトウはグンゾウの強打スマッシュを突き返して反撃へと繋げる。

グンゾウは恐ろしい勢いの突き返しヒットバックをすんでの所で躲した。グンゾウの短い髪が数本散る。

——同じ神官同士、技の筋はある程度予測がつくとは言え、今のは当たってたら死んでたぞ！

「光よ、ルミアリスの加護のもとに」

回避で体勢の崩れたグンゾウに追い打ちをすることなく、シャツトウは癒光ヒールを唱える。膝を着き、傷を押さえるリンタの近くに癒光の光が輝いた。

連携の良さを発揮しての苦しい引き分け。

大きな実力差を感じる2対2の戦いに、ヴェールとグンゾウは微かな焦りかすを憶えていた。

期待していなかったと言えば嘘になる。

仲間が必ず追いつくと。

グンゾウも、ヴェールでさえも、タナカやカレン達、最も近くにいるはずのアキとシムラが現れることを願いながら戦いを継続していた。

お互いの呼吸を感じ、連携に気を配りながら防いでいたが、グンゾウ達は確実にシャ



トウ達に追い詰められつつあった。

グンゾウからはヴェールとリンタの力量差は分からなかった。しかし、グンゾウとシャトウの力量差は歴然だった。

年齢を感じさせない流麗な動きでスタッフを振り回し続けるシャトウ。

それに比べると、グンゾウの護身法は稚拙で無駄な動きが多い。グンゾウの攻撃はことごとく弾き返され、度々撃ちこまれる反撃はグンゾウの体中に打撲傷を作っていた。

——客観的に見て……ジリ貧だな。

冷静な思考とは裏腹に、状況は良くなかった。

大分前からグンゾウは肩で息をしていた。戦闘において、敵に知られてはいけないはずの呼吸は乱れに乱れている。肋骨は折れていて、息をする度に痛んだ。

頭部への致命傷だけは避けているものの、構えて前面に出る左半身は傷だらけだった。左手は倍程に腫れていて、撃ちこまれた左の太股には裂傷ができ、士官服が貼り付く程出血している。

——癒光ヒルも使えてあと一回。これはヴェールに使いたい。

しかし、そのことをヴェールに伝えることができなかった。彼女は彼女で目の前の敵と必死の戦いを繰り返していた。甲冑で表情は見えないが、彼女も肩が上下に動いている。息が上がっている証拠だ。グンゾウが見ているだけで、何回かリンタに撃ちこまれ

膝を着く場面があった。

——しかし……。

不味い戦況とは別に、グンゾウの心の中をひとつの問いが占めていた。シャトウと打ち合う度にその問いは強くなり、今となつては確信に近い推測がある。

我慢できずにその問いを口にした。

「はあ、はあ、シャトウ……、はあ、ひとつ教えてくれないか……」

「うん、いーよー。……降参の仕方かい？」

グンゾウの問いに対して、シャトウは躊躇ためらうこと無く、冗談を交えながら快諾した。

「あんたの弟子は、はあ、はあ、オルタナのルミアリス神殿にいたりするのか？ はあは

あ……」

「おやー、時間稼ぎかな？ まあ、いいや。どうだろう？ ひとりいたけど、まだいるか

なー？ あの子はあんまり社交的でもなかったし、官僚主義のルミアリス教じゃ仲間は

ずれにされて、もう神官なんてやめちやつたんじやないかなー？ なんでそう思ったん

だい？ もしかして……僕の弟子になりたくなくなつちやつた？」

シャトウは満面の笑みを浮かべながらグンゾウに聞き返してくる。

「はあ、はあ、きつと、俺はあんたの孫弟子だよ。俺の修師マスタはカレン。金髪の可愛い女の

子だ。あんたの弟子の頃からDSかは知らないけど……」

グンゾウは自分の推測を口にした。

シャトウの杖捌きはあまりにカレンと似ていた。顔が大きい壮年の男性だということを除けば、その動きはカレンそのもの。時折、その影像が重なり、懐かしさすら感じる程だった。

グンゾウが最初に気付いた共通点は、シャトウの強打スマッシュだった。通常よりも軸足を先に回転させ、0.3秒程早く打ち下ろす工夫をしている。知らない者がこの攻撃を受ける、スタツフの先端が時間を超越して飛んできたと錯覚する。

それを実現するためには膝関節、足関節の柔らかさはもちろん、素早く重心を移動させるための筋力が必要となる。グンゾウは、こんな攻撃的な工夫をしている神官をカレン以外に見たことが無かった。

それを聞いたシャトウは少し驚いた表情をした後に、愉快そうに笑った。その笑いは勢いを増し、お腹を抱えて笑う程になった。

「なーっはっはっはっははー、だーっはっはっはははははははははっ！ まさか、グンゾウ君が生意気なカレンの弟子とは……。はははは、ふふふふ、はーっはっはっはははは。そうかそうか、君は転職組クラステイングだったのか。通りで、歳の割には技術スキル不足だと思っただよ」

「別に転職クラステイングなんてしてねーけど……。最初からおっさんなんだよ」

「……なーっはっはっはっはっはー！ さいこー、さいこー、あーお腹痛い。いやー、この絶体絶命の場面でそのボケ最高だよ。笑いのセンスあるね。……ますますうちに欲しくなったな」

——ボケじゃねーし……。

グンゾウの攻撃が全て読まれ、反撃されるのも当たり前だった。グンゾウの杖捌きはカレンの写しであり、そのカレンに杖捌きを教えたのはシャトウなのだから。

グンゾウはその事実<sup>スギル</sup>に絶望を感じ、落ち着いてきた呼吸がまた少し乱れ始めた。

——早く来てくれっ！ カレン!!

移動系の技<sup>スギル</sup>を得意とする暗黒騎士のふたりの足が止まり始める。

遂に、ヴェールとリンタの戦いは最終局面に来ていた。

「ぜー、ぜー、ヴェールう、てんめえ、俺様の息が切れちまったじゃねーか……。俺様はセックス以外では汗をかかないって決めてんだよ。ぜってえこのままお前を犯してやる。おまけによくも俺様に刃物を刺してくれやがったな……。ぜー、ぜー、俺様は刺すのは好きだが、刺されるのは大大大嫌いなんだよっ!!」

「……」

既にヴェールは返事をする気力も体力も無かった。面防<sup>フェイス</sup>さえ無ければ、心のそこから

うんざりした表情をリンタに見せることができただろう。

今、ヴェールの頭の中にあるのは、この下品な生き物をどうやったら暗黒神の御許みもとに送れるかだけだった。それが暗黒神スカルヘルの迷惑にならなければ、だ。

せめて、減らず口を利けない状態で送り届けなければならぬ。

ヴェールは目を閉じて深呼吸をする。

「てんめえ、無視すんじゃねーっ！ いつも澄ました顔しやがって。その鎧ひん剥いて、涙と鼻水だらけの情けねえ顔で命乞いするまで犯し……」

リンタの濁声が響く中、ヴェールは甲冑の革帯に手を伸ばすとそれを外した。大きな音がして胸当が石畳に落ちた。

リンタの声が止まる。

ヴェールは、そのまま肩当、背当と甲冑を外していった。最後には面防バイザーを上げると、幻獣を象かたどった兜を脱ぎ捨てた。

兜の下から女神を彫刻したような美貌が出てくる。汗で濡れそぼり、乱れた黒髪が白い肌に貼り付き、妖艶さが増している。

「ぎゃはははは、遂に俺様に犯される覚悟が出来たか……。いいぞ、いいぞ。俺様は気分が大分良くなってきた。そのままストリップを続けられれば、殺すのだけはしばらく我慢してやろう。ほら、早くその邪魔な鎖帷子チェインメイユも脱ぎやがれっ！」

ヴェールはリンタの言うがままに鎖帷子チエインメイルを脱ぎ捨てる。

鎖帷子チエインメイルの下には、綿で出来た白い襟付きのシャツが出てくる。ヴェールの見事な身体チエインメイルの線にぴったりの服は、痩せてはいるが女性としての胸の膨らみがあることを強調していた。

リンタは興奮のあまり、バイザー面防を上げてヴェールの身体を食い入るように見詰めた。

「いいじゃねーか、いいじゃねーか、たまらねーな……。早くその物騒なもんを捨てやがれっ！」

リンタは顎でヴェールの長剣を示す。

ヴェールは溜め息をつき、口がへの字になった。呆れた顔も驚くほど魅力的だ。それから、長剣を正面に持つて行くと剣先をリンタに向けて構える。

「これで準備は終わりだ」

その言葉を聞いたリンタの表情が一変した。凶暴な野獣の表情。額に血管が浮かび、怒りのあまり頬が痙攣する。

「冗談は好きじゃねえぞっ!! これで最後だ……。さっさと剣を捨てて服を脱げっ！」

返事をする代わりに、ヴェールは左手でリンタを手招きする。そのまま中指を立てて、リンタを挑発する。

「切り刻んでやるっ!!」

リンタは刺突の構えでヴェール目掛けて飛び出す。射出系からの憤慨突。リープアウト アンガー  
最後の賭け。

ヴェールは背水の陣を敷いた。

短い間で何度も頭の中に描いた動き。それを忠実に実施する。

左手で腰にある錐状短剣ステイレットを手に取り、リンタ目掛けて放つ。

圧縮された時間の中で、錐状短剣ステイレットがゆつくりとリンタの顔目掛けて飛んで行く。その軌跡を追うようにヴェールも射出系リープアウトで飛び出す。

飛び出す瞬間にヴェールは暗黒神スカルヘルへ小さく祝詞を上げる。またた

瞬く間に縮まる2人の距離。これが恋愛だったらどれくらい幸せなことだろうか。実際には、距離が縮まる程にふたりの殺意が高まっていった。

錐状短剣ステイレットが左目に刺さる直前でリンタはそれを左手の手甲で弾く。手甲が眼前を通り過ぎ、視界が開けるとリンタの目の前からヴェールの姿が消えている。

立鳥不濁跡。ミツシノグ

リンタは射出系を中断して立ち止まる。全方位に警戒し、肌に触れる空気の流れと聴覚に集中した。そして、後方に気配を感じて身体ひらがえを翻す。

「何度やっても一緒なんだよおおおつ!!」

自分の後ろに見つけたヴェールを見つけたリンタは横薙ぎで斬りつけた。剣先が

ヴェールの細く長い首を切り落としたと思った瞬間、そのヴェールの影像が揺らぎ幻のように消える。

「なっ！ これは立鳥不濁跡じゃねえっ！！ まさか……がはっ！！」

リンタは初めて焦りの表情を見せた瞬間、リンタの背中をヴェールの斬撃が捉える。背中に阻まれ、重傷にはならないが衝撃で呼吸が止まる。

リンタは体勢を立て直すべく、排出系ダクトでその場所を離れる。

しかし、それを追うようにヴェールの美しい影像が迫ってくる。

「くそっ！！」

リンタは回避突アヴオイドという後退しながらの刺突を繰り返して、ヴェールを防ぐ。

再び剣先がヴェールを捉えたと思った瞬間、ヴェールの影像は再び揺らぎ幻のように消えた。

リンタは全神経を集中して、ヴェールの気配を探る。

「右っ！！」

再び現れたヴェールの影像に斬り付けるが、その影像も消え、再び背後から斬撃を受ける。

先程よりも体重の乗った全力の斬撃。

流石にリンタの足が止まる。



そこに四方八方から消えては現れるヴェールが斬撃を浴びせていく。リントアは為す術もなく、急所を守るのが精一杯だった。

しばらくヴェールの一方的な攻撃が続いた。

ヴェールは手を休めることなく、リントアを責め続けた。

遂にリントアの膝が地面に着く。

ヴェールはここぞとばかりに最大限振りかぶる。背中が綺麗な弧を描く程、仰け反る。そこから全身のバネを生かして、止めの一撃ヒットを放つ。

「憎悪斬ヘイトレックっ！」

ヴェールが高らかに宣言をしてから、長剣を振り下ろす。

その剣がリントアの首筋を捉えて、頭を叩き落とした。かのように見えたが、次の瞬間、ヴェールの目に映ったリントアの影像が揺らいで消える。

「舐めんな……っ！」

突如、ヴェールの背後に現れたリントアは剣を8の字を描くように振り回し、ヴェールの身体のあらゆる所を切り刻んでいく。

ヴェールは手甲と脚絆を使って頭部と腹部の中央だけを守ったが全身に切り傷を負い出血する。白いシャツが血に染まった。後方に跳んでリントアから距離を取る。

一方リインタも先程の損傷でヴェールを追うことができない。息が上がってしまつて  
る。

「ぜー、ぜー、まさか幻影攻撃まで使うとはな……」

幻影攻撃とは立鳥不濁跡の応用技で、相手の視線と意識を逸らしながら行う全方位  
攻撃である。それを使いこなすには素早い動きを行うための鍛え抜かれた全身筋力と、  
相手の注意方向を常に把握する深い洞察力が求められる。

「甲冑を……着けては……できない」

ヴェールも息を切らしながら答えた。

ヴェールは右耳が痛いと思い触る。さらに痛みが走り、手に血が付く。右耳は真ん中  
で半分に千切れていた。それ以外にも脇腹が3箇所、太股が2箇所切れて、じんじんと  
痛んだ。出血も止まらない。

「ぜー、ぜー、しかし、てめえは終わりだ。その体力じゃ幻影攻撃は出せねえ。それに  
俺様はもうお前の技は見切った。てめえの負けだ。ぜー、ぜー、……もういい、てめえ  
みてーな危ない女は死んだ方がいい。死ね」

リインタは黒王の切っ先をヴェールに向けた。

ヴェールの顔は血塗れだった。その顔にある美しく涼しげな両眼は敗北の悔しさを  
見せることもなく、また動揺するわけでもなく、ただリインタを見据えていた。

「まだ死なない」

そう言うのとヴェールは長剣を石畳に捨てる。長剣が石畳とぶつかってガランと音を立てながら倒れた。

「な……っ！ 巫山戯てるのか!？」

「そう思うならば来いっ！」

「てんめえー……っ！ 望み通り殺してやるううっ!!」

リンタは射出系で直線的にヴェールへ向かうと、憎悪斬で上段から斬り下ろした。

ヴェールは腕を顔の前で斜め十字にし、手甲で防ごうとする。

そんな防御はお見通しのリンタは剣筋を上から下への袈裟斬りから、右から左の横薙ぎに変えようと手首を捻る。その時、リンタは石畳に映る自分の影に、自分以外の影も映っていることに気付いた。その影はひらひらと空中を舞っている小さな影だった。

次の瞬間、リンタの首に錐状短剣が刺さる。

「がふ……っ！」

リンタは動きが止まる。首元に手を遣ると突き刺さった錐状短剣の柄に手が触れた。

「ふふふ……。あはははは……。刺さったよ、ねえ、刺さったよ……。痛い？ ねえ、痛い？ 教えて。苦しい？ 怖い？ それとも気持ちいい?？」

複数の子どもが笑うような声。中に老婆のような声が混ざっている

そこには100センチメートル程の病んだ青の女の子がいた。

黒い光沢のある生地でできたロマンティック・チュチュ揺らしながら、ヴェールの悪霊「黒い女神」が宙に浮いていた。

「がう、あ……い……づ……」

リンタは黒い女神の方に目を遣ると苦しそうに呻いた。

「油断？ 油断大敵？ 悔しい？ 嬉しい？ 教えて欲しいの……下品で間抜けな汚い男がどれくらい、後悔してるか。きやはははは……」

黒い女神はふわふわと上昇下降を繰り返しながら、リンタの周りをくるくると舞い踊った。

「ぐぞ……」

黒い女神の方へ手を伸ばすリンタ。

そのリンタの顎をヴェールが全力で殴った。全身のバネを活かした渾身の一撃にリンタは1メートル程吹っ飛び、そのまま石畳へ沈んだ。

「グンゾウっ！」

ヴェールが心なしか嬉しそうな大声でグンゾウを呼ぶ。

「待ってたぜ、ヴェールっ！ 光よ、ルミアリスの加護のもとにっ！ 俺の最後の癒光受

「取れ！」

グンゾウは最後の魔法力を使い、ヴェールに癒光ヒールをかける。

ヴェールの近くに白く輝く神聖文字が浮かび、ヴェールの傷を癒やしていく。

ヴェールとグンゾウのやり取りを見て、シャトウはリンタの危機を知る。

「あれは光サクラメントの奇跡じゃないと、リンタ君死んじゃう。やばーい。じゃあ、グンゾウ君、一

旦休憩ねっ！」

そう言つてシャトウはリンタの元に走り寄ろうとする。

「あ、こらっ！ ちよつと待て、シャトウ！」

グンゾウが追いかけてしようとすると、それより先にヴェールがシャトウとリンタの間に立ち塞がる。ヴェールはまだ完全には傷が癒えていないが、出血は皮一枚で止まっていようだった。ヴェールは長剣アイトウラムーサを拾うとシャトウに向けて構える。

ヴェールの傍には、黒い女神アイトウラムーサが浮いている。黒い女神の顔には黒い革製の目隠しがされている。目隠し以外の造りはヴェールの子ども時代を想像させる調った造りだ。

「おおつとー、これは……僕はピンチなのかな？ どうかな？ そのところどうなんでしょ？ ヴェール選手？」

明らかに2人＋1体（？）に囲まれた状態でも、シャトウのお気楽な感じは変わらなかった。経験がそうさせるのか余裕の態度だ。

「終わりだ。シャトウ」

ヴェールは長剣の切っ先をシャトウに向ける。

すると、シャトウは周囲を見渡して頭をぼりぼりと掻いた。

「なははははは。いやー、ヴェール君に追い詰められるとはな。僕も老碌もろろくしたかなー？  
でもね、すごく運が強いんだよ、僕。そうだろ？ ……ミリア。グンゾウ君は  
殺すんじゃないっ！」

——ミリア？

グンゾウが疑問を持った瞬間、一陣の疾風が襲った。

全身を襲う衝撃に吹き飛ばされ、石畳に倒れるグンゾウ。

何が起きたかわからないまま、上半身だけ起き上がる。混乱で焦点が合わないまま、  
ヴェールの方向を見る。そのヴェールへ黒い影が人間の領域を越えた速度で迫つてい  
た。

黒い影は一瞬にして、アイトウラムーサ黒い女神を消し去るとヴェールの襟首を掴んで止まった。

動きが止まった状態でグンゾウは初めて黒い影の正体を認識する。

それはセシリア救出の際に谷間の砦で見たミリアと呼ばれた灰色エルフだった。

その灰色エルフに襟首を掴まれているヴェールが固まっている。ヴェールは長剣を  
下に降ろしていた。よく見るとその長剣が震えている。あのヴェールが恐怖で震えて

いた。

——まずいつ！ 動けっ！ 殺されるぞっ！

絶対的な恐怖である灰色エルフのミーリアが、唸る獣のような声でヴェールを脅す。「よくもシャトウ様に剣を向けたな。愚か者め。裏切り者には死を……」

そう言うともーリアは短剣でヴェールの腹部を深く刺した。そして、掴んでいた襟首を離すと、ヴェールはゆっくりと石畳に崩れ落ちた。

「ヴェールーっ!!」

グンゾウはすぐに立ち上がり、縛れる足でヴェールに駆け寄る。ヴェールを抱きかかえ仰向けにすると傷口を見るために服を破いた。傷口が露わになる。傷口は肋骨の間にあり、湧き水のように勢い良く血が噴き出していた。

——まずい、まずい、心臓は外れているが太い血管や重要な臓器のある位置だ。この出血では5分も持たないぞ。

グンゾウは震える手でヴェールの傷口を押さえた。

「うぐ……」

傷口を押される痛みで呻き声をもらすヴェール。ヴェールは辛うじて意識を保っていた。

そんなグンゾウ達を冷淡な目で見下ろすミーリア。

「首領。止めはいかがいたしましたでしょうか？」

「え、いいよ。もうグンゾウ君には魔法力は残ってなさそうだし。お別れを言う時間くらいあげよう。それよりリンタ君の治療が終わったから、担ぐの手伝ってよ。もう、ここは放棄して、本拠地へ帰ろう。色々片付いたし、分かったことも整理しないとだしね」  
グンゾウ達の窮状とは対照的に、シャトウはのんびりとした口調でミーリアに指示を出す。ミーリアは黙ってそれに従った。既にヴェールにもグンゾウにも興味が無い。

「シャトウ！ ヴェールに光の奇跡サクラメントをかけてくれ！ 頼む！」

形振り構なりふわないお願いをするグンゾウ。無理だと理解していても止めることができない。

グンゾウの必死のお願いを無視して、シャトウは一方的に別れを告げる。

「それは無理な相談だ。裏切り者には死を。首領自ら組織の規則ルールを曲げることはできない。わかるだろ？ ただし、約束通り女騎士は解放するよ。また会おう、グンゾウ君。次は必ず口説き落として見せるよ。なーっはっははははは……バイバイ、ヴェール君」  
そう言うのと、リンタを担いだシャトウはミーリアを携えて神殿の奥へ消えていった。

シャトウが去った後の神殿では、治療と言うには空しすぎるヴェールの延命行為が続いていた。



「くそっ！ この出血め、止まれっ！ 止まれっ！」

「……グン……ゾウ……もう、い……いんだ……」

「ふざけんなっ！ ふざけんなっ！ そんな簡単に仲間になれてたまるかっ！

ヴェール！ 目を瞑るな。意識をしつかり保つんだっ！ もうすぐアキかカレンが来るはず、持ちこたえるんだっ！」

グンゾウはヴェールの出血箇所を手で圧迫した。

しかし、溢れ出る赤い血は止まる気配が無い。

グンゾウの指の隙間から、じわじわと鮮やかな赤が湧き出てくる。

ヴェールの命が零れていく。

「……手……を……」

ヴェールの右手が震えながら持ち上がる。

一瞬何のことだか分からず、動きが止まるグンゾウ。

ヴェールがグンゾウを見詰めて、頷く。

グンゾウは慌てて、その手を右手で掴んだ。

「だい……丈……ぶ、怖……くな……い……キツカワが……待つてる」

「何を言ってる。ヴェール。そんなことじゃない。そんなことじゃないんだ。俺はお前に……、誰にも死んで欲しくないんだよっ！」

——くそっ！ 神官なのにつ！ 大事な時に光魔法が使えないなんて……。

グンゾウを怒濤の勢いで後悔と自責の念が襲った。

——あの時の無駄な魔法が……、あの時だつて……、俺はなんて愚かなんだ……。

「く……っ！」

グンゾウの視界が涙で曇つていく。

絶望的に長く感じられる僅わずかな時間が過ぎた。

アキもカレンも来ない。

——みんな、やられてしまったのか……?!

ヴェールの呼吸が次第に浅く、短くなる。

「……ヴェール……っ！」

グンゾウが声を掛けると、ヴェールはうつすらと美しい目を開き、口を動かし始めた。

「……さよ……なら……」

「何言ってるんだっ！ しっかりするんだ……頼むよ……」

「最……後に……い……、ありが……と……」

ヴェールはグンゾウを見詰めると、その唇に笑みを浮かべた。

それは信じられないくらい優しい笑顔だった。

静かに、そして、ゆっくりと目が閉じられた。

掴んでいたヴェールの手から力が抜ける。

グンゾウの手の中から何かが消える感覚。大事な記憶を失った、あの日のようだ。

「あああああああああつ!!」

慟哭。

グンゾウは声を上げて泣き崩れた。

「ヴェールっ! 戻ってこいっ! 戻ってくるんだっ!」

グンゾウはヴェールの胸の手を置くと、何度も体重を掛けて押した。ヴェールは目覚めない。

呼吸と心音を確認するため、ヴェールの身体に顔を埋める。傷からはまだ赤い血が流れ、ヴェールの身体はまだ温もりがあった。

「まだだっ! まだ間に合うっ! ルミアリスよっ! 俺は、俺はどうなつてもいいっ! ヴェールを助けたいっ! 暗黒神の信者かなんかどうだつていい。俺はこの子を助けたいっ! 仲間を、若いやつを死なせたくないんだっ! 頼むっ! 光よっ! ルミアリスの加護の元につ!!」

グンゾウは自身の魔法力が切れ、無駄だと分かっていたが、全神経を集中して祈りを

捧げた。

——頼む……っ!!

その時、どこからかグンゾウの額に温かな光が降り注いだ。カレンから受け取る“授光”のようだった。

何かを考える前に、目の前の景色が光で満たされていく。

何も見えない。

何も聞こえない。

自分の存在すらも曖昧に光へ融けていった。

空の世界。

時間の感覚もなく、意識も消えかかった光の中で、グンゾウは漂っていた。漂っている空間の感覚もない。

ただ、思考する何かだけがそこにあった。

——あれ？　ここは？　どこなんだろう？　俺は死んでしまったのか？

グンゾウは溢れる光の中に、暖かな感覚を覚えた。

——暖かい……、光？ いや、命？ なんだっけ？

グンゾウの意識が、大事なものを鮮明に思い出す。

——何か大事なことが……。ヴェール？ そうだ、ヴェールを救わないとっ！

融けていたグンゾウの体と心が、急速に形を取り戻すような感覚がした。

グンゾウは、必死に手を伸ばして何かを掴もうとする。

——まだだっ！ まだ、奇跡は起こせるはずっ！ ヴェール……っ！

〃……〃

不意に女性のような声が聞こえた気がして、グンゾウは耳を澄ませた。

——誰の声だろう？ ……カレン？

その囁くささやくような声は、やがてグンゾウの中に響き渡る。

〃一なる光いちより生まれ出で、一なる光いちに還る理かえり。永劫の時間の中で繰り返される円環

の定め。憐れな盲目の羊よ、忘却レテの河を渡った刹那の牢獄に何を拘こたわる……〃

「何を……う？」

グンゾウという意識の中に響き渡る声に驚きを覚えながら、グンゾウは声の主が何を言っているのか分からなかった。

ただ、ヴェールのことを救いたい気持ちだけが言葉として湧き出る。

「ヴェールは……、才色兼備で……、しかも、飛びきりの美人で、まだ、若くて……、これから結婚したり、すごい可愛い子どもを作ったり……、まだ、これから、これからなんだっ！」

「それもまた、人為的な仮象<sup>エイドローフ</sup>。同一化の誤想<sup>フ</sup>」

「仮象<sup>エイドローフ</sup>でも、夢想でも、過ちだっというっ！ 俺は彼女を救いたいんだっ！ そのためなら、俺の命<sup>すえて</sup>を捧げてもいいっ！」

「……愚か。……愚かなれど、憐れな羊達よ。それもまた汝等の宿命。……ならば、汝のその願い、今一度だけ聞き入れ、力を貸し与えよう……、選ばれしものよ」  
声<sup>とわの</sup>が遠退く。

光が急激に色を宿し、鮮明な物質の世界に引き戻される。

グンゾウの額に注がれた光も儚く、消えていった。

気が付けば、グンゾウはヴェールの胸に両手を乗せていた。

「……ヴェール、戻ってこい。光よ、ルミアリスの加護の元に。光<sup>サクラメント</sup>の奇跡……」  
グンゾウの手から輝く光が溢れ、その光がヴェールの全身を包んだ。

## 27・英雄の誕生

それは雲ひとつない蒼い空の下。

彼女は緊張した面持ちでその榮譽の時を待っている。

純白の神官衣に身を包んだ彼女は、その白い肌が陽光で輝き、清楚という言葉を越えて、神々しさすら漂わせた。

グンゾウ達は遠巻きに、大切な仲間を見守っている。

彼女の栄達に対する純粹な喜びと、遠い存在になってしまうような寂しさ。

グンゾウの胸には相反する想いが去来していた。

時は少し遡る。

ブリセイスを救出して基地に戻ったグンゾウ達を待っていたのは、勝利を祝う辺境軍だった。

ザムーンインザクラウドとの戦闘において、当初、辺境軍は内部に潜伏していた密偵スパイの裏切りやミーリアのような敵精鋭の活躍によって、崩れるように撤退した。

しかし、そこは百戦錬磨のイアン・ラッティー准将。腹心のマルコを中心とした身元の確かな騎士で構成された騎馬隊を伏兵として周囲に配置し、策略によつて敵軍を一掃したのだった。

マルコはやたらと好意的にグンゾウ達を送り出してくれたが、振り返ってみれば身元の怪しい義勇兵であるグンゾウ達は部隊に居ない方が彼にとつて都合が良かったのかもしれない、とグンゾウは思った。

良い意味でも、悪い意味でもマルコはそういう損得勘定が得意そうな騎士だ。

ようやく安全な場所に辿り着いたグンゾウ達は、水と食料を摂つて人心地ひとこころが付くと、車座になつて離ればなれになつていた間の話題で盛り上がった。

「いやー、危なかつたでー。あの時、タナカが来ーへんかつたら、ゴブリン達に殺られてたわ、ほんま。……知らんけど」

シムラが光輝くおでこを撫でながら、ほつとしたように溜め息を吐いた。

「なんや知らんのかーい！ シムラ君、これで合つてる？ でも、ほんと。タナカ君来てくれて良かったー」

アキがシムラの話に乗る。

「大体あつてるで」



グンゾウはアキとシムラの息が合っているように見えた。それも気になったが、タナカがアキに褒められていることでグンゾウの中に僅かな嫉妬心かすが湧き上がる。

アキとシムラは強敵の灰色エルフを倒した後、傷付いた状態でゴブリンの群れに襲われた。そこを後から追いついたタナカが一掃したとのこと。タナカにしてみればゴブリンなどものの数に入らないが、救われた側から見れば颯爽と現れた正義の英雄ヒーローだ。

——アキを守ったのは評価できるが、要らぬ得点ポイントを稼がせてしまった。

「あ……う、……や……」

アキに褒められたタナカは顔を赤らめる。よく分からない声にならない声を上げながら下を向いてしまった。何を言っているか誰にも聞き取れない。

「ねえ、聞いて、聞いて。こっちはすーすーごい、おつきいオークんがいたんだよ。こーんな、こーんななの。あたし、ひとりでは食べきれなかったー」

ヨシノが腕と手を目一杯広げて巨大オークを表現したが、リョータパーティ小隊の面々にはあまり伝わらなかった。ヨシノは相変わらず自由だ。全員、頭に疑問符クエスチオンが浮かべたまま微妙な笑みを浮かべる。

——オークは食べ物ではないぞ、ヨシノ。

「まあ、ヨシノと俺様がいなかったら勝てねえ敵だったな。ヨシノと俺様が。ヨシノと俺様が。つまり、ふたりの共同作業のファーストバイトがあれだなっ！」

リョータが自慢げに語っているが、ヨシノと同じく何を言っているのかグンゾウはわからなかった。小隊の面々もぴんとこない表情をしている。

グンゾウはこんな時、超冷静かつ客観的なカレンの意見を聞きたいところだったが、カレンは辺境軍への報告があると言って、ブリセイスを伴って姿を消していた。

もうひとりの目撃者であるハイドは魔法力を使い果たし、寝ていた。基地までもリョータが負ぶって運んだ。

ハイドは戦いの日々で少し伸びた前髪が顔にかかり、幼い子どもを思われる姿で眠りこんでいた。寝ている時くらいは少し可愛らしいかと思つて、怖い物見たさ半分、覗きこむグンゾウ。予想通り可愛くはなかった。

——知つてた……。

そのグンゾウの耳にハイドの寝言が聞こえてくる。

「……シシシ。最近は何世界転生定番のファンタジー要素が足りないのだ……キシッ  
！」

——良くわからない夢を見ているな……。

「んで、オッサンの方はどうなったんだよ……ていうか、なんだその髪の毛」

「あのなあ、俺は『オッ』って名前じゃねーけど？ こっちはこっちで超大変だったんだよ。それは髪の毛がこうなる位なっ！」

グンゾウは自分の髪の毛を指で摘まむ。今まで話題にして良いものか分からなかったヨシノとシムラは、グンゾウが自ら髪の毛に触れたことで、遠慮無く興味深そうに見詰めた。

「大変だったんですね……」

アキだけが心配そうな顔をしている。

——アキは優しい……。

「アキ、ありがとう。どれ位大変だったか説明してやろうぜ、なあ、ヴェール？ ……あれ？ ヴェール？」

グンゾウが見回すとそこにヴェールの姿は無かった。リョータ小隊パーティの面々も見回す。

ヴェールの姿は残像すら残っていないかった。彼女は挨拶もなく、音も立てず、幻のように消えていた。

「なんや、やつぱりべつびんさんの幽霊やったんかいな」

「俺様に挨拶くらいしろってんだ！」

「あたし、元気になったら、あの夜の勝負を着けようと思ってたのにー」

「ヨシノちゃん、それはちよつと……」

好き好きずにヴェールが居なくなつた感想を述べるリョータ小隊パーティ。

その様子を微笑ましく眺めながら、ふとグンゾウは自分の服に目を向けた。袖を中心

にグンゾウの黒い士官服には、ヴェールの血液が大量に染みを作っていた。そつと袖を顔に近づける。吐き気を誘う銅の臭い。そのはずだったが、その時は何故か優しい花の香りがした。

——ヴェール……。君はどうして孤独を選ぶのか……。それが君の望みなのか？

グンゾウは目を瞑り、ヴェールが絶命の淵にいた時を思い出した。ヴェールの命が消える恐怖と何もできない焦燥感で体が強張る。腰の辺りに嫌な汗が流れた。

——そうだ。彼女はあの時、自ら手を握って欲しいと求めてきた。「ありがとう」と言った。誰だつて孤独の中で死ぬなんて望んでないはずだ。彼女が孤独を望んでも、そんなの俺は認めないぞ。……必ず探しだしてやる！

グンゾウは新たな決意をして、目を開ける。目の前には仲間達がいた。

「……愛だな愛、キシキシ……」

ハイドが寝言を呟いた。

「貴様等、辺境軍のお偉いさんが呼んでいるぞ」

それは会話も盛り上がり、シムラのボケ連発が炸裂している時だった。不機嫌な表情をしたカレンがグンゾウ達の背後に突然現れた。

カレンは尖った小さな顎で、基地中央の天幕の方向を示した。

「おう、なんでえ。もう俺等の仕事は終わったんじゃねーの？」

リョータが面倒臭そうに返事をする。グンゾウはカレンの機嫌が悪くならないか気が気では無い。

「なんだ貴様は兵団指令オーダーの褒賞金を要いらぬのか。ならば、私が受け取り、ルミアリス神殿に寄進を……」

「ぬおつと、ちよつと待った！ それはもらうつ！ もらうぞ！ どこだ、褒賞金はー！」

リョータは、カレンの言葉を遮って慌てて起き上がると、辺境軍基地キャンプの中心へ走り出す。その後を、ヨシノとシムラが追いかけた。

「ふわあ、あたしもそれは欲しいー。オルタナでかわいい服が買いたいよー」

「ちよ、ちよつと待ってえな、このピーピーの話は今からが面白いところなんや、最後まで聞いてんかー？」

呆気に取りられたグンゾウ、アキ、タナカはその場に取り残されていた。カレンの眉間に縦皺たてじわが増える。騒がしい周囲にもかかわらず眠り続けるハイド。

「じゃあ、俺等も行こうか、アキ」

グンゾウがアキに声をかけ、手を差し出して促す。

「は、は、は」

アキは立ち上がると神官衣の裾とお尻についた砂埃を手で払った。細く白い指が神官衣を払う度に、その裾がひらひらと揺れ、アキの細い脚が現れた。その様子をグンゾウは感動しながら見詰めていた。

——アキは何でいつも眩しいんだろう。

「あの、グンゾウさん……、ハイドはどうします?」

アキが眠りこけるハイドに目を遣った。グンゾウは背負っていくのも面倒臭いと思いい、少し悩む。ハイドは1度寝てしまおうとなかなか起きない。

「俺……、<sup>み</sup>看てる……から」

すると、タナカがハイドの面倒を引き受けてくれることを申し出たため、悩みが解決した。

「ありがとう! タナカ君っ! タナカ君、優しいね」

「お、おう……」

アキがタナカに微笑む。アキのはにかんだような独特の笑顔は、たまらない可愛さがある。タナカは顔が茹でた蟹のように紅潮し、下を向いてしまった。

——むむむ。またタナカの株が上がってしまった……。まあ、タナカは良い奴だしな……、ハイドを負<sup>お</sup>ぶうの嫌だと思っちゃったの俺だしな……。

グンゾウは何だか自分がどんどんと小さい人間に思えて嫌になったきた。そのグン

ゾウの耳に意外な言葉が飛び込んでくる。

「アキ、先に行くが良い。グンゾウはしばらく私が借りる故<sup>ゆえ</sup>」

「え?! なんで? ……ですか?」

カレンの発言に思わず恐れおののくグンゾウ。

「なんだ。師である私に引き留められるのが不満か?」

怒気をはらんだ目で下から睨むようにグンゾウを見上げるカレン。

「あ、う、いや、不満ではないと申しませうか……、なんと言いませうか、他にやりたいことがある的な……、あー、いや、不満ではない。不満ではありません。うん、はい、<sup>マスター</sup>師 カレンと残ります。残りまーす!」

「そうか、ならばよし」

カレンの瞳に宿る怒気が殺気に変わりつつあるのを感じ取り、グンゾウはアキとの同行を諦める。

その気まずい空気を感じ取ったアキは、グンゾウとカレンの元から立ち去ることを決めた。

最後に優しい一言を残して。

「じゃ、じゃあ、私はひとりでヨシノちゃん達を追いかけますね。……でも、カレンさん。……暴力はいけませんよ、愛と平和が大事です……。じゃ、グンゾウさん、健闘をお祈

りしています」

アキは手のひらを額に当てると敬礼のような姿勢をしてから、ヨシノ達の後を追った。その背中にグンゾウの手が弱々しく伸びる。

——あ、行かないで……。

優しい言葉はそれを理解する能力のある人が受け取ってこそ意味を成す。つまり、理解する能力の無い人には意味が無い。

「暴力？ アキは何を言っていたのだ？ 私は今まで人に暴力などふるったことが無い。むしろ常に愛で満ち溢れている」

カレンは溜め息を吐きながら「何を当たり前のことを」と呆れたような姿勢をとった。

「へ、へー……あー、そーなんですネ。 マスター 師 ってなかなか……、うん、なかなかなんですネ、おぐおっ！」

微妙な表現に終始して頷いているグンゾウの鳩尾みぞおちに、カレンのショートスタッフが突き刺さった。グンゾウの体がくの字に曲がる。鳩尾みぞおちを押さえて、呻くグンゾウ。

「貴様も何を言っている。五月蠅い。こっちへ来いっ！」

マスター「師！ 痛い！ 耳が千切れちゃうって、痛い！ 坊主頭の弟じゃないんだから……」

カレンはグンゾウの耳を掴んで、基地キャンプの端の方へ引つ張っていった。グンゾウのけたたましい叫び声とおのが遠退いていく。



「……………、こええ！」

カレンが立ち去った後、その様子を震えながら見ていたタナカが初めて呟いた。

「あー、まだ耳が痛い……」

グンゾウは引つ張られ真つ赤になった耳を擦りながら、その文句をカレンに直接ぶつけることもできず、独りでぶつぶつと呟いていた。

そのグンゾウの耳を赤くした張本人、カレンはグンゾウを基地の端まで連れてきたま  
ま、特に何を始めるでもなく、遠くを見詰めていた。

「痛いなあ……。愛溢れる誰かさんの所為で痛いなあ……」

ぶつぶつと愚痴を続けながら、グンゾウはカレンをちらりと覗き見る。カレンの横顔は真剣そのもので、何か重大な決意をしたような遠い目をしていた。

グンゾウが再度ぼやきを始めようとした瞬間、カレンが急にグンゾウへ向き直る。グンゾウは恐怖で身体がびくりとなった。カレンは眼鏡の奥からその大きな眼でグンゾウを見詰める。

「ははは……、マスター師……何か？」

「よもや、このような事態になるとは思わなかった……」

カレンは溜め息を吐きながら、頭を振って、独り言のように話し始めた。

「何を……？」

グンゾウが疑問を呈そうとすると、カレンをそれを遮った。

「貴様はアレを聞いたのか？」

「アレ？ え？ シムラが攻撃前にお腹を壊してたつて話ですか？ 灰色エルフと対峙

していた時に漏れそうでかいていた冷や汗がおでこに……」

「……ふざけるんじゃないっ！ これは私のじ……、いやこの国の信仰に関わる重要なことなのだ」

カレンはショートスタッフを地面に突き刺した。とても怒っているのか、カレンの白い顔が赤く染まる。普段冷静な彼女には見られない程、取り乱した様子だ。

「もう一度聞こう、貴様はアレを聞いたのか？」

その問いに答えるのをグンゾウは悩んだ。

カレンが聞いていることだと思いついた事象があった。しかし、曲がりなりにもグンゾウは神官だ。帰依してから期間は短いとは言え、ルミアリスへの信仰は深い。それ故、軽々に神殿が認めていない神の奇跡を語ることはできなかった。その逡巡しゅんじゆんだった。

「……ふー」

溜息がひとつ。答えは単純。恩師であるカレンに問われたことは正直に答えなければ

ばならない。それがグンゾウの辿り着いた結論だった。

「聞きました……、<sup>マスター</sup>師カレン」

グンゾウは感情を込めず、聞かれたことだけを端的に述べた。

その答えを聞いたカレンの身体から力が抜けていく。

「……そうか……」

「あれは何だったのでしょうか？ あの声聞き、ヴェールを救った後、目を覚ましたらこうなっていました」

グンゾウは自分の髪の毛を摘まむ。

その髪の毛は、今グンゾウの目の前にいるカレンと同じく白いまでの金髪になっていた。

グンゾウの問いに黙ったままのカレン。

グンゾウはずっと気になっていた。闘技場でカレンと別れる時、彼女は「……本当に困った時は、ルミアリスの声を聞け」と言った。「ルミアリスを頼れ」でも「ルミアリスに祈れ」でもなく「ルミアリスの声を聞け」と。

グンゾウの目の前にいるカレンは金髪に黒い眉毛をしている。出会った当初は光明神に帰依するため、脱色をしていると思っていたグンゾウだったが、今となっては違う理由が濃厚になりつつあった。

「師の髪……、<sup>マスター</sup>師もあの声を聞いたことがあるのでは？」

核心を突くグンゾウの問いに答えないカレン。その幼い少女のようにも見える小さな横顔は真剣そのものだった。

「それ以外にも聞きたいことは沢山あります。敵首領のシャトウ。あいつはルミアリス神官で、あまつさえ師<sup>マスター</sup>カレンの師であると言っていました。どういう事なんでしょうか？」

立て続けに問いを投げかけるグンゾウ。カレンはその全ての問いに答えない。

答えを催促するように、冬を予感させる一陣の冷たい風がカレンの髪を吹き上げた。

「風が出てきたな……」

カレンは遠い目をしたまま白金の髪をかき上げると、一呼吸置いた。

「……グンゾウ、この話は長くなりそうだ。続きは神殿に戻ってからにしよう。オルタナで身体を休めたら、私の私室を訪ねるが良い」

皆に遅れること半時程、グンゾウが基地中央の天幕に着いた時、丁度リョータ<sup>バリエイ</sup>小隊の報奨金が運ばれてきたところだった。その量に天幕内の興奮がいや応もなく高まる。

「おおおおおおおっ！ 結構多いぞ!! ヨシノの胸よりでかいっ！」

「何、言ってるの？ リョータのエッチ！」

「あかんっ！ これはあかんでっ！ あかーーーーーん！！ いや、むしろ、だーいじょーぶだーっ！」

鈍い音を立てて数個の布袋がリョータ達の前に積まれていく。その大きさと重量感にリョータとシムラの歓喜の声は高まっていった。

「まあまあ、中身がシルバーか、カパーかによっても大分違うし、落ち着こう。どれどれ……」

そこは大人のグンゾウ。冷静に振舞おうと頑張った。しかし、袋を開ける手が若干震えていて格好悪い。グンゾウが布袋の中を覗き込むと、その中には大量のシルバーが詰まっていた。グンゾウの金勘定は正確で速い。パツと見ただけでも一袋に3く400枚のシルバーが入っている。

「あかーーーーーん！！」

グンゾウにシムラの訛りが感染する。興奮のあまり、仰<sup>の</sup>け反<sup>ぞ</sup>って尻もちをうってしまう。

「だーいじょーぶだーっ！ グンゾウさん、だーいじょーぶだーっ！」

天幕の中は異常な興奮の渦に包まれていた。

リョータ小隊<sup>パティ</sup>の眼前に立っていた辺境軍の役人ばい兵士は、卑しい義勇兵の喜びように呆れながら事務処理を進めようとする。

「では、契約通り5人分の報奨金20ゴールドだ。確認したら、この契約書に受け取りの署名をしてくれ」

「数えろ！ 野郎ども！」

「へへえっ！ だっふんだ！ だっふんだ！」

「ん？ 5人分？ ……うちは6人小隊パーティーですけど？」

狂喜乱舞しながらシルバーを数えているリョータ達。それを傍目に冷静に戻ったグンゾウが兵士に尋ねる。兵士は訝いぶかしげな表情で羊皮紙で出来た巻物ロールを見ると、読み上げた。

「いや、この度の兵団指令オーダーを受諾したのは、ルミアリス神殿所属グンゾウ、戦士ギルド所属リョータ、同ヨシノ、狩人ギルド所属シムラ、魔法使いギルド所属ハイドの5名となっている。お前らも5人であるし、相違ないだろう」

「5人なのはハイドがいなかったからであって……、あれ？ アキの名前が抜け……」  
グンゾウがそこまで言いかけた時、誰かがその袖をひっぱる。

グンゾウが振り返ると、今にも泣きだしそうなアキが、その小さな唇を震わせて何かを言おうとしていた。顔面蒼白で、目には薄っすらと涙が浮かべている。まるで大切な試験の日に受験票を忘れて会場に来てしまった学生のような顔だ。

「どっどっど、どうしたのアキ？」

「ううう……、あの、その……ちよつと、あの……」

グンゾウはアキの動揺を氣遣うように、アキの腕に手を当てる。その腕が微妙に震えている。アキがこんなにも動揺するのは珍しい。

「大丈夫、アキ。落ち着いて、ゆっくり言つてごらん」

「あの、多分……私……」

「うんうん」

「あの、多分なんですけど……私……」

「うんうん、うんうん」

「多分……、ちよつとなんですけど……私」

「うんうん、うんうん、ちよつと？」

「……この兵団指令……受けて無いです……」

「……えっ?!」

アキとグンゾウの間に沈黙の時が流れる。

その背後では興奮が頂点に達したりヨータとシムラにヨシノが加わり、欣喜雀躍しながら報奨金を数えていた。何百枚もあるシルバーを数える様は、上へ下へのどんちゃん騒ぎだ。

事態を理解するのにグンゾウはさらに数秒を要した。アキの目に溜まった涙の量は

少しずつ増えていく。

「そら………、あか………ん!!」

あまりに興奮した周囲の状態に誘われて、中年グンゾウも思わず大声を張りあげてしまった。

「駄目だよ、グンちん。アキちゃんを泣かしちゃ。めっ!」

ヨシノが泣きじやくるアキの肩を抱きしめながら、グンゾウを睨んだ。たまにはカレン以外の女の子に睨まれるのも気持ちいいな、なんて思う余裕も無く、グンゾウは恐縮していた。

「ごめん。本当にごめん」

「あーあ、女子供を泣かすなんて、おっさん最低だな」

——お前に言われたくはない。お前にだけは言われたくない。

「ぐすつ。ぐすつ。いえ、すいません、泣いたのは自分の失敗が悔しくてなんです。ぐすつ。ぐすつ。大声にびっくりして、涙が止まらなくなりました。ぐすつ」

アキは拭つても拭つても溢れ出てくる涙を必死で止めようとしていた。

そのきつかけとなったグンゾウの汗も止まらない。士官服の袖で拭つても拭つても、



額から汗が垂れてくる。

「ごめんね、アキ。周囲の雰囲気飲まれて、大声を出してしまった。申し訳ない」  
時系列を整理すると次のようだった。

天望楼襲撃の夜、リョータ達5人はイアン・ラッティーからの兵団指令を受けて、セシリア・ヴェドイーの救出に向かった。その時アキは既に先遣隊に混ざって賊の後を追っていた。最初にブリトニーから受けた一晩一シルバーの兵団指令のまま。

それからリョータ達と無事合流できたアキだったが、特に何の手続きも行わずにその後の作戦行動に参加していたため、要はただ働きになっていた。

「まあ、ほら、これはみんなで稼いだお金だからちやんと山分けにしようよ」

そうグンゾウが言うと、リョータが勢いよく割り込んでくる。

「いんや、オッサン。リーダーの俺様を差し置いて、勝手に決めんじやねえよ。仲間にも言わずに敵を追っかけて、俺らを巻き込んで、間抜けに兵団指令の手続きしなかったのはアキの失敗だ。そんなのに山分けなんておかしーんじやねーの？ 今回は勉強料として大人しく一シルバー受け取っとけばいいと、俺様は思うぜ」

——うわあ……。

その台詞を聞いて、泣き止みそうだったアキの涙がわつと噴出した。両手で顔を押しさえて、塞ぎ込んでしまう。

「間抜け……ふええええーん、わああああーん」

リョータに周囲から冷たい視線が集まる。

「リョータ、さいてー」

「リョータはん、それは引くわ……びびって〇〇〇漏らすかと思ったわ」  
「クスオカよりクスだな……」

リョータは周囲の冷たい反応に焦り、早口と身振り手振りで守勢に回る。

「おいおい、お前らも正直になれ。いくらなんでも1人4ゴールドの仕事を受けるの忘れてたんだぞ？ 4ゴールドって言ったら何発……、いや、どれだけ命張る仕事だと思ってるんだ。オッサン、お前もシヨック受けてただろうが。これは間抜けなアキが反省するいい機会だと思わないのか？ この世界では間抜けは命に関わる。これを機にだな、アキもバージョンアツ……プルデンシャルっ！」

「もう出ていきなさい！ バカリリョータっ!!」

言い訳を続けようと大口を開けたリョータの口に、ヨシノが投げた長靴が上手いことハマり、リョータはもんどりうってテントから飛び出した。

——あれは投げ槍スキルを使ったな。あの長靴、リョータにとってはご馳走かも……。

片方素足のヨシノが泣きじやくるアキを慰める。

「よし、よしよし。ほーら、バカは居なくなつたから泣き止んでー。アキちゃんは間抜けなんかじゃないよー」

「間抜け……、間抜け……、えっぐ、えっぐ、ふええええーん」

間抜けという言葉に心的外傷を背負ってしまったのか、その言葉を聞くだけでアキが泣き出し、ヨシノも困つてしまふ。目でグンゾウやシムラに助けを求めろ。

グンゾウも慣れない状況に狼狽うろたえてしまい、アキにかける声が見つかからない。

「あああ、アキは……アキだし、全然アキのままアキだから……頑張つてたよ?」

全く慰めの言葉になつていない。ただアキという単語を繰り返しただけだった。

そこに救いの主が現れる。正確にはずっとそこにいた。

「え? もしかして、そこにいる女性が聖騎士のアキ殿なのか?」

長いこと放置されていた役人っぽい兵士が突然話しかけてきた。

「あー、そうなんですけど、見ての通り、今大変立て込み中なんです少し待つてもらつても良いですかね」

グンゾウがやんわりと割り込みお断りの雰囲気を漂わせた。

しかし、兵士は別の羊皮紙を鞆から取り出すとはつきりとした口調で説明を始めた。

「そうはいかない。彼女には……」

雲ひとつない蒼い空の下、アキは緊張した面持ちで立っていた。

アキの傍には木材で組まれた壇がある。司令部から隊全体への連絡をする際に使われていて、兵が集合する広場に備え付けられていた。

これからアキは、そのアラバキアへの献身的な奉仕により、壇上で叙勲を受けることとなっていた。急な叙勲式の決定で正装が間に合わず、カレンに予備の神官衣を借りた。アキの体の方が大きいため、微妙に大きさが合っていない。それでも純白の神官衣に身を包んだ彼女は清楚な佇まいで神々しさすら漂っていた。

その様子を遠巻きに見ているリョータ小隊。

「けっ！　なんでえ、間抜けが叙勲なんて……いででででででっ！」

リョータが悪態をついた瞬間、ヨシノに頬をつねられた。

「正直に生きていると良いことあるの！　リョータには一生わからないかもね！」

「シシシシシ。何がどうなっているのか、僕に説明がない。そして見えない……キシシ」

「ア、アキさん……」

先ほどから目覚めたハイドと見守っていたタナカも加わっている。

「しかし、叙勲なんてすごい……。俺らみたいな新人の義勇兵がこんな名誉に見えること  
とがあり得るのだろうか？　アキはすごい」

グンゾウは心の底からアキの栄達を称賛していた。それと同時に、

——アキの存在が遠くなつてしまわないか……。  
と心配していた。

身長の要因でアキの様子が見えないハイドとシムラは、木の台のようなものを取り合っている。じゃんけんに見せかけたシムラの目突きが決まり、ハイドは地面に倒れ、シムラが台を独占した。

「ふわー、よく見える。しかし、叙勲ってどんな美味い食べ物なんやろか？」

「シムラ。なぜ食べ物前提なのかな？」

「え？　ちやうんでっか？」

グンゾウが叙勲の意味を説明しようとする、後ろから声がかかる。

「相変わらず」

グンゾウとシムラが振り返ると声の主はカレンだった。

カレンは断りもなくシムラを木の台から突き落とすと、台に乗り、まさに上から目線でシムラに言い放つ。

「猿ましろのごとき低能な会話をしておる」

「なんつ……でもないです……やん。はい」

シムラはカレンの横暴な態度に言い返そうとしたが、眼鏡の奥にある殺人鬼が睨む目つきに恐れをなして止めた。

——正解だ。シムラ。どうせ反抗しても、結局は肉の台にされるだけだ。

グンゾウは体幹訓練という口実で、人間椅子として過ごした日々を思い出していた。

思い出から意識が戻った時、カレンの視線がグンゾウに向き、グンゾウはカレンと目が合ってしまう。

——ひっ！

グンゾウは嘲りあざわらと蔑みさげすみに満ちた視線で睨まれることを覚悟していたが、カレンの視線はグンゾウが想像していたものと異なっていた。目が合うとカレンはグンゾウから視線を逸らし、伏し目がちに遠くを見つめた。その横顔は若干紅潮し、白い肌に紅が入ったように見える。

——あれ？ 思ってたのと違う……。もしかしたら、さっきの件で答えをはぐらかしたのが悪いと思っっているのかな？

グンゾウは、カレンが目を合わせないのはグンゾウの問いに答えていない気まずさがあるのではないかと推測し、納得した。

——でも、油断はできない。あの人が自分が悪いなんて思うだろうか……。ここは慎重に対処せねば。

カレンのご機嫌が悪くなさそうなことに安堵したグンゾウだったが、油断をして体罰を受けないよう、触れないことにした。触らぬ神に祟りなし。

壇の周囲にいる人だかりに動きがある。

壇上に一人の人物か上がり、直立不動になった。イアン・ラツティの副官で、今回の戦争を勝利に導いた騎士マルコだ。真新しい士官服に身を包んだ彼はいつもの小賢ドヤそうな顔を何倍にも膨らませ、優越感に満ち満ちている。

「あつ、始まるつ！ アキちゃーん！」

ヨシノがいつもの緩い雰囲気で壇の傍に立っているアキへ両手を振る。アキは下を向いてもじもじしているだけで、ヨシノの声は全くアキへ届いていないようだった。

正装の兵士が壇の傍に歩み寄ると仰々ウツウツしく、巻物ロールを読み上げる。

「ただいまより、戦地による臨時の叙勲を行う。これは此度の戦いによって目覚ましい功績を挙げた者に対するイアン・ラツティ准将の特別の計らいであり、正式な手続きとは異なる。正規兵については追ってオルタナにて叙勲式が執り行われることを申し伝える。では、叙勲対象者、ルミアリス神殿所属アキ、壇上へ！」

その名が呼ばれると、アキは緊張でカチコチのまま壇上に上がろうと動き出す。緊張で同じ方の手と足が同時に前に出ている。

「あかん、ナンバ歩きや」

カレンに台を奪われたシムラは、びよんびよんと跳ねながらアキの様子を見ている。

アキは緊張のあまり、壇へ上がる最初の階段を踏み外し、転んでしまう。

どっと沸き起こる笑い声。少しの静寂の後、兵士の間にくすくすと馬鹿にした笑い声が広がる。

恥ずかしさのあまりしやがんだまま起き上がれないアキ。

アキの目にまた涙が滲んできた。

そこへグンゾウが大きな通る声で叫ぶ。

「アキっ！ 顔を上げて！ 何回転んだって、ここまで来れたじゃないか！ 君はすごい女性だ！」

その声を聞いて、アキが顔を上げる。

仲間の声は続く。

「アキちゃん！ がんばってー！」

「聖騎士がしやがんで休んでんじゃねーぞ、間抜けー！」

「アキ姉さん、きばりやー！」

「シシシシシ……見えない」

アキは勢いをつけて立ち上がると、前を向いて階段を上り始めた。晴れやかな笑顔。

壇に上がると、アキはゆっくりと歩み、マルコと正対して「気をつけ」の姿勢となった。



マルコはアキの顔を見て優しく頷くと、その場にいる兵士に向けて、手にした巻物ロールを大声で読み上げ始めた。

「ルミアリス神殿所属アキは一義勇兵の身で、此度の賊討伐の任務において、多大な功績を挙げた。しかも、アキは此度の任務へ兵団指令オーダーとして参加したのではなく、ただ天望楼内の要人を守る一晩一シルバーの夜警の任だったにも関わらず、オルタナ襲撃という野蛮な凶行に遭遇し、賊に対する義憤に駆られ、無償で任務に身を投じたものである！

……」

無償で任務に参加したという下りで、兵士達の間には『おおっ！』という小さな感嘆の声が上がる。先程までのアキを馬鹿にするような態度は改められた。中には拍手をしている兵士もいる。

アキは耳まで顔を真っ赤にして、照れている。その目には今度は別の意味で涙が溜まってきていて、その雫が零れ落ちるのを必死で我慢していた。

——かわいい……。そして、心の底から嬉しい。

グンゾウはその様子を見ているだけで、自分も泣きそうになっていた。

「可憐だ……」

その様子が見てタナカが呟いた。彼の優れた視力は、アキの様子を漏らすところなく捉えていた。傍にいたカレンはタナカに名前を呼ばれたのかと勘違いし、少しムツとす

る。

マルコは最後に高らかに宣言をする。

「そのアラバキアに対する献身且つ忠誠を賞して、聖騎士アキに対し、一代限りの騎士号『デйм』を与える。アラバキア軍オルタナ辺境軍准将イアン・ラッティー」

その宣言が基地に響くと、少しの沈黙の後に、兵士達の間から雷鳴のような称賛の聲が上がった。割れんばかりの拍手がアキを祝福する。

「わーっ!! すごーっ!! いっ! アキちゃん……え? ところでどういうことなの?」

「なんだなんだ、なんだ、わからないぞ。俺様に説明しろ!」

「デ、デймってどんな味なんやろか?」

「騎士ツシツシツシ、騎士ダジャレ、シシシシシシ」

状況が把握できずにリョータ小队の仲間が混乱する中、叙勲の式は進み、介添人の指示に従って、アキはマルコからデймの称号を受け取る儀式を行う。

半下座でマルコの前に頭を下げるアキ。

そのアキの頭に剣を当て、何かを言っているマルコ。

その声も兵士達の歓声でリョータ達の耳には届かない。

「(こんな)とって……」

グンゾウが呟く。

グンゾウもアキへ下賜された褒美の大きさに理解が追い付かず呆然としていた。  
「……通常ありえないな」

グンゾウの困惑にカレンが答えを与える。カレンの方を向くと、目を丸くして驚いた表情をしていた。彼女にしては珍しく油断した顔だった。それほどに意外な出来事だったとグンゾウは理解した。

叙勲の儀式が終わり、壇上ではアキが下賜された宝剣を掲げる。

その様子を見て、兵士達は再び割れんばかりの歓声を上げた。既に「デイルム・アキ」の掛け声が連呼されている。

恥ずかしそうにその栄誉を一身に受けるアキの姿は、逆に男性兵士達の心を驚掴みにした。

「ふふふふふふ……」

お祭り状態に突入した広場でカレンが笑いだす。余りの珍しさにグンゾウは驚いて、変な汗をかいた。

「ど、どうしました？  
師<sup>マスター</sup>」

「あははははは。……ふふふ、愉快ではないか」

カレンは声を出して笑いながら、グンゾウに話しかけてくる。

その顔は年相応の女性が見せる輝く笑顔だった。

普段見せることのない、屈託のないカレンの笑顔にグンゾウの鼓動は高鳴った。

——いつもこうなら良いのに。

「そうは思わないか？」

「え？ あ、はい……、あ、いや、どの辺りが？」

グンゾウもアキの栄達は嬉しかったが、あのカレンが破顔する程の面白い要素が見当たらないでいた。

カレンはグンゾウの質問に対して不愉快になる様子もなく、グンゾウの肩を笑顔で叩いた。

「英雄の誕生がだ。 たった1シルバーの夜警から英雄へ出世した義勇兵の物語。 実に面白いではないか」

そう言うときカレンは審判ジャッジメントの光を唱える。

晴天の空に七色の輝きが瞬またたいた。

それは1シルバーの英雄へ捧げられる光の祝福だった。

## エピローグ・待つ者のいない凱旋

「ただいまーなのよー。おうち嬉しー」

どさつという音を立てて、ヨシノは長旅の荷物を宿舎の床の上へ置いた。

薄っすらと積もった埃が渦を作つて巻き上がる。

「随分と埃っぽいな。だいぶ間を空けたから掃除しないと……」

グンゾウも荷物を降ろし、神官衣の袖で額の汗を拭いた。

「いやー、ほんとに久しぶりやー。こんなボロ家でも懐かしいもんやなー」

シムラが井戸から水を汲んで、ごくごくと喉を鳴らして飲んでゐる。

「私、懐かしすぎて、ちよつと泣きそうです。こんなに長いこと帰らなかつたの初めてだから……」

目頭の辺りを両手で押さえながら、アキが俯うつむいた。

アキの純粹な感情に一同が感動する情景。

その雰囲気をぶち壊すように、ハイドの腹の虫が大きな音を立てて鳴った。

「シシシシシシ……腹減った」

オルタナの南門前で辺境軍の馬車に降ろされたのは既に日暮れで、リョータパーテイ小隊の全

員が空腹だった。

「んだな。掃除は明日にして、とりあえずシェリーの酒場へ飯食いに行こうぜ。この時間じゃカズヒコ達もそこにいるだろうし……」

リョータが皆を促す。全員無言で首肯して動き始める。

「おっと、一応洋燈ランブに火だけ入れておくか……」

普段の言行と異なり、生活面では細かい所のあるリョータが中庭の洋燈ランブに火を入れようとし、「あん？」と声を上げて止まった。

「どうした？ リョータ」

中庭の台所を見ているリョータが気になり、グンゾウは声をかける。

「いや……食器が出かけた夜のまま汚れて置いてあるから、あいつら片付けてねーんだなっと思っただよ。しょーがねー奴らだ。マナーがなってねーぜ。まあ、久しぶりだし？ 英雄として凱旋した俺様が、そこんとこきっちり引き締めてやらねーとなっ！」

そう言うとりョータは歯を見せてにつこりと微笑ほほえんだ。リョータは久しぶりにカズヒコ達へ会えるのが心から嬉しそうだった。

「……そうだな」

グンゾウも素直な気持ちで笑顔を返し、リョータの肩を軽く叩いて歩き始めた。

相変わらざるの喧騒と熱氣。

シエリーの酒場は出発前と何も変わらない風景でリョータ小隊パーティーを出迎えてくれた。

広い酒場を洋燈ランブが薄暗く照らす。店内では、一日の冒険を終えた義勇兵達が騒がしく思い思いの英雄譚を語り、時に歌い、時に喧嘩しながら憩いの時間を楽しんでいた。

グンゾウ達は空いている席を見つけると、各人がとりあえず定番の食べたいものと飲みたいものを注文した。

「よっしゃー！ 食べるでえ、今日は仰山肉ぎょうざんを食べるでえ！ 金ならある、金ならあるんや

！」

「シシシシ……下品」

シムラは久々の豪華な食事を期待して興奮している。ハイドも同じだろう。

軍から支給される食事は、量に申し分はなかったが、如何いかんせん味がいまいちだった。

そして当然料理を選ぶことはできない。食材に好き嫌いの多いハイドは食べられないものも多かった。

「んんん？ あたしは次なーに食べよーかなー？ 甘いもの……はまだ早いかにや？

ペビー肉ガリジャー……は太るかにやー？」

最初の料理が届く前に、ヨシノは品書き眺めながら楽しそうに次の注文を悩んでいる。

「デイルム・アキ、次はいかがされますか？」

グンゾウはいたずらっぽく笑うとアキに品書きを見せる。

「<sup>からか</sup>擲揄うのは止めてくださいよ、グンゾウさん。すつごく恥ずかしいんですから、もう

……っ」

アキは顔を赤らめながら、口を尖らせた。

——怒った顔もかわいいなあ……。

「ははは、ごめん、ごめん。でも、アキが騎士になっても一緒に義勇兵を続けてくれるって言ってくれて嬉しかったよ」

「いやいや、騎士と言ってもどちらかと言うと準騎士的な扱いで、ルミアリス神殿に私室は貰えたのですが、別に俸給も出るわけではないので、どちらにしろ働かないといけないのです」

「そうなんだね。世の中そうそう甘くないなあ……」

「それに、みんなと別れるのは寂しいです。このまま……ずつと一緒に義勇兵続けたいです」

——嬉しい……涙出そう……。

グンゾウがアキと話す幸せな時間を過ごしていると、シェリーの酒場の給仕娘達の手といったぱいの陶製ジョッキと料理皿を運んできた。



「はい、お待ち遠さまです！」

次々と机の上に置かれる料理。食欲を刺激する美味しそうな匂いの湯気が立ち上る。

「よっしゃー！ 食うでえ、食うでえ、俺は食うんやつ！」

「じゃあ、みんなで乾杯しよう……あれ？ リョータは？」

食欲に殺気立つシムラを制して、乾杯をしようとしたグンゾウ。

しかし、小隊のリーダーたるリョータがいなかった。

さき程まで、シエリーの酒場中をけてしくはない目つきで無言のまま睨んでいた。

「こんな時にうん○かいなー。早う、早うっ！」

食事を待ちきれないシムラを筆頭に、全員で周囲をきよろきよろと見渡す。

その時、少し離れた机で喧嘩が始まる。

陶器の割れる音や給仕娘の悲鳴が響く。

「おいつ！ 巫山戯た口も大概にしろよっ！」

響くりョータの怒声。

嫌な予感がして、グンゾウ達は急いで声の方向に駆け付ける。

そこには何回か話したことのある義勇兵が床に座り込み、唇から血を流していた。

リョータはその義勇兵の仲間達に羽交い絞めにされ捕まっている。

——リョータが殴った？ 何故……っ？!

「もう一遍いっぺん、言ってみろっ！ 殺されてーのか?！」

羽交い絞めから逃れようと、何度も体を激しく揺らすリョータ。

グンゾウ達は予期していない光景に、動きだすことができない。

リョータの問いに答えるよう、座り込んだ義勇兵も興奮した様子で怒鳴り返す。

「せつかく親切に教えてやったのにお前はなんなんだ?! 何度でも言つてやるよっ！

……カズヒコ達は全員死んだんだよっ!! デッドヘッドでなっ!!」

「えっ? 何を……?」

思わず耳を疑う。グンゾウの心臓は掴まれたかのように締め付けられた。鈍い痛み。

周囲にいる義勇兵達の雰囲気、その言葉が事実であることを物語っていた。

景色が歪み、グンゾウの意識を中心に回転する。激しい目眩と窒息感。周囲の雑音が

遠くなり、心臓の鼓動だけが脳内に響く。思考が明瞭に保てない。

「嘘でしょ……?」

グンゾウの隣にいたヨシノが弱々しく眩いた。

無意識にヨシノへ目を遣るグンゾウ。

彼女の震える手にあった陶器が、ゆっくりと滑り落ちる。

時が止まったかのような長い落下、  
床へ叩きつけられる陶器が、  
音を立てずに、

……碎け散った。

F i n .

(仮) Level. 3 失うだけの戦い

プロローグ．魔法では癒やせない傷

きっと、人は深い悲しみや苦しみを乗り越えることができるだけの光を、心の中に持っている。

真実かどうかは大事ではない。

そう信じている。

それがルミアリスの教えだから。

グンゾウが絶すがれる最後の希望のぞみは信仰だった。

しかし、乗り越えた向こう側へ辿り着く前に、その光が消えてしまったらどうなるのだろう。その光が消えそうな人がいたら、どう導けばいいのだろうか。

グンゾウは答えが出せないでいた。

今、その答えを必要としている時なのに。

「毎朝、理由わけもなく涙が溢れてきて辛いの！ 毎晩、独りひとりでベッドに入って目を閉じてから眠るまで、後悔ばかりが押し寄せてきて、自分が許せないの！ あの時の……あたし

の誤った選択が、彼等を死に追いやったんじゃないかって！」

ヨシノが叫んだ。宿舎の屋上から泣き腫らした眼でグンゾウ達を見詰める。

涙に輝くヨシノの瞳にグリムガルの紅い月が董色に映る。不謹慎にも美しい色だとグンゾウは思った。

深い悲しみは呪いだ。眩いばかりに輝いていたヨシノの光は見る影もない程、呪いの闇に埋もれている。

——悲しい、そして苦しい。ルミアリス。私は彼等どころか、目の前の少女を救うこともできません。若い彼女の命が救えるなら、私の命を差し出しても後悔はない。

その場にいた全ての人間が悲しみに飲まれ、声を出すことができない。悲しみと静寂だけがそこにあつた。

ヨシノの心は崩れそうな均衡の上に辛うじて立っていた。消えそうな光は閉じかけの扉の向こう側にある。

——ヨシノ、心を閉ざさないでくれ。

死は死の間際、髪の毛を一房冥界まで届けるといふ。彼女の美しい髪は切り取られたのだろうか。一陣の強い風が吹き、ヨシノの涙を星屑のように散らした。

「ごめんね……、みんな」

絶望がヨシノを深淵に引きずり込む。

「ヨシノっ！ ヨシノっ！」

「ヨシノ！ 目を開けてくれ！」

「ヨシノちゃん！」

「ヨシノ姉さん……」

皆の呼びかけに応じて、ヨシノはうつすらと目を開けた。

焦点の定まらない瞳で声を出す。

「あれえ？ あたし……、まだ生きてるの？」

ヨシノを抱きしめる腕に力が入る。

「ヨシノ！ ……失ったものが大きすぎて、受け止められないくらい俺も悲しい。だから、さらにヨシノまでを失いたくない！ ヨシノを愛してる！」

涙が溢れ、一滴、また一滴とヨシノの頬に落ちる。

「温かい……。温かいんだね、涙って……。うつつうつつ……」

ヨシノの眼にも涙が溢れ、頬を伝う。

グンゾウは歪んだ景色をぬぐい去ると、空を見上げた。

いつの頃からか見慣れた紅い月が、深緑の夜空に輝いていた。